# 植物學雜誌

日本植物学会発行

第六十五卷

自 第七百六十三号 至 第七百七十四号

65-66

東京

昭和廿七年

# THE BOTANICAL MAGAZINE

PUBLISHED

BY

THE BOTANICAL SOCIETY OF JAPAN

Volume LXV

Nos. 763-774.

TOKYO

1952

# 著者名索引

	٠,	4	
	1	3	Ü
d	С	3	k,

	217
$\mathbf{F}$	
藤田安二: クスノキ及びその近似種の種的,成分的,分布的,進化的諸関係	245
福田八十楠,加来章輔: 土壌濕度の傾斜環境における大豆の水度 (歐文)	
H	
服部新佐: 日本産苔類研究 VII (歐文)	10
初島住彦: ラウテルバッハ氏記載ニューギニャ産新属の再検(歐文)	
林 俊郎: 植物細胞の原形質流動に関する二三の知見(歐文)	
肥田美知子: 根の原初木部の数から見た Metasequoia の類縁関係	
平野 潤: 黄色葡萄状球菌の集塊性についての若干の観察(歐文)	
平岡俊佑: 還元分裂, 特に花束期に関する観察及び実験 VI. ヤブソテツに於ける染色体とプラスチッ	
ドの行動並びに還元分裂各期の時間(歐文)	61
平岡俊佑: 還元分裂特に花束期に関する観察並びに実験,その十、前期染色体の遠心力に対する反応	
(歐文)	
本田正文: 日本の新植物 (歐文)	
堀 武美: 中部日本に於ける生姜及び馬鈴薯の越冬に関する生理学的研究(歐文)	119
I	
稻田朝次: ムラサキツユクサの染色体螺旋(予報)	192
石川茂雄: タバコの種子の光感性について I 浸漬時間と光感性の変化	257
岩波洋造: 花粉の生理学的研究 [I] 花粉管內原形質流動について	
岩波洋造: 花粉の生理学的研究 [III] (花粉管の伸長について)	199
K	
上村 登: 苔類系統の血清学的研究, 其一, ツノゴケ類の類縁関係に就いて(歐文)	207
木村劼二: 木材窗村菌三種の性について	145
木村劼二: ウシグソヒトヨの性系統について	
小林義雄, 福島 博: 日本に於ける赤雪と綠雪に就て I	
小林義雄, 福島 博: 日本に於ける赤雪と終雪に就て II	
国谷雄三郎: 植物体内の液流測定に関する補償法 "Kompensationsmethode"の再試験と応用の範囲	
とについて (歐文)	93
M	
升本修三: 本邦産土壌放射状菌の分類学的研究 II-1	71
升本修三: 本邦産土壤放射状菌の分類学的研究 II-2	123
皆川貞一,柳島直彥, 荒勝 豊, 長崎泉吉, 芦田譲治: 酵母菌の銅に対する適応的変異 現象の研究 III 銅抵抗菌のリボ核酸に関する研究続報(歐文)	
調地加密 シール 作品 フーマー・カー・フー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	

# N

水升 进,口路。宋心远光气也的。从门心水水	186
長友貞雄: 仮導管の膜構造特にその膜層について(歐文)	43
中島吾一: 小麥ライ麥間における Amphidiploid 型作物の育成に関する遺伝学的及び細胞学的研究	
III. A. T. turgidum (n=14) と S. cereale (n=7) との間に生ぜる 2n=42 染色体を有する	
F <sub>2</sub> 植物の花粉母細胞成熟分裂	
中山至大: 植物光週性の実験的研究(1) サンショウモの光週反応(歐文)	274
野口 彰: ヘビゴケ及び Microcampylopus 属の一種に就て	86
沼田 眞,延原 肇: 虹が浜の海岸植生に関する研究 第1報 (歐文)	149
0	
越智春美: 蘚類の細胞液渗透価, 透過性, 乾燥抵抗及び寒冷抵抗について (予報) (歐文)	10
越智春美: 水分経済の面からみた蘚類の生態について、第1報 蘚類の生存に必要な最小含水度につ	
いて(歐文)	112
生沼 巴: 禾穀類の核形態学 V	236
奥野春雄: 日本珪藻土礦床より産する化石珪藻 II	34
奥野春雄: 電子顕微鏡による珪藻穀微細構造の研究 IX (歐文)	158
小野 林: 根の発育に及ぼす 2·4-D の影響 (歐文)	224
S	
櫻井久一: 伊勢神宮領域內の蘚類 II.	90
櫻井久一: 日本産カマシッポゴケ属	
佐藤正己: 大興安嶺の地衣類(歐文)	
沢村正五: ジャガイモの細胞学的研究 I. 二倍種田山の体細胞染色体とその 減数分裂 における染色	
体行動	
信夫隆治; ヒルムシロ属植物の気孔について(歐文)	56
T	
竹本貞一郎: ヒメヂシバリ (2x) とオオヂシバリ (6x) との比較研究 (歐文)	164
富樫浩吾,香月繁孝: 日本産 Cercospora (歐文)	
鳥山英雄: サポニン溶液によるアオミドロ異状細胞について	60
矢野孝二: 蘚類数種の染色体 II	105
	193
Y	
保井コノ: 藤井健欠郎博士	1
吉村フジ: ウキクサ科植物の硝酸還元並にアンモニヤ消費に及ぼす光の影響	176
湯浅 明: 羊歯類の細胞学的研究 (三十一報) 色素体と核との関係 (歐文)	211
雜錄	
新著紹介	263
植物科名表	200
<b>抄</b> 錄	80
本会記事	295

### AUTHOR INDEX

A	
ASAMI M.: On the Paper Chromatography of the Leaf Pigments I.	217
F	
FUJITA Y.: Cinamomum camphola Sieb. and its allied species. Their interrelations considered from the view-points of species characteristics, chemical constituents, geographical distributions and evolution. (in Japanese)	. 24
HATTORI S.: Hepaticarum species novae et minus cognitae Nipponenses VII.  HATUSIMA S.: A revision of the new genera from New Guinea described by C. Lauterbach  HAYASHI T.: Some aspects of behavior of the protoplasmic streaming in plant cells  HIDA M.: The affinity of Metaseguoia to other conifers as shown by the number of protoxylem in roots. (in Japanese)	. 109 . 5. 5. 280 
I	
1	
INADA A.: The meiotic chromosome spirals of <i>Tradescantia paludosa</i> (n=6) (A preliminary note in Japanese)  ISHIKAWA S.: On the light-sensitivity of tobacco seeds. 1. Change of the light-sensitivity	192
with the time of inbibition. (in Japanese)	
IWANAMI Y.: Physiological researches of pollen, I. On the protoplasmic streaming in the pollen tube. (in Japanese)	
The physiological researches of the pollen III. (in Japanese)	

#### K

KIMURA K.: On the sex of some wood destroying fungi. (in Japanese)	145
: On the sexual strains of Coprinus macrorhizus Rea f. microsporus Hongô. (in Jap.)	232
KOBAYASHI Y. and FUKUSHIMA H.: On the red and green snow newly found in Japan I.	
(in Japanese)	77
,	128
KUNIYA Y.: The re-examination and the limit of applicability of the compensation method to	
the measurement of sap streaming in plants.	93
M	
M	
MASUMOTO S.: Taxonomic studies of soil Actinomyces in Japan. II-1 (in Japanese)	71
Taxonomic studies of soil Actinomyces in Japan, II-2. (in Japanese)	123
MINAGAWA S., YANAGISHIMA N., ARAKATSU Y., NAGASAKI S. and ASHIDA J.: On the	
adaptation of yeast to copper. III. Further studies on the ribonucleic acid from the	
copper resistant yeast cells.	228
N	
NAGAI S.: On the effect of stomata in the transpiration of sweet potato leaf (in Japanese)	
NAGATOMO S.: The wall structure of tracheid with special reference to its layers	
NAKAJIMA G.: Genetical and cytological studies in the breeding of amphidiploid types between	
	,
42 chromosomes raised T. turgidum (n=14) × S. cereale (n=7). (in Japanese)	288
NAKAYAMA S.: Experimental researches on photoperiodism (1) Photoperiodic responses of	074
Salvinia.	
NOGUCHI A.: On Campylopodium euphorocladum and a species of Microcampylopus (Musci)  NUMATA N. and NOBUHARA H.: Studies on the coastal vegetation at Nijigahama (Report 1)	
NUMATA N. and NOBUHARA H. Studies on the coastal vegetation at Nijiganama (Report 1)	149
O	
OCHI H.: The preliminary report on the osmotic value, permeability, drought and cold resist-	
ance of mosses.	10
: Autecological study of mosses in respect to water economy, I. On the minimum	
hydrability within which mosses are able to survive.	112
OINUMA T.: Karyomorphology of Cereals. V. Karyotype alteration in barley varieties.	
	236
OKUNO H.: Fossil diatoms from Japanese diatomite deposits II. (in Japanese)	
: Electron-microscopical study on the fine structures of diatom frustules IX	
ONO H.: The effects of 2.4-Dichlorophenoxyacetic acid upon the growth of roots	
S	
SAKURAI K.: Mosses in the estate of Ise Grand Shrine II.(in Japanese)	90
: Observation of the Genus Kiaeria, Paraleucobryum, Orthodicranum and Dicranoloma	
in Japan. (in Japanese)	

SATO M.: Lichenes Khinganensis: or a list of lichens collected by Prof. T. Kira in the Great	
Khingan Range, Manchuria.	172
SAWAMURA S.: Cytological studies on several species of potato I. The somatic chromosome	
and meiotic chromosome behaviour in diploid species "Tayama"	27
SHINOBU R.: Studies on the stomata of Potamogeton.	56
T	
TAKEMOTO T.: Comparative studies on Ixeris stolonifera (2x) and 1. japonica (6x)	164
TOGASHI K. and KATSUKI S.: New or noteworthy Cercosporae from Japan.	18
TORIYAMA H.: The effect of saponin solution upon Spirogyra cells.	68
V	
1	
YANO K.: On the chromosomes in some mosses II (in Japanese)	195
YASUI K.: Dr. Kenjirô FUZII.	
YOSHIMURA F.: Influence of the light on the consumption of nitrate and ammonia in	
lemnaceous plants (in Japanese)	176
YUASA A.: Studies in the cytology of Pteridophyta XXX.	211





Dr. Kenjirô Fujii (1866–1952)

Emeritus Professor of the University of Tokyo Member of the Japan Academy Honorable Member of the Botanical Society of Japan



## 理学博士 藤井健次郎先生

#### 保井コノ

Kono YASUI: Dr. Kenjirô FUJII

昭和27年1月11日早朝、藤井先生の御客態の急奏が筆者のもとに知らされました。出勤まぎわであつた筆者は直にお宅へかけつけましたが、はや奏りはてたお姿を拝するのみでした。あまりのことに、フトまたお银をあけられるのではないかと見まもつていた次第でした。9日の夕方キトロギアに予告の出ておる、先生と朝比奈氏とい共常になるイソエテスの精虫放出に関する論文の印刷について指示され 11日の夕方までに筆者が論文を今一度通読して尚御相談をした上で、朝比奈氏と打合せすることにきめていた、その11日の朝にこのようなことが起きようなど全く思いもかけぬことでした。

先生は慶応2年10月5日に加賀藩士の家に宝れましたが、まだ東西もわからぬ時に両親を失われましたので、叔母様のお手もとに正兄経久氏とともに養育されましたが、叔母様は経久氏よりも先生を信頼され、先生もその御最後までともに住まれて孝養をつくされたと伺つております。

明治25年に帝国大学理科大学植物学科を卒業せられ、昭和2年に停年で退官せられるまで同大学で、助手、助教授、教授と歴任せられ、植物学教室で研究と学生指導とにつとめられ、退官後も御逝去の日まで同教室に空をもたれて研究とキロトギアの主幹としてその編輯に精進せられました。先生の70 才までの経歴と業績とは本誌の藤井記念号とキトロギアの藤井記念号とにありますからここには略します。先生はその後、日本学上院会員にえらばれ第4部に属しておられました。

先生の一生は実に植物学を通じての生命の探究にあつたと申されます。それゆえ研究の出立には、その範囲もかなり広くまた読書が広く関係学科にわたられたことは、東大、植物学教室、遺伝学講座に先生が集められた参考書が広範囲に渉つておることでも証明されます。後に先生の研究が、細胞学一遺伝学から細胞遺伝学を結果し、なお後には核学にその重点がおかれるようになりました。先生のこの研究方向の推移の結果は、東京帝国大学理学維植物学科内に、大阪財界の偉才野村徳七氏とその2弟の財的援助の下に遺伝学講座の開設を導き、先生はその初代主任教授として、この学問の進步に資献せられました。一方純正細胞学の御指導と相ともなつて多数の門下を養成せられ、当時国内各大学の細胞学の講座は殆ど先生の門下によつて指導され、その業績の著しかつたことはローゼンベルが氏に、今世界の細胞学の中心は二つで、1は東京、1はウブサラだと云はせた程でした。

御退官直前にヨーロッパを廻られましたが、停年に近い先生が顕微解剖器をたづさえて渡歐せられ、親しくペータフィーの下でその技術を習得せられ、また組織培養とか、核物質の化学的分析とか当時の新しい方面の知識とその研究方法とを吸收されて帰られましたのにも、先生の研究に対する熱意とその研究目的の所在がうかがわれました。

先生はこのように世界の新しい研究, よた, その研究方法に留意された一方, 御自身でも常に工夫を怠らず, 研究方法や機械器具を工夫されました。藤井式染色瓶, 藤井式顕微鏡用ランプなどその現われでありましよう。また教室で使用する映写機の組立てを工夫されたり, 最近まで顕微鏡写真機について考案をめぐらされていました。

御退官後、数室内で先生の指導をうけた人々の間に細胞学雑誌発刊の議が起り先生にその主幹となることを願われました。その場合先生は、単なる主幹の名をかすような事でなく「やるなら自分が主としてやろう。そうなればその雑誌は国際的のものでありたい」、それだと自分の研究を犠牲にすることも起るからと、最初は大分躊躇されましたが、遂に決心されて、国際細胞学雑誌「キトロギア」の創刊が昭和4年、財団法人和田薰幸会の支援の下に出発し、国内及び

国外から 200 余名の寄稿委員が依嘱されました。今日同誌上で寄稿委員の表を見渡される人々の中には、それ等委員中のある人々は細胞学に関係のうすいのでないかと言はれる方もあろうと思はれます。しかしそこに先生の細胞学に対する理想の反映があるとも見られます。 先生は実に純正生物学は勿論、生物に関係する他の諸学科の研究の基礎には常に細胞があり、細胞学は原形体の生活、生命の持続、原形はに起る妥異、生活作用に起因する生成物の意義等に関する研究、殊にそれ等現象の行はれる方則と、一般に無生物とよばれる物の間に行はれる変化の法則との比較によつて原形体の本質を究明する学問であり、キトロギアはそれ等を包含する細胞学の記録でありたいと希望せられておりました。 筆者はここでキトロギアの将來がこの先生の理想を体して進むことを切に祈るとともに、各方面からの支援を願いたいと存じます。

キトロギアの刊行が始まつてからの先生は 細胞学上の研究もつづけられましたが、御自身の生活の殆どすべてを同誌の編輯の上に注がれ、趣味的の方面などはすべて放棄された 有様でした。しかし先生の衰えられない研究心は戰時中由型県に疎間せられた時なども、当時結成 せられた,食品に関する細胞及び組織学的研究を主とする学振第74小委員会の主任として、委員会の開催、また戦後細々ながらキトロギの発行が継続されるようになつた編輯上の 指示のために、当時既に病を得られていたにも拘らず、しかも駅までの途を荷車、時には牛の背を借りて出られるような事情の下にも上京せられ、教室内の椅子の上に仮寝をせられる程の不自由の中で種々の指示を与えられました。 山梨での日常は研究に終始されました。 その結果は筆者との共著の名で近く発表されます。

先生の遺伝学に関する貢献とキトロギア刊行による日本の細胞学の世界えの宣揚に関する功績に対して昭和25年11月3日文化の日に文化勳章が授けられ、同26年の同じ日に文化功労者に対する年金が贈与されました。先生のそれまでの御生活がすいぶん不自由であられましたから、この贈与がそれを幾分でも緩和するであろうと門下の人達もよろこんでおりましたが、その期間の短かかつたことが惜まれてなりません。

筆者はここで先生の教育に関すこ功績をあげたいと思います。 それは先生の 中等教育における植物学教科書の編纂であります。明治 30 年代から中等教科書界をリードしていた東京開成館の諸種の中等教科書中で先生の教科書はその指導的位置をもち、教科の配列、体裁等の指針となつたものであつたと聞いております。 先生の教科書内の事項の発表はすべて先生の 創意と研究の結晶であり、1 個の圏、1 項の説明でも自身十分に 満足せられるまで研究せられた 結果でありました。 当時先生がながく学位論文 を呈出せられないことを云々した人があつたのに対して当時日本の生物学界の構成であられた 箕作佳吉先生が「藤井君はあの教科書作製で十分博士の資格がある」といわれたそうでした。 先生の学位が論文呈出によるものでなく紀長推薦にあるものであることは、この間の消息を語るものと思われます。

先生は、細胞分裂の機構及び染色体の排列という題目の下に門下の人々と共に一つのシムボジウムを発表することを全てられキトロギアに予告されております。先生の生前にその全部の完結を見られなかつたことは残念の至りですが、私達は先生の遺志をついて、その完成を期しております。

終りに先生の告別式にのぞまれた御同級の申村帯二 先生は、藤井君は盆栽の愛好者でそしてまた徹底的の研究者であつたと語られ、そしてその徹底ぶりについて話されました。この研究は白井光太郎先生の示唆によつて始められたものとききましたが、先生の研究結果は一方盆栽愛好の真臓をつくとともに、他方意栽育成に関する幾多の基本的問題を生物学的に解釈せられていたようです。 それ等が未発表のままに終つたことは、この我国の特殊の栽培技術に対して惜しまれてなりません。

先生はまた南画を愛好され、殊に上海の篆刻の大家吳昌碩氏の画を好まれ、また同氏の書になる一席亦吾廬という額をかかけておられ、同氏の刻んだ亦吾廬という印顆を用いられておりました。しかし筆者の考えるところでは、先生のこの趣味と見えた盆栽の如きも、いわゆる「好き」というのでなく、やはり强い研究心のあらわれであつたと思われます。

実に先生は大きな研究心の權化であられました。

# Some observations on the cluster-forming Character of *Staphylococcus*.\*

By Jun HIRANO\*\*

平野 潤: 黄色葡萄状球菌の集塊性についての若干の觀察

Staphylococci are known to grow forming irregular cellular aggregates, occuring singly, in pairs, or in clusters consisting of various number of cells. This characteristic poses serious questions as to the reliability of usual methods of measuring bacterial growth such as plate-counting or nephelometric measurements. Apart from this problem, it is interesting to know with what frequencies the clusters having different numbers of cells occur in the culture and whether these frequencies may be subject to change during the course of culture. Experiments were carried out along this line with *Staphylococcus aureus* FDA 209 P grown on ordinary broth (pH 7.0).

#### **Experimental Method**

The culture methods used were virtually the same as those reported previously<sup>1</sup>. Into a 5-ml culture solution in a 20-ml test-tube were inoculated 5 loops of bacterial suspension from a 18- to 24-hour-old culture. The test-tube was shaken well and left to stand in a thermostat at 30°C. Every 50 minutes after the inoculation, two loops of the culture solution were taken aseptically, and dropped each on a clean slide-glass. After adding a loopful of methylene-blue solution (M/500), the droplet was covered with a clean cover-glass and observed microscopically with oil-immersion (magnification=1500). The number of clusters having different numbers ( $\nu$ ) of bacterial cells was counted and recorded. Record was made for clusters whose  $\nu$ -values amounted to 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, and  $\geq$ 10. For large clusters having  $\nu$ -values of  $\geq$ 10, a rough estimation of  $\nu$  was made according to the size of the clusters, which, by preliminary exercise, allowed us to determine the  $\nu$ -values with the accuracy of about  $\pm$ 5. The counting was effected successively for different microscopic fields, which, in order to avoid the repeated observation of one and the same field, were spatially separated in a regular manner as illustrated in Fig. 1.

<sup>\*</sup> Papar delivered on Dec. 19th, 1949, at the Annual Meetings of the Scientific Researches of the Tokyo Institute of Technology.

Partially sponsored by the Grant for the Scientific Researches, Ministry of Education.

<sup>\*\*</sup> Biochemical Laboratory, Tokyo Institute of Technology.

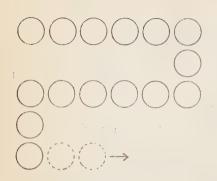


Fig. "Sampling" of microscopic fields for observation.

For each sample countings were made as many as possible during the interval (50 minutes) of successive samplings. Based on the records thus obtained, the following values were determined:

 $_tH_\nu$ : the number of clusters in a given sample, having the member-number of  $\nu$ , at the culture time t (in minutes).

 $_t M_{\nu}$  (= $\nu \cdot _t H_{\nu}$ ): the total number of bacteria (in the same sample as above), which are involved in clusters having the member-number  $\nu$  at the culture time t.

 $th_{\nu}$ : the ratio of  $tH_{\nu}$  to the total number of clusters  $(\sum_{i=1}^{\nu} tH_{\nu})$ .

 $tm_{\nu}$ : the ratio of  $tM_{\nu}$  to the total number of bacteria  $(\sum_{i=1}^{\nu} tM_{\nu})$ .

#### **Preliminary Tests**

In the above-described method one may suspect that the mounting of the droplet between the slide- and cover-glasses might possibly entail the break of some cluster into smaller pieces, so that the observation would yield more or less spurious results. To check this point, parallel experiments were run with duplicate samples, one by using the above mentioned method and the other by observing the sample in a hanging drop. The results of observations made simultaneously are given in Table 1, from which it may be seen that the two methods yielded essentially the same results.

Table 1. Comparison of the results obtained by two methods; (1) the hanging drop method, and (2) the method in which the sample was mounted between the slide and coverglasses.

The "Student's Test" was effected on the figures and the value "F" computed.

	, A	1	2	3	4	5	6	7	8≦	Total
50H <sub>ν</sub>	Method (1)	51	160	23	40	13	5	4	5	301
30229	Method (2)	56	88	17	29	14	3	3	2	212

 $F_0 = 1.48 < F = 2.64$ 

Using the method described in the preceding paragraph, the reproducibility of the method was tested by running two observations with duplicate samples from the same culture, As may be seen from Table 2, the results obtained concurred with each other with only minor fluctuations.

Table 2.	Results obtained by parallel tests run simultaneously with duplicate
	samples from the same culture.

	ν	1	2	3	4	5	6	7	8≦	Total
Fo.H.	Test (1)	26	43	10	13	4		1	2	99
SULLY	Test (2)	30	45	7	16	10	3	2		113

 $F_0=1.17 < F=2.64$  (by "Student's Test")

#### Results

Observations carried out throughout the culture time from t=50 to t=500 minutes gave the results which are summarized in Table 3 as well as in Figs. 2 and 3.

The following facts have emerged from these observations:

- (1) Except at the initial stage (t=50) of the lag phase, the clusters with even number of  $\nu$  (2, 4, 6, and 8) occur, in general, more frequently than those with odd numbers of  $\nu$  (1, 3, 5, and 7). (See Fig. 2) This finding may be interpreted as indicating that two daughter cells derived from one mother cell usually divide almost simultaneously.
- (2) In the main, the percentages of the clusters with smaller  $\nu$ -values (1,2,3, and 4) decrease with the progress of culture, while those with larger  $\nu$ -values (6,7,8, and >9) show a tendency to increase, though sometimes after temporary decrease, as the age of culture advances. As a result, the percentage of bacteria belonging to larger clusters (>9) increases re-

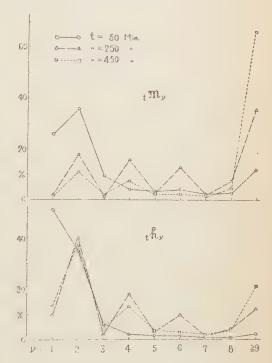


Fig. 2. Relative frequencies of clusters and bacteria with respect to the member-number v, at different culture times.

markably at later stages of culture. (See Fig. 3). In Fig. 4 is shown in what manner the mean number of bacteria in a cluster increased with time.

(3) Noteworthy is the fact that even at later stages of culture, the clusters with smaller  $\nu$ -values (especially those of  $\nu$ =2) were found in appreciable numbers.

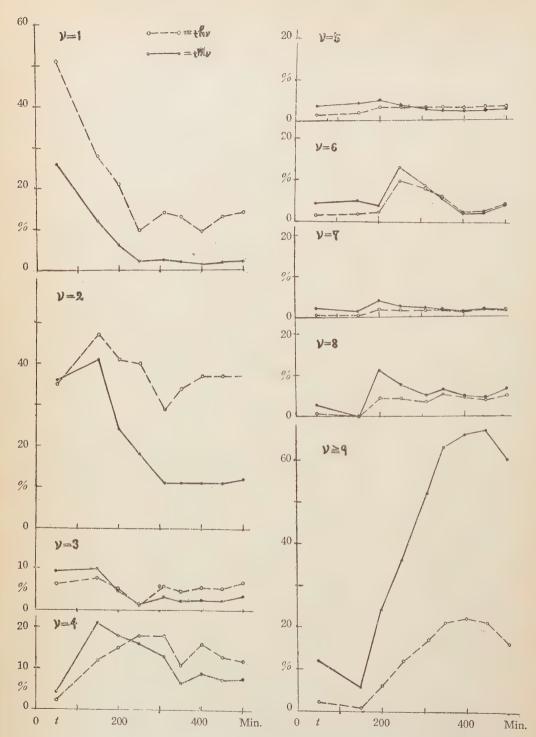


Fig. 3 The change, along with the culture-time, of the relative frequency of clusters with different v-values and of the relative frequency of bacteria belonging to them.

Table 3. The frequency of clusters having different member number of bacteria  $\nu$ , and the fre-quency of bacteria belonging to differently populated clusters, and their changes during the course of culture.

t(Min.)	v	1	2	3	4	5	6	7	8	9≤	Total	t <sup>√</sup>
-	$_t\mathrm{H}_{ u}$	74	51	9	3	2	2	1	1	3	146	
	tMν	74	102	27	12	10	12	7	8	35	287	1.97
50	thu (%)	51.	35.	6.2	2.1	1.4	1.4	0.7	0.7	2.1	100.6	
	tmv (%)	26.	36.	9.4	4.2	3.5	4.2	2.4	2.8	12.	100.5	
	"	17	14	2	4	1	_			_	38	-
	"	17	28	6	16	5			-		72	1.89
100	11											
ſ	"											-
-	11	57	98	16	25	4	4	1	_	2	207	-
	"	57	196	48	100	20	24	7	_	28	480	2.32
150	11	28.	47.	7.7	I2.	1.9	19	0.48	_	0.97	100.	
,	11	12.	41.	10.	21.	4.2	5.0	1.5		5.8	100.5	
	"	76	147	19	55	12	8	7	16	22	362	
	11	76	294	57	220	60	48	49	128	300	1232	3.40
200	"	21.	41.	5.2	15.	3.3	2.2	1.9	4.4	6.1	100.1	
	"	6.2	24.	46	18.	4.9	3.9	4.0	11.	24.	100.6	
	"	19	76	4	34	6	19	3	8	22	191	
	"	19	152	12	136	30	114	21	61	302	850	4.45
250	"	9.9	40.	2.1	18.	3.1	9.9	1.6	4.2	12.	100.8	
	11	2.2	18.	1.4	16.	3.5	13.	2.5	7.5	36.	100.1	
	"	40	84	17	51	9	23	5	10	48	287	A.M.
	#	40	168	51	204	45	138	35	80	840	1601	5.58
310	"	14.	29.	5.9	18.	3.1	8.0	1.7	3.5	17.	100.2	
	"	2.5	11.	3.2	13.	2.8	8.6	2.2	5.0	52.	100.3	

(continued)

$_{t}(Min.)$	· v	1	2	3	4	5	6	7	8	9 🚄	Total	tν
	$_{\ell}\mathrm{H}_{\nu}$	41	105	14	34	10	19	5	16	65	303	
	tMν	41	210	42	136	50	114	35	128	1290	2046	6.65
350	thu (%)	13.	34.	4.5	11.	3.2	6.2	1.6	5.2	21.	99.7	
	tmv (%)	2.0	11.	2.1	6,6	2.4	5.6	1.7	6.3	63.	100 7	
	"	. 31	121	18	51	10	8	4	14	72	329	
	17	31	242	54	204	50	48	28	112	1520	2289	6.96
400	n	9.4	37.	5.5	16.	30.	2.4	1.2.	4.3	22.	100.8	
	71	1.4	11.	2.4	8.9	2.2	2.1	1.2	4.9	66.	100.1	
	11	51	144	20	51	13	11	7	15	82	394	
	77	51	288	.60	204	65	66	49	120	1830	2733	6.94
450	11	13.	37.	5.1	13.	3.3	2.8	1.8	3.8	21.	100.8	
	"	1.9	11.	2,2	7.5	2.4	2.4	1.8	4.4	67.	100.6	
	"	44	112	21	36	10	14	4.	15	50	306	
	77	44	224	63	144	50	84	28	120	1120	1877	6.13
500	17	14.	37.	6.9	12.	3.3	4.6	1.3	4.9	16.	160.	
	"	2,1	12.	3.4	7.7	2.7	4.5	1.5	6.4	60.	100.3	

This phenomenon may be interpreted in several ways. These clusters might have been in existence from earlier stages of culture and, owing to their small size, might have escaped from the observation until they attained certain recognizable dimension at later stages of culture.<sup>2)</sup> Or, they might have derived from clusters with larger numbers of  $\nu$ -values through incidental fracture caused by some external forces or by separation of cells induced by some internal causes.

Of great interest in this connection is the observation made by the author during the experiments reported in the previous paper.<sup>1)</sup> The test organism, Staphylococcus aureus, is generally described as an immotile bacterium, and it is true that the cells of this bacterium are found to be devoid of cilia which are regarded as the motile organ of the bacterial cell. During the course of our study, however, it was several times observed that with the commencement of fission, the daughter cell or cells began to tremble, which often lasted even after the completion of the fission, with the result of the separation of the cell or cells from the mother

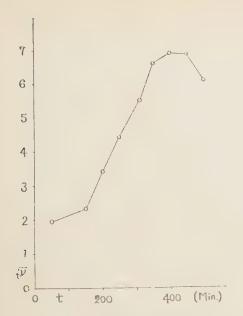


Fig. 4. The change with the culturetime of the mean number of bacteria in a cluster.

cluster. In some cases separation of cells by such a motion occurred without the fission usually directly preceding or concommitantly taking place with the separation. The trembling motion appeared sometimes so vivid that it looked as if the bacterium or the small cluster of daughter cells were making effort to part from the mother cluster. We do not know whether the trembling motion observed might have been brought about by those cells which happened to possess cilia or by some other causes, but at least it seems certain that some forces inherent in bacterial cells can cause the spontaneous separation of clusters into smaller pieces.

The author is very grateful for the kind guidances and encouragements given by Prof. Dr. H. Tamiya and Dr. T. Yanagita,

Plant Physiological and Microbiological Laboratories, Faculty of Science, Tokyo University; and Prof. Dr. A. TAKAMIYA, Biochemical Laboratory, Tokyo Institute of Technology.

#### References

1) Hirano, J.: Botan. Mag., Tokyo, 64, 133 (1951). 2) For example: Topley, W.W.C. & G.S. Wilson: "The Principles of Bacteriology and Immunity, page 71 ff. Hinshelwood, N.: "The Chemical Kinetics of the Bacterial Cells,", 1946, Chap. X.

#### 和 文 摘 要

靜置培養液中の黄色葡萄狀球類に就き,種々の大きさの集塊の比較頻度の,培養時間に伴う変化を観察し,1)偶数個集塊が大抵奇数個集塊より多いこと,2)培養の進むにつれて,大体,大きい集塊が多くなること等を確かめ,若干の考察を行つた。

The preliminary report on the osmotic value, permeability, drought and cold resistance of mosses\*

#### By Harumi Осні\*\*

越智春美: 蘚質の細胞液渗透価, 透過性, 乾燥抵抗及び寒冷抵抗について (予報)

These 2 or 3 years the writer has been making investigations in the mosses growing at different places in Tottori City from the point of view of the above subject.

This paper is only the outline on the experimental results obtained between April, 1950 and September, 1951, the details of which is to be made public in the near future.

#### 1. Osmotic value

Method: The incipient plasmolysis value in the solution (volume mol.) of KNO<sub>3</sub> was adopted.

- 1. the type showing almost no fluctuations throughout all seasons ..... M. vesicatum and Hookeria;
- 2. the osmotic value is higher in summer (dry season) and lower in winter (wet season).........Hedwigia, Anomodon and Loeskeobryum cavifolium;

<sup>\*</sup> A paper delivered at the 16th annual meeting of The Botanical Society of Japan, September 23, 1951; partly sponsored by the Scientific Research Expenditure of The Education Ministry.

<sup>\*\*</sup> Biological Institute, Faculty of Gakugei, Tottori University, Tottori City, Japan.

The differences in the types above-mentioned seem to be caused by the genetical nature of each species and the facts that the maturity of cells, the falling down of temperature and the dryness of the habitat raise the osmotic value, while the opposite factors make it lower, and that the growing season of mosses is generally winter and the time for the growth in length is short, being about one month or two, while the other seasons are to mature and to rest for them.

In dry periods in summer or autumn, a few species (*Thamnium* and *Loeskeo-bryum*) sometimes are not plasmolysed despite of their living; on this fact the writer remembers the Patterson's paper,<sup>1)</sup> however, at preasent, the writer is unable to discuss it unless be makes more thorough investigations.

#### 2. Permeability

The relative protoplasmic permeability to water was estimated by the deplasmolysis method. Plasmolysing solutions and deplasmolysing ones are of KNO<sub>3</sub>, the concentration of plasmolysing to deplasing solutions is 3:1, and the osmotic value of deplasmolysing solution is a little lower than that of each material's cell-sap.

Generally it is higher in mosses at dry habitats and shady wet places, and lower in those on soil; and it is higher in old plants and matured parts and lower in young ones. As to its seasonal variations, the following types seem to be recognized:

- 5. the permeability seems to fluctuate irregularly......several sp. (?)

On this problem tharough investigations will have to be made, however, at present, it seems that its seasonal variations are caused by the facts mentioned in the article of Osmotic value.

#### 3. Drought resistance

Collected materials were carried into the laboratory, and were dried in the air being put on the table. The interval between the date when the drying test was started and the time when all their leaves were dead was looked on as the drought resistant term. Whether the moss-leaves were dead or living was tested by the

plasmolysis method in KNO<sub>3</sub> solutions.

The results obtained are like Irmscher's.<sup>2)</sup> However, in their resistance to drought, even the same species growing at the same place are different when the collecting season, in which the test is started, is different; for examples, in *Dicranum* and *Polytrichum* the following results were obtained:

Date the to	est was started	Living intervals
Dicranum japonicumSept.	2, 1950	about 4 weeks
Jan.	6, 1951	" 28
Apr.	12, 1951	,, 4
Polytrichum attenuatumSept.	2, 1950	more than 56
Jan.	6, 1951	about 28
Apr.	12, 1951	,, 11

At present, it seems that these appearances are due to the following reasons:

- high temperatures are generally unfavourable to the life of dried materials, for most species which are resistant to drought and which are collected in verious seasons die in July or August;
- 2. the drought resistant nature is conspicuous in the mosses having active buds, for the materials collected in January, when most mosses begin to grow, are generally more resistant than those collected in the other seasons.

#### 4. Cold resistance

The adopted cooling appartus is the same with that used by Stoddart.<sup>3)</sup> Whether moss-leaves were dead or living was tested by the plasmolysis method in KNO<sub>3</sub> solutions.

Most samples of fresh materials used in tests are resistant to -20°C, and 7 species of all those tested (18 sp.) to -27°C. Generally old plants and matured parts are more resistant than young ones.

Concerning all the species used in test, it is difficult to find the definite relationship at present between cold resistance and the other obtained results (osmotic value, permeability, their seasonal fluctuations and drought resistance); it rather seems that each species has own individuality against low temperatures,

The writer is indebted to express here his great gratitude for the kind guidances and encouragements of Prof. Dr. Y. Horikawa, Botanical Institute, Faculty of Science, Hiroshima University and Prof. Dr. J. Ashida, Botanical Institute, Faculty of Science, Kyoto University.

#### Literature cited

- 1) Patterson, P. M.; Amer. Journ. Bot. 33 (7): 604-611, 1946.
- 2) Irmscher, E.; Jahrb. f. wiss. Bot. 50: 387-449, 1912.
- 3) Stoddart, L. A.; Plant Physiol. 10: 661-680, 1935.

## Hepaticarum species novae et minus cognitae Nipponenses VII

#### By Sinske HATTORI\*

服部新佐: 日本產品類研究 VII\*\*

49) Porella Stephaniana (Massalongo) S. Hattori, comb. nov. *Madotheca Stephaniana* Massalongo in Mem. Accad. Agr. Art. Comm. Verona, 73, Ser. 3, Fasc. 2, 24, Pl. II, Fig. V (1897); Stephani, Spec. Hepat. 4, 309 (1910). —*Porella calcicola* Hattori in Bot. Mag. Tokyo, LVIII, 4, Fig. 11 (1944) syn. nov. —*Madotheca grossidens* Stephani in sched. syn. nov. Exsic. Hattori, Hep. Jap. Ser. 3, 123 (1950).

Specim. exam. Prov. Shimotsuke: Izuru (H. Okuyama 3313, 9. Mai. 1944); prov. Musashi: Nippara (ipse 3459, 3461, 3496, 3502, 5. Jul. 1940), mt. Tensozan (ipse 3785, 6. Jul. 1940); prov. Iyo: Koya (Oda 322, Mar. 1910, det. Stephani, *M. grossidens*, in Herb. Sh. Okamura); Onogahara (M. Tokui 614, Aug. 1948); prov. Bungo: Ono-gun, Kawanobori (T. Ono 232, 4. Jul. 1943); prov. Higo: Kuma-gun, Koonose, ca. 100 m. K. Mayebara 1045, Dec. 1947); prov. Buzen (Hattori 1941, 1. c.). On lime-stone. The present species has only been recorded in Mt. Lao-y-san, Prov. Schensi, China. In Japan, however, this is widely distributed but restricted on calcareous regions. *P. calcicola* Hatt. reported from Mt. Kaharu in Kyushu (Japan) is conspecific with the present species.

50) Frullania Mayebarae S. Hattori, spec. nov. (Fig. 42) Exsiccata: S. Hattori, Hepat. Japon. Ser. 3, 125 (1950).

Dioica; majuscula, obscure viridis, ad rupes humidas dense caespitosa. Caulis ca 10 mm longus, 0.14 mm diametro, cum foliis 1.8 mm latus, irregulariter pinnatim ramosus. Folia caulina parum imbricata, subrecte patula, dorso caulem late superantia, basi exappendiculata,  $\pm$  concava, late ovato-oblonga, 0.95 mm longa, 0.8 mm lata, apice rotundato vel subtruncato, saepius decurvo. Cellulae apicales  $20 \times 15 \mu$ , mediae  $22 \sim 25 \times 16 \sim 18 \mu$ , basales  $25 \sim 30 \times 18 \mu$ , parietibus tenuibus, trigonis parvis, acutis. Lobulus folii haud saccatus, folio subtriplo brevior, oblongus, acutus,  $\pm 0.3$  mm longus et 0.2 mm latus; carina conjunctionis  $\pm 0.15$  mm longa, a caule recte patula. Amphigastria angusta, caule aequilata vel parum latiora, subduplo longiora quam lata (0.3 mm longa, 0.18 mm lata), transverse inserta, marginibus lateralibus

<sup>\*</sup> Hattori Botanical Laboratory 財団法人服部植物研究所

This research was made possible though a grant in aid for fundamental scientific research from the Department of Education, Japan.

<sup>\*\*</sup> 本研究は文部省科学研究費の交付を受けた.

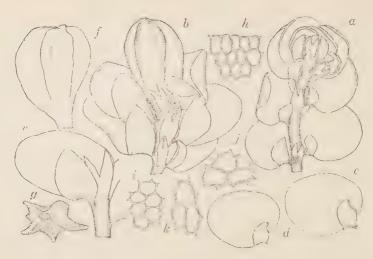


Fig. 42. Frullania Mayebarae Hatt.

a. Apex of sterile stem, postical view ( $\times$ 20). b. Apex of stem with a perianth, post. v. ( $\times$ 20). c-d. Leaves ( $\times$ 20). e. Bract and bracteole ( $\times$ 20). f-g. Perianths ( $\times$ 20). h. Cells from antical margin of lobe ( $\times$ 225). i. Cells from middle of lobe ( $\times$ 225). j-k. Cells from base of lobe ( $\times$ 225). The figures were all drawn from the type specimen.

substrictis, apice 1/3~2/5 bifida, sinu angusto, acuto, lobis lanceolatis, acutis. Perianthia terminalia, pyriformia, quinqueplicata (plica antica unica), plicis angustis, sublevibus, rostro brevissimo. Folia floralia caulinis majora, lobulo oblongo, folio parum breviore, apice subacuto vel obtuso, integerrimo. Amphigastrium florale caulinis subduplo longius (0.45 mm longum, basi 0.18 mm latum), ad medium bifidum, laciniis lanceolatis, acutis, sinu angusto, acuto. Androecia in caule lateralia, breviter pedicellata, capitulata, bracteis confertissimis, parvijugis. Specim. exam. Prov. Higo: Hitoyoshi, prope flum. Kuma, ad rupes humidae (K. Mayebara 500-typus, 13. Jul. 1947; 826, 4. Sept. 1947; in Herb. Hattori).

51) Harpanthus Flotowianus (Nees) Nees, Naturg. Europ. Leberm. II, 353 (1836). Harpanthus acutiflorus Stephani, Spec. Hepat. VI, 302 (1922)—syn. nov.

Specim. exam. Prov. Kōzuke: Tone-gun, inter Sanpei-tōge et Tokura (ipse 507, 7. Jul. 1941); prov. Shinano: inter Jōnen et Kamikōchi (ipse 1196-98, 1341, 20. Aug. 1941); ins. Yakushima (U. Faurie 1678, Jun. 1905; materia originalis *H. acutiflori* Steph. in Herb. Univ. Kyoto). Distr. Europe, North America, Greenland, Siberia, Sachalin, Japan (Shikoku, ? Yakushima). New to Honshu! Locality "Yakushima" (the type-locality of *H. acutiflorus*) is doubtful. In June of 1905 Abbé Faurie was not in Yakushima I. It may possibly be mistaken for "Yakushiyama" (a high mountain in middle Honshu).

52) Heteroscyphus planus (Mitten) Schiffner in Oesterr. Bot. Zeitschr. LX, 171

(1910).—Lophocolea neglecta Jack ex Stephani in Bull. Herb. Boiss. V, 80 (1897), nom. nud.; Stephani, Spec. Hepat. VI, 285 (1922) syn. nov. Exsiccata: S. Hattori, Hepat. Japon. Ser. 1, 12 (1946).

Specim. exam. Prov. Musashi: Mizawa (K. Hisauchi, 23. Sept. 1912; det. Stephani, sub *Lophocolea neglecta*; in Herb. Mus. Sci. Tokyo); prov. Tosa: Takaoka-gun, mt. Kokuzo (T. Yoshinaga 3004, 10. Nov. 1943); prov. Hizen: Nagasaki (ipse 3294, 7. Mar. 1943). Distr. Japan (Shikoku, Kyushu, Liukiu), South China. New to Honshu!

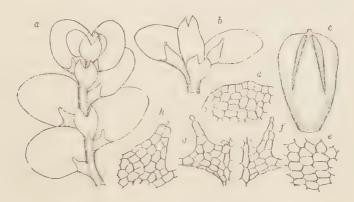


Fig. 43. Lejeunea Otiana Hatt.

a. Apical part of sterile stem, postical view  $(\times 35)$ . b. Female bracts and bracteole  $(\times 35)$ . c. Perianth, post. v.  $(\times 35)$ . d. Apical part of leaf  $(\times 135)$ . e. Cells from base of leaf  $(\times 135)$ . f-h. Lobules of leaves  $(\times 135)$ . The figures were drawn from the type specimen.

#### 53) Lejeunea Otiana S. Hattori, spec. nov. (Fig. 43)

Monoica (sed saepe dioica videtur); parvula,  $\pm$  obscure viridula, saxicola. Caulis ad 7 mm longus, 0.1 mm in diametro, cum foliis  $1\sim1.2$  mm latus, parviramosus. Folia caulina contigua vel  $\pm$  remota, rarius parum imbricata,  $\pm$  oblique patula, ovato-oblonga (0.6 mm longa, 0.45 mm lata), obtusa. Cellulae cum chlorophylli granulis obscurae, marginales  $15\sim17\mu$ , mediae  $29\sim25\times17\mu$ , basales  $30\times17\mu$ , parietibus tenuibus, trigonis parvis, cuticula levi. Lobulus folii minutus, oblique quadratus, folio ca 6-plo brevior, angulo porrecto-apiculato, papilla byalina notato, carina stricta, in marginem folii stricte excurrente. Amphigastria majuscula, caule duplo latiora, subtransverse inserta, obovato-oblonga, 0.22 mm longa, parum angustiora quam longa, apice ad 2/5 bifida, sinu acuto, lobis triangulatis, acutis. Gynoecia in caule terminalia, uno latere innovata, repetito-florifera; folia floralia caulinis minora, anguste oblonga (0.47 mm longa, 0.3 mm lata), obtusa vel subacuta, lobulo duplo breviore, ad medium soluto, lanceolato (0.22 $\sim$ 0.26 mm longo, 0.08 $\sim$ 0.1 mm lato), longe acuminato, acuto vel subacuto. Amphigastrium florale caulinis duplo longius (0.42 $\sim$ 0.45 mm longum, 0.2 $\sim$ 0.23 mm latum), oblongo-lanceolatum, apice ad 1/5

bifissum, rima angusta, acuta, Iobis triangulatis, acutis. Perianthia pyriformia, pro planta magna (0.6~0.7 mm longa, 0.4~0.45 mm lata), postice convexo, bicarinato, antice planulo, brevissime uniplicato vel subnudo, rostro parvo. Androecia lateralia, capitulata (bracteis trijugis), vel terminalia (bracteis quinquejugis). Specim. exam. Prov. Iyo: Saijō-shi, Nakanishi (K. Oti 734-typus, 10. Aug. 1944; in Herb. Hattori).

54) Mylia verrucosa Lindberg in Acta Soc. Sci. Fenn. X, 236 (1872). *Plagiochila shinanoensis* Stephani, Spec. Hepat. VI, 224 (1921)—syn. nov. *Solenostoma asperum* Stephani in sched.—syn. nov.

Specim. exam. Prov. Uzen: mt. Asahi (ipse 933, 25. Jul. 1941); prov. Iwashiro: Ozegahara (ipse 615-616, 3. Jul. 1941), mt. Shibutsu (ipse 618-619, 4. Jul. 1941); prov. Shinano: mt. Tsubakuro (ipse 1305, 19. Aug. 1941); mt. Ontake (Obinata 319, 15. Aug. 1912; det. Stephani, Solenostoma asperum Steph. sp. n. in Herb. Sh. Okamura); prov. Iyo: Omogō (ipse 5464, 5471, 5475, 5486, 5515, 5520, 27. Jul. 1940), mt. Ishizuchi (ipse 5236, 26. Jul. 1941), Nii-gun, Sumino (K. Oti 622, 30. Mar. 1943; 623, 30. Sept. 1943); prov. Buzen: mt. Hikosan (M. Ono 626, 6. Apr. 1944). Distr. Siberia, Sachalin, Hokkaido, Honshu, Shikoku, Kyushu, Yakushima, Formosa, Himalaya.

55) Radula Fauriana Stephani, Spec. Hepat. IV, 207 (1910). (Fig. 44)

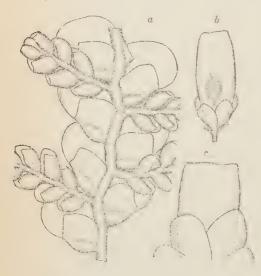


Fig. 44. Radula Fauriana Steph.

a. Part of stem, postical view (×38). b. Parianth and bracts, post, v. (×14). c. Do., antical v. (×38). The figures were drawn from Faurie's specimen (1331).

Monoica; parva, flavicans, corticola. Caulis ad 10 mm longus, 0.08 mm in diametro, cum foliis 0.8 mm latus, multiramosus, ramis subrecte patulis pinnatisque. Folia caulina imbricata, oblique patula, valde concava, in :plano late ovata, :0.4~0.5 mm longa, :0.3~0.4 mm lata, apice obtusa, antice caulem ad medium tegentia. Cellulae apicales diametro  $15\mu$ , mediae  $21 \times 17\mu$ , basales  $24 \sim 27 \times 18 \mu$ , trigonis parvis, acutis, cuticula levi. Lobulus folii magnus, ± oblique quadratus, 0.25~0.3 mm longus, 0.24~0.28 mm latus, apice truncatus, basi ± oblique insertus, caulem parum obtegens, carina oblique patula, parum arcuata, stricte in folii marginem excurrente. Folia pinnae densa, minores, 0.22 mm longa, 0.18 mm lata, apice ±

subacuta, lobulo subaequimagno, inflato, angulo acuto vel subacuto, carina magis oblique patula, bene arcuata. Gynoccia terminalia, saepius innovata; folia floralia caulinis multo majora, obovata, saepe  $\pm$  angusta, erecta, apice obtusa, basi brevis-

sime inserta, lobulo subsimillimo, breviore, angulo rotundato obtuso. Perianthia oblonga, planula, 1.6 mm longa, 0.7 mm lata, apice truncata, integerrima, vix repanda. Androecia majora, bracteis multijugis. Specim. exam. Mt. Zizōgatake prope Kōfu (U. Faurie 1331-materia originalis, Aug. 1903, in Herb. Univ. Kyoto); prov. Ugo: Yamamoto-gun, Kashige-mura, Obiraki (G. Koie 194, 14. Nov. 1943, in Herb. Sci. Mus. Tokyo). Distr. Japan (Honshu).

56) Radula obtusiloba Stephani in Bull. Herb. Boiss. V, 105 (1897).

Specim. exam. Prov. Uzen: mt. Asahi (ipse 976-978, 21. Jul. 1941); prov. Kōzuke: Tone-gun, inter Tokura et Hatomachi; in mte. Shibutsu (ipse 1542-43, 4. Jul. 1941); prov. Iyo: Nii-gun, mt. Sasagamine (K. Oti 1697, 23. Mai. 1947). Distr. Hokkaido. Species nova in Honshu et Shikoku!

- 49) カハルクラマゴケモドキ. Josepho Giraldi が支那陝西省の一山で採集, Massalongo (1897) が記載した Madotheca Stephaniana は共後 Stephani (1910) が同標本から再記載したのみで何等の知見も追加されて居ない。一昨年米国 Stanford 大学の W. C. Steere 教授の厚意に依り原論文及び Stephani 未発表 Icones の Microfilum copy を得, 戰時中筆者が北九州の香春岳産資料に基いて記載したカハルクラマゴケモドキ及び Stephani の Madotheca grossidens (未記載) と本程が同一であることを確認した。本種は我国の石灰岩地に点々と広く分布している。
- 50) マエバラヤスデゴケ(注意)。 肥後人吉の球磨川畔の正岩岩壁の増水時水に浸る如き あたりに群生, 種名は発見者前原勘次郎氏に因む。 同氏は球磨郡下の苔類を既に数于点採集し, 幾多の新種, 分布上特に顕著な種など発見されて居る。 名書南肥植物誌に次ぐ苔類誌の発表を 待つ。 本新種は緑色, やや小形, 苞葉, 腹苞葉に菌牙なく, 葉細胞膜はうすく, 葉下片は披針形。 特に狭く(莖とほほ同広)且つくさび状に深い切込みのある腹葉に特徴がある。
- 51) **タカネカマウロコゴケ**. 新産地として本州を記録する。 又 *H. acutiflorus* を本種の異名に列する。原標本の産地は Yakushima とあるが採集日付を見ると 1905 年 6 月となって居る。この時期には採集者フォリー師は屋久島には滯在して居ない。 又其後屋久島に本属を採集したことも知らないし、分布上から考えても可能性に乏しい。 恐らく本州中部の一高山藥師山の誤りであろう。
- 52) オチクサリゴケ (新称). 伊予西条市中西に於て越智一男氏発見,種名は同氏に因む. 氏は熱心な蘚苔研究者で先頃東予苔類の研究 (謄写印刷) を出された。本新種は *L. aquatica* Horik., *L. scalaris* (Steph.) Hatt. などの1群に属する比較的小形の種で薬下片が小さい斜 方形を呈しその頂端がやや刺毛狀に伸びる顕著な特徴を有する.
- 53) **イボカタウロコゴケ.** 疑問種 *Plagiochila shinanoensis* Steph. 及び *Solenostoma asperum* Steph. in sched. を本種の異名とした. 尚ステファニ宋発表イコネスには *P. shinanoana* Steph. なる図があるが之は *shinanoensis* と同一と判断される.
- 54) **ナガケビラゴケ**. 疑問種の一であつた. 雌雄同種,小形, 羽狀分枝, 莖葉は小さいが 下片は比較的大, 枝葉は莖葉より相当小形となる.
- 55) **エゾケビラゴケ**. 北海道の原産地以外には全く産地を知られていなかつたが, 筆者は 数個所で採つた. 本州の高地に広く分布し南限は日下四国の伊予策峰である.

## New or Noteworthy Cercosporae from Japan\*

#### By Kogo Togashi and Shigetaka Katsuki

富樫浩吾 · 香月繁孝: 日本產 Cercospora

#### 1) Cercospora Adenostemmae sp. nov. (Fig. 1)

Maculis sparsis, primum minutis, supra flavo-brunneis, indefinitis, in superficie infra nervuli limitatis, angularibus, 1-3 mm. diametro mox confluentibus, interdum totum folium occupantibus; caespitulis semper hypophyllis, violaceo-brunneis, plus minusve dense effusis; stromatis exilis vel absentis; conidiophoris simplicibus, non definite 4-10 fasciculatis, inferne flexuosis vel rectis, nonnumquam ad septa constrictis, ad apices raro leniter geniculatis, olivaceo-brunneis, apice fere hyalinis, 3-5-septatis,  $30-95\times4.5-5.0~\mu$ ; conidiis rectis vel plerumque curvatis, tereti-obclavatis, saepe cylindraceis, 2-5-septatis, ad septa non vel raro leniter constrictis, fere hyalinis, plerumque  $30-90~\mu$ , usque  $120~\mu$  longis,  $3.7-5.0~\mu$  latis.

Hab. on Adenostemma viscosum Forst. (Numadaikon).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 15, 1949, S. Katsuki-Type!

2) Cercospora atro-marginalis Atk., Jour. Elisha Mitchell Sci. Soc. 8:59, (1892). Sacc. Syll. Fung. 10:635, (1892). B. P. J. Bul. 226:96, (1912). Lieneman, Ann. Mo. Bot. Gard. 16:26, 30, (1929).

Cercospora rigospora Atk., Jour. Elisha Miltch. Sci. Soc. 8:65, (1892).

C. tosensis Henn., Bot. Jahrb. Engl. 34:605, (1905). Katsuki, Bul. Agr. Improv. Sect. Fukuoka Pref. 1:25, (1949).

C. nigri Tharp, Myc. 9:112, (1917).

C. Solani-biflori Sawada, Taiwan Nojiho 33:701, (1942), Bul. Agr. Exp. Sta. Formosa 85:123, (1943).

Hab. on Solanum biflorum Lour. (Mejiro-hozuki).

Pref. Kochi: Murotocho, Aug., 1905, T. Yoshinaga. Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 13, 1949, S. Katsuki.

Hab. on S. nigrum L. (Inu-hozuki).

Formosa: Shinsha, May 20, 1930, F. Onuma. Pref. Fukuoka: Itoshima, July 28, 1940, S. Katsuki.

3) Cercospora Bidentis Tharp, Myc. 9:108, (1917).

Cercospora Bidentis-pilosae Sawada, Bul. Agr. Exp. Sta. Formosa, 85: 98, (1943). Hab. on Bidens bipinnata L. (Sendan-gusa).

<sup>\*</sup> Contributions from Agricultural Institute, Yokohama National University, No. 1.

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 18, (1949), S. Katsuki.

The present fungus was first described by Tharp from Texas, finding on Bidens nashii Small. In Formosa, Sawada described Cercospora Bidentis pilosae Sawada on B. pilosa L. and B. bipinnata L. His description is very similar to that of Tharp with a minor difference in the spots formed. The junior author collected the materials of two types of spots, one being somewhat small with distinct margin as Sawada reported, and the other being large with more or less indefinite margin. There are, however, no significant differences in morphological characters between the fungi from both sources.

4) Cercospora chengtuensis Tai, Lloydia 11:40, (1948).

Hab. on Lycium chinense Mill. (Kuko).

Pref. Kyoto: Yase, Oct. 8, 1925, K. Togashi. Pref. Kagoshima: Kagoshima, Oct. 26, 1949, S. Katsuki. Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Oct. 1, 1950, K. Togashi.

5) Cercospora Chionea Ell. et Kell., Bul. Torrey Bot. Club 11:122 (1884). Tehon, Myc. 16:138 (1924). Tai, Sci. Rep. Nat. Tsing Hua Univ., Ser. B. 2:428 (1937).

Hab. on Cercis chinensis Bunge (Hanazuwo).

Pref. Kyoto: Yase, Oct. 8, 1925, K. Togashi. Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Aug. 16, 1949, Y. Urasawa; July 21, 1950, Sept. 18, 1950, K. Togashi; Sagamihara-machi, Aug. 24, 1950, Y. Uchida. Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 13, 1949, S. Katsuki. Pref. Fukuoka: Shikanoshima, Nov. 21, 1949, S. Katsuki.

Nishikado (Nogaku Kenkyu 36:411-415, 1944) reported a new species of *Cercospora* on *Cercis chinensis* from Nanking, China, naming *C. Cercidis* Nishikado. Judging from the description of his fungus is most closely related to the fungus under consideration, presumably the same to *C. Chionea* which Tai had already listed in "Chinese Fungi." Hara has also listed *C. cercidicola* Ell. et Kell. on "Japanese Fungi" (:67, 1927). This fungus seems to be the same, too. According to Wolf (Myc. 32:129-136, 1940) *C. cercidicola* is the conidial stage of *Mycosphaerella cercidicola* (Ell. et Kell.) Wolf. This fungus may be a distinct from our fungus in morphological and symptomatological characters.

One more species of *Cercospora*, *C. Cercidis* Ray (Myc. 33:175, 1941) in Oklahoma has been described on *Cercis canadensis*. The species was erected by Ray at the suggestion of Dr. Chupp who identified our fungus as *C. Chionea*.

6) Cercospora Cissi-japonicae Hori sp. nov.

For some decades, the late Dr. S. Hori had depositted the *Cercospora* specimen on *Cissus japonica* as a fungus new to science in the Herbarium of Agricultural Experiment Station, Department of Agriculture. The description of the fungus has not yet been published by him or any others. Fortunately, we found out the English description made by Dr. Hori himself in the old information to the senior author

from him. His original description of the fungus in Latin translation is as follows:-

Maculis amphigenis, atro-brunneis, nervuli limitatis et angularibus vel indefinite marginalis et subcircularibus, magnis, 5-50 mm. diametoro; caespitulis hypophyllis, effusis, subinde indistincte albo-pulveraceis; conidiophoris 5-10 fasciculatis, cylindraceis, rectis, subgeniculatis, subnodulosis, denticulatis, 1-3-septatis, raro ramosis, dilute brunneis vel fuligineis,  $40.100\times5-6~\mu$ ; conidiis hyalinis, attenuatis, cylindrace is vel obclavatis, rectis vel leniter curvatis, ad bases truncatis, saepe ad septa constrictis, guttulatis, 3-13-septatis, 35-160×4-7  $\mu$ .

Hab. on the living leaves of Cissus japonica Wild. (Yabugarashi).

Pref. Chiba: Matsudo, Nov. 7, 1912, Tadokoro, Nov. 7, 1918, E. Kurosawa.

Materials examined:— Pref. Saitama: Shinwa-mura, Oct. 7, 1949, Y. Urasawa. Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Sept. 18, 1950, K. Togashi.

#### 7) Cercospora Corylopsidis sp. nov. (Fig. 2)

Maculis amphigenis, primum minutis, sparsis, suborbicularibus vel irregularibus, plerumque 0.5–3 mm., usque 5 mm. diametro, dein confluentibus, interdum ad margines foliorum irregularibus, supra griscoribus; caespitulis amphigenis, saepe epiphyllis, dispersis, minutissime punctiformibus; stromatis olivaceo-brunneis, subcircularibus, 20–50  $\mu$  diametro; conidiophoris laxe fasciculatis, raro ad bases dense compressis, simplicibus, raro ramulosis, non vel indistincte 1–2–septatis, undulatis vel paulum curvatis, non geniculatis, ad apices conicis,  $12–50\times3-4\,\mu$ ; conidiis cylindraceo-obclavatis, fere curvatis, pallide olivaceis vel subhyalinis, indistincte multiseptatis, ad bases subtruncatis, apice obtusis rotundatis,  $30–75\times2-4\,\mu$ .

Hab. on Corylopsis pauciflora Sieb. et Zucc. (Hyuga-mizuki).

Pref. Kagoshima: Botanical Garden, Faculty of Agriculture, Kagoshima University, Oct. 26. 1949, S. Katsuki.

8) Cercospora Dianthi Muller et Chupp, Arch. Inst. Biol. Veget. Rio Janeiro 3:93, (1936).

Hab. on Dianthus superbus L. (Nadeshiko).

Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Sept. 18, 1950, K. Togashi.

#### 9) Cercospora Ehretiae sp. nov. (Fig. 3)

Maculis amphigenis, sparsis, rotundatis vel irregularibus, superne fusco-brunneis et fusco-brunneo cinctis, interne griseo-arescentibus, inferne griseo-brunneis, plerumque 5–8 mm., usque 15 mm. diametro, dein coalescentibus, magnam folii partem obtegentibus; caespitulis amphigenis, paucis in quanque macula; stromatis subglobosis, atro-brunneis, circa  $100~\mu$  crassis; conidiophoris simplicibus, irregulariter cylindraceis, brevis, 7–10 fasciculatis, non geniculatis, 1–3–septatis,  $14-25\times2.5-3.0~\mu$ ; conidiis cylindraceo-obelavatis, leniter curvatis vel rectis, ad bases rotundatis vel subtruncatis, apice subacutis, 1–3–septatis, dilute olivaceis, plerumque  $38-56~\mu$ , usque  $70~\mu$  longis,  $2.5~\mu$  latis.

Hab. on Ehretia thyrsiflora Nakai (Chishanoki).

Pref. Fukuoka: Hojo, Takawa, Nov. 16, 1949, S. Katsuki-Type!

10) Cercospora Euptelaeae sp. nov. (Fig. 4)

Maculis amphigenis, primum sparsis, distinctis, nervuli limitatis, angularibus, 1-4 mm. diametro, superne rubro-brunneis vel fusco-brunneis, inferne grisco-brunneis, dein confluentibus, magnam folii partem occupantibus; caespitulis plerumque hypophyllis, interdum amphigenis; conidiophoris semi-fasculatis in stromatibus, dilute olivaceo-brunneis, non vel 1-3-septatis,  $12-25\,\mu$ , usque  $50\,\mu$  longis,  $2.5-4.0\,\mu$  latis; conidiis cylindraceo-obelavatis vel elongato-fusformibus, fere curvatis vel rectis, ad apices acutis, ad bases longe obconicis, ad septa non vel saepe constrictis, 2-5-septatis, plerumque  $30-50\,\mu$ , raro usque  $62\,\mu$  longis,  $2.5-4.0\,\mu$  latis.

Hab. on Euptelaea polyandra Sieb. et Zucc. (Fusazakura).

Pref. Kagoshima: Kagoshima, Oct. 26, 1949, S. Katsuki-Type!

11) Cercospora fuligena Roldan, Philipp. Jour. Sci. 66:8, (1938).

Cercospora diffusa (non Ellis et Everhart) Katsuki, Bul. Aric. Improv. Sect., Fukuoka Pref. 1:10, (1949). Yamada, S., Ann. Phytopa. Soc. Jap. 15:40, (1950); Shin-engei 3:33-34, (1950).

Hab. on Solanum Lycopersicum L. (Tomato).

Pref. Fukuoka: Fukuoka, Oct. 31, 1949, S. Katsuki. Pref. Kanagawa: Sagamihara-machi, Aug. 24, 1950, T. Saito.

12) Cercospora Hamamelidis (Peck) Ell. et Ev., in litt.

Ramularia Hamamelidis Peck, N. Y. State Mus. Nat. Hist. 35 (1881):141 (1884). Overholts, Myc. 30:25, (1938).

Hab. on Hamamelis japonica Sieb. et Zucc. (Mansaku).

Pref. Kagoshima: Kagoshima, Oct. 26, 1949, S. Katsuki.

13. Cercospora Hederae sp. nov. (Fig. 5)

Maculis indefinitis, supra nonnihil pallide flavidis, infra mycelio nigrescento vel fusco-olivaceo laxe tectis; caespitulis hypophyllis, effusis; conidiophoris non fasciculatis, singlaria in hyphis repentibus ortis, raro ramosis, pallide olivaceo-brunneis, ad apices parum attenuatis, raro geniculatis, semel flexuosis, 0.5-septatis,  $20-100\times2.0-4.0\,\mu$ ; conidiis tenuis, hyalinis vel pallide olivaceis, cylindraceis vel versus apices attenuatis, rectis vel leniter curvatis, ad bases obconicis truncatisque, apice conicis, 1-5-septatis,  $15-50\times2.0-3.5\,\mu$ .

Hab. on Hedera rhombea Sieb. et Zucc. (Kizuta).

Pref. Fukuoka: Kasuya, May 1, 1949, S. Katsuki—Type! Pref. Kumamoto: Hinaku, Dec. 10, 1949, S. Katsuki. Pref. Saitama: Niwa-mura, Apr. 28, 1950, Y. Urasawa.

14. Cercospora Houttuyniae sp. nov. (Fig. 6)

Maculis amphigenis, irregulariter orbicularibus, 2-10 mm. diametro, immar-

ginatis, interdum zonatis et nigro-limitatis, demum confluentibus, usque 25 mm. longis, interdum totum folium occupantibus, supra primum violaceis, infra pallide brunneis, dein atro-brunneis, denique centra arescendo-griseolibus; caespitulis hypophyllis, dense fasciculatis, diversis; stromatis atro-rufobrunneis; conidiophoris dilute olivaceo-brunneis, ad apices leniter attenuatis, ad bases pauce septutis, non-ramosis, curvatis et flexuosis, leniter geniculatis, tortuosis,  $10.62 \times 3.0$ – $5.0~\mu$ ; onidiis elongato-obclavatis, olivaceo-brunneis, rectis vel aliquantum curvatis, 3–9–septatis, ad apices subacutis, ad bases obconicis, truncatisque, 30– $80 \times 3.0$ – $4.5~\mu$ .

Hab. on Houttuynia cordata Thunb. (Dokudami).

Pref. Kyoto: Mt. Hiei, Aug. 25, 1924, K. Matsuo. Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Aug. 16, 1949, Sept. 18, 1950, K. Togashi—Type!

#### 15. Cercospora Kadsurae sp. nov. (Fig. 7)

Maculis amphigenis, circularibus vel subcircularibus, dilute brunneis, dein obscure rufo-brunneis, marginis lineare elevatis; caespitulis amphigenis, sed praecipue hypophyllis; stromatis dispersis, punctiformibus, globosis, nigro-brunneis, 25–40  $\mu$  diametro, fasciculis cum 5–7 conidiophoris divaricatis; conidiophoris non-ramosis, rectis vel undulatis, non-geniculatis, pallide olivaceo-brunneis, continuis vel indistincte 1–2-septatis, apice conicis,  $10-30\times2.0-3.5\,\mu$ , usque  $60\,\mu$  longis,  $3.7\,\mu$  latis; conidiis cylindraceis vel cylindro-obclavatis, curvatis vel rectis, pallide olivaceis, indistincte 2-4-septatis, ad bases globoso-subtruncatis, apice conicis vel subacutis,  $30-70\times2.0-3.5\,\mu$ , usque  $87\,\mu$  longis,  $3.7\,\mu$  latis.

Hab. on Kadsura japonica Dunal. (Sane-Kazura).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 19, 1949, S. Katsuki-Type!

Dr. Chupp says that the present fungus is only true Cercospora on Magnoliaceae.

16. Cercospora malayensis Stevens et Solheim, Myc. 23:394, 1931.

Hab. on Hibiscus tiliaceus L. (Oh-hamabo).

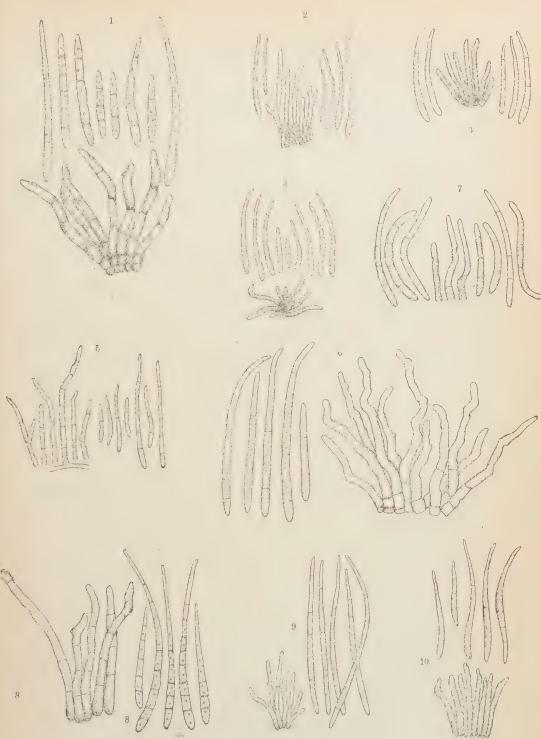
Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 14, 1949, S. Katsuki.

#### 17. Cercospora Pellioniae sp. nov. (Fig. 8)

Maculis amphigenis, circularibus vel subcircularibus, 2-8 mm. diametoro, primo pallide atro-brunneis, dein interne albido arescentibus, margine nonnihil elevatis, confluentibus; caecipitulis amphigenis, plerique epiphyllis; stromatis paucilocularibus, brunneis; conidiophoris 5-6 fasciculatis, divergentibus, non ramosis, pallide olivaceobrunneis, apice subtruncatis et hyalinis, strictis vel rachiformibus, pauce geniculatis, plerumque 3-5-septatis,  $15-85\times4.0-6.0\,\mu$ , usque  $105\,\mu$  longis; conidiis subhyalinis, cylindraceis vel elongato-obclavatis, ad bases truncatis, apice attenuatis et subobtusis, strictis vel leniter curvatis, 4-10-septatis, guttulatis,  $40-85\times3.0-5.0\,\mu$ , usque  $130\,\mu$  longis et  $6\,\mu$  latis.

Hab. on Pellinia scabra Benth. (Kimizu).

Pref. Saga: Mt. Tara, May 22, 1942, S. Katsuki-Type!



1. Cercospora Adenostemmae Togashi et Katsuki. 2. Cercospora Corylopsidis Togashi et Katsuki. 3. Cercospora Ehretiae Togashi et Katsuki. 4. Cercospora Euptelaeae Togashi et Katsuki. 5. Cercospora Hederae Togashi et Katsuki. 6. Cercospora Houttuyniae Togashi et Katsuki. 7. Cercospora Kadsurae Togashi et Katsuki. 8. Cercospora Pellioniae Togashi et Katsuki. 9. Cercospora Perillulae Togashi et Katsuki. 10. Cercospora Picrasmae Togashi et Katsuki.

#### 18. Cercospora Perillulae sp. nov. (Fig. 9)

Maculis sparsis, minutis, suborbicularibus, superne griseo-brunneis, inferne pallide brunneis, 2–4 mm. diametro, demum confluentibus; caespitulis hypophyllis, laxe dispersis, inconspicuis; conidiophoris e stromatibus oriundis, simplicibus vel ramulosis, dilute griseo-brunneis, apices versus pallidioribus, non vel pauce septatis, laxe fasciculatis,  $20-30~\mu$ , usque  $68~\mu$  longis,  $2.5-4.0~\mu$  latis; conidiis elongato-cylindraceis vel longe cylindraceo-obclavatis, rectis vel parum curvatis, ad bases attenuato-truncatis, dilute griseo-brunneis, 5-8-septatis,  $67-95\times 2.5-3.0~\mu$ , ad septa non constrictis.

Hab. on Perillula reptans Maxim. (Suzu-koju).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 16, 1949, S. Katsuki-Type!

19. Cercospora Picrasmae sp. nov. (Fig. 10)

Maculis in foliis amphigenis, subcircularibus, dein irregularibus vel angularibus, plerumque nervuli foliorum limitatis, sparsis vel gregaris, 0.5-4.0 mm. latis, supra margine atro-brunneis, infra griseo-brunneis, denique centro albicantibus; caespitulis hypophyllis; stromatis globosis, brunneis,  $15-50\,\mu$  diametro; conidiophoris dense fasciculatis, ascendentibus, non geniculatis, simplicibus, brevisculis,  $15-43\times3.4-5.0\,\mu$ , plerumque  $39\times3.6\,\mu$ , non-septatis, dilute olivaceo-brunneis; conidiis obclavato-fusiformibus vel cylindraceo-obclavatis, rectis vel leniter curvatis, ad bases obconicotruncatis, apice subobtusis, pallide olivaceis,  $25-85\times3.0-5.5\,\mu$ , plerumque  $53\times3.8\,\mu$ .

Hab. on Picrasma ailanthoides Planch. (Nigaki).

Hokkaido: Mt. Maruyama near Sapporo, Oct. 30, 1920, K. Togashi. Pref. Oita: Yabakei, Sept. 3, 1941, S. Katsuki—Type!

20. Cercospora Selini-gmelini (Sacc. et Scalia) Chupp comb. nov.

Cercospora Apii Seleni-gmelini Sacc. et Scalia, Harriman, Alaska Exp. Crypt.: 16, (1904).

Hab. on Oenanthe stronifera DC. (Seri).

Pref. Fukuoka: Kasuya, May 14, 1950, S. Katsuki.

21. Cercospora sphaeriaeformis Cooke, Grevillea 6:140, (1878). Tai, Sci. Rep. Nat. Tsing Hua Univ. Ser. B, 2:435, (1937).

Cercospora Ulmi Syd., Ann. Myc. 27:433, (1929).

Hab. on Ulmus parvifolia Jacq. (Aki-nire).

Pref. Kagoshima: Kagoshima, Oct. 26, 1949, S. Katsuki.

22. Cercospora subsessilis H. et P. Syd., Ann. Myc. 11:329, (1913). Tai, Sci. Rep. Nat. Tsing Hua Univ. Ser. B, 2:435, (1937).

Cercoseptoria domingensis Ciferri. Ann. Myc. 36:231, (1938).

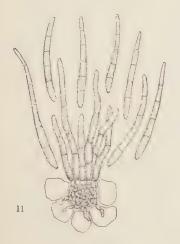
Hab. on Melia Azedarch L. var. japonica Mak. (Sendan).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 15, 1949, S. Katsuki.

23. Cercospora taiwanensis Matsumoto et Yamamoto Jour. Soc. Trop. Agr. Formosa, 6:584, (1934).

Hab. on Arthraxon hispidus Mak. (Kobuna-gusa).

Pref. Kanagawa: Gontazaka, Yokohama, Sept. 18, 1950, K. Togashi.





11. Cercospora yakushimensis Togashi et Katsuki 12. Cercospora Zingiberi Togashi et Katsuki

24. Cercospora Trichosanthis McRae, Ann. de Cryptogami Exotique, 2:270, (1929).

Hab. on *Trichosanthes japonica* Regel (Kikarasuuri).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 13, 1949, S. Katsuki.

25. Cercospora yakushimensis sp. nov. (Fig. 11)

Maculis amphigenis, primum sparsis, suborbiculari-angulosis vel angularibus, irregularibus, plerumque nervuli foliorum limitatis, 2-4 mm. diametro, supra parum elevatis, pallide brunneis vel atrobrunneis, dein centro arescendi albicantibus; caespitulis amphigenis, autem saepe hypophyllis, minutissime puntiformibus; stromatis, fusco-brunneis,  $17-23~\mu$  diametro; conidiophoris dense fasciculatis, simplicibus, rectis vel leniter flexuosis, non-geniculatis, 2-4-septatis, brunneis,  $25-75\times2.5-4.0~\mu$ ; conidiis elongato-obclavatis vel obclavato-cylindraceis, leniter curvatis, vel rectis, ad bases obconicis, truncatis, apice subacutis, subhyalinis, indistincte 4-5-septatis,  $50-64\times3.0$ 

Hab. on *Hydrangea Kawagoena* Koiz. (Tokaraajisai).

Pref. Kagoshima: Yaku Island, Oct. 19—Type!, Oct. 23, 1949, S. Katsuki.

The present fungus differs from *Cercospora Hydrangeae* Ell. et Ev. (Atkinson, Elisha Mitchell Sci. Soc. Jour. 8:20, 1892, Jour. Myc. 8:71, 1902) and *C. Hydrangeana* Tharp (Myc. 9:10, 1917; Yamamoto, Transact. Nat. Hist. Soc. Formosa, 26:281, 1938; Sawada, Bul. Agr. Exp. Sta. 85:108, 1943) in having non-geniculate conidiophores. The fungus is also

distinct from *C. obtegens* Syd. (Ann. Myc. 17:171, 1909) and *C. arborescentis* Tehon et Daniels (Myc. 17:246, 1925) in forming no zonate large lesion and with mostly hypophyllous conidiophores.

26. Cercospora Zingiberi sp. nov. (Fig. 12)

Maculis amphigenis, distinctis, primum pallide brunneis, dein fusco-brunneis vel

brunneo-griseolibus, parallelo-venuli limitatis, linearibus, 2–4 mm. longis, 0.5–1.5 mm. latis, confluentibus, usque 20 mm. longis; caespitulis plerumque hypophyllis, confertim dispersis, conspicuis; conidiophoris simplicibus, cylindraceis, 6–10 fasciculatis, fuligeneo-brunneis, apices versus pallidioribus, breviter denticulatis, ad septa non constrictis,  $52-100\times4.0-5.0\,\mu$ ; conidiis rectis vel parum curvatis, obclavato-linearibus, ad apices acutis, ad bases attenuatis obconicis truncatisque, ad septa non constrictis, granulosis, indistincte 3–5-septatis, dilutissime coloratis,  $26-90\times3.5-5.0\,\mu$ .

Hab. on Zingiber Mioga Rosc. (Myoga).

Pref. Fukuoka: Soeda, Takawa, Sept. 15, 1949—Type!, Mt. Hikosan, Oct. 7, 1950, S. Katsuki. Tokyo: Toyoda, Minamitama-gun, Sept. 23, 1950, E. Kurosawa.

#### Acknowledgment

Grateful acknowledgment is made to Prof. Dr. Charles Chupp, Cornell University, New York, who examined the most of the materials used in this paper, and suggested helpfully very many in identifying the species.

#### 抄 錄

コウキクサを使っての形態展開に関する一考察。 Wangermann, E. & Ashby, E.: A Discussion on morphogenesis: Morphogenesis in *Lemna minor* [Proceedings of the Linnean Society of London 162, pt. 1. p. 10 (1950)]. Studies in the morphogenesis of leaves VII-pt 1, Effects of light intensity and temperature on the cycle of ageing and rejuvention in the begetative life hislory of *Lenna minor*. New Phytol. 50-2, 18 6-276 (1951).

植物の組織が生理的に"年をとること"とその逆の現象である"若返り"に関する問題は形態学に も発生学にも関係してくる興味ある生物学的な一課題であるが, 生理的に "年をとること" 或はそのよう な年齢を測る確実な簡便法がまだ見つかつていないために研究を進めていくことが困難である。勿論, 生理 的年齢(physiological age)というのは時間的な年齢(time-age)とは別である。 生理的年齢を具体的に 把握出來る何か他の尺度 例へば生長過程に見られる形態的な蓄散候で ―そして更に生長素のよらな物質 で――置き換えて表現したいしいらのが 著者等の 意図である。 個体発生途上の葉の形態を整化させる原因 を理解することは組織が"年をとること"の原因をきわめることに帰着する。 芽生えから成葉迄の生長の 展開過程に伴つて順欠に茎の上に現れる葉の間に見られる首尾 一 貫した形態的な差異は確に 生理的年齢に 関係があると考へられる。多くの場合に、それを量的に表現することも出來るが、葉形の変化は日長時間の ような成熟に影響のある環境要因にも、或は上部の葉は下部の葉より根からの距離が遠いという栄養関係な ど、つまり、頂端の分裂組織の年齢以外の原因にも誤聯をもつと考へたければたらたい。そこで著者等は上 記のような可変条件の粉れ込む心配の出來るだけ少い植物を実験材料に使ふ必要を感じ,非常に簡単な特殊 な生長様式をもつたものではあるがコウキクサ Lemna minor をえらんだ。Lemna が実験上特に便利な点 は閉鎖的にコントロールされる条件の下で、即一定の条件の隔室の中で性質のわかつた培養液で生長させ ることが出來ることである。コウキクサは frond に一対の分製組織を持つていて左右両側に次々に daughter frond を生ずる。その生長様式を観察した結果として次の事実が認められた。① frond の壽命には一 定の限界がある。② mother frond がその生涯の間に生ずる daughter frond の総数はほぼ一定している。 ③ 同じ分裂組織から生じ同一条件の下で生長する daughter frond の間で比較して,先に生ずるものより も後に生ずるものの方が常に小さい。 大きさの違いは細胞の数によるもので 各細胞 の大きさによるもので

(33 頂え続く)

# ジャガイモの細胞学的研究 I. 二倍種田山の体細胞染色体とその減数分裂に おける染色体行動

#### 沢 村 正 五\*

Shogo SAWAMURA: Cytological studies on several species of potato I. The somatic chromosome and meiotic chromosome behaviour in diploid species "Tayama"

ジャガイモは遺伝学上及び育価学上多くの未解決な問題を残している。その細胞学的分野の研究において本邦では幅目(1927)及び須藤(1927)の報告があるほか、最近奥野はこの方面の研究に成果をあけ、田山種が n=12 の二倍柱であることを明らかにした(未発表)。また添田も 1947 年に田山種を觀察して同様な結果を得ている。

筆者は 1948 年以来ジャガイモの野生 種及び栽培圏の花粉母細胞減数分裂の観察を行つてきた。最近田山種の体細胞染色体の長型分析の結果、減数分裂における異常性が気温による影響以外にその雑種性と一連の関係があることを示唆する結果を得た。本文はこれらの点を報告するものである。

#### 材料及び方法

二倍種田山は外交官田山氏が南米よりもちかえり、農林省北海道島松馬鈴薯試験地において田山種として栽培保存されているものである。その系統は不明であるが、野生種とされ、花色は白、壺色は葉とともに浅緑色で塊室肉質は黄白色である。外側は四倍住栽培種に比べ壺葉ともに細小で弱々しく、北海道でも夏季高量の基幌附近では草葉のみ繁茂し、塊莖の形成をみないか、できても非常に小さい。野生種は一般に花期が長いのが特徴であるが、田山種も他の野生種と同様で9月に入つても開花がみられる。本実験に用いた材料は1949年島松馬鈴薯試験地より塊壺でもらいうけ、北大理学部植物学教室の実験制場で鉢植えにしたものである。

根端細胞はナワシン液で固定し、パラフィン塊とし、1950年字都宮大学生物学教室で切片 とし、ハイデンハイン鉄へマトキシリンで染色して觀察した。

花粉母細胞の材料はすべて同試験地品種保存区圃場より採集し、ただちにカルノアで固定、 醋酸カーミンなすりつけ法で処理した。

一方現地で直接錯酸カーミンなすりつけ法で標本を作り観察した。なお花粉母細胞の固定は 1949 年7月12日9時と 1950 年7月18日及び23日の9時と10時の3回にわけて行つた。12日の材料では分裂は正常であつたが、18日及び23日のものは異常であつた。

<sup>\*</sup> 字都宮大学生物学教室

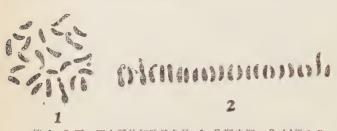
この研究は北海道大学理学部添田徹助教授のもとではじめられ、その後字都宮大学奥野俊教授のもとで さらに研究をつづけ、1951 年文部省內地留学研究員として東京大学理学部植物学教室において本稿をまと めたものである。添田徹助教授は不幸病魔のため 1949 年 7 月逝去された。

謹んで先生の靈にこの小稿を捧げる。

#### 觀察結果

#### A. 体細胞染色体

根端細胞で明らかに 24 ケの染色体を数えることができた。第 2 図は 22 の中期核板の染色体の観察から相同と思われるものをならべたものである。この図に明らかであるように 12 組の染色体中, 2 組にそれぞれ附隨体があることがわかつた。



第 1~2 図 田山種体細胞染色体, 1. 分裂中期。 2. 同像より 形態的相同のものを配列。 2 対の附隨体染色体と最後の 1 対の異 型染色体 ca.×2,500 この附随体染色体の存在はジャガイモにおいては初めて報告されたものである。なおこの2組の附随体染色体中,1対は中央附近にくびれがあり,附随体の連結綵は長いが,他の1対はくびれのあることは前と同様であるが,連結絲が非常に短い。他の9対の染色体は大いさ及び形

態上から区別することは困難である。 しかし残りの 1 対 (第 2 図最後に示せるもの) の染色体は大いさに明らかな相異がみられた。この 1 対の異型染色体は各分裂像及び多くの中期核板の詳細な観察により明らかにされたものである。

このことは田山種のゲノム分析に重要な示唆を与えるものと思われる。即ち、この二倍種 田山は 1 対の染色体において著るしい大小の形態的相異を示すが、他の 11 対の染色体におい

ては殆んど相等しい形態を示すものと考えられる。この推論は花粉母細胞の減数分裂における染色体の行動により一層支持された。

さきに Müntzing (1933) 及び奥野 (1950) はジャガイモのゲノム構成について論及し, 6 が基本数で, 今日みられるジャガイモの多く は異質倍数体であろうと結論している。

この二倍体田山種の核型分析の結果は、これら研究者の見解に有力なる支持を与えるものであつて、ジャガイモの倍数性並びにその原種に対し重要な意義を有するものと考える。

#### B. 減数分裂

1. 正常分裂 1949 年 7 月 12 日 (気温最高 27.7°C. 最低 16.6°C.) 採集の材料ではその 花粉 母細胞の減数分裂は概ね正常に行われ、その移動期では末端キアズマで対合している 12 ケの二便準値はがみよわま (第3世)

第3~7 図 正常減数分裂。3. 移動期。4. 第一分裂中期極面觀。4 ケを內に,8 ケを外周に配列する12 ケの二価染色体。5. 顯微鏡写真,第一分裂中期,外周に9 ケ內に3 ケの二価染色体の配列。6. 第二分裂中期。7. 正常四分子。346. ca.×1,600. 7.×950.

いる 12 ケの二価染色体がみられた (第3図)。第一分製中期では 12 ケの二価染色体が明らかに 数えられ典型的な配列を示す (第4図及び第5図顕微鏡写真)。また第一中期及び第二中期にお いて二次接合もしばしば観察された。 第二中期以後の分裂も正常に行われ、四分子には多少の 大小はみられたが、大部分は正常なものであつた。

2. 異常分裂 1950 年 7 月 18 日 (気温最高 30.1°C., 最低 20.4°C.) 及び 23 日 (気温最高 31.0°C., 最低 20.1°C.) の観察材料では正常分裂は極めて少なかつた。両日の材料で観察された共通な異常は染色体の分離時期の不一致と遅滞で第一中期で二価染色体の若干が常に先行的に分離し、或いは核板中心より遅滯の染色体の分離がみられる(第 8~14 四)。このような染色体の分離及び遅滞の異常は第一後期及び第二中期においても観察された(第 15~18四)。

第 先行し でか離 はなお にとど このよ

第 13 図は 1 組の染色体は既に分離 先行して核板から離れ、5 組はこれについ で分離して核板附近にあるが、残りの 6 組 はなお対合したまま二価染色体として核板 にとどまつている像を示す。何れにしても このような現象がみられることは二価染色

第 8~22 図 異常減数分裂 8~10 第 -分裂申期極面において二価性色体の先行的分離 11~14 同側面 觀 1 対の染色体の先行分離特に 13 ではキアズマ形成の弱いことを示す。 14 1 ケの核板外遅滞染色体の分離。 15 第 -分裂後期。16 第二分裂中期,両極に 18 ケの染色体を数う。 二分染色体 12 ケ中のそれぞれ 3 ケが先行的に分離四分染色体となるもの。17~18 若于生色体の第一後期の遅滞。 19. 染色体の鎖狀融合。 20. 染色体橋。 21 第一後期の染色体橋類似の現象。 22. 復旧核。 ca.×2,500

第 23~29 図 異常四分子及び花粉粒。 23-25. 細胞膜不形成の各四分子, 細胞質はくびれている。 26. 肥厚異常二分子。 27. 2 核性花粉粒, 細胞膜の不形成に基ずく。 28. 巨人花粉粒。 29. 花粉粒の大きさ a ーb 以内は稔性花粉粒。 c 不稔性花粉粒。 ca.×950

体のキアズマ形成が弱く、且つその程度が各染色体によつて異ることを示すものと思われる。即 ち、このことは二倍種田山は非常に親和性は强いが、二つのゲノムから構成されているという ことを示唆するものである。

減数分裂において 1 組の染色体の分離先行は体細胞染色体の 1 組の異型染色体の存在と 対照して非常に興味あることであり、この 1 組の先行分離は 18 日の材料において特に著るし かつた。なお以上の分裂異常の外、染色体の鎖状融合、染色体橋(第19,20 国)、復旧核の形成 及びその過程のもの(第 21,22 目)、等も観察された。 また核と細胞分裂の不均衡による細胞 膜不形成の四分子、及び分裂異常のため生ずる一分子、二等子などがみられた。

この一分子,二分子の巨大四分子は23日の材料に多かつた。この他同日の花粉粒觀察材料 中に異常に肥大成長した二分子(第26国)や,二核を有する花粉粒(第27図)もみられた。

以上簡単に減数分裂の異常について述べたが、18 日採集の材料と 23 日採集のものでは異常分裂の種類やその他の異常、また頻度に違いがみられた。

界常の種類	分裂の非 同 時 性	準色体の 足 滞		後田核	細 胞 膜 不 形成四分子	異常四 分 予	異常花 粉 粒	小型花粉粒 混在の程度
1950 年 7月18日	-111	+		_	111	+	_	Н
7月23日	++	+	+	11	1111	+	+	1111

第1表 固定目の相異に伴い P.M.C. に現れる分裂異常の狀態

このような相違は環境要因特に気温の影響によるものと考えられるので、本実験に用いた 材料の採集固定日前後 13 日間の最高及び最低温度を第 2 表に示した。

7月	П	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
1949 年		24.2°C.	27.7	31.7	26.8	29.5	30.4	31.8	30.9	24.6	26.2	26.6	30.6	27.4
1949 4		15.0°C.	16.6	16.8	18.3	18.5	17.5	18.0	18.6	19.6	19.5	19.3	20.3	16.4
1950 年	最高	27.7°C.	25.9	26.2	27.9	24.8	25.6	28.7	30.1	30.2	27.9	29.0	32.1	31.0
		17.3°C.	14.1	17.7	12.3	19.3	16.9	19.6	20.4	20 2	20.5	21.0	19.5	20.1

第2表 材料固定目前後の島松地方における気温の変化

#### 論議

ジャガイモの体細胞染色体についてはまでに Rybin (1930), Müntzing (1933), Lamm (1938), 奥野 (1950) 及びその他によつて報告され、僅数性が明らかにされているが、その核型については報告されていない。 筆者はジャガイモの核型分析を行い、前述せる如く 2 対の附随体染色体を明らかにすることができた。 この附随体染色体が今までに報告されなかつたのはジャガイモの染色体は小さく且つ観察に相当困難な材料であること及びこれまで研究の重点が核型分析になかつたことなどによるものと考えられる。 本研究でその核型をある程度明らかにできたのはナワシン液で固定するに当り、空温以下の 13°C.—14°C. の中に 12 時間保つたことが好結果をもたらしたものと考える。

この2 対の附随体染色体の発見は今後他の二倍体及び三倍体,四倍体等の核型分析並びに

<sup>\* -5%</sup>以下, +10%~15%, #20%~30%, #40%~50%, #70%~90%

<sup>\*</sup> 最高溫度 14 時, 最低溫度 9 時觀測

ジャガイモのゲノム分析に対し重要な日安となるものと思う。

さらに本材料で 1 対の異型染色体の存在が明らかにされたことは田山種は異質二倍体であることを示唆するものである。Müntzing (1933) は二倍体及び三倍体の花粉母細胞減数分裂における二次接合の研究から,また奥野 (1950) も二次接合及び維種の染色体の特殊行動の觀察からジャガイモの染色体基数は n=6 できると推論している。本研究でも彼等の説の妥当性を支持する結果が得られた。

高温処理によつて人為的に花粉母細胞の減数分望の異常を誘起した例は種々の植物で報告されているが、ジャガイモにおいても須藤(1927)は四倍種を材料として高温処理(25°C.—30°C.)で減数分裂の異常が起り、その結果不稔性の花粉の増大することを観察し、低温(15°C.—20°C.)で正常な減数分裂が行われ稔性花粉のできることを報告した。このような実験から須藤は野外における気温の上昇がジャガイモの減数分裂を乱し、そのため不稔性花粉ができると結論した。また福田(1927)は50 有余のジャガイモ四倍種の花粉母細胞減数分裂の觀察よりその異常は雑種性によるものと考えた。

Kostoff (1933) はバイラスによこ花粉不稔や核分裂の異常性についての研究から彼等の見解は温度とバイラスの結合に基すく結果のものでなかつたかと指摘している。

中村(1932, 35, 36)はホウセンクワの減数分裂の異常が季節的に日々の気温の影響によるものであることを報告している。本研究の染色体の先行的分裂及び遅滯等の異常はホウセンクワにみられた場合と非常に類型的であることは二倍種田山の花粉母細胞減数分裂が日々の気温即ち、高温の影響をうけやすいことを示すものである。

Sax (1937) はムラサキツユクサを低温処理と高温処理をし、さらにこれを温室に移してその花粉母細胞を觀察したところ、核は正常に分裂するが細胞分裂がこれに伴わぬため一方だけ核を有する二分子の細胞が誘起されたことを報告している。この現象は異常温度によつて核と細胞の分裂が不均衡になるためであるとしている。田山種における一分子及び二分子の発生、大小の花粉粒及びその他の異常四分子も日々の気温の高低による減数分裂の異常及び核と細胞分裂の不平衡に基因するものと考えられる。

つぎに減数分裂における異常現象として特異な 1 対の染色体の先行的分裂があけられるが、この特殊染色体は体細胞染色体の視察において明らかにされた 1 対の異型染色体であると推定する。Müntzing (1933) が既に報告しているようにジャガイモは一般にキアズマ形成が弱いが、この異型染色体にはキアズマ形成がみられないか、みられても他の 11 対に比し、その結合が弱いものと考える。この弱く結合した異型染色体はさらに環境要因特に温度等の影響により容易に分離するものと思われる。

ジャガイモ二倍体田山種にみられた減数分裂の異常は內因的には継種性であること,外因的には高気温の影響をうけることに基因するものと思われる。従つて高温のような外因の影響をうけぬ場合は、減数分裂は正常に行われ稔性ある型偶子ができるもので、雑種であるが非常に高度の親和性のある染色体組から構成されたものと考えられる。

各種ジャガイモの基本核型、ゲノム構成については今後さらに研究を続ける。

終りに当り、種々の助言と貴重な文献を貸与された奥野俊博士及び東京大学教授和田文吾博士に深甚の謝意を表する。また材料の採集に便宜をはかられた北海道島松馬鈴薯試験地技官 永田利男、戸田節郎両氏の好意に対して深謝する。

#### 摘 要

本研究においてはジャガイモニ倍信用由種の体細胞染色体と減数分裂における染色体の行動について調べた。

24 ケの体細胞染色体中, 2 対の附隨体染色体と, 1 対の形態的異原の染色体の存在すること を明らかにした。

日本の高気温の影響により、減数分裂における染色体の異常行動や花粉粒形成などの異常がみられたが、特に 1 対の染色体の生行的分離の行動は体細胞における 1 対の異型染色体との関連性が考えられ、用山種の雑種性であることを示唆する。

しかし適温においては田山種は二倍体として多くの稔性ある花粉粒を生ずるので、その雑種性は高度の親和性をもつゲノムより構成されているが、高温によつてその親和性は容易に乱されるものと推測される。

#### Résumé

In the present study the idiogram in root-tips and the meiotic chromosome behaviour of pollen mother cells in the diploid potato species "Tayama" were investigated. The somatic chromosome number of this species is 24; among them 2 pairs of large chromosome have one satellite respectively; the members of one pair of chromosomes are unequal in size; and the other 9 pairs are small and nearly of the same size.

Irregularities of chromosome behaviour in meiosis and in pollen grain formation have been described. Special attention was given to the preceding of one pair of chromosomes and, also to the appearance of both normal and abortive pollen grains corresponding to changes of temperature during sporogenesis. As a result of these investigations, the irregularity of meiosis and the formation of abortive pollen grains are ascribed to the hybrid nature of this species demonstrated in the idiogram and externally to high air temperature.

The hypothetical two chromosome sets seem to have high affinity but it is, however, easily disturbed by daily high air temperature during sporogenesis as ascertained in the meiosis occurring in the month of July.

#### 文 献

Fukuda, Y. 1927, Cytological studies on the development of the pollen grain in different races of Solanum tuberosum L. with special reference to sterility. Bot. Mag. Tokyo, 41: 459-474. Kostoff, D. 1933, A contribution to the sterility and irregularities in the meiotic processes caused by virus diseases, Genetica. 15:103-114. Lama, R. 1938, Note on a haploid potatohybrid. Hereditas. 24: 391-396. Müntzing. A. 1933, Studies on meiosis in diploid and triploid Solanum tuberosum L., Hereditas. 17:223-245. Nakamura, M. 1932, Daily changes in the occurrence of the imperfect pollen grains in Impatiens balsamina L, Jour. Soc. Trop. Agr. 4:149-160.—1935a, 人為的高溫の影響に依る風仙花の花粉母網胞核分裂異常に就て 遺雜 11:118-123.—1935b, The effect of seasonal high air

temperature on the pollen mother cells of Impatiens balsamina Linn., Proc. Jap. Assn. Adv. Sci. 10:474-478.—1936, Experimental and cytological studies on the unstability of the meiotic division of the pollen mother cells of Impatiens balsamina Linn. caused by the effect of high air temperature. Mem. Facult. Sci. Agr. Taihoku Imp. Univ. 17:121-183. 奥野俊 1950. 馬鈴薯の染色体基数について 遺雑 25:244.—1951, Cytological studies on potatoes, with some remarks on its genetical experiments. Part I. Jap. Jour. Genet. 26:79-103, Rybin, W. A. 1930, Karyologische Untersuchungen an einigen wilden und einheimischen kultivierten Kartoffeln Amerikas. Zeitschr. f. ind. Abst. ·u. Vererbgsl. 53:313-354. Stow, I. 1927, A cytological study on pollen sterility in Solanum L., Jap. Jour. Bot. 3:217-238.Sax, K. 1937, Effect of variations in temperature on nuclear and cell division in Tradescantia, Amer. Jour. Bot. 24:218-225. 佐藤重平 1942, 核型及び基本核型分析とその限界, 植及動 10:217-222.

#### (26 頁より続く)

はない。④ 衣々に生ずる daughter frond の壽命も,その大きさが減ずると共にだんだん短くなる。⑤以 上のことが行はれるにも拘らず真然快響で群落全体として frond の平均の大きさがほぼ恒常狀態を保つて いるのは mother frond の生涯の未期に生ずる界常に小形の daughter frond が自身より大きい frond を 生ずるからである。これは"若返り"である。frond の分裂組織がふるくなるにつれて見られる首尾一貫 した変化を説明するため次のような可能性を仮定して一つづつ吟味した。 ① 一対しかない mother frond の分製組織が daughter frond の原基で、だんだん満員にたつてくるので後の daughter frond の原基度と 制約をうけて小形になり従つてそれから生ずる frond も小さくなる。② daughter frond の大きさを左右 するような生長促進物質が mother frond から出されるが、この物質が年齢と共に減る。③ 遊に mother frond が出す成長抑制物質が年齢と共に増える。(同じ物質で農度の違いによって促進と抑制に作用すると したら? 杉錄者) ① の可能性は解剖学的にたしかめて否定された。② か ③ かを決めるために生長のい ろいるの段階で daughter frond を mother frond から切り離してみたところ, いづれの段階のものも全 然切らずに放置した daughter frond が到達する大きさには塗しなかつた。但し切り離された frond が結 局に於て示す生長総量(以後の代も含めて)は一定であつた。又,切り離された frond がいかに小さくて も,光合成と無機発養の点では mother frond に依存しないことは籐かめられている。この実験から ② の 可能性が變された。然しどのようにして促進物質が減少するかは明かでない。早い時期の daughter frond がその物質を独占するということも考へられるが実験から判断してそうではないらしい。又,この物質を作 り出すには frond の約 80% を除去した殘りでこと足りる。 次にこの物質がどんな性質のものか調べるた め一つの手掛りを得ようとして、普通に培養した mother frond から生じた一番目の daughter frond を 2.5% mg/l の濃度の heteroauxin を含んだ培養液で育てた。heteroauxin の影響を受けた frond は mother frond についたま」生長した frond より遙に小さかつた。heteroauxin のも一つの影響は frond の壽命を 短くずることで、以後の daughter frond の生産を時間的に促進する。 heteroauxin の上記の効果を利用し て daughter frond の大きさの減少が mother frond の生理的年齢を測るめやすになるという仮説をため すことができる。即, ヘテロオーキシンによつて壽命を短くする(早く年をとらせる)ことが同時に同じ差 率で frond の生長量を減少させることになる。この事実は Lemma に於ては mother frond の ageing の進度を daughter frond が小さくなつていく進度で置き換えてもよいということの一つの傍証になるだら **う。 物質はまだ明かにされていない。 更にこの場合を基礎にして茎の上に葉が展開される一般の植物で生** 理的年齢をどのように把握するかなど困難な問題がひかえている。 (古 沢 潔 夫)

# 日本珪藻土礦床より產する化石珪藻 II.

#### 奥野春雄\*

Haruo OKUNO: Fossil Diatoms from Japanese Diatomite Deposits II.

17. 綴子礦床, Tsuzureko dep. (中部叉は上部中新生, 間戸層, 海水成; 小田—40°15′50″N., 140°21′20″E.—礦床位置は本論文第 I 報 pl. 1 参照, 以下同じ)

秋田県北秋田郡綴子村学小田附近より学一通に至る丘陵地に存する。 黒色頁岩中に黄白色の傾斜層をなして存する。 筆者の入手した乾燥珪藻土は灰白色を呈し、珪藻破片を多く含むものであつた。

Fossils: Coscinodiscus その他の破片を認める。詳細未檢鏡。

18. 米內沢礦床, Yonaisawa dep. (中部中新生,前田層,海水成; 寄延沢—40°5′30″N., 140°22′40″E.)

北秋田郡米內沢町字寄延、大森山の麓に存する。柱賴駅より約 5 km の所。 頁岩中に十数 m の層をなし、灰白・黄・灰緑色などを呈すると云う。坑道掘を行う。

Fossils: Coscinodiscus (河島博士による)。

19. 北浦礦床, Kitaura dep. (上部中新世, 北浦層, 海水成; 39°55′30′′N., 139°45′50′′E.) 南秋田郡北浦町南方約 5 km, 北浦町字眞山及び黒滝一帯の丘陵地に存する。 買岩中に挟まれ, 上下層は灰白色, 中層黄色。厚さ 10-13 m と云う。 筆者の入手せる乾燥珪藻上は灰色を呈し, 珪穀の破片を多く含むものである。

Fossils: Coscinodiscus その他の破片を認める。詳細未検鏡。

- 20. 泉礦床, Izumi dep. (更新世; 38°40′20″N., 139°57′20″E.)
- 山形県東田川郡泉村の川代山に存する。その他不詳。化石未調査。
- **21.** 宮宿礦床, Miyajyuku dep. (上部中新世又は下部鮮新世; 38'14'40"N., 140°7'40"E.) 西村山郡宮宮町針生に存する。山形市西方約 18 km の地点。その他不詳。化石未調査。
- **22. 造山礦床**, Takiyama dep. (上部中海世叉は下部鮮新世, 淡水成; 38°12′30″N., 140°22′20″E.)

南村山郡滝山村中櫻川より 3 km, 山形市南方約 6 km の所に存する。表土 1.5-3 m, 珪藻 土は厚さ数 m, 灰白・黄白・灰緑・灰黑色を呈すると云う。

Fossils: Cymbella—Gomphonema—Navicula—Pinnularia (佐藤氏による).

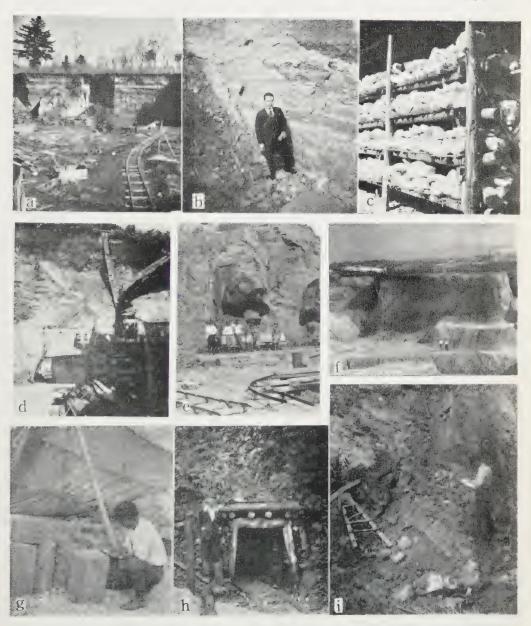
23. 円田礦床, Enda dep. (pl. 1, fig. a-c: 更新世, 平沢層, 淡水成; 38°7′-9′20″N., 140° 40′-41′E.)

宮城県刈田郡円田村に約9km<sup>2</sup>にわたつて存する。東北本線大河原駅より西北約 12km に当る。本職床は我国で最も早く開発された礦床の一つで、珪藻土の良質なこと、埋藏量の多

<sup>\*</sup> 京都工芸繊維大学繊維学部植物学研究室,Botanical Institute, Faculty of Textile Fibers, Kyoto University of Industrial Arts and Textile Fibers.

H. OKUNO: Fossil Diatoms.

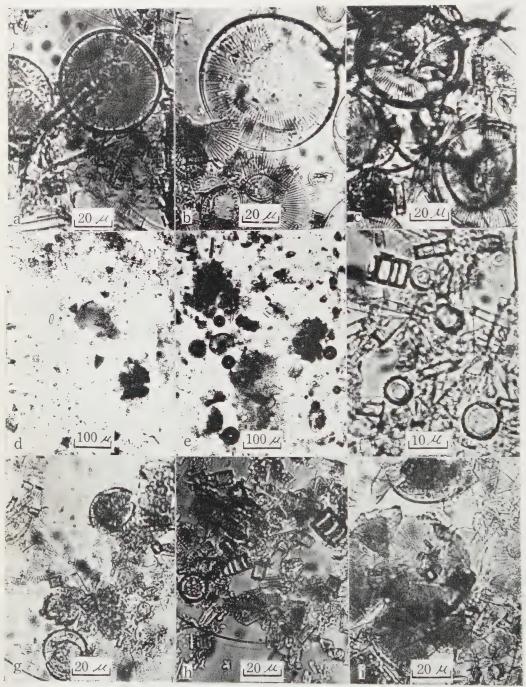
Pl. 1



a. Takagi outcrop (No. 23). b. Komurasaki outcrop (No. 23). c. A drying shelf at Iriōgi (No. 23). d. Wajima outcrop (No. 29). e. Wakura outcrop (No. 31). f. Ishizaki outcrop (No. 31). The back is the Isolite factory. g. Blocks of diatomite, cut for baking into fire-bricks. h. A tunnel at Atagi deposit (No. 36). i. Hidano outcrop (No. 35). (Figures in b, g-i, are the author)

H. OKUNO: Fossil Diatoms.

Pl. 2



a. Iriōgi earth (No. 23). b. Takagi earth (No. 23). c. Komurasaki earth (No. 23). d. Shōin earth (No. 28). e. Wajima earth (No. 29). f. Light gray earth from Hokunō (No. 35). g. Yellowish brown earth from Hokunō (No. 35). h. Upper layer earth of the lst tunnel at Atagi (No. 36). i. Upper layer earth of the 2nd tunnel at Atagi (No. 36).

いこと、採掘の盛んなことなどにより、岡山県・大分県下礦庫と共に本邦淡水成礦床中最重要礦床の一つである。本礦床の欠点は表土層の写いことで、厚さ平均約15m もあり、これが除去に多大の労力と費用をかけている。 筆者の実地調査した礦床中では他にこのように表土の厚い例はなかつた。

職床は円田村台地の大部寺を占め、露頭は円田地区(字柳・山中・入青木・青木・前青木・萩窪・猫松沢・高木・川窪・清土・根無富土・三本松・萱野)、平沢地区(字平沢・小村崎)、北境地区(字北境)の3区に分れる。 法憲土は各露頭とも厚さ 1-3 m で、一般に水平縞層理を示す。表土は 2-20 m で、最上部はローム層、この下に火山灰・火山砂・軽石・粘土・礫及び所により泥炭層などがある。 廷憲土は軟質、一般に黄白色、ときに灰白・灰緑・灰黒色などの所もある。特製は天日乾燥・粉碎・空氣分測などによる。開発は東京保温材株式会社・宮城珪藻土株式会社及び個人商社数社によつて盛んに行われている。 化石建造の種類は各露頭とも殆ど同じであるが、それらの出現頻度は露頭によつてやや異る。

Fossils (pl. 2, fig. a-c): Dominant, Stephanodiscus niagarae Ehr. (60-70%); Subdominant, Melosira granulata (Ehr.) Ralfs (5-20%)--Synedra ulna (Nitz.) Ehr. (5-10%); Companions, Achnanthes lanceolata (Bréb.) Grun. var. elliptica Cl.—Amphora ovalis Kütz. var. libyca (Ehr.) Cl. and var. pediculus Kütz.-Cocconeis placentula Ehr. var. lineata (Ehr.) Cl.-Cyclotella catenata Brun-Cymatopleura solea (Bréb.) W. Sm.-Cymbella aspera (Ehr.) Cl.-C. cistula (Hempr.) Kirch.-C. Husted'ii Krasske-C. lanccolata Ehr.-C. tumida (Bréb.) V. H.-C. turgida (Greg.) Cl.-C. turgidula Grun.—Diploneis ovalis (Hilse) Cl.—Epithemia Hyndmanii W. Sm.—E. sorex Kütz and var. gracilis Hust.-E. turgida (Ehr.) Kütz.-E. zebra (Ehr.) Kütz. and var. porcellus (Kütz.) Grun., var. saxonica (Kütz.) Grun.—Eunotia pectinalis (Dill.? Kütz.) Rab.—Fragilaria construens (Ehr.) Grun. and var. binodis (Ehr.) Grun., var. venter (Ehr.) Grun.-F. pinnata Ehr. var. lancettula (Schum.) Hust.—Gomphonema acuminatum Ehr. var. brasiliensis Fricke and var. coronata (Ehr.) W. Sm.— G. constrictum Ehr. var. capitatum (Ehr.) Grun. - G. intricatum Kütz. and var. dichotoma (Kütz.) Grun., var. pumila Grun.—G. olivaceum (Lyng.) Kütz.—G. subclavatum Grun. var. Mustella (Ehr.) Cl.-G. tetrastigmatum Horikawa et Okuno-Melosira granulata (Ehr.) Ralfs var. angustissima Müller-Navicula cuspidata Kütz.?-N. gastrum Ehr.-N. peregrina (Ehr.) Kütz.-N. tuscula (Ehr.) Grun.—Neidium iridis (Ehr.) Cl.?-Nitzschia amphibia Grun.—Opephora Martyi Her.—Pinnularia viridis (Nitz.) Ehr.—Rhoicosphenia curvata (Kütz.) Crun. Rhopalodia gibba (Kütz.) O. Müll. and var. ventricosa (Kütz.) V. H.-Surirella robusta Ehr.-Synedra rumpens Kütz. var. fragilarioides Grun. - S. Vaucheriae Kütz. and var. capitellata (Grun.) Hust. - Tabellaria fenestrata (Lyng.) Kütz. -Triceratium javanicum Cl.?

24. 翁島礦床, Okinajima dep. (更新世, 淡水皮; 37°32′N., 140°3′30″E.) 福島県耶麻郡翁島村大字盤根字東向に存する。翁島駅より 0.5 km の所で, 珪藻土は厚さ約 1 m, 表土層約 1 m である。原土は白色・灰色で柔軟良質である。埋蔵僅少。

Fossils: Cyclotella—Epithemia—Gomphonema—Melosira (dominant)—Pinnularia (河島博士写真による).

25. 沢根礦床, Sawane dep. (上部中新世,中国時層,海水成;37°59′40′′N., 138°15′50′′E.) 新潟県佐渡ヶ島沢根町西北方 2.5 km, 眞野湾沿岸西方一帯に存する。 珪葉土は塊狀, 厚さ約数 m, 黄白・黄褐・灰緑・灰黑色を呈する。 字野坂に於ては表土層は平均 0.5 m であると云う。

筆者の入手した精製土は淡黄色微粉肽で,含有珪藻殼は殆ど破片肽で觀察された。 優占種不顕 著。

Fossils: Actinocyclus elliptica Grun.—Actinoptychus splendens (Shad.) Ralfs—A. undulatus (Bail.) Ralfs—Arachnoidiscus Ehrenbergi Bail.—Coscinodiscus decrescens Grun.?—C. elegans Grev.—C. lineatus Ehr.—C. marginatus Ehr.—C. obscurus A. Schm.? (fragment)—Grammatophora oceanica (Ehr.) Grun.?—Synedra toxoneides Castr.?

**26. 東谷礦床**, Higashidani dep. (更新世?, 淡水成; 37°26′20″N., 139°2′10″E.) 古志郡東谷村栃堀に存する。詳細不明。

Fossils: Cyclotella—Epithemia—Fragilaria—Melosira --Stephanodiscus—Surirella—Synedra (河島博士写真による).

27. 藤原礦床, Fujiwara dep. (更新世, 淡水成; 36°52′30″N., 139°45′40″E.)

栃木県塩谷郡藤原町字藤原高原由に存する。 珪藻土は水平縞層型を示し、露出部で厚さ約 2-3 m。 表土は浮石質安山岩を含む凝灰質砂岩である。 礦床は交通の便の極めて悪い山中にあ る。 珪藻土は未入手であるが、河島博士の写真より同定すれば次の如くである。

Fossils: Dominant, Tetracyclus emarginatus (Ehr.) W. Sm. (Ca. 90%)—Companions, Cymbella aspera (Ehr.) Cl.?—Cocconeis—Gomphonema—Melosira—Navicula.

28. 正院礦床, Shōin dep. (中新世, 原至層群飯塚層, 海水成; 37°26′10″-29′N., 137°15′50″-20′20″E.)

石川県珠洲郡正院村・三崎村・蛸島村・直村・上戸村・宝立寺村などにわたり露頭を有する。 珪藻土は厚さ約 10 m, 上部は塊狀下部は層狀で粘土を多く含み,能登島・和倉両礦床と同じく 泥岩狀を呈する。化石珪藻は能登層・和倉層と同種類を含むが,本礦床産のものは破壊度が他層 よりも低く,完全珪殼がやや多く検鏡された。

Fossils (pl. 2, fig. d): (The following Wajima and Wakura deposits contain the same fossils to this deposit), Dominant, Coscinodiscus oculus-iridis Ehr. (Ca. 40%); Subdominant, Coscinodiscus marginatus Ehr. (Ca. 10%); Companions, Actinocyclus Ehrenbergii Ralfs var. tenella (Bory) Hust.—A. elliptica Grun.—Actinoptychus splenders (Shad.) Ralfs—Arachnoidiscus Ehrenbergii Bail. and var. californica A. Schm.—Biddulphia Jimboi Pant.—Coscinodiscus apiculatus Ehr. var. ambigua Grun.—C. elegans Grev.—C. lineatus Ehr.—C. velatus Ehr.?—Diploneis notoensis Okuno—Mastogloia splendida (Greg.) Cl.—Rhabdonema japonicum Temp. et Brun var. valdelata (Temp. et Brun) Fricke? and var. sparsicostata Okuno—Stephanopyxis turris (Grev. et Arn.) Ralfs—Triceratium sp. (fragment of large species). The degree of cell destruction varies in quarries and outcrops as in the following Wajima, Notojima and Wakura deposits.

**29.** 輪島礦床, Wajima dep. (pl. 1, fig. d:中新世, 鳳至層群塚田層, 海水成; 37°23′40″N., 136°54′20″E.)

風至郡輪島町郊外小峯山に存する。珪藻土は塊状で,露出部の高さ約20 m,幅約50 m 位の小礦床である。原土は黄褐色で他の能登半島に於ける礦床の場合と同じくやや堅い。 採掘は和倉層などに比すれば小規模である。 珪藻土は輪島塗漆器の「地の粉」としても使用される。化石珪藻は前記礦床と同じ(pl. 2, fig. e)。 筆者は実地調査の際本礦床の上部より下部にわたり約2 m おきに原土を採取し詳細検鏡したが,各種珪藻の出現頻度及び破壊度は,上部より下

部にわたり注目すべき程の差異を認めなかつた。 礦中経営は果原礦山会社によつて行われている。

30. 能登島礦床, Notojima dep. (中新世, 原至層群和倉曆, 海水成; 37 '8'30"-9'N., 137° 40"-2'30"E.)

鹿島郡能登島の中乃島村向日・佐波・西島村須曾・半浦などに分布する。 珪藻土は塊狀, 厚さ約 10 m で暗灰色を呈し、良質である。

**31.** 和倉礦床, Wakura dep. (pl. 1, fig. e-g: 中新世, 原至耐群和倉層, 海水成; 37°4′20″-5′10″N., 136°55′-57′30″E.)

鹿島郡和倉町を中心とし、七尾湾南岸地帯で東より東湊村赤崎・七尾市・西湊村小島・石崎村石崎・和倉町・金ケ崎村白海及び大津・笠師保村笠師保友どに露頭がある。能登鶴床中代表的のものである。珪藻土は一般に灰黒色文は灰緑色の塊狀で厚さ 5-20 m に及ぶ。表土は砂礫質壌土で厚さ 1-3 m 程度である。本礦床の開発及び工業化の人規模なことは、筆者の実地調査を行つた礦床中最大のものであつた。 部ち本地礦宝は主としてイソライト工業株式会社によつて経営されているが、礦床附近に採掘珪藻土特製加工の大工場を有し、切出煉瓦・各種断熱煉瓦・家庭用焜炉などの製造が盛んに行われている。 即ち本礦床産珪藻土は海水成の特質として,多量の粘土質及び有機質不純物を含み、成形焼或に便であるために上記の製品として加工される。切出煉瓦(pl. 1、fig. g)は珪藻土を建で遮当な大きに切出し、これをそのまよ焼成して製するもので、断熱煉瓦及び焜炉は採掘珪藻土を一旦粉碎し、これに少量のコルク層・鋸屑・泥炭粉などを加え加水混煌して所要の形に加圧成形する。 次にこれを適度に乾燥せしめた後焼或窯中に積み重ね 600-700°C で一書夜焼吹するのである。この際珪藻土中に含まれた可燃性不純物及び添加したコルク層・鋸屑・泥炭粉などは煉瓦の焼或を助ける外、燃焼消失して空隙を作るので製品の断熱性を一層大ならしめるに役立り、本地産断熱煉瓦は Isolite と称して市販され、各種工業用炉壁の構築に用いられている。

32. 熊本礦床, Kumaki dep. (更新世文は新第三紀, 原至層群田売曆?, 淡水成; 37°7′20″N., 136°50′30″E.)

鹿島郡熊木村に存する。能登半島礦床中唯一の淡水成層である。この地域は中新世の田尻層に属するが、珪藻上はその上に第四紀更新世の層として成層したものと考えられる。 筆者の入手した乾燥土は純白で純度の極めて高いものである。 礁床は未開発である。

Fossils: Dominant, Melosira granulata (Ehr.) Ralfs (99%): Companion, Stephanodiscus niagarae Ehr. (fragments).

33. 禰津礦床, Nezu dep. (新第三紀, 淡水成; 36°23′10″N., 138°20′40″E.)

長野県小県郡禰津村姫子沢及び和村に存する。 筆者の入手せる乾燥上は灰色を呈しやや堅いものである。本地の珪藻化石は Skvortzov によつて詳しく研究されている。

Fossils (Skvortzov たよる): Achnanthes exigua Grun.—A. hungarica Grun.—Amphora ovalis Kütz. fo. gracilis (Ehr.) Cl. and var. libyca (Ehr.) Cl.—Anomoeoneis sphaerophora Kütz.—Caloneis silicula (Ehr.) Cl.—Cocconeis placentula Ehr. and var. lineata (Ehr.) Cl.—Cyclotella stelligera Cl. et Grun.—Cymatopleura solea (Bréb.) W. Sm.—Cymbella aspera (Ehr.) Cl.—C. cistula (Hemrp.) Kirch. and var. maculata (Kütz.) V.H.—C. cymbiformis (Ag.? Kütz.) V.H.—C. Ehrenbergii Kütz.—C. lacustris (Ag.) Cl.—C. lanceolata (Ehr.) V.H.—C. Mölleriana Grun. var. nipponica Skv.—C. naviculiformis Auers.—C. Reinhardtii Grun.—C. tumida (Bréb.) V.H. and var. borealis Grun.—C. turgida

(Greg.) Cl.-C. ventricosa Kütz.-C. Yabe Skv.-Diatoma elongatum Ag.-Epithemia Hyndmanii W. Sm. var. gracilis Skv.-E. sorex Kütz.- E. turgida (Ehr.) Kütz.-E. zebra (Ehr.) Kütz. var. porcellus (Kütz) Grun.-Eunotia monodon Ehr.-E. pectinalis (Kütz.) Rab.-Fragilaria construens (Ehr.) Grun. and var. binodis (Ehr.) Grun. (Dominant and Subdominant?), var. nipponica Skv., var. subsalina Hust., and var. venter (Ehr.) Grun. (Subdominant?)-F. pinnata Ehr.-F. virescens Ralfs-Gomphonema Augur Ehr, var. Gautieri V. H.-G. constrictum Ehr, var. capitata (Ehr.) Cl.-G. gracile Ehr. var. aurita (A. Braun) Cl.-G. lanceolatum Ehr. var. insignis (Greg.) Cl.-G. olivaceum (Lyng.) Kütz.-G. parvulum (Kütz.) Grun. and var. exilissima Grun.-G. sphaerophorum Ehr.—Hantz-chia amphioxys (Ehr.) Grun. var. vivax (Hantz.) Grun.—Mclosira granulata (Ehr.) Ralfs var. angustissima O. Müll.-- M. italica (Ehr.) Kütz. var. tenuissima (Grun.) O. Müll.-- Navicula americana Ehr.—N. cryplocephala Kütz.—N. cuspidata Kütz. and var. ambigua (Ehr.) Cl.—N. halophila (Grun.) Cl.-N. Lambda Cl.-N. lanceolata (Ag.) Kütz.-N. menisculus Schum.-N. peregrina (Ehr.) Kütz. var. kefvingensis (Ehr.) Cl.-N. Perrotettii Grun.-N. placentula (Ehr.) Grun.-N. pupula Kütz. var. capitata Hust. and var. rectangularis (Greg.) Grun.-N. seminulum Grun.-N. subdicephala Hust. and fo. recta Skv.-N. viridula Kütz. var. nipponica Skv. and var. slesvicensis (Grun.) Cl.—Neidium bisulcatum (Lagers.) Cl. var. nipponica Skv.—N. iridis (Ehr.) Cl. and var. amphigomphus (Ehr.) V. H.—N. obliquestriatum A. Schm. var. rostrata Skv.—Nitzschia amphibia Grun.—Pinnularia brevicostata Cl.—P. cardinalis (Ehr.) W. Sm.—P. dactylus Ehr.—P. distinguenda Cl. var. fossilis Sky.—P. episcopalis Cl.—P. gentilis (Donk.) Cl. var. fossilis Sky.—P. gibba Ehr. fo. subundulata May.—P. major (Kütz.) Cl. var, transversa A. Schm.—P. microstauron (Ehr.) Cl.—P. nobilis Ehr. and var. fossilis Pant.—P. streptoraphe Cl.—P. viridis (Nitz.) Ehr.—Rhopalodia gibba (Ehr.) O. Müll-Stauroneis anceps Ehr. fo. gracilis (Ehr.) Cl., fo. linearis (Ehr.) Cl.-S. phoenicenteron Ehr.—Stephanodiscus niagarce Ehr. var. intermedia (Fricke) Okuno and var. minuta (Grun.) Okuno-Surirella biseriata Breb. var. bifrons (Ehr.) Hust., var. constricta Grun, -S. elegans Ehr. var. genuina A. May., var. norvegica (Eulens) Brun fo. constricta A. May., fo. typica A. May. Synedra parasitica (W. Sm.) Hust.—S. rumpens Kütz. var. scotica Grun.—S. ulna (Nitz.) Ehr. and var. biceps (Kütz.) Schönf.

#### 34. 身延層, Minobu dep. (現世, 淡水成; 七面山—35°22′10″N., 138°21′E.)

山梨県南巨摩郡身延村七面山の「お池の土」として知られているものである。 珪藻軟泥と 考えるべきものである。本珪藻軟泥中の化石硅藻については津村孝平氏の報告がある。

Fossils (Diatomaceous coze; REPRESTO : Achnanthes inflata (Kütz.) Grun.—Caloneis silicula (Ehr.) Cl.—Cocconeis placentula Ehr. var. lineata (Ehr.) Cl.—Cymbella heteropleura (Ehr.) Kütz. var. minor Cl.—C. lanceolata (Ehr.) Brun—C. ventricosa Kütz.—Diatoma hiemale (Lyng.) Heib. var. mesodon (Ehr.) Grun.—Epithemia turgida (Ehr.) Kütz. and var. granulata (Ehr.) Brun—Eunotia pectinalis (Kütz.) Rab. var. minor Rab. and var. minor Rab. fo. impressa Ehr.—E. praerupta Ehr. and var. bidens Grun., var. inflata Grun.—E. trinacria Krasske—Fragilaria mutabilis (W. Sm.) Grun.—Gomphonema constrictum Ehr. var. capitatum (Ehr.) Cl.—Meridion circulare (Grev.) Ag. var. constricta (Ralfs) V. II—Navicula pupula Kütz. var. rectangularis Greg.—N. radiosa Kütz.—Nitzschia fonticola Grun.—Pinnularia appendiculata (Ag.) Cl.?—P. borealis Ehr.—P. hemiptera (Kütz.) Cl.—P. interrupta W. Sm. var. sinica Skv.—P. nobilis Ehr.—P. viridis (Nitz.) Ehr. and var. fallax Cl.—Stauroneis phoenicenteron Ehr.—Surirella linearis W. Sm.—S. robusta Ehr. var. splendida (Ehr.) V. H.

**35.** 北濃礦床, Hokunō dep. (pl. 1, fig. i: 更新世? 淡水成; 步岐島—35°56′N., 136°50′10″E.)

岐阜県郡上郡北濃町字歩岐島及び干田野に存する。歩岐島露頭は北濃駅南西約 1 km の地点にある小露頭で、灰白・灰緑・灰黒色睡藻土が厚さ約 7 m の不整合累層をなしている。 筆者が現地で採取した原土を検鏡した結果によると、灰黒・灰緑甜藻土は不純物多く、珪藻土として殆ど価値ないものであつた。 灰白色珪藻土は純度は前者よりやや高いが、珪藻穀は强度の破壊をうけ 微細な破片となつている。 干田野露頭は北濃駅西方約 1 km の丘陵地にあり、南の灰黒色層と北の灰白・黄褐色層との2層に今れる。 灰黒色層は厚さ約 2 m で粘土質不純物を多く含み、約 1 m の砂質表土を被る。 灰白・黄褐色層は灰黒色層北方約 100 m にあり、厚さ約 3 m の塊狀で黄褐色珪藻土が大部分を占め、灰白色珪藻土は小塊狀となりその下部に含まれている。 表土約 4 m。 珪藻土は純度が高い。 北濃層は総て露天掘で採掘されている。

Fossils (pl. 2, fig. f, g): Dominants—In dark gray layer, Cyclotella comta (Ehr.) Kütz. (40%)—In light gray layer, Melosira distans (Ehr.) Kütz. (70%, fig. f)—In yellowish brown layer, Stephanodiscus niagarae Ehr. (70%, fig. g); Subdominants—In dark gray layer, Melosira distans (Ehr.) Kütz. (5%)—In gray and yellowish brown layers, Mel. granulata (Ehr.) Ralfs (20%); Companions, Cocconeis placentula Ehr. var. lineata (Ehr.) Cl.—Cyclotella comta (Ehr.) Kütz.—Didymosphenia geminata (Lyng.) M. Schm.?—Diploneis avalis (Hilse) Cl.—Epithemia argus Kütz.—E. Hyndmanii W. Sm.—E. turgida (Ehr.) Kütz.—E. zebra (Ehr.) Kütz. and var. porcellus (Kütz.) Grun.—Eunotia pectinalis (Dill.? Kütz.) Rab.—Gomphonema sphacrophorum Ehr.—Melosira granulata (Ehr.) Ralfs and var. angustissima Müll.—M. italica (Ehr.) Kütz.—M. undulata (Ehr.) Kütz. var. Normanii Arn.—Navicula radiosa Kütz.?—Nitzschia amphibia Grun.—Pinnularia microstauron (Ehr.) Cl.?—Rhopalodia gibba (Ehr.) O. Müll.—Stephanodiscus niagarae Ehr.—Surirella robusta Ehr.—Synedra ulna (Nitz.) Ehr.

**36. 牛道礦床**, Ushimichi dep. (pl. 1, fig. h: 更新世? 淡水成; 阿多岐—35°54′40″N., 136°54′40″E.)

郡上郡牛道村学阿多岐(白鳥聖東北約 6 km)にある比較的広大な層である。表土層は厚さ 5-10 m で、坑道掘が行われている。 坑道内の耳藻土は灰白色を呈し厚さ 1-2 m の水平累層をなし薄い礬土層を挟み上・中・下の3層となる。坑道は横孔式で第3坑まであり、何れも高さ幅それぞれ 1.5 m 位の狭いものであり、筆者の現地調査も坑道内では半かがみの姿勢で行つた。坑道内には小トロツコ軌道がある。第1坑の主坑は耳藻土乾燥場附近より東南に向い約 600 m 掘進し、その両側に多くの枝坑がある。第1坑は休礦中である。第2坑は最も盛んに採掘中で、主坑は東北に約 150 m 掘進し、西側に約 10 本の枝坑を有する。第3坑は筆者の現地調査を行つた昭和19年に於て西南に向い約 15 m 掘進している程度であつた。化石珪藻は下記の如く各坑各層に於てその優古種及び隨作種に相当差異が見られるが、この事実は各層の沈積が相当異つた狀態のもとで行われたことを示すものとして注目に値する。 礦末は主として岐阜珪藻土株式会社によつて経営されている。

Fossils (pl. 2, fig. h,i): Dominants—In the middle layer of 1st tunnel, Melosira granulata (Ehr.) Ralfs (70%)—In the lower layer of the 1st tunnel, and in the upper and middle layers of the 2nd tunnel, Stephanodiscus niagarae Ehr. (98%, 90%, 70%, fig. i); Subdominants—In the upper layer of the 2nd tunnel, Epithemia Hyndmanii W. Sm. (2%)—In the upper and middle layers of

the 2nd tunnel, Melosira distans (Ehr.) Kütz. (5%, 10%)—In the upper layer of the 1st tunnel, Mclosira granulata (Ehr.) Ralfs (30%, fig. h)—In the middle layer of the 1st tunnel, Stephanodiscus niagarae Ehr. (20%); Companions, Achnanthes lanceolata Bréb.—Cocconeis placentula Ehr. var. lineata (Ehr.) Cl.—Cyclotella catenata Brun?—Cymbella affinis Kütz.—C. cistula (Hemp.) Kirch.—Didymosphenia fossilis Horikawa et Okuno—Diploneis ovalis (Hilse) Cl?—Epithemia Hyndmanii W. Sm.—Ē. sorex Kütz.—E, turgida (Ehr.) Kütz.—E. zebra (Ehr.) Kütz.—Eunotia praerupta Ehr.—Fragilaria construens (Ehr.) Grun. and var. binodis (Ehr.) Grun., var. venter (Ehr.) Grun.—F. lapponica Grun.—Gomphonema intricatum Kütz. var. vibrio (Ehr.) Cl.—Melosira arenaria Moore—M. distans (Ehr.) Kütz.—M. granulata (Ehr.) Ralfs and fo. curvata Grun.—Opephora Martyi Hér.—Rhopalodia gibba (Ehr.) O. Müll.—Stephanodiscus niagarae Ehr.—Surirella robusta Ehr.—Tabellaria flocculosa (Roth) Kütz.—Tetracyclus emarginatus (Ehr.) W. Sm.

## 本会記事

○評議員会 (昭和27年1月24日 19:30~21:00 於学士会館別館)

出席者 小倉会長,字佐美,松浦,木村(有),神保,大槻,佐竹,津山,前川,門司,島村,高 嶺,下斗米,堀川,小島,瀬川.

15 評議員、本部より互理幹事長、原前幹事長、柳田、佐藤(七)、太田の各幹事会長の挨拶の後、次の諸事項について討議及び決定がなされた。1) 現在の本会会計狀況を本部より説明した。2) 本年の大会開催方式について本部案の説明があり評議員より色々意見が述べられた。3) 中部支部大会の決議に基いて要望のあつた北陸支部新設の件は地域の特殊性を考慮して承認する事にした。但し現果に於ては、新支部の評議員は1名とし、又評議員として新支部が現存の各支部同様 50 名以上の会員を獲得す可く努力する 様要望した。4) 本年は評議員改選の時期に当るのでその際各会員の会費納入狀態を有權者の判定の際、考慮する事を申し合わせた。その他各種獎励金候補者の推薦についても附議された。

# ● 日本 平 三重県桑名市西汰上 309 諏訪精 中郎方 中郎方 中郎方 中郎方 中郎方 中部大会員 中部 大戸市外渡里村茨城大学文理学 部生物学教室 場路市城山町 19 北海道学芸大学釧路分校 日本 川 鉄 摩 長崎県臺岐郡勝本町立勝本中学

佐藤 壽 子 青森県八戸市八幡町14 藤 野 正 義 長崎県諫早市福田町2940 書館理学部分館 大阪市北区中之島4/8

井 上 弌 喜 神奈川県小田原市柳新田 28 宇 都 宮 書 店 金沢市片町 56

# The wall structure of tracheid with special reference to its layers.\*

By Sadao NAGATOMO\*\*

長友貞雄: 恒導管の膜構造、特にその膜層について

Modern conception relating to the wall structure of plant cells, especially of fibers, tracheids and vessels was established by I. W. Bailey<sup>(1)</sup>. At present our knowledge about the wall structure of a plant cell is that it is generally composed of (1) the primary wall derived directly from the cell wall of the cambial zone, and (2) the secondary wall, of which we can distinguish three layers, namely the outer layer, central layer and inner layer; and between two cells there exists the middle lamella. Bailey<sup>(2)</sup> afterwards reported that the constituents and arrangements of secondary wall layers are quite different in some species, even though in most species wall structure coincide with the above mentioned. We should not use the term "Middle lamella" together with the primary wall. Middle lamella or "Intercellular substance" must be clearly distinguished from the primary wall.

Recently some writers as H. F. Lewis<sup>(3)</sup> and S. H. Clarke<sup>(4)</sup> use the term "Zone" instead of Bailey's "Layer". According to them, the wall layers are (1) Primary wall, (2) Secondary wall and (3) Middle lamella; and the secondary wall is composed of three zones, namely (a) Outer zone, (b) Middle zone and (c) Inner zone. They also have named the concentric structural layers of the middle zone of secondary wall "Iamellae". Thus the terminology of the stratiform units is not in agreement. Some botanists like W. K. Farr<sup>(5)</sup> persistently uses the term "Tertiary wall", which indeed does mean an active growing protoplasm-like membrane.

Frey-Wyssling<sup>(6)</sup> presented a postulate as to the submicroscopic structure of the primary wall that it is composed of two phases of cellulosic and non-cellulosic materials, and the former constructs a net-work of cellulosic fibrils. Since then, many researchers turned their attention to this theory and many reports were published which treated the primary wall, but few were free from mistakes. Thus though the existence of the primary wall and its submicroscopic fine structure are accepted by many botanists and others, they are not easily verified. The present author attempted to ascertain the wall structure of tracheid in the microscopically

<sup>\*</sup> Read at the Annual Meeting of the Botanical Society of Japan, September 1951.

<sup>\*\*</sup> Forest Products Laboratory of the Kokusaku Pulp Industry Comp., 184, 1-chome, Kamiochiai, Shinjuku-ku, Tokyo.

observable field, mainly intending to confirm the existence of the primary wall and to clarify the minute structure of the outer zone of secondary wall.

#### Material and Method

Trunks, twigs and young shoots of *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. were subjected to microscopic observation. Blocks of a trunk were treated with boiling water and then cooled. The operation was repeated three times to drive off the air in the material. After this treatment the wood blocks were subjected to mild softening procedure (7)(8)(9). It is as follows: 15 cc glacial acetic acid, 30 cc of 30% hydrogen peroxide solution and 20 cc distilled water were poured in a flask together with blocks of the sample, and the flask was warmed on the water bath with reflux condenser. The softened sample were able to be cut into  $5\sim6\mu$  transverse sections. By this softening procedure some non-cellulosic constituents in the cell wall may be removed, but presumably only inappreciable quantity. In fact, as will be described later on, at least lignin reaction by phloroglucin can be seen on the sample softened in this manner.

Several stains were used to distinguish the layers of the wall, but none was so favorable as Haidenhain's haematoxylin. Iodine potassium iodide solution and sulphuric acid were also applied and good results were acquired. For the identification of the primary wall, polarization microscope was indispensable, and in this case the swelling treatment was much serviceable.

For the purpose of swelling, 60% H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> and 17.5% NaOH solution were adopted. In some cases more dilute sodium hydroxide solution was necessary.

Twigs aged about 10 years and young shoots of this year were observed. In these samples softening procedure was not applied. In order to clarify the wall layers of the cambial zone, paraffin method applied to young shoots of this year was most successful.

#### Results and Discussion

(1) Observation by polarized light. Softening procedure was used for cutting thin transverse sections. By this procedure some lignin and polyuronides may be removed, but cellulose crystallites and fibrils will not be disturbed in their orientation (2c).

Fig. 1 (upper) shows a transverse section of matured summer wood observed in polarized light between crossed nicols. In this photograph the outer zone of secondary wall is bright, indicating transverse orientation of crystallites, and between the two adjacent outer zones the dark middle lamella peeps. Primary wall is hardly found in this picture,

The central zone of secondary wall is sometimes slightly bright, but in most

cases it is nearly dark, indicating the longitudinal orientation of crystallites and fibrils. The inner zone is bright but somewhat disconnected. This zone or layer is also undulating even in raw twig section, so the picture of this sort is not due to the softening procedure or drying of woods, but is to be attributed to the original nature of tracheids; into the details of which this paper will not be touched.

In the next place the note should be made of the swelling phenomena, by way of which some interesting wall structures were clarified. Fig. 1 (under) shows the transverse section of summer wood swollen in 60% H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>. In this picture we can see that the central zone in which the cellulose fibrils run longitudinally, swells remarkably, and owing to this swelling pressure, the inner zone is much more irregularly deformed. Though the outer zone is pushed outward, such deformation as seen in the inner zone is not found in it, and it should not be overlooked that in this case the faint bright line which lies outside of the outer zone becomes more easily visible than in Fig. 1. This feeble bright line must be the primary wall. As previously stated, in spite of the concept of primary wall according to Bailey<sup>(1)</sup> and Frey-Wyssling<sup>(6)</sup>. many researchers fell in mistakes about the primary wall. K. Hess<sup>(10)</sup> misjudged in his discussion of swelling phenomena, and A.L.M Bixler in his thesis treating the digestion of woods. The layer which they considered as the primary wall is nothing but the outer zone of secondary wall. Recently K. Mühlethaler(12) demonstrated Frey-Wyssling's postulate concerning the fibril net-work of the primary wall by electron microscopy. But the question still lies in the morphology of the primary wall that is to be discussed within the limits of ordinary microscope.

When the softened transverse section is mounted by 7.5~17.5% NaOH solution, each cell shows three bright bands in polarized light between crossed nicols as revealed in Fig. 2 (left upper). In this photograph the outermost narrow band may be the primary wall, and the two next following bands may be the outer zones of secondary wall. It is not likely to happen that the central zone changes its fibrillar orientation and becomes brightly birefringent in swelling, so the innermost bright band can not be considered to be a part of central zone. As stated later on, the outer zone is frequently found to be composed of two layers by staining, the bright bands in the photograph must be (1) the primary wall, (2) outer zone I and (3) outer zone II. Furthermore these two layers of outer zone can be observed in the xylem of younger shoot, as will be described later. These two layers of outer zone must be formed in the development period of tracheid, that is between these two layers there must exist some heterogeneity. May we suppose that this heterogeneity is attributed to photo-periodic origin? May we suppose that the construction of each layer takes one day or twenty-four hours, and the accomplishment of these two layers take two days or forty-eight hours? Apart from this question, the writer makes a proposal that these two layers of the outer zone of the secondary wall will

be named (1) "Early outer zone" and "Late outer zone", taking the general cell wall development into consideration.

(2) **Observation** by staining. When a transverse section of a matured summer wood of *Pinus densiflora* is observed without staining on the slide glass mounted in water or glycerine, we shall be able to distinguish only three layers of the wall. The true middle lamella, primary wall and the outer zone of secondary wall are altogether combined and intermingled. They make one transparent body or layer which is the so-called middle lamella itself of the older botanists. The central zone of secondary wall and the inner zone are able to be distinguished. On the other hand, staining helps us more or less to differentiate those layers in question.

Safranin, Delafield's haematoxylin, and malachite green will stain the so-called middle lamella deeply. But these stains are not qualified for the solution of the present question. I hloroglucin combined with hydrochloric acid reacts upon the softened material a little weakly. The reaction color is deep on the region composed of middle lamella, primary wall and the outer zone of secondary wall. By way of this reaction approximate lignin locality can be seen. In this respect the phloroglucin reaction and the ordinary staining seems to have parallelism.

When the section is treated by Haidenhain's haematoxylin, the circumstances are different. Fig. 2 (left under) shows the transverse section of the softened summer wood of Pinus densiflora stained by Haidenhain's haematoxylin. In this photograph we can see the middle lamella deeply stained together with primary wall, the outer zone lightly stained, and the outer portion of the central zone deeply stained. The reliable identification of these layers is not accomplished without polarized microscope. Lightly stained sample was convenient for this purpose. The primary wall itself can not be distinguished from the middle lamella in the ordinary light because it is stained as well as the middle lamella, but when the nicols are crossed, there comes out the primary wall as a feebly bright line in the so called middle lamella. Note should be also given here that the outer zone of secondary wall is often stained as two layers by Haidenhain's haematoxylin, and the central zone is found as composed of several layers or "Lamellae". Though in respect of the latter details, descriptions are not presented in the present paper, it may be supposed that the formation of these concentric lamellae are related to the day and night stimulus as in the case of cotton fibers. (2a)

As the second preferable staining, io line potassium iodide solution accompanied with 60% H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> is recommended. The middle lamella together with the primary wall becomes reddish brown in this stain, while the outer zone remains in a little lighter tone. The two layers of the outer zone are easily observable in ordinary light. When the non-cellulosic constituents of the cell wall are almost removed the wall becomes purple brown to purple by this stain.

(3) **Observation of young shoot.** Transverse sections of young shoots of this spring were observed. Sections were cut by paraffin method. Softening procedure were not applied. It should be emphasized that the cell walls of the cambial zone are almost dark in polarized light between crossed nicols. They do not show double refraction. The state of things is all the same also in the cambial zone of the raw twig aged ten years. On the contrary, growing young xylem cells are very bright

in polarized light. As can be seen in Fig. 2, (right) young tracheids are highly bright though the cambial zone is almost dark

In this photograph, the cell wall of the young xylem is likely to have two or three bright bands or layers. In one cell wall two bright bands can be seen which must be the outer zone. In another cell wall two bright bands and one feebly bright band can be seen. This feebly bright band outside of a cell must be the primary wall. From these facts it may be proper to consider that in the walls of cambial zone the fibrillar orientation is not yet well accomplished, and as soon as the tracheid is in formation, the cel-Iulose crystallites fibrils are put in order and thus the primary wall is formed. From the fact that the primary wall as previously des-



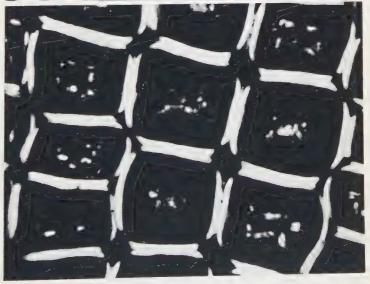


Fig. 1. *Pinus densiflora*: transverse section of summer wood: above: observed in polarized light between crossed nicols. below: treated by 60% H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>.

cribed is birefringent in mature cell wall and also in growing tracheid of young shoot, though the cell walls of the cambial zone do not show birefringency, I think that we had better draw a line between the terms "Cambial wall" and the "Primary wall". We are apt to confuse the "Cambial wall" with the cell walls of the cam-





Fig. 2. Pinus densiflora; above left: transverse section of summer wood treated by 17.5% NaOH observed in polarized light between crossed nicols. below: stained with Haidenhain's haematoxylin. above right: transverse section of young shoot observed in polarized light between crossed nicols.

bium and cambial zone. The development of the wall layers in young tracheids will be as follows. When the cellulose crystallites are well arranged in the primary wall, immediately bigins the secondary thickening, and in the first place the "Early outer zone" is constructed by apposition of cellulose chains in the transverse direction or nearly so, and after this perhaps some resting stage follows so far as the cellulosic constituents are concerned, and in the next place the "Late outer zone" is ready for formation.

#### Summary and Conclusion

- (1) The wall structure, especially the wall layers of the tracheid of *Pinus densiflora* was observed microscopically.
- (2) The outer zone of secondary wall was found to be composed of two layers. It will be proper that they are named (1) "Early outer zone" and (2) "Late outer zone". The formation of these two layers, as well as other layers, may be due to the photo-periodic stimulus.
- (3) The primary wall can not be distinguished by ordinary stains, because it behaves alike the middle lamella against general stains.
- (4) The primary wall can be seen by the use of polarization microscope, and it is more clearly revealed if some swelling reagents are applied.
- (5) The cell walls of the cambial zone have no double refractive nature. It will be attributed to the fact that in the youngest cell wall, cellulose crystallites and fibrils are not yet well oriented.
- (6) The primary wall of young tracheid shows birefringency. We had better make distinctions of the "Cambial wall" and the "Primary wall".
- (7) In discussing the cell wall structure, the term "Layer" may be used generally in any case. When we treat the secondary wall of woods such as Coniferae, we had better use the term "Zone". The use of the term "Cambial wall" should be restricted only to the case when we treat the cell walls of the cambium and cambial zone.

My grateful thanks are due to Dr. II. Okada, Director of the laboratory, and Dr. Y. Ogura, Professor of the Tokyo University for their helpful suggestions and criticisms.

#### Literature cited

(1) T. Kerr & I. W. Bailey: J. Arn. Arb. 15 (1934). (2) a. I. W. Bailey: Am. Asso. Adv. Sci. (1940). b. I. W. Bailey & M. R. Vestal: J. Arn. Arb. 18 (1937). c. I. W. Bailey & E. E. Berkley: Am. J. Bot. 29 (1942). (3) H. F. Iewis: TAPPI. 33 (1950). (4) S. H. Clarke: Pap. Mak. 110 (1945). (5) W. K. Farr: J. Phys. & Coll. Chem. (1949). (6) a. A. Frey-Wyssling:

Protopl. 25 (1936). b. A. Frey-Wyssling: Naturw. 28 (1940). (7) K. Shimaji: Science Digest 1 (in Jap.) (1948). (8) G. I. Franklin: Tropical Woods No. 88 (1946). (9) S. Nagatomo: Sci. Forest Prod. 4 (in Jap.) (1949). (10) K. Hess: Papierfabr. 37 (1939). (11) A. L. M. Bixler: Pap. Trad. J. 107 (1938). (12) K. Mühlethaler: Biochim. et Biophys. Acta 3 (1949).

#### 摘 要

アカマツを用いて仮導管膜の構造特にその膜層を明らかにせんとし、顕微鏡的觀察を行つた。二次膜外帶は二層より成ることを知つた。この二層に初生外帶及び後生外帶の名を付した。一次膜は一般染色法によると中間膜葉(Middle lamella)と同様に行動するので両者の区別は出来難い。偏光の使用によつてのみその存在を確めることが出来た。形成層の細胞の膜は未だ重屈折性を示さない。これが仮導管に発展すると始めて重屈折性を示す。徒つて原生膜(Cambial wall)と云う用語と一次膜(Primary wall)と云う用語は区別して使つた方がよいと思う。即ち成長した仮導管に於ては一次膜なる語のみを使用したい。層(Layers)なる語は任意に使用されてよいが、二次膜を問題とする時は外帶、中帶、內帶と呼称するのがよいと考える。

#### 抄 錄

Wood, R.K.S., Gold, A.H. and Rawlins, T.E. 1952: Electron microscopy of primary cellwalls treated with pectic enzymes. (ベクチン分解酵素で処現した - 欠細胞膜の電子顕微鏡による濃察) Amer. J. Bot. 39, 132-133.

一次細胞膜の電子顕微鏡的觀察にあたつて、従来の maceration の方法にともなつた欠点を除く目的でペクチン分解酵素によりペクチン質を溶かし去る方法を用いた。 この方法は産来の方法にくらべて細胞膜に対する働きかたが緩いので、細胞膜内のセルロース液繊維 (fibril) 相互の構造を変えることなく、その間障を満たすペクチン質を除くことができ、また細胞膜の内外を区別すること、こらに細胞相互の関係をも観察ができる利点がある。

酵素液としては Bacterium aroideae の培養液を用い、これに植物材料を浸した。 カブの根端、キウリの果実・葉、ヒナゲシの花介、ジャガイモ塊壁、その他の材料が用いられたが、一次細胞膜 表層は既にMühlethaler (1950) が觀察したようにセルロース微繊維が織りなしたような構造であることが本法によっても確められた。 また、微繊維の大きも測定され前3者の植物材料ではセルロース微繊維の直径は 10-16mp であるという値が得られた。 (八 巻 敏 雄)

Lorenzo-Andreu, A.: Accion de varias sales alcelinas sobre la division cellular en *Allium cepa*. (タマネギの細胞分裂におよぼすアルガリ塩類のはたらき) Anal. Est. Exp. Aula Dei 2(2) (1951): 174~186. 3 figs.

タマネギの根の柔組織細胞に対する Li, Na, K, NH4, などのいろいろな塩類のはたらきをしらべた。これらの陽イオンのはたらきには系列があり、Li+>Na+>K+ $\sim$ NH4+である。しかし、陰イオンのはたらきには、いちぢるしいちがいはない。はたらきは溶液中の陽イオンの数によるものではないらしい。しらべられたどの物質も、約 $0.2\,\mathrm{M}$ が致死農度で、 $0.05\sim0.02\,\mathrm{M}$ は亞致死農度である。最も重要な反応は、擬間と染色体の牧縮で、この二つの影響はたがいに連関をもつており、凝固と收縮とを同時に誘導する濃度があるから、これらの影響は農度の函数であると思われる。 Li+ は精着をおこすことがいちぢるしく、C- 核分製も少しは見られた。

# Some aspects of behavior of the protoplasmic streaming in plant cells\*

#### By Toshio HAYASHI\*\*

林 俊郎: 植物細胞の原形質流動に関する二三の知見

It is generally known that the protoplasmic streaming is active in adult cells but is not conspicuous when the cell is young. Though the reason for this is not clear, it must be due either to the difference in the physico-chemical nature of the protoplasm in different developmental stages or to the difference in physical factors such as the size of the cell, the development of vacuoles, etc.

In the present report, special reference has been made to the behavior of the protoplasmic motion when the cell is bound off into smaller fragments. The internodial and leaf cells of *Chara Braunii* and those of some unidentified species of *Chara* were also used as materials. The unusually large size of the cell which we used permitted us to perform the operation of binding off the cell, an operation which is impossible with ordinary adult plant cells.

The rate of flow being sensitive to the change in temperature, in all the following experiments the cell was observed in a small water bath kept at 27°C and placed on the microscopic stage.

I) The rate of flow in relation to the length and width of the cell

The length of the internodial cells in nature varies from a few millimeters to 100 mm or so, the diameter being 0.2-0.4 mm, while the leaf cells are usually several millimeters long and 0.1-0.2 mm wide. The protoplasm in all the normal internodial cells having the diameter of about 0.3 mm flows nearly with the same velocity, namely  $75\mu$  per second, irrespective of the length of the cell.

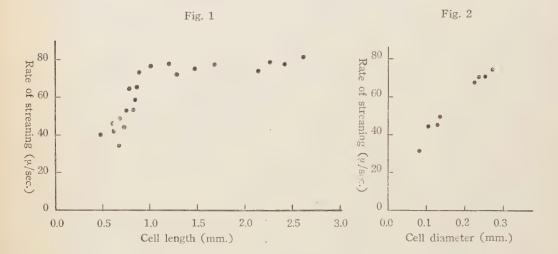
This situation can be demonstrated more clearly by a method applied by Linsbauer (1929), in which the cell is bound with a hair or silk thread. As a result of such an operation the cell is divided, without serious injury into two or more fragments. Such a procedure seems not to affect the activities of the cell. Each fragment thus divided not only survives for long time, but can even grow, under suitable conditions. In this manner, we can make cell fragments of any size we want, even smaller in size than those produced naturally.

<sup>\*</sup> This work was aided by the Grant in Aid for Fundamental Scientific Research from the Ministry of Education.

<sup>\*\*</sup> The Biological Institute, Faculty of Culture, University of Tokyo.

The rate and direction of the individual streaming in each fragment remain the same as before binding, provided the length of the cell fragment is above a certain limit. Fig. 1 shows the relation between the rate of the protoplasmic streaming and the length of the bound off cell fragment. From this figure we learn that the rate of flow is almost the same as that in the normal untreated cell, independent of the length of the fragments, if it exceeds 1 millimeter.

On the other hand, there is also a certain relation between the rate of flow and the diameter of the cell as shown in Fig. 2.

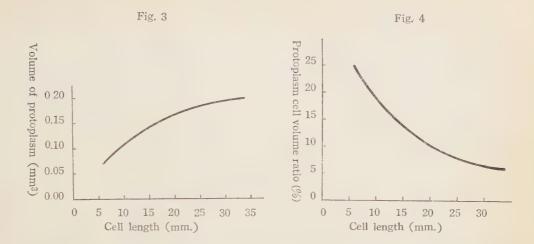


#### II) Protoplasm volume vs. cell volume

In an embryonic plant cell the space occupied by vacuoles is rather small as compared to the total space of the cell. This means that the ratio of the volume of protoplasm to that of the cell is high. This ratio, which may be called "protoplasm cell volume ratio", gets lower as the cell grows.

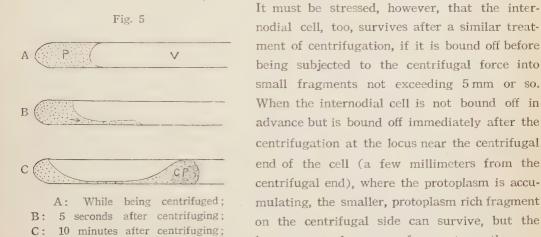
When a Chara cell is subjected to the centrifugal force of  $900 \times g$  for 4 minutes, practically all the streaming protoplasm is forced to accumulate at one end of the cell. Thus we can readily determine the volume of the protoplasm involved in the flow. As the cell volume is also to be measured without any difficulties in the case of *Nitella*, we are in a position to find the ratio mentioned above. Fig. 3 showing the relation of the protoplasm volume to the length of the cell reveals that the volume of the streaming protoplasm does increase as the length of the cell increases, but the cell elongates more rapidly than the volume of the protoplasm increases.

Therefore, the "protoplasm cell volume ratio", decreases as the cell grows as is seen in Fig. 4. The gel protoplasm, forming a very thin cortical layer of the protoplasm in which numerous chloroplasts are anchored, is not included here.



III) The behavior of the streaming protoplasm dislocated to the centrifugal end of the cell

The protoplasm forced to dislocate to the centrifugal end of the cell begins to flow 10-30 seconds after the centrifugal force is removed. In the case of small cells as well as leaf cells the normal state of streaming is completely restored only a few minutes after centrifugation. But this is not generally true of a grown-up internodial cell in which the streaming stops sooner or later, having covered a distance of a few millimeters as the coagulation of the protoplasm takes place eventually (Fig. 5).



(P: Centrifuged protoplasm sol;

CP: Coagulated protoplasm:

Vacuole)

space being filled with protoplasm, while the latter has only a very small quantity of the protoplasm. Though the rate of streaming in the smaller fragment filled with protoplasm is very low at first (less than 1/30 of the normal rate), it ap-

larger, protoplasm-poor fragment on the cen-

tripetal side will soon die. The former has

sometimes no visible vacuoles, the whole cell

proaches the normal state after a few days when vacuoles appear and develope in the protoplasm.

It is well known that many nuclei exist in the internodial cell. Centrifugation of the cell along its longitudinal axis forces these nuclei to migrate to one end of the cell together with streaming protoplasm, and hence the centripetal part has probably no nuclei. Chloroplasts are not stripped off in the force of the 1000–2000 × g of centrifugation from the cortical layer of the cell.

#### Conclusion

The above results show that the rate of protoplasmic streaming of Chara is independent of the length of the cell so far as the length is over a certain limit around 1 mm, whereas the rate decreases markedly below this limit. On the other hand, the protoplasmic streaming in the cell fragment the whole space of which is filled with protoplasm without microscopically visible vacuoles is rather insignificant.

It is generally true that the active streaming is usually found in adult cells, while young, small cells exhibit no conspicuous movement. Whether it is due to a more or less fundamental difference in the physico-chemical nature of the protoplasm in different developmental stages or simply to the difference in certain morphological factors, such as the size of the cell, the development of vacuoles, etc., we did not know.

The present experiments have shown that the centrifuging and binding method can bring about some physical conditions characteristic of the embryonic cell, e.g. the conditions which are small in size and rich in protoplasm, out of an adult cell. We know now that the protoplasm, which was flowing actively in an untreated adult cell, flows with much slower rate (1/30 or less) under the conditions above mentioned.

These facts lead us to assume that the absence of active streaming in an embryonic cell would be due, at least in part, to the smallness of the size of the cell, and especially to the poor development of vacuoles.

#### Summary

- 1. The internodial cell of Chara can be divided into two or more fragments of arbitrary length by means of a binding method.
- 2. The rate of the protoplasmic streaming is constant (78  $\mu$ /sec. at 27°C) so far as the length of the cell fragment is over about 1 mm, but under this limit the rate begins to decrease conspicuously.
- 3. The rate of the protoplasmic streaming is also affected by the width of the cell.

4. The ratio of the protoplasm volume to the cell volume, or the "protoplasm cell volume ratio" can be varied by means of centrifuging and binding method. The cell fragment which is unusually rich in protoplasm, or even the one which is filled entirely with protoplasm, can survive and grow, but it never shows active streaming until vacuoles develop to a certain extent.

The author wishes to express his most cordial thanks to Professor Bungo Wada and Professor Noburô Kamiya for their helpfull advice and directions throughout this work.

#### 摘 要

- 1. 車軸藻の節問細胞はくくりの操作によつて任意の長さにすることが出來る。 この操作 後も各部分は正常に生活する。
- 2. 車軸藻の原形質流動は、細胞の長さが  $1 \, \text{mm}$  以上では  $27^{\circ}\text{C}$  で  $78\mu/\text{sec}$  の流速をもつが、長さが  $1 \, \text{mm}$  以下になると急激に低下する。流速は又細胞の太さにも影響される。
- 3. 原形質量比 (原形質量の細胞容積に対する割合) は自然状態では、幼生細胞程大であるが、老生細胞でも遠心分離とくくりの操作によりこの比を高め、幼生細胞と同様の 形態的条件にすることが出来る。又空胞を含まない原形質ばかりの細胞を作ることも出来る。
- 4. 上記の操作により原形質量比を高めた細胞及び原形質ばかりの細胞は、何れも生活し成長することも出來るが、原形質量比を或程度以下にしたものは死滅する。

#### 抄鈴

朝比奈泰彦: 日本之地衣第二冊ウメノキゴケ属 (資源科学研究所, vi+162 pp., 23 pl., 定価 400 円, 1952 年 3 月発行).

第一冊ハナゴケビに次いて、得望のウメノキゴケビが出版書きれた。 現下の経済的事情から第一冊のように書店から発行されずに、研究所の出版物となったが、体裁も第一冊と同様であり、定価をつけて自由に購入できる形式で出版され、しかも文部省の研究成果刊行費の補助があったために定価も安く、更に植物学会会員や大学高校の学生教官工具に350円で分譲して費えるので好都合である。 内容は総論の部に集体とその構造、繁編器、種の区別の基調、組織研究法に関する注意、代謝産物の検索表及びミクロ化学的確定試験があり、各論とし日本領土内に産するウメノキゴケビ 75種10変種28品種が記載されている。 地衣頭の代表者ともいうべきウメノキゴケビのモノグラフがこの様な解説と記載と23葉もの図版とを伴って出版されたことは、誠に有難いことである。 (佐藤正巳)

### Studies on the Stomata of Potamogeton.

#### By Riyuji Shinobu\*

信人隆治: ヒルムンロ属植物の気孔について

Although many studies have been made on the stomata of the water plants, most investigators mismanaged to notice the presence of this organ on the submerged leaves and also on the lower sides of the floating leaves, excepting Sauvageau<sup>(1)</sup> and Uspenskij<sup>(2)</sup> who reported the presence of the stomata on the both surfaces of the submerged leaves, i. e., the former on *Potamogeton lucens*, and the latter on Potamogenton perfoliatus. However, I have never seen a report on the stomata on the lower sides of the floating leaves.

In the middle of last summer (1949), when I was observing the stomata on the upper side of the floating leaves of Helobie, I occasionally found the presence of some stomata on the lower side of the floating leaves of some species of *Potamogeton*, but I failed to find them on the lower surfaces of the floating and submerged leaves of *Nymphoides*, *Trapa*, *Brasenia*, *Nymphaea*, *Nelumbo*, *Spirodela*, *Hydrocharis*, *Salvinia*, as well as in majority of *Potamogeton*, such as *P. crispus*, *P. pusillus*, *P. Vaseyi* and *P. numasakianus*.

For my investigations, Dr. Shigeru Miki gave me many valuable suggestions and willingly provided me with his references, I also owe him in identifications of the materials used in the present study. Here I express my heartfelt thanks and gratitude for his kindness.

#### Observations and Discussions

Materials. In the present study materials used are *P. distinctus* collected by myself at Osaka and its environs in the middle of May, 1950 and cultivated in the pond of our institution and they have been compared with those from some other parts of Japan, together with other species from various localities in this country with single exception that from Utrecht, Netherland. There were two types of *P. distinctus* among my collections: one\*\* with comparatively thin leaves and slender stems which grew in the stagnant water (depth of water...about 30 cm, depth of muddy layer...30 cm), and the other\*\*\* with thick leaves and stems which were

<sup>\*</sup> Osaka Liberal Arts University, Hirano Branch

<sup>\*\* &</sup>quot;deep water form" after Dr. Miki. \*\*\* shallow water form" after Dr. Miki.

collected in the slow and shallow stream (depth of water...5cm, depth of muddy layer...about 20cm).

For the microscopic observations, the epidermis of the both surfaces were removed with a razor.

(a) Number of the stomata: In order to avoid the partial observations, the sections were selected from twelve different parts of the same leaf, that was almost matured. The following table shows the average number of the stomata of P. distinctus and some other species per mm<sup>2</sup>.

Tab. 1

	per	mm <sup>2</sup>		-		
Species	upper side	lower side	Habitat	Notes		
P. distinctus Benn.	196	3.6	Osaka	shallow water form		
27	188	0.75	21	deep water form		
P. malainoides Miki.*	207	0.06	Ikeda	hybrid between P, distinctus and P, malaianus,		
P. natans L.	136	0.1	Kyoto			
*	204	0.2	Nemuro			
***	132	0.0	Utrecht			
P. Fryeri Been.	136	3.0	Kyoto			
P. gramineus L.*	174	4.0	Nemuro			
P. cristatus Regel et Maack.	128	0.0	Osaka			

Number of stomata per mm<sup>2</sup> apparently fluctuates even in the same species owing to the growing conditions (Tab. 1) and it also depends on the developmental stages of the leaves (Tab. 2).

The number of the stomana on the both surfaces of the leaves are markedly variable, that is, they are numerous on the upper while very

Tab. 2

Number of stomata per mm <sup>2</sup> on upper surface (P. distinctus)								
needle-like shaped folded yound leaf	60							
folded leaf ready to open	238							
leaf beggining to open	234							
half-opening leaf	212							
completely unfolded leaf	196							

scarce on the lower surface which seems to have led many former investigators to overlook this fact. Furthermore, what is more interesting, is that in *P. distinctus*,

<sup>\*</sup> Collected by Dr. S. Miki.

<sup>\*\*</sup> Collected by Dr. T. Shinoda.

stomata are also present on the elongated peduncle. Their arrangement and structure are almost similar to those on the leaves, though the number of them is also variable in the different parts of a peduncle.

(b) Morphology of stomata: As the shape of the matured stomata on the upper surface is quite similar to those on the lower one, I have used the upper surface only is studying their structure. The superficial aspect of a stoma seems to be consisted of a pair of guard and subsidary cells, both being thin walled and lie parallel to the pore.

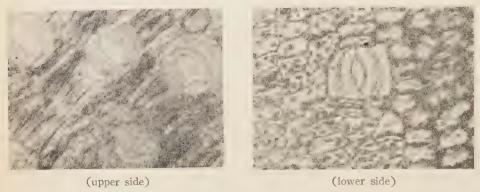
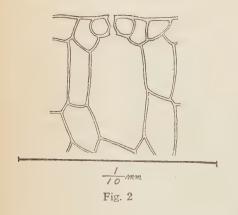


Fig. 1. Opened stomata of Pot. distinctus.

In the transverse section, outer and inner tangential walls of the guard-cells as well as the subsidiary cells show little difference in thickness, while the vertical walls between the guard and subsidiary cells are slightly thinner than the upper

and lower walls. (Fig. 2)



The arrangement is one of ordinary monocotyledon types, that is all stomata lie parallel to the leaf nerves. On the upper surface, I have very frequently seen the guard-cells that have almost completely opened, while those of the lower surface are opened far less than the former. I think that the physiological functions of the stomata on the lower surface have become weak by reason of attaching to water, because it is nonsense to open the guard-cells attached to water.

(c) Development of the stomata: As the formation of the stomata is accomplished so early that a young leaf is folded involutely fast and completly sheathed by the membraneous stipules, I encountered some actual difficulties in cutting sections off parallel to the leaf surfaces, but I have, at last, succeeded in obtaining

necessary sections, after unrolling repeatedly the young leaves in the successive stages of development. The mother cell of the guard-cells is formed by the first division, and they are found in transverse position to the surrounded cells. (Fig. 3, A) A pair of guard-cells are formed by the second division. (Fig. 3, B)

We could know that a few stomata are present on the lower surface of the floating leaves and they are quite similar to those of the upper surface in shape, development. orientation as well as in structure. In order to solve the problem why such an unnecessary organ exists on the lower surface in contact with the water, it

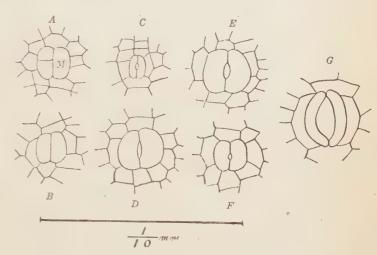


Fig. 3. The development of the guard-cells in *P. distinctus* (upper surface). A Mother cell of the guard-cells. M. Mother cell. B. Division of the mother cell. C, D, E and F. Various young stomata in one preparation. G. Matured stomata.

seems appropriate to consider that it is apparently meaningless physiologically in the plant used in the present study as well as *P. lucens*<sup>D</sup> and *P. perfoliatus*<sup>D</sup>, but it is only a pertinacious morphological recapitulation of their ancestral habit and this induces me to think that the genus *Potamogeton* is derived from some terrestrial ancestor. In this connection, Dr. Miki's opinion from the view point of floral morphology is quite suggestive and appropriate and he has given the following diagram and strongly insisted that the plants belonging to the genus *Potamogeton* have no affinity with Helobie but they are likely related either to Synanthae or Pandanales:



As revealed from my present study I am in a position to give a substantial support to his conclusion from my field.

#### Literatures

- Sauvageau, P. C. (1891). Sur les feuilles de quelques monocotyledones aquatiques. Ann. des. Sc. nat. Bot. Sér. 7. Bd. 13.
- Uspenskij, E. E. (1913). Schwimm- und Wasserblätter von Potamogeton perfoliatus L. (Bulletin de la Société impériale des naturalistes de Moscou). Nouvelle série. Tome XXVII.
- 3. Miki, S. (1937). The Phanerogams in Japan, with special reference to those of Prov. Yamashiro.
- 4. Miki, S. (1937). The Origin of Najas and Potamogeton. Bot. Mag. 2.
- 5. Solereder, H. (1908). Systematic Anatomy of the Dicotyledons. II. Oxford.
- 6. Schenk, H. (1886). Vergleichende Anatomie der submersen Gewachse. Bibl. I.
- 7. Harada, I. (1942). Chromosomenzahlen bei der Gattung Potamogeton. Medizin und Biologie. 1.

#### 抄錄

Freeland, R. O. 1951: The green pigment and physiology of guard cells. (孔辺細胞の緑色色素 および生理) Science 114, 94-95.

孔辺細胞の色素体は葉内細胞の色素体とちがう構造をもつことは古くから知られた。 また前者が葉線体であるかどうかの確証もなかつた。 これらのことから孔辺細胞の色素を決定しその生理作用を発めようと試みた。

表皮細胞が大きく、剝ぎとり易いため材料として Hymonocallis littoralis を選んだ。 表皮に一緒にくつついてとれて来た葉内細胞をかき取り、残りをアセトンで抽出する。抽出液を石油エーテル、水と共に振り、色素が移つた石油エーテルを分けとり、これにベンゼンを加えてクロマトグラフにかける。クロマトグラムは一層。これをメタノール・エーテルで溶出し、分光器にかけて吸収曲線をみる。 同様な操作で得た葉内細胞の色素はクロロフィル a、クロロフィル b、クサントフィル、カロチンの4層のクロマトグラムを与える。またこれらの吸収曲線のうちクロロフィル a に孔辺細胞色素の吸収曲線が似る。これらのことから孔辺細胞の色素体の色素は葉内細胞にある葉緑体とは異り、クロロフィル a だけである。

発光バクテリア Photolacterium Fischeri を懸濁した 01% KHCO3 中にカナダモなどの小片を浸し、無酸素状態にした後、光を与えると、その直後に発光が見られる。この方法で材料植物の表皮細胞の光合成を測定しようとしたが失敗した。その理由は表皮細胞をとり出すときの処置が光合成を阻害したか、あるいは、表皮細胞を体の酸素消費が孔辺細胞だけでする酸素発生に勝るために発光が起らないかであるう。

(八卷敏雄)

## Observational and Experimental Studies of Meiosis with Special Reference to the Bouquet Stage

VI. Chromosome and plastid behaviours in premeiotic and meiotic divisions and duration of various stages of meiosis in *Cyrtomium* 

#### By Tosisuke HIRAOKA\*

平岡俊佑: 還元分製特に花束期に関する觀察及び実験、VI. ヤブソテッに於ける 染色体とプラスチッドの行動並びに還元分製各期の時間。

In the present investigation, the chromosome and plastid behaviours in premeiotic and meiotic divisions and the time required for each stage of meiosis were studied in intact sporogenous and spore mother cells in *Cyrtomium* with special reference to the following two points; 1) whether the so-called synizesis is of natural occurrence or not, 2) the time required for the formation of the bouquet. The results obtained will be reported below.

#### Material and Method

Cyrtomium Fortunei was used as the present material. Sporangia were carefully detached from pinnules and were mounted in a drop of liquid paraffin or in a piece of agar jelly containing saccharose in a concentration of 0.19 M (Wada, 1943). Intact sporogenous and spore mother cells lying in situ in the sporangia were observed to study the chromosome and plastid behaviours in premeiotic and meiotic divisions. After the observation, the stage in nuclear division was determined in each spore mother cell in the sporangia in both intact and fixed states to estimate the relative duration of various stages of meiosis.

#### **Observations**

I) Chromosome and plastid behaviours in premeiotic and meiotic divisions.

There are three types of sporangia as to the number of spore mother cells contained in each sporangium, that is, sporangia containing sixteen spore mother cells of small size, those containing eight mother cells of medium size and those containing only four spore mother cells of large size. The origin of these types of sporangia

<sup>\*</sup> Botanical Institute, College of Science, Kyoto University. This investigation was supported by grant from the Science Research Fund of the Department of Education.

has been studied by Manton (1950). These three types of sporangia may be found together in one sorus, and their frequency may differ in different individuals. In a *Cyrtomium* plant used in this investigation, only one four-mother celled sporangium, 85 eight-mother celled sporangia and 17 sixteen-mother celled sporangia were found among 103 sporangia observed. As the eight-mother celled sporangia are of most frequent occurrence among these three types, the following description is made only in the eight-mother celled ones.

Sporogenous cells are polyhedral in shape and contain a few minute fat granules and colorless rod shaped bodies which are distributed in random positions in the cytoplasm. In the last premeiotic mitosis, all the eight sporogenous cells in each sporangium are in the same stage of nuclear division. In Fig. 1, in which only four of eight sporogenous cells are shown, metaphasic nuclear plates in side and polar views are visible. Polar separation of daughter chromosomes is usually suppressed and the restitution nuclei with chromosomes of di-diploid number are formed (Fig. 2). In the most cases cytokinesis is completely suppressed, but in rare cases incompletely.

In the interphase which precedes meiosis, spore mother cells are polyhedral in shape and the colorless rod shaped bodies become faintly green colored (plastids). The plastids make random distribution in the cytoplasm. The nucleus which takes the central position in the cell, does not show any visible nucleolus nor nuclear membrane, but it is filled with fine chromonema threads uniformly spreading over the whole nuclear cavity (Fig. 3).

When meiosis commences,\* the uniform distribution of chromonema threads is disturbed here and there in the nucleus (Fig. 4). In the leptotene stage, the chromonema threads or chromosomes are in a drawn out condition and the interchromosomal spaces are wider than in the previous stage (Fig. 5). In the most cases, the spore mother cells are spherical in shape, but in rare cases one or a few lobed spore mother cells are found in a sporangium, which may originate from the incomplete suppression of cytokinesis in the last premeiotic mitosis (See, Fig. 5).

In the bouquet stage, the nucleus is displaced from the central position to an eccentric one. The plastids, which took random positions in the cytoplasm in the previous stage, come to be localized in the broader region of the cytoplasm produced by the nuclear displacement, and in this region they form a tight group lying close to the nucleus (the "plastid pole", Hiraoka, 1949). Most of the fat granules are found in the region around the plastid group at the "pole". The nucleus is generally of spherical shape, but in some cases, the nuclear outline is slightly concave in the region just opposite to the "plastid pole" (cf. Doepp, 1932), The nuclear membrane

<sup>\*</sup> According to Manton (1950), spore mother cells undergo the normal process of meiosis in eight-mother celled sporangia.

is not visible in some cases, but in other cases the membrane separating the nucleus from the cytoplasm of the "plastid pole" is clearly visible.

The process of chromosome syndesis is traceable in intact state of the spore mother cells, and, the bouquet stage may be divided into three stages, the leptotene bouquet, the zygotene bouquet, and the pachytene bouquet stage according to the degree of chromosome pairing. In the leptotene bouquet stage, the chromosome threads are attached on a certain region of the nuclear membrane at least with one end and form the bouquet base. The base and the "plastid pole" take diametrically opposite positions in the cell. When the median optical section of the nucleus is examined carefully, 12-16 chromosome threads in parallel arrangement are found running straight in the region of the nucleus not so remote from the bouquet base (Fig. 6), while in the region of the nucleus remote from the bouquet base, the chromosome threads show whirling and irregular arrangements. In the zygotene bouquet stage, the median optical section of the nucleus shows that the region of the nucleus near the bouquet base is occupied by 7-9 polarized thick threads and the region of the nucleus remote from the bouquet base by thin ones which are still irregular in arrangement. This fact seems to show that the syndesis of homologous chromosomes begins first at the region of the chromosome threads near the bouquet base (cf. Darlington, 1937). In the pachytene bouquet stage, the chromosome threads become thick along their whole length indicating that the syndesis has been completed. The parallel arrangement of the chromosome threads as the bouquet is retained unchanged (Fig. 7). At the end of this stage, the plastids and the fat granules are set free from the grouping at the "plastid pole" and some of them emigrate along the nuclear surface towards the region opposite to the "pole". When they come to distribute themselves evenly around the nucleus, the bouquet arrangement of the chromosome threads also disappears.\*

In the prophase stages from the pachytene to the diakinesis (Figs. 8-10), the plastids and the fat granules are found in random positions in the cytoplasm. The nucleus takes the central position in the cell. The process of chromosome development in prophase, as has been described in fixed state of the spore mother cells (Doepp, 1932 and others), is also observable in intact state of the cells. For example, the chromosomes in the pachytene stage are shown in Fig. 8, those in the strepsitene in Fig. 9 and those in the diakinesis in Fig. 10.

In the first metaphase, the plastids and the fat granules are found in the cyto-

<sup>\*</sup> Similar chromosome and plastid behaviours in the bouquet stage are also observed in spore mother cells of the following 7 species of polypodiaceous ferns: Polystichum gemmiferum, P. polyblepharum, P. Hancockii, Dryopteris erythrosora, Pteris multifida, Blechnum nipponicum and Polypodium Thunbergianum.

plasm around the spindle, and they do not show any definite localization with respect to the spindle axis. The atractosome appears homogeneous, but in some rare cases, 1-2 minute granules are found within it. A nuclear plate in the first metaphase in polar view is shown in Fig. 11 and the plates in side view in Fig. 12. Though the chromosome number, which according to Manton (1950) is 123 in haploid, was not determined in the present investigation, more than 50 chromosomes are visible on the plate shown in Fig. 11. In the telophase when two daughter nuclei are reconstructed, the plastids form a layer in the equatorial region of the cell and the fat granules are found near the layer. The nuclear plates in the second metaphase are shown in Fig. 13. In tetrad cells, the green coloration of the plastids becomes very faint. The plastids and the fat granules are found here and there in the cytoplasm. The nucleus is uniformly filled with chromonema threads (Fig. 14). In spore cells, the nucleus takes an eccentric position near one end of the cell (Fig. 15).

II) Time required for various stages of meiosis.

In *Cyrtomium*, sporangia which form a sorus may be in various developmental stages, that is, some contain sporogenous cells, some spore mother cells undergoing meiosis, while others mature spores within. In 468 sporangia, each containing eight mother cells, the stage in nuclear division was determined in all the mother cells, and the number of the cells in each stage of meiosis was counted with the result given in the third column of Table 1. Assuming that the longer the duration of a certain stage in nuclear division is, the more frequently the cells in this stage are observed, a relative duration of various stages of meiosis is calculated from the result mentioned above taking the duration of the whole meiotic cycle to be 100 (fourth column of Table 1). In view of the fact shown by the observations of intact spore mother cells undergoing meiosis that the actual time required for the first anaphase is ca. 27 minutes at 20.8–23.0°C, an approximate estimation of the time required for various stages of meiosis is obtained, as given in the fifth column of Table 1.

In the preparations prepared after the agar jelly method, it was easy to keep the spore mother cells intact for two or three days. In favourable cases, the process of nuclear division from the leptotene to the pachytene or the diplotene can be traced in each cell. For example; a spore mother cell was in the leptotene stage at 1.40 p.m., May 18; in the leptotene bouquet stage at 6.00 a.m., May 19; in the zygotene bouquet stage at 7.30 p.m., May 19; in the pachytene bouquet stage at 8.00 a.m., May 20 and in the early pachytene at 7.30 p.m., May 20. In such cases, the process of appearance and disappearance of the bouquet arrangement of the chromosome threads as described in the previous item of this paper is clearly traceable. It seems noticeable that during this process no sign of the so-called synizesis is recognizable at all in intact spore mother cells.

Table 1

Stages	No. of spore mother cells and tetrads in each sporangium	No. of spore mother cells and tetrads found	Relative duration	Approx. time required (in min.)
Interphase		512	13.7	1233
Preleptotene stage		232	6.2	558
Leptotene	8	232	6.2	558
Leptotene bouquet	8	360	9.6	864
Zygotene bouquet		400	10.7	963
Pachytene bouquet	8	320	8.5	765
Pachytene	8	272	7.3	657
Diplotene	8	24	0.6	54
Strepsitene		34	0.9	81
Diakinesis	8	52	1.4	126
First metaphase	8	80	2.1	189
First anaphase	8	12	0.3	27
First telophase		38	1.0	90
Interkinesis and				
stages of second divis	sion 8	144 .	3.8	342
Stage of young tetrad.	8	552	14.7	1323
Stage of old tetrad	8	480	12.8	1152
		3744	99.8	

A further study to culture in artificial media of detached sporangia is under investigation.

### Conclusion

- I) The question whether the so-called synizesis is of natural occurrence or not. Bléař (1930) has had a doubt about the existence of the so-called synizesis as a normal process of meiosis and pointed out that the existence of the synizesis, if it really exists, must be demonstrated by an observation of appearance in the zygotene stage and disappearance in the pachytene stage of the synizesis in each cell. Our present observation along this line shows that the chromosome threads fill the whole nuclear cavity and no sign of the synizesis is recognizable at all in intact state of mother cells in the course of appearance and disappearance of the bouquet arrangement of the chromosomes.
  - II) Time required for the bouquet stage.

There are a few reports on the time required for various stages of meiosis. Jaretzky's result (1930) covers the stages from the diakinesis to the first telophase in *Alnus*, Rosenthal's result (1936) the stages from the post synizetic stage to the tetrad stage in *Anemone* and Steinitz's result (1944) the stages from the pachytene to the tetrad stage in *Tradescantia*. Unfortunately, these results teach us next to nothing about the duration of the bouquet stage. According to our result obtained,

in *Cyrtomium*, the bouquet stage lasts more than half of the whole prophase duration (preleptotene-diakinesis). In view of the fact that the syndetic chromosome pairing is accomplished in the nucleus during this stage, the above mentioned fact may be taken to show that it requires a long time for the syndesis to complete its process.

### Literature Cited

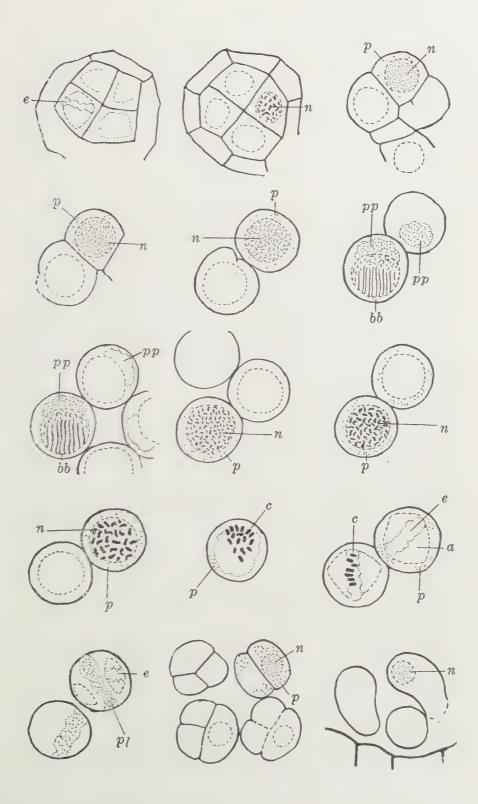
Bélař, K. (1930) Protoplasma Bd. 9, pp. 209 242: Darlington, C. D. (1937) Recent advances in cytology. 2nd. ed.: Döpp, W. (1932) Planta Bd. 17, pp. 86–152: Jaretzky, R. (1930) Planta Bd. 10, pp. 120–137: Hiraoka, T. (1949) Bot. Mag. Tokyo Vol. 62, pp. 19–23: Manton, I. (1950) Problems of cytology and evolution in the pteridophyta: Rosenthal, C. (1936) Jahrb. wiss. Bot. Bd. 83, pp. 809–844: Steinitz, L. M. (1944) Amer. Journ. Bot. Vol. 31, pp. 428–443: Wada, B. (1943) Cytologia Vol. 13, pp. 139–145.

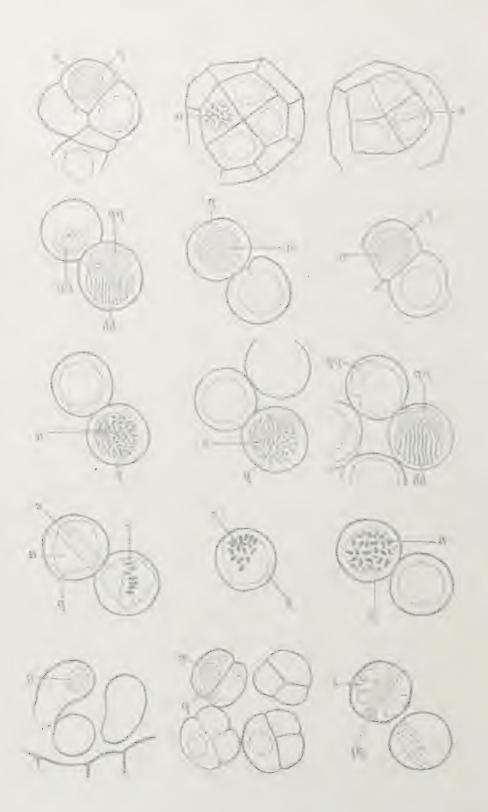
### **Explanation of Figures**

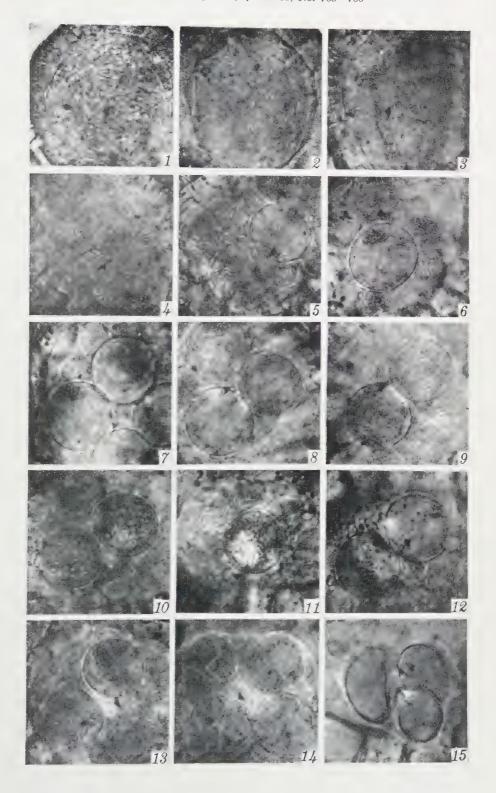
Figs. 1-15. All the figures are photomicrographs of sporogenous cells, spore mother cells and spores of *Cyrtomium* in intact state taken with an apoch, imm. obj. of C. Zeiss (2 mm, n. A 1.30) and a periplane oc. of E. Leitz. Magnification, 720×.

Fig. 1. Last premeiotic metaphase: Fig. 2. Last premeiotic telophase: Fig. 3. Interphase just preceding meiosis: Fig. 4. Preleptotene stage: Fig. 5. Leptotene: Fig. 6. Leptotene bouquet stage: Fig. 7. Pachytene bouquet stage: Fig. 8. Pachytene: Fig. 9. Strepsitene: Fig. 10. Diakinesis: Fig. 11. First metaphase, polar view: Fig. 12. First metaphase, side view: Fig. 13. Second metaphase: Fig. 14. Tetrads: Fig 15. Spores.

p, plastid; pp, plastid pole; pl, plastid layer; n, nucleus; c, chromosome; bb, bouquet base; e, equatorial plate; a, atractosome.







## サポニン溶液によるアオミドロ異狀細胞について

## 鳥 山 英 雄\*

Hideo TORIYAMA: On the abnormalities of Spirogyra cells caused by saponin solution.

サボニン類の生細胞に及ぼす影響について、動物に関しては赤血球の溶血作用が知られている。植物細胞においては Boas (1920<sup>1</sup>), 1922<sup>2</sup>)) が高等植物細胞につき、又酵母の醱酵及細胞に及ぼすサボニンの作用を研究している (1920)<sup>3</sup>)。同氏はサボニンは原形質表層のリボイドをつくるレチシン、コレステリンのコロイド狀態を変化させると述べている。 Kofler & Schrutka (1925)<sup>4</sup> のコレステリンに対する毒物としての報告、近くは Munthiu (1933)<sup>5</sup> の Helodea canadensis, Spirogyra, Allium cepa. 等のグリセリン等の透過性に及ぼすサボニン類の影響が報告されている。 筆者はサボニンの稀釈溶液がアオミドロ細胞に異状形態を呈せしめることを觀察したのでこれらに関する二三の知見を報告する。



材料及実験方法: 材料としては池水中に数日保つたものを水道水で洗滌した後,つぎの溶液中\*\*に保つた。 即ち深底のシャーレに 50 c.c. のサポニン各濃度 (0.1, 0.01, 0.001, 0.0001, 0.00001%, 対照として水道水のみ。 pH はすべて 5.3-5.4) の溶液中に入れ,これにアオミドロ40 mg づつ入れ一定時間後に觀察した。 叉遠心力\*\*\*\*を加えるにあたつては,各濃度と同じ溶

<sup>\*</sup> 東京女子大学生物学教室

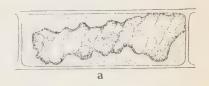
<sup>\*\*</sup> 本実験に使用せる溶液はすべて水道水を用いた。

<sup>\*\*\*</sup> 分遠心力は 2000/sec. を 30 秒間すべての材料に同時に加へた。

液に浸したガーゼ及び濾紙の間に村料をはさみ、之を外部より滤紙で巻き、更に厚紙で遠心器 中に保つた。尚本実験は4月上旬、中旬に行つた。

実験結果及び考察: 1) 0.1, 0.01% に保つたものは 45-60 分では第2図 a,b の如く害

が現れる。葉緑体は膨潤し螺旋を乱し内部に凝固し、細胞膜との間には異狀を呈した細胞質が充満する。b の如く異 狀原形質分離を起すものもある。これらを 0.5 モルー0.8 モルの葡萄糖溶液中に保つても原形質分離を起さない。 又遠 心力を加えても細胞内容物の位置は変化しない。 これは原 形質の表層は勿論内部のリポイドがサポニンと結合したための害作用によるものと思われる。 2) 0.0001, 0.00001%溶液中に保つたものは 40 時間後においても殆ど異狀を呈さない。 稀に葉緑体が膨潤し、且つ細胞質と細胞膜との間に不規則な分離を呈するものが少数見られる。遠心力による知見は対照によるものと殆ど差がない。60 時間経たもの



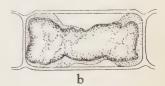


図 2. a, b. 0.1%, 45—60 分

も対象と変りがない。3) 0.001% に保つたものは 40 時間後では殆ど害作用をうけないが、稀に 薬緑体の膨消するものがまる。60 時間後に於ては比較的若い細胞の多くが害をうけるが、成長 した細胞は対解と殆ど変りがない。これらを 0.5 モルの葡萄糖溶液中 に入れると第1 図 a の如 く原形質分離を起す。 尚若い細胞は葡萄糖溶液に入れる以前に b の如く、葉緑体は膨潤を起し 細胞質は凝固して細胞膜より離れている。 これらの 細胞を 0.05~0.1% のカフェイン中に保 つと害をうけぬもの (a) は液腔内にタンニンによるプロテオゾーメンの沈澱を生ずる。害をう けたもの (b) はこの反応は認められない。これは原形質の変化によりタンニンを含む細胞液 の流出によるものと思われる。 倚 Boas (1920) はサポニンは植物細胞に於てアントチアンや タンニン等の溢出をうながすことを報告している。 遠心力を加えると第3 図 a に示す如く細胞



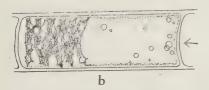


図 3. 遠心力処理. a. 0.001% 60 時間 b. 対照。

質は僅に 細胞膜より離れるのみであるが、薬緑体は 位置を変える。(b) は対照に遠心力を加えた場合で ある。サポニン処理では油滴はみとめられぬが、対照 は油滴がのこるのが見られる。80—100 時間後に於て は第1図c,d及び第4図の如く異状形態を示す。 之 等は原形質分離を起し難↓い。 遠心力による知見は 対照と殆ど変りはない。 又カフェイン中に保つと第 1図dの如くプロテオゾーメンの沈澱を生じ、細胞液 の流出は行われていない。 しかし中には第4図cの 如く突出した原形質の先端より細胞内容物(細胞液) の吐出するものがある。 荷突出部は原形質膜を形成 しているものと思われる。 又第4図a,bの如く先端

の一細胞が遊離する場合がある。これらの異狀は細胞膜(主として内層)及び原形質表層のサポニンによる変質のためと思われる。又細胞質を伴つて葉緑体が突出するのは、細胞膜質の変化のためと、葉緑体の細胞質に対する表面活性の平衡が破壊された為とも考えられる。 尚以上の外、異狀細胞の膜質及び突出部原形質の性質に関する報告は他の機会にゆずる。

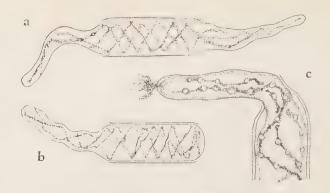


図 4. 0.001% 80-100 時間. a, b. 遊離細胞. c. 細胞液吐出.

### 摘 要

- 1) アオミドロをサポニンの数種稀釈溶液中に保つて一定時間後に、原形質分離,遠心力, カフェイン処理によつて対照と比較した。
  - 2) 0.1%, 0.01% 処理は 45-60 分で害作用をあたえ死に至らせる。
  - 3) 0.0001, 0.00001% は 40-60 時間後に至つても殆ど害作用をあたえない。
- 4) 0.001% は 60 時間後に於て比較的若い細胞に害作用をあたえ且つタンニン含有の細胞液を流出せしめる。80-100 時間後となれば,第 1 回 c, d 及び第 4 回の如き異狀形態を呈せしめる。この際にみられる細胞質を伴う葉線体の突出は,細胞膜,細胞質及び葉線体のサポニンによる膠質化学狀態の変化のためと思われる。 終りに本実験にあたり御助言を賜つた多羅尾四郎教授に深謝の意を表する次第である。

### Summary

The present author observed the effect of saponin solution upon *Spirogyra* cells. In 0.1 or 0.001 per cent solution cells suffered damage after 45-60 minute, but in 0.0001 or 0.00001 per cent solution cells were not affected even after 40-60 hours. Chloroplasts of younger cells were coagulated in 0.001 per cent solution in 60 hours, and the cell sap which contain tannin substance diffused out of the cells. After 80-100 hours various figures of abnormalities were observed as shown in text-figures 1 (c, d) and 4. The chloroplast and cytoplasm were both protruded from the cells forming thin protubelances. These phenomena are supposed to be the effect of saponin, which changes the colloidal condition of the protoplasm and the cell wall.

## 文 献

1) F. Boas: Ber. 38, 359 (1920). 2) F. Boas: Ber. 40, 249 (1922). 3) F. Boas: Ber. 40, 32 (1922). 4) L. Kofler & W. Schrutka: Biochem. Z. 159 (1925), 5) O.B. Munthiu: Protoplasma 18, 441 (1933).

# 本邦產土壤放射狀菌の分類学的研究\* II-1

## 升本修三\*

· Shiuzo MASUMOTO: Taxonomic studies of soil Actinomyces in Japan.

先に著者(1943)は本邦上基から分離した放射状菌に就いて、その形態並に生理作用を調べ、放射状菌類分類上の基據となるべき。諸性質に就いて若干の知見を得たが、その後引き続きその結果を参考にしつつ本邦産土塩放射状菌の分類を試みている。本報に於いては著者が分離した多数の放射状菌の中、外国産放射状菌の記載とほぼ完全に合致するもの4種を報告する。

種の同定に当つては、外国に於いて命名、記載された放射状菌の type culture と実地に比較対照する事ができなかつた為、完備せる記載の具つた学名を採用する方針をとつた。

本質究の遂行に当り、懇篤な御指導を賜わつた岸谷貞治郎教授田中潔助教授、著者のため 土壤試料を採取、久自も分離せられた放射狀菌を惠与された住吉匡氏、更に顕微鏡写真撮影に 際して御尽力下さつた下斗米直昌教授及び橋本忠氏に衷心より感謝の意を表する。

### 培養條件及び実験方法

培養基: 種の同定に際して Krainsky (1914) 及び Waksman (1919) の原記載と比較する為,まず最初はこれら両者が記載に際して用いた培養基と全く同し処方のものを用いて試験したが、その後 放射服菌の種々の特質を考慮してとれらの培養基の組成に青子の修正を加えたものを用いて記載し直した。 下に著者が記載に用いた培養基の組成及び特質を記す。

- 1. 蔗糖寒天: 蔗糖 (サツカロース, 純品) 10g, NH4Cl 1g, K2HPO4 1g, MgSO・7H2O、0.5g, NaCl 0.5g, CaCO3 1g, 蒸溜水 1l, 寒天 15-20g, pH=7.0. 以下の培養基は特に記入のない限りすべて pH を 7.0 に調整した。本培養基は Waksman のいわゆる Synthetic agar に著者が改良を加えたもので Waksman は之を主として放射制荷の頻散鏡的形態 (殊に気中菌糸の形態) の概然の為に用いたが、著者は放射制菌の反構利用力を試験することを主要な目的として本培養基を採用した。 その為に無糖は純品を用い、又窒素源としては放射狀菌類にとつて硝酸塩より利用範囲の広いアンモニウム塩 (第1報 114ページ参照)を用いた。
- 2. グリセリン・アンモニウム寒天: グリセリン 10cc, クェン酸カルシウム 10g,  $NH_4Cl$  1g,  $K_2HPO_4$  1g,  $MgSO \cdot 7H_2O$  0.5g, 蒸溜水 1l, 家天  $15 \cdot 20g$ . 本培養基は放射狀菌の発育の結果その反応が酸性側に移り、形成された色素の酸性側に於ける色調が概察される特徴を有している。
- 3. グリセリン・硝酸寒天: グリセリン 10cc, NaNO<sub>3</sub> 1g, K<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub> 1g, MgSO<sub>4</sub>・7H<sub>2</sub>O 0.5g, <u>蒸溜水</u> 1/3, 寒天 15-20g. 本培養基では前者と逆に形成された色素の塩基性側に於ける色調が觀察される。
- 4. 葡萄糖寒天: 葡萄糖 10g, アスパラギン 0.5g, K<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub> 1g, MgSO<sub>4</sub>・7H<sub>2</sub>O 0.5g, 蒸溜水 11, 寒天 15-10g. 本培養基は、Krainshy 及び Waksman の用いた培養基に少し改良を加えたものであって、総べての放射状菌の発育に好適であり、菌株の保存に最も適している。

\* 本研究費の一部は日本学術振興会補助金に負うている。 本報告日昭和18年末広島文理科理科紀宴(植物学)第5巻に投稿したものであるが,その後印刷不能となり第3報の後になつたものである。

- 5. 澱粉寒天: 可溶性澱粉 10g, (NH4)2SO4 2g, K\_HPO4 1g, MgSO4・7EO 1g, NaCl 1g, CaCO3 3g, 蒸溜水 1l, 寒天 15-20g. 本培養基は Waksman の処方通りであつて、アミラーゼの作用を試験するに用いる。そして又本培養基は気中菌系の発育を促し、他のいずれの培養基に於いても殆ど気中菌系を形成しない菌株も本培養基に於ては非常によく之を形成する。 従つてかかる菌株に於いては菌株保存に必要缺くべからざる培養基にある。
- 6. ブイヨン寒天: ペプトン 10g, 肉エキス 5g, NaCl 5g, 蒸溜水 11, 寒天 15-20g. 本培養基上に 於ける放射狀菌の発育は概ね一様であつて、種の特徴を示すことが少い。即ちこの培養基に於いて形成され る色素は他の合成培養基に於けるように多様性を示さないし、又気中菌糸の発育は極めて不良で、たとえ生 ずることがあつても種の特異性に乏しい。 しかし分類上重要な褐色系水溶性色素形成の有無を試験するに必要な培養基である。
- 7. 馬鈴薯; 馬鈴薯をコルク拔で棒狀にくり拔き,一端を斜面にして試験管に入れる。 本培養基上で は上記褐色系水溶性色素の形成される場合はその色調が濃厚(殆ど黑色)顯著である。
- 8. ゼラチン; ゼラチン 150-200g, 蒸溜水 11. 褐色系水溶性色素の形成並に溶出性蛋白質分解酵素の作用の强弱を試験する目的で使用する。
- 9. ラクムス牛乳: 市販の牛乳にラクムスを加え中性とする。 本培養基では発育狀態のほかに、牛乳の凝固,透明化 (ペプトン化),牛乳の色の変化 (褐色系色素形成の有無,逆に絶父はアルカリの形成による反応の変化) 等を試験する。
- 10. 葡萄糖ブイヨン: ブイヨンに葡萄糖 1% を加える。 放射狀菌の発育狀態のほかに、葡萄糖より酸の形成の有無を試験するのに用いる。
  - 11. 蔗糖液: 蔗糖塞天中塞天を除く培養液で真糖塞天と共に主として烹糖利用力を検するのに用う。
- 12. チロシン寒天: グリセリン 10g, アスパラギン 0.5g, チロシン 0.5g,  $K_2HPO_4$  1g,  $MgSO_4$  0.5g, NaCl 0.5g, 蒸溜水 1l, 寒天 15-20g. 本培養基は放射釈菌がチロシナーゼによつてチロシンから 照色乃至 無褐色の水溶性色素 (所謂メラニン系色素) を形成するか否かを試験する為に用いる。

培養溫度: 培養には総べて 30°C の定温器を用い、ゼラチンの場合にのみ 20°C で培養した。

培養期間: 普通 10 日乃至 14 目間培養し, その間適時発育上の諸性質を記載した。

**色素の**記載: 放射版菌によって形成される色素は第1報 (111~112頁) に述べたようにかなり変化に富むから、まず総称的な色名を掲げ、更にこまかい色名は和田三造編色名総鑑の色番号(1) に従う。47/86 はその色が47と86 の中間色であり、60 dil. は60と同じ色調であるがこれより薄い事を表わす。

生理実験: 諸種の生理作用を試験する為に次のような方法を用いた。

1. 色素形成: ここに言う色素とは主として特殊な色素(恐らくメラニン系色素)を指している。 先に著者 (1943, 107頁) が定めた定義に従い、ゼラチンに於いて褐色系叉は緑色これは 前者と同一系統の色素であるが螢光現象の為, このように見えるのである) の水溶性色素を形成する菌株をクロモゲヌス類, 然 bざるものをアクロモゲヌス (Achromogenus)(2) 類と呼ぶ。

上記のチロシン寒天を用いて培養試験を行うと、上の定義に於けるクロモゲヌス類の 菌株 は殆ど例外なくこの培養基を黑変させた。 これに反してアクロモゲヌス類に属する菌株は一として培養基を黒変させたものはない。こうしてクロモゲヌス類とはチロシナーゼの作用を行する菌株属と考えて差支えない。 これに関する詳細は別に報告する。

- 農素源の利用: 基本液 (K<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub> 0.5g, MgSO<sub>4</sub>・7H<sub>2</sub>O 0.5g, NaCl 0.5g, FeSO<sub>4</sub>・7H<sub>2</sub>O 0.01g, 蒸 溜水 1l) に窒素源 NH<sub>4</sub>NO<sub>3</sub> 01%, 各種の農素源 1% を加えた培養液と、更に無大を加えた固体培養素を
  - (1) 色番号の前には No. を附けず, 菌株番号の方には No. を附け, 両者の混同を避けた。
  - (2) 第1報で非クロモゲヌス類と名づけたが、これをに新にアクロモゲヌス (Achromogenus) 類と呼ぶ。

用いた。 第 1 報の結果を参考にして、比較試験の主要な対象としてはマンニット、黒糖及び乳糖を選んだ。 先に著者が(1943、120ページ) 蔗糖及び乳糖の利用に関する変異の一例を報告しておいたように、これらの炭素源利用に関する菌株の性質は絶対的なものではたく、変異を起すことがある。本報告中にもその例が青干ある。即ち Actinomyces roscochromogenus に属する菌株の大部分は乳糖利用力を殆ど缺いているが、No. 40 及び 68 は共に乳糖寒天に於いて二次的に乳糖利用力をもつ娘聚落を生じる(第 4 表)。而して他方同じ種に属すると考えられる No. 165 は分離し始めから乳糖利用力を分つていることは上の変異と

菌	株	(1)螺旋形成	(2) 炭 素 源 の 利 用					
<b>述</b>	(無糖寒天)	マンニット	鷹 糖	乳糖	イヌリン			
No. 2	2 (2-a)	₩*	+	+	+	土		
39	(2-b)	+	+	+ 1	+	±		
: 2	2-c	+	+	+ .	+	土		
.1	(2 d)		+	+	+	±		
2	2-е	1 1.	+	+	+	±		

第1表 A. violaceus·ruber に属する諸菌株の性狀

(1) 平: 螺旋ジ多い。 十: かなり多い。 十: 少い。 土: 殆んどない。 一: 全くない。 (2) 卅: 発育極めて良好。 卅: 良好。 十: 弱い。 土: 極めて弱い。 \* 螺旋を全く形成しないことがある。

関連して興味が深い。 即ち上の事実から、かかる変異は人為的のみでなく、天然に於いても起るのではないかという事が想像される。又同じ Act roseochromogerus の中には乳糖の外に、蔗糖、マンニットに就いてもこれをよく利用する菌株と、これを利用し得ない菌株とが存在するが、著者は未だ本種に於いてこの両種の炭素源に関する聚落解離の現象には遭遇していない。 更に Act viridochromogenus に属する菌株の大部分は蔗糖を利用し得ないが、これをよく利用する菌株がある(第2表)。 しかしこの場合にも著者はまだ聚落解離の現象を觀察していない。

			基生の色	螺旋形成	炭素源の利用					
		(グリセリン・ア) ンモニウム寒天)		(下海塘窜天)	マンニット	蔗糖	乳糖	イヌリン		
No	. 20	(20-a)	帶	紫灰	色	#	+		#	±
	61	(20-b)	带	紫褐	色	##	-11	± _	#	· ±
	55	(20-c)	黄	褟	色	+	+	±	#	±
	116	(20-d)*	带非	象薄墨	色	#	11	±	+	±
	36	(20-e)	暗	裼	色	##	+	土	#	±
	85		褐		色	down	++	+	#	+
	99		黄		色	#(c)**	++	++	#	. #

第2表 A. viridochromogenus に属する諸菌株の性狀

<sup>\* 20-</sup>e, f, g, h, i, j, k の7菌株は 20-d と同じ。\*\* 螺旋の形はコルク抜状。+は1表と同じ。

- 3. 糟類よりの酸形成: この実験に用いる培養基はクロモゲヌス類とアクロモゲヌス類とで異なり、後者ではアイヨンに各種の槽類 1% を加えた培養液を用いて試験したが前者ではアイヨンを用いると褐色色素溶出の為, pH 指示薬の色調が認め難くなる故,この場合には基本液+尿素 (0.1%)+槽液 (1%) を用いて試験した。どの場合にも pH 指示薬には B.T.B を用いた。
  - 4. 蔗糖よりの還元糖形成: 培養蔗糖液にフェーリング氏液を加えて加熱して還元糖を検した。
- 5. 硝酸よりの亞硝酸形成: 培養液には主として、基本液+NaNO<sub>3</sub> (0.1%)+葡萄糖を用いた。 培養 4—5日の被検液を酸性にし、之に新鮮な沃化カリウム澱粉液を加えて亞硝酸の検出を行つた。
- 6. 蓚酸形成: (基本液+NH4NO3 (0.1%)+炭素源+寒天) に培養し、凡そ2週間後に基生の一部及 びその周囲の寒天を採つて蓚酸カルシウムの結晶の有無を觀察した。
- 7. 蛋白質分解作用: 蛋白質分配の强度は一方ゼッチンの液化速度,液化範囲,液化部の透明度等と,他方牛乳のペプトン化(透明化)速度,範囲,透明度等から判定した。
- 8. 澱粉分解作用: 澱粉寒天をシャーレ中に平板とし、これに接種後4-5 目目にヨウ素・ヨウ化カリウム液を加えて、澱粉が加水分解された結果沃度反応の現われない部分の幅(景落の縁辺と沃度反応の現われている境界線との幅)を測定した。澱粉分解の記載中の数値にこの幅を mm で表わしたものである。
- 9. 脂肪分解作用: 融解したアイヨン寒天に少量のバターを加え强く振盪して作つた脂肪の乳濁液をシャーレ中に入れて平板に凝固させ、これに接種し聚落の周囲が透明になつたものを陽性、そうでないものを陰性として表わした。
  - 10. セルローズ分解作用: Omeliansky 氏液に濃紙片をつけて、これに接種し、濃紙の消化を見た。

### 種の記載

本報告で発表する4種の放射状菌はどれも既に各国に於いて記載された種であるが、著者の用いた培養 基は原記載に用いられている培養基とは少しく組成を異にし、かつ又著者の実験によつて若干補正された 記載個所もあるので、やや重復の嫌いはあるが、改めて全体に亘る記載を下に記すことにした。

I. Actinomyces violaceus-ruber Waksmem & Curtis (1919, p. 160); Sny. Act. violaceus Waksman & Curtis (1916, p. 110); Act. coclicolor (Müller) Lieske (1921, p. 28); Act. waksmanii Bergey et al. (1930, p. 489); 又 Bergey's Manual of Determinative Bacteriology, Ed. V (1939, p. 867) によれば Act. tricolor Wollenweber も同種であるという。

分離菌株: No. 2 (2-a)山地, No. 39 (2-b) 堆肥, No. 2-c 畑地, No. 44 (2-d) 厩肥, No. 2-e 植木鉢の土, No. 2-f, No. 2-g, 畑地. 分布: やや普通の土壌放射駅南である。形態(小糖寒天): 螺旋:多し。旋回緩し (open typc) (第1及び第2図) 稀に之を生じないことがある (第1表)。

分生子: 短卵形, 1.0×1.2p.

培養所見: (主として No. 2-a に就いて)。

- 1. 点糖寒天: 基生 (基生菌叢): 発育は弱い裏面淡青色 115 又は 116 (5 日),後深青色 117 (15 日)。 気菌 (気中菌叢): 白色僅かに青色を帶びる。後 (15 日) 灰色を帶びるに至る。 培養基の着色: 他の培養基に於いては溶屑性色素の形成が顯著であるが、本培養基に於いては溶屑性色素の形成が顯著であるが、本培養基に於いては発育不良の爲色素形成 が弱く殆ど滲出せず、僅かに淡青色の色素が滲出することがある。
- 2. グリセリン・アンモニウム寒天: 基生: 初め(5日) 赤器色(49 又は 62),後次第に紫色となり(15日),遂に濃青色(115, 116, 117)となる。 気菌: 薄く,粉狀. 初め黄白色,次第に灰汁色(33)となる。 培養基の着色: 色素は非常に拡散しやすい。初めピンク(60 又は 69),次第に赤紫色,次いで青紫色,最後に培養基全体が濃青色(115, 116, 117)となる。
- 3. グリセリン・硝酸等天: 漑ね前者と異なるところがない。 只色素の滲出は最初より青色で, 次第 に濃厚となる。気菌は白色, 青色を帶びる。

- 4. 葡萄糖寒天: 前者と大差がない。
- 5. 澱粉寒天: 基生: ピンクより赤色に移り, 次第に赤紫色 (89 又は 93) となる。 気菌: 初め 白色, 後灰褐色 (33 に近い)。 滲色: ピンク, 後少しく青みを帶びる (79 に近い)。
- 6. ブイヨン寒天: 基生: 初めクリーム色,後次第に朱色 (63 叉は 59) となり,更に青色となる菌株 (No. 2-a) がある。これに反して No. 2-b, No. 2 d は赤色の儘で青色とならない。 気菌: どく僅かに生ずるか,或は全く生じない白色。 培養基の着色; 青色。
  - 7. 馬鈴喜: 基生: 赤色後青色. 気菌: 白色後灰白色,青みを帶びる。 培養基の着色: 濃青色.
  - 8. ゼラチン: 基生: 裏面青色. 気菌: 僅かに生じ, 白色. 培養基の着色: なし。液化: 中等の强度。
- 9. ラクムス牛乳: 発育: 表面に浮び菌膜を形成する。 青色, 次第に濃青色となる。 牛乳の色: ラクムスは褐色し, 上色となるが, 次第に青色を帯びた暗色に変る。 牛乳の凝固: 認められない。 透明化: 中等の強度.
- 10: 葡萄糖プイヨン: 発育: 一部は浮き,一部は沈んで発育する。前者は液面に於いて薄き皮膜を 形成し, 裏面も色を呈する。 培養基の着色: なし(15日)。
  - 11. 蔗糖液: 発育: 微弱。雪片狀,液中に散在する。 培養基の着色: なし。

生理作用: 1. 色素形成: 総べての菌株はブイヨン寒天並にゼラチンに於いて褐色系水溶性色素を形成せず, 又チロシン寒天に於いては青色色素を形成するが, 黑色色素を形成しない。即ち本種はチロシナーゼ陰性である。

- 2. 炭素源の利用: 蔗糖、乳糖、マソニットを利用し、イヌリンは殆ど利用し得ない。(第1表参照)
- 3. 糖類よりの酸形成 (No. 2-a に就いて):

- 4. 蔗糖よりの還元糖形成 (No. 2-a): 概ね常に陰性。
- 5. 硝酸よりの亞硝酸形成 (No. 2 a): 非常に著しい。
- 6. 蓚酸形成 (No. 2-a): 蔗糖, 葡萄糖, 醋酸フマル酸, コハク酸, クエン酸, グリセリン, グリコール, グリコール酸, 蟻酸のどれからも常酸を形成したい。
  - 7. 蛋白質分解 (No, 2-a): ゼラチン, 牛乳共に中等の强度。
  - 8. 澱粉分解 (No. 2-a), 弱い。2 mm
  - 9. 脂肪分解 (No. 2-a): 陰性。
  - 10. セルロース分解 (No. 2-a): 陰性 (30 日)

特徴: 本種はチロシナーゼ陰性にして、種々の人工並に自然培養基に於いて、その時の培養基の反応 に応じて赤色、紫色乃至青色(多くの場合赤色及ひ紫色は培養が占くなるに従つて青色に移る)の水溶性色 素を形成し、培養基全体を着色せしめるところの極めて特徴ある種である。

II. Actinomyces viridochromogenus Waksman (1919, p. 163); Syn. Act. viridochromogenes Krainsky (1914, p. 684); 又 Baldacci (1939) によれば Act. (Streptothrix) viridis で Lombardo-Pellegrino (1903) も之と同種なりという。

分離菌株: No. 20 (20 a), No. 61 (20-b), No. 55 (20 c), No. 116 (20 d), No. 137 (20-e), No. 140 (20-f), No. 20-g, No. 20-h, No. 20-i, No. 20-j, No. 20-k, No. 36 (20-l), No. 85, No. 99 等。 とれも畑地産。

分布: 各地の畑地に最も普通の種である。形態 (藍糖寒天): 螺旋: 多数。旋回は緩い。 (第3, 第4 図)。 但し No. 99 は旋回緊密でコルク栓拔狀 (Cork szrew type) となる (第5 図)。 又 No. 85 は螺旋

形成がない。分生子: 球形 (0.75-10μ), 乃至短卵形 (0.75-0.9×0.95-1.5μ)。

**培養所見**(主として No. 20-a に就いて): 1. 農糖寒天: 基生: 発育微弱にして寒天表面上粛著の発育がなく,粉狀の気菌を薄く生ずる。(粉狀発育)。但し No. 20 d は発育良好で,寒天表面上に厚い菌苔(裏面黄色)を生ずる。 気菌: 薄く,粉狀,綠青色 (140)。 培養基の着色: なし。

- 2. グリセリン・アンモニウム寒天: 基生: 裏面は緑色を帶びる。一部薄墨色となる。 No. 20-b では暗紫褐色 47/86 (3 日); 又 No. 20-d では黄色 6/15 (3 日)。(第 2 表参照)。 気菌: 速かに生じ,基生全面を厚く彼う。表面多孔質,その孔より無色液粒を分泌する。気菌の色は特徴ある緑青色 (140), 青黴の胞子の色にやや似る。 培養基の着色: 薄墨色が僅かに拡散する。 No. 20-b, 20 d ではそれぞれ基生の色と同色で僅かに滲出する。
  - 3. グリセリン・硝酸寒天: 上と異るところがない。
  - 4. 葡萄糖塞天: 概ね前者と異るところがない。ただ基生裏面の色が一層黑くなる。
  - 5. 澱粉寒天: 基生: 裏面暗綠色 (145)。 気菌: 多量, 色は前に同じ (140)。 培養基の着色: かし。
- 6. ブイヨシ寒天: 基生: 黄質,後オリーブ色 気菌: どく薄く生ずる。基生に密着して白金耳を以って採り難い、白色,絵色を帯びることがある。 培養基の着色: 褐色乃至農褐色。
  - 7. 馬鈴薯: 気菌: 厚く多量, 緑青色を帶びる灰色。 培養基の着色: 暗黑色, 後殆ど黑色。
- 8. ゼラチン: 発育: 気菌を僅かに生する。白色後灰白色。 培養基の着色: 濃褐色乃至殆ど黑色。 液化: 弱い。液化した部分は粘稠である。
- 9. ラクムス牛乳. 発育: 暗褐色後チョコレート色の厚い菌膜を生ずる。 牛乳の色: 初め青色を帯びた暗褐色となり、後次第に黒褐色となる。 牛乳の凝固: 認められない。 透明化: 强度中等,牛乳牛透明となる。
  - 10. 葡萄糖ブイヨン: 発育: 液面に厚い菌膜を生ずる。暗線色。 培養基の着色: 褐色後暗褐色。
  - 11. 蔗糖液: 発育: 極めて微弱で,液中に雪片狀に発育する。全く発しないことがある。

生理作用: 1. 色素形成: 総ての菌株はブイヨン寒天並にゼラチンに於いて濃褐色 色素を分泌する。 但しチロシン寒天上のチロシナーゼ反応は微弱である。

- 2. 炭素質の利用(第2表参照): どの菌株もマンニット及び乳糖を良く利用する。大部分の菌株は藍糖及びイヌリンを殆ど利用しない。 但し No.85 及び No.99 は臙糖及びイヌリンを利用する。
  - 3. 糖類よりの酸形成 (No. 20-a): 葡萄糖・尿素液に於いて陰性。
  - 4. 蔗糖よりの還元糖形成 (No. 20-a): 陰性。
  - 5. 硝酸よりの亞硝酸形成 (No. 20-a): 結果不定。
- 6. 蓚酸形成 (No. 20-a): 蔗糖,葡萄糖,醋酸,フマル酸,コハク酸,グリセリン,グリコール,グリコール酸,蟻酸から蓚酸を形成しない。
  - 7. 蛋白質分解 (No. 20-a): ゼラチン, 牛乳に於いては共に弱い。
  - .8 澱粉分解: No. 20, 36 は弱い (1-2mm): No. 85, 99 はやや強い (4-6mm)。
  - 9. 脂肪分解 (No. 20-a): 陽性, 强度中等。
  - 10. 繊維素分解: 陰性。

特徴: 本種はいわゆるクロモゲヌス型に属するが,チロシナーゼ反応は 顯著でなく種 々の培養基上,特有な緑青色 (ややアォカビの胞子の色に似る) の気中菌糸を生ずる極めて特徴のある種である。

# 日本に於ける赤雪と緑雪に就て\* I

## 小林義雄\*\* 福島 博\*\*\*

Yoshio Kobayashi and Hiroshi Fukushima: On the red and green snow newly found in Japan I.

両極地及びアルプス地方に於ける特異な自然現象である赤字、緑雪等に就ては、既に植物学に関心のある人々の常識となつているが、さて我国を含めて東洋に斯る自然現象が存在するかと言うと、何等具体的な観察或は研究の行はれて居ることを聞かない。一昨年來尾潮の藻、蔼類の研究を担当している我々はその研究のテーマの一つに「空中の微生物を採り上げて研究を遂行中、幸に昨年春同地域に赤雪及び世界にも於らしい緑雪を見出し、次いで白馬山、鳥帽子岳等の赤雪の材料も得たので、先づこれらの雪上及び雪中の微生物の種類の研究と、環境の觀察を行い、これを以て第一報とする次第である。

## I 研究の歴史 (Historical Sketch)

一般に藻類、菌類或は細菌類のうちで、少くともその生活史の或期間を氷や雪の中で過して居るものを 氷雪植物(Cryophyte)或は氷雪プランクトン(Cryoplankton)と云うが、この植物相を分けて氷フロラ (Ice-flora)と雪フロラ(Snow-flora)とにする。 氷フロラには高山或は極地内陸の陸氷フロラ(Inland-flora)と海氷フロラ(Sea-ice-flora)とが含まれる。 雪フロラのうちで微生物が雪面に分散している場合には何等の認め得べき色も早まなら、或特殊な微生的が順しく保中に繁殖すると、その微生物特有の色を雪が帯びるようになる。これを彩唱、五色唱、雪の華或・着色雪(Coloured snow)という。

このうちで赤雪(紅雪)及び線雪が最も著名であるが、なお黄雪(黄線雪)、黒雪(汚雪、褐雪)等も報告されている。Lagerheim に断る光雪極動を発士種業がている。しかし是等のうちには固有の水雪極海即ち真氷雪性(Cryobiotic)のもの以外に、其他の環境にも生活し得る水水雪を特に好む好氷雪性(Cryophilous)のもの、偶然氷雪中に落ちて詮方なしに生きて居るもの、偶々氷雪中に封じ籠められて死んだものの遺骸(例えば建築)等も湛って居るので、水雪中に見出されたものを一概に水雪極物と言う訳には行かない。数に注意すべきは、微生的以外のもので雪や着色する場合もあり、例えば火山灰、黄磨、硫黄の噴出、或は地表の舒分の滲透によって着色した雪がある。断る原因によるものを上砂雪と称している。彩雪の研究は R. Chodat 氏(現在パリー博物館で微生物の研究をしている Chodat 氏の父)及びハンガリーの E. Kol 女史に負うところが極めて大きい。特に Kol 女史は 20 年以上の間各国の高山に滯在して彩雪研究に専念している。

赤雪 赤雪は彩雪中では一番普通のものであり、分布も広く歐州ではアルブス、チロル、ピレネー、カルパチア、スカンヂナビア、其他ウラル、グリーンランド、スピツッペルゲン、シェラネバダ、アンデス、パタゴニア、南極等から報告がある。 ハンガリーのタトラは赤雪で有名な高田であるが Györffy によれば、同地に於ける赤雪の最初の発見者は J. Buchholz (1752)、次で J. A. Czirbesz (1772) T. Chalubinski の順となっている。世界各地の赤雪の研究としては Bauer のパッフィン灣に於けるもの、Chodat のサンベル

<sup>\*</sup> 尾瀬原総合学術調査研究の一部 \*\* 国立科学博物館 \*\*\* 東京文理科大学植物学教室

ナール, Lagerheim のエクアドル Kol のパタゴニア, タトラ, モンブラン, ユンクフラウ, Gain の南極 に於けるもの等が著名である。 1818 年 8 月にロツスの北極探險隊がグリーランドの西北岸バツフイン灣に 於て採集した赤雪の材料は Bauer が研究して居るが、単細胞の球狀赤色体を見出し 菌類の一新種として Uredo nivalis なる名を与え美しい彩色図を添えて発表しているのも面白い。このものはその形態及び普遍 性なる点により想像するに今日の Chlamydomonas nivalis に相当するものであると思はれる。 尚お比較的 古い赤雪の研究の一つに Bohlin (1895) がノウルエイの Pite-Lappmark で行うたものがある。藻類とし Ckt Sphaerella nivalis (=Chlamydomonas nivalis), Zygnema sp., Conferva sp., Cladophora sp., Stigonema sp., Gloeocapsa sanguinea, G. magma, Oscillaria sp. が挙げられている。 なお著しい藻とし て Cerasterias nivalis の解説があるが、これは後に Chionaster なる新属となつたものである。 また恐ら く雪上に生ずるであろうと思はれる種類として Mongeotia sp., Enastrum elegans, Cosmarium phaseolus, Cosmarium undulatum, C. tinctus 等を挙げている。 なお赤雪中に花粉粒, 蘋葉, 繊維, 蝶の鱗粉, 鉱的質 破片等を見出している。南極の赤雪に関しては Fritsch の研究がある。これは 1902~4 年に行われたスコ ットの南極探險隊に Brown が加わり、同地域の South Orkney で採つたものである。 この中には Chlamydomonas nivalis, Chl. sp., Scotiella antarctica, Raphidonema nivalis, Oedogonium sp., Zygnema sp., Melosira Sol, Coscinodiscus radiatus, Navicula borealis. Amphora ovalis, Triceratium sp, 等具含まれ ているが、主要素は Chlamydomonas と Raphidonema であつて、その他のものは風叉はペンギン鳥によつ て偶然運ばれたものであろうと云われている。 ことに珪藻の大部分は海童であるから海岸から運ばれたの であるらと云う。 またこの赤雪中には藻以外に動物の毛, 澱粉粒, Podocarpus の花粉等が見出された。 · Ström (1924) によればスカンヂナビアの赤雪は他と同様に Chlamydomonas nivalis が主であって、また ... Chionaster nivalis も著しく, 色はやわらかいバラ色から血紅色まであるという。 Kol (1935) がユンクフ ラウ(3470米)にて觀察したところによれば、雪原にて降雪が少く、日光がよく照射して、雪の表面が少し 融ける頃に、鮮紅叉は暗イチゴ色の斑点が現れるという。 赤雪中の微生物には 蓬鬚 として Ancolonema Nordenskiöldii, Raphidonema nivale, R. nivale f. minor, Chlamydomonas antarcticus, Chl. asterosperma, Chl. glecialis, Chl. nivalis, Chl. sanguinea, Chodatella brevispina, Cryoductylon glaciale, Haematococcus lacustris, Mycacanthococcus cellaris f. antarctica, Phaeogloca mucosa, Pleurococcus vulgaris var. cohaerens. Pseudotetraspora gainii, Scotiella cryophila, S. nivalis, Stichecoccus bacillaris f. minor, Stich. nivalis, Trochiscia chryophila, 菌類として Selenotila nivalis, Chionaster nivalis, Chytridium chlamydococci, Oospora nivalis が知られている。 以上のうち 赤雪の主要素は地域によつて多少の相思かあ るが, Chlamydomonas nivalis, Chl. antarctis, Chl. saguinea, Haematecoccus lacustris, Raphidonema nivale f. minor 等が挙げられる。極地共他の永久雪原には血紅色の Chlamydomonas nivalis, 暗紫褐色の Ancylonema nordenskioldii 等が有名である。

**黒雲** Schwarze Schnee の訳語であるが、また科雪(Brown Snow)、汚雪(Schneeschmutz)等の略同意語もある。高山或は極地の雪の表面が種々の微生物及びその他の塵埃で汚染しているものをいう。褐雲を生物によるもの、黒雪を生物以外の原因によるものと分けている者もある。Kol (1728) によれば歐州のタトラ山系中の Dolina kepy の黒雪中から12 種の微生物を採つたが、その全部が主要な水雪植物であった。また Trümmertal で採つた14 種中には Aphanocapsa nivalis, Chlamydomonas nivalis, Pteromonas nivalis, Ankistrodesmus Tatrae (= Raphidonema Tatrae). Glococapsa alpina 等の典型的な氷雪植物があった。 Lagerheim (1892) はエクアドルの高山 Pichincha の黒雪中より Glococapsa rupestris, G. Kützingiana, G. anbigua, Nostoc microscopicum, Isocystis sp., Stigonema sp., Navicula sp., Mesotaenium Berggrenii, Spirotaenia bryophila, Chlamydomonas tingens var. nivalis, Glococystis rupestris, G. vesiculosa, Dactylococcus bicaudatus, Trochiscia nivalis, Stichococcus bacillaris, Stich. bacillaris var. fungicola, Stich. flaccidus 等を検出している。また Kol 及び Chodat (1932~33) はスイスの Engadine

の国立公園の黑雪中にヨツメモ科の新属 Cryococcus helveticus を採つた。グリーンランドの内陸で採られた黒雪中には Ancylonema nordenskiöldii. Pleurococcus vulgaris, Scytonema gracile, 其他珪藻が検出せられた。一般に黒雪中には微生物以外の小物体、即ち鉱物質の破片, 針葉樹の花粉, 蘚葉の断片, 菌絲, 胞子, 高等植物の毛, 動物のキチン質の剛毛, 珪藻の数等が多く混つている。

関
別に 黄緑雪(Grüngelber Schnee)の名もあるが、恐らく同類であろう。Rostafinski(1881)によればタトラでは Chlamydomonas flavovirens が黄雪の主要素をなすという。また同氏は Chl. flavovirens 及び Scotiella sp. による黄色をも見ている。南極の黄雪は前記の赤雪とともに Fritsch の発表になるものであつて、赤雪と黄雪とが互に接近して見られたという。但し両者はその色も、要素もはつきり区別し得るものであり、黄雪はペンギン鳥の多い雪面に生じ、色は鮮黄色であつたという。その種類は Protoderma Brownii, Chlorosphaera antarctica, Scotiella antarctica, Chodatella brevispina, Scotiella polyptera, Pteromonas nivalis (= Scotiella nivalis), Oocystis lacustris f. nivalis, Sphaerocystis Schroeteri f. nivalis; Trochiscia antarctica, Raphidonema nivale, Raphidium pyrenogerum (Ankistrodesmus pyrenogerum), Ulothrix subtilis, Oedogonium sp. Pleuroceccus vulgaris, Chlamydomonas caudata, Chl. sp., Mesotaenium Endlicherianum, Nostoc minutissimum である。是等のうち最初の 4 種が主要素をなす。この他に Penicillium の一種及び未定の南が見出されている。この黄雪の特徴は大部分が緑藻よりなることであつて、 風によって運ばれた胞子が雪上で発芽したものであろうと云う。

終雪 緑雪は赤雪に比較すると発見の箇所が少く、今迄の記録では歐州の高山、グリーンランド、スピツ ツペルゲン, 南極等より知られ,米大陸では1941年に Kol が黄石国立公園で発見したことを報告してい る。 絵字の文献に載る最初の発見者は J. A. Czirbesz のようであり、1772年にハンガリーのタトラで見て いる。Martin 及び Bravais は 1838 年にスピッツベルゲンで、W. Ph. Schimper は 1848 年にスイスのグ リムセルで、Kjellman は 1872 年にメルデンスキョードの極地探験隊に加わつてスピッツベルゲンで、同年 Scoresby はグリーンランドの沿海地方でそれぞれ觀察しているが、微生物学的研究の裏付けは不充分であ つた。 南極では前記のスコット探險隊は発見しなかつたが、1908~10 年に行われた第二回フランス南極探 險 (Charcot Exped.) に於て J. Gain が終雪を見出し, この材料は後に Wille 及び Gain によつて研究 された。L. Viret は 1909 年にモンプランで絵写を採り Chodat はこれが大量の Raphidonema Vireti に よるものであることを発表した。 これが絵画の微生物学的研究のはじめである。Ström はスカンヂナビア で只の二回線雪を見たがこれは Ulothrix flaccida によるという。 Györffy は 1926 年にタトラで練雪をと り、Kol がこれを研究して Raphidonema (Ankistrodesmus) Tatrae によるものであると発表した。 Kol (1935) はまた、ユンクフラウの3470米の高処に於ける綠雪の要素を Raphidonema によるものとし、R. cryophilum, R. Chodati, R. Bernium 等を挙げている。 またスイスの Valsorey 氷河附近で緑野の主要素 として新属 Chodatia tetrallantoidea を記載している。 以上の如く歐州に於ける綠鱏の主要素は諸種の Raphidonema であるが、Kol が北米の貰石公園に於て研究したものは主要素が Chlamydomonas yellowstonensis 及び Scotiella polyptera であつた。また彼は赤雪と綠雪との環境条件を比較し、前者は Silicotrophic の雪原に、後者は Calcitrophic の雪原に特有のものであると云つている。 緑雪中に従來見出された藻類、 菌類については Kol に拠る次のリストがある。

mivalis, Chl. yellowstonensis, Chlorella ellipsoidea f. antarctica, Hormidium flaccidum?, Mycacanthococcus antarctis, Myc. cellaris f. antarctica, Myc. ovalis, Pleurococcus vulgaris var. cohaerens, Pseudotetraspora Gaini, Pteromonas nivalis (=Scotiella nivalis), Raphidonema brevirostre, Raph. Chodati, Raph. nivale f. minor, Raph. sabaudum, Raph. tatrae, Raph. tatrae subsp. saussurei, Raph. tatrae var. yellowstonensis, Rap'ı, vireti, Romeria e'egans var. nivicola, Scotiella nivalis, S. polyptera, Sorochloris aggregata var. Kryophila, Stichococcus bacillus f. major, Stich. bacillus f. minor, Ulothrix subtilis var. tenerrima f.

antarctica 菌類: Cionaster nivalis, Selenotila nivalis これらを赤雪のそれと比較しても判るように両者に共通の種類が多い。

以上の外に歐州で雪カビ (Schneeschimmel) の存在が知られているがこれはゴルフ場其他の芝地に Fusarium nivale の菌絲が拡つて降雪駅をなすものである。

我国は古来一般人の雪に対する関心は深く、その研究は著しく進んで居るにも拘らす紅雪、線雪に関しては文献のあることを殆ど聞かない。 鉛木牧之翁の北越雪譜中にもこれに関する記事は見当らない。 新聞記事、日伝、旅行談などに赤い雪が採り上げられて居るが、これが真の赤雪であるか、或は土砂雪であるかの判定にも苦しむ程度のものである。 僅に確実と思われるものの二三を次に記す。 大分以前に江州伊吹山に紅い雪が降つたという新聞記事があつた。 南北アルプスで赤雪を見たということは数回聞いている。 泉末雄氏は新潟県西頸城郡上早川村の赤雪に関する研究を気象雑纂の雪の調査 (2号) に載せているが、その原因を或顔の珪藻に帰している。 武田久吉博士によれば昭和2年6月に尾瀬に訪れた際、尾瀬原北方の瀑の沢と景鶴沢との間の殘雪中に暗紅色の斑点を認め、標本を採り後に鏡検の結果下等の単細胞藻を認めた由である。また尾瀬に数十年来居住の萩原武治氏(関東配電勤務)及び平野長英氏(長職小屋主人)の談によっても赤雪の存在が明らかである。殊に萩原氏は春先の殘雪中、その垂直断面に於て綠雪及び赤雪が層となして見られることがあると云う重要な話をしている。 なお同地居住の人々は融雪前の尾瀬原の雪が所によって紅褐色を呈することがあると云うているが、余等の実地觀察によれば、これは濕原の露出した地表に多い赤色の鉄分が毛管現象によりその土を蔽う雪中に上昇して鉄さび色をなすものを指すようである。

尾瀬原に於て雪が消え始めるのは平年に於て5月15日~20日であり、周囲の谷間或は山上には6月半 ば過ぎまで残雪がある。盛夏には燧岳頂上の旧火口の残雪を除いては至仏岳のものをはじめ、すべて消失す る。福島は先づ本年3月28日より4月3日まで同地に滯在して数米の積雪中に採集を試みたが遂に見出す ことを得ず、僅に大清水附近で雪上の汚点を採り鏡検の結果単細胞の藍藻であることが判つた。5月29日 より6月3日迄余等両名は原沼の周緣を探り, 燧岳, 景鶴山, アヤメ平等に登つた。 原の雪は消えたが周辺 の林、谷間、白砂原、沼畔、三平峠北斜面等には残雪が多く、数々処に於て小斑点狀に拡る絵雪を見出した。 雪面及び雪中の深部に分けてサンプルを採り現地に於て鏡検し,生品で直ちに固定した材料をつくり、なお 純粹培養の目的を以て、麥芽汁、チャペツク、ベネッケ、デットマー等の試験管寒天培養基に採り、雪溫,pH 等の記錄をとつた。次いで沼山峠に於て福島は赤雪をも採つた。 別に国立科学博物館動物学部の今泉吉典, 小林峯生両氏は本年5月29日に 白馬連峯の八方山, 8月4日に鳥帽子岳, 三股間の雪溪の上に於て赤雪を 発見し,標本はアルコール漬として惠与せられた。八方山のものは四谷驛より八方山頂への途中黑斑小屋よ り数えて第2ケルン(1974米)と八方山頂(2005米)との間の尾根のハイマツ帶の北方へのゆるい斜面の 残雪上に約1米平方位の田形の斑点をなし1目して判る程度の血紅色を帶び,その中心部は濃く,周囲に至 り次第に薄くなり、紅斑の中心点に於て深さ30糎位まで紅色を呈して居つたという。雪はザラメ雪であり、 附近の岩質は花崗岩である。 管瓶に 2/3 位雪を詰め、上からアルコールを加えて雪を溶かしたものの色は 淡黄紅色であつた。

## II 検出し得た微生物 (Species Determined)

菌類 従來各国の雪中より見出された菌類を総括すると次の如くになる。

Oospora nivalis Kol パタゴニアの Sierra Lopez (1910 m); Chytridium Chlamy-dococci A. Brown ノールウエイ, ユンクフラウ, タトラ, エクアドル等に於て赤雪中の Chlamy-domonas に寄生; Penicillium sp. 南極の黄雪中; Selenotila nivalis Lagerh; Chionaster nivalis (Bohl.) Wille。なお Schmelck (in Centralbl. f. Bakt. IV No. 18) はノールウェイの Justedals の氷河の雪中に黴類や酵母狀細胞を発見している。今回余等の検出し得た菌類

は上記の雪中固有の二種類及び雪中に繁殖して居ると思はれる種類 (3,5~7) 及び附近より飛來して偶然雪中にあつたと思はれる菌絲, 胞子, 細菌類 (4,8~25) である。

1. Chionaster nivalis (Bohl.) Wille in Nyt. Mag. f. Naturvidensk 41, 174 (1903); Engler, Nat, Pflanzenfam. 2 ed. 3, 132 fig. 87 J-L (1927); Kol in Folia Cryptogamica 1 no 6, 616 pl. 17 fig. 27-44 (1928)......Cerasterias nivalis Bohlin in Botaniska Notiser (1893) 46 et Bot. Cent. 65, 45 figs. in p. 43 (1895).

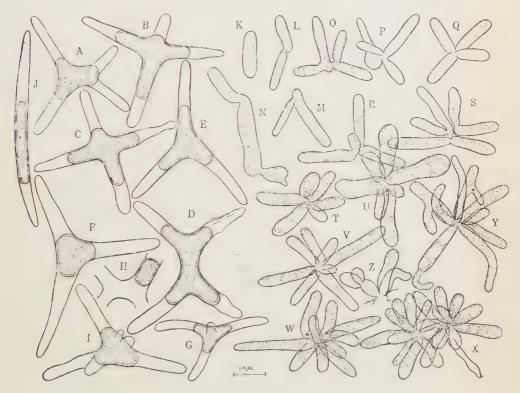


Fig. 1. Chionaster nivalis

本植物は Bohlin が 1891 年夏ノールウェイの Pite-Lappmark に於ける赤雪中に初めて発見したものである。 彼は先づこれが藻類であるとは断言出来ぬこと、外見上は接合藻類の Mougeotia に似ているが異る点も指摘出来ること、また Staurastrum paradoxum Ehrenberg に似ていること、なお一層 Cerasterias raphidioides Reinsch に近く、仮りに本属の新種としておくこと、細胞の中央にある厚膜のものは Aplanospore (Akinete) と考えられる事等を挙げている。 次いで Wille (1903) はこれを以て藻類(?) の新属とし、Printz (1927) はエングラー叢書中にこれを緑藻類の Protococcales 中の Oocystaceae の附属とし、葉線素を欠く不完全藻とした。 Kol は最初 (1928) この Printz 説にしたがつたが後に菌類説をたてている。通例は単細胞無色 4本の突起が十字狀をなし、これらは同一平面上にあるが(図 A-D)、また立体的に並ぶものもある。即ち 3 突起の合一点より 1 本が垂直に立つ如くになる(図 G)。また単に三突起よりなるもの(図 E、F)、或は数本の不等長の突起が不規則に出ているもの(図 I)、極めて稀に 1 本の棒狀のもの(図 J)もある。 突起は日柱駅、鈍端、薄膜、大さ 10~25×4~5 μ。細胞の中央、即ち突起の合一点に 3~4の突起ある厚膜の胞子をつくる。この場合胞子より外側の細胞内容は空虚となり、細胞膜は収縮することが

ある。また胞子が中央より偏した位置にあることもある(図  $oxed{H}$ )。 胞子の部分の太さ  $oxed{5 \sim 5, 5 \mu, 淡黄灰色}$ (Colonial Buff), 内容は一様な油簡狀であり, 葉綠素, 澱粉等を欠く。

本植物とともなつて図 K-Z に示した如き菌が見られる。 これは出芽の狀態からして菌であることに 間違いない。最も簡単なのは棒狀(図 K) であるが、図 (K-S) に示した如く 2 個体が接合した如きものが ある。普通は T 以下の如く一点より立体放射狀に 3 12 木の突起が出て居り, これらはすべて細胞内容が 連絡して居るが,少くとも2本づつは連結して居る。 薄膜で内容は細かい粒狀,無色,或は生時に極めて薄 く綠色を帶びる。突起の大いさは 10~22×3~4,5 μ, 平均して A-H 図のものよりも少しく小さい。 また 稀には X 図の如く二つの個体が組合さつている。 これを Chionastar nivalis と同一のものと考えると本 種の所属に関して大分はつきりしたことを云えるのである。即ち KS をその発育の中間にあるもの或は接 合の段階とし、 $T \mid Z \mid$  を普通の主義細胞で、 $Z \mid \Box$  はに見られる如く無性的の胞子をつくろこともある。 $A \cdot H \mid \boxtimes$ のものは休眠胞子 (Hypnospore) をつくつた狀態である。この 4本の突起はくの字型をなす L.M. の如き ものが2個体接合したものであるとも考えられる。 斯く考えると本植物は菌類で Mucorales 中の菌絲の 極度に退化したものと推断せられる。 しかしこれらのことは將来本植物を純粹培養し生活 史を明らかにし た上でなければはつきりした結論を下せない。自然狀態では休眼胞子の発芽したもの,少くとも母細胞より 遊離した状態のものを見出すことは出来なかつた。 併し鳥帽子 赤雪中のものはこれの休眠胞子と思われ殆 ど脆子のみであつた。本種が必ずしも終又は赤い藻類とともなつて存在するものでないことはヒウチ岳の 汚雪中で発見されたことでも判る。 採地 三平峠 (絵雪), ヒウチ岳 (汚雪), 景鶴山 (汚雪) 分布 ノール ウエイ,タトラ,ユンクフラウ (緑雪)

2. Selenotila nivalis Lagerh. in Ber. Deut. Bot. Ges. 10 p. 531 pl. 28 fig. 24-28 (1892); Sacc. Syll. Fung. 11, p. 587 (1895); Engler, Nat. Pflanzenfam. I, 1 p. 421 fig. 217 H-J (1900); Kol in Folia Cryptogamica 1 no. 6 p. 619 (1928).

本種は Lagerheim が南米エクアドルの高山 Pichincha に於て赤雪中に発見し新属として 1892 年に発 表したものである。純粹培養が試みられたが失敗し、その分垣上の位置は不明とある。酵母類の一種である

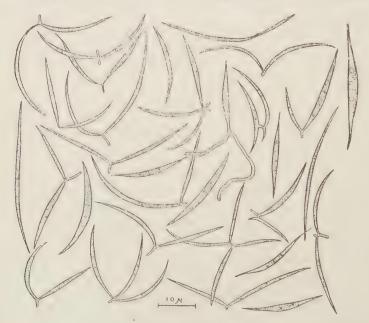


Fig. 2. Selenotila nivalis

うと考えられたが、Saccardo の Sylloge Fungorum では不完全菌類の Moniliaceae の一属として記載されている。

普通は2本の疾被針形又は鎌眉状のものか人字状に組合されて居り、その間に細胞の隔壁はない。 単一のものも多く、時には3個がつき或は4個が組合されて H 字状をなす。鎖狀に連結したものは見られないが稀に一端より芽出したと思われるものも見出される。 細胞は中央太く両端に漸細するもの或は両端が細まり毛端に終るものもある。これは直伸するもの、鎌状にまがるもの等種々で内容は無色、極めて細かい粒狀、単細胞よりなり大き 15~32×1~2 μ (普通は 17×1.5 μ)、2~3 個が一端に於て合一する場合短柄状の突起がありその大き 2,5×0,7 μ 位、この場合に2個の開度は 90°~180° である。

鳥帽子赤雪中に少量に存在するものは大型であり大き 30×2,5 μ あつた。本植物が菌類であることは細胞の一端より菌絲を出すことにより証明せられる。Lagerheim は糖菌類に属するかも知れぬと云うているが酵母類では普通の細胞に斯る形のものはなく Sphermophthoraceae や Ashbyaceae の胞子によく似たものがあるにすぎない。しかし 2~3 個が何によって結合しているものはない。 黒穂菌類には斯る形の胞子は普通に見られ、Tilletia の担胞子の接合したものにはこれによく似た H 字狀をなす。 この類の退化せるものとも考えられるが、また Engler 叢書中に取扱われた如く不完全菌類の Hyphomycetes に属し菌絲が極度に退化して単なる突起狀となり鎌狀の分生子のみよりなると考えた方がより好ましいようである。しかし結論は純粹培養によって生活史をしらべた後でなければ下せない。 採地 アヤメ平上 (緑雪)、沿山峠 (赤雪)、鳥帽子岳 (赤雪)、分布 エクアドル (赤雪)、ユンクフラウ、タトラ、イエロウストン (綠雪)

- 3 Monilia-like Yeast (3 図 A) 細胞は楕円形叉は日筒状で、鎖状に連結し、無色、薄膜、平滑、細胞内は一様、大き 5~8×2,5 世、雪中で出芽法により増殖するものと思われる。出現は少量。採地 三平峠 (線雪)、沼山峠 (赤雪)
- 4 Spores (3 図 B) 胞子は鎌狀、両端は次第に細まり、鏡端又は稍尖端、3~4の隔壁あり、薄膜、淡褐色、大さ 27~34×4~5μ。 採地 沼山峠 (赤雪)
- 5 Yeast-like Cells (3 区 C) 細胞は紡縛形, 銭端, 単細胞, 無色 (鏡下で稍緑色を帯ぶ), 薄膜, 内容は粒狀, 大小種々あり 10~27×1.2~2.5 (-3 μ), 出芽法により増殖するものの如く, その一端より1~3個の娘細胞を出し, 順次に鎖腺に連るがまた装制体が星駄に連るものもある。細胞内に胞子狀のものの造られて居るのも見られる。出現は稍多し。 採地 原~沼間 (終雲), 沼山峠 (赤雲)
- 6 Chlamydospores (3 図 D) 厚膜胞子は楕円形又は口筒形,先端は丸い,無色,厚膜,平滑,大さ15~25×6~7,5円,内容は粒狀,胞子の表面に母細胞膜の破片が残つている。田現は少量, 採地 鳥帽子岳 (赤雪)。此胞子及び母細胞断片より想像すると Chionaster nivalis の如く思われる。
- 7 Chytridiaceous Zoosporangium on Chlamydomonas (3 図 E) Chlamydomonas nivalis の厚膜胞子 に極めて稀に寄生している。球肚薄膜に巨7世位、中に遊走子肤の粒が充薦している。根狀菌絲は不明、(但し福島は根狀菌絲をも見ている)。歐米の赤雪中に見られる Chytridium Chlomydocccci は記載不充分であり、これと同一種か否かを論ずることも今の段階では無意味である。 採地 沼山峠 (赤雪)
- 8 Spore of Guepiniopsis sp. (3 図 F), 胞子はソーセージ形, 無色, 薄膜, 単胞, 大き 16~18×4, 5 μ。 雪中にて発芽し菌絲を長く延ばしているのも見られる。 探池 原~沼間 (絵葉), この胞子はミヤマダクリ オキン Guepiniopsis alpinus (T. et E) Y. Kobayasi のそれと思われる。本菌の子実体はアヤメ平道に於 ける雪中に落ちた針葉樹の枝上に多量に発生しているのを見た。
- 9 Spores of some Deuteromycetes (3 図 G) 胞子は長き円筒形, 直伸又は彎曲, 両端に至り漸次に少しく細まる, 厚膜, 灰褐色, 或は暗紫褐色, 10~35 個の隔壁あり, 先端は裁断或は症狀に膨大す。大き 150~200×6~11 μ。出現 稍多し。採地 沼山峠 (赤雲), 其他
- 10 Spores of some Deuteromycetes (3 図 H), 胞子は中央より一側に偏して最も太く, 両翼に漸細し 紡錘形をなし, 先端は裁断, 厚膜, 8~15 個の隔壁あり, 暗褐色, 大き 50~65×7, 5~10 以, 一葉に菌絲狀無

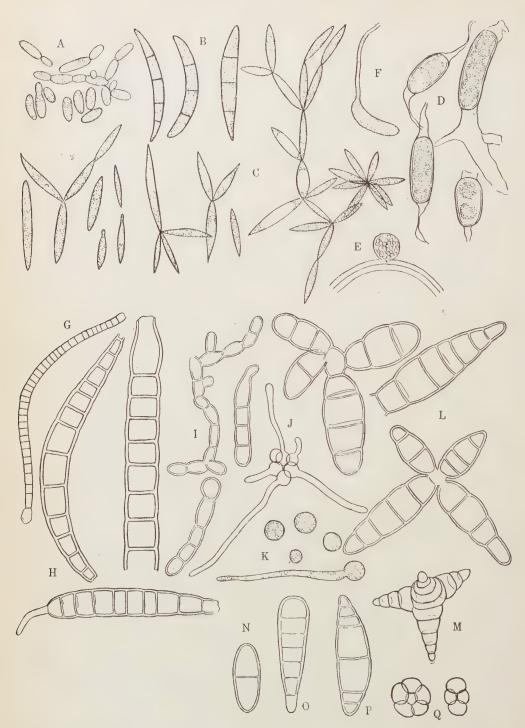


Fig. 3. Yeast-like cells and spores of various fungi

色の突起のあるものもあるが、これは分生子柄かも知れね。出現は多量、採地 長藏小屋附近(綠雪)沼山峠 (赤雪)、其他。本胞子の如きものを生ずる不完全菌質の属や種は極めて多い。 例えば歐州のアナ樹皮につく Scolecosporium Fagi は胞子のみから見ればよく似ている。

- 11 Hyphae of *Dematium* or some allied genera (3 図 I)。単一絲狀或は不規則に分枝し、やや厚膜、紫褐色、或は淡オリーブ褐色、太さ 3~4世、隔壁多く、その間隔は一様でない。 出現は稍多量、採地 長藏小屋附近(緑雪深部)、沼山峠(赤雪)
- 12 Spores (3 図 J), 胞子は球狀, 単細胞, 無色, 薄膜, 径 4 μ, 数個が一群をなし各胞子より1本づつの菌絲を出す。出現稀。採地 三平峠(緑雪)
- 13 Spores (3 図 K), 胞子は前者より大型のもの多く, 球狀, 淡褐色, 薄膜, 径 4~7 μ, 菌絲を発芽す。 出現稍多量。採地 原~沼間 (線雪)
- 14 Spores of *Prosthemium* sp. (3 図 L), 胞子は楕国形, 又は短紡錘形, 大型, 黑褐色, 厚膜, 先端は 淡オリーブ色を呈す。1~6 個の隔壁あり, 大さ 25~50×11~18 μ, 普通は 4 個が基部に於て連結す。 出現 多量。採地 沼畔, アヤメ平, 其他(線雪)。 胞子の形, 大いさは歐州の樺木属の小技に寄生する *Prosthemium betulinum* Kuntze に一致する。
- 15 Spore of Asterosporium or Triposporium (3 図 M), 胞子は 4 個の角よりなり稍 4 面体狀に結合する。 各角狀突起は田錐形,暗褐色,厚膜,2~4 個の隔壁があり, 基部の幅 15 μ, 長さ 25 μ 位, 出現稀。採地 アヤメ平 (線雪)。 胞子の形, 大いさは歐米のブナ属或は樺木属の樹皮に寄生する Asterosporium Hoffmanni Kuntze に一致する。
  - 16 Spore (3 図 N), 胞子は楕口形, 暗褐色, 厚膜, 隔壁は 1 個, 大さ 32×12μ。 採地 アヤメ平 (線雪)
- 17 Spore (3 図 O), 胞子は長形, 基部細く, 先は稍未広がりになり口端, 厚膜, オリーブ褐色, 隔壁 6, 基部のみ白色, 大さ 32×8, 5 μ, 採地 アヤメ平 ( 終雲 )
- 18 Spore (3 図 P), 稍ボウスイ形, 田端, 隔壁 6, 厚膜褐色, 上端のみ淡色, 大さ 32×12 p, 採地 アヤメ平 (森雪)
- 19 Spore (3 🛛 Q), 胞子は7個の細胞よりなり,梅花狀に連る。淡褐色,扁球形,径8,5 μ,採地アヤメ平 (終雪),この型の胞子は不完全菌類中に Dichomera 他多少ある。

なお妄芽汁寒天培養基上に分離し得たものは次の如くである。 すべて緋雪の表面を除いた深部より採取した。

- 20 Mucor hiemalis Wehmer (長尾研緒氏鑑定) 採地 長藏小屋附近
- 21 Penicillium sp. 採地 三平峠

22-25 Bacteria

(未 完)

### 抄 錄

Stewart, W. N. and Schertiger, A. M.: Brilliant cresyl blue as a stain for plant chromosomes. (植物染色体の染色剤としてのプリリアント・クレジール青). Stain Tech. 24, (1949) 39~45.

植物染色体の染色にプリリアント・クレジール青を用い、これを永久プレパラートとするために、ポリビニール・アルコール (polyvinyl alcohol) を封入剤として用いることができる。醋酸カーミンと同じようにして、45% 醋酸あるいはプロピオン酸に 2% にプリリアント・クレジール青をとかしたものを用いる。封入剤としては、ポリビニール・アルコールの水でうすめたもの、乳酸、フェノールを容量で 56%, 22%, 22% にまぜたものを用いる。 塗抹したプレパラートは 70% アルコール中に入れて、カバー・グラスをのぞき、上記の封入剤で永久プレパラートとする。この染色法の主な利益は、1)染色の準備がはやくて、簡単であること、2) 醋酸カーミン液によるより速く、操作が終る場合もあること、3) ある植物細胞では、醋酸カーミン液より、核がとくによく染まること、4) ポリビニール・アルコールを用いると、一度アルコールを通すだけであるために、永久プレパラートにするときに細胞を失うことが少い、5) 封入剤ははやくかわいて、永久プレパラートを早くつくることができる。 (湯 淺 明)

# ヘビゴケ及び Microcampylopus 属の一種に就て\*

## 野 口 彰\*\*

Akira Noguchi: On Campylopodium euphorocladum and a species of Microcampylopus (Musci).

新旧の熱帶及び亞熱帶地方に広く分布している Campylopodium 属の蘚類は、顔柄が乾燥すると蛇行 釈义は白鳥の首般に彎曲するので、極めて印象的なものである。古くなつた河柄は色が黒つばくなり、しば しば左に振れて蛇行狀をなし乍らも、全体としては直生してくるが、このようなものでも、濕ると鍋蒴狀に 彎曲して、蒴胞は低頭する。 このような胞子体をもつているものは、あながち本属に限つたわけではなく、 近縁のものでも Microcampylopus, Campylopus, Thysanomitrium の諸属がある Campylopodium と Campylopus, Thysanomitrium の両属とは、配偶体の性胀でも、一応区別出来るから、ここでは問題外にしておく。Microcampylopus と Campylopodium とは共に微小なもので、配偶体を比較しただけでは殆ど区 別出来ない。Fleischer、Dixon、Brotherus 等の諸氏によると(1)(2)(3)、この両属の主要な而も唯一と思われる区別点は、蒴胞の頸部に気孔の有無ということである。 尤も、Dixon は Microcampylopus は Campylopodium に非常に近いものとして、その独立性に疑問をもつている。 気孔の有無が属の区別として、どれだけ価値のあるものかと気になつたので、従来ヘビゴケ Campylopodium euphorocladum と同定されている標本にあたつてみた。

まず,Java 産の一標本では,Fleischer の記すように,はつきりした辩胞の頸部に数個の気孔が一列な にらんでいる (Fig. 1, A)。ところが, Luzon 島の Posuey 山産で、Ramos が採集し Brotherus(4) が本 種にあてた標本では気孔が全く見当らず、更に、台灣の大屯山産(5)及び兒玉山産でも、同様に気孔を認める ことが出来ない。 櫻井久一博士が報告された鹿兒島県櫻島(本邦に於ける唯一の産地)産(6)では、奇異の 感じがあるけれども,稀に一つの蒴 胞に一個ぐらいの 気孔 をみることがある。 従つて(Brotherus)や Fleischer によると、Posuey 山産及び台灣産のものは Microcampylopus 属に入れなければならないこと になる。次に、胞子の性狀をしらべてみると、Java 産の標本では球形で、大きさは Fleischer の記較より 一般に大きくて, 径 13~15~21□, 表面には微小乳頭が密生して淡褐色である (Fig. 1, B)。 之と同縁な胞 子は櫻島産にもみられ,径  $14 \sim 18 \sim 20$ ½,淡褐色で,表面にはやはり微小乳頭が密生していて,巨大乳頭の ものは少しも認められない (Fig. 1, C)。ところが、Posuey 山産ではやや田盤狀で、表面には透明な巨大 乳頭が多くあつて, 色は黄金色, 大きさは径 18~23~25μ である (Fig. 1, D,E)。 台灣産のものも同様な 性狀であるが (Fig. 1, F), 大きさは大屯山産で径 14~16~20ゃ, 兒玉山産で 17~21~23ゃ ある (Fig. 2, I)。 **胞子の**形が円盤狀に近いという点は,何れも乾燥標本によつたのであるから,本来の形態であるかどうかは 一寸疑問である。 胞子を顯微鏡下で觀察すると,この乳頭が脱落してブラウン運動をしているのも見当る が,しかし巨大乳頭が全部脱落又は磨滅したとしても Java 産や櫻島産のもののようにはならない。 又,觀 察に当つて,胞子が吸水した爲にこのようになつたのではなかろうか,ということも一応は考えられるが, 乾燥している時でも巨大乳頭がみられ,他面 Java 産や櫻島産では,こんな胞子は一つも見当らない。更に, 胞子が成熟した後の変化とも考えられない。 兒玉山産,櫻島産は成熟して而も簡葢のある領胞から胞子を

<sup>\*</sup> 本研究の一部は文部省科学研究費でなされたものである。

<sup>\*\*</sup> 大分大学 学芸学部 生物学教室。

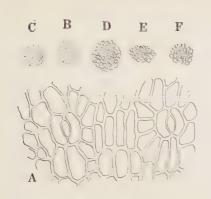


Fig. 1

A, Part of capsule-neck showing two stomatae, ×294. C~E, Spores, ×294.

A, B, Campylopodium euphorocladum from Java, C, ditto from Isl. Sakurajima, D, E, Microcampylopus longifolius form. densifolius from Mt. Posuey, F, ditto from Mt. Taitum. とり、Posuey 産、大屯山産、Java 産は約蓋のとれた古い筋胞から胞子をとつたものである。してみると、微小乳頭のあるものと巨大乳頭のあるものとは、胞子の老若の差によるものではなさそうである。 Campylopodium と Microcampylopus とは熱胞頸部の気孔の有無の差違だけでなく、胞子の性歌も亦違うのではなかろうか。ここで引用しておきたいのは、Dixon が Ceylon 島産の Microcampylopus subnanus C. Müll. の胞子の性狀に就いて記していることが、そのまま上に記した Posuey 山や台灣産の胞子にあてはまることである。巨大乳頭のある胞子は Campylopodium 属の他の種でも見られた。例えば、Ceylon 島産の C. khasianum では熱胞に気孔はなく、蒴蓋のある類胞からとつた胞子も、径 16~18~22点、黄金色で、表面には巨大乳頭がある。

ここで当然考えられることは、Philippine や台灣などで
C. euphorocladum とされていたもののあるもの、又 C. khasianum も Microcampylopus に移すべきものではなかろうか。然し、気になることは、胞子の性狀や気孔の点でこんなに違うのに、配偶体の性狀はお互によく似ているのである。胞子の性狀が属を分つ程の特長になりうるかどうかは、角、残された問題であるとしても、少くとも、東亞から報告されて

いた C. euphorocladum には、二つの違つたものが含まれていたことは確である。 今, Müller, Fleischer, Dixon, Brotherus 諸氏の意見に能い、更に、胞子の性狀を加味して、筆者は台灣産及び Philippine 産の一部を Microcampylopus と考えておきたい。 Microcampylopus 属には、従来 Africa から M. nanus, M. subpusillus の 2 種, Java, Lombok, Ceylon から M. subnanus が知られている。 尤も、Fleischer に従えば、M. subnanus は M. nanus と同一種らしい。 Posuey 川産及び台灣産は之等の種に比較して異るので、新種と認めて、次のように記載する。

## Microcampylopus longifolius Noguchi, sp. nov (Fig. 2)

Planta gracilis lutescenti-viridis haud nitida. Caulis plerumque simplex laxe foliosus, 5~10 mm altus. Folia sicca erecto-patentia flexuosa, inferiora minora ca 2 mm longa, superiora multo majora ad 6.5 mm longa, e basi vaginante latissima superne setaceum falcatum canaliculatum attenuata, marginibus integris inferne involutis, costa potius tenui sed lata basi 0.1~0.12 mm lata, superne totum fere subulum occupante dorso laevi, cellulis laminalibus rectangularibus vel linearibus parietibus tenuibus, medianis elongato-rectangularibus vel sublinearibus 50~80×5~8µ, superioribus minoribus rectangularibus 15~25×6~8µ, basilaribus linearibus vel elongato-rectangularibus parietibus tenuibus lutescentibus 80~120×8~10µ, alaribus non diversis. Bracteae perichaetii foliis similes sed vagino longiore. Seta sicca flexuosa vel cygnea, madida circinata lutea laevis, ca 6 mm longa 0.15 mm crassa. Theca sicca inclinata vel horizontalis sulcata, madida nutans elliptica vel oblonga rufa laevis collo nullo, stomatibus nullis, 1.2×0.75~1×0.6 mm, annulus distinctus. Peristomium lanceolato-subulatum bifidum raro simplex, ca 0.28 mm altum, inferne fusco-rubrum longitudinaliter denseque striolatum, superne lutescens minute papillosum. Sporae subglobosae luteae vel fusco-luteae grosse papillosae, 18~21~25µ in diam. Operculum e basi conica longe oblique subulatum 0.6~0.7 mm

altum. Calyptra cucullata basi parce lobata pallida fusca laevis, 1.4~1.6 mm longa.

Hab. Formosa: Mt. Kodama (ca 2500 m alt.), prov. Tainan (A. Noguchi, no. 7180-typus, Aug. 1932).

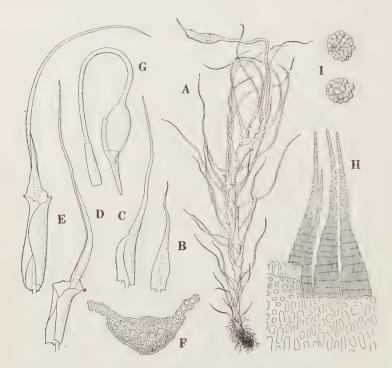


Fig. 2. Microcampylopus longifolius Noguchi

A, Plant, when dry,  $\times 8$ . B $\sim$ E, Leaves,  $\times 13$ . F, Transverse section of leaf, upper portion,  $\times 180$ . G, Sporophyte, when maist,  $\times 10$ . H, Peristome,  $\times 180$ . I, Spores,  $\times 348$ .

### form. densifolis Noguchi, form. nov.

Syn. Campylopodium euphorocladum (non Besch.) Broth. in Philipp. Journ. Sc. 13: 201 (1918), Bartr. 1. c. 68: 35 (1939), pp., Card. in Beih. Bot. Centralbl. 19: 93 (1905).

A forma typica differt: foliis densioribus.

Hab. Formosa: Mt. Taitum, prov. Taihoku (U. Faurie, no. 68, May 1903). Philippines: Mt. Posuey, prov. Abra, Luzon (Ramos, Feb. 1917-typus).

#### Résumé

The genus *Microcampylopus* agrees with the genus *Campylopodium* in general character. As already remarked by Dixon, it may be a question, whether *Microcampylopus* is worthy of full generic rank. According to Fleischer, Dixon, and Brotherus, etc. however, the important discrepancy between the two genera is in the characteristics of capsule. The capsules of *Campylopodium* have several stomatae on capsule-neck, whereas in *Microcampylopus* they lack stomatae. Differences

between the two genera seem also to exist in the characteristics of spores.

In Eastern Asia, Campylopodium euphorocladum has hitherto been recorded from Indo-Malay, the Philippines, Formosa, and Southern Japan. A specimen from Java agrees with Fleischer's description, especially in the presence of stomatae on capsule-neck and the minutely papillose spores. In the characteristics of spores, the specimen from Isl. Sakurajima (where it is found growing on volcanic rock), for the present the only locality in Japan, agrees well with the foregoing Javanese specimen, but it bears stomatae rarely. While, the specimens from Mt. Posuey, Luzon, assigned by Brotherus to this species, and that from Mt. Taitum, Formosa by Cardot as well lack stomatae entirely. Furthermore, these specimens have golden yellow spores bearing large pellucid papillae on the suaface. Such a characteristic of spores was observed by Fleischer and Dixon on those of Microcampylopus subnanus. Therefore, the specimens from Mt. Posuey and Formosa may be not be referred to Campylopodium euphorocladum.

I am not sure, whether *Microcampylopus* is sharply separated from *Campylopodium* by the absence of stomatae or referred to rhe latter. If the opinions of Fleischer, and Brotherus, etc. are admitted, the specimens from Mt. Posuey and Formosa appear to me to be conspecific with *Microcampylopus* and may be a new species of that genus. The description of this species is just given above.

#### References

- 1) Fleischer, M. 1900~02. Musc. Fl. Buitenzorg. 1: 59,61,63. 2) Dixon, H. N. 1915. Journ. Bot. (Sept.—Oct.); 260, t. 540, f. 2a. 3) Brotherus, V. F. 1924. Engl. Nat. Pflanz. 10: 180~183.
- 4) \_\_\_\_\_, 1918. Philipp. Journ. Sc. 13: 201. 5) Cardot, J. 1905. Beih. Bot. Centralbl. 19: 93.
- 6) Sakurai, K. 1932. Bot. Mag. Tokyo, 46: 737.

## 抄 錄

Stewart, W, N.: A study of the plastids in the cells of the mature sporophyte of Isoetes. (ミズニラの成熟した造胞体細胞の色素体研究) Bot. gaz. 110 (1948): 281~300. 59 figs.

ミズニラ属の Isoetes muricata var. fraunii あるいは I. macrospora を材料として、固定に Belling 液, Flemming 液 (中液と强液), クロム醋酸液, Randolph 液, フォルマリン・アルコール醋酸液などが用いられ、染色にはピクリン酸とクリスタル紫, Flemming 三色染色法, Heidenhain 鉄明紫へマトキシリンが用いられた。

ミズニラの葉線体の構造は、いるいるな固定液のはたらきで変えられない。 葉線体や白色体は基質の中に網狀構造があり、この網狀構造はグラナと、これをつなぐ糸から成つている。 グラナを中心として、澱粉がつくられる。 造胞体の柔組織の各々の静止細胞中には、ただ一つの色素体がある。 このような細胞中の色素体は、核がまだ静止期にある中に分裂をはじめるので、色素体は核分裂を誘導するようである。色素体分裂でできた二つの色素体の間に紡錘体ができて、その端部は色素体の表面で終つている。紡錘体の広い端部が、とがつた端部になるのは、紡錘体の極にある色素体が短くなり、まがることによつておこる。 柔組織細胞の色素体は、形やはたらきは変りうるものであり、分裂細胞中では、色素体の分裂は、形や大さや位置は、いるいると変わる。成熟した細胞中では、色素体は数回分裂し、極性を示さない。 造胞体の柔組織部分には、色素体の極性があり、色素体は、既存のものの分裂によつてのみつくり出される。

(湯 淺 明)

# 伊勢神宮領域内の蘚類 II

## 櫻井久一

Kyuichi SAKURAI: Moses in the estate of Ise Grand Shrine II.

(12). Fissidens jinguensis Sak. sp. nov. (Crispidium). (Fig. 1). Arenicola. Planta minuta, caespitosa, caespitibus laxiusculis, flavo-viridibus. Caulis suberectus, simplex vel ramosus, fertilis

2 mm altus, superne conferte foliosus, infimus fusco-radiculosus. Folia fertilia 5-6 juga, infima minuta, sensim majora, linearia, acuminata, acuta, usque ad. 1 mm longa, 0,2 mm lata, integra; lamina vera ad medium vel plus minus supra medium folii producta, lamina dorsalis basin versus nervi enata angustior, nervo valido, pellucidissimo, undulatulo, excurrente. Cellulis minutis, rotundatis, densissimis, obscuris, papillosis. Seta terminalis, decolorata, geniculata, 1 mm longa. Capsula ovalis. Operculum longe-rostratum.

Prov. Ise, Naigu (Leg. T. Magofuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19615 29-Aprii-1950).

ジングウホウワウゴケ: 莖長2mm に過ぎざる微小なるー品に して邦産中比較す可きものなきも南洋に産する F. angustus, subangustus Fl. の如きは近縁の種ならん。

(13). Merceya crispula Sak. sp. nov. (Fig. 2). Planta tenella, caespitosa, caespitibus densissimis, mollibus, dilabentibus, superne viridibus, intus fuscescentibus. Caulis erectus, simplex vel ramosus, saepe innovationus, ca. 0,5-0,7 cm. altus, dense foliosus, infimus tomentosus. Folia sicca crispula, madora erecto-ratentia, spathulata, subacuta, infra medio anguste recurvata, usque ad 1,5-1,7 mm longa, in latitudine 3 mm lata; costa valida, carinata, subcontinua; cellulis superne irreglulariter rotunnato-quadratis, papillosis, infra 1/3 pellucidis, levibus, rectangularibus. Caetera deest.



Fig. 1. Fissidens jinguensis Sak. Planta fertilis ×10.

Prov. Ise, Ohsugidani (Leg. T. Magofuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19613 22-Sept.-1950). チヂミイハセンボンゴケ: 従来報告されし邦産品中最も小型。特徴としては乾燥時莖葉の 著しく捲縮することなり。肋が頂下に終る点は M. kiushuana と一致す。

(14). Campylopus (Pseudo-Campylopus) ise-sarctus Sak. n. sp. (Fig. 3). Dense caespitosus, caespitibus mollibus, superne luteo-viridibus, intus fuscescentibus, nitidiusculis, habitu C. grecilento Card. similis. Caulis gracilis, paulum radiculosus, simplex vel dichotome divisus, 1–1,5 cm altus. Folia sicca flexuosa, madore erecto-patentia, falcatula, e basi anguste ovato-lanceolata, 1,7 mm longa, basi 0,4 mm lata, supra medio minutissime serrulata. Costa basi tertiam partem folii occupante, continua, dorso superne serrulata; cellulis in medio folii rectangularibus, alaribus indistinctis,



Fig. 2. Merceya crispula Sak. Folia caulina ×20.

quadratis, incrassatis, basilaribus in toto luteo-fuscis. Folia perichaetialia e basi semivaginante, subito in subulam attenuata. Capsula in pedicello flexuoso, madore geniculato, apice reflexo, 1,5 cm longo, pallido, minuta, lutea, striata, oblonga, 1,2 mm longa, 0,3 mm lata. collo attenuato instructa; operculum longe conico-rostratum.

Prov. Ise, Ohsugidani (Leg. T. Magofuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19617 22-Sept.-1950).

ラングウツリバリゴケ: 外親 C. gracilentus Card. に近似するも 葉長 1/2 に過ぎず然も著しく葉形を異にす。 肋の上部に微鋸歯あり。翼 細胞分化せず時に方形の肥厚せる数個の細胞を見ることあり。葉基は麗し き黄褐色を呈す。 蒴柄著しく長く上部は釣針狀に曲る。

(15). Dichodontium pellucidum (L) Schpr. var. japonicum Sak. var. nov. Costa validior, continua vel subcontinua, dorso superne plus minus

serrulata.

Prov. Ise. Naigu (Leg. T. Magofuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19618 17-Dec.-1949).

クマデゴケ: 邦牵品は歐州産のものに比し肋は皆しく太く薬先に至るも余り細くなることなし。且つ肋背上部に錯歯を見ること多し。この特徴は単に伊勢産のみならず邦産(日光産、伊予産等)の多数に同様の処見あり。

(16). Taxiphyllum patentifolium Sak. n. sp. Planta gracilis, caespitosa, caespitibus laxis,

late et complanate extensis, sordide luteoviridibus. Caulis per totam repens, ultra 3 cm longus, irregulariter ramosus, ramis 2 cm longis, breve ramulosis, apica obtusis, distiche patentiforme foliosis, cum foliis 2 mm latis. Folia sicca patentia, e basi constricta, ovatolanceolata, sensim attenuata, acuta, falcatula, concaviuscula, indistincte holodonta, usque ad 1,5 mm longa, 0,3 mm lata. Costa bina, brevissima vel indistincta. Lamina subpellucida, paulum papillose exstante; cellulis linearibus, basin versus laxioribus, alaribus quadratis, non vesículosis. Seta tenui, rubra, 1,2 cm alta. Theca destructa. Perichaetium internum ovatum, subito lanceolatum, subreflexum, serrulatum.

Prov. Ise, Shimaji-yama (Leg. T. Mago-fuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19166 2-Aug.-1950).

ラングウキャラボクゴケ: 大体 T. assimile に近縁の種なるも莖葉枝葉とも乾濕に関係なく撒開する特徴あり。尚植物

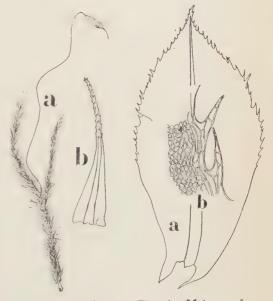


Fig. 3. Campylopus ise-sanctus Sak.
a Planta fertilis
×5. b Folia
caulina ×20.

Fig. 4. Mnium subundulatum Dix.

a Folia caulina ×30.

b Cellulis marginarum 廊大.

体扁圧にして直上することなく莖葉可なり狭長にして葉身多くは一方に曲る。

(17). Mnium subundulatum Dix. in Hedwigia, 76 (1936) (Fig. 4).

Prov. Ise, Jingu, Shimaji-yama (Leg. T. Magofuku in Herb. K. Sakurai No. 19948 Nov. 1950).

コガネチャウチンゴケ: タイプ品は肥前黑髪山で国内第二の産地である。植物体黄色を呈 し鋸歯の肤態葉の下延等特徴ある稀品である。

(18). Palisadula chrysophlla (Card) Toyama in 東亞蘚類考察 (1937). Pylaisia chrysophylla Card, in Mousses de flora de Formosa.

Prov. Ise, Naigu and Gegu, valde communis (Leg. T. Magofuku Herb. K. Sakurai No. 19726 etc. 26-Nov.-1949).

カキネゴケ (外山): 神宮内各所に 産し外觀 *Clastbryella* 又は *Clastbrypohilium* に酷似するも翼細胞の形狀に より区別し得。子嚢を見ず。

(19). Timmiella anomala (Bryol, eur.) Limpr. in Rabenh. Kryptog. fl. 4. 272.

Prov. Ise, Jingu, Ohsugidani (Leg. T. Magofuku, Herb. K. Sakurai No. 19720 21-Sept.-1950).

センボンウリゴケ: 台湾よりの報告あるも日本フロラ新品と考えらる。既に岩崎二三君は越後小滝に採集し(Herb. K. Sakurai No. 11658), 越智一男君は伊予石槌山に採集す (Herb. K. Sakurai No. 19619).

(20). Aptychopsis albida Sak. n. sp. (Fig. 5). Ramulicola. Caespitosa, caespitibus rigidiusculis, opacis, albescentibus.

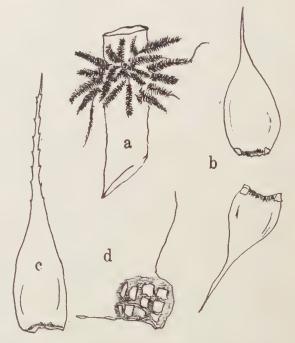


Fig. 5. Aptychopsis albida Sak. a Planta sterilis ×1, b Folia caulina ×30, c Folia perichaetii ×30, d Cellulis alaribus 廊大.

spitibus rigidiusculis, opacis, albescentibus. Caulis repens, infra 2 cm longus, hic illic rubro-radiculosus, subpinnam ramosus, ramis 5 mm longis, depentiformis, valde complanate foliosis, saepe flagelliforme atteunatis. Folia ramea ovato-oblonga, longe piliforme atteunata, infra medio saepe incurvata, concaviuscula, indistincte serrulata, usque ad 0,8-1,0 mm longa, 0,4 mm lata. Nervo obsoleto. Cellulis in medio folii linearibus, flexuosulis, hic illic indistincte papillose exstantibus, basin versus laxioribus, alaribus 5-7 quadratis, valde incrassatis, atrofuscis, basilaribus in toto aureis. Seta 5 mm alta, rubra, levis. Capsula juvenilis. Perichaetium internum ovato-lanceolatum, erectum, serrulatum.

Prov. Ise, Gegu (Leg. T. Magofuku Typus in Herb. K. Sakurai No. 19723 24-Aug.-1950).

イスズゴケ: 大木の小枝を輪状にとり卷き著しく白色を帶びる異彩ある新品で成熟せる子 嚢を欠くを以て多少の疑あるも翼細胞が格子狀を呈すること, 肋のなきこと, 莖葉の形狀等から 考えて暫く本属の一品とする。 (続) The re-examination and the limit of applicability of the compensation method to the measurement of sap streaming in plants.

## By Yusaburo Kuniya\*

国谷雄三郎: 植物体内の液流測定に関する補償法 "Kompensationsmethode" の再試験と応用の範囲とについて

### Introduction

Many experiments have been made on the sap streaming in plants, some pigments being used since early times, and, in recent years, radioactive indicators becoming widely to be used. However, the thermoelectric method is also adopted very widely on the study in this field, giving the physical energy into the plant body instead of the chemical substance. The principle of this method is that the heat is given to the vessels locally for a little while, and the translocation of this heat energy is measured by the thermocouples at the point of definite distance from the heating point on the vessels.

In this case it must be taken into consideration of the effects of heat conduction and convection; on laying the stem horizontally the effects of convection may be eliminated, while the heat conduction may cause a serious error, especially in the slow streaming.

In this respect the "Kompensationsmethode" (Huber and Schmidt, 1937)<sup>1)</sup> is very suited, as the writer also has previously reported the results of the experiment on sap streaming by this method.<sup>2)</sup>

## Principle of compensation method

In the measurement by compensation method, the velocity calculated from the time of the deflection of galvanometer  $(V_G)$  is related with the real velocity of streaming in plant  $(V_K)$  in the way, as it may be expressed by the following equation:

$$V_G = V_K + \text{const.}$$
 (1)

Moreover, it depends on the heater distance (s) and the time to the turning point of galvanometric deflection (t), so that the equation (1) will be transformed as it follows:

<sup>\*</sup> Institute of Biology, Faculty of Science, Tohoku University, Sendai.

$$V_K = V_G - \text{const.} = \frac{s}{t} - \text{const.}$$
 (2)

The value of const. equals to the value of  $V_G$  in the case of  $V_K=0$ , where t takes the maximum and definite value for definite plant individual; now putting it to  $t_0$ , becomes  $\frac{s}{t_0} = \text{const.}$  It means that the const. corresponds to the pure heat conduction and may be expressed with the value of the velocity. Therefore, the real velocity of sap streaming may be obtained by the formula

$$V_K = \frac{s}{t} - \frac{s}{t_0} \tag{3}$$

The writer has attempted again to investigate these relations mentioned above.

The course of this experiment proceeded in the manner of Huber and Schmidt.<sup>1)</sup>

### Material, method, and experimental results

A branch of *Castanea* about 1.5 cm. diam. is cut to 15–20 cm. long, hung to cistern with siphon, and kept in place so long, by adjusting the difference of the level, as the water falls in drops slowly or rapidly from the cut end of the top of branch. Two junctions of thermocouples are taken within the cortex on both sides of the heater at the distance of 16 mm. and 20 mm. respectively. The junction on the upper stream is taken nearer to the heater than on the down stream (Fig. 1).

In this arrangement, after some seconds from the heating, the deflection of galvanometer will be caused towards the left by the under junction (nearer junction

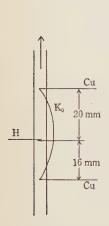


Fig. 1. Arrangement of thermocouples in compensation principle. Cu, Copper; Ko, Constantan; H, Heater; arrow shows the direction of streaming.

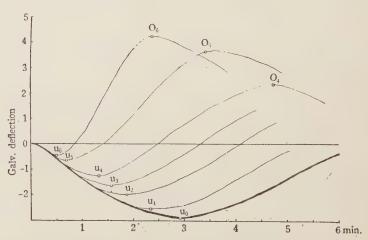


Fig. 2. Scheme showing the various deflections of galvanometer in compensating arrangement caused by the flow of heated liquid with different velocity. Heavy line, no streaming;  $\mathbf{u}_0$ ,  $\mathbf{u}_1$ ,  $\mathbf{u}_2$ , the first turning point;  $\mathbf{0}_6$ ,  $\mathbf{0}_5$ ,  $\mathbf{0}_4$  ......, the second turning point.

on the upper stream). The deflection goes from the left back to the zero with different rates depending on the velocity of streaming, and further towards the right by the upper junction on the side of down-stream (Fig. 2).

Now another thermocouple is inserted at 40 mm. distance on the upper side of (down-stream from) the heater in addition to compensation arrangement, to investigate simultaneously and independently the deflections of two galvanometers by two observers. The results are given in Table 1.

Time of water falling	Time to the turning in compensation	Time to the begin- ning of galv, deflec-	
per one drop	first	second	tion in 4-cm-method
10.5 sec.	30.8 sec.	148 sec.	60.3 sec.
17.2	47.5	222	98.4
30.6	80.4	285	184.6
40.7	83.1	396	ca. 210
55.2	99 1	ca. 450	ca. 220
65	102	ca. 500	)
75	115	ca. 500	not found
120	140	ca. 540	) not round
5	150-180	S	1

Table 1. Experiment on Castanea pubinervis, VI 14, 1948

As Table 1 shows, the time of reaching to the first turning point of galvanometric deflection in the compensation method is greater if the streaming becomes slower, so that in the extreme case of no streaming it becomes to be the maximum (Figs. 2 and 3, Tab. 1).

The relation between the reciprocal value of the time of water falling in drops and the velocity calculated by the equation (2) from the time to the first turning point of galvanometric deflection is given by the straight line, which cut the ordinate at a certain point (Fig. 4). This result fulfills the requirement of the equation (2).

In another model experiment on *Quercus dentata* the similar result is also obtained (Tab. 2). In this case, however, the relation between the velocities concerned does not give a straight line, curving especially as the numbers of drops increase (Fig. 4, the dotted line).

In spite of various results, the differences of the calculated velocities are very small, and it may be generally said that a sufficient grade of precision may be expected by this method in determining the sap streaming velocity.

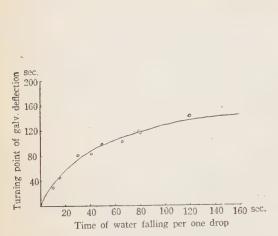


Fig. 3. The relation between the time of water falling in drops and the time to the first turning point of galvanometric deflection in *Castanea pubinervis*. VI 14, 1948, from Tab. 1.

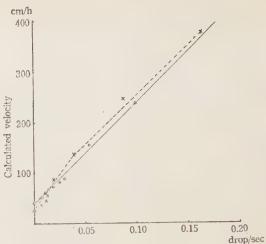


Fig. 4. The relation between the velocity of water falling and the calculated one from the galvanometric deflection.—The reciprocal value of the time of water falling;—Similar value in *Quercus dentate* (Tab. 2).

Table 2. Experiment on Quercus dentata, VII 21, 1948

Time of water falling per	Time to the turning point of	7200 t <sub>G</sub>	Velocity calculated by the equation (2) in cm/h			
one drop $t_{Tr}$	one drop galv. deflection		$\frac{s}{t} - \frac{s}{t_0}$	$221.2 \times \frac{11.5}{t_{Tr}}$	$119.9 \times \frac{25.3}{t_{Tr}}$	
4.1 sec.	9.2 sec.	782.6	755.6			
6.0	19.2	371.1	344.1			
11.5	29.0	248.2	221.2	221.2(1)		
25.3	51.8	138.9	119.9	100.5	119.9(1)	
51.0	83.7	86.0	59.0	59.8	59.4	
81.7	115.8	62.1	35.1	31.1	37.0	
122	146	49.3	22.3	20.8	24.8	
230	197	36.5	9.5	11.0	13.1	
	266	27.0	0	0	0	

(1) This is taken as the base number of calculation.

 $\frac{7200}{t_G}$  is got from s=2 cm., 1 h=3600 sec.

### Discussion and conclusion

In the report of Huber and Schmidt the misscalculation is found in the case of the model experiment of *Castanea vesca* (an investigator E. Rouschal, Tab. 2), where the minimum value of  $\frac{7200}{t_G}$  is given as 28, but it must be 24.4 as my calculation

shows, and consequently all the velocities calculated by the formula in their Table must be calculated over again, and the re-calculated values of them will become larger than they are there given.

From the result above mentioned it is proved that the velocity of about 10 cm/h may be measured by the compensation method. The rate of velocity is reflected by the first turning point of deflection, the time reaching to which, however, is not always got in linear proportion to streaming velocities, and in case of a very slow movement of the stream it will gradually come to coincide with the maximum (no streaming).

As shown in Table 1, both velocities obtained by the compensation and 4-cm-method coincide with each other in the faster streaming, i.e. the times got in the 4-cm-method are twice the number of those of the compensation method. In the case of the slower streaming, on the other hand, it is proved that the measured velocity must be corrected by the velocity of the heat conduction, which relation is expressed by the equation (3) in the compensation method.

It leads, therefore, to the conclusion that one may be able to determine the velocity of sap streaming and its diurnal change by the compensation method in intact plants, as some examples are given in the following chapter.

#### Examples of practical application

To measure the sap streaming velocity by the compensation method in intact plants, the value of  $t_0$  must be determined, for which the streaming is artificially stopped by cutting the stem or branch about 20 cm. long and applying with vaseline on the cut surfaces. On the other hand, the minimum value of natural velocity of sap streaming in the night was estimated to know the difference of it from the value of  $\frac{s}{t_0}$ .

Table 3. Data for the determination of  $t_0$ 

	Time of turning point of galv. deflection in sec.				
Plants used in experiment	maximum in the night	maximum after cutting $(t_0)$			
Acer palmatum	92	135-150			
Tuniperus rigida	180	189			
Impatiens balsamina	67	135-140			
Hedera helxi	45	124-130			
Lonicera japonica	61	170			
Carpinus	88	144			
Pinus	131	156			
Laurus nobilis	169	225			
Fraxinus	138	220			

In Table 3,  $t_0$  becomes to 150 sec., and rarely to 225 sec. and the value of  $t_0$  which must be taken into consideration for the estimation of real velocity in this case becomes  $t_0$  this case  $t_0$  th

Even in the same individual of plants the value of  $t_0$  shows some fluctuations, as shown in Table 4.

Plants	Impatiens	balsamina		Tilia			
Day	1	2	1	2	. 3	4	
1	140	137	112	101	171	204	
2	138	138	116	104	169	205	
3	134	131	112	103	157	191	
4	115	109	101	88	124	151	
5	97	94	94	76	126	137	
6	86	91	91	77	115	126	

Table 4. Changes of  $t_0$  in the stem of Impatiens balsamina and in the branch of Tilia

The cut stem or branch gets drying gradually in the room and the amount of water contained decreases from 58% to 29% in *Tilia*, and from 83% to 44% in *Impatiens* in the fourth day, suddenly giving the smaller  $t_0$  value. The calculated value of  $\frac{s}{t_0}$  will be drawn on the graph beside the curve of  $\frac{s}{t}$  in order to compare results.

The result obtained by the actual measurement on several plants are shown in the following figures (Figs. 5, 6 and 7).

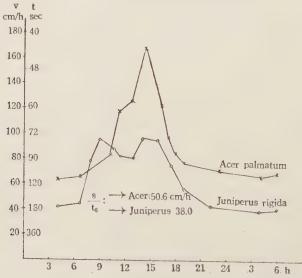


Fig. 5. Diurnal changes of velocity of streaming in *Acer palmatum* and *Juniperus rigida*. VIII, 1949. The numbers of the right side of ordinate show the time of the turning point of galvanometric deflection in second.

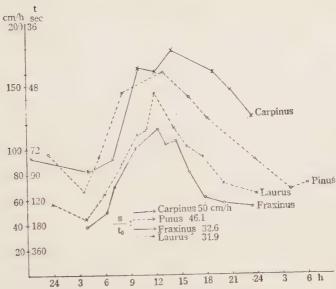


Fig. 6. Diurnal changes of velocity of streaming in Carpinus, Pinus, Laurus and Fraxinus. VII, 1949.

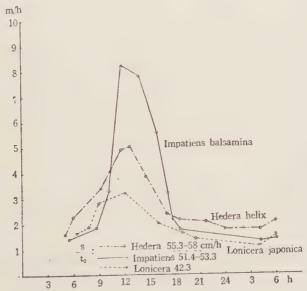


Fig. 7. Diurnal changes of velocity of streaming in Impatiens, Hedera and Lonicera. VIII, 1949,

As Figures 5, 6 and 7 show, the minimum velocity is found before sun rise, and it is even easy to reduce it to that corresponding to  $t_0$ , by addition of the moisture artificially. The compensation method allows the measurement of slow streaming in plants beyond the limit of usual method. In an accrose tree the minimum velocity

in the night approaches to almost zero, while in a deciduous latifoliate tree it may be about 10 cm/h.

#### Summary

- 1. The writer has attempted to re-examine the compensation method proposed by Huber and Schmidt (1937).
- 2. The writer has touched again on the subject briefly how the equation  $V_K = \frac{s}{t} \frac{s}{t_0}$  is brought about, and calculated the limit of velocity of slow streaming which may be measured by the compensation method. It was found that it allows to measur the velocity about 10 cm/h.
- 3. The model experiment with similar plants as those used by Huber and Schmidt has given a resemblance to the results found by them; however, an error in their calculation is pointed out of their report (Tab. 2, investigator E. Rouschal).
- 4. Velocities obtained by the compensation and usual method, coincide with each other in the case of rapid streaming as shown in parallel experiment in Table 1; in slow streaming the compensation method only may be relied upon, because the slow streaming is not detected by the usual method.
- 5. The velocities obtained by the experiment must be corrected by the value of heat conduction, being only negligible in very fast streaming for practical purposes.
- 6. In applying this method to intact plants the value of  $t_0$  must be determined, which gives usually a definite value in the same individual plant, with some fluctuations.
- 7. The absolute velocity was measured with the correction by  $\frac{s}{t_0}$ ; the minimum velocity of sap streaming in the night approaching to  $\frac{s}{t_0}$  value was found in an accrose tree.
- 8. As the compensation method is proved to be applicable to measure the velocity of slow streaming, it is very probable that it will be extended to the assimilation stream in the future.

This experiment was carried out in the Biological Institute of Tohoku University. I wish to express my heartfelt thanks to Prof. Dr. Y. Yamaguti, for his kind advice.

#### References

- 1) Huber, B. und Schmidt, E. 1937. Eine Kompensationsmethode zur thermoelektrischen Messung langsamer Saftströme. Ber. d. D. Bot. Ges., 55: 514.
- 2) Kuniya, Y. 1950. Thermoelectric Study on the Sap Streaming of Plants. Science Rep. of the Tohoku Univ. 4th ser. (Biology), 18 (4): 527.

#### 摘 要

植物体における緩慢な液流の測定について Huber u. Schmidt の提案した熱電気的測定 の補償法 (Kompensationsmethode) は、従来の方法の種々の欠点を補つて都合のよいもので あるが、筆者はこれが再試験と応用の範囲についての研究を試みた。 彼等と同じ方法によって、 類似した材料を用いて実験をすすめた。

組費法による測定においては、検流計の振れによつて等出される速度  $V_G$  と実際の速度  $V_K$  との間には  $V_G = V_K + \mathrm{const.}$  なる関係がある。更に、測定距離 s 及び検流計の振れの回帰始めまでの時間 t とから  $V_K = V_G - \mathrm{const.} = \frac{s}{t} - \mathrm{const.}$  なる式が成立する。s const. の値はs の場合の s の単合の s の値である。この場合の s は最大であり、植物個体によつて特定の値をとる。これを s とすれば、 s = s = s の式で求められる。s の式で求められる。

Huber u. Schmidt の論文の中には計算の誤りがあり、従つてそれに基いた計算を全部訂正しなければならない。その結果は後等の認めた値よりも大きくなる。

液流の速い場合においては補償法と通常の方法との値は一致するが、緩慢 な場合においては補償法によらなければならない。この方法によつて 10 cm/h の値を捉えることが出来る。 非常に速い流動においては熱伝導の値を無視して差支えない。

実際に自然の節物に応用する場合には、先づ $t_0$ の値を決定しなければならない。 $t_0$ の値は、グラフ上に画いた $\frac{s}{t}$ の値に具体的に引合せてその関係をみる。

ここには実測した数例を示した。

この実験は東北大学生物学教室において行つたもので、御指導を賜つた現 東北大学名譽教 授山口彌輔博士に対して深く感謝の意を表する次第である。

## Observational and Experimental Studies of Meiosis with Special Reference to the Bouquet Stage

X. Response of chromosomes in meiotic prophase to centrifugal force

By Tosisuke HIRAOKA\*

平岡俊佑: 還元分製特に花束期に関する觀察並びに実験。 その十. 前期染色体の遠心力に対する反応

Response of chromosomes to centrifugal force was studied in *Lilium* pollen mother cells to get some knowledge on the nuclear condition in meiotic prophase, especially in the bouquet stage. The results obtained will be reported below.

#### Material and Method

Buds of *Lilium speciosum* Thunb. were subjected to centrifugal force of 1307 g acting from the base to the apex of the buds for 15 minutes.\*\* Previous to the centrifugation, one of the anthers had been detached from each bud and the pollen mother cells contained in the anther had been examined by means of acetocarmine smear method as the control samples. In the centrifuged samples, observations of the pollen mother cells were made mostly in acetocarmine smear preparations, but observations of the mother cells in intact state were also made in the medium of liquid paraffin. All the experiments were carried out at a room temperature of 30-33°C.

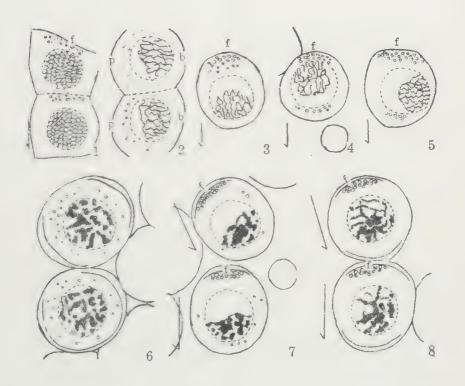
#### **Experiments**

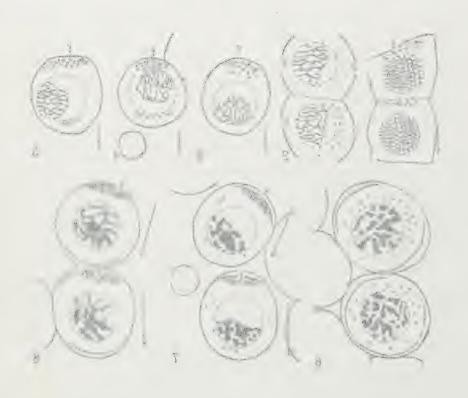
The cytoplasm of the pollen mother cells of *Lilium* contains granules of fat nature, which are stained orange with Sudan III and turn black with osmic acid. These granules are displaced to the centripetal direction when they are subjected to the centrifugal force, and thus they may be taken as an indicator showing the direction of the centrifugation.

Stages from the interphase to the leptotene: In these stages, the pollen mother

<sup>\*</sup> Botanical Institute, College of Science, Kyoto University. This investigation was supported by Grant from the Science Research Fund of the Department of Education.

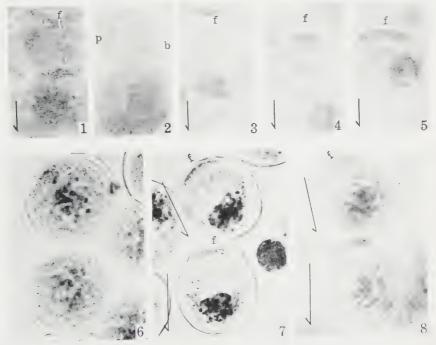
<sup>\*\*</sup> An "Ecco" centrifuge of E. Collatz & Co., whose radius of revolution was 13 cm, was used.





cells are of polygonal shape, and are closely associated with one another to form a group. They contain the small fat granules which are distributed evenly in the cytoplasm. The nucleus takes the central position in the cell.

Immediately (within two minutes) after the pollen mother cells are subjected to the centrifugal force of 1307 g for 15 minutes, the granules are tightly gathered to the centripetal region of the cell. The nucleus shows no clear displacement due to the centrifugation in the cell, though a tendency of the nucleus being moved towards the centrifugal side of the cell is found occasionally. In the majority of cases, chromonema threads show no recognizable displacement due to the centrifugation and remain evenly distributed in the nucleus (Fig. 1). In some cases, the distri-



All the figures are photomicrographs taken with a obj. 7 and a periplane oc. 8x of E. Leitz. Arrows indicate the direction of centrifugation. Acetocarmine preparations.

Fig. 1. Two pollen mother cells of Lilium subjected to centrifugal force of 1307 g for 15 minutes. Interphase just preceding meiosis. f, fat granules.

Fig. 2. Pollen mother cells in the bouquet stage. Uncentrifuged state. b, bouquet base. p, plastid pole.

Figs. 3-5. Centrifuged pollen mother cells in the bouquet stage fixed immediately after the centrifugation. f, fat granules.

Fig. 3. Type I. Fig. 4. Type II. Fig. 5. Type III. Further explanation in text.

Figs. 6-8. Pollen mother cells in the strepsitene stage. f, fat granules.

Fig. 6. Uncentrifuged cells. Fig. 7. Centrifuged cells fixed immediately after the centrifugation. Fig. 8. Centrifuged cells fixed after being kept at a vertical position for 15 minutes. Further explanation in text.

bution of the chromonema threads is denser in the centrifugal region of the nucleus than in the centripetal one. But, even in such cases, the chromonema threads are never forced to separate from the surrounding nuclear membrane.

In the centrifuged samples fixed after being kept at a vertical or a horizontal position for 15 minutes, the gathering of the granules in the centripetal region of the cell becomes loose, but the positional relation of the nucleus in the cell and that of the chromonema threads in the nucleus are quite the same as in the samples fixed immediately after the centrifugation.

The bouquet stage: The pollen mother cell takes a spherical shape. The nucleus is found displaced from the central region of the cell and takes an eccentric position. The granules, which increase both in number and in size, show a tendency of being distributed more densely in the "plastid pole"—the broader region of the cytoplasm produced by the nuclear displacement—than in the remaining regions (Hiraoka, 1949). The chromosome threads distribute themselves in the whole nuclear cavity in intact state of the cell, and they show a parallel or a whirl arrangement more or less clearly in some region of the nucleus (See, Fig. 20 in Mottier's paper, 1907). In this stage, all or almost all the chromosome ends are located at a certain region of the nuclear membrane forming the bouquet base. The bouquet base and the plastid pole take diametrically opposite positions in the cell. When the cell is fixed with acetocarmine, the chromosome threads contract to the bouquet base and form the so-called synizetic mass attached to the nuclear membrane (Fig. 2). As shown in Table 1, the synizetic mass takes random positions with respect to the long axis of the anther.

Table 1\*

Stage		hich the synizetic mass ne nuclear membrane	is attached to
	At the lower region of the nucleus with respect to the long axis of the anther	At the upper region of the nucleus with respect to the long axis of the anther	At one of the lateral sides of the nucleus with respect to the long axis of the anther
Zygotene bouquet		19	45
Pachytene bouquet		26	57
Late pachytene bouquet	26	31	62

Among the pollen mother cells in the bouquet stage, fixed with acetocarmine immediately after the centrifugation, three types are distinguishable as to positional relations of the synizetic mass in the nucleus with respect to the axis of the centrifugation. In the first type, the nucleus is found displaced to the centrifugal

<sup>\*</sup> In Tables 1, 2 and 3, counting was made in median optical section of the cells.

region of the cell, and the synizetic mass is attached to the nuclear membrane on the centrifugal side of the nucleus. The fat granules are gathered into the centripetal region of the cell to form a tight group (Fig. 3). In the second type, the nucleus is often found in nearly the central or in some cases in the centripetal region of the cell, and the synizetic mass is attached to the nuclear membrane on the centripetal side of the nucleus. Most of the fat granules are displaced to form a tight group in the centripetal region of the cell, but some of them are left on the centrifugal side of the cell in a row along the centrifugal side of the nucleus (Fig. 4). In the third type, the nucleus is found displaced toward a direction which is oblique by about 45° from the direction of the centrifugation, and the synizetic mass is attached to the nuclear membrane on one of the lateral sides of the nucleus with respect to the axis of the centrifugation. The fat granules are displaced to take the same distribution as described in the second type (Fig. 5). The frequency of these three types of the pollen mother cells is shown in Table 2. In this table, it is shown that the pollen mother cells of the first type are of most frequent occurrence, while those of the second and the third types are rather of rare occurrence, and also that the pollen mother cells of the first type increase, while those of the other two types decrease in occurrence as the stage advances. The nucleolus is usually found enclosed in the synizetic mass.

Table 2

Stage	Type I	Type II	Type III
Zygotene bouquet	50	10	40
Pachytene bouquet		6 .	17
Late pachytene bouquet	73	U	J

In the centrifuged samples observed after being kept at a vertical or a horizontal position for 15 minutes, the grouping of the fat granules in the centripetal region of the cell becomes somewhat loose. Observations of the pollen mother cells fixed with acetocarmine show that there occur the above mentioned three types of the pollen mother cells. The frequency of these three types is given in Table 3. Comparison of this table with Table 2 tells us that the pollen mother cells of the first type decrease and those of the remaining two types increase in number, thus in Table 3 the proportion of occurrence of the first, the second and the third types tends to approach to a ratio of 1:1:2.

Table 3

Stage	Гуре І	Type II		Type III.
Zygotene bouquet  Pachytene bouquet  Late pachytene bouquet	34	16 17	٠	29 27

Stages from the pachytene to the diakinesis: The pollen mother cells contain many fat granules which are distributed evenly in the cytoplasm. The nucleus takes the central position in the cell. The chromosome threads are found in both the peripheral and the central region of the nucleus. Fig. 6 shows the pollen mother cells in the strepsitene stage.

In the pollen mother cells fixed immediately after the centrifugation, the fat granules are gathered tightly in the centripetal region of the cell to form a mass. The nucleus is displaced from the central region of the cell to the centrifugal one. The chromosome threads are displaced always to the centrifugal side of the nucleus, and occupy nearly one-half of the nuclear cavity leaving a clear karyolymph in the centripetal region of the nucleus (Fig. 7). Such a condition of the chromosome threads reminds us of the so-called synizesis. The nucleolus is displaced also to the centrifugal direction in the nucleus.

In the centrifuged samples fixed after being kept at a vertical or a horizontal position for 15 minutes, the fat granules are found to form a loose mass in the centripetal region of the cell. Some of the chromosome threads, which were forced to displace to the centrifugal side of the nucleus by the centrifugation, emigrate towards the centripetal side of the nucleus again. Therefore, the chromosome threads take an even distribution in the whole nuclear cavity (Fig. 8). This movement of the chromosome threads to the centripetal direction is observable in live pollen mother cells mounted with liquid paraffin. The nucleolus also moves to the centripetal direction in the nucleus.

#### Conclusion

Among the centrifuged pollen mother cells in the bouquet stage fixed with acetocarmine immediately after the centrifugation, three types of the mother cells are observed as to the response of chromosome threads to the centrifugation. In the first type, the synizetic mass is found attached to the nuclear membrane on the centrifugal side of the nucleus, while in the second type, on the centripetal side of the nucleus and in the third type, on one of the lateral sides of the nucleus with respect to the axis of the centrifugation. The occurrence of the second and the third types shows an evidence that the chromosome threads adhere to the nuclear membrane only in a certain region of the nuclear periphery or they adhere more strongly to the membrane in this region than in other regions. In view of the facts that all or almost all the chromosome ends are located at the bouquet base region of the nuclear membrane, and that the chromosome threads contract toward the bouquet base to form the synizetic mass on fixation (Hiraoka, 1941), it seems probable that the region of the nuclear periphery in question is no other than the region where the bouquet base is situated.

If this statement be correct, the occurrence of the first, the second and the third types may originate from a variety of relations\* between the direction of the centrifugation and that of the bouquet axis—the axis passing through the plastid pole and the bouquet base. The first type may be regarded as the case in which the centrifugal force acts from the plastid pole to the bouquet base, and the case in which the centrifugal force is strong enough to bring about the separation of the chromosome ends from the nuclear membrane irrespective of the relations between the direction of the centrifugation and that of the bouquet axis. The second type may be regarded as the case in which the centrifugal force which acts from the bouquet base to the plastid pole is not so strong as to bring about the separation of the chromosome ends from the nuclear membrane, while the third type as the case where the centrifugal force acting cross-wise to the bouquet axis is not so strong as to cause the separation of the chromosome ends from the nuclear membrane.

In Table 2, it is shown that the first type occurs most frequently among the three types in the centrifuged pollen mother cells and this fact implies that the adhesion between the chromosome ends and the nuclear membrane at the bouquet base can be destroyed by the centrifugal force in most cases.\*\* Table 2 also shows that the occurrence of the first type increases as the stage advances from the zygotene bouquet to the pachytene bouquet, and this fact may be taken to show that the magnitude of the adhesion which resists against the chromosome displacement due to the centrifugation decreases as the chromosome syndesis becomes complete.

In the centrifuged samples fixed after being kept at a vertical or a horizontal position for 15 minutes, the occurrence of the first type decreases, while that of the second and the third types increases (Table 3), thus the frequency of the first, the second and the third types approaches to a ratio of 1:1:2 showing that the synizetic mass tends to take random positions in the nuclear periphery with respect to the axis of the centrifugation. In view of the fact that in uncentrifuged samples, the synizetic mass takes random positions with respect to the long axis of the anther when the pollen mother cells are fixed with a fixative (Table 1), the above men-

<sup>\*</sup> In view of the occurrence of the nuclear displacement and of the localized distribution of the fat granules in uncentrifuged mother cells, the relations may also explain the origin of the variety of positional relations of the nucleus and of the fat granules observed in the three types of centrifuged mother cells.

<sup>\*\*</sup> Northen's result of centrifuge experiments (Northen, 1937) shows that in the synizetic stage the adhesion between the chromosomes and the nuclear membrane is absent or is weak. But he did not distinguish the displacement of the chromosomes due to centrifugation from the displacement due to fixation in this stage.

tioned fact may be taken to show that in the cases where the chromosome ends are forced to separate by the centrifugation from the nuclear membrane, the adhesion between the chromosome ends and the bouquet base region of the nuclear membrane restores itself soon after the centrifugation. We may say that there exists an active adhesion between the chromosome ends and the bouquet base region of the nuclear membrane.

#### Literature Cited

- 1. Hiraoka, T. (1941) Studies of mitosis and meiosis in comparison IV. A contribution to the study of the origin of the "bouquet" and its formation. Cytologia vol. 11, pp. 483-492.
- 2. (1949) Observational and experimental studies of meiosis with special reference to the bouquet stage II. Cell polarity in the bouquet stage as revealed by the behaviour of amyloplasts and fat granules. Bot. Mag. Tokyo, Vol. 62, pp. 121-125.
- 3. Mottier, D. M. (1907) The development of the heterotypic chromosomes in pollen mother cells. Ann. Bot. vol. 21, pp. 309-347.
- 4. Northen, H. T. (1937) Studies of nuclear structure in vegetative and reproductive cells of Nicotiana sylvestris. Amer. Journ. Bot. vol. 24, pp. 90-95.

# A revision of the new genera from New Guinea described by C. Lauterbach.

### By Sumihiko HATUSIMA\*

初島住彦: ラウラルベツハ氏記載ニユーギニヤ産新属の再検

During the 2nd. World War I stayed for about three years at the Herbarium of Buitenzorg, Java and studied the Malaysian woody plants. The following studies are a part of the result obtained.

1. Nouhuysia Lautb. When I saw the type specimen of Nouhuysia papuana Lautb. (Guttiferae) kept in the Buitenzorg Herbarium it seemed to me at a glance a species of Idenburgia (Monimiaceae). I told this fact to Dr. van Steenis, who was studying the tropical useful plants in the herbarium with Dr. R. Kanehira, a keeper of the herbaium at that time. As Dr. van Steenis had already been aware of this fact I will publish the following combination jointly.

As *Nouhuysia* established by Lauterbach in 1912 antedates five years *Idenburgia* described by L. S. Gibbs in 1917, the former must be adopted as a valid generic name.

Nouhuysia elaeocarpoides (Gilg et Schltr.) v. Steenis et Hatusima, comb. nov.

Idenburgia elaeocaropoides Gilg et Schltr. in Bot. Jahrb. 58 (1923) 247, fig 2,

A-M; A.C. Smith in Journ. Arn. Arb. 22 (1941) 233.

Hab. N. E. New Guinea.

Nouhusia pachyphylla (Gilg. et Schltr.) v. Steenis et Hatusima, comb. nov. *Idenburgia pachyphylla* Gilg et Schltr., 1. c. 246, fig. 2, N-X. Hab. N.E. New Guinea.

I have studied the merotypes of *I. pachyphylla* and *I. elaeocarpoides* which were kept in the Buitenzorg Herbarium, but I could not find out any decisive characters to separate these two species as mentioned by A.C. Smith (op. cit.).

Nouhuysia novo-guineensis (Gibbs) v. Steenis et Hatusima, comb. nov.

Idenburgia novo-guineensis Gibbs, Phytogeogr. & Fl. Arfak Mts. (1917) 137. Hab. N. New Guinea, Moluccas, and? Celebes.

Nouhuysia pauciflora (A.C.Sm.) v. Steenis et Hatusima, comb. nov.

Idenburgia pauciflora A. C. Smith, I. c. 234.

Hab. N. E. New Guinea.

<sup>\*</sup> First of Forestry, Dept. of Agric., Kagoshima University.

Nouhuysia arfakensis (Gibbs) v. Steenis et Hatusima, comb. nov.

Idenburgia arfakensis Gibbs, 1. c. 139.

Hab. N. New Guinea.

Nouhuysia papuana Lautb. in Nova Guinea 8-4 (1912) 843; Bot. Jahrb. 58 (1922) 14; Engl. in Engl. & Prantl, Nat. Pfl.-fam. ed. 2, 21 (1925) 197.

2. Gjellerupia Lautb. In 1912 Lauterbach described a new monotypic Gjellerubia (Opiliaceae) from New Guinwa. When describing this new genus he did not mention the relationship to Lepionurus. After comparing the type specimen of Giellerupia (Gjellerup nos. 182 and 170) kept in the Buitenzorg Herbaium, I failed to detect any decisive characters to discriminate the two species, so I will reduce Gjellerupia to a synonym of Lepionurus as follows.

Lepionurus sylvestris Bl. Bijdr. (1825) 1148.

Gjellerupia papuana Lautb. in Nov Guinea 8.4 (1912) 817, t. 149; Schellenberg in Bot. Jahrb. 58 (1923) 157, syn. nov.

Distrib. Malay Peninsula, Borneo, Java to New Guinea.

3. Cyclandra Lautb. In 1923 Lauterbach dascribed a new genus Cyclandra (Guttiferae) including two species from New Guinea. His description of the genus was based on three specimens, of which one with a male flowering branch is representing the type of C. Ledermannii, and the other two are branches with immature male flowers and fruits, both representing the types of C. papuana. Unfortunately I have no chance to examine the authentic materials, but judging from his original description and figure Cyclandra seems to me undoubtedly to be congeneric with Ternstroemia (Theaceae). The figure (Fig. 10) of Cyclandra Ledermannii seems artificial and not correct, because the flower is drown as tetramerous and in the text it is described to be quinquemerous. Moreover according to his diagnosis leaves are 5-8 cm in length while in the figure, which seems figured in natural size, two old leaves attached to the basal part of the flowering shoots are apparently longer than 10 cm. in length, and also the fruiting figure (Fig. 10, E) must be referred to C. papuana and not to C. Ledermannii, because the latter was based on a flowering specimen.

In 1940 Kobuski described two new species of Ternstroemia with enormously large fruits from New Guinea, i. e. T. Merrilliana and T. Rehderiana. Judging from the descriptions Cyclandra papuana is apparently closely related to the above two species, especially to the former in its dimension of leaves, petioles, calyces, petals and fruits as shown in the following table.

As the oldest specific epithet "papuana" cannot be maintained, because there exists an earier homonym, Ternstroemia papuana Lautb. (Nova Guinea 8-4 (1912) 841). Synonymy is as follows:

Ternstroemia Merrilliana Kobuski in Journ. Arn. Arb. 21 (1940) 146.

		ar- water a second	
	Ternstroemia Merrilliana	Cyclandra papuana	Ternstroemia Rehderiana
Leaves	15 21 cm. × 4-8 cm.	14-18 cm. × 3-6 cm.	8-13 cm. × 3-5 cm.
Petioles	2 cm.	1 cm.	1–1.5 cm.
Sepals	9-10 mm. in length ( 3 )	7 mm. (ô)	3.5-4.0 mm. × 3.5-4 mm.
Petals	12-24 mm. × 20-25 mm. ( 3 )     17-20 mm. × 15 mm. ( 9 )	15 mm. (3) (immature flower)	9-10 mm. × 6-8 mm. (ô)
Fruits	4.5-5 cm. in length, ovoideus.	3 cm. in diam. (immature, globose)	2.5-4.5 cm. × 2.2-3.5 cm. (ovoideus).

Table 1. Dimensional comparision of leaves, flowers. and fruits of three species.

- ? Ternstroemia megacarpa sensu Diels in Bot. Jahrb. 57 (1922) 432, non Merr.
- ? Cyclandra papuana Lautb. in Bot. Jahrb. 54 (1922) 48, f. 10, E; Engl. in Engl, & Prantl, Nat. Pfl.-fam. ed. 2, 21 (1925) 237, f. 107, E.

Hab. Northeastern New Guinea.

At present it is not easy to decide the synonymy of *Cyclandra Ledermannii*, for the type of this species was based on a male flowering specimen and no pistilate flowers or fruits have been known, but I will provisionally propose the following binominal.

#### Ternstroemia Ledermannii (Lautb.) Hatusima, comb. nov.

Cyclandra Ledermannii Lautb. in Bot. Jahrb. 58 (1922) 47, f. 10, excl. E; Engler in Engl. & Prantl, Nat. Pfl.-fam. ed. 2, 21 (1925), f. 107 (excl. E), syn. nov.

Hab. Northeastern New Guinea.

#### 4. Lamiofrutex Lautb.

This monotypic genus comprising Lamiofrutex papuanus Lautb. was described by Lauterbach (Nova Guinea 14 (1924) 147) as a representative of the Rutaceae, but examining the type specimen kept in the Buitenzorg Herbarium I noticed that it is nothing but a species of Vavaea belonging to the Meliaceae, At present, however, it is not easy to decide its synonymy as no monograph of Vavaea from New Guinea and its surrounding districts has ever been published.

Autecological study of mosses in respect to water economy.

I. On the minimum hydrability within which
mosses are able to survive.\*

#### By Harumi OHCI\*\*

越智春美: 水分経済の面からみた蘚類の生態について, 第 I 報 蘚類の生存に必要な最小含水度について

When mosses are air-dried in the laboratory, hygrophytic ones tend to dry up in a relatively short period, while xerophytic ones are capable of surviving for a long period. (1), (2) In regard to this problem, Iljin suggested the "mechanical injury theory, (3) but we have to be careful also about the minimum hydrability!) \*\*\* within which mosses can maintain their lives.

The purpose of this investigation is to research into the adaptability of mosses to their environments by estimating the minimum hydrability and by making inquiries into its meaning from the point of view of the water economy in mosses.

The moss-plant is very tiny and has on it dead leaves and other foreign waste materials; so it is very difficult to get good experimental samples. Probably for these reasons, papers concerning this problem seem to be rather few, therefore this investigation may perhaps be appreciated as a new attempt, but on the other hand, there may be many incomplete points in its methods or in others; and the writer will be much pleased if the readers are kind enough to give him some suggestions and encouragements.

The investigation in regard to the title subject is to be made by the writer with materials collected in and out of Tottori City, and by Mr. Minoru Saitō in Hokkaido. In this paper, however, the first general experimental results obtained by the writer are only reported. The experiments and observations were mainly carried out during the period from May 1951 to October 1951.

#### Experimental materials and methods

Adopted materials and their inhabiting places are as being shown in Tables and

<sup>\*</sup> A paper delivered at the 16th annual meeting of The Botanical Society of Japan, September 23. 1951.

<sup>\*\*</sup> Biological Institute, Faculty of Gakugei, Tottori University, Tottori City.

<sup>\*\*\*</sup> Hydrability  $(H) = (h_0 - h_1)/h_0$  ( $h_0$  = maximum hydration when the sample is immersed in water,  $h_1$ = actual hydration of the sample).

in the text. The top samples which seemed to contain living leaves as a results of the control experiment were given by the same method as in Mc. Kay's paper.<sup>5)</sup> The leafy tops, which were being immersed in water for about 2 hours, of each species were divided into 3 or 4 samples, and then, they were put between 2 sheets of filter paper arranged in one fold, and the water on the surface and among the leaves was taken off as completely as possible by the filter paper being lightly pressed and by the samples being replaced to other dry patches on it repeatedly. No sooner moistened dots became almost invisible on the filter paper than each sample was weighed, and a sample of them of each species was reserved without being weighed as the control sample. Thus the water content at the phase, in which maximum water seemed to be contained in the top samples, was calculated. The control and weighed samples were air-dried in the laboratory, and the air-dried samples were weighed 3 times more on every 2nd day (48th hour) after the air-drying was started, and on the other hand, at every weighing time simultaneously, the examination of control samples was conducted in order to determine whether the moss-leaves were

第 1 表 気乾試料の含水量の変化 Table 1. Fluctuations of the hydration of air-dried samples.

Atmosph. conds.	May 25., fine, 23°, R.H.=53% (2nd day, 5,00 p.m.)	May 27., rainy, 20°, R.H.=77% (4th day, 5,00 p.m.)	May 29., fine 21°, R H.=68% (6th, 5,00 p m.)
Thamnium Sandei var. cymbifolium	16%	20%	19%
Polytrichum attenuatum	15	20	18
Dicranum japonicum	13	17	16
Macrosporiella dozyoides	17	. 23	22
Mnium Maximowiczii	21	24	26
Atmosph. conds.	May 26., fine, 23°, R.H.=48%	May 28., rainy, later fine, 21, 5°, R.H.=62%	May 30, cloudy, windy, 20, 5°, R.H. = 48%
Hedwigia albicans	14	17	13
Neckera yezoana	17	20	16
Thuidium japonicum	17	20	14
Atmosph. conds.	May 27. (the same w. above-mentioned)	May 29. (the same w. above-mentioned)	May 31., cloudy, a little rainy, 21°, R.H.=74%
Isothecium subdiversiforme	20	17	13
Anomodon Giraldii	17	20	16

living or not. After estimating the dry weight, each sample was put on the table in the laboratory for several days, and it was employed for the estimation of the hydration of the "dead-and-air-dried" sample. It was estimated by the same methods as the air-dried samples.

The relative atmospheric humidity in the laboratory was estimated with a psychrometer.

#### Experimental results

Obtained results are as being given in the following tables: the numerical value representing the hydration of the air dried sample of each species on the 2nd, 4th and 6th day is as being given in the Table 1., and the value fluctuates at each of the above 3 times as if it were dependent on the atmospheric moisture at the time when the sample is weighed.

第 2 表 最大含水量・気乾試料の含水量及び含水度・殺した気乾試料の含水量及び 含水度並びに 6 日間気乾した試料の生存度

Table 2. Maximum hydration, hydration and hydrability of air-dried samples and of "dead-and-air-dried" samples, surviving rate at the time after 6 days' air-drying.

Temp. & rel. hum.	20-23°, 53-77% 23-26.5°,			73-84%			
Articles  Materials	Max. hydr. (%)	Hydr. of airdried samps.	Hydrb. of airdried samps.	Hydr. of "dead-and-air-dried" samps.	Hydrb. of "dead-and-air-dried" samps.	surv- iving rate	Inhabiting places
Hedwigia albicans (Web.) Lindb.	229	15	6.6	19	8.3	ca.	
Polytrichum attenuatum Menz.	210	18	8.6	18	8.6	ca. 1	on rocks at a sunny
Thamnium Sandei Besch. var. cymbifolium Card.	199	13	9.0	17	8.5	ca. 1	place
Anomodon Giraldii. C. Müll.	172	17	9.3	19	11.0	ca. 1	
Macrosporiella cozyoides (Broth. et Par.) Noguchi	250	21	8.4	19	7.6	ca. 1	on barks of tree-trunks
Isothecium subdiversi- forme Broth.	201	18	8.0	20	10.0	ca. 1	in the forest
Neckera yezoana Besch.	272	18	6.6	20	7.3	ca. 1	
Thuidium japonicum Doz. et Mohr	190	17	9.0	20	10.5	ca. 1/3-1/4	on rocks in the forest
Dicranum japonicum Mitt.	231	- 15	6.5	18	7.8	very low.	on soil in
Mnium Maximowiczii Lindb.	393	24	6.1	19	4.8	ca. 1/3-1/4	the forest

The weight of the samples whose leaves had already been dead completely on the 2nd day was not estimated on the 4th and 6th day.

On other days, the air-drying experiments with *Mnium vesicatum* and *Hookeria* in order to research into more detailed relationship between the water deficit of the samples and the surviving rate of their leaves were carried out by the same method previously adopted. As soon as about 1/2 to 1/3 of the leaves died (after 2 bours' air-drying), the samples were weighed. The hydration and hydrability of the half-dried samples, and etc. are as shown in the Table 3.

#### 第 3 表 最大含水量・半ば気乾した試料の含水量及び含水度・乾燥死試料の含水量及び 含水度並びに 2 時間気乾した試料の生存度

Table 3. Maximum hydration, hydration and hydrability of half-dried samples and of air-dried (dead) samples and surviving rate at the time after 2 hours' air drying.

Articles Materials	Max. hydr. (%)	Hydr. of half-dried samps.	Hydrb. of half- dried samps. (%)	Hydr. of air-dried (dead) samps. (%)	Hydrb. of air-dried (dead) samps.	Surv- iving rate	Inhabiting place
Mnium vesicatum  Pesch.	503	76	15.1	12	2.4	ca. 1/2-1/3	on soil at very wet and shaded
Hookeria nipponensis (Besch.) Broth.	758	139	18.3	16	2.1	ca. 1/2-1/3	places in the forest

After 18 hours' air-drying, the leaves of both of these mosses were almost dead except that only a few cells at the basal portion of a few of the leaves showed their surviving behaviors.

#### Discussions

1. The mosses which are growing on rocks at sunny places or on barks of tree-trunks in our country ought to be looked on generally as the so-called "xerophilous mosses" because they are able to survive for a considerably long period even in the condition of being air-dried in the laboratory. In view of this fact the xerophilous mosses, in this state, seem to reserve in them indispensable or minimum water within which they are able to maintain their lives, so the minimum hydrability may be looked on as being nearly equal to the hydrability of the air-dried samples represented in the Table 2.; while hygrophytic mosses, for examples, *Mnium vesicatum* and *Hookeria*, wither in a short period by being air-dried in the laboratory, so it seems that their minimum hydrabilities must be considerably higher than those of air-dried (dead) samples (2.4% and 2.1%, as given in the Table 3.); and 15.1% of the hydrability of *Mnium vesicatum* and 18.3% of that of *Hookeria* as shown in the

same table may be looked on as being nearly equal to their minimum hydrabilities. And 6.1% of the hydrability of the air-dried sample of *Mnium Maximowiczii* may be looked on similarly as being nearly equal to the minimum hydrability of the species.

From these points above mentioned, it may be conceivable that the minimum hydrability is generally higher in hygrophytic mosses than those in mesophytic and hydrophytic ones. And it is an interesting fact that the maximum hydration is higher in *Mnium Maximowiczii* than that in xerophytic mosses, but we are able to find little differences between the minimum hydrabilities in both of them.

2. In consideration of so-called "xerophilous" or "hygrophilous" in mosses with respect to the relationship between the minimum hydrability and water economy, the following conclusions may be conceivable: the mosses which is low in minimum hydrability, and which do not easily reduce of themselves their water below the quantity of their minimum hydrability when they are air-dried, and which are capable of imbibing vapour in the air? which is not saturated with vapour but is generally low in atmospheric moisture as being represented in the Table 1., and are capable, in addition, of reserving water above the quantity of their own minimum hydrability in them, ought to be named "xerophilous"; while the mosses which is high in it, and which easily reduce their water of themselves below that of their own minimum hydrability when they are air-dried, and are in want of characteristics of imbibing vapour in the air, are to be named "hygrophilous"; and mosses having intermediate characteristics as compared with those of the mosses previously referred to are to be called by "mesophilous".

In *Mnium Maximowiczii*, the minimum hydrability is nearly equal to those of xerophytic mosses, the hydrability of the "dead-and-air-dried" sample, however, is lower than that of the air-dried sample in spite of the fact that the atmospheric moisture is higher at the time when the former is weighed than at the time when the latter is weighed. This fact seems to show that the air-dried sample of this species later lose its water below the quantity of the minimum hydrability; accordingly, this moss should belong to mesophilous mosses.

Now, These different characteristics seem to be caused mainly by their own peculiarities of protoplast. For instances, the osmotic value is generally higher in xerophitic mosses than in mesophytic and hygrophytic ones, and the relative protoplasmic permeability to water is generally higher in xerophytic mosses than in mesophytic ones.<sup>8)</sup> These peculialities seem to be favourable for maintaining water in their protoplast and for imbibing vapour in the air.

It seems that Iljin's concept of the "mechanical injury theory" is unsuitable at least for the air-dried mesophytic and xerophytic mosses, but in hygrophytic ones adopted in this investigation, the water condition of the leaf-cells at the state of the

minimum hydrability may be nearly equal to the limitation of mechanical injuries by which the leaf-cells are killed or not.

The fact that *Hedwigia* is exactly xerophilous in spite of the fact that the withering of its lower matured leaves of the air-dried sample takes place in a fairly short period of air-drying is open to question. This species is one of the mosses which show the highest osmotic value and the highest relative protoplasmic permeability to water; <sup>9)</sup> accordingly, these characteristics seem to be the indications of its being xerophilous; however, the rapid withering probably depends on the ecological behaviors of the species; that is, the adopted material collected in May had on it both matured lower leaves, which had come out during the last winter, and buds which would grow in the forthcoming rainy season in summer, and their lower matured leaves seemed to be in the state of considerable decline; accordingly, it seems that its lower matured leaves die in a short period by being air-dried.

In consideration of the fact that both the maximum hydration and the hydrability of air-dried samples are low in *Thuidium* and *Dicranum*, they seem to belong also to xerophilous mosses. However, they are not so resistant to drought as corticolous or rock-inhabiting mosses, and they are lower in the osmotic value than latters; 10) according to these facts they probably belong to mesophilous rather than xerophilous mosses. On these species, however, more thorough investigations should be carried on.

3. In view of the hydration and hydrability of the "dead-and-air-dried" samples and those of the air-dried ones as being shown in the Table 2., both the kinds of samples of xerophytic mosses seem to have nearly the same water-holding nature; and differences occurred between the values of such the 2 kinds of samples seem to depend only upon the atmospheric moisture in the laboratory at the weighing times.

This characteristics seem to be caused also mainly by the peculiarities of protoplast, but hygrophytic mosses are in want of such peculiarities; that is, as being given in the Table 3., the hydration and hydrability of air dried (dead) samples are considerably lower than those of the half-dried samples.

In estimating the hydration of the air-dried samples, the writer did not take into account not only mosses' bearing withered leaves but also their having dead cells in the leaves ocurred during the air-drying period. However, this treatment seems to let few errors to be made in the experimental data in view of the previous reasons.

#### Summary

1. The adaptability of mosses to their different habitats was ascertained by researching into their minimum hydrability within which mosses are able to survive, and by making inquiries the relationship between it and water economy in mosses.

- 2. On the relationship among maximum hydration (M), hydrability of air dried samples (A), minimum hydrability (m) and the hydrability of "dead-and-air-dried" samples (a) of xerophilous (X), of mesophilous (Me) and of hygrophilous (H) mosses, the following formulations seem to be given: M, X < M, Me < M, H; m, X = m, M = m, M = a, X = a, X = a, X = a, M = a, M
- 3. It seems that xerophilous mosses do not easily reduce their water below the quantity of their own minimum hydrability when they are air-dried, that they are capable of imbibing vapour in the air which is not saturated with vapour but is low in relative humidity, and that they are capable of maintaining water above their own minimum hydrability in the air. But it seems that hygrophilous ones have not such peculiarities. These are probably caused mainly by the peculiarities of their protoplast.
- 4. It seems that maximum hydration and minimun hydrability being low in xerophilous mosses is favourable for their activities even in relatively dry conditions; on the other hand, it seems that hygrophilous ones, whose both the hydration and hydrability are high, are capable of being active only in the condition of environments having fairly much water in them.
- 5. "Dead-and-air-dried" samples of xerophilous mosses have the water-holding nature being nearly equal to that of air-dried (living) ones; this behavior seems to be important especially in their ecology.

The writer is indebted to express here his great gratitude for the kind guidances and encouragements of Prof. Dr. Yoshio Horikawa, Eotanical Institute, Faculty of Science, Hiroshima University and Prof. Dr. Jôji Ashida, Botanical Institute, Faculty of Science, Kyôto University; thanks are also due to Miss Emiko Tanaka, for her assistances in the investigation.

#### Literature cited

1) Irmscher, E.: Jahrb. f. wiss. Bot. 50: 387-449, 1912. 2) Ochi, H.: Bot. Mag. Tokyo Vol. 65, No. 763-764, 1952. 3) Sakamura, T.: Plant Physiology (植物生理学): 96-97, 1943 (in Japanese). 4) Homés, M. et J. R. Ansiaux: Bull. Soc. Roy. Bot. Belgique 77: 41-57, 1945 (Biol. Abstr. Vol. 21, No. 6, 1947). 5) Mc. Kay, E.: Plant Physiol. 10: 805, 1935. 6) Grebe, K.: Hedwigia 52: 10, 1917. 7) Stalfelt, M. G.: Planta 22: 33, 1937. 8) Ochi, H.: 1. c. 9) Ochi, H.: l.c. 10) Ochi, H.: 1. c.

## Physiological Studies on the Winter Storage of Ginger and Potato in Central Japan\*

By Takeyosi Hori\*\*

堀 武義: 中部日本に於ける生姜及び馬鈴薯の越冬に関する生理学的研究.

#### Introduction

In this part of central Japan it is very easy to store potatoes in winter, but with the ginger it is so difficult technically that farmers often fail in making a success of it. The purpose of this paper is to present the results of some observations on the physiological changes of these two crops when they are stored in order to find out the exact nature of the difference in their adaptability for winter storage.

Water Content: The water content is found always 8% less in the potato than in the ginger. Practically no seasonal change of water content is observed in either throughout the period of winter storage. Table 1 shows the results obtained.

Table 1. Water content %

Date Materials	6/XII 1949	25/I 1950	27/II	10/III	10/IV
Potato	80.98	80.73	80.72	80.69	80.59
Ginger	89.02	88.99	88.98	89.10	89.03

Water Evaporation: When the rhizomes of ginger are left in the open air, they soon dry up. The rate of evaporation is enormously high on the first and second day of exposure, so that they wither to death within several weeks. With the potato, on the other hand, the evaporation is imperceptibly small from the beginning.

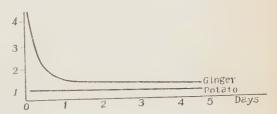


Fig. 1. Evaporation g/100g Temp 20 C RH 75%

The results obtained are shown in Fig. 1.

<sup>\*</sup> Aided by the Ministry of Education with a Grant from the Scientific Research Expenditure.

<sup>\*\*</sup> Biological Laboratory, Gifu University, Gifu, Japan.

Freezing Point: The freezing point as well as the supercooling point the extracted juice is always lower in the potato than in the ginger, as indicated in Table 2.

Date Materials		5/XI	12/XII 1949	14/I	25/II	17/III
Potato	F. P.	−0.35°C	−0 35°C	-0.68°C	-0.71°C	-0.50°C
Ginger	F. P.	−0.21°C	-0.22°C	-0.22°C	−0.25°C	−0.24°C
Potato	S. C. P.	−2.25°C	-2.30°C	-2.43°C	-2.46°C	-2.48°C
Ginger	S. C. P.	-1.67°C	-1.85°C	-1.90°C	-2.01°C	-1.96°C
	T. F. M.	-9°C	−10°C	-11°C	−12°C	−12°C

Table 2. Freezing point and supercooling point

In the case of potato, both the freezing and the supercooling temperatures are lowest in January and February, while the giner such a seasonal change can scarcely be observed.

Starch and Glucose Content: With potatotubers the starch content decreases and the glucose content increases with the advance of storage period. With the ginger, however, practically no seasonal change is observed in the content of either constituent. The data obtained are presented in Table 3.

Date Materials	6/XII	27/I	27/II	16/IV	9/IV 1950
Potato starch	59.51	55.58	49.56	45.83	44.89
Ginger starch	21.10	19.14	16.73	17.21	16.52
Potato glucose	0.67	0.87	1.37	1.33	1.26
Cinger g'ucose	1.45	1 48	1.64	1.€5	1.65

Table 3. Starch and Glucose content (%)

Dry weight % in starch and glucose contents.

Actual Climatic Conditions of Storage Places: In central Japan potatoes are stored customarily in a room of the farmer's house, placed directly on the earthen floor. In this room the air temperature often lowers as low as -2°C. The optimum relative humidity of the air is generally found to be 70% in all weathers and temperatures. The ginger, on the other hand, cannot be stored under such simple

F. P.-Freezing point S. C. P.-Supercooling point

T. F. M.—Temperature of the freezing mixture

Mar.

conditions. They are stored in a hole excavated in and with a cover of earth. But the hole must be climatically conditioned with the greatest care. The temperature is observed to be always above 9°C and the moisture to be nearly 90% in relative humidity. Table 4 gives the temperature of a ginger storage-hole in Gifu prefecture, the hole in which the storage is always successful.

Temp The lowest temperature Average temperature Month 15.2°C 15.5°C Nov. 11 0°C 13.7°C Dec. 9.8°C 10.2°C Jan. 9.1°C 9.8°C Feb. 9.2°C 9.8°C

Table 4. Temperature of a ginger-hole always successful.

#### Discussions

It may be said from the results of our observations mentioned above that the difference between potato and ginger in their storability in winter is attributable to a difference in their susceptibility to the cold and to the withering. It is found that the hardiness of ginger is much smaller than that of potatoes. This may safely be derived from the comparison of the two in the freezing point as well as the supercooling temperature of the cell-sap. The higher freezing point observed in the ginger is caused by a higher percentage of water content of its cell-sap. Water content does not decrease even in the midst of winter. The ratio between the starch and glucose contents may also be responsible for the difference in hardiness. In the potato the content of glucose, which is more osmotically active than starch, increases during the winter months. But in the ginger this increase does not take place. As regards the withering, the ginger is extraordinarily weak in the resisting power. It dies of withering within several weaks even in the low temperatures of winter. In the potato the epidermis of the tubercle naturally drops off soon after harvesting, and the outer surface thickens greatly by the formation of a thick corked layer of cells, which prevents the loss of water from passing through the surface of the tubercle. In the ginger, on the other hand, the epidermis of the rhizome is a onecelled layer and the membrane of cells is always very thin in the period of winter storage. It is without doubt that the far greater rate of evaporation observed in the ginger is caused by such a thin surface structure. Thus the conclusion may safely be established that the difference of the two crops in their storability in winter is caused by a difference in their hardiness due to the different physiological nature of the cell sap and also by a difference in their resisting power to drying due specifically to the different morphological structure of the epidermis.

#### Conclusions

The causes which make the potato storage easy and the ginger storage difficult are explained experimentally, basing on the resisting power to the cold and to the withering, which is greater in the former than in the latter. The lower water content and the higher glucose content in contrast to starch content are responsible for the lower freezing and supercooling temperatures of the cell sap in the potato as compared with those in the ginger. The thicker and stronger structure of the epidermal surface prevents the water evaporation from the surface more effectively in the potato than in the ginger, in which the epidermis is too thin and delicate to prevent evaporation.

#### Literature

1) Harvey, R.B.: J. Agri. Res, 15, 84-III, 1918. 2) Molisch, H.: Untersuchungen über das Erfrieren der Pflanzen. Jena. 1897. 3) Wright, R.C. and Peacock, W.M.: U.S. Dept. Agr. Tech. Bull. 424, 1934. 4) Storage of sweet potato. U.S. Dept. Agr. Farmer's Bull. No. 1442, 1948. 5) Aoke, R.: "Freazing-curve in the tubers of Solanum tuberosum," The Teion Kagaku, II, 1944. 6) Kawakami, K.: Introduction to the study of the potato. Yokendo, 1949. 7) Wright, R.C. and Diehl, H.C.: U.S. Dept. Agr. Tech. Bull. 27, 1927.

## 本邦產土壤放射狀菌の分類学的研究 II-2 ,

#### 升本修三

Shuzo MASUMOTO: Taxonomic studies of soil Actinomyces in Japan. II-2

III. Actinomyces albosporeus Krainsky (1914, p. 687)

Act. albosporeus Krainsky emend. Waksman & Curtis (1919, p. 91)

分離菌株: No. 1 (1-a), No. 33 (1-b), No. 81 (1-c), No. 46 (1-d), No. 46' (1-e), No. 54 (1-f), No. 147 (1-g) 以上畑地。

分布: やや普通の土壌放射狀菌。 形態 (藍糖寒天): 螺旋: No. 54, 81, 147 は緩い螺旋を形成するが, No. 1, 33 は藍糖寒天上に於いては之を生じないが, 澱粉寒天上に於いてはこれを形成する。(第6,7 図)

**分生子**: 球形 (0.9-10 µ), 乃至卵形叉は短桿狀 (0.9 1.0×1.1-1.5 µ)

培養所見: 1. 薫糟寒天: 基生: 発育やや良好。表面は初め無色,裏面少しく暗色(16辺),後灰色, 所々に赤色及び暗色の斑点がある。 気菌: 基生全面を被う。粉狀,初め白色後灰白色に変ずる。ピンク 色を帶びることがあり,又灰汁色(33)を呈することもある。 培養基の着色: なし。15日後僅かに薄 黄褐色の色素を滲出することがある。

- 2. グリャリン・アンモニウム寒天: 基生: 本種は一般に分離の直後は赤色 (69 辺) の基生を生ずるが、代々移植するに隨い次第に色が淡くなり、バラ色よりクリーム色 (9) に移る傾向がある。 但しクリーム色となつたものに於いてもしばしげその菌苔の所々に赤色部を生ずる。 又クリーム色になつた 菌株を土壌通過 (Soil passage) こせる時は再び赤色の基生を生ずることがある。 膜質、皺襞があり、寒天中に深く壊活入する。 気菌: 白色粉肤、後灰白色部を交え、次第に灰汁色 (33) に変り所々に白色部を残す。 培養基の着色: なし。
- 3. グリセリン・硝酸塞天: 基生の色がクリーム色で、赤色となり難い点以外は前培養基の場合と大 差がない。
- 5. 澱粉寒天: 基生: 初め無色よりピンク色となり、次いで赤桃色乃至赤色となる。 気菌: 白色, 後に大部分灰色 (158) となり、所々に白色部が残る。 培養基の着色: なし。
- 6. ブイヨン寒天: 基生: 厚く軟骨様,表面に不規則の溝がある。 赤色,移植と共に次第に無色となる。 気菌: 薄く,白色。 培養基の着色: なし。
- 7. 馬鈴薯: 基生: 赤色,合成培養基上基生の色がクリーム色となつた菌株も,本培地に於いては赤色基生を生ずる傾向がある。 気菌: 白栗色,後に白灰色,少しく赤色を帯びることがある。 培養基の着色: なし。
- 8. ゼラチン: 基生: 殆ど無色又は薄クリーム色。 気菌: 白栗色。 培養基の着色: なし。 液化: 强度中等。 牛乳の色:
- 9. ラクムス牛乳: 発育: クリーム色,後に褐色の菌膜を生ずる。 裏面は一部赤色。 牛乳の色: ピンク色となり,次いでラクムスは還元されて無色となる。振盪すればピンク色が現われる。 凝固: 牛

乳全体は豆腐狀に凝固する。これは酸凝固である。 透明化: 牛乳は殆ど透明化されず, 培養が古くなれば, 上層部が僅かに半透明となる。

- 10. 葡萄糖ブイヨン: 発育: 一部は浮き,薄膜狀,他の一部は沈在する。 培養基の着色: なし。
- 11. 蔗糖液: 発育: やや良好,液面に薄膜を形成する。又一部は液中に散在する。 培養基の着色: なし。

生理作用: 1. 色素形成: どの菌株もブイヨン寒天, 並にゼラチンに於いて褐色系水溶性色素を形成せず, 又チロシン寒天に於いても同じである。 即ちチロンナーゼ陰性である。 且一般にどの培養基に於いても水溶性色素を形成しない。

2. 炭素源の利用 (第3 表参照): どの菌株もマンニット, 蔗糖及び乳糖を利用する。イヌリンは大部分の菌株によつて殆ど利用されないが, No. 147 のみはこれを利用することができる。

菌株	螺旋形成(底糖寒天)	葡萄糖より酸 形 成	炭素源の利用					
			マンニット	蔗 糖	乳 糖	イヌリン		
No. 1	_*	+	+	#	#	±		
33	_*	+	+	+	+	±		
81	#	+	+	+	+	± ;		
46	土	+	+	+	+	土		
46'	+	+	+	+	+			
54	111	+	+	+	+	±		
147	# .		+	+		+		

第3表 A. albosporeus に属する諸菌株の性狀

3. 糖類よりの酸形成 (No. 1-a):

糖類	葡萄糖	果糖	ガラクトース	乳糖	蔗 糖	麥芽糖
酸形成	+	_	denim .	ne-s	posts	_

尚 No. 1-a 以外の菌株はどれも葡萄糖より酸を形成する。

- 4. 蔗糖よりの還元糖形成 (No. 1-a): 陰性又は非常に弱い。
- 5. 硝酸よりの亞硝酸形成 (No. 1-a): 陰陽不定, 但し液態培養の際は概ね陰性。
- 6. 蓚酸形成 (No. 1-a): 蔗糖,葡萄糖,醋酸,フマル酸,コハク酸,グリセリン,グリコール, グリコール, グリコール酸, 蟻酸のどれからも蓚酸を形成しない。
  - 7. 蛋白質分解 (No. 1-a): 强度中等。
  - 8. 澱粉分解 (No. 1-a): 弱い, 1 mm 程度。
  - 9. 脂肪分解 (No. 1-a): 陰性。
- 10. セルローズ分解 (No. 1-a): 陰性。 特徴: 本種はチロシナーゼ陰性でかつ 総 べての 培養基 に於いて殆ど全く水溶性色素を形成しない。 基生は分離当初赤色を呈するが漸次淡紅乃至黄質に移り変りやすい性質を有し、容易に識別し得る種である。

<sup>\*</sup> 澱粉寒天に於いては螺旋が多い。

IV. Actinomyces roseochromogenus Jensen (1931, p. 359) Syn. Act. roseus Krainsky emend. Wsksman & Curtis (1919, p. 184): しかし Act. roseus Namislowsky (1912, p. 567) は之と別種である。

分離菌株: No. 12 山地, No. 27, No. 167, No. 97, No. 68, No. 78, No. 101, No. 58, No. 114, No. 134, No. 157, No. 40, No. 165, No. 26, No. 163 以上畑地。

**分生子**: 短卵形乃至短桿状 (両端少しく角ばる), 1.0×1.0-1.5 µ。

培養所見: 蔗糖寒天: 基生: 一般に粉味発育, 無色。No. 12 及び No. 165 は例外 (第4表参照)。 No. 12 では裏面基質, 一部分暗紫色後暗色となる。No. 165 では黄色 (25/28)。 気菌: 一般に薄く, 粉狀, ピンク色を帶びた白色。No. 12 及び No. 156 にては気菌層やや厚く白桃色 (42 又は 45)。 培養 基の着色: なし。No. 12 にては紫色が滲出することがあり, これは間もなく褪色し, 薄黄色となる。

- 1. グリセリン・アンモニウム寒火: 基生: 初め殆ど無色乃至淡黄色。後 No. 12,27,78 及び 114 に於いては裏面乃至寒火中に潜入した菌叢青色となることがあり、殊に No. 12 はその傾向が著るしい。 気菌: 基生全面を被い、非常に厚く緻密、かつ綿狀を呈する。表面多孔質、小液粒を分泌することがある。色は初め白色、間もなくピンク色系統の色(41 乃至 42, 更に 56 となり、古くなる時は遂に 46 となる)に変る。 稀に気菌の色が青紫色(lavender)を呈することがある(No. 167)。 本種に属する或る菌株(No. 26, 163, 97 及び 157)に於いては、ピンク色の気菌の中に斑狀をなして白色気菌叢を生じ、この部を採つて移植を行えば、白色気菌のみを生ずる変異株を得る。 Jensen(1931)は之と全く同じ現象を後の A. roseo-chromogenus に於いて観察している。 培養基の着色: 殆んどない。時にごく薄い帶秋黄色を滲出する。No. 26 は例外的に淡ピンク色素(初め 56 又は 60 dil、後 69 dil)を分泌する。但しこの性質は累代移植につれて遂に全く失われる。
  - 2. グリセリン・硝酸塞天: 基生: 前者に比して裏面紫色乃至青色となりやすい。
- 3. 葡萄糖塞天: 基生: 裏面黃質 (16 又は 28)。 気菌: 非常に厚い綿状, 質は緻密, ピンク色を 帯びた白色 (42 又に 60, 後 45/56 となる) 表面多孔質, 液粒を出す。 滲出: 殆ど, 又は全くない。
  - 4. 澱粉寒天: 基生: 無色又は黄質、一部青色となることがある。その他は前者と異るところがない。
- 5. ブイヨン寒天: 基生: クリーム色,寒天中に殆ど潜入しない。 気菌: なし。 滲色: 褐色。 顕著でないことがある。
  - 6. 馬鈴薯: 合成培養基上の発育と大差がない。
- 7. ゼラチン: 基生: クリーム色。 培養基の清色: 基生直下のみ褐色, あまり拡散しない。 液化: 弱い。基生直下を粘稠な液狀にする。
- 化: 粉い。基土国 4 日 4 日 4 日 4 日 4 日 4 日 4 日 4 日 4 日 5 日
- 9. 葡萄糖ブイヨン: 発育: 一部沈在, 一部浮上。 培養基の着色: 殆どないか又は薄褐色が僅か に滲出する。
- 10. 蔗糖液: 発育: No. 12 及び No. 165 以外の菌株は殆ど全く発育せず,僅かに薄い雪片状の集落が液中に浮游する。

生理作用: 1. 色素形成: 本種に属する菌株は上記の如く肉汁塞天に於いては褐色水溶性色素の分泌 が顕著でない。かつチロシン寒天に於けるチロシナーゼ反応もこれと並行して不顯著か,もしくは陰性(第 4表参照)。

- 2. 炭素源の利用: 本種に属する菌株はかなり変異に富むもののようである。(第4表参照)。
- 3. 糖類よりの酸形成(第4表参照)。

菌核	螺旋形成	亞硝酸	葡萄糖	チロシナーゼ	炭素源の利用				
菌株(	(蔗糖寒天)	形成	酸形成	(チロシ ・寒天)	マンニット	蔗 糖	乳糖	イヌリン	
No. 2	7 –	+	111		土	土	,±	±	
9'	7 –	+	++	土	土	土	±	±	
55	8 W*	+	+	+	±	土	±	土	
114	4 W	+11+	++	1 +	±	土	±	±	
78	8 W	+	_		±	±	±	±	
134	4 –	-		土	±	±	*± ,	±	
15	7 –			Character	± .	±	±	±	
16	7 W			+	. ±	±	±	±	
68	8 W	+	·H·		土	±	**± (m)	土	
40	0 -	+	+	٠ ـــ	±	±	± (m)	±	
26	6 ±	+	+	±	+.	土	±	±	
163	3 W			_	#	±	±	+	
12	2 -	##	±	_	±	+	±	+	
168	5 +				H	#	#	+	

第 4 表 A. roseochromogenus に属する諸菌株の性狀

- \*波状屈曲 \*\* 聚落解離により乳糖を利用しらる変異種を生ずる。
- 4. 蔗糖よりの還元糖形成: No. 12 及び No. 165 は陽性, 其他の菌株は陰性。
- 5. 硝酸よりの亞硝酸形成 (第4表参照)。
- 6. 蓚酸形成:

炭素源	葡萄糖	グリコール	グリコール酸	蟻 酸	香 酸	フマル 酸	コハク
No. 12	+	+	+	+	-		_
No. 26	+	+	+	+		_	-

- 7. 蛋白質分解: 牛乳透明化作用は中等の强度であるにも拘らず,ゼラチン液化作用は極めて弱く,時 には殆ど全く液化しないこともある。(もつとも基生の下のゼラチンは隔没する。) これはいわゆるキノン 反応によるもののようである。
  - 8. 澱粉分解: No. 12, 27 は 1 mm ca; No. 26 は 2-3 mm; No. 68, 165 は 4-6 mm。
  - 9. 脂肪分解: 陰性。
  - 10. セルローズ分解: 陰性。

特徴: 本種はチロシナーゼ陽性乃至陰性で,殆ど総べての培養基に特有な桃色乃至ヒンク色系統の気 中菌絲を生じ、容易に識別し得る種である。

考察: Waksman (1919) 並に Jensen (1931) の記載に用いた菌株はどれも蔗糖寒天上その気中菌絲

が螺旋を形成するようであるが、著者の分離した前株はどれもこれを形成せず、僅かにそのあるものの気中 菌絲が螺旋狀に風曲するものを認めた。しかしその他の点に於いては上の両者の菌株、殊に Jensen (1931) の記載とよく一致している。 A. roseus なる学名は Namislowsky (前出)、Krainsky (前出)、Waksman & Curtis (前出) によって用いられ、かっそれらのものが同一であるかどうか判然としないので Jensen (前出) の学名を採用した。

*向 A. roseus* Krainsky (1914, p. 682) は恐らく本種と同一種であると考えられるが、その記載が不完全なので確定的な事は云われない。

・ 又本種に属する或る菌株 (No. 167) は往々 lavender 色の気中菌絲を形成する事実, 並にその他種々の培養上, 生理序用との諸性質に就いて貝較考察すると本種と Act. lavendulae Waksman & Curtis (1919, p. 130) とは同一種であるか, 或は少くとも相互に極めて近縁の種であると考えられる。

#### 引用文献

- 1) Baldacci, E. (1939): Atti Inst. Bot. Univ. Pavia Ser. 4, 11, 191-231.
- 2) Bergey's Manual of Determinative Bacteriology. III. Ed. (1930); V. Ed. (1939).
- 3) Jensen, H.L. (1931): Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56, 345-370.
- 4) Krainsky, A. (1914): Zentralbl. f. Bakt. II Abt., 41. 649-688.
- 5) Lieske, R. (1921): Morphologie und Biologie der Strahlenpilze.
- 6) Namislowsky, (1912): Zentralbl. f. Bakt. I Abt., Orig. 62.
- 7) Waksman, S. A., & R. E. Curtis (1916): Soil Sci. 1, 99-134.
- 8) Waksman, S. A. (1919): ibid., 8, 71-215.

升本修三(1943): 広島文理科大学理科紀要,植物学,第5卷,97-128

## 日本に於ける赤雪と綠雪に就て II

#### 小林義雄 福島博

Yoshio KOBAYASHI and Hiroshi FUKUSHIMA: On the red and green snow newly found in Japan II.

藻類 並には種名まで明にすることを得たもののみを挙げるが、尚 Chlamydomonas, Ulothrix, 等に属するもので材料不完全のため検定し得なかつたものも数種ある。

1. Chlamydomanas nivalis (Bauer) Wille in Nyt. Mag. Naturvid. 41, p. 147 (1903); Chodat in Bull. Soc. Bot. Genève 1 p. 297 fig. D (1909); Fritsch in Journ. Linn. Soc. Bot. 40 p. 324 flg. A (1912); Pascher in Volvocal. p. 196 fig. 136 (1927); Kol in Folia Kryptog. 1 p. 616 (1928); et in Beih. z. Bot. Cent. 53 p. 35, pl. 2. figs. 69-89 (1935) et in Ark. f. Bot. 29 A (20) p. 2 figs. 1-5, 7, 9. (1940).—Uredo nivalis Bauer in Journ. Sci. & Arts 7 p. 225 pl. 6 figs. 1-7 (1919).—Sphaerella nivalis Sommerf, in Magaz. f. Naturvid. 4 p. 249 (1824); Bohlin in Bot. Cent. 65 p. 43 (1895).

本種はアルプス地方,グリーンランド,南極等の記号に見出されるの主要構成生物の「種とされて居り、 森雪中にも稀に生ずる。動胞子、不動胞子、接合子等の記錄もあり動胞子は温度の上昇と共に不活潑になり

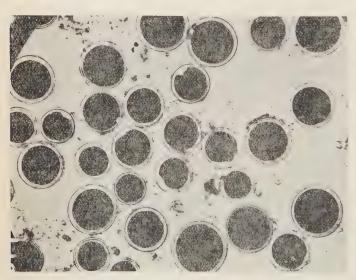


Fig. 4. Chlamydomonas nivalis

遂には鞭毛を失い,薄い膜にと ざされ不動胞子となり, 動胞子 は 4°C 以上の温度には耐え得 られないと云はれている。尾瀨 沼山峠, 白馬岳八方山, 烏帽子 岳の赤雪中に見られ, これの主 要構成種を成して居るが、外国 の例の如き動胞子は見られなか つた。沼山峠産の不動胞子は径 13-22 μ で、鳥帽子岳産のもの は幾分大型の様である。無色の 細胞膜を有し外層のものは平滑 で割合厚い。細胞はヘマトクロ ームの為にレンガ赤色を成して 居た。Fritsch, Kal, Lagerchim, Wittrock 等の記して居る様な 外層に粒液質の膜を有する不動 胞子は沼山峠の材料では稀であ

ったが、八方山、烏帽子岳のには多く見られた。クリオ、プランクトンとしての Chlamydomonas には Chl. antarctics, Chl. asterosperma. Chl. gracilis, Chl. nivalis, Chl. sanguinea, Chl. tingens var. nivalis 等が

知られているが、我々の材料は不動胞子のでは、大きさから一応本種と査定した。

2. Chodatella brevispina Fritsch in Journ. Linn. Soc. Bot. 40 p. 326 pl. 10 figs. 25, 26 pl. 11 phot. 3, 5 (1912).

細胞は単強生活をし楕円狀、稀に亞卯狀信円形、長さ約 18~35 p. 巾約 7~14 p. 表面は比較的丈夫な刺で快はれている。 刺の長さは約 2.1~2.8 p. で失端は亞裁照狀。 細胞には一つの業線体を有し、両端部に多量の油脂を有す。 此藻を Chod. brevispina と一応査定したがその原記載と比較すると日本のものは刺が精太く、長い点が異る。 これに関しては更に多くの材料により委しい研究を続けたいと思つている。

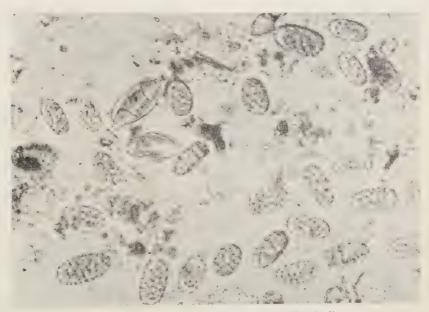


Fig. 5. Chodatella brevispina & Scotiella nivalis

此藻類は尾瀨地方に極めて広く分布し Chlamydomonas sp. と共に終雪の主要構成領であるが、沼山峠で得た赤雪中にも普通に見出し得た。

3. Scotiella nivalis (Shuttleworth) Fritsch in Journ. Linn. Soc. Bot. 40 p. 324 pl. 1 figs. 22-24, 31 (1912); Brunthaler in Chlorop. 2 p. 132 fig. 119 (1915); Chodat in Bull. Soc. Bot. Genève 13, p. 76 figs. 4, 5 (1921); Kol in Ark. f. Bot 29 A (20) p. 2 (1940) et in Amer. J. Bot. 28 p. 189 figs. 4, 5 (1941).—Pteromonas nivalis Chodat in Alg. vert. Suisse p. 145 fig. 70 (1902); Migula Alg. in Tomé's Fl. Deut. p. 604, pl. 33 F fig. 19 (1907); Kol in Folia Cryptog. 1, p. 616 (1928).

細胞は単独生活をし、亞紡錘狀又は精工狀紡錘形で両聲部は広田駅。細胞膜は8つ迄の隆起を有し、波 駅の翼を成し両端部は小さい突起で終る。細胞の長さ12~31 μ (16~36 μ), 市 6~15 μ (9~18 μ)。細胞 の横断面は円みを持つた八角の亞星駅。 葉線体は中央部に存し、板駅で多少星型を成黄赤色の油滴を存す。 Fritsch (1912) は本種の大きさ長さ22 μ, 市12 μ と記し、Brunthaler (1915) は長さ20~31 μ, 市



Fig. 6. Green snow of Oze

12~15 μ として居るが Kol は長さ 12 μ, 巾 6 μ (1940), 長さ 14 μ, 巾 8 μ (1941) として居り相当変異がありそうであるが尾瀬の材料で測定した結果 (50 個体測定) 長さ 16.00~35.98 μ, 巾 8.75~17.69 μ で従来記録されたものより大型の個体も小型の個体も見られた。 又 Chodat, Wille, Fritschの示した様に翼のないものより良く発達した個体巡種々発達の過程が見られた (7 図参照) が娘細胞, 休眠細胞形成及びピレノイドの存在は見られなかつた。

本種は貰、赤、綠、黑雪のクリオ、プランクターとして現われ、スピツツベルゲン、ノールウエー、フランス、スキス、イタリーのアルプス地方、ユラ地方、米国、南極等で知られて居るがサンベルナール (Chodat, 1921)、及びアルプスのワルソレイ(Kol, 1931)の記錄以外ではさ程重要なクリオ、プランクターではない様である。

Kol (1940) は本種は Silicotroph の雪に優性で Calicitroph の雪にも見られると記して居る。本邦に於ては尾瀬池方一帯に広く分布し、Chlamydomonas sp., Chodatella sp. と共に絵雪の主要素を成すもので、沼山峠で得た2ヶ所の赤雪中にも個体数は少いが本種の混在は認められた。

4. Raphidonema nivale Lagerheim in Ber. d. Deut. Bot. Ges. 10 p. 232 pl. 28 figs. 15-21 (1892); Fritsch in Journ. Linn. Soc. Bot. 40 p. 329 pl. 10 figs. 32, 33 (1912); Heering in Chlorop. 2 p. 54 fig. 72 (1914); Kol in Folia Cryptog. 1 p. 616 figs. 1-4 (1928); Vischer in Beih. Bot. Cent. 51 p. 82 (1933); Kol in Amer. J. Bot. 28 p. 190 fig. 59 (1941).

本種は基制の細胞が条果群体を成し、両端部は刺牡に尖る。両端部以外の細胞は田筒状を成す。径 2~6 p。細胞膜は薄く透明、横膜は 3~12 何あり、極めて薄くしばしば不明瞭な事がある。各細胞には側生、板 狀の葉線体が存す。

本種に類似した名, Raphidium nivale Chodat [Bull. Herb. Boiss. 4,886, Pl. 9, f. 25-36 (1893); Alg. Vert. Suisse 220, f. 118, (1902); Bull. Soc. Bot. Genéve 1,295 (1909)], Ankistrodesmus nivael [Brunthaler Süssw. Fl. H. 5,190, f. 294 (1915)] は別種 Raphidonema cryophilum Chodat の異名である。

本種はスピツツベルゲン,アルプス地方,米国,エクアドル,南極等で,綠,赤。黃,褐色等の彩雪で見出されているが,さ程多屋しない様である。 長藏小屋附近,三平峠附近,沼山峠,会津駒岳の綠雪及び赤雪中に本種を見出したが個体数は非常に少い。

5. Raphidonema tatrae (Kol) Vischer in Beih. Bot. Cent. 51 p. 82 (1933); Kol in Bull. Soc, Bot. Genève 25 p. 271 (1934):—Ankistrodesmus tatrae Kol in Act. Soc. Bot. Pol. 4 p. 166 pl. 16 (1927) et in Folia Criptog. 1 p. 616 pl. 17 figs. 6. 16 (1928).

細胞は線狀紡錘形で両壁部は鈍く,長く突出し徐々に細くなる。半月形,S字狀,螺旋狀に曲るが両端部は同一の平面に存しない事が多い。長さ20~35만,巾1.5~2만,細胞膜には薄いガレルト鞘を有す。横膜を缺く。葉線体は1稀に2つ存し,板狀で小さいピレノイドを有す。

Kol は一亞種 (Subsp. Saussurei, 193) 及び一変種 (var. Yellowstonensis, 1941) を発表した。 前者は基本種より短く (13~15 μ), 両端部は極度に長く, 細く, ピレノイドを有しない点が異り, 後者はスラリ

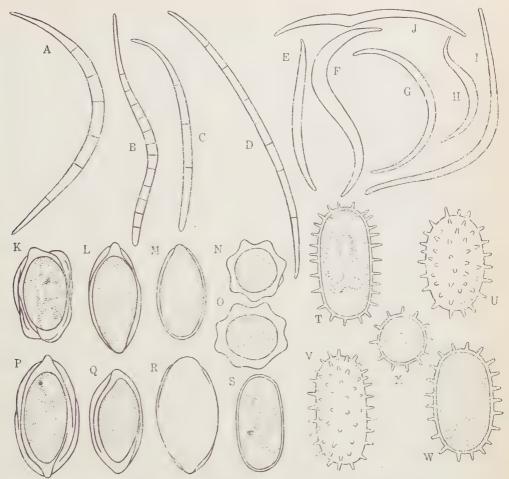


Fig. 7. A-D Raphidonema nivale E-J Raphidonema Tatrae K-S Scoticlla nivalis T-X Chodatella brevispina (A, B, E-G, L-O, Q-X...×1400, C...×700, D, K, P...×900, H-J...×1800)

として細く長い(長さ 30~80 p, 市 1~1.5 p) として居るか尾瀬地方産の本種の測定意は次貞の表に示した様に,基本種の記載に完全にあらもの(No. 4, 5, 6, 10),変種に一致するもの(No. 2),中が基本種,長さが変種に一致するもの(No. 1, 7, 8, 9),中が記載よりも大きく,長さが変種にあらものが存し,本変種の設定は無意味の様にも考えられるが,この事は今後の研究によって決定したい。現在これらのもの全部を一応基本種の名のもとに使って置く。

本種に属するものはすべて終雪のクリオ、プランクターとして知られ、基本種はアルプス地方(タトラ、モンプラン、ユンクフラウ、メールドグラス)、亞種及び変種は大々、モンプラン、イーロウストンで見出されて居るが、モンプランの場合以外は重要なクリオ、プランクターとは云い得ない様である。 アヤメ平附近、ヒウチ岳、長蔵小屋附近、三平峠附近の終雪中で見出したが個体数は極めて少い。

6. Pinnularia gibba Ehreng. var. Peckii Grunow in Verh. p. 517 (1860); Dipple in Diat. Rhein-Maineb. p. 36 fig. 66 (1905); Mayer in Bacil. Regensb. Gewäs. p. 201

長さ (μ)	4 (h)	
38.2	2 087	fig. J
39.3	1 292	fig. I
45.4	4.473	fig. F
30.7	1.689	
30.5	2.485	fig. E
27.0	1.689	
43.0	1.590	fig. G
44.0	2.186	
37.0	1.689	
31.5	1.689	
	38.2 39.3 45.4 30.7 30.5 27.0 43.0 44.0	38.2     2 087       39.3     1 292       45.4     4.473       30.7     1.689       30.5     2.485       27.0     1.689       43.0     1.590       44.0     2.186       37.0     1.689

R. Tatrae の大きさ測定値

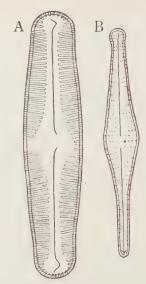


Fig. 8. A Pinnularia gibba var. Peckii (×1000) B Gomphonema subtile (×1000)

pl. 7 fig. 10 (1913). – P. stauroptera Grunow var. semicruciata Cleve in Synop. Nav. Diat. 2 p. 83 (1895).

建穀はやや巾広い線狀披針形で、両端部は弱くくびれ頭部状を成す、長さ約 50~80 μ (65 μ), 巾 12~15 μ (15 μ)。軸域は種々の広さで披針形、中心域は楕田狀を成し1側は縁窓達す。横条線は丈夫で 10 μ 間に約 11 本存す、中央部は放射狀、両端部は收レンする、1 側の中央部の横条線は缺けている。

本種の分布は割合に張く、スエーデン、ノールウエー、ドイツ、アメリカ等で知られているが、クリオ、プランクターとしての記錄は無い様である。 本邦に於ては未記錄であるが今回習山峠で得た赤雪中に見出した。

7. Gomphonema subtile Ehrenb. in Amer. p. 128 (1843); Van Heurck in Synop. Diat. Berg. p. 23 figs. 13-14 (1880); Cleve in Synop. Nav. Diat. 1 p. 182 (1894); Schmidt in Atl. Diat. pl. 236 figs. 9-11 (1902); Dipple in Diat. Rhin-Maineb. p. 99 fig. 208 (1905); Schönfeld in Diat. Germ. p. 187 pl. 11 fig. 148 (1907); Migula in Alg. Tomé's Fl. Deut. p. 312, pl. 10 F fig. 17 (1907); Hustedt in Bacil. p. 376 fig. 709 (1930).

建設は狭い披針形で中央部は腹状に膨らみ、頭極は頭部状突起を成す、足極は頭極の如く膨らまず広田 狀を成す、長さ  $30\sim60\mu$  ( $60\mu$ )、中  $4\sim8\mu$  ( $9\mu$ )。 軸域は狭く、中心域は矩形狀に拡がり(しばしば一側 の方に)、一側に游離点を有す。横条線はやや放射狀で  $10\mu$  間に約 12 本 (11 本)存し、やや明瞭な点よ り成る。

本種は汎分布種び貧鹼性(多分糜鹼性), 沿岸性, 生育地の PH は 5.8~8 で沢山産する範囲は 6.5~ 7.8 と云はれ, 本邦に於ても北海道夕張層化石, 賃ヶ浦, 埼玉県新河岸川々跡沼, 芦ノ海等で見出されて居る。長藏小屋附近の線雪中に極めて稀に混在する。

## 8. Chlamydomonas sp.

卵狀楕円 の動細胞、4ケの頻細胞形成等見られるか卡だ種の決定に迄至って居らない。本種は Chodatella brevispina と共に尾瀬地方綠雪の最も重要な構成要素である。

9. 以上の他,尾瀬の棄雪中に見出され, 腫名の判明せぬ護類に Phormidium, Diploneis (ovalis?), Navicula, Scotiella, Ulothrix, 等の属がある。

## III 生態的觀察(Ecological Observation)

本邦で見出した彩雪は赤雪,線雪及び汚雪で、赤雪の産地は尾瀬沼山峠2ヶ所、白馬岳の八 方山、鳥輪子岳等である。尾瀬の場合は Chlamydomonas nivalis が主要素で、これに次いで Chionaster nivalis, Chodatella sp. が普通に見られ、Raphidonema nivale, Scotiella nivalis が稀に混じて居たが、他の2例に於ては生きた生物の混在は殆んど見られなかつた。

線雪は尾瀬地方に於て、アヤメ平附近、ダンコヤ坂白砂温原附近、ヒウチ岳、長遊小屋附近、三平峠附近、沼山峠、会津駒岳と広く分布して居たが Chlamydomonas sp. Chodatella brevispina の一方を主とするものが一番多く、両者を主とするものが是に交ぎ、次はこの二者と Scotiella nivalis 三者を主とするものであった。 いづれの場合も Scotiella nivalis は普通に見られ、これに次ぐものは Chionaster nivalis で Selenotila nivalis, Raphidonema 其の他の藻類は稀にしか見受けなかった。 汚雪は各地に見られるが調査したのは景鶴山中腹、ヒウチ岳中腹、白砂温原附近で、前二者は褐色の汚雪で Chionaster nivalis が稀に見られるが調査した。後者は黒色のもので Protozoa の一種が多量存し、Chionaster nivalis が普通にあり、Rotifer の一種が稀に見出された。 いづれの場合も少量乍ら Betula、Pinus、Tsuga 等の花粉、毛帯等の高等植物の破片、蘚苔類、珪藻の光数が存し、Protozoa、Copepodi、Rotifer 等と微小動物も混在して居た。 赤雪の主要素は外国の例と同じであるが、緑雪に於ては歐州には Scotiella nivalis を主とする場合もない事はないが普通は Raphidonema が主要素であり、米国に於ては Chlamydomonas Yellowstonensis が主であって、本邦の例とは大分様子を異にして居る。

クリオ、プランクトンの生態に関しては、その研究が極めて少い。 雪表面の  $P_H$  は Kol (1932~'33) のアルプス、モンブラン地方の調査があり、同所に於ては 5.3~6.5 でそれより得た水は 6~7.5 として居り、 $\mathbf{Q}$  フェンクフラウ (1935) に於て 5.5~6.0、何  $\mathbf{Q}$  イェローストーン公園 (1941) に於て 6.0~6.5 として居る。尾瀬地方に於ては 42~4.8 であつた。 雪の  $P_H$  は雪の融解した状態によって異る様であるが、筆者は半分融解した状態に測定した。 この様なわけで外国の例と比較出来ないのは残念であるが、生物の繁殖している部分と他の部分との比較では Kol の示した如き差は見られなかつた。

Kol (1940) は Chlamydomonas nivalis は典型的な Silicotroph で Scotiella nivalis は Silicotroph な雪に多く,又 Calicitroph な雪にも見られるとし、又同氏 (1934)\* は赤雪は Silicotroph な雪の典型的な彩雪で、緑雪は Calicitroph な雪の典型的な彩雪であるとして居るが、余等はこれらの事を論ずる化学的なデーターは未だ得て居らない。

彩雪の見られる時期は外国の例を見ても大体に於て5月頃以後が多い様で余等の調査に於ても3月下旬より4月上旬にかけての調査では殆んど見られなかつた。 この事は後でのべる温度条件とも関係あるが、降雪と云う事も重要な一条件である。 本邦に於て見られた彩雪の規模の比較的小さく尾瀨地方で見られた

<sup>\*</sup> 原文未参照

彩雪は通常直子数糎,深さ数糎(最大は会津駒岳に見られた長さ 110 cm, 巾 12 cm, 深さ 5 cm であつた。 この事は雪融け迄の期間の短かいのによるのであろう。

光及び温度は極めて重要な要素である事は疑い得ぬ事実であるが、これに関する我々の知見は甚だ少い。Kol (1932~'33) は赤雪は強い太陽光の下に見られ、これとは反対に練雪は北向の斜面や余り光の当らない谷等に見られるとして居る。 筆着等の得た沼山峠の赤雪もブナ林の中で練雪の場合よりは太陽光を多く受ける場所であつた。 緑雪は景鶴山の中腹の谷、ヒウチ岳のナデックボ等の直射日光の强烈な所には見られず、コメツガ林の下で見られた。 尾瀬に於ける練雪はブナ林の中では極めて稀でコメツガ林に普通に見られる事は他に原因も考えられるが Kol の觀察の正しい事を裏書きして居る様である。尾瀬地方で觀察した雪表及び深さ 3 cm の所の温度は 0.1~0.3°C であつた (気温 6.3~20.2°C)。 雪の温度が 0°C 又はそれより少し高い時がその発育に最も適当の様であると云われ、又 Kol は 4°C 以上の折は Chlamydomonas nivalis は鞭毛を失いシストを作ると云つて居る所から察すると筆者等の調査した当時はクリオ、プランクターの生育の最も適当な時期であつた様である。

## Summary

- 1. During the microbiological investigation of the Oze-Moor which is situated in the northern part of Nikko National Park, the writers found the socalled "Red and Green Snow" on the snow left unmelted of several locality about 1500-1800 meters above sea-level in May-June 1951. They were also given the samples of red snow which were collected on the mountain ridge (ca. 2000 m.) of Mt. Shirouma in May 1951 and on the snow valley (ca. 2500 m.) near Mt. Eboshi in August 1951. These were spreading over the snow surface as small irregular patches measuring from several centimeters to one meter in diameter.
- 2. Cryophilous species determined from these samples are as follows. Fungi: Chionaster nivalis, Selenotila nivalis. Algae: Chlamidomonas nivalis, Chodatella brevispina, Scotiella nivalis, Raphidonema nivale, Raphidonema Tatrae. Japanese Chodatella brevispina seems to be the slight modification of the European type differring in its having thicker and longer spines (2.1–2.8  $\mu$  long). As for the non-cryophilous fungal members, the yeast-like cells, Chytridiaceous zoosporangium, hyphae of Dematium, spores of Guepiniopsis, Prosthemium, Scolecosporium, Asterosporium and others may be mentioned, Furthermore, Mucor hiemalis (—), Penicillium sp., several species of bacteria were separated as pure culture.
- 3. The main element of red snow is *Chlamydomonas nivalis* which was found in the stage of chlamydospores, some of them having gelatinous outer membrane.
- 4. The main element of green snow is commonly *Chodatella* or rarely *Chlamydomonas*. This type of green snow seems to be different from European *Raphidonema*-Type and American *Chlamydomonas*-Type.
  - 5. Ph-range of green snow was 4.2-4.8 in half melting condition of materials.
- 6. Red snow was found in such a place exposed to the direct rays of the sun as mountain ridge, snow valley or *Fagus*-forest. On the contrary, green snow was spreading in the dark places of coniferous forest.

- 7. Chionaster nivalis is a kind of fungi and seems to pass the summer season in the stage of chlamydospores which are supposed to be formed by the conjugation of two cells.
- 8. We are now studying the life history of Chlamydomonas nivalis, Chionaster nivalis and Selenotila nivalis, the latter two being not yet settled in their systematic position. The question how they live in summer season is left unsolved,

#### 献 文

- 1) Bauer, F. (1819): Microscopical observations on the red snow, Journ. Science & Arts 7 p.
- 2) Bohlin, K. (1895): Ueber Schneealgen aus Pite-Lappmark. Bot. Cent. 65, 42-45.
- 3) Chodat, R. (1896): La flore des neiges du col des Ecandies. Bull. l'Herbier Boisier 4, 879-889, Pl. 9.
- 4) ibid. (1902): Algues vert de la Suisse. Berne.
- 5) ibid. (1909): Sur la neige verte du glacier d'Argentière. Bull. Soc. Bot. Genève, 1, 294-297, 4 figs
- 6) ibid. (1913): Monographie d'Algues en culture pure. Berne.
- 7) ibid. (1921): Matériaux pour l'histoire des Algues de la Suisse. Bull. Soc. Bot. Genève. 13, 66-114.
- 8) Fritsch, F. E. (1912): Freshwater algae Collected in the South Orkneys by Mr. R. N. Rudmore Brown, B. Sc. of the Scottisch National Antarctic Expedition 1902 '04. Journ. Linn. Soc. Bot. 40. 293-338, Pl. 10, 11.
- 9) Gain, M. (1911): La neige verte et la neige rouge des régions antarctiques. Bull. Muséum Nat. Hist. Natur. 17, 479-482.
- 10) Györffy, J. (1927): Ueber den auf der nördischen Seite der Belaer Kalkalpen in der "Dolina Kepy" i. J. 1926 entdeckten Grünen Schnee. Act. Soc. Bot. Pol. 4, 1 4-165, Tab. 1, f. 14-15.
- 11) Kiener, W. (1944): Green snow in Nebraska. Proc. Nebraska Acad. Sci. 54th Annual
- 12) Kol, E. (1927): Ueber ein neues Mitglied des Kryoplanktons der Hohen Tatra, Ankistrodesmus Tatrae Kol nova species. Act. Soc. Bot. Pol. 4, 166-168, Pl. 16.
- 13) ibid. (1928): Ueber die Kryovegetation der Hohen Tatra 1. Folia Cryptog. 1, 613-622, Pl. 17.
- 14) ibid. (1931): Sur un nouveau représentant de la flore nivale de la Suisse. Bull. Soc. Bot.
- Genève. 23, 428-434, Pl. 1, 2. 15) ibid. (1931): Nouveaux documents se rapportant à la cryovégétation de la Suisse. Bull. Soc. Bot. Genève 23, 435.
- 16) ibid. (1934): Sur la neige verte du massif du Mont-Blanc, ibid. 25, 269-279.
- 17) ibid. (1934): Sur un nouvel organisme du cryoplancton de la Suisse Chodatia tetrallantoidea Kol nov. gen. et sp., ibid. 25, 277-282, 1 fig.
- 18) ibid. (1934): Sur un nouveaux représentant de la végétation des glaciers. Bull. Soc. Bot. Genève. 25, 283-286, 1 fig.
- 19) ibid. (1934): Biologie de la cryovégétation des Alpes valaisannes et du massif du Mont-Blanc.
- 20) ibid. (1935): Kryobiologisch Studien am Jungfraujoch (3,470 m) und in dessen Umgebung. Beih. z. Bot. Cent. 53, 34-45, Pl. 1, 2.
- 21) ibid. (1940): Zur Schneevegetation Patagoniens. Ark. f. Bot. 29 A (20) 1 4.
- 22) ibid. (1941): The green snow of Yellowstone National Park. Amer. J. Bot. 24, 185 191.
- 23) ibid. (1942): The snow and ice algae of Alaska. Smithonian Miscell Coll. 101:1-33, 6 pl.
- 24) Kol, E. et Chodat, F. (1934): Quelques algues nouvelles des sol et de la neige du Parc

- National Suisse, Engadie. Bull. Soc. Bot. Genève, 25, 250-263, Pl. 1-2.
- 25) Krieger, W. (1938) Süszwasseralgen aus Spitzbergen. Ber. Deutsch. Bot Gεs. 56, 2:55-72 pl. 1-2.
- 26) Lagerheim, G. (1883): Beiträge zur Kenntniss der Schneeflora in Luleá-Lappmark. Bot. Cent. 9,347.
- 27) ibid. (1892): Die Schneeflora des Pichincha. Ber. d. Deut. Bot. Ges. 10, 517-534. Tab. 28, f. 1-25.
- 28) Rostsfinski, J. (1881): Vorläufige Mittheilung über roten und gelben Schnee und eine in der Tatra entdekte Gruppe von braugefärbten Algen. Bot. Cent. 8, 225-226.
- 29) Schrffel, A. (1910): Raphidonema brevirostre nov. spec., egyuttal adalék a Magas-Tatra nivalis florajahoz, Bot. Közzl. 9, 116-123, f. 1-5.
- Schuttleworth, (1849): Nouvelle observation sur la matière color de la neige rouge, Bebl. Univ. 25, 405.
- 31) Sommerfelt, (1824): Om den röde snee. Magaz. for Naturvidensk 4,249.
- 32) Ström, K. M. (1924): Studies in the ecology and geographical distribution of freshwater algae and plankton. Revue Alg. 1, 27-55.
- 33) Vischer, N. (1933): Ueber einige kritische Gattungen und die Systematik der Chaetophorales.
  Beih. z Bot. Cent. 51, 1-100, f. 1-40.
- 34) Wittrock, V.B. (1883): Die Flora des Schnees und des Eises, besonders in den arktischen Gegenden. Bot. Cent. 16, 158-159.

# 花粉の生理学的研究[I] 花粉管內原形質流動について

## 岩 波 洋 造\*

Yozo IWANAMI: Physiological researches of pollen (I)
On the protoplasmic streaming in the pollen tube.

#### 緒 言

筆者は植物の自家不和合性の原因について研究しているが、従来との方面の仕事は主として農学の人達の間で行われていたので、その企理学的な追究は安田氏(1927~1932))が Petunia の花柱の中に、自花粉の発芽、伸長を抑制する或る計算に存在を確めたに憑ぎない。 然るに或る物質とは何か? 如何にして花粉管の発芽、伸長を抑制するか? 更に花粉管の伸長機構は? これらについては、現在全く不明の狀態であると言わねばならない。 筆者は基礎的な研究なくして自家不和合性の問題解決はあり得ないと考えたので、現在全先ず花粉の生理学的研究を受けて来た。 これによつて多くの可唆が与えられたので、予備実験ともいうべき花粉の生理学的研究を関係と言えた。

これらの仕事は、主として東京文理科大学における筆者の卒業論文に納められたものである。 稿を始 とこにまたり、写験中常に有益な御言見をいただいを三輪知雄博士、御病床より批判と激励の御言葉を給つ た故安田貞雄博士を始め、種々なる御助言をいただいた伊等洋、藍井利重、掘田利喜造、丹羽小爛太の各先 生に深く感謝の意を表する。

第1報は自家不和合性の問題追究の一鐶としての、花粉管内原形質流動について報告する。古く Corti (1774) によつて発見された原形質の流動はすでに 180 年近くの年月を経ているが、その機構についてはまだ信託の域を能していないといえる。然しながらこことは花粉管の伸長の促進、抑制と原形質流動の関係を注目的としているが故に、中には諸信託の減るものを裏代ける如き現象も見られるが、これらについては成るべく誇騰を避けて、完整、窓の結果をそのまま報告するに止めたいと思う。

## I) 花粉管内原形質の流動性について

花特管内原形質が費水動を行うとの説は古くからあるた。最近熊谷氏(1950)7)は、これを更に正道向噴水動に分けた。即ち花粉粒内より管中を流れて来る原形質が、逆伝して粒に向う際に、噴水氷に開くものを

正喷水動、その遊に管の周を流れて来て、中を花粉粒に向うものを逆噴水動と呼び、前者に Lilium japonicum Houtt. 後者に Vinca rosea L. 等をあげている。(Fig. 1 参照) 筆者は Lilium auratum Lindl. の花粉を主として、同じ花粉でも生長の度、培養条件等によって、正逆両噴水動の外、管の膜に沿って完全な rotation を行う事をも観察して来た。





Fig. 1. 左一正噴水動 右一逆噴水動

## 〔実験材料と方法〕

 $Lilium\ auratum\ Lindl.$  の花を水にさして、開花直後の花粉を蔗糖 10% Agar 1% の培養基の上に撤布し  $1\sim1.5$  時間後に発芽して来た花粉管を  $600\sim1000$  倍にして観察を続けた。温度  $25\sim26^{\circ}C$ 。

<sup>\*</sup> 東京文理科大学植物学教室

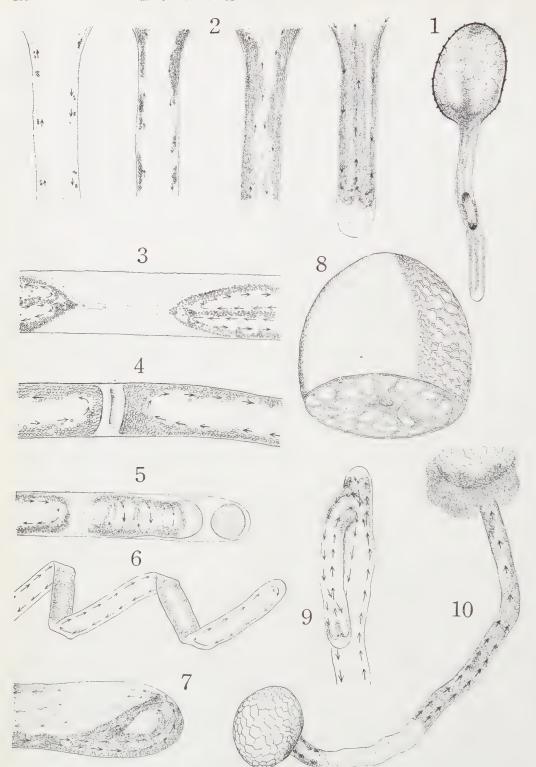


Fig. 2. 1) 正常に発芽する。 2) 花粉管の伸長と管内原形質の変化(右より)。 3) Plasmolyse と原形質流動の2分。 4) Callose plug と原形質流動の2分。 5) 原形質流動の方向転換。 6) 花粉管の曲折による原形質流動の分割。 7) Pisum sativum L. の花粉管先端の rotation (管の伸長は止まつている)。 8) 発芽前の Lilium 花粉粒の原形質流動は agitation (半模式)。 9) 花粉管内原形質流動の分枝。 10) 先端を切断した時の原形質の流出狀態。 (註) 7 以外は Lilium auratum Lindl.

#### [結果]

花粉粒が吸水すると、容積を増した花粉粒内に原形質は Fig. 2 の 8 の如く分散する。原形質内粒子の 運動はブラウン運動から agitation に移り, 次第に方向性なもつて rotation に近くなる。 花粉が発芽する と原形質は花粉管中にも流入し、管の先端では所謂逆噴水動を行い、管の途中では内外異方向の運動を続け る。 管が伸長するに従い, 管中の各所に空胞が生れ, それが拡がると原形質は管壁の一方を先端に向い, 他 方を花粉粒内に向って流れ始める。(Fig. 2の2) 更に花粉管が伸びると流動する原形質は遂に糸狀となり なおも管に沿つて流れるが、この間の流動路は管の左右、時に上下に位置を変えて一定しない。

流動は先端近くで連転しているが、発芽が期の逆噴水動は管の伸長と共に乱れて、中には正噴水動状の ものも見られる。(Fig. 3)

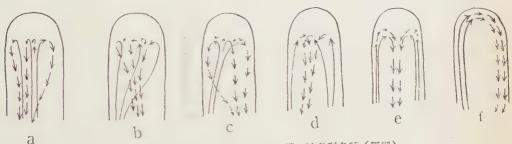


Fig. 3. 伸長の進んだ花粉管の先端の流動型各種(原図)

又後に述べる如く花粉管を高壁液に入れて原形質分離を起させた時, 花粉管の仲長が正つた時, 人工的 に花粉萱を二分した時 callose plugs 形成によつこ流動か分割された時, 管内原形質流動は何れも rotation を行つた。

これ等の現象は Petunia hybrida Vilm. Rumex acetosa L. Pisum sativum L. Oenothera lamarckiana Ser., Cucurbita moshata Duch., Lilium japo:icum L. 等についても見られた。

#### [考察]

以上の如く花粉管内原形質の流動は生長の時期によつてその表現を変えているっで,一概に流動型を決 める事は出来ない。しかも筆者にはまだ完全な正順水動は見当らない。 徒つて少くともこれらの植物にお いては、よく仲長した花粉管内原形質の流動性はむしろ rotation であり、先端では何等かの外的要素の働 きで流動が乱され、それが正または逆噴水動として観察されるのではなかろうか? 外的要素については不 明の も多いが、筆者は Gel 抗原形質の先半における蓄積によるものかと考えている。(後述)

ともかく管内原形質が, agitation, 内外異方向の運動, 噴水動, 一部噴水動一部 rotation, 完全な rotation, 更に游離原形質の周期をもつた rotation (後述) とその表現型を変えて行く事は, 大田氏 (1950)8) も指摘された如くこれらの流動機構が根本において同一と考えざるを得ないであろう。

## II] 花粉管内原形質の流動速度

花粉管内の原形質流動は管の伸長度と管の部分によつて速度を異にしているので, これらを別々に<mark>分</mark> けて流速を測定した。

## [実験の材料と方法]

前記の方法で発芽させた花粉管を用いた。(Lilium auratum Lindl.) ミクロメーターを入れて 22世の 間を通過する原形質内粒子の速さをストップウォッチで手早く10回づつ測り、特別なものを除きほぼ一定 していたので算術平均値をとつた。 最初に花粉管が発芽して 100g になつた時から 140g, 440g, 1320g, 1400 р, 2200 р の 6 回にわたつて測り、次に培養基上の各伸長度の花粉管を数多く測つた。この場合総て花 粉管の基部 (粒に最も近い部) で測定した (表 1)。 次に花粉管が 1500 μ のものについて, 管の基部, 基部

より 750 μ, 先端より 150 μ, 先端より 70 μ, 前端より 20 μ 先端の6 ケ所で原形質の流動速度を測つた。 なお花粉粒から先端に向う流れ (out) と先端から花粉粒内に向う流れ (in) とを別々に測つた。

#### 〔結果〕

花粉管が伸長するにつれて原形質流動の速度は早くたつた。しかもその変化は管の発芽伸長の初期程大 きく, 聲が 1000μ近くになると流速はほぼ一定になる。 表1は管の伸長と流速の変化を秒速, 分速で示した。

Length of p. t. 100 µ 140 μ  $440 \,\mu$ 1320 p.  $1400 \,\mu$ 2200 բ. p./sec. 0.411.21 1.76 2.10 2.46 331 μ/min. 24.6 1466 72.6 105.6 126.0 198.6

表 1. 管の伸長と流速の変化

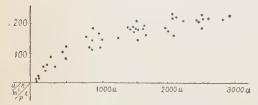


Fig. 4. 管の伸長と流速の変化

り、Fig. 5 はそれをグラフに表したものである。

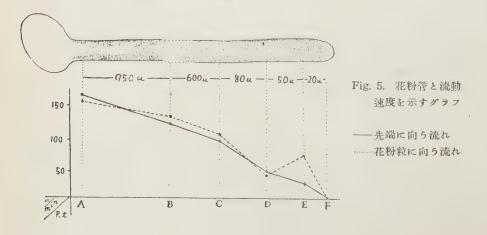
Fig. 4 は伸長度を異にした花粉管の基部での 流速を数多く測定し, その分速をグラフとして示し たものである。

同一花粉管内では原形質流動は基部に近い程早 く、先端に近い程遲い。しかもこの変化のカーブは 前者と全く逆であり, 先端に近い部分程その変化は 大きい。即ち先端の近くで急減に流速は落ちる。表 2 は A, B, C, D, E の 5 箇処での秒速及び分速であ

表 2. 花粉管の部分による流速の変化

	流れの方向	A	В	• С	D	E
μ/sec	先端へ基部へ	2 75 2.68	2.06 2.25	1.77 19.1	0.82 0.77	0.84 1.42
μ/mi <b>n</b>	先端へ基部へ	165.0 190.5	123.5 135.2	49.2 46.2	49.2 46 2	32.0 85.8

(A~E は Fig. 5 に示す通り花粉管の測定位置)



[考察]

以上の如く花粉管内原形質の流速は管の仲長初期程運く、また管の先端程遲い。ただし先端近くで道転 して粒に向つて流れ去る際に、一時急變に流速が高まる。(Fig. 5 の E) 而して管内の原形質の狀態を見る と、管の伸長初期は原形質は全体を流れるが、伸長が進むと管の一部を流れる様になる。又同一花粉管中で は先端近くは管の壁と広く流れるが、他の部では、ほぼ同様に細く流れる。ただし逆伝して粒に向つて流れ る際一時流動路は細くなつている。 即ち原形質は流動路の広い部では遅く、流動路の細い部では早く流れ る。このことから一定時間中に流れる原形質の流動量は、管の伸長度、部分の如何にかかわらずほぼ等しい ことも考えられるが、管が 1000 μ 以上になった時に流速がほぼ一定して来ること、筆者の別の実験でのよ く伸長した花特管の一部を区切り、その流動原平質に高い滲透圧を加えても流速に変化はなかつたが 発芽 初期のものに更に圧を加えると流速は落ち、時に停上したこと、発芽初期急速に管内の圧が落ちてゆくこと、 先端に向けて高い圧が加えられていること等を考えあわせて、花粉管内原形質の流速が生育時期及び部分に より斯く変化する原因は、管の仰長度、流動路の大小に直接関係するのではなく、主として花粉管内の圧に 関係する。しかもその圧には一定の限界があり、それ以下では流速に変化はないが、圧が高くなると原形質 の流動は遲くたり, 遂には停止すると考えられる。 又この間に, 脫水, 吸水による原形質の粘性の変化も当 **然考**え得るが、管内原形質の部分的な粘性の違いを簡単に見出し得ないので、この点についてここで論ずる 事は出来ないが、筆者はガラス針で花粉管に圧を加えることによつて、比較的伸長の初期の管程流動が遅く なり、時に停止する現象を見ているので、管内原形質流動の自然狀態における流速の変化は管内の膨圧の変 化によつて起るのではないかと考えている。 この場合圧は一定以上の高さの時にのみ流速に影響を与える と考察される。(温度, 化学薬品等による流速の変化は別に述べる。)

表 2 から概算すると 1500μ の花粉管をもつた花粉では原形質が粒内から先端に向い再び花粉粒にも どるのに33分40秒を要する。

なお筆者が現在窓に観察した花粉管内原当質流動の最大速度は Liliam longiflorum Thunb で秒速 9.51 μ であった。(底糖 0.29 mol, 寒天 1%, 36°C の培養基上で測定。)

## III」 花粉管内原形質の狀態

花粉管内原形質は無数の細粒子を含み、管が伸長すると原形質は管の壁に沿つて薄く拡がり、その内部 の大部分は細胞液を含んだ空胞となる。 流動原形質は次第に細くなるが,通常粒子は流動原形質と行動を 共にする。最後迄花粉粒内にも原形質は流入して花粉粒内が空になる様なことは見られない。

## 【実験と観察】

花粉管を Z型に曲げると、原形質流動はその最短距離を通るが、この際流動路をはずれて流れに沿わ

ない粒子を観察すると、ブラウン運動もすることなく 靜止し、時に降近の粒子と共に靜かに agitation 様に 動いたが、粒子は個々には動かなかつた。この花粉管 を垂直に立てても,流動路,流速は変らなかつた。花 粉管を Micro-manipulator を用いて細いガラス針で はさむと流動はその部分で別れ、各単独に流れた。但 し管の伸長初期は管の膨圧の爲にはさみにくく, しい て2分すると多くの場合流動は止つた。 流動が2分し た後針をはなせば、伸長の初期のものは再びもとの流 動にもどつたが、伸長の進んだ管は、流動を2分した

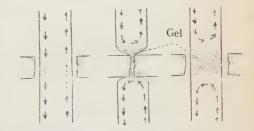


Fig. 6. 花粉管を2分した時と針をはなし た時の原形質流動(原図)

次に正常伸長の花粉管は通常先端に迄原形質內粒子が流入しないが、薬品処理等により花粉管が異常 ままであった。(Fig. 6) に伸長する時、先端の原形質の動きを観察すると、Fig. 10 の如く、花粉管の伸長が止つた時には必ず粒子

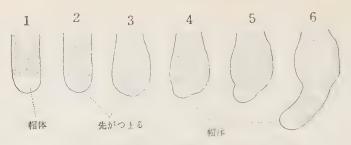


Fig. 7. 花粉管の異常仰長と先端における原形質 (原図)

が先端に迄流入し、管がふくれて伸長を始める前に又必ず粒子のない原形質塊が現れる。 この粒子を含ま ぬ原形質塊は光の屈折率が他の部分と異つて見える。これを筆者はその型から帽体\* と呼んだ。

#### (考察)

以上△実験観察の結果から花粉蓄内原形質は管膜の内部に原形質膜を作り,その中の一部が sol 化して 流動しているものと思われる。(Fig. 8)

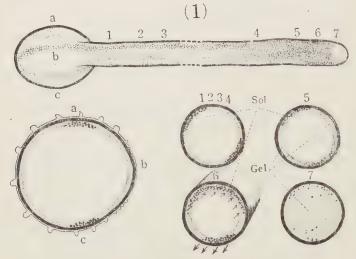


Fig. 8. 花粉管内原形質の狀態 (原図)

而して前記ガラス針による管の2分は、はきまれた部分の sol 狀原形質迄が gel 化し、針をはなして も sol にもどらなかつたもので、ただ発芽初期には管中原形質の大勢に合流して再び sol 化したのではな かろうか。又、先端における前体は gel 狀原形質塊であり、何れが主か従かは一概に決め難いが、花粉管の 伸長には先端に斬体のあることが必要であると考察される。 換言すれば、斬体は gel 化した原形質の蓄積で、花粉管の伸長停止、奇形化の現象、は何等かの外的傷害により、この帽体が sol 化され失われることに よるのではなかろうか。 (他の 1 つの原因は管膜の形成である。)13) 而して帽体の出現は神谷、太田氏 (1950)8) が変形体の流動方向に拮抗する圧を加えた時に先端が gel 化したと同樣、一種の thixotropy の

<sup>\*</sup> 多くの本に引用されている帽体のない Strasburger のマルタユリの花粉管の図は固定染色した後の狀態で、生長している時のものではないと思う。

現象として,管内渗透圧と花粉粒の extine (外膜) の收縮による圧とが先端に加えられることに原因する ものかと解している。然しながらこの gel 狀原形質塊即ち帽体は原形質流動に直接関係するものではなく, 帽体が存在しなくても原形質は流動10)する。即ち前記流動性を乱す外的要素とはこの帽体を指したもので、 これが失われた時原形質の流動は完全な rotation を示す。

#### IV] 花粉管内原形質流動の特異現象

#### 1) 原形質流動の分割

Chara, Nitella, の節間細胞が2分されても, 原形質が単独に流動すること,変形体の原形質が, 核をも たずに流動することはよく知られているが、花粉管内原形質にも全く同じ現象が見られた。

花粉管中に防流装置が作られることは古く Strasburger (1878) によって発見され、原形質の逆流を防 ぐものとして記載されたが、後に Brink (1917)6, Bobilioff-Preissev (1917)5) 等によりその Callose plugs が詳しく研究された。花粉管内原平質はこの Callose plugs によつて四分五分され、これらは各単独に流動 を続ける。Fig. 2の4 は Lilium japonicum Houtt の花粉管中の Callese plugs の形成と原形質流動の分 割である。

又ガラス針で管をはさんだ時, 花粉管を曲折させた時 (Fig. 2の4) 原形質流動が分割される事は既に 述べた。之等の現象自身はむしる当然であるが、ただ或る色素 (Gentian-violet. Methyleneblue) で正常伸 長の時に先端のみが染る原形質が、分割された各原形質では先端同様染り易くなる事(筆者未発表)は流動 機構の面から注目すべきであろう。

## 2) 原形質流動の方向転換

原形質分離によつて管内原形質が細分した時,その中の或るものは時に Fig. 2の5 の如く管の旧周に 沿つて方向を換える。然しながら時間と共に流動方向は次第にもとにもどつた。

#### 3) 原形質の分枝狀流動

花粉管を分技伸長させた時 (別景印 参照)原形質流向もそれに従い、各先門近くで逆転、再び合流して 花粉粒内に向う (Fig. 2の9) 但し一方の管が極く短い時は主管にのみ流れる事が多い。

## 4) 花粉管外への原形質流動

花粉管の先端を切断すると、中の原形質は一瞬にして柱内より押される如く管外に流出するが (Fig. 2 の10) 基部を切断すると、わずかの原形質が流出するのみである。一見特異な現象であるが、これについて 筆者は原形質の流動機構に関するのではなく、花粉粒の extine (外膜) の收縮による単なる物理現象と考 えている。

## 5) 游離原形質の流動(管外)

游離原形質の流動については 2,3 の植物で見られているが、最近四柳氏 (1949 の講演) は Characeae を使って原形質を細胞外にとり出し、その種々な運動を観察している。筆者も花粉管を一度原形質分離を<mark>行</mark> つたのち管を切断,原形質分離の復帰によって原形質を管外にとり出すと,游雑原形質が agitation,循環 運動, 時に周廻運動10)をも行い, 又周廻の際粘菌の様な 一定 の周 期を持つ如き運動も観察された。 叉, Callose plugs によって管内の小穴に押し込められた游離原形質が同様の運動を行う事も見られた。が之等 の細部にわたつては目下調査中である。 なお正常伸長の花粉管をそのまま切断すると,管外に流出した原 形質は所謂原形質膜を作らず、粒子はブラウン運動を行いつつ次第に培養基上に広く分散される。

以上は花粉管内原形質流動についての概報であるが、筆者等の共同研究(未発表)で行われた花粉の呼 吸を害した或る化学薬品 (2-4-D KCN等)12) は花粉管を奇型化すると共に,原形質流動に一時阻害的に働 いた。Paul J. Allen-Winston H Price 氏 (1950)9) は酸素呼吸と原形質流動とは直接関係ない事を報じて いるが, 之等の花粉管の奇型化は Stout 氏 (1931) Riley 氏 (1936) 安田氏 (1932) 等が自家不和合植物 で見た花粉管の奇型化と外部的に全く同じである事から、筆者は呼吸一原形質流動一花粉管の伸長一自家不 和合性の間に何等かの関係があるものとして研究を続けている。

## 要 約

自家不和合性研究の一鐶として行つた花粉管內原形質流動についての実験観察の報告である。

- 1) 花粉管内原形質の流動は生育の時期,生育条件によって agitation 内外異方向の運動, 逆噴水動, rotation 及びこれらの移行型と各種の表現型をとって一定しない。
- 2) 花粉管內原形質の流速を測定した。(表 1, 2) 管の仲長初期, 管の先端近くにおいて流動はおそい。 最高秒速でつぼうゆりで 9.51µ であつた (36°C)。
  - 3) 花粉管內原形質は人工的に分割しても各単独に rotation を行う。
  - 4) 花粉管が分枝した時, 原形質流動も分枝する。(Fig. 2の9)
- 5) 正常伸長の花粉管の先端には粒子を含まない gel 狀原形質塊が存在し (これを帽体と呼んだ), 帽体が失われると管の伸長は止る。然しながら原形質流動と帽体とは直接関係はない。(Fig. 7)
- 6) 花粉管をガラス棒ではさむと原形質流動はその位置で2分するが,ガラス棒をもとにもどしてもよく伸長した花粉管では2分したまま流動はもとにもどらない。(概部原形質が gel 化したものと解した。) (Fig. 6)
  - 7) 花粉管内原形質の狀態を Fig. 8 に示した。
- 8) 花粉管内原形質を plasmolyse により細分した時,時に流動方向を換えて管の周に沿つて流れるものが現れたが,時間と共に又管の軸に沿つて流動した (Fig 2の5)
  - 9) de-plismolyse 法により原形質を管外にとり出した時,なおも種々な流動運動を行った。

#### Resumo

Diversaj tipoj de la protoplasmafluo estas observataj en la polentubo de lilioj (fig. 2,3). Rapideco de la fluo ne estas konstanta: ekzemple, ĝi malgrandiĝas laŭ la kreskado de la tubo (fig. 4,5). La plej granda rapideco trovita estas 9.5 µ ĉiusekunde. Kreskanta polentubo ĉiam havas ĉapforman plasmoamason ĉe la pinto, kion mi nomis "capblock" (fig. 7). Disigitaj pecoj protoplasmaj ankaŭ havas la kapablon fluadi inter kaj ekster la tubo (fig. 2,6).

#### 文 献

- 1) 安田貞雄: Petunia violacea 受精力に関する生理学的研究 植雜 41~47, (1927~'32)
- 2) Stout, A.B.: Pollen tube behavior in Brassica pekinensis with reference of self in compatibility in fertilization. Amer. Jour. Bot. 18, (1931)
- 3) Yasuda, S.: Physiological resarch on sell in compatibility in Petunia violaced. Bull. Imp. Coll. Agric. Forest.
- 4) Riley, P. P.: The genetics and physiology of self-sterility in genous Capsella. Genetics 21, (1936)
- 5) Bobilioff-Preisser.: Zur Physiologie des pollen. Beih. Bot. Contral bl. 1. 34, (1917)
- 6) Brink, R. A.: The physiology of Pollen. Amer. Jour. Bot. 11, (1924)
- 7) 熊谷三郎: 花粉管內原形質流動について 植雑 63, (1950)
- 8) 太田次郎; 原形質流動について 生科 2.1, (19°0) (その他の研究者名は学界講演 直接原形質 流動についての文献は太田氏の論文の終りに詳述されている。)
- 9) Paul J. Allen-Winston H. Price: The relation between respiration and protoplasmic flow in the slime mold, *Physalum polycephalum*. Amer. Jour. Bot. 37, (1950)
- 10) 岩波洋造: 花粉の生理学的研究 IV. (未発表)
- 11) 藤井利重, 岩波洋造: 2·4-D による花粉管の異狀生長について 農及園 26, 10, (1951)
- 12) 岩波洋造: 2・4-D の花粉に及ぼす影響 科学 22, 3, (1952)
- 13) 岩彼洋造: 花粉の生理学的研究 III. (未発表)

# 木材腐朽菌三種の性に就て

木 村 劼 二\*

Katsuji KIMURA: On the sex of some wood-destroying fungi.

木材腐朽菌であるシハイタケ Polystictus abietinus (Dicks.) Fr., モンパタケ Trametes vittata (Berk.) Lloyd, ケガハタケ Lentinus tigrinus (Bull.) Fr. の性については未だ明らかにされていないようであるからこれ等について調べたところを略述する。 前記 三種 は共に 1951 年 7 月間山大学理学部構内で採集したものであるが、シハイタケは伐採した松の樹幹に、他の二者は櫻の立木の枯枝に発生していたものである。 各種子囊体から単胞子培養 10 系統以上を分離し種類別に 2 系統づつあらゆこ組合せで混合培養した。そして clamp connection 形成の有無を鏡検することにより各々の極性を調べた結果は次のようである(第 1,2,3 表,+印は clamp connection の形成を一印は不形成を示す。)

第1表 シハイタケの極性

培養				I					]	II				-	III				VI	
系統	1	2	7	18	19	20	3	4	5	11	14	17	6	9	10	12	16	8	13	15
I		-	_		-	_	+	+	+	+	+	+	ANTHON	-		-	-	_	arean.	-
II	+	+	÷	+	+	†-	_	-	-	-	-	***			-		****		-	-
III	-	-	_	-	-	****	-	-		-	-	-	. –	-		-	_	+	+	+
IV		-		_	-	_	-	_	-	-	-	-	+	+	+	+	+		_	

第2表 モンパタケの極性

培養					I										II					
系統	1	3	5	8	9	10	12	16	20	2	4	6	7		13	14	15	17	18	19
I	-	-				-	_	_	_	+	+	+	+	+	+		+			
II	+		+	+	+	+	+	+	+		_	_	-	_	_	-			_	

第3表 ケガハタケの極性

	I		Í	I				٠	11	I				IV
培養系統	1	8	10	12	13	2	3	4	5	7	9	11	14	6
I	- ,	+	+	+	+		-	_	-	-		_	_	_
II	+	_				-	-	-		-		-	-	_
III		-		_	-	-	_	_					quiseri	+
IV		-	-		_	+	+	+	+	+	+	+	+	-

以上の結果よりモンバタケは二極性、シハイタケとケガハタケは四極性のものといえる。

<sup>\*</sup> 岡山大学理学部生物学教室

## 本 会 記 事

【昭和27年度本部役員】 会長 小倉謙, 幹事長 亘理俊次

幹事 柳田友道(大会), 佐藤七郎(会計), 小野記彥, 加崎爽男(編輯), 西荒介(図書), 笠永博美(庶務) 規約により評議員改選が行われ、次の諸氏が選出されました。

[札幌支部] 松浦一, 字佐美正一郎

〔東北支部〕 木村有香, 神保忠男

[東京支部] 前川文夫,服部靜夫,津山尚,三輪知雄,原寬,佐竹義輔,湯淺明

[中部支部] 島村環,熊沢正夫

〔近畿支部〕 芦田讓治, 新家浪雄, 北村四郎

〔中国,四国支部〕 下斗米直昌,猪野俊平

〔九州支部〕 瀬川宗吉, 芳賀忞

編輯委員はしばらくの間、次の方々にお願いいたすことになりました。

[編輯委員] 印東弘玄, 小倉謙, 田中信德, 田崎忠良, 津山尚, 沼田眞, 服部靜夫, 原寬, 前川文夫, 山口清 三郎, 柳田友道, 和田文吾

## 各支部消息

#### 札幌支部

第4回講演大会(昭和26年11月10日,於北大理学部)講演:(1)細胞分裂に対する NaF の影響(田 畑敏男, 北大・理) (2) 馬鈴薯塊藍の形成とアスコルビン酸含量の変化について(岡沢養三, 北大・農) (3) 禮文島香深のオウバナノエンレイソウ自然集団に於ける染色体組成(小餅昭二,北大・理) (4) 亞 硝酸の光電比色定量標準間線(渡会彰彦, 北大・理) (5) Trillium Myabeanum の核型分析 (佐保費, 北大・理) (6) ウキクサ科植物の硝酸還元並にアンモニャ消費に及ぼす光の影響(吉村フジ,北大・ 理) (7) オウバナノエンレイソウの葉の表皮細胞の地域差(平泉雄・郎、北大・理) (8) 植物生組織 の第1米点の意義について、(照本勳, 北大・低溫研) (9) シロツメクサに於ける X 線処理による奇 墾葉発生日数と X 線量との関係(大山正, 函館市湯川小)(10) ニンリンの抗菌に及ぼす種をなる 葉品の影響について(第2世)(井上行雄,北大・理) (11)染色体分裂に及ぼす温度の影響(増淵法 之, 北大・理) (12) 特別講演: 緑藻と褐藻の生活史と分類 (山田幸男, 北大・理)

北海道高校生徒生物研究発表会(昭和26年11月11日,於北大理学部)

第 20 回例会(昭和 27 年 2 月 15 日,於北大理学部)講演:(1) 日本達ナガマフェ目について (稻垣貫 一, 室蘭工大) (2) 寒地イネの成育の特性とそれに応じた施肥技術(石塚喜明, 北大・農)

第21回例会(昭和27年3月9日,於北大農学部)講演: 電子顯微鏡による植物バイラス病の研究(四 方英四郎, 北大・農) (2) 細菌のアミノ酸酸化についての研究(学佐美正-郎, 北大・理)

第 22 回例会(昭和 27 年 4 月 26 日, 於北大理学部)譫演: (1)マリモの形態特に集団型と糸状体の関係 (阪井与志雄, 北大・理) (2) マリモの化学的研究 (池田実, 酪農短大) (3) マリモの陸水学的研究 ・ (福富孝治, 楠宏, 田畑忠司, 北大・低研) (4) マリモの群落 (館脇操, 北大・農)

#### 東北支部

第4回(弘前)大会(昭和26年8月18,19日,於弘前大)日本動物学会東北支部と共同主催(植物関係 講演): (1) 由形県新庄附近における亞炭の花粉分析(島田正雄, 尚けい大; 高橋信雄, 新庄高) (2) 岩木山森林植物帶に就いて(石戸谷励, 柏木農高) (3) イネの中生晩生品種間の種子の発育における 解剖学的差について(平田政由, 弘前大・文理) (4) 冷害防止に関する実際的研究 (第6報) 水稻の 開花に及ぼす気象要素の一考察(田中稔,青点農試,藤坂試験地)(5)核分裂に及ぼすウレタンの影 響(中沢潤, 弘前大・文理)(6)リコウメンシダ・イタチシダなどの胞子発芽の形成(伊倉伊三美, 山

形大・数) (7) ドクダミの地下形の Loop-formation に関する研究 (飯泉茂, 東北大・理) (8) ハエ ドクソウの莖の構造(岡部作一,東北大・理)(9)山形県莊内地方の植物方言に就いて(佐藤正巳,山 形大・農) (10) Rhizoctonia solani 南の若干系統の培養基地の性質,及び病原性に関する予備試験 (下山守人, 弘前大) (11) 本邦産 Allomyces の異常生活史型について (加藤君雄, 秋田大・学) (12) マツタケモドキの生理生態学的研究(倉石衍,東北大・理)(13)青森産マツタケの生態(成田伝藏, 五所川原高) (14) 土壁南類のサンプリングに就 (音藝紀,東北大・数) (15) 水稻コレオプテイル の水中に於ける生長と呼吸(長尾昌之、大脇賴子、東北大・理)(16)水稻コレオプテイルの生長と酸 素分圧(長尾昌之,大脇頼子,東北大・理): 公開講演,青少年研究発表会その他

植物採集会(昭和26年11月11日,於宮戶島)

臨時総会及び第12回例会(昭和27年4月26日,於東北大理学部)

(1) 総会: 会務当告,役員改選,その他 (2) 講演: 1) イネの種子並びに発芽種子の生長素とその 関係諸物質について(鈴木博) 2)キョスミウツボの心皮数について(菅谷貞男)

#### 東京支部

- 12月例会(昭和26年12月15日, 於東大理学部)講演: (1) 針葉樹の花粉の発芽と系統との関連 (前 川文夫,竹內正幸,東大・理植) (2) ガンコウラン果実のアントチアンについて (林孝三, 凉野元, 大 内一彦, 資源研) (3) 中尊寺金棺中の築織品強欠の植物染料について (林峯三, 凉野元, 資源研)
- 1月例会(昭和27年1月26日, 於東大理学部)講演: (1) 茶樹の発育を阻害する地衣類について (朝 比奈泰彦, 黒川迫, 資源研) (2) ノミノフスマ及び其近縁種に就て(水島正美,東大・理植)
- 3月例(年) (昭和27年3月8日、於東大理主部)講演: (1) タバコ種子の光感性について (石川茂雄, 教 育大) (2) 黒穂菌に近縁な科 Graphiola について (小林義雄, 科博)

## 中部支部

- 第16 回例会(昭和 26 年 11 月 17 日, 於愛知学芸大名古屋分陵)講演: (1) メソヂアミノコハク酸によ る E. coli の発育阻害(鈴木足, 鈴木旺, 名大瑞穂分校) (2) 酵母菌の呼吸に就いて(沢井輝男, 愛芸 大,名古层分校)
- 第 17 回例会(昭和 26 年 12 月 22 日,於名大瑞穂分核)講演: (1) 抗菌性物質のペーパークロマトグラ フによる分類に就いて(日野精一,名大・理・生)(2)サギソウその他の地下器官の発生について(態 沢正夫,名大・瑞穗分校)
- 第19回例会(昭和27年3月1日,名大理学部)講演: (1) 淡水産紅藻類について(標本供鑑)(神谷平)
- 第20回例会(昭和27年4月26日,植物採集会とす,於中央線高藏寺驛附近)

#### 近畿支部

例会(昭和26年11月18日, 於京大理学部)講演: (1) カラス管中で部分的温度差による「サツマイ モ」の根の人為的結落の実験長本供體(西内光, 浪速大) (2)「ペーパークロマトグラフィ」による植 物界「ノラボノイド」分布の研究(刈来達上,京大・学,橋本庸平,神南大)(3)植物細胞の硝酸銀反 応に関与する物質一特に修唆の影響(永井進、尾形英二、大阪市大)(4)微量要素の「チョウセンアサ ガオ」連作に関する研究(予量)(木村康一, 季野重昭, 大田長世, 前田昭吾, 阪大・薬) (5)「チュー リップ」の花芽分化並びに花芽阻害について(塚木華太郎、漁速大) (6) 大腸菌の耐熱性に対する培 地の pH の影響(香山時疹,和歌大) (7) 甘藷の根郷培養(古賀正晴, 浪速大) (8) 寄生性藻類 (地 上藻) についての 知見二,三 (末松四郎,和歌大)

#### 九州支部

第17回例会(昭和26年12月15日,於九大農学部)研究発表: (1) 制瓜の移植の難易性について(字 佐美和夫) (2) 植物に於ける澱粉形成機構 "特に孔辺細胞に於ける澱粉形成について"(小野林) (3) 生活現象の図説と生の三角叉は四角形 (纐纈理一郎)

第.18 回例会(昭和27年1月21日,於九大理学部)講演: 適応と植物生態学(吉井義次)

- 第19回例会(昭和27年3月29日,於九大理学部)講演: (1) タマネギの根の呼吸(松下亀久,九大・ 理・生) (2) ミノワセ大根低溫処理間の水分含量(特に結合水)に就いて(二宮淳一郎,九大・農・ 植) (3) ムラサキツユクサの螺旋糸廻旋方向(渡辺泰州,九大・理・生)
- 第2回大会(昭和27年4月27,28日, 於宮崎大・学芸学部)一般講演: (1) エビスグサの膨圧運動特に その收縮細胞についての二,三の観察(藤野正義,長崎大・学芸)(2)光週反応に及ぼす無機養分の影 響(中山至大, 荒木徳藏, 宮崎大・学芸) サンショウモの光週反応(中山至大, 宮崎大・学芸)(4)タ マネギの仁染色体 (続報) (野田昭三, 九大・理・生) (5) タチバナ (Ardisia hortorum) の葉瘤菌 (花田主計,福岡学芸大) (6)遊離藍綠体によるタバコ・モザイク・ヴァイラスの感染阻害作用 (千葉 保胤, 九大・理・生) (7) テングサの胞子放出時刻の時期的変化について(片田実, 松井敏夫, 中務恒 太郎; 水産講・水植) (8) 宮崎県産海藻二, 三について(瀬川宗吉, 九大・農・水産) (9) Glyphomitrium 属及び Ptychomitriaceae (蘚類) の分類上の位置について (野日彰, 大分大・学芸) (10) 南 九州の苔類フロラ (服部新佐,服部植研)
- 特別講演: (1) 紅藻の生活環 (瀨川宗吉, 九大・農・水産) (2) 林木の育種について (外山三郎, 宮崎 大・学芸) その他見学会, 懇親会等を行った

## Studies on the coastal vegetation at Nijigahama (Report 1)

By Makoto Numata\* and Hajime Nobuhara\*\*

沼田 眞・延原 肇: 虹ガ浜の海岸植生に関する研究 第1報

#### Introduction

From his analytical study on the structure of plant communities, the senior author Numata reported some time ago on the stability of coastal dunes or sandy coasts which is indicated distinctly by the percentage of vegetational cover†, ratio of inland mesophytes, and also types of vegetation†† found there<sup>1)</sup>. He also demonstrated an existence of three vegetational zones, as has been spoken of so often hitherto, such as stable zone, half-stable zone, and unstable zone.<sup>2),3)</sup> These analytical studies have given him an assumption more concrete and more quantitative than before.

Generally speaking, a change from the unstable zone to the stable one on sandy coasts is found in proportion to a distance from the beach line, but at Nijigahama things quite differ. The vegetational zonation found there seemed to lie in parallel to the beach line and moreover the area of each zone is in such a favorable situation that the structures of plant communities may be well compared with those in other places. This is the reason why Nijigahama has chosen as a model area for the present study. Under such conditions a careful survey was carried out by NOBUHARA twice on May 2 to 3, 1949 and on August 21 to 25, 1950, connections being kept with NUMATA all the time. The present report shows a partial result of study by NUMATA on the data obtained in 1950, in which the senior author applied various methods used for the analysis of the structures of plant communities in other areas.

## Area of Study

Nijigahama ("Rain-bow Beach") is on the outskirts of Hikari, Yamaguchi Prefecture, Japan, and its length is one kilometer long. From west to east the sandy beach develops gradually. The width of the beach is only 20 meters at the western part, but its width at the eastern part is from 60 to 80 meters (Fig. 1). Behind the beach there is a vegetation consisting chiefly of *Pinus Thunbergii* etc. which is

<sup>\*</sup> Chiba University, Chiba \*\* Shimane College of Agriculture, Matsue

<sup>†</sup> This is not a cover of a species but percentage of plant cover of all species obtained by sampling quadrats.<sup>4)</sup>

<sup>††</sup> Indicated principally by life forms and migule types,5), 6)

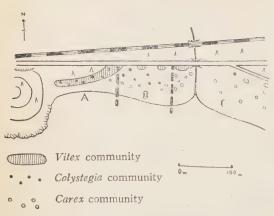


Fig. 1. Sketch of zonation at Nijigahama.

useful to arrest sea wind. The beach is flat for the most part, and then it is not like a coastal dune. From the inclination of trunks of pine trees the direction of the prevailing wind is presumed to be SW.

#### Methods

Belt transects were conducted at right angles to the beach line at intervals of 10 meters. The average degree of cover in each transect was taken as a fundamental material for the study. Sociability and migule

type\* were investigated about species in each zone. Random sampling method was used in order to be compared with systematic one, but sampling ratio was not definite. The authors adopted the method of cover classes by Penfound and Howard (1940), but its 1' and × were calculated as 0.2 and 0.04 respectively. For the phytosociological characters beside the degree of cover, those usually adopted by the senior author were also taken for calculation.

#### Data and Discussions

#### 1. Stratification\*\* of coastal vegetation

As mentioned above the transects were taken systematically at intervals of 10 meters. On each transect was assigned a number in order from west to east, and also divided into three zones (A, B and C), according to physiognomy of vegetation, that is,  $A:1\sim11$ ,  $B:12\sim24$  ( $B_1:12$  to 17,  $B_2:18$  to 24),  $C:25\sim34$  ( $C_1:25$  to 30,  $C_2:31$  to 34). The degree of cover of each species at a transect was averaged, and the values thus obtained were summed up at each belt. The value is one kind of vegetational cover, and this was used as a characteristic for comparison of precision of stratifying methods (Table 1). In a word, the stratifying method were compared by a kind of vegetational cover. There may be many ways of stratification, but the authors obtained the following six ways in drawing a comparison:

I: A, B, C II: A, B<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>, C III: A, B<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>, C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub> IV: A, B, C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub> V: A, B+C VI: A+B, C Then it was determined by comparison of coefficients of intraclass correlation ( $\rho'$ )

<sup>\*</sup> The migule type is a kind of life form which is consisted of disseminule types ( $D_1 \sim D_5$ ) and radicoid (rhizoid and root system) types ( $R_1 \sim R_5$ ). (7), 8)

<sup>\*\*</sup> This term is of inductive statistics. "Stratum" is a homogeneous area of vegetation.

Table 1. Vegetational cover (sum of average cover of constituent species), by zones (strata in statistics), of transect belts 10 m apart at right angles to the beach line. Stratum A:1 to 11, B:12 to 24 (B<sub>1</sub>:12 to 17, B<sub>2</sub>:18 to 24), C:25 to 34 (C<sub>1</sub>:25 to 30, C<sub>2</sub>:31 to 34).

1	Transect	1	2	3	4	5	6	7	-8	9	10	11	12
	Cover	6.48	4.37	4.75	419	4 05	5.33	4 05	5.29	3.85	3.06	2.78	0.58
	Transect	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
	Cover	1.58	0.95	0.75	2.60	3.10	1.35	1.35	1.06	0 90	1.65	1.48	0.73
	Transect	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34		
	Cover	1.48	0.85	0.38	0.98	0.97	0.72	1.03	0.56	0.34	0.52		

whether stratification should be adopted or not.<sup>9)</sup> The values of  $\rho'$  indicate the order of goodness of stratifying methods as may be seen in Table 2. Its order is IV>III>I>IV>VI, but in the values of  $\rho'$  there are no differences except VI which is significantly bad.

Table 2. The comparison of several methods of stratification by means of coefficients of intraclass correlation ( $\rho'$ ).

Method of stratification	· σ <sup>2</sup>	σ <b>β</b> <sup>2</sup>	$\sigma_w^2$	ρ'
T	2.9954	2.4642	0.5312	0 7349
II	2.5147	2.0069	0.5079	0,7307
III	2.4190	2.0000	0.4190	0.7834
īV	2.7555	2.3413	0.4142	0.7996
v	3.6610	2.9493	0.7117	0.6112
VI	2.6707	1.1623	1.5084	-0.1296

It was examined by Fisher's z-transformation method,  $^{10}$  whether difference of  $\rho'$  is significant or not. By the calculation on his method the values of  $\rho'$  of IV and VI are significantly different, but the large overlap of the range of deviations shows that the correlations found in IV and V-therefore IV, III, I, II and V-are not significantly different (Table 3). Accordingly, the goodness of such stratifications as I, II, III, IV and V seems to make no difference statistically. The method I, stratified by physiognomy of vegetation—that is to say "ecological stratification" being used by many ecologists till now-may be said to have been particularly supported statistically. A, B and C are *Vitex* zone, *Calystegia* zone and *Carex* zone respectively.

Method	ρ'	z	Gorrection	Range*
IV	0.7996	1.1065	1.1215	1 3696~ 0.9192
V	0.6112	0.9137	0.9287	1.1606~ 0.7202
VI	-0.1296	-0.2659	-0.2509	-0.0090~-0.4594

Table 3. The comparison of intraclass correlations.

## 2. Type of coastal vegetation

As stated above, the vegetational zonation from unstable zone to stable one at Nijigahama seems to lie in parallel to the beach line, not like most of sandy beaches fronting an open sea, and the direction of such zonation is at right angles to the beach line.<sup>2), 11)</sup> This is one of the most interesting problems. It must be examined, however, from a stand point of "vegetation type" whether the coastal zonation there is abnormal or not.

It reflects unstable habitat conditions of sand blowing, wind-borne salt, or physical forces of billow in a storm, etc. that there is vegetational zonation at a sand beach facing to an open sea, and unstable or half-stable zone is found in the front of a stable zone as pine forest. Such habitat conditions are specially intensified at typhoon and high tide. Those complex influences of unstable habitat conditions correspond to a specific structure of vegetation. From this viewpoint, whether the authors' observation and estimation are right or not would be demonstrated by the study on the structure of vegetation, more especially on its different types.

In the authors' survey, some coefficients of vegetation type  $(s; r, d; p, t, l)^*$  were used as phytosociological characters. A comparative study of the vegetation type at Nijigahama and other places was done by those coefficients. As can be seen in Table 4, there is regional peculiarity in the vegetation types. And then it is difficult to discuss in general, but most predominating tendencies can be recognized as follows: (1) For the unstability of habitat conditions (especially at sandy places), r is larger and s, t, p is smaller; while (2) At windy places, d is comparatively small (as under these circumstances  $D_4$  class of migule type increases disseminating power). Its model picture is shown at Fig. 2.

In the value of r which is the greatest factor among those, the place where is 80 meters distant from the beach line on the coastal vegetation near Inubô Cape at

 $z=1/2\{\log(1+n-1\rho')-\log(1-\rho')\}$ , n: number of classes.

<sup>\*</sup> approximate figures with a fiducial probability of 90 per cent.

<sup>\*</sup> Percentage of number of species of sociability classes  $S_1$  to  $S_2$ ,  $S_3$  radicoid types  $S_1$  to  $S_3$  and disseminule types  $S_1$  to  $S_3$  in migule types  $S_3$ ,  $S_4$ ,  $S_4$ ,  $S_5$ ,  $S_5$ ,  $S_6$ ,  $S_7$ ,

Table 4.	The comparison of vegetation types by percentages of sociability
	(s), migule types $(r, d)$ , and life-forms $(p, t, l)$ .

Zone	S	r	d	Þ	t ·	<i>l</i>
Vitex zone 1)	83.3	17.6	53.6	7.0	31.0	33.8
Calystegia zone	66.7	21.6	50 0	3.5	38.0	9.3
Carex zone	76.9	30.0	60.0	0.0	66.5	0.0
Side of bay 2	12.2	75.0	33.3	12.5	12.5	25.0
Side of open sea	38.5	42.7	84.2	31.5	13.2	31.5
120 m from beach 3.	68.5	50.0	40.0	16.7	16.7	16.7
50 m	60.0	60.4	20.0	0.0	20.0	0.0
30 m ,,	42.8	80.3	20.0	0.0	0.0	0.0
Stable zone 4	31.8	41.0	36.4	13.6	22.7	9.1
Half-stable zone	32.3	42.0	29.1	12.9	35.5	6.5
Unstable zone	11.1	77.8	22.2	0.0	11.1	0.0

- 1) Nijigahama 2) Futtsu (Numata: 1947, 1948) 3) Îoka (Numata: 1947)
- 4) Chôshi (Numata and Iwase: 1948)

Chôshi, Chiba Prefecture showed r=50.0. At this area, as can be seen at the stable zone, percentage of vegetational cover is more than 80 per cent and the ratio of inland methophytes is about 80 per cent. The coastal vegetation at Chôshi is con-

sidered to be a typical one which faces to open sea and constitutes a standard zonation corresponding to the stabilization of habitat conditions. Compared with this, the coastal vegetation at  $\hat{l}$ oka, Chiba Prefecture is in most similar condition, while the one at Futtsu on Tokyo Bay is more or less irregular. The values of p and l at Nijigahama is much smaller, and t becomes larger in proportion to a vegetational

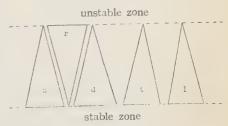


Fig. 2. Model of tendencies of vegetation types.

change from *Vitex* zone to *Carex* zone. The tendencies of p, l and r seem to be unstable from *Vitex* zone to *Carex* zone, but the tendency of t is opposite to this. Generally speaking, the facts that s and d is comparatively large and r is very small indicate that the coastal vegetation at Nijigahama has a most characteristic aspect of a stable zone. Percentage of vegetational cover is  $55.3\pm15.3\%$  on *Vitex* zone,  $29.6\pm18.7\%$  on *Calystegia* zone, and  $8.9\pm5.3\%$  on *Carex* zone (according to the data obtained by random sampling). This fact much correspond to the tendencies

above mentioned. But the fact that the percentage of vegetational cover at Nijigahama is comparatively low in general instead of the stable character of the vegetation type will postulate the more detailed analysis of habitat conditions. As an important factor to understand such phytosociological structure may be taken the influence by the billows washing the beach. By an influence of waves, percentage of vegetational cover, s, d, p, t, and t decrease while t increasing. As time goes by, however, decreased coefficients of vegetation type, especially t, recover, and still recovering of vegetational cover is late. From this assumption, the meaning of the contradiction above mentioned will be understood.

When  $R_5$  of radicoid type is divided into three subtypes, namely, erect (e), decumbent (d), and twine climbing (tc), the coastal vegetations at Nijigahama and Chôshi may be compared from this point of view as in Table 5. The value of e is

Table 5. The comparison of vegetation types by percentages of erect (e), decumbent (d), and twine-climbing type (tc) of plants belonging to  $R_5$  type.

Zone		R <sub>5</sub>	e	d·	tc
Vitex zone	1)	77.3	428	13.8	20.7
Calystegia zone		75.3	68.0	7.3	0.0
Carex zone		70.0	70.0	0.0	0.0
Stable zone	2)	63.8	50.1	9.1	4.6
Half-stable zone		54.9	420	9.7	3.2
Unstable zone		22.2	22.2	0.0	0.0

<sup>1)</sup> Nijigahama 2) Chôshi

higher than d and tc in general, and each value increases as it approaches to the stable zone. Its tendencies at Chôshi are normal, but at Nijigahama, those of e and of d and tc are unparallel in connection with the decrease of t. It is well understood after all that the coastal vegetation at Nijigahama quite differs from those at Chôshi, Futtsu, Îoka, Torami, etc. facing to an open sea.

As mentioned above, the authors have investigated the vegetation type taking several coefficients to good advantage. In the end, they would say in addition that the character of sociability and migule types changes more or less in response to habitat conditions. The migule type is characteristic of species, while on the contrary sociability fluctuates in reflection of the habitat.<sup>12)</sup> As may be seen from Table 6, the variations of sociability on the common species at Nijigahama were investigated. It may be asserted from this data that on the species belonging to  $S_3$ ,  $S_3$ ,  $S_4$ , and  $S_4$  (these species belonging almost to  $R_1 \sim R_3$  of radicoid type), the varia-

Species	Vitex zone	Calystegia zone	Carex zone
Calystegia Soldanella	S <sub>4</sub>	S <sub>3</sub> , 4'	S <sub>3</sub> /
Ixeris repens		- S <sub>4</sub> ,	S <sub>3</sub> ,
Carex Kobomugi	_	S <sub>4</sub>	$S_{2-4}$
Vitex rotundifolia	S <sub>4</sub>	S <sub>1</sub>	
Digitalia sanguinalis var. ciliaris	$S_2$	S <sub>4</sub>	$S_{1-3}$
Erigeron canadensis var. levis	S <sub>1</sub>	$S_2$	$S_2$
Oenothera odorata		S <sub>3, 4</sub>	$S_2$
Chenopodium ficifolium	_	S <sub>1</sub>	$S_2$

Table 6. Fluctuations of sociability of several plants by habitat conditions.

tion of sociability classes is not large (Calystegia Soldanella, Ixeris repens, and Carex Kobomugi). On the contrary, however, sociability of the species corresponding to  $R_4 \sim R_5$  or belonging to therophyte is very large in its variation. These tendencies were also found in those at Teihama, Kôchi Prefecture. A special attention as mentioned above would be needed, when the interaction between vegetation and its habitat is studied on the sociability.

## 3. Random and systematic sampling

In the sampling survey of vegetation, merits and demerits of random sampling or purposive selection have been often discussed. It goes without saying that the latter is much better statistically than the former. In random sampling, there will be no assumption needed about the universe where the method is carried out exactly and accordingly the parameter is estimated theoretically correct. And it is emphasized by statisticians that any concern or unreliability about this method of sampling must be dissolved when it is only put into practice. The method came to be held recently by many ecologists, but merits or demerits for the use of random sampling or systematic one (one kind of cluster sampling) would not be asserted easily. Oosting<sup>10</sup> and others have some unreliability for a use of random sampling.

On a grassland near Utsunomiya, Tochigi Prefecture, the senior author once tried to compare these three methods (purposive selection, systematic, and random sampling) in relation to the sampling error. It was then concluded that purposive selection was better when the size of sample (the number of quadrats) was small, but systematic sampling was better when it was large. This is a conclusion given empirically. On the other hand, there are still subjective opinions about this problem. The purposive selection is out of the question statistically, but it still remains unsolved whether the systematic sampling or random one is much better.

If a random start is adopted in a systematic sampling, sample mean  $(\bar{x})$  becomes

unbiased estimator of population mean (m) and population variance of  $\bar{x}$  when sample size is n can be calculated by the next equation:

$$V_{ran}$$
 -  $V_{sys}$  = - $(n-1)/n \sigma^2 \{1/(N-1) + \rho'\}$ 

where  $N(\equiv bn)$  is the size of universe, and V is the universe variance of  $\bar{x}$ . Therefore, when the coefficient of intraclass correlation on clusters:  $\rho' > -1/(N-1)$  (approximately -1/(N-1)=0), random sampling is better, when  $\rho' < -1/(N-1)$ , systematic one is better, and when  $\rho' = -1/(N-1)$ , precision of two methods is equal.<sup>16</sup>

If a rectangular stand as shown in Fig. 3 is present, the systematic sampling at intervals of 10 meters is what from A divided into b clusters (each size being n), b/10 clusters is sampled at intervals of 10 meters, and this is so-called (systematic)

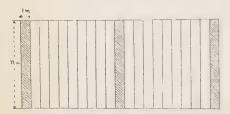


Fig. 3. Model picture of A-stratum (Vitex zone). Strips of oblique lines show a systematic sampling by belt transect.

belt transects. Therefore, one cluster includes n sampling units (1 sq.m. quadrats) and if the size of cluster is approximately n, the formula of the unbiased estimator of parameter and its variance become an easy form to be dealt with. And the estimating error by sampling clusters in the universe A is derived from  $\sigma_b^2$ , and the one by sampling secondary sampling units (quadrats) is derived from  $\sigma_{w}^2$ . Further, if the size of cluster (number of classes) is

considered not to be the area above mentioned, but to be the number of constituent species (n), and if one belt is taken as one family, (n) the floristic homogeneity of a vegetation and the precision of sampling methods would be discussed more effectively. From three vegetational zones at Nijigahama the authors sampled a few belts at an interval of 40 meters starting at random, on the basis of the original data obtained by the systematic belt transects at intervals of 10 meters. Then the sampled belts:

Vitex zone: No. 2, 6, 10. Calystegia zone: No. 13, 17, 21. Carex zone: No. 26, 30, 34. The results of calculation from those samples are in Table 7. In either case, the value of  $\sigma_b^2$  is very small and  $\sigma_{w^2}$  is near  $\sigma^2$ . Therefore, when the direction of vegetational zonation runs at right angle to the beach line as in Nijigahama, much resemblance is found on the vegetational structure of each belt which is systematically sampled from a homogeneous stratum divided by physiognomy. After all, a belt transect is very useful in such a case. The precision of systematic sampling is high in either stratum, when the value of  $\rho'$  and -1/(N-1) in Table 7 is compared. This conclusion is supported in a coastal vegetation at least, but, in general, a stan-

Table 7.	The comparison of sampling methods by means of
	coefficients of intraclass correlation.

Zone	.02	$\sigma b^2$	$\sigma_{tv}^2$	ρ'	-1/(N-1)
Vitex zone	0.324	0.003	0.321	-0.049	-0.0005
Calystegia zone	0.079	0.006	0.073	-0.001	-0.0006
Carex zone	0.044	0.001	0.043	-0.013	-0.001

dard whether any of sampling methods should be adopted or not would be indicated by the type of vegetation. The value of  $\rho'$  is positive in many cases and a simple random sampling is generally better than a systematic one. At any rate one must be ready to get an objective standard on selecting any sampling method.

Many essential problems still remain undiscussed on the design of sampling survey of vegetation, and also in application of the theory of statistical inference to ecological researches. Further studies are needed on these problems. (The present study has been performed with an aid of the Natural Science Research Fund of the Ministry of Education given to one of the authors Nobuhara).

## Summary

The authors investigated the coastal vegetation at Nijigahama, Japan. It was studied there that the stratification by physiognomy was correct statistically, that the vegetation type was characterized by various coefficients, and that an objective standard whether any of sampling methods should be adopted or not was indicated by the intraclass correlation method.

#### Literature cited

1) Numata, M. & T. Iwase: Med. & Biol. 15, 288 (1949). 2) Numata, M.: Ibid 10, 187 (1917). 3) ——: Seibutsu 3, 58 (1948). 4) ——: Kagaku 18, 317 (1948). 5) ——: Ecol. Rev. 12, 42 (1949). 6) ——: Natura & Cultura 2, 257 (1951). 7) ——: Seibutsu 2, 121 (1947). 8) ——: Med. & Biol. 17, 258 (1950). 9) ——: Bot. Mag. (Tokyo) 63, 149 (1950). 10) Fisher, R. A.: Statistical methods for research workers, 10th ed. 229 (1948). 11) Numata, M.: Physiol. & Ecol. 3, 47 (1949). 12) ——: Kagaku 18, 457 (1948). 13) Nobuhara, H.: Unpublished. 14) Oosting, H. J.: The study of plant communities, 50 (1950). 15) Numata, M. & A. Abe: Med. & Biol. 15, 349 (1949). 16) Masuyama, M.: Stories of stochastics (in Japanese), 49 (1949).

# Electron-microscopical study on fine structures of diatom frustules IX.\*

## By Haruo Okuno\*\*

奥野存雄: 電子顕微鏡による珪藻殼微細構造の研究 IX.

#### Introduction

The present work is going to be carried on chiefly for the following purposes:

1. Minute examination of the electron-microscopical super-fine structures of diatom frustules. 2. Classification and systematisation of frustule pores by their super-fine structures. 3. Investigation of the relation between the light-microscopical classification of diatoms and the super-fine structures of frustules. 4. If it is proper and possible, the classification of diatoms by the electron-microscopical fine structures of their frustules, instead of the light-microscopical characteristics. 5. Collection of data for the investigation of the relation of super-fine structures of frustules to diatom metabolism.

The electron micrographs presented here were photographed partly with the Shimadzu magnetic 'SM-II' electron microscope at our own laboratory, partly with the 'SM-I' at Yasuzumi Laboratory, Osaka University, and partly with the 'SM-IB' at Shimadzu Works, operating the former one at about 40 kV. and the latter two at about 50 kV.

I wish to express my hearty thanks to Dr. Gompachiro Yasuzumi of Osaka University and Dr. Shin'ichi Shimadzu of Shimadzu Works, who gave me the opportunities of taking many electron micrographs at their laboratories. Further, I take this opportunity of thanking to Mr. Kiichiro Kurosawa for his aid in many ways. At last I also wish to give public expression of my thanks to my wife Mrs. Shigeko Okuno, who rendered me financial supports in carrying out the investigation.

<sup>\*</sup> The papers I-VIII were written in Japanese in the following: I-III, Kagaku (Science), Tokyo, 14 (1944): 166-169, 305-310, 17 (1947): 307-312. IV, V, Seibutsu (Biology), Sapporo (not yet printed). VI-VIII, Bot. Mag. Tokyo, 62 (1949): 97-100, 136-140, 63 (1950): 97-106.

The papers by other authors, dealing with the fine structures of diatom frustules, were listed in my papers VII and VIII.

<sup>\*\*</sup> Botanical Institute, Kyoto University of Industrial Arts and Textile Fibers, Kamikyōku, Kyoto. 京都工芸繊維大学繊維学部植物学研究室.

## Preparation of diatom frustules for the electron microscopy

In the present study, diatom cells, after such treatments written in the following. were prepared for the electron microscopy. First of all, the cell contents, which prevent the penetration of the electron beam, were removed from the cells by boiling them in concentrate hydrochloric acid or calcinating them in a crucible on a gasburner. Of the thin walled diatoms, such as Bacteriastrum, Chaetoceros, Ditylum, Rhizosolenia, Stephanopyxis and etc., I could remove their cell contents to a quite sufficient degree by a short burning of diatoms on the slides over an alcohol lamp. Of the fossil diatoms, the cell contents had in many cases naturally fallen into decay, such treatments of removing cell contents were unnecessary. The diatom frustules, thus removed of their cell contents, after being washed in distilled water, were dropped on a slide glass with a pipet and dried gently. Examining the dry preparation thus made, under the light microscope, the seperated upper or lower valve, or its fragment, which seems to be penetrable to the electron beam, was caught with the help of a sharp needle, and transferred on the collodion membrane of the sample holder. The complete frustule with both upper and lower valves, if removed of its cell contents, was generally impenetrable to the electron beam. And when it was required to prepare such a complete frustule for the electron microscopy, the frustule was at first carefully seperated into upper and lower valves, or broken into little fragments of a single valve with the help of a sharp needle under the light micro-

scope, and then, was transferred and attached to the collodion membrane of the sample holder. The collodion membrane with the diatom frustules, was exposed for two or three seconds to aqueous vapour to fix the frustules on it. When a somewhat large frustule was prepared, it was attached to the sample holder without a supporting collodion membrane in a manner that one part of the frustule is projected into the pore of the holder to be exposed directly to the electron beam (Fig. 1). Such a preparation without the supporting membrane, I call a 'direct preparation' in comparison with the collodion preparation. The direct preparation too, was exposed to aqueous vapour for fixing the frustules to the holder. In the direct preparations, the penetration of the electron beam is much easier than in the collodion preparation owing to the absence of the

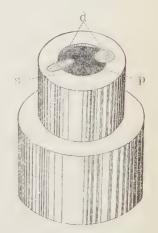


Fig. 1. Diagram of a direct preparation. d: Diatom frustyles. p: Pore of the holder without the supporting membrane. s: Sample holder.

hindrance of the supporting membrane, and accordingly, the sharp images of the fine structures of the frustules could more easily be obtained from the direct preparations than from the collodion preparations. (Cf. Okuno, Journ. Jap. Bot. 26 (1951) p. 306)

## Description of fine structures

Coscinodiscus Janischii A. Schmidt (Pl. I, figs. 1a-1b'), Okuno, Electr. Diat. VII, Bot. Mag. Tokyo, 62 (1949) p. 137, pl. IV, figs. 4-6.

Preparation: Samples preserved in formalin solution, after washed in water and burnt over an alcohol lamp, were prepared as the direct preparations.

Hab.: Marine plankton in the Kidan Straits. (Okuno, no. m 416. Apr. 1950)

I have already reported the super-fine structures of the valve-disks of the present species collected in Miyazu Bay (Okuno, I.c.). In the present research, the superfine structures of the mantle of a valve and the adjoining girdle were studied. The pores of the mantle were found to be of the same structure to the pores in the disk. Judging from the light and the electron microgarphs, the pores are locular. A pore, or a loculus, is polygonal, usually hexagonal (small portion 1a' in fig. 1b). The sieve membrane, perphaps the outer membrane of the loculus, is perforated with about 6-10 roundish sieve pores about 400 m $\mu$  in diameter. In several sieve pores, I found the netveined membranes, or the secondary sieve membranes, which remained undamaged during the process of preparation (fig. 1a'). The sieve pores in the secondary sieve membrane, are also roundish about  $100 \,\mathrm{m}\mu$  in diameter. The inner membrane, or the cover membrane of a loculus, in its centre, has a round opening about  $1\mu$  in diameter. As the cover membrane spreads over the marginal part of the primary sieve membrane, the sieve pores of that part could not seen in the electron microscope. The girdle, which is almost transparent and homogeneous under the light microscope, was found in the electron microscope to be porous with minute pores (figs. 1b'; small portion 1b' in fig. 1b). The pores in the girdle, are round, 80-100 m $\mu$  in diameter, about 2.2 in  $1\mu$ , arranged in three lines decussating at about 60 degrees. The pores in the girdle are not locular, penetrating the wall as the simple pores. Such a simple frustule pore not locular, I call a 'simple pore' in comparison with the 'loculus'. I have already reported the presence of such simple pores in the valves of some species of Amphipleura, Auliseus, Bacteriastrum, Chaetoceros, Diatoma, Eucampia, Eunotia, Fragilaria, Grammatophora, Nitzschia, and etc.

Biddulphia reticulata Roper (Pl. I, figs. 2, 2'), A. Schmidt, Atlas Diat. pl. 121 (1886) figs. 11–15; Mills, Index Diat. (1933) p. 301.

Preparation: Calcinated samples were prepared as the direct preparations.

Hab.: Marine. Attached to *Sargassum* sp. Enoshima, Kanagawa Pref. (Okuno, no. m 323. Apr. 1949)

Fragments of the valve were researched in the electron microscope. The frustule pores are locular. Loculi about 3-4 in  $10\,\mu$ , arranged irregularly. Under the light microscope, the polygonal outlines of the loculi can be clearly seen, and the sieve pores in them are seem obsecurely as faint dots (fig. 2). In the electron microscope, the loculi are found to have the following super-fine structures. The primary sieve membrane has 5-12 roundish primary sieve pores, about  $400\,\mathrm{m}\mu$  in diameter. Some primary sieve pores are completely closed with the thin, not porous secondary sieve membranes, while the others are half closed with the porous secondary sieve membranes. The secondary sieve pores, roundish, about  $100\,\mathrm{m}\mu$  in diameter, appear about 5-8 in a primary sieve pore. The cover membranes, which are narrow, have each of them a roundish or polygonal opening in their centre.

Actinoptychus undulatus (Bailey) Ralfs (Pl. I, figs. 3a-3'), Hustedt, Kieselalg. 1 (1930) p. 475, fig. 264; Mills, Index Diat. (1933) p. 117.

Preparation: Calcinated samples were prepared as the collodion preparations.

Hab.: Marine. Attached to *Sargassum* sp. Sumoto, Awaji Island. Hyōgo Pref. (Okuno, no. m 210. Aug. 1941)

By means of the light microscope, the outer fine porous sieve membrane and the inner coarse netveined cover membrane can easily be distinguished. Pores in the sieve membrane arrange themselves on the whole disk in a common system of three lines decussating at about 60 degrees, without distinct relation to the arrangement of the pores of the inner membrane. The outer and the inner membranes seem to be independent in their fine structures (fig. 3a, 3b). The sieve pores roundish, 16-18 in  $10 \mu$ , about  $180 \,\mathrm{m}\mu$  in diameter. The secondary sieve membranes in the sieve pores are thin, perforated with the super-fine pores of different sizes (fig. 3'). In the present electron-microscopical preparation, the inner membrane was lost, and its image could not be obtained.

Biddulphia sinensis Greville (Pl. I, figs. 4a 4"), Hustedt, Kieselalg. 1 (1930) p. 837, fig. 493; Mills, Index Diat. (1933) p. 304; Kolbe, Electr. Diat. Membr., Ark. f. Bot. 33 (1948) A. no. 17, p. 10, pl. 3, figs. 5, 6.

Preparation: Samples preserved in formalin solution, after washed in water and burnt over an alcohol lamp, were prepared as the direct preparations.

Hab.: Marine plankton in the Akashi Straits, Hyögo Pref. (Okuno, no. m 307. Aug. 1948)

Fragments of the mantle (portion m in fig. 4a; 4") and the girdle (portion g in fig. 4a; 4') were researched in the electron microscope. Pores in the valve and the girdle are both typically locular (fig. 4', 4"). Loculi, rhombic hexagonal or almost angular, about 650-720 m $\mu$  long and 380-530 m $\mu$  broad, appear about 15 in 10  $\mu$  in

three lines decussating at about 60 degrees. The outer and the inner membranes of a loculus are both very thin. The outer sieve membrane in its marginal part is perforated with the round sieve pores about  $25\text{--}35\,\mathrm{m}\mu$  in diameter. Sieve pores appear 8-9 in  $1\,\mu$  in slightly undulating longitudinal lines. The inner cover membrane has a large roundish or elliptic opening in its centre. Dr. Kolbe's electron micrographs (Kolbe, l.c. fig. 5, 6) obtained from the same species collected in Helgoland, and our present electron micrographs, show quite similar fine structures. Further, from these electron micrographs, it can be said that the loculi in the mantle are elongated longitudinally, while the loculi in the disk and in the girdle are nearly regular-hexagonal.

Ditylum Brightwellii (West) Grunow (Pl. II, figs. 1-1"), Hustedt, Kieselalg. 1 (1930) p. 784, figs. 457-9; Mills, Index Diat. (1934) p. 631.

Preparation: Samples preserved in formalin solution, after washed in water and burnt over an alcohol lamp, were prepared as the direct preparations.

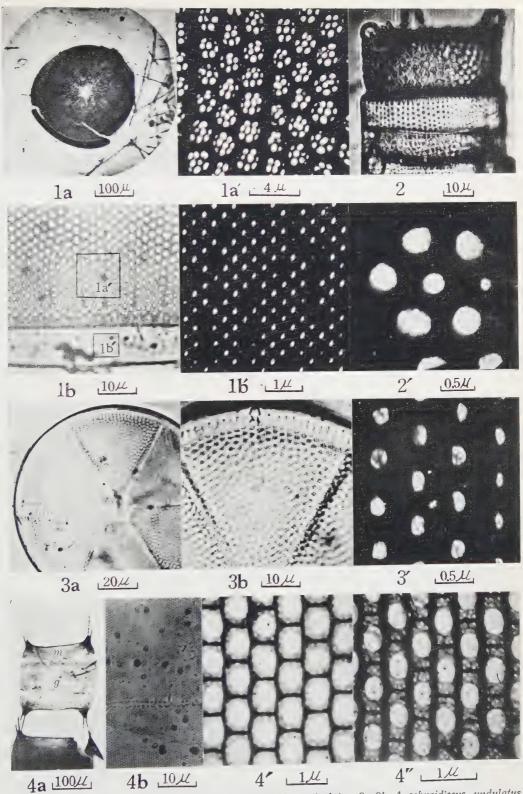
Hab.: Marine plankton in Osaka Bay. (Okuno, no. m 409. Mar. 1950)

Frustules are very thin, easily broken by drying on the slide glass. Pores are not locular, arranged in radiating rows in the disk, and in longitudinal rows in the mantle and in the girdle. Pores are usually elliptic, with porous sieve membranes. Sieve pores in a frustule pore are two or more, marginal, horse-shoe shaped or linear. In many cases, two horse-shoe shaped sieve pores appear oppositely in a frustule pore. In the central area of the valve, comparatively large pores arranged in radiating rows, about 7 in  $10 \mu$ . In the central area, the frustule pores somewhat linear-elliptical, about  $0.5-1.5\,\mu$  long and  $0.1-0.4\,\mu$  broad. The marginal sieve pores are horse-shoe shaped or curved linear. In the marginal part of the valve, in the mantle, and in the girdle, pores appear about 15 in  $10 \mu$ . The pores in these parts are elliptic, about  $0.5 \mu$  long and  $0.2 \mu$  broad. Sieve membranes in the pores, often with short wings uni- or bilaterally (fig. 1"). I have found similar sieve pores in Triceratium Shadboltianum var. elongata (Bot. Mag. Tokyo, 63, p. 99, pl. II, figs. 4, 4'), in the mantle (?) of Gomphonema acuminatum var. coronata (Okuno, Electr. Diat. X, Pl. 1, fig. 5), and Fragilaria sp. (Okuno, Electr. micrograph, no. 113). The spine on the border of the central area of a valve, which under the light microscope seems to be single, was found in the electron microscope to be consisted of a pair of slender spines uniting at the free ends. On the end of the each spine, with 1-3 fine short seta (fig. 1').

Rhizosolenia Temperci Peragallo (Pl. II, figs. 3-3"), Hustedt, Kieselalg. 1 (1930) p. 605, fig. 349; Mills, Index Diat. (1934) p. 1410.

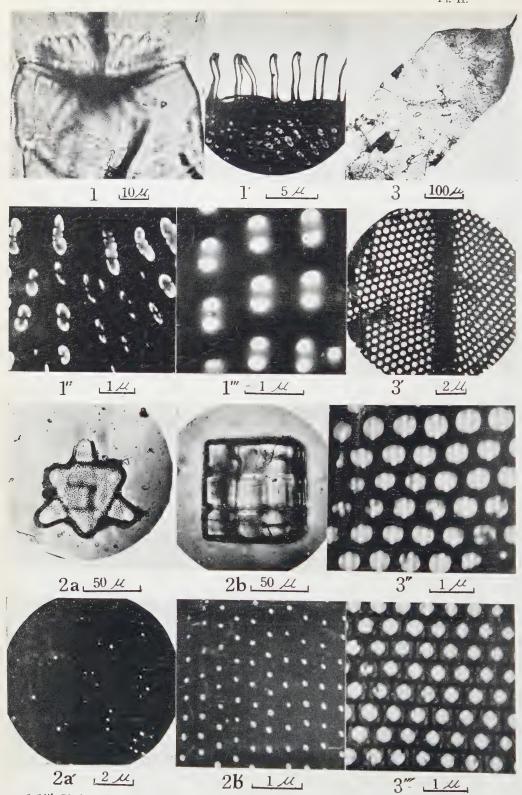
Preparation: Samples in formalin solution, after washed in water and burnt over an alcohol lamp, were prepared as the direct preparations on the mesh holders.

Hab.: Marine plankton off the coast of Goto Islands, Kyūsyū. (Okuno, no. m 363.



1a-1b' Coscinodiscus Janischii. 2, 2' Biddulphia reticulata. 3a-3' Arachnoidiscus undulatus. 4a-4" Biddulphia sinensis. (1a, 1b, 2, 3a, 3b, 4a, 4b...Light micrographs. Others...Electron microraphs)

H. Okuno: Fine structures of diatom frustules.



1-1" Ditylum Brightwellii. 2a-2b' Hydrosera wampoensis. 3-3" Rhizosolenia Temperei. (1, 2a, 2b, 3...Light micrographs. Others...Electron micrographs)

H. Okuno: Fine structures of diatom frustules,

Aug. 1949)

Fragments of the capsule (figs. 3'; portion c in fig. 3) and the girdle (fig. 3'''; portion g in fig. 3), isolated from the same cell were researched in the electron microscope. Frustules are very thin. Pores in the capsule and in the girdle, are both typically locular. Loculi about 18-19 in  $10 \,\mu$ , arranged in three lines decussating at about 60 degrees. Loculi both in the capsule and in the girdle are angular (clearly seen in fig. 3'''!). Judging from the electron penetrability, the sieve membranes seem to be thinner than the cover membranes. A sieve membrane has a linear row of 2-4 sieve pores. The directions of these rows of the sieve pores often differ in loculi and also in parts of a frustule. Sieve pores, roundish, about  $0.1 \,\mu$  in diameter. A cover membrane, in its centre has a round opening about  $0.4 \,\mu$  in diameter. In Rhizosolenia styliformis var. longispina, I have found the sieve membranes with two parallel slit-like sieve pores, and in Rh. Styliformis var. latissima, I have found the sieve membranes with the marginal, round sieve pores! The latter sieve pores are very similar in their shapes and arrangements to those of Biddulphia sinensis."

Hydrosera wampoensis Schwarz (Pl. II, figs. 2a-2b'), Mills, Index Diat. (1934) p. 867; Hydrosera triquetra Wallich, A. Schmidt, Atlas Diat. pl. 78 (1886) figs. 36-38; Triceratium javanicum Cleve, A. Schmidt, 1.c. pl. 94 (1886) fig. 18; Hydrosera boreana and fo. hexagona Pantocsek, Fossil Bacill. Ung. 2, pl. 30, figs. 420, 428; Terpsinoe triquetra (Wallich) Pantocsek, Iwahashi, Journ. Jap. Bot. 11 (1935) p. 642, fig. 12.

Preparation: Calcinated samples were prepared as the direct preparations.

Hab.: Fresh water. Colonies in long filaments, attached to the woody piles in the river. Uji river, Kyoto. (Okuno, no. 1424. May 9, 1948)

Valve walls are locular (figs. 2a, 2a'). Loculi are polygonal, about 4–5 in  $10\,\mu$ . The sieve membrane are comparatively thick, perforated with round sieve pores arranged nearly in three directions. Sieve pores appear about 2–3 in  $1\,\mu$ , about  $0.16\,\mu$  in diameter. The cover membrane, in its centre, has a roundish opening about  $1.5\,\mu$  in diameter. The girdle, which under the light microscope is almost transparent (fig. 2b), is found to have fine pores in the electron microscope (fig. 2b'). Pores in the girdle are roundish, not locular, about  $0.1\,\mu$  in diameter, about 27 in  $10\,\mu$ , arranged in three directions.

Remarks: For the present species, in spite of its very characteristic features of the frustule, several different, names have been given. Specimens collected from various parts of Japan by me and by others, quite correspond to *Hydrosera boreana* in Pantocsek, Fossil Bacill. Ung. 2, pl. 30, fig. 428, which was afterwards united by Mills with *Hydrosera wampoensis*.

# Comparative studies on *Ixeris stolonifera* (2x) and *Ixeris japonica* (6x)

By Teiichiro Такемото\*

竹本貞一郎: ヒメヂシバリ (2x) とオオヂシバリ (6x) との比較研究

Ixeris stolonifera A. Gray (Nom. jap. Himejishibari) and Ixeris japonica Nakai (Nom. jap. Oojishibari) are taxonomically closely related to each other having many similar morphological characteristics. Ixeris japonica, however, is larger than I. stolonifera.

ISHIKAWA (1921) determined the chromosome number of *Ixeris stolonifera* (*Lactuca stolonifera*) as n=8 and that of *I. japonica* (*L. debilis*) as n=24. His observation on *Ixeris stolonifera* was later confirmed by Babcock, Stebbins and Jenkins (1937). The cytological results obtained show that these two species are in polyploid relation. But no observation has been made on the karyotypes of both species.

The author has carried out comparative studies on the karyotypes and morphology of these two species.

#### Materials and Methods

Several clones of both species growing on the campus of Okayama University were used for the studies. To observe the somatic chromosomes, the author modified the 8-oxyquinoline method employed by Tho and Levan: The author treated the root tips with 0.002 mol oxyquinoline for one hour at a temperature of 18–20°C, washed them with running water for 30 minutes, and fixed them with 45% acetic acid. The root tips were then heated gently in 1N HCl for 5–10 seconds 2 to 3 times. Then they were put on a slide and treated with a drop of 1% orceine in 45% acetic acid. A cover glass was put on and slightly pressed. It was tapped gently several times until the cells were spread into a one-cell layer.

#### Observations

The chromosomes treated by the method mentioned above contract somewhat in size, and constrictions of chromosomes appear distinctly.

<sup>\*</sup> Biological Laboratory, Faculty of Education, Okayama University. Okayama.

Ixeris stolonifera has 16 chromosomes in the root tips. All the chromosomes from a nuclear plate are shown in Fig. 1. A. The smallest pair of chromosomes has a terminal constriction. The two chromosomes in each of the remaining seven pairs are similar in form to each other. Ixeris stolonifera is, therefore, a diploid (2x) species.

Ixeris japonica has 48 somatic chromosomes. They can be arranged in six approximately equal sets, each of which consists of eight chromosomes, and obvious differences are not recognizable among these six sets (Fig. 1. B). In each set the smallest chromosome has a terminal constriction (VIII). The six smallest chromosomes from the six sets are similar in form to one another, and they resemble the smallest chromosome in *I. stolonifera*. The remaining seven pairs (I-VII) are also morphologically similar to the seven chromosomes (I-VII) of *I. stolonifera*. Ixeris japonica is, therefore, hexaploid consisting of six almost homologous sets.

From the above observations it may be pointed out that *I. japonica* is probably autohexaploid having chromosome sets morphologically similar to those of *I. stolonifera*.



Fig. 1. The chromosome sets from root tips of the two species; treated with oxyquinoline. A: 16 chromosomes of *Ixeris stolonifera*, B: *Ixeris japonica*, the 48 chromosomes in one nuclear plate arranged in six almost quite equal sets. ×2400.

If we compare the outer characteristics of *Ixeris japonica* with those of *I. stolonifera*, we find the following facts: primarily, they are similar to each other in many characteristics, e.g. the creeping habit of the stems, the tender and membranous quality of the leaves, the morphology of the heads, the ligulate flowers and the achenes; secondarily, they are different from each other in such characteristics as the length of the body and the beak of the achenes, and the form of the leaves.

Table I indicates the mesurements of some of similar characteristics of both

species. The ratios  $\frac{J}{S}$  indicate that *I. japonica* is larger than *I. stolonifera* in all the outer characteristics given in this table, and that the osmotic pressure in *I. japonica* is higher than that in *I. stolonifera*.

Table II indicates the comparison of dissimilar characteristics of the two species.

Table I. Measurements of characteristics in Ixeris stolonifera and Ixeris japonica.

Characteristics	I. stolonifera (S) $2n=16(2\times8)$	I. japonica (J) 2n=48(6×8)	Ratios $\left[\frac{J}{S}\right]$
Lengths of Guard cells (obverse, µ)	4.28±0.04	$6.06 \pm 0.04$	1.42
ditto (reverse side)	$4.27 \pm 0.05$	$4.99 \pm 0.11$	1.16
Numbers of Stomata in definite area 97,265 μ² (obverse)	$9.66 \pm 0.34$	$3.86 \pm 0.32$	0.39
ditto (reverse side)	$26.46 \pm 0.34$	$14.95 \pm 0.28$	0.56
Diameters of Pollen grains (µ)	$5.55 \pm 0.06$	$7.19 \pm 0.06$	1.29
Diameters of Heads (mm)	$17.70 \pm 0.35$	$31.50\pm0.85$	1.78
Numbers of Ligurate flowers in 1 Head	18.47±0.40	$19.65 \pm 0.70$	1.06
Lengths of Achenes (mm)	$4.65 \pm 0.07$	$5.62 \pm 0.06$	1.1
Lengths of Leaves (cm)	$2.89 \pm 0.08$	$8.40 \pm 0.19$	2.89
Lengths of Internodes (cm)	$3.34 \pm 0.12$	$4.36 \pm 0.01$	1.40
Peripheries of Stems (mm)	$3.01 \pm 0.05$	$4.67 \pm 0.11$	1.55
Osmotic pressures (grown on sunny places)	$10.14 \pm 0.09$	$11.41 \pm 0.09$	1.12
ditto (grown on shady places)	$9.05 \pm 0.05$	$10.59 \pm 0.10$	1.16

Table II. Differences of external morphology between Ixeris stolonifera and I. japonica.

Characteristics	I. stolonifera (S)	I. japonica (J)	Ratios $\begin{bmatrix} J \\ S \end{bmatrix}$
Forms of Leaves	orbicular or ovate	lanceolate or spatulate	
Margins of Leaves	almost entire	sometimes lobed	
Lengths of bodies of Achenes (mm)	$2.45 \pm 0.04$	$4.45 \pm 0.07$	1.82
Lengths of beaks of Achenes (mm)	$2.18 \pm 0.05$	$1.17\pm0.05$	0.54
Ratios of bodies to beaks of Achenes	0.93	0.26	0.28

From these comparisons, one may see that the characteristics of the two species are essentially similar and that *Ixeris japonica* is a gigas form of *I. stolonifera*.

I wish to express my cordial thanks to Prof. Shimotomal for his valuable sugestions in carrying out this study.

#### Summary

- 1) In this report the morphological and cytological characteristics of *Ixeris stolonifera* (2n=16) and those of *Ixeris japonica* (2n=48) were compared.
- 2) The observations on the somatic chromosomes show that *Ixeris stolonifera* has two sets of chromosomes, each consisting of eight chromosomes, that *Ixeris japonica* has six sets of chromosomes, and that *Ixeris japonica* is regarded as an autohexaploid plant derived from *I. stolonifera*.
- 3) Several morphological characteristics of the hexaploid species are larger than those of the diploid species, and *Ixeris japonica* may be a gigas form of *I. stolonifera*.
  - 4) The osmotic pressure of Ixeris japonica is higher than that of Ixeris stolonifera.

#### Literature cited

- TJIO, J.H. & A. LEVAN. 1950. The use of oxyquinoline in chromosome analysis. Anales de la Estacion Experimental de Aula dei 2 (1): 21-64.
- ISHIKAWA, M. 1921. On the chromosomes of Lactuca. Bot. Mag. (Tokyo) 35:415.
- BABCOCK, E.B., STEBBINS & JENKINS. 1937. (Cited from Tabulae Biologicae Vol. 16, TISCHLER: Pflanzliche Chromosomenzahlen.)

# Nova Planta Japonica (I)

# Auctore Masaji Honda

本田正次: 日本の新植物

#### Smilax sadoensis Honda sp. nov.

Planta herbacea, erecta, 30-60 cm alta, simplex vel ramosa, robustiuscula, glabra. Caulis angulatus, striatulus. Folia alterna, petiolata, petiolis 0.7-20 mm longis basi vaginantibus margine undulatis, Iaminis ellipticis vel ovato-ellipticis, apice acutis vel acuminatis, basi cuneatis vel truncatulis, 8-10 cm longis, 3.5-6.5 cm latis, 5-nervatis reticulatis, rugulosis, margine undulatis, supra glabris, nitidulis, subtus ad nervis saepe strigulosis. Stipulae cirrhatae. Flores axillares longe pedunculati, pedunculis 4-6 cm longis, umbellati, umbella 7-15-flora, glomerata. Flos  $\Diamond$ : perianthium reflexum; stamina 6; epistillatus. Flos  $\Diamond$ : perianthium reflexum; estaminatus.

Nom. Jap. Sado-shiode (nov.)

Hab.

Honshū: Ōnogame, ins. Sado (M. Honda, anno 1949-typus in Herb. Tokyo Univ.)

Near Smilax higoensis MIQUEL, but differs from this by its more robust stem, contracted internodes, multi-fold leaves, massed umbel, etc.

#### Sedum Shimizuanum Honda sp. nov.

Planta saxicola, glaberrima. Caulis erectus, 25–30 cm altus, teres, gracilis, praeter inflorescentia simplex, superior bulbillifer in autumno, inferior saepe rufescens. Folia ad nodum terna, subsessilia, oblonga, apice acutiuscula, 25–3 cm longa, 7–12 mm lata, succosa, margine dentata. Inflorescentia corymbosa, laxa, pauciflora. Flos parvus. Sepala oblongo-lanceolata, acuta, 1 mm longa, viridissima. Petala coarctata, oblonga, acuta, navicularia, 2.5–3 mm longa, viridia, margine scariosa. Stamina petala aequilonga. Anthera elliptica, 0.75 mm longa, leve sulphurea. Ovaria 5, liberta, viridia.

Nom. Jap. Chichibu-benkei (nov.)

Hab.

Honshū: in monte Ogura, prov. Shinano (D. Shimizu, anno 1950—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Distinct from Sedum verticillatum Linnaeus by its half-opened flower, tufty stem and bulblets on stem in autumn.

Gentiana minor Nakai var. minima Honda var. nov.

Planta humilis, 3-6 cm alta. Caulis solitarius. Folia minora, 4-5 mm longa.

Nom. Jap. Ko-tateyamarindō (nov.)

Hab.

Honshū: Mie, Prov. Ise (N. Yasui, no. 2, anno 1950—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Hovenia dulcis Thunberg form. deviata Honda form. nov.

Planta nana. Folia minora, 4-6 cm longa, 2-3 cm lata, aurata, tenuissima.

Nom. Jap. Ögon-kenponashi (nov.)

Hab.

Honshū: Wakayanagi, prov. Rikuchū (M. Honda, anno 1945—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Ligustrum japonicum Thunberg var. leucocarpa Honda var. nov.

Fructus albus vel flavescens.

Nom. Jap. Shiro-nezumimochi (nov.)

Hab.

Shikoku: Kōchi, prov. Tosa (T. Yamawaki, anno 1951—typus in Herb. Tokyo Univ.)

var. repens Honda var. nov.

Caulis repens, radicans.

Nom. Jap. Hai-nezumimochi (T. YAMAWAKI)

Hab.

Shikoku: in medio Yura-peninsulae, prov. Iyo (T. Yamawaki, anno 1951—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Tilia japonica Simonkai var. stenoglossa Honda var. nov.

Bractea angusta, 3-6 cm longa, 4-8 mm lata, apice acutiuscula.

Nom. Jap. Arakawa-shinanoki (nov.)

Hab.

Honshū: Arakawa, prov. Ugo (G. Koie, no. 32, anno 1938—typas in Herb. Tokyo Univ.)

Polygonatum Maximowiczii Fr. Schmidt var. ramosum Honda var. nov.

Caulis ramosus, ramis floriferis.

Nom. Jap. Edauchi-ōamadokoro (nov.)

Hab.

Hokkaidō: Nishi-shibetsu, prov. Teshio (T. Sasakı, anno 1951—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Fragaria nipponica Makino form. rosea (Nakai) Honda comb. nov.

Fragaria nipponica var. rosea NAKAI in sched. Herb. Tokyo Univ.

Petala rosea.

Nom. Jap. Benibana-kusaichigo (T. NAKAI)

Hab.

Honshū: Shizu in Nikkō, prov. shimotsuke (T. Nakai, anno 1932); in monte Fuji, prov. Suruga (Y. Takenaka, anno 1951)

Scutellaria iyoensis Nakai form. albiflora Honda form. nov.

Flores albi.

Nom. Jap. Shirobana-hanatatsunamisō (nov.)

Hab.

Shikoku: in monte Saragamine, prov. Iyo (S. YAMAMOTO, no. 141, anno 1948—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Vicia angustifolia Linnaeus var. segetalis Koch form. albiflora Honda form. nov. Flores albi.

Nom. Jap. Shirobana-yahazu-endō (nov.)

Hab.

Shikoku: Nanba, prov. Iyo (S. Yamamoto, no. 138, anno 1948—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Calamagrostis hakonensis Franchet et Savatier var. glauca Honda var. nov.

Folia subtus (primo supra) glauca.

Nom. Jap. Urajiro-himenogariyasu (nov.)

Hab.

Shikoku: in monte Saragamine, prov. Iyo (S. Yamamoto, no. 161, anno 1947—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Weigela floribunda K. Koch form. leucantha Honda form. nov.

Flores primo albi demum colorantes.

Nom. Jap. Shirobana-yabu-utsugi (nov.)

Hab.

Shikoku: Sakuragi, prov. Iyo (S. Yamamoto, no. 132, anno 1946—typus in Herb. Tokyo Univ.)

#### Thalictrum Yamamotoi Honda sp. nov.

Caulis erectus, angulatus, glaber, cum inflorescentia usque ad 37 cm altus. Folia alterna, petiolata, basi amplexicaulia. Stipulae fuscae, membranaceae, margine fimbriatulae, petiolo adnatae. Petioli 1-4 cm longi, supra sulcati. Lamina ternata; segmenta triternati-pinnata; pinnulae late ovatae, basi rotundatae, apice trilobatae, lobis 2-3-lobatis, 10 mm longae, 10-15 mm latae, supra virides, glabrae, minutissime glandulosae, infra glaucae, glabrae, minute glandulosae. Inflorescentia parva, oligantha. Pedicelli gracillimi, 4-5 mm longi. Flores non vidi. Achenia oblonga, 2-2.5 mm longa, striata, minute glandulosa.

Nom. Jap. Ishizuchi-karamatsu (nov.)

Hab.

Shikoku: in monte Ishizuchi, prov. Iyo (S. Yамамото, no. 181, anno 1948—typus in Herb. Tokyo Univ.)

Akin to *Thalictrum Thunbergii* A. P. DE CANDOLLE, but distinguishable from this by its dwarf stem, shape of leaflets, and gland-dotted leaves and achenes.

### 摘 要

佐渡の北部海岸の草原地帯に産するシオデの一種は遠が剛黒で直立性が强く、節間が短縮して葉が多い。花は小花梗が短くて密集する觀があり、新種として発表したい。清水大典氏が昭和25年8月奥秩父で採集されたベンケイソウの一種はミッパベンケイソウに比べて株立ちとなり、花が正開せず、秋になると上部の葉腋に無数の肉芽を生ずる特性があるので、これも新種として発表する。清水大典氏はその生育地を次の様に説明しておられる。「奥秩父山地の西の

線に御座山が位置し、又地質的にも秩父古生層の分布の西界点に当る山で主峰御座山の高度は2,112,1 m で、その山頂から東方に同つて秩父三国時甲武信岳の主稜を形造る彌次平尼根が走つており、このベンケィ草の生育地はこの御座山頂から彌次平尾根を約1 キロばかり東に進んだ高岩(昭和25年の初縦走で新しく命名した社岩の突峰)の岸に苦生しているもので、生育点は岩石ではあるがコメッガの森林に接して比較的蒸気が多く、蘇類のよく育つ処である。そしてこの生育点の高度は海拔1,980 m 位で、生育する稜線が長野県南佐久郡の南相木村と北相木村の境界線をなしておる。又この草の生育量はあまり多くはなく、大体2地点30株位であろう。」

桑名高校の安井直康氏の採集で、三重県三重郡三重村にある大池の沼沢地に産し、タテヤマリンドウの更に小さくなつた一変種と思われるものがある。安井氏によればハルリンドウと混生し、現場は標高 30 m の低所だそうである。 サルイワッパキ即ちユキッパキを最初に調査に行つた時の帰途立ち寄つた 若柳村愛宕小学校の校庭で見たケンボナシは葉が小さく、黄金色を呈し、脈に沿うて僅かに緑が養つている葉もあるという変り方であつた。 病的のものと思われる。 ネスミモチの果実が熟しても黒くならないで白色または帶黄白色を呈するものを山脇哲臣氏が高知市旭の山麓で採集された。 また同氏は愛媛県北宇和郡と南宇和郡との境界に当る由良牛島の中間部でネズミモチが完全に地に伏してはう形のものを発見採集された。 秋川県仙北郡 荒川村で 古家儀八郎氏が採集されたシナノキの一種は造が狭細で先端が細く失つている点が基準種と違つているので新変種とした。

北海道天塩国土別町西土別で佐々木太一氏が採られたアマドコロ属の一種はオオアマドコロと思われるが、葉腋毎に枝をうつて、更に葉と花とをつけた新しい変種である。シロバナヘビイチゴの花の淡紅色のものを竹中要氏が富士山で採集されたが、これは曾て日光の志津で中井博士が採られたものと同一品と思われる。 愛媛県皿ヶ嶺で山本四部氏の採集されたタッナミソウの一種はハナタッナミソウの白花品であるから新品種として記載する。

ヤハズエンドウの白花品も山本四郎氏によつて同県温泉郡難波村下難波の路傍で採集された。ヒメノガリヤスの悪寒(木来の表)が白味を帯びている変種が同氏によつて皿ケ嶺で採られている。ヤブウツギの白花品が同県周桑郡櫻樹村にあり、これも山本四郎氏によつて採集された。石槌山西冠岳で同氏の採集されたカラマツソウ属の一種はアキカラマツの高い山に上つた形とも見られるが、高さが低く、小葉の形に異点が認められ、葉の表裏ならびに果実に細かい腺点が見られるので別種と考えた。

最後に本論文は文部省科学研究費の一部でなされたことを記して感謝の意を表す。

# Lichenes Khinganenses: or a list of lichens collected by Prof. T. Kira in the Great Khingan Range, Manchuria\*

# By Masami SATO

佐藤正己\*\*: 大興安嶺の地衣類

Prof. Tatuo Kira of Osaka City University explored the northern part of the Great Khingan Range, as the plant ecologist of the Great Khingan Expedition 1942 directed by Dr. Kinji Imanishi of Kyoto University. During the exploration, he collected 64 lichen specimens at 11 stations along the River Gan, Bystraya and Albazikha (see Fig. 1). He sent them to me for identification, with a pretty pamphlet written by him and entitled "Deciduous conifer forest of eastern Siberia (Sapporo, 1950)" in which we can find the detailed description of the lichen vegetation in the Great Khingan Range.

His lichen collection, though not so large, is quite valuable and interesting as it gives us the knowledge of lichen distribution in terra incognita pro lichenes, for the first time. The collection is mainly consisted of fruticose lichens, and no crustaceous lichen is seen in the collection.

The numbers and dates of collection in each stations are as follows:—Station 1 (Nos. 1-4, May 16), 2 (Nos. 10-11, May 20), 3 (Nos. 5-9, May 21), 4 (Nos. 12-13, May 22), 5 (No. 14, May 24), 6 (Nos. 15-16, May 26), 7 (No. 17, May 31), 8 (Nos. 18-39, June 23), 9 (No. 40, July 2), 10 (Nos. 41-51, June 18) and 11 (Nos. 52-64, June 28).

The writer tenders most cordial thanks to Prof. Kira who gave him the opportunity of studying these valuable specimens collected during the venturing trips, He wishes to offer his sincere gratitude to Hon. Prof. Y. Asahina for his kind guidance and identification of Cladoniae.

#### Fam. Peltigeraceae

1) Peltigera aphthosa (L.) Willd.—On the mossy ground in the forest of Larix (no. 14).

<sup>\*</sup> Contributions from the Laboratory of Applied Botany, Faculty of Agriculture, Yamagata University. No. 15 (February, 1952)

<sup>\*\*</sup> 山形大学農学部応用植物学研究室(山形県鶴岡市新屋吸町)

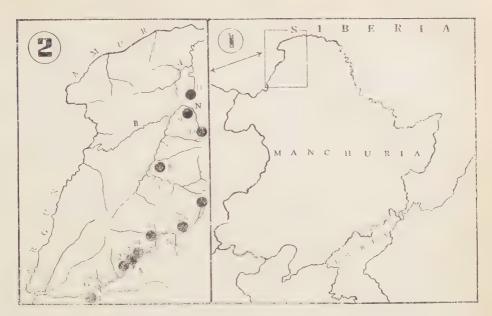


Fig. 1. Map of the central part of the Far Eastern Asia (map 1) and the northern part of the Great Khingan Range (map 2).

In map 2, (a) Black dots accompanied with numerals indicate the stations where lichen specimens were collected. (b) Station 8 is Mt. Okoldoi which was estimated about 1550 m high. (c) Letters A, B and N printed in gothic style are the abbreviations of the River Albazikha, Bystraya and Nizhne Ulgichi, respectively.

As for the general physiognomy of the region explored, Dr. K. Imanishi described precisely in his "Ecological observations on the Great Khingan Expedition (Geogr. Rev. 40: 236-253, 1950)", and of the rivers Mr. T. Umesao of Kyoto University reported in his "Limnological survays of the northern part of the Great Khingan Range (Physiol. & Ecol. 2: 39 49, 1948)".

## Fam. Cladoniaceae

- 2) Cladonia alpestris (L.) Rabenh.—On the ground (nos. 15, 16, 32 & 50), all sterile.
  - 3) Cladonia rangiferina (L.) Web.—On the ground (no. 6), fertile.
  - 4) Cladonia sylvatica (L.) Harm.—On the ground (nos. 30, 39, 46 & 47), sterile.
- 5) Cladonia amaurocraea (Flk.) Schaer.—On the ground (nos. 24, 45, 54, 58 & 59 pr. p.), all sterile.
  - 5-a) f. celotea Ach.—On the ground (nos. 5. 7, 8 & 63).
  - 5-b) f. oxyceras (Ach.) Oliv.—On the ground (no. 42 pr. maj. p.).
- 6) Cladonia cariosa (Ach.) Spreng. f. corticata Wain.—On the ground (nos. 41 & 49 pr. p.).
  - 7) Cladonia carneola Fr.—On the ground (nos. 43 & 48).
  - 8) Cladonia chlorophaea (Flk.) Spreng.—On the ground (no. 13 pr. p.).

- 9) Cladonia furcata (Huds.) Schaer. var. racemosa (Hoffm.) Flk.—On the ground (no. 13 pr. p.).
- 10) Cladonia gracilis (L.) Willd. var. chordalis (Flk.) Schaer.—On the ground (no. 42 pr. min. p.).
  - 10-a) var. elongata Flk.—On the ground (no. 38), sterile.
- 11) Cladonia verticillata Hoffm. var. evoluta Th. Fr.—On the ground (nos. 41 & 49 pr. p.)
- 12) Cladonia fleurota (Fik.) Schaer. var. esorediosa Asahina—On the ground (no. 27).

#### Fam. Stereocaulaceae

- 13) Stereocaulon paschale (L.) Hoffm.—On the rocks in the forest of Betula (no. 12) and on the ground (no. 20), all sterile.
  - 14) Stereocaulon tomentosum Fr.—On the ground (no. 19), sterile.
- 15) Stereocaulon Wrightii Tuck.—On the rocks near the summit of Mt. Okoldoi (nos. 26 & 31), all sterile.

#### Fam. Umbilicariaceae

16) Gyrophora hyperborea (Ach.) Hoffm.—On the rocks near the summit of Mt. Okoldoi (no. 36), fertile.

#### Fam. Parmeliaceae

- 17) Cetraria crispa (Ach.) Nyl. var. japonica Asahina—On the ground (nos. 44, 52, 53, 55 & 62), fertile or sterile, PD+red. It is very curious that the most common species "Cetraria islandica Ach." is not found in this collection.
  - 18) Cetraria cucullata (Bell.) Ach.—On the ground (nos. 18 & 33), sterile.
- 19) Cetraria Delisei (Bory) Th. Fr.—On the ground near the summit of Mt. Okoldoi (no. 40), sterile.
- 20) Cetraria nivalis (L.) Ach.—On the ground near the summit of Mt. Okoldoi (nos. 22, 23, 34 & 35), all sterile.
- 21) Cetraria chrysantha Tuck.—On the ground near the summit of Mt. Okoldoi (nos. 21 & 28), all sterile.
  - 22) Parmelia caperata (L.) Ach.—On the trunks of Populus (no. 2), sterile.
- 23) Parmelia conspersa Ach.—On the rocks in the forest of Larix (no. 9), sterile, medulla KOH+yellow to blood red.

#### Fam. Usneaceae

24) Alectoria jubata (L.) Ach.—On the twigs of Larix, associated with Evernia mesomorpha Nyl. (no. 17 pr. maj. p.), sterile.

- 25) Alectoria ochroleuca Mass.—On the ground near the summit of Mt. Okoldoi (nos. 25 & 29), all sterile.
- 26) Evernia mesomorpha Nyl.—On the bark of Populus (no. 1) and twigs of Larix (no. 17 pr. min. p.), all sterile.
- 26-a) f. esorediosa Müll. Arg.—On the twigs of Larix (nos. 10, 11 & 61), all fertile.
- 27) Thamnolia vermicularis (Sw.) Ach.—On the ground, associated with Cladoniae, Alectoriae and mosses (no. 37), sterile. Thallus already pale fleshy coloured, KOH+yellow to reddish.

#### Fam. Teloschistaceae

28) Xanthoria fallax (Hepp.) Arn.—On the barks of Populus (no. 3), fertile.

## 摘 要

京大の今西錦司博士を隊長として、1942年の晩春から初夏にかけて決行された大興安嶺探 検隊の踏査に参加した現大阪市大教授吉良龍夫氏は、踏査中に採集した貴重な地衣類標本64点 を筆者に提供された。 地衣類分布の盲点とも云うべき地点からこれだけの標本を得たことは誠 に有難いことなので、早速同定にとりかかり、ハナゴケ属については特に朝比奈先生の御教示を 得て、上記の通り7科10属28種を検出した。

吉良氏の書いた落葉針葉樹林(林業解説シリーズ 29)を見ると、オオコリドイ山(附図の第8号地点)の森林製界線より は、よるで地衣の国とでも云つたらよいか、海綿坊主のようなミヤマハナゴケや、ありとあらゆる形の地衣類が、夢のような美しさをもち、天上世界的な印象を与えたと書いてあるが、此の記錄と標本とから考えて、大興安嶺の上部は北海道の大雪山や北鮮の遮日塞などと同様な広大な地衣原をもつていることがわかる。

量的には兎も角として、大興安嶺の地衣相は質的には他の隣接地域の樺太、千島、アラスカ、 朝鮮等とあまり変つたところは認められない。

# 参考文献

1) 吉良竜夫: 落葉針落樹林 (林業解説シリーズ 29, 札幌 1950)

2) 吉良竜夫: 採集植物目錄(今西錦司編, 大興安嶺探檢 498-507, 1952)

3) 梅棹忠夫: 北部大興安嶺の陸水 (生理生態 2, 39-49, 1948)

# ウキクサ科植物の硝酸還元並にアンモニヤ 消費に及ぼす光の影響

吉 村 フ ジ\*

Fuji Yoshimura: Influence of the light on the consumption of nitrate and ammonia in lemnaceous plants.

硝酸は綠色植物の栄養土重要な窒素源であつて, 吸收された後先ず還元 されてから同化さ れる。Pearsall 及び Billimoria(1) は切り取つた葉で光が硝酸の吸收並に還元を促進すること を見た。Bleckmann 及び Templemann<sup>(2)</sup> は、綠色植物に於ける蛋白質形成は弱光の下では强 光に於けるよりも少く、且つ植物体内に硝酸が蓄積することから、硝酸還元は炭水化物含量とは 関係のない光の特殊作用であると述べた。Dittrich<sup>(3)</sup> は晴天の日に於ては曇天の日に於けるよ りもコムギの硝酸含量が少いこと, 叉黄繊化ソラマメは正常のものより硝酸 含量 が多いことか ら光が硝酸還元を促進すると推定した。 しかし是等の場合糖を与えると硝酸還元に対する光の 影響が現われないことも認めた。Burström(4) はコムギの幼苗では暗中で硝酸還元が起らない が、光の下では光度に比例して還元が増すことを觀察し、これは光合成の中間産物が硝酸還元に 必要であり、又硝酸の還元確物は次に光合成の中間産物と直接結合して有機窒素化合物になる ためで、光がこの過程に直接必要という意味ではないが、光がないと結局硝酸還元が起らないと 述べた。Suzuki<sup>(5)</sup>, Nightingale<sup>(6)</sup> 等は硝酸還元に対する光の意義は光合成によつて炭水化物 を供給するにあるとした。Warburg 及び Negelein(?) はクロレラで硝酸還元は硝酸の透過速 度によって制限され、光は透過性を高めるために研酸還元を促進すると言う。 Baudisch 及び Mayer(8) は硝酸及び亞硝酸の還元が光特に紫外線の作用で起ることを化学的に証明し、Baley、 Heilbron 及び Hudson<sup>(9)</sup> は硝酸が光化学的に還元し、formaldehyde と直結して formaldehydroxamic acid を形成すると述べた。Sommer(10) はクロレラを用いて硝酸還元による重硝 酸の形成と formaldehyde の消長とが相関することを測定し, 両者が結合して有機窒素化合物 の第一階程をなすと推定した。

以上のように硝酸還元に対する光の影響については統一した結果が得られていないが、之について Burström<sup>(II)</sup> は硝酸還元と硝酸同化とを区別しないために論議上混乱を来すことを指摘し、硝酸同化とは硝酸が予め還元されてある窒素化合物となり、これが無窒素有機化合物と結合して有機態の窒素化合物を作る過程をいうので、それに先行する硝酸還元とは別であると述べた。

植物体に於て硝酸還元の生成物は速かにそれに次ぐ多くの過程を経て アミノ酸,蛋白質等の合成に役立つ。 硝酸を窒素源とする時蛋白質形成,生長等に影響する条件が同時に直接消酸 還元に影響を与えると考えることは適当でない。 硝酸還元を試験する時,それに次ぐ同化過程

<sup>\*</sup> 北海道大学理学部植物学教室

が速かに進行するか否かによる影響も考えられ、殊に光は光合成章物による間接の影響を与える場合もあろう。これらの間接の影響を成るべく少くするためには測定時間を出来るだけ短縮することが必要である。 高等植物に於ては通常硝酸還元によつて生じた電硝酸は直ちに他のものに変化して行くかち\*、硝酸還元を電硝酸の生成量によつて測定することは適当でない。

Lemna valdiviana は硝重を窒素無とし葡萄糖を含有する培養液に於て光がなくとも長く一様な生育を続け、Spirodela polyrhiza も短い日数ならば暗中で生育する\*\* から、光がなくても硝酸の還元並に同化が相当良く起ることがわかる。 しかし生育速度は光の下に於けるものより苦しく劣る 本研究に於ては Spirodela 及び Lemna の硝酸還元に光が直接影響するか否かを確め、又アンモニャ消費に対する光の影響も試験した。 但し光は電燈を用いたから紫外線を含まぬものである。

## 実 験 方 法

材料植物は主として Spirodela polyrhiza 及び Lemna valdiviana の純粋培養したもの\*\*\* を用い、一部の実験にはダリヤの葉を用いた。準備培養した植物は\*\*\*\* を培養液から取り上げ、蒸溜水で数回洗滌した後外部に附着する水を遮漑で除き、直ちに秤量し各測定に生体重量 0.6g ずつ用いた。 植物による硝酸、亞硝酸及びアンモニャの消費を見る実験には次の組成の混合液を用いた。 窒素化合物の 濃度 は NaNO3:

 $4 \times 10^{-3}$  モル, $NaNO_2$  及び  $(NH_4)_2SO_4:10^{-3}$  モル。 測定容器は 150 cc ビーカー又は圧護瓶を用いた。測定は 25°C の恒温槽中で行い,光にあてる場合は 100 ワット電燈で植物の直上約 25 cm の距離から照射し、 数線を遮るため光は水層を透してあてた。 暗に保つ

葡萄糖溶液 (1/10モル) 4 cc 燐酸緩衝液 (1/5 E ル, pH 6.0) 4 cc 試験窒素化合物溶液 2 cc 蒸 溜 水 10 cc

ものは黑布で蔽つて同恒温槽中においた。植物体内の初めの硝酸、亞硝酸及びアンモニャの含量は実験開始の時下記の方法によつて定量しておいた。測定時間は1時間とし、時限後植物体と外液とを分ち直ちに両者について目的とする窒素化合物を定量し、それらの消費量を算出した。植物体は蒸溜水で数回洗滌し、外部に附着する水を濾紙で除いた。 硝酸又は亞硝酸測定用のものは Ca(OH)2 を少量加えて乳鉢でよく磨碎し、CuSO4 (1/2 モル) 溶液 0.3 cc を加えてよく混合した\*\*\*\*\* 後蒸溜水を 19.2 cc 加え\*\*\*\*、 遠紙で濾過して透明な滤液を作つた。 その一部を用いて硝酸又は亞硝酸を定量した。 硝酸定量には phenoldisulphide 試藥を用い\*\*\*\*\*、 亞硝酸

<sup>\*</sup> Yamagata(12), Stickland(13) によれば大腸菌は硝酸還元が强いが亞硝酸を還元しない。

<sup>\*\*</sup> 吉村(14)。

<sup>\*\*\*</sup> 培養液の組成: NaNO<sub>3</sub> 0.14 kg. KH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub> 0.025 g, MgSO<sub>4</sub>·7 H<sub>2</sub>O 0.050 g, CaCl<sub>2</sub>·2 H<sub>2</sub>O 0.037 g, KCl 0.025 g, 葡萄糖 5 g, Fe, Mn 及び Mo 各 2×10<sup>-6</sup> モル, ヴィタミン B<sub>1</sub> 2 mg/l.

<sup>\*\*\*\*</sup> 植物は使用直前まで光の下で培養しておいた.

<sup>\*\*\*\*</sup> Emmert(15).

<sup>\*\*\*\*</sup> Spirodela 及び Lemna 社舎水量が多いから航動体中の水分を考慮して生体 0.6g に CuSO4 溶液 0.3 cc, 蒸溜水 19.2 cc を加えて作つた浸出液の全量を 20 cc と見做した.

<sup>\*\*\*\*</sup> この試薬は亞確酸によつても同じ呈色をなすか、それは確酸による景色の 10% 以下の强さに過ぎず、 日つ植物体の亞暗酸含量は硝酸に比較して少いから亞硝酸によつて生ずる誤差は無視して差支えない。

の定量には Gries-Romijin 試藥を用いた。 アンモニヤ定量の場合は Ca(OH)<sub>2</sub> を加えずに磨碎し、蒸溜水を加えて乳狀にして Folin 法によつてアンモニヤを低温蒸溜し、ネスラー試藥を用いて定量した。

Spirodela 及び Lemna は通常硝酸を相当多量含有するから,亞硝酸の還元を測定する場合には亞硝酸の定量と共に,硝酸が亞硝酸を経て消費されることを考に入れて硝酸の減量をも測定し,硝酸と亞硝酸の減量の和を還元された亞硝酸の全量と見做した。 アンモニヤの消費を測定する場合には同時に硝酸及び亞硝酸の消費量をも測定して参考とした。 なお硝酸,亞硝酸等を外液に加えない場合でも,植物体からそれが透出することがあるから,これらの測定は常に外液についても行う必要がある。

### . 硝酸及び亜硝酸還元と pH

前記の混合液の pH を種々変化して Spirodela 及び Lemna の硝酸還元に於ける pH の影響を見た。硝酸還元は第1表に示す如く pH 4.6~6.6 の範囲ではあまり差異がない。亞硝酸還元も同 pH では大体同様であることを確めた。しかし亞硝酸は pH 3.6 以下では吸收が促進されるが還元は却つて抑制され、その結果植物体内に蓄積される。

LL WA for the	to at		初の [NO'3]-N	i	還元された [NO' <sub>3</sub> ]-N (10 <sup>-2</sup> mg)							
材料植物					$(10^{-2} \text{ mg})$	pH	3.6	4.6	5.6	6.0	6.6	7.4
		植	物	体	9.34		0	0	0	0	0 -	-1.20
Lemna		外		液	11.20	į	2.24	3.74	3.74	3.74	4.20	2.60
			計		—		2.24	3.74	3.74	3.74	4.20	1.40
		植	動	体	0.76	_	0.20	0.21	0.18	0.24	0.24	0.25
Spirodela		外		液	11.20	İ	4.20	4.20	4.34	4.41	5.00	3.53
			計		<b>—</b>		4.40	4.41	4.52	4.68	5.24	3.78

第1表

註 測定はすべて 個ずつ行いその平均値をとつた。以下これと同じ。

#### 硝 酸 還 元

種々の培養条件の下で生育した Spirodela 及び Lemna を用いて硝酸還元に対する光の影響を見た。その結果を第2表に示す。

硝酸還元は殆ど光に影響されない。硝酸還元の度は植物材料によつて著しい差異があつて、 大体に於て生育狀態が良好のものは强いが、培養が古くなり多少窒素欠乏の微候を現わしたもの 又は Fe を欠くもの等に於ては著しく弱い。 生育良好で硝酸還元が强い Spirodela の培養を 使用前数日間暗中に保つ(培養液は葡萄糖含有)と、光の下に置いても硝酸還元が甚だ弱くな る。 しかしかかる材料に於てもアンモニヤを与えた場合、アンモニヤを相当良く消費すること を確めた。 暗中においたため代謝機能の上に変化が起つたと思われるが、これは硝酸還元に対 する光の直接の影響とは言われない。 なお Spirodela 及び Lemna は硝酸還元の際, 亞硝酸

第 2 表

第 3 表

植物材料		初の [NO'3] N	還元さ [NO'3]-N (		植物材料。		初の [NO/3]-N	還元 さ [NO'3]-N	
		(10 <sup>-2</sup> mg)	明	H.45			(10 <sup>-2</sup> mg)	明	造
	植物体	7.46	0 .	0		植物体	10.26	0 94	1.16
Lemna (生育良好)	外 液	11.20	3.36	3.92	Lemna (生育良好)	外 液	11.20	2.80	2.80
(THXXI)	計	_	3.36	3.92	(王自,赵刘)	計		3.74	3.96
	植物体	8.86	1.40	1.64	Lemna	植物体	3.58	-0.62	-0.46
Spirodela (生育良好)	外液	11.20	4.10	4.10	(稍古き)	外海	11.20	2.98	4.48
	計		5.50	5.74	(培 養)	計	_	2.36	4.02
Spirodela	植物体	4.66	0	0		植物体	11.44	0.46	2.34
(培養稍) 古,多	外 液	11.20	1.12	1.12	· Spirodela (生育良好)		11.20	2.56	2.56
少N欠人	計	_	1.12	1.12	(王月237)	計	_	3.02	4.90
	植物体	5.88	0	0		植物体	8.40	2.34	2.80
Spirodela (Fe 欠培養)	外 液	11.20	0.38	. 0.38	同上	外 液	11.20	2.80	2 80
(10人)	計		0.38	0.38		雷	-	5.14	5.60
*	植物体	8.64	0	0	Spirodela	植物体	12.60	1.16	2.80
Spirodela.	外 液	11.20	0.18	0.18	(葡萄糖)	外游	11.20	2.80	3.26
	計		0.18	0.18	\欠培養/	計	_	3.96	6.06

<sup>\*</sup> 生育良好のものを使用前4日間暗中に保つた。

の増加は甚だ少く、減少した硝酸の 1~2% 以下であり、場合によつては初めの含有量より却つ て減少することもあつた。 硝酸還元によつて生成された亞硝酸が速かに更に変化して同化の過程に進むものと見られる。

高等植物の実験に於て試験液を組織に浸潤させ、組織の各細胞に直接液を接触せしめてその吸收を容易にさせる方法(浸潤法)が屢々用いられる。前記の実験に於ては硝酸還元に対して光の影響が認められなかつたから、浸潤法によつて硝酸の吸收を容易にし、その還元に及ほす光の影響を試験した。

材料植物及び前記の混合液中硝酸塩溶液を除いたものを圧濾瓶に入れ强く減圧した後はけしく容器を振盪して植物体を液中に沈めながら空気を入れた。この操作を 2~3 回繰返すと細胞間隙が液で満されて組織が透明になる。Spirodela はこの方法によつて容易に液の浸潤を行うことが出来るが、Lemna では困難であるから、材料を成るべく小さな薄いパラフィン紙で包んで圧濾瓶に入れ、上記の操作を行つて液を浸潤させた後、ピンセットで包紙を開き全部の植物体が紙の上にあるようにした。 浸潤操作後硝酸溶液を加えて実験を開始した。 パラフィン紙はそのままおき時限硝酸の消費を測定する時に取り除いた。

先 す初に暗中で普通法と浸潤法とに於ける硝酸還元を比較した。その結果は Lemna に於ては初の硝酸含量は  $2.91 \times 10^{-2}$  mg( $NO'_3$ -N)で表す)であつて,還元は普通法では  $2.31 \times 10^{-2}$  mg( $NO'_3$ -N)、浸潤法では  $2.87 \times 10^{-2}$  mg( $NO'_3$ -N)で浸潤法の方が稍强いことが認められ

た。 しかし装置法による促進は単に備酸の透入が容易になるためでないかと言う疑問があるから、次に備酸含量が高い Lemna 材料を用いて外液に備酸塩を加えず、同様な測定を行つたが、それに於ては初の硝酸含量  $29.82\times10^{-2}\,\mathrm{mg}\,\mathrm{(NO'_3-N)}$ ,還元は普通法  $8.94\times10^{-2}\,\mathrm{mg}\,\mathrm{(NO'_3-N)}$ 、浸潤法  $10.98\times10^{-2}\,\mathrm{mg}\,\mathrm{(NO'_3-N)}$  で透入の問題と切り離しても、組織の液浸潤条件 が硝酸還元を促進することを認めた。

浸潤法を用いて光の有無に於ける硝酸還元を比較測定した。その結果を第3表に示す。 硝酸還元は光の影響を受けない場合もあるが光によつて明かに抑制される場合もある。これは培養条件によつて植物の栄養貯藏に差異があることに因るように思われる。

## 亜 硝 酸 還 元

Spirodela 及び Lemna の亜硝酸還元に対する光の影響を試験した。その結果を第4表に示す。

植物		初の* [NO'2]-N (10-2mg			HACT'S		(NO'2]-N	湿 心 含 ]NO'2]-N	
材料		(10 <sup>-2</sup> mg)	明	暗	材料		(10 <sup>-2</sup> mg)	明	頂査
Lemna 古音培達)	植物体	0.12	-0.07	-0.09	odela 培養,) N 欠)	植物体	0.03	0	0
が記録を	外 液	2.80	0.75	0.65	del 品品N	外 液	2.80	0.38	.0.38
Len	NO'3 L n	(2.42)	0.19	0.19	Tiro 小	NO'3 L n	(1.02)	0.28	0.28
一	計		0 87	0.75	Spirodela (稍古き 培養 多少 N 欠		_	0.66	0.66
Spirodela (生育良好)	植物体	0.17	-0.17	-0.10		植物体	0.31	0.14	-0.06
ode.	外 液	2.80	1.12	0.98		外 液	2.80	0.93	0.75
かが	NO'3 L y	(11.66)	0.18	0.18	同上	NO'3 L n	(0.90)	0	0
S	計	armed 1	1.13	1.06		司		1.07	0.69

第 4 表

重硝酸の還元は光に無関係の場合もあるが光にあてた方が稍多い場合<sup>③、□</sup> もある。 培養 条件によつて亜硝酸還元の强さに差がある。 浸潤法を用いても大体これと同様な結果が得られ た。

## アンモニヤ消費

Spirodela 及び Lemna を用いて光の有無に於けるアンモニャの消費\* を測定した。その結果を第5及び第6表に示す。

アンモニャの消費は光にあてた方が明白に多い<sup>(18)</sup>。消費の度は培養材料によつて差異があるが、硝酸還元に於いて見られる差異程著しくない。 浸潤法を用いても光がアンモニャの消費を促進することは同様に認められた。

<sup>\*</sup> 但し括孤内は初の NO'3 含量。

<sup>\*</sup> Hansteen<sup>(17)</sup> は Lemna minor にアンモニャ塩, アミド等と炭水化物を与え, 暗中で蛋白形成があることを証明した。

第 5 素

		初の含量	消費された量	1 (10 <sup>-2</sup> mg)
植物材料		$(10^{-2} \mathrm{mg})$	明	隋
	(植物体	1.96	-0.74	0
	[NH'4]-N 外 液	5.60	2.42	1.12
Lemna (生育良好)	青		1.68	1.12
	[NO'3]-N 植物体	2.42	0.18	0.18
	[NC'2]-N } 外	0.12	0.04	0.04
	/植物体	2.06	-0.66	-0.10
Spirodela (生育良好)	[NH'4]-N 外 液	5.60	3.36	1.50
	首		2.70	1.40
	[NO'3]-N	11.66	0.10	0.10
	[NO'2]-N	0.18	-0.60	0.60
	植物体	1.78	-2.34	-1.58
	[NH'4]-N / 外 液	5.60	4.30	2.98
Spirodela	計		1.96	1.40
(稍古き培養) 多少 N 欠)	[NO'3]-N ) 植物体	1.02	0.32	0.38
	[NO'2]-N } 外 液	0.29	0.03	-0.03
	(植 物 体	3.18	0.18	-0.38
	[NH'4]-N 外 液	5.60	1.68	1.12
	計	_	1.86	0.74
同上	[NO'3]-N ) 植物体	0.90	0.17	0.17
	[NO'2]-N 外 液	0.18	0.07	0.10

第 6 表

· = _ ī		初の含量	消費された量	(10 <sup>-2</sup> mg)
植物材料。		$(10^{-2} \text{ mg})$	明	貨
	植物体	2.33	0.10	-0.28
	[NH/J-N   外 液	5.60	2.42	1.22
Spirodela	[NH'4]-N {植物体 分液 計		2.52	0.94
(生育良好)		4.76	0.28	0.28
	[NO'3]-N	0.13	-0.01	-0.01
	(植物体	2,42	-0.94	-1.30
	「NH47-N M 液	5.60	2.98	1.63
Lemna	[NH'4]-N {植物体 外液 計	_	2.04	0.33
(稍 N欠)		0.56	0.10	0.18
	[NO'3]-N	0.24	0.07	0.13

## 無気条件の影響

細菌<sup>(19)</sup>, <sup>(20)</sup> 又は高等植物<sup>(16)</sup> の硝酸還元が無気条件で促進されることが知られ, 村上氏<sup>(21)</sup>は 酸素呼吸の中間物が硝酸一硝酸還元酵素系によつて酸化されると考えた。 硝酸還元が浸潤法に よつて促進されることは無気条件がそれを有利にするのでないかと思われ,又硝酸還元 が 光に よつて稍抑制されることは、光合成によつて排出される酸素の影響でないかと思われる。 アン モニャの消費が光によつて促されるのは、それがアミノ酸、蛋白質等の合成に用いられ、而して 蛋白形成が光によつて促進される事実によるものと思われる。 Mothes(22) によれば酸素欠乏は 蛋白形成を妨け且つその分解を促進する。Paech(23)によれば綠色植物に於ては光合成により酸 素圧が高まることによつて蛋白形成が促進される。Street(24)は高等植物の(窒素代謝についての 綜說中で蛋白形成は呼吸と密接な関係があり,酸化的脱アミノ作用を前提とすると述べた。

硝酸又はアンモニャの消費に対する光の影響が光合成によつて酸素圧が高まることに 帰因 するとすれば、これらの実験を空中で行う場合と、窒素ガス中で行う場合との間に差異があるで あろうと思われるから両者の比較を行つた。 植物材料及び混合液を圧濾瓶に入れ、排気した後 徐々に窒素ガスを通じ 無気状態 にして測定を開始した。 窒素ガスはなおその後 20 分間流通し た。対照は排気した後空気を通じて同様に処理した。これらの植物は下面に気孔を欠くから、こ の操作によつて 組織に液が浸潤することは 殆どない。 Lemna に於ては初の硝酸含量 10.92× 10<sup>-2</sup> mg (NO'<sub>3</sub>-N), 空中及び窒素ガス中に於ける還元はそれぞれ 2.55×10<sup>-2</sup> mg (NO'<sub>3</sub>-N) 及 び  $4.72 \times 10^{-2}$  mg  $(NO_3-N)$  であつた。即ち空素ガス中で還元が多かつた。又アンモニャにつ いては初の含量 2.34×10-2 mg (NH'4-N), 空中及び窒素ガス中に於ける消費はそれぞれ 2.52× 10<sup>-2</sup> mg (NH'<sub>4</sub>-N), 及び 0.94×<sup>-2</sup> mg (NH'<sub>4</sub>-N) で窒素ガス中の方が少かつた。

#### 黃 繊 化 植 物

暗中で培養し全く葉線素を欠く Lemna を用いて実験した(第7表)。 その結果によれば 硝酸還元は甚だ弱く、光の影響はなく、液浸潤又は窒素ガスによる無気条件の影響も明かでな

室 素 源		初の含量	消費された量 (10-2 mg)		
54. 5R V/A		$(10^{-2} \mathrm{mg})$	明	暗	
	植物体	11.26	-0.94	-0.74	
硝 酸	外 液	11.20	1.12	0.94	
	計	-	0.18	0.20	
	植物体	0.10	0	0	
亞 硝 酸	外 液	2.80	0.66	0.66	
	章	and the same of th	0.66	0.66	
	植物体	5.22	2.04	2.04	
アンモニヤ	外 液	5.60	3 86	3.84	
	計		5.90	5.88	

第 7 表

かつた。生育は光中で培養したものに比較しておそく、澱粉の含量が多い。 前記の如く Spirodela は数日暗中におくと硝酸還元が甚だ弱くなることを見たが Lemna に於ては数日暗中に おいてもなお還元能を相当保持しその低下には稍長い日数を要した。

亞硝酸及びアンモニャの消費は相当見られるが光の影響はなかつた。 普通法と浸潤法とに 於けるアンモニャの消費は前者  $1.88 \times 10^{-2}$  mg  $(NH'_4-N)$ ,後者  $0.94 \times 10^{-2}$  mg  $(NH'_4-N)$  で あり, 空中及び窓素ガス中に於ける消費はそれぞれ 2.04×10-2 mg (NH'4-N) 及び 1.12×10-2 mg (NH'4-N)であつてこれらの影響は綠色植物に於て述べたところと同様であつた。

# ダリヤの葉

Spirodela 及び Lemna に於て見られた硝酸, アンモニャ等の消費に於ける光の影響と同 様な関係が普通り高等植物の葉に於ても認め得るか否かを確めるために、ダリヤの葉を用いて 実験を行つた。葉は生長中の若い対生する一組のものを選び、葉片を中肋から縦に二分して比 校測定に用いて材料が均等になる様にした。各実験には生体重量 1g ずつ用い、測定法は前記 と同様にし、巣は上面を上にして通常液面に浮べた。その結果の一部を第8表に示す。

	初の [NO'3]-N	還元された [NO'3]-N (10-2 mg)			
	(10 <sup>-2</sup> mg)	明	暗		
植物体	35.94	18.20	21.00		
外 液	11.20	4.74	4.72		
	_	22.94	25.72		
植物体	44.80	9.34	21.28		
外液	11.20	2.98	2.34		
司		12.32	23.62		

第8表

光が硝酸還元を抑制することが見られた。亞硝還の還元は葉の硝酸含量が多くない場合に は光のある方が強いが硝酸含量が多い場合は還元された亞硝酸の全量、即ち硝酸及び亞硝酸の 減量の合計は光にあてた方が少かつた。葉の液浸潤又は窒素ガス中で硝酸還元が促されること は葉に於ても確め得た。

Spirodela 及び Lemna に於ては外液にアンモニヤ を与える時、 その消費が 光によって 促進されたが、ダリヤの葉は光の下においてもアンモニャ治費が殆ど見られないか、又は却つ て初の含量より増加した。殊に暗中におくと増加が著しかつた。之はアンモニヤが葉の有機窒 素化合物の分解によって形成されるためと思われる。葉に液を浸潤させるか久は窒素ガス中に おくと、アンモニャの形成が一層著しくなつた。トマト、エンバク等の若葉を用いて実験した結 果も同様であつて光のFにおいてもアンモニャ消費は殆ど見られないが、唯葉に水を触れさせ ず、濕室に保つて光をあてた時に葉内のアンモニヤが減少することを認めた。ダリヤ、トマト等 の葉は水生植物の Lemna 等と異り酸素欠乏に対し甚だ敏感なものと思われる。

### 総 括

(1) Spirodela polyrhiza 及び Lemna valdiviana の純粹培養したもの及びダリヤの若 **葉を用いて、短時間に於ける硝酸、亜硝酸及びアンモニャの消費に対する光の影響を試験した。** (2) Spirodela 及び Lemna に於ては硝酸還元が光に無関でのこともあり、光によつて稍抑制 されることもあつた。この差異は植物体の栄養狀態と関係があるように思われる。ダリヤの葉 に於ては。硝酸還元が光によつて抑制されることが明白であつた。(3) アンモニャの消費は Spirodela 及び Lemna に於ては光によつて促進された。ダリヤに於ては同じ条件でアンモニ ャの消費がないのみならず、却つて初の含量より著しく増加することがあつた。(4)亞硝酸の 還元は光によつて屢々促されるが、体内の硝酸含量が多い場合はこの関係が不明 叉は 逆になる ことがあつた。(5) 硝酸還元は組織に液を浸潤させること、又は窒素ガス中において無気条件 とすることによつて促進されるが、アンモニヤ消費はこれらの条件で逆に抑制された。(6) 黄 繊化した Lemna に於ては硝酸還元が甚だ弱く、光、液の浸潤及び窒素ガスによる無気条件の 影響は認められなかつた。しかし亜硝酸及びアンモニヤ消費は相当あつた。 亜硝酸及びアンモ ニャ消費に対し光の影響はないが、液の浸潤及び窒素ガスの影響は綠色植物の場合と同様に認 められた。(7)以上の結果から緑色植物に於て硝酸及びアンモニャの消費に対する光の影響は 直接でたく、光合成によつて組織内の酸素分圧が高まることによる間接の影響であつて、それに よつて硝酸還元は抑制され、アンモニヤの消費は促進されるものと思われる。

この研究に際して御指導を賜つた坂村教授に深く感謝致します。 なお本研究 は文部省科学 研究費の援助によつたものである。

#### Résumé

Nitrate, nitrite or ammonium salt was supplied to Spirodela polyrhiza and Lemna valdiviana which previously had been cultivated aseptically. They were placed partially in the light and darkness for an hour at 25°C, and then the consumed amounts of these nitrogen sources were measured. In some experiments leaves of Dahlia were also used.

In Spirodela and Lemna the nirate reduction was not influenced by the light in some cases, but it was inhibited tolerably in the other cases. These differences seem to be related with the nutritional condition in the plant bodies. In Dahlia such effect of the light was more remarkable. The consumption of ammonia was accelerated clearly by the light in Lemna and Spirodela. In Dahlia either consumption of ammonia in a small amount was recognizable or it accumulated more than their initial content, so far as the present method permited floating leaves on the surface of the test solutions. The nitrite reduction was accelerated by the light. If the content of the nitrate in the plant bodies was large, this relation, however, did not clearly appear. The nitrate reduction was accelerated by the imhibition of the liquid in the plant bodies, or in the anaerobiontic condition in the nitrogen gas, but the

ammonium consumption was retarded by the same treatments. In the etiolated *Lemna* plants the nitrate reduction was weak and no influence of the light, but the effect of the imbibition and the anaerobiontic condition appeared.

From the facts mentioned above, it is considered that the effect of the light on the consumption of nitrate and ammonia seemed not to be direct. The light may be regarded to rather increases the partial pressure of oxygen in the tissues as the result of photosynthesis and this is able to be beneficial to the consumption of ammonia, but to act unfaborably to the nitrate reduction.

### 文 献

(1) Pearsall, W. H. and Billimoria, M. C., 1939, Ann. Bot. N. S. 3, 601. (2) Bleckmann, G. E. and Templemann, W. G., 1940, Ann. Bot. N. S. 4, 533. (3) Dittrich, W., 1930, Planta 12, 69. (4) Burström, H., 1943, Ann. Agr. Coll. Sweden 11, I. (5) Suzuki, S., 1898, Bull. Coll. Agr. Tokyo 2, 409; 3, 241. (6) Nightingale, G. T. and Robbins, W. R., 1928, N. J. Agr. Exp. St. Bull. 472. (7) Warburg, O. and Negelein, E., 1920, Biochem. Zeit. 110, 66. (8) Baudisch, O. and Mayer, E., 1914, Zeit. f. Physiol. Chem. 89, 175. (9) Baly, E. C. C., Heibron, I. M. and Hudson, D. P., 1922, Journ. Chem. Soc. 121, 1078. (10) Sommer, A. L., 1936, Plant Physiol. 11, 853. (11) Burström, H., 1945, Ann. Agr. Coll. Sweden 13, 1. (12) Yamagata, S., 1937–38, Acta Phytochim. 10, 283. (13) Stickland, L. H., 1931, Biochem. Journ. 25, 1543. (14) 吉村プジ, 1944, 植物学雑誌 58, 15. (15) Emmert, E. M., 1929, Plant Physiol. 4, 519. (16) Nance, J. H., 1950, Plant Physiol. 25, 722. (17) Hansteen. B., 1896, Ber. deut. bot. Ges. 14, 362. (18) Loose, L. and Pearsall, W. H., 1933, Nature 81, 362. (19) Quastel, J. H., 1932, Nature 130, 207. (20) 村上技彦, 1950, 生化学 22, 147. (21) Mothes, K., 1933, Flora 128, 58. (22) Paech, K., 1934, Planta, 22, 794. (23) Street, H. E., 1943, Advanc. Enzymol. 9, 433.

# 甘藷の葉の涌発における気孔の効果について

# 永 井 淮\*

Susumu NAGAI: On the effect of stomata in the transpiration of sweet potato leaf.

気孔の分布やその開閉と通発との間に、はつきりした量的な関係を見出すことは、多くの 場合困難である。しかし甘藷の葉の通発においては、その强度と気孔の動きとの間に若干の注 日すべき関連が見られる。

A 気孔の分布とその開閉 材料は畑に植えた紅赤品種である。気孔の数,大きさ,分布等 を夢上の色々の位置の葉についてしらべたが、1 mm<sup>2</sup> 当りの気孔数は第1表の通りである。番

Leaf No.  $B_1$  $B_3$  $B_5$  $B_7$  $B_8$  $B_9$  $B_{10}$  $B_{15}$ 70 Upper 199 142 42 39 41 38 40 Lower 332 286 208 130 120 124 120 120

Table 1. Number of stomata per mm<sup>2</sup> on various leaves.

号は開いた葉につき、小清永及西田3)と同じ基準によつた。B<sub>10</sub>以後の葉では分布はほほ一定に なる。最も盛んに機能を営むと思われる B<sub>15</sub> では、孔隙の長さ 19.5 μ 気孔の平均距離は上面 で 113.4 µ, 下面で 70.5 µ となる。孔隙の向きは互に関係がない。

開孔度の測定は Stalfelt<sup>6)</sup> の方法により\*\*2枚のサンプルにつき計20個の平均値をとつた。 測定には毎回約4分かかつた。 若い葉では個々の気孔による差が港だしいが、B10 以後になれ ばよく揃つて開閉する。一方一節ずつに切つて、Tottingham 液で水耕して根の出たもの、及 種藷をつけたまま鉢植えにして伸ばした蔓についても気孔の動きを見た。 その結果は第2表に 示したが、炯の正常な材料(図を参照)に比べて甚だ鈍い動き方である。 どうしてこのように 鈍いかは、よく分らないが、局所的な膨圧関係や水分平衡だけでは気孔の動きが決定されない ことを示すものと思われる。 畑の材料では、圏の気孔の線に示す通り、当時の夏の晴天下で大 幅に開閉する。大きく開いているものを、流動パラフィンでおおうか濕度飽和の器中に入れる かすれば、30分位そのままに保てるが、切り放しにすれば5分後には閉じてしまう。しかし4μ 以下のものでは閉じ方がおそい。これは通発と関連して後にのべる。

 $\bf B$  通発と気孔 色々の場合において、気孔の開きが大きければ大体 通発强度( $\it T$ 、 $\gamma/cm^2$ sec.)も、又気象蒸発係数  $\kappa \rho$  に対する比値( $T_r$ )も大になる。これらの算定基準は郡場 $^{1a,1b,2}$ によるものであるが、そのうち注目すべき点は次の様な場合である。

<sup>\*</sup> 大阪市立大学理工学部

<sup>\*\*</sup> 但し一定位置から約 2 cm 角の片を切りとり,表皮をはぎとらずに直接検鏡する。

Table 2. Daily fluctuation of stomatal aperture in pot- and water culture.

	Pot cu	lture		Water culture					
Up	per	Lo	wer	Up	oper.	Lower			
Time	Aperture	Time	Aperture	Time	Aperture	Time	Aperture		
7.40	1.0	7.46	0.6	7.50	1.0	7,53	0.7		
8.40	2.2	8.46	1.1	8.50	1.3	8.55	1.0		
9.40	` 2.1	9.45	1.0	9.48	1.6	9.52	1.4		
10.40	2.7	10.43	1.8	10.47	2.0	10.50	1.9		
11.40	2.0	11.45	1.3	11.47	1.9	11.50	1.7		
12.48	1.4	12.53	1.2	12.56	1.6	13.00	1.4		
13.40	1.9	13.47	1.7	13.50	1.7	13.53	1.3		
14.40	1.0	14.43	1.2	14.46	2.1	14.50	1.2		
17.52	1.0	17.56	0.3	17.58	0.4	18.00	0.3		

Aperture: in p.

a 切り離した葉の通発経過 トーションバランスを使つて、切断後1分おきに毎回5秒以内に終る様に通発を測り、Tとして算出すると第3表の様になる。始めの通発量度が大きいと、その强度を約1分保つが、その後は殆んど直線的に低下していく。 始めの量度が小さいときは低下の度が小さく、時にはかえつて増大する。切断後気孔の閉じる運動は、開孔度、葉の含水量、及びそれらが低下していく連さの影響が組合つて、Stålfelt7のいう受動反応叉は水能動反応を起すものと思われ、急激な失水によつて開く場合も見られた。

Table 3. Transpiration of excised leaf after cutting: Each measurement was finished within 15 seconds.

	Sample		Ti		Stomatal aperture at the				
	No.		2	3 ·	4	5	6	7	beginning (µ).
	1	4.7	4.7	3.5	2.2	1.0	0.5		6.3
T	2	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	3.0	1.5	4.1
1	3	1.0	1.7	1.3	1.1	1.0			2.2
	1 4	0.9	1.3	0.4	0.4	0.5			2.1

T: Intensity of transpiration in  $\gamma$  per cm<sup>2</sup> sec.

b クチクラ通発 A における水緋の材料と同じものを, 予め 48 時間暗室においた後通発 を測つた。気孔は完全に閉じている。T は  $\kappa \rho$  が変つても大して変らず、従つて  $T_r$  はかなり 変動する。 クチクラの水透過性が低下するほど極端な条件下ではないのに, クチクラ通発と気 象条件との関係は、気孔開度一定のときの気孔通発と後者との関係に比べて異つている。(第4 表参照)

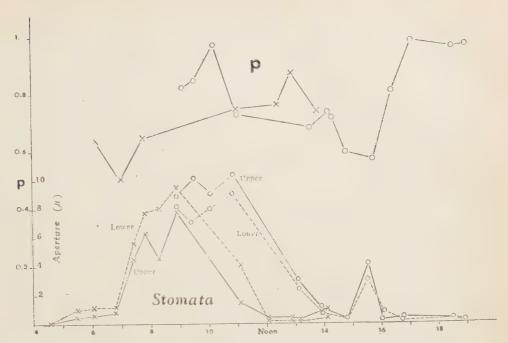
Table 4. Cuticular transpiration of water-cultured leaves under various atmospheric conditions of dark room. Stomata, completely closed.

Sample	Measure- ment No.	T	Tr	t	$\triangle t$	κρ
A	1	0.172	0.147	19.9	2.8	1.20
A	2	0.172	0.144	19.6	2.9	1.22
В	1	0.141	0.128	20.4	2.5	1.10
В	2	0.136	0.035	32.1	58	3.84
С	1	0.123	0.114	20.6	2.4	1.07
С	2	0.140	0.039	31.7	5.4	3.56
D	1	0.124	0.055	22.8	4.7	2.13
D	2	0.139	0.039	29.6	6.0	3.52
D .	3 ·	0.155	0.040	30.0	6.5	3.80
E	1	0.194	0.087	22.8	4.7	2.13
E	2	0.213	0.061	29.6	6.0	3.52
Е	3	0.184	0 048	30.0	6.5	3.80

T: Intensity of transp. in  $\gamma$  per cm<sup>2</sup>. sec. Tr: Quotient  $T/\kappa \rho$ . t: Air temperature in  ${}^{\circ}C$ .  $\triangle t$ : Depression of wet bulb thermometer.

C 葉の上下面の通発の比較 コバルト紙法で Livingston4) の標準色 No. 2 と No. 3 の 間を通過するに要する時間 (t) を測り、上面  $(t_u)$  と下面  $(t_l)$  の逆数の比即ち  $t_l/t_u$  ( $\equiv$  $\mathbf{p}$ ) を もつて、両面の通発の比値とした。 この方法ならばコバルト紙法について言われている難点は 大体相殺される。t は 4.6-17.4 秒であつた。測定は7月の晴天下で. 畑の材料の原則として B<sub>15</sub> の薬を使つたが、その結果は図における p の線である。 同時に測つた気孔の動きを見ると、そ の経過は上面と下面及び 6 日と 10 日とで少し差がある。 p は開孔度よりも小変動が多いが 0.49-1.0 であつて、この値は常絲濶葉などよりもかなり大きい。 各時刻における通発を同時に 測ることは出来なかつたが、同じく7月上旬の晴れた日にトーションバランスで葉一枚宛の短 時間測定を行つた所、11時頃最高に達し 14-15 時の間に一度急に低下し、又少し增大し夕刻か ら夜間にかけてはごく低いことがわかつた。

D 考察 葉の両面による通発の比値 p を見ることによつて、通発における気孔の効果を



Fluctuation of  $\mathbf{p}$  in relation to stomatal opening under normal field conditions on July 6th,  $-\bigcirc$ ; and July 10th,  $-\times$ .

多少なりとも分析することが出来そうである。Aにのべた  $B_{15}$  の葉において,気孔数を 1 mm² 当り下面 120,上面 40,孔隙の長き (l) が両面共  $19.5\mu$ ,気孔の平均距離 (d) が下面で  $70.5\mu$  の場合に,色々の開孔度 (b) における平均孔径  $(m=\frac{b+l}{2})$  と,d/m (=n) とは第5表の様になる。多孔薄板を用いた Seybold<sup>5)</sup> の実験によれば,各孔からの拡散流は n<6 になると 五に干渉し始めて孔面積の増大による効果は低下するという。下面では  $4\mu$  において n=6 になるが,上面では  $14\mu$  でもまだ n=6.8 である。実際には少し差があるが,簡単にするために両面の開孔度が同じ経過で変動するとすると,下面の方が気孔が多いから大体において p<1である。開孔度の増大と共に気孔の効果が増大する場合には p は減少していく。 更に大きく開いて,下面における効果が低下し始めると p は増大に転ずるから,その極小の点において転換が起るということがわかる。 図中 7 月 10 日 7 時及び 6 日 16 時少し前に 現われる p の極小に

Table 5. Variation of m and n in relation to stomatal aperture.

1	Α		0.6	7	2.	3	4	6	8	10	12	14
	Aperture			10.0	10.7	11.2	11 7	12.7	13.7	14.7	15.7	16.7
			10.1	10.2		11.2	0.7		82	77	7.2	6.8
	n	Upper	11.3	11.1	10.6	10.1	9.7	8.9		1-1	-	4.0
	11	Lower	7.0	6.9	6.6	6.3	6.0	5.6	5.1	4.8	4.5	4.3

Aperture: in  $\mu$ . m: mean pore diameter in  $\mu$ . n: mean pore distance/m,

対応する開孔度は  $3.5-4\,\mu$  で、下面における  $\mathbf{n}=6$  となり、多孔薄板の実験とよく一致する。一 方開孔度が極大のときに上面における気孔の効果がなおも増大しているならば、p は極大を示 す筈であるが、実際は開孔度は大して変らないのに p は変動している。これは上面における気 孔の効果が低下し始めているか、又は下面における通発が気孔以外の要素によつて変動してい るかのどちらかで、いづれにしても通発に対して気孔が律速的でない。実際に上面下面共 4-10μ のときに p はかなりの変動を示しており、後者の場合に当つていると思われる。

切断後における失水及び気孔の動きについて測定した結果をとり入れて考えると、日中盛 **んな通発の**ために含水量が低下して水能動反応により閉じていくが、その動きは 切断した薬の 場合よりもゆるやかである。 所が日盛りにおける気孔と p の動きは 6 日, 10 日共に気孔は全 閉に近いのに p は1よりかなり小さく又時間的にずれている。 開孔度が 4 µ 以下になる所で p は増大に転じているとはいえ、その極大は1よりもかなり小さい。 これらの点で先にのべた 考察と一致しないが、ここに 考慮すべきものは葉の水分平衡で、これが通発及び 気孔 の動きに 大きな影響を及ぼすと考えられる。事実、含水量は飽和狀態で葉片部の乾量に対して650-710%、 14 時過ぎに强く凋萎したときには 470-500% を示す。 かかる場合には初発凋萎の問題は言う に及ばず, 充分な含水量及び補給のあるときと異なるのは当然である。 叉觀察によれば 7 月 10 日には早くから凋萎して仲々回復しなかつたが、6日にはそれが軽かつた。これらの点から、前 にのべた論議は葉の水分平衡が良好な場合に限定されることになる。

気孔通発とクチッラ通発を両面について夫夫 Ts, Tc, (u は上面, t は下面を示す), 全通 発を T とすると

$$T = T_s + T_c$$
 (1)  $p = \frac{T_{s.u} + T_{c.u}}{T_{s.l} + T_{c.l}}$  (2)

 $T_s$  が両面共 0 のときは  $T_{c,l} = T_{c,l}$ ,  $\mathbf{p} = 1$  であるが、 $T_c$  は  $T_s$  に比べてその値は小さい。  $T_s$  が増大すると気孔面の表皮上の飽差は減少し、 $T_c$  もまた低下すると考えられるから  ${f p}$  は単 に (2) 式から考えられるよりも  $T_{s.u}/T_{s.l}$  を更によく反映する。 反対に  $T_s$  が小になると  $T_{c.u}/T_{c.l}$  がはつきり出て来るのであつて、p における  $T_{s.u}/T_{s.l}$  と  $T_{c.u}/T_{c.l}$  の重要度が 入れかわる境日は図中6日17時頃気孔が閉じかけて開孔度が0.6 μ 前後になり、p が急に増大 して1に近づく点であろう。 気孔開度の突動が通発の変動に著しい影響を及ほすのは 0.6-4 μ の範囲内であると推定される。

Stalfelt8)が下面だけに気孔のある葉について実測考察した所は正しいものであるが、他の 中性乃至濕生的植物についても、ここにのべたやり方を適用して、開孔度と p の動きを中介と して気孔の効果を所与の条件下で検出することが可能になると思われる。ただしこれはまだ手 掛りだけで,多くの制約が作つている。

終りに京都大学の郡場名譽教授並に芦田教授の御指導に対して厚くお礼を中上げる。 又文 部省科学研究費の援助をも受けたものである。

#### Summary

Some attempts were made on the sweet potato leaf to see the quantitative relation between transpiration and stomatal opening. Transpiration from the upper surface of the leaf  $(T_u)$  was compared with that from the lower surface  $(T_l)$  by the cobalt paper method. The ratio  $(\mathbf{p})$  of  $T_u$  to  $T_l$  fluctuates from 0.49 to 1.0 in close relation to stomatal opening.

When the stomata open widely,  $\mathbf{p}$  may represent more nearly the ratio of stomatal transpiration of upper surface to lower as cuticular transpiration is lowered in this case. Provided that stomata of both surfaces behave equally,  $\mathbf{p}$  should decrease as stomatal transpiration increases due to widening of the aperture. When further opening does not bring about so much increase in the transpiration as before,  $\mathbf{p}$  may begin to increase inversely. Thus the stomatal aperture  $4\mu$ , which was observed at the minimum of  $\mathbf{p}$ , seems to be the limit above which the change of stomatal aperture has less influence on the transpiration of the sweet potato leaf. When stomatal transpiration becomes extremely lowered,  $\mathbf{p}$  may imcrease to approach 1. And it is found that  $0.6\mu$  is the limit below which the stomatal aperture have little effect on the transpiration.

The above mentioned role of stomata in transpiration may hold good only when the water content is sufficient, for **p** appeared lower than to be expected when the leaf wilted in the afternoon.

#### 文 献

1a) 郡場 寛、静気中の蒸発 II 植及動 6:1811, 1938. 1b) — , 同 IV 同誌 7:334, 1939. 2) , 蒸発と通発との比較 同誌 8:1, 1940, 3) 小清水卓二、西田 緑、 甘藷蔓苗の体 内拡散型生長素の動静と結ぎとの関係 植雑 62:146, 1949. 4) Livingston, B. E., Foliar transpiring power: Its estimation by means of standardized hygrometric paper slips. Bot. Mag. Tokyo 51:407, 1937. 5) Seybold, A., Die pflanzliche Transpiration. Ergebn. Biol. 5:29, 1929. 6) Stälfelt, M. G., Neuere Methoden zur Ermittelung des Öffnungszustandes der Stomata. Handb. Biol. Arbeitsmeth. Abt. XI Teil. 4, 1929. 7) — , Die Abhängigkeit der Spaltöffnungsreaktionen von der Wasserbilanz. Planta 8:287, 1929. 8) — , Der stomatäre Regulator in der pflanzlichen Transpiration. ibid. 17:22, 1932.

# ムラサキツユクサの染色体螺旋(予報)\*

## 稻田朝 次\*\*

Asazi INADA: The meiotic chromosome spirals of *Tradescantia* paludosa (n=6). (A preliminary note.)

ムラサキツユクサの染色体螺旋構造に関しては、Nebel ('32, '37)、Kuwada ('35, '38)、Toyohuku ('38, '39) その他の報告がある。それらは、みな減数第一分裂中期の一価染色体、二価染色体又は四価染色体の螺旋構造を取り扱い、その螺旋化の機構を考察している。 筆者の觀察せる Tradescantia paludosa (n=6) では、減数第一分裂中期で大部分の二価染色体が未端キアズマによつて対合しており、介在キアズマによつて二価染色体となつている場合や、一価染色体となつている場合は少い。 その中で、筆者は末端キアズマを有する棒狀二価染色体に着目し、動原体を中心にして、キアズマを有しない染色体腕(第1図、IとIV)と、キアズマを有する染色体腕(第1図、IIとIII)の部分にわけ、螺旋の方向を統計にとり、従来とは異る結果を得た。

花粉母細胞をなすりつけ、KC10.28 モル溶液にて 45 秒前処理、酷酸カーミンで染色した標品によって観察を行つた。

全染色体が一個染色体となつている1細胞と、例外的に一個染色体をふくむ10細胞とから一個染色体の螺旋方向についての統計をとつた。動原体を境にした各腕の螺旋方向は、第1表の如くで、觀察数のうち(1)は全染色体が一個染色体よりなる1細胞より、(2)は例外的に一個染色体をふくむ細胞より得られたものである。Rは右卷き、Lは左卷き、一は動原体、・は末端キアズマを示めす。

末端キアズマを有する棒狀二価染色体は、従来と同様、個々の構成染色体にわけ、そのおのおのの動原体を境にした各腕の螺旋方向の組合せは、第2表のようである。

この棒狀二価染色体を,更に第1図に示すように, キアズマを有しない腕の組(第1図 I E IV) E , キ アズマを有する腕の組(第1図, II E III)にわけて, 染色体螺旋方向をみると,第3-4 表の如くである。

螺旋形成の仕方には、大別して従来2つの考え方があり、染色糸と 染色体基質 をともに考えるものと、染色糸のもつ内部的な力だけを考える、いわゆる分子

第 1 表 一価染色体の螺旋構造

卷き方	観 (1)	察 (2)	数計	期待数
R-R	3	6	9	8.5
R-L	7	11	18	17.0
L-L	2	5	7	8.5
計	12	22	34	34.0

 $x^2 = 0.352$ 

<sup>\*</sup> 本研究は文部省科学研究費による芳賀教授の研究(減数分裂の機構)の一部をなすものである。

<sup>\*\*</sup> 九州大学理学部生物学教室

第2表 二価染色体を構成せる 染色体別の螺旋

巻き方	観察数	期待数
R-R	19	27
R-L	63	54
L-L	, 26	27
計	108	108

 $x^2 = 3.87$ 

第3表 キアズマのない染色体 腕の螺旋

卷き方	観察数	期待数
RR	12	13.5
RL	24	27.0
LL	18	13.5
	54	54.0

 $x^2 = 2.0$ 

第 1 図 棒狀二価染色体の螺旋構成単位 I, II, III, IV は染色体の各腕, T.X. は末端キアズマ, K は動原体を示めす。

#### T.X. III K IV

第4表 キアズマを有する 染色体腕の螺旋

卷き方	-R•R-	-R•L-	-L·L-	計
観察数	5	43	6	54

螺旋説とである(Waddington '39)この研究において、一価染色体の螺旋方向は各染色体の腕 ごとに全く機械的に自由であることがわかつた(第1表)。この事実は螺旋形成が、分子螺旋説 が仮定するように、動原体を境にして異なる方向にはたらく染色体の内部的力によって生ずる ものでないことを示す。

末端キアズマを有する棒狀二価染色体は、個々の構成染色体にわけて、動原体を中心にそ の螺旋方向を見ると、両腕とも自由に螺旋をまいていると考えた期待値によくあうように見え る (第2表)。 キアズマを有さない腕の組 (第1図, I と IV) は、全く自由に螺旋をまいてい るように考えられる (第3表)。 キアズマを有する腕の組 (第1図, II と III) の螺旋方向は, 第2図 a に示すように、末端キアズマの部分で逆旋をおこしている組合せが圧倒的に多い。 (第4表)。

このように末端キアズマを有する腕が、そのキアズマの部分で螺旋方向の逆旋を生じてい ることは、Matsuura ('41) が中期まで動原体が対合している Trillium の未端キアズマをも



第2図 a,末端キアズマを有する棒状二価染色体,b,介在キアズマを有する棒状二価染色体, r は右巻き、1 は左巻き、K は動原体、T.X. は未端キアズマ、I.X. は介在キアズマを 示めす。×ca. 1400

つ場合に見た螺旋構造と同様である。 このことは、ムラサキツユクサでは中期に既に動原体が分離していることと関連して、興味ある事実である。介在キアズマを有する二価染色体では、動原体とそのキアズマの間で、 第 $2 \boxtimes b$  に示すように螺旋方向の逆旋をおこしていることは、上記の末端キアズマを有する染色体腕の螺旋構造とともに、螺旋化の機構を考える手がかりになるものである。

本研究をなすにあたり、材料は京大教授木原均先生よりいただいたものである。 木原先生 に心から御礼申し上げると同時に、直接研究を御指導下さいました 九大教授芳賀忞先生に感謝 致します。

## Summary

The spiral structures of univalents and rod-shaped bivalents were studied in *Tradescantia paludosa* (n=6). In univalents the directions of spirals of the arms are independent across the kinetochore. The spiral structures of rod-shaped bivalent are somewhat different from that of the univalents. The directions of spirals in free arms distal to kinetochores are independent of each other, but arms forming a terminal chiasma are coiled in compensating directions.

#### 文 献

Darlington, C. D. (1935). Proc. Roy. Soc. Lond. Ser. B, 118: 33-96. Kuwada, Y. (1939). Cytologia 6: 17-32. — (1938). Cytologia 9: 17-22. Matsuura, H. (1941). Cytologia 11: 407-428. Nebel, B. R. (1932). Zeits. Zellf. mikr. Anat. 16: 285-304. — (1937). Amer. Jour. Bot. 24: 365-372. Toyohuku, T. (1938). Jap. Jour. Genet. 14: 291-292. — (1939). Jap. Jour. Genet. 15: 310-312. Waddington, C. H. (1939). Amer. Nat. 75: 300-314.

# 産類数種の染色体 II

# 矢野 差二\*

Koji YANO: On the chromosomes in some mosses II.

筆者は先の報告(1951)に続き、新たに5科11属15種の蘚類について核学的研究を行った。 特にこれ等のうち Rhytidiadelphus 国に於ては特異な染色体数の増加関係が見られたので、以下それ等の結果について報告する。

研究に用いられた 15 種の植物名並にそれ等の採集地は第1 表に示す如くである。なお固定並に染色法は概ね第1 報と同様であるが,更に醋酸オルセインによる染色も併用した。 その方法は Tjio & Levan (1950) 両氏の技法を用い好結果が得られた。

# I. Rhytidiadelphus 属に見られる特異な染色体数の增加

筆者の觀察した Rhytidiadelphus 国 2種の染色体数及びその核型は次の如くである。即ち

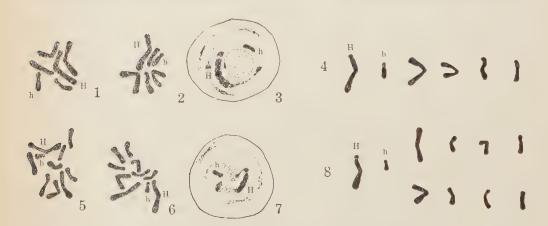
Rhy. triquetrus n=6=V(H)+2V+J+l+m(h) Fig. 4 Rhy. calvescens n=10=V(H)+4V+2J+2l+m(h) Fig. 8

既に蘚苔類では異質染色体は屢々他の普通染色体とは異る性質を有し、蘚苔類で従来知られた性染色体は例外なく異質染色体であり、又二三の苔類(Marchantia polymorpha、Haupt 1932. Calobryum rotundifolium、辰野 1935)では異質染色体のみ増加した異数体も觀察されている。 そこで筆者の calvescens の場合も異質染色体のみがその特異性から倍数体に於ても倍加しなかつたものではないかと思われる。 もしかかる事実が異質染色体をもつた他の倍数体に於ても見られるならば、倍数体に戻ける異質染色体の新たな一特異性として興味があることで、これは更に今後の研究によつて明らかにしたいと思う。

<sup>\*</sup> 新潟大学高田分校

### 第 1 表 (Table 1)

染色体式 (Chromosome) formulae	採集地 (Localities)
n=10=H+h+8	越後:高田市
n=11=H+h+9	越後:妙高山
n=11=H+h+9	越後:妙高山
n=11=H+h+9	越後:高田市
n=11=H+h+9	越後:青海黑姫山
n = 7 = H + h + 5	越後: 燒山
n = 7 + H + h + 5	信濃:駒ヶ岳
n = 10 = H + h + 8	越後:青海黑姫山
n=10=H+h+8	越後:高田市
n = 10 = H + h + 8	信濃:戶隱山
n = 10 = H + h + 8	信濃:八ケ岳
n = 6 = H + h + 4	信濃:八ヶ岳
n=10=H+h+8	越後: 雨飾山, 南集山
	日存意知口
n=12=H+h+10	信濃:戶隱山
n=12=H+h+10	信濃:八ヶ岳
	Chromosome formulae  n=10=H+h+8 n=11=H+h+9 n=11=H+h+9 n=11=H+h+9 n=11=H+h+5 n=7=H+h+5 n=7+H+h+5 n=10=H+h+8



Figs. 1-8. Rhytidiadelphus 属 2 種の染色体と異常凝縮. (Metaphase chromosomes and heteropicnosis of Rhytidiadelphus studied.) 1, 2, 3, 4. Rhytidiadelphus triquetrus. 5, 6, 7, 8. Rhy. calvescens. × 2500.



Figs. 9-34. 蘚類数種の染色体と異常凝縮. (Metaphase chromosomes and heteropicnosis of mosses studied.)

9,10. Bryum pallescens. 11,12. Rhodobryum gigant um. 13,14. Rho. roseum. 15,16. Entodon chloroticus. 17,18. E. flacidus. 19,20. Pseudoscleropodium purum. 21,22. Pleurozium Schreberi. 23,24. Hypnum fujiyamae.. 25,26. H. plumaeforme. 27,28. Breideria pratensis. 29,30. Ptilium crista-castrense. 31,32. Hylocomiastrum pyrenaicum 33. 4. Hylocomium proliferum. × 2500.

# II. その他 4 科の蘚類の染色体

第1表に示す如く、前記 Rhytidiaceae の他筆者は Bryaceae, Entodontaceae, Hypnaceae, Hylocomiaceae の 4科 10 属 13 種の染色体の觀察を行つた。それらの染色体数は属によって一定であり、又科によつてもほほ一定の傾向が見られる。 これに類似の事実は第1 報に報告した場合にも見られた。なおこれ等のうち Rhodobryum giganteum n=11 は下斗米、小山(1932)、Ptilium crista-castrense n=10 は栗田(1937)の算定結果を再確認したものである。

次にこれ等の種はさきの Rhytidiadelphus の場合と同様,何れも H 及び h をそれぞれ 1 個ずつ併有する。H は常に一核申最大で 2 個の狭窄が明瞭に認められる。この H は前期の核中で異常凝縮を示すが、それは各 H 染色体の全部ではなく一部は分散する。H 染色体上のこの分散する部分は種によつて一定であり亦科によつて一定の傾向が認められる。即ち或るものでは狭窄の部分のみ、他のものでは狭窄部のほかに染色体の一端の部分も分散する。前者の場合は Bryaceae に於て、後者の場合は Rhytidiaceae 及び他の 3 科に於て観察された。

上述の如く筆者の觀察した蘚類では常に H 及び h を併有するが、同様な事実は既に多くの苔類(展野 1941)及び蘚類(展野 1951,矢野 1951)に於て知られていることであつて、この事実は蘚苔類に共通な核学的特性であろうと云うことが本研究により一層明らかとなつた。

#### Résumé

- 1) 15-species of the mosses were investigated cytologically with special reference to the chromosome number and the heterochromosome. The results obtained are shown in Figures 1–34 and Table 1.
- 2) In every species studied by the present writer, it has been observed that the largest (H) and the smallest (h) chromosomes are the heterochromosomes, and the number of which was constant in the mosses belonging to the same genus. These facts correspond with what was described in the series 1 of the present paper and what Tatuno reported on many liverworts (1941) and some mosses (1951).
- 3) It is a remarkable fact that while *Rhytidiadelphus calvescens* has two sets of autosomes which are similar in shape to those of *Rhy. triquetrus*, both species have only one set of heterochromosomes consisting of H and h. Their karyotypes are as follows.

Rhytidiadelphus triquetrus n=6=V(H)+2V+J+l+m(h)Rhy. calvescens n=10=V(H)+4V+2J+2l+m(h)

#### Literatur

- Haupt, G., 1932. Beiträge zur Zytologie der Gattung Marchantia (L.) 1. Zeit. f. induk. Abst. -u. Vererbungsl. Bd. 62:367-428.
- Kurita, M., 1937. Geschlechtschromosomen und Chromosomenzahlen bei einigen Laubmoosen. Zeit. f. induk. Abst. -u. Vererbungsl Bd. 74: 24-29.
- Shimotomai, N. und Koyama, Y., 1932. Geschlechtschromosomen bei *Pogonatum inflexum* Lindb. und Chromosomenzahlen bei einigen anderen Laubmoosen. Journ. Sci. Hiroshima Univ. Ser. B. Div. 2, Vol. 1:95-101.
- 辰野誠次, 1935. マルバコマチゴケに於ける Hyper haploid 植物の一例並に二分胞子の形成. 植物学雑誌. Bd. 49:892-898.
- Tatuno, S., 1941. Zytologische Untersuchungen über die Lebermoose von Japan. Jour. Sci. Hiroshima Univ. Ser. B. Div. 2, Vol. 4:73-187.
- 辰野誠欠, 1951. 蘚類の染色体特にその異質染色体について I. 染色体. Bd. 8:305-310.
- Tjio, J. H. and Levan, A. 1950. The use of oxyquinoline in chromosome analysis. Anales de la Aula Dei, 2 (1): 21-64.
- 矢野孝二, 1951. 蘚類数種の染色体 I. 植物学雑誌 Bd. 64:234-237.

# 速 報 岩波洋造\*: 花紛の生理学的研究 [III] (花紛管の伸長について)\*\*

Yozo IWANAMI: The physiological researches of the pollen [III]. (On the growth of the pollen tube.)

統治の不和合現象における East(1) 及立安田氏(2) の所謂特殊物質説は、花粉の生理、特に花粉管の伸 長性の面よりの点判をまだ受けていない。 以下はこの目的で行われた実験の1部である。

- (1) 花粉管の伸長部 花粉管の伸長が先端近くで行われることについては、原形質が先端へと進むこと $^{(3)}$ などから想像され、又伸長機構の仮説も考えられているが、実験的証明は 極めて不充分である。筆者は Lilium longiflorum Thunb の花粉管を用い、先に報じた  $2\cdot 4$ - $D^{(4)(5)}$ により管に突起を作りこれを指標として管の伸長を調べ、それが先端でのみ 行われていることを確めることができた。即ち第1回は 0.0005% の  $2\cdot 4$ -D を含む蔗糖塞天板上で伸長する花粉管を5分毎に転写したものである。 なお、花粉管の先端近くでは生長期の細胞の如く原形質が充満し、基部では老細胞の如く大きな液胞をもつていること、管中に callose plugs が形成されても管の伸長は行われることなどの現象は、同時に先端伸長の裏付けとなるであろう。 次に花粉の原形質が、花粉管膜を形成し得ることについて 2つの実験結果を得た。
- (2) 新たな花粉管の形成 庶糖寒天板 (0.29 mol sucrose, 2% Agar) 上で発芽した花粉管を 0.33 mol sucrose 液中に移すと生長を停止して 1 時原形質分離を起した花粉管は 30 分後完全に復帰する。(Osmoreglation が助けとなつている。) これを 0.29 mol sucrose 液中に移すと、この時既に先端部即ち軽さつの周囲に厚い膜を形成している為に、0.29 mol に移された後、花粉管は第2 図の如く管膜の 1 部分が破れてそこから新たに生じてくる。 常に管の先端に存在する軽はは管の伸長時、急速な管膜形成の必要性と、生長を止めた時、短時間中に上述の如く厚い膜を形成したことから考えて、花粉管が伸長している時、先端において原形質の吐出を防ぐと共に管膜形成の役割りをしていると考えられる。
- (3) 游離原形質の管膜形成 帽体は原形質塊である。原形質が自身で膜を形成し得るや否やを確かめる為、應糖寒天板上で発芽させた花粉管より原形質分離法により、原形質の一部を管外にとり出し、0.29 mol sucrose 液 (27°C) 中で培養した。10 時間後 0.45 mol sucrose 液によって原形質分離させると、周囲に明かに花粉管膜と同質の新たな膜を形成した。(第3図)



以上は花粉管の仰長が第4図の如く先端のみで行われること、及びその仰長が、先端における 新たな膜の形成であることについての実験的な証明である。 有盆な御意見をいただいた故安田貞雄博士, 三輪知雄 教授に深く感謝の意を表する。

### 引用文献

(1) East, E. M. Amer. Natur. 49. 1915. (1) 安田貞雄. 生殖生理学 230. 1951. (3) 安田貞雄. 筆者の通信文 1950. (4) 藤井利重, 岩波洋造. 農及園 26, 10. 1951. (5) 岩波洋造. 科学 22, 3. 1952. (6) 岩波洋造. (投稿中) (7) 岩波洋造. 植雑 65. 1952.

<sup>\*</sup> 東京文理科大学植物学教室 \*\* 本文の一部は日本植物学会東京支部例会で講演された。

### 雜錄

# 植物科名に関する標準和名表

## 日本植物分類学会

植物科名に対する和名の一部は既に 85年も前から出版されており、その後各種の出版物に現われた和名は数多く、 
表だしい場合には一科に対して十数個もあることがあり、 
学術研究上また教育上不便が多いことは何人も否定できない。 
もし一つの科に対して最も適当な和名一個を選定して標準和名とすることができたならば、一般はもとより専門家にも便宜が多いことは明かである。 
この問題は戦時中から本会の前身、植物分類同志会に提案されていたが、幸に 1948 年 4 月 3 日の植物分類学会(京都、当時の会名)において採択され、各植物部門別に委員を選出して資料を整理、 
印刷し、最後に本会としての標準和名表を発表し、 
広く識者の与論に問うこととなつた。 1950 年 11 月 4 日の植物分類学会(東京)には各委員編集の植物科名整理資料が印刷配布された。この資料は顯花植物(津山荷)、羊樹植物(田川基二)、蘚苔類(堀川芳雄)、藻類(山田辛男)、菌類(小林養雄)、地衣類(佐藤正己)の 6 分冊からできていて、科に関する既出版の和名を集録したものである。この資料に基いて標準和名表の原案を作成するために、当日次の委員が選出された。 
類に植物:東京在住の会員、羊歯植物: 
田川基二、伊藤洋、百瀬靜男、蘚苔類: 
堀川芳雄、 
服部新佐、 
野口彰、 
菌類: 
小林義雄ほか菌類談話会(東京)有志、 
藻類: 
山田幸男、 
その他の専門家 (未定)、 
岩面類: 
江本義 
数、その他の専門家 (未定)。 
当日の会合においては主として顯花植物について後田の凡例の如きものが計議され、他の部門に関してもこれを参考とすることが要望された。

顯花植物に関しては同年12月16日在京会員多数が会合して原業を作り、全会員に配布して意見を求めたが、各個の和名に対して意見の分れたものについては再び在京会員が会合して決定した。 これが 1951 年9月24日の日本植物分類学会(温海)において正式の本会案として承認された。 他の部門についても、既に同様な経過を経て本会案が決定され、或は現にその方向に進んでいる。 今回は先ず顯花植物部門の標準和名表を発表することにした。

終りに植物科名整理資料その他会員に配布する諸資料の印刷出版について援助を得た 文部省 学術用語 分科審議会及び学術課に対して感謝の意を表する。

#### 第1部 顕花植物

- 凡例 1. 現生植物で日本産或は日本で栽培されているものを主としたが、それ以外のものでも我国でよく知られているものは加えた。
- 2. 1科について1和名を選んだが,新旧両仮名づかいを用いた。 ラテン名の次に唯一つの和名のある ものは両者が一致しているもの,二つ以上並記してあるものは,第2番目以下が旧仮名づかいによつたもの である。科の配列は裸子植物を除いて大体 Engler・Gilg の Syllabus 9-10 版によつた。
- 3. この表は特定の分類学上の意見を表わしているものではない。 それ故科を更に分割する意見, 例えば\*印を附した科名を採用する時の和名も択んである。
- 4. この表は会員多数の意見を根幹として定めたもので、必ずしも一定の 標準 によつたものではなく、各個の科について綜合的に判断されたものである。しかし出席会員によつて次のことが討議され、かつ全会員に知らされた。卽ち現在広く用いられているものであること。 判りやすい名であること。 他の科名と混同されるおそれの少いものであること。語呂のよいものであること等。それ故必ずしも古い和名が採用されず、語源的には誤つたものでも慣用を重んじて採用されたものもある。なお現在行われている和名が著しく不適当であると考えられた場合は新和名が与えられたこともある。アンダーラインのあるのがそれである。

#### 裸 子 植 物

Cycadaceae ソテッ

Ginkgoaceae イチョウ, イチャウ, イテウ

Podocarpaceae マキ

Cephalotaxaceae イヌガヤ

Taxaceae イチイ, イチヰ

\*Torreyaceae カヤノキ

Amentotaxaceae ウラジロマキ

Araucariaceae ナンヨウスギ, ナンヤウスギ

Cupressaceae ヒノキ

Juniperaceae ビャクシン

Taxodiaceae ヌマスギ

\*Taiwaniaceae タイワンスギ

\*Cryptomeriaceae スギ

\*Cunninghamiaceae コウヨウザン, クワウエウ

\*Sequoiaceae セコイア

Sciadopitidaceae コウヤマキ, カウヤマキ

Pinaceae マッ

\*Abietaceae + 3

Ephedraceae マオウ,マワウ

Gnetaceae グネツム

Welwitschiaceae ウェルウィッチア

#### 被子植物

单子葉類

Typhaceae ガマ

Pandanaceae タコノキ

Sparganiaceae ミクリ

Potamogetonaceae ヒルムシロ

Najadaceae イバラモ

Aponogetonaceae レースソウ, レースサウ

Juncaginaceae シバナ

Scheuchzeriaceae ホロムイソウ, ホロムイサウ

Alismataceae オモダカ

Butomaceae ハナイ,ハナキ

Hydrocharitaceae トチカガミ

Triuridaceae ホンゴウソウ, ホンガウサウ

Gramineae イネ

\*Bambusaceae タケ

Cyperaceae カヤツリグサ

Palmae キシ

Cyclanthaceae パナマソウ,パナマサウ

Araceae サトイモ

Lemnaceae ウキクサ

Flagellariaceae トウツルモドキ

Xyridaceae トウエンソウ, タウエンサウ

Eriocaulaceae ホシクサ

Bromeliaceae パイナップル

Commelinaceae ツュクサ

Pontederiaceae ミズアオイ,ミヅアフヒ

Philydraceae タヌキアヤメ

Juncaceae イグサ, キグサ

Stemonaceae ビャクブ

Liliaceae = y

Amaryllidaceae ヒガンバナ

Taccaceae タシロイモ

Dioscoreaceae ヤマノイモ

Iridaceae アヤメ

Musaceae バショウ, バセウ

Zingiberaceae ショウガ,シャウガ

Cannaceae カンナ

Marantaceae クズウコン

Burmanniaceae ヒナノシャクジョウ, ヒナノ

シャクヂャウ

Orchidaceae ラン

#### 双子葉類——離瓣花類

Casuarinaceae モクマオウ,モクマワウ

Saururaceae ドクダミ

Piperaceae コショウ,コセウ

Chloranthaceae センリョウ,センリャウ

Salicaceae ヤナギ

Myricaceae ヤマモモ

Juglandaceae Dn =

Betulaceae カバノキ

Fagaceae プナ

Ulmaceae = v

Moraceae クワ, クハ

\*Cannabinaceae アサ

Urticaceae イラクサ

Proteaceae ヤマモガシ

Santalaceae ビャクダン

Olacaceae ボロボロノキ

Loranthaceae ャドリギ

Balanophoraceae ッチトリモチ

Aristolochiaceae ウマノスズクサ

Rafflesiaceae ラフレシア

\*Mitrastemonaceae ヤッコソウ, ヤッコサウ

Polygonaceae タデ

Chenopodiaceae アカザ

Amaranthaceae ヒュ

Nyctaginaceae オシロイバナ

Cynocrambaceae ヤマトグサ

Phytolaccaceae ヤマゴボウ, ヤマゴバウ

Aizoaceae ザクロソウ, ザクロサウ

Portulacaceae スベリヒュ

Basellaceae ツルムラサキ

Caryophyllaceae ナデシコ

Nymphaeaceae スイレン,スキレン

\*Nelumbaceae ハス

Ceratophyllaceae マッモ

Trochodendraceae ヤマグルマ

Eupteleaceae フサザクラ

Cercidiphyllaceae カッラ

Ranunculaceae キンポウゲ

Lardizabalaceae アケビ

Berberidaceae メギ

\*Podophyllaceae ミヤオソウ,ミヤヲサウ

\*Nandinaceae ナンテン

Menispermaceae ッヅラフジ, ッヅラフヂ

Magnoliaceae モクレン

Calycanthaceae ロウバイ、ラフバイ

Annonaceae ベンレイシ

Myristicaceae = クズク, = クヅク

Lauraceae クスノキ

Hernandiaceae ハスノハギリ

Papaveraceae ケシ

Capparidaceae フウチョウソウ, フウテウサウ

Cruciferae アプラナ

Resedaceae モクセイソウ, モクセイサウ

Sarraceniaceae サラセニア

Nepenthaceae ウツボカズラ, ウツボカヅラ

Droseraceae モウセンゴケ

Podostemaceae カワゴケソウ,カハゴケサウ

Crassulaceae ベンケイソウ, ベンケイサウ

Cephalotaceae フクロユキノシタ

Saxifragaceae ユキノシタ

Pittosporaceae トベラ

Hamamelidaceae マンサク

Platanaceae スズカケノキ

Rosaceae パラ

\*Spiraeaceae シモッケ

\*Malaceae ナシ

\*Amygdalaceae サクラ

Leguminosae マメ

Geraniaceae フウロソウ,フウロサウ

Oxalidaceae カタバミ

Tropaeolaceae ' ノウゼンハレン

Linaceae アマ

Erythroxylaceae コカノキ

Zygophyllaceae ハマビシ

Rutaceae ミカン

Simaroubaceae =ガキ

Burseraceae カンラン

Meliaceae センダン

Malpighiaceae キントラノオ,キントラノヲ

Polygalaceae ヒメハギ

Euphorbiaceae トウダイグサ

Callitrichaceae アワゴケ

Buxaceae ッゲ

Empetraceae ガンコウラン, ガンカウラン

Coriariaceae ドクウッギ

Anacardiaceae ウルシ

Aquifoliaceae モチノキ

Celastraceae ニシキギ

Staphyleaceae ミッパウッギ

Icacinaceae クロタキカズラ, クロタキカヅラ

Aceraceae カエデ,カヘデ

Hippocastanaceae トチノキ

Sapindaceae ムクロジ

Sabiaceae アワプキ

Balsaminaceae ッリフネソウ, ッリフネサウ

Rhamnaceae クロウメモドキ

Vitaceae ブドウ, ブダウ

Elaeocarpaceae ホルトノキ

Tiliaceae シナノキ

Malvaceae アオイ,アフヒ

Bombacaceae パンヤ

Sterculiaceae アオギリ、アヲギリ

Actinidiaceae マタタビ

Theaceae ッパキ

Guttiferae オトギリソウ, オトギリサウ

\*Clusiaceae テリハボク

\*Garciniaceae フクギ

Dipterocarpaceae フタバガキ

Elatinaceae ミゾハコベ

Tamaricaceae ギョリュウ, ギョリウ

Bixaceae ペニノキ

Violaceae スミレ

Flacourtiaceae イイギリ,イヒギリ

Stachyuraceae キブシ

Passifloraceae トケイソウ,トケイサウ

Caricaceae パパイア

Begoniaceae シュウカイドウ,シウカイダウ

Cactaceae サボテン

Thymelaeaceae ジンチョウゲ, デンチャウゲ

Elaeagnaceae # 3

Lythraceae ミソハギ

Sonneratiaceae ハマザクロ

Punicaceae ザクロ

Lecythidaceae サガリバナ

Rhizophoraceae ヒルギ

Alangiaceae ウリノキ

Combretaceae シクンシ

Myrtaceae フトモモ

Melastomataceae ノボタン

Oenotheraceae アカバナ

\*Trapaceae ヒシ

Haloragaceae アリノトウグサ,アリノタフグサ

Hippuridaceae スギナモ

Araliaceae ウョギ

Umbelliferae セリ

Cornaceae ミズキ,ミヅキ

\*Helwingiaceae ハナイカダ

#### 双子葉類——合瓣花類

Diapensiaceae イワウメ,イハウメ

Clethraceae リョウブ, リャウブ

Pirolaceae イチャクソウ, イチャクサウ

Ericaceae ッッジ

Myrsinaceae ヤブョウジ, ヤブカウジ

Primulaceae サクラソウ, サクラサウ

Plumbaginaceae イソマツ

Sapotaceae アカテツ

Ebenaceae カキノキ

Symplocaceae ハイノキ, ハヒノキ

Styracaceae エゴノキ, ヱゴノキ

Oleaceae モクセイ

Loganiaceae フジウツギ,フヂウツギ

Gentianaceae リンドウ, リンダウ

Apocynaceae キョウチクトウ,ケフチクタウ

Asclepiadaceae ガガイモ

Convolvulaceae ヒルガオ,ヒルガホ

\*Cuscutaceae ネナシカズラ, ネナシカヅラ

Polemoniaceae ハナシノブ

Hydrophyllaceae ハゼリソウ, ハゼリサウ

Boraginaceae ムラサキ

Verbenaceae クマッツラ

Labiatae シッ

Solanaceae ナス

Scrophulariaceae ゴマノハグサ

Bignoniaceae ノウゼンカズラ,ノウゼンカヅラ

Pedaliaceae ゴマ

Martyniaceae ツノゴマ

Orobanchaceae ハマウツボ

Gesneriaceae イワタバコ,イハタバコ

Lentibulariaceae タヌキモ

Acanthaceae キツネノマゴ

Myoporaceae ハマジンチョウ,ハマヂンチャウ

Phrymaceae ハエドクソウ,ハエドクサウ

Plantaginaceae オオバコ, オホバコ

Rubiaceae アカネ

Caprifoliaceae スイカズラ,スヒカヅラ

Adoxaceae レンプクソウ, レンプクサウ

Valerianaceae オミナエシ, ヲミナヘシ

Dipsacaceae マツムシソウ, マツムシサウ

Cucurbitaceae ウリ

Campanulaceae ++ = b, +++b

Goodeniaceae クサトペラ

Compositae キク

# 本 会 記 事

前号(767-768号)146頁 本会記事のうち中国四国支部選出の評議員を下斗来直昌, 猪野俊平といた しましたのは堀川芳雄, 猪野俊平両氏の誤りであります。ここに謹んで訂正いたします。

## 各 支 部 消 息

#### 札幌支部

総会(昭和27年6月28日,於北大農学部)(1) 講演: 種について(內田亨,北大・理) (2) 会務報告,評議員並びに支部長選挙

#### 東北支部

第13回例会(昭和27年5月13日) 植物採集(於奥新川)

#### 東京支部

- 大会 (1) 講演会 ((昭和27年4月4日, 於資源科学研究所) 講演: 1) 馬鈴薯塊莖の呼吸系に関する ニ三の実験(松崎悦三, 資源研) 2) アサクサノリの生活史について(予報)(新崎盛敏, 東大・農) 3) シダ類の新分類系(伊藤洋, 文理大・理) 4) 植物の運動組織に於けるタンニン物質について(鳥山英雄, 東京女子大) 5) ストレプトマイシンの細胞分裂に及ぼす影響(田中信德, 佐藤正一, 東大・理) 6) 硝子に発生する絲状菌の種類について(大槻虎男, 今井里江子, 島津昭, 御茶の水女子大) 7) ストレプトマイシンの工業生産について(大槻虎男, 今井里江子, 島津昭, 御茶の水女子大) 7) ストレプトマイシンの工業生産について(久保秀雄, 科研) 8) コルダイテスと被子植物との類縁(前川文夫, 東大・理) 9) 矢毒植物として見たトリカプト(予報)(石川先助) 10) テトラゾリウム塩による 脱水素酵素の組織化学的検出について(予報)(佐藤七郎, 東大・理) 11) ワタの種子に於けるラフィ ノースの生成について(代谷次夫, 東大・理) 12) 二三のユキノシタ科植物に於けるフラボノイドの 分布について(大内一彦, 資源研) 13) 酵素による生体内合成反応について(三輪知雄, 文理大・理) 14) Platanthera 属及びその類緑種の地下器官の特異形態(小倉謙, 東大・理)
- (2) 見学会(昭和 27 年 4 月 5 日) 1) 科学研究所, 十条工場(ストレプトマイシン工場) 2) 津村薬草園 5 月例会(昭和 27 年 5 月 31 日、於東大・四登第 ) 1878 ・ (1) 世紀 はいっぱかり いんしゃ
- 5月例会(昭和27年5月31日,於東大・理学部) 譜演: (1) 蘭科植物の細胞学的特徴(水野忠欽, 慶大) (2) 花粉管分裂の細胞生理学的研究(横山哲郎, 慶大)
- 6月例会(昭和27年6月21日,於東京教育大・理) 講演: (1) 易変遺伝子の行動からみた遺伝子の相 克現象について(笠原基知治,法政大・教證)(2)リコリス属の系統と分布について(稲荷山資生,教 育大・理)(3)植物四方山話(錄音)(牧野富太郎)

#### 中部支部

第20回例会,植物採集(昭和27年4月26日 於高藏寺)

第 21 回例会(昭和 27 年 6 月 15 日 於愛知学芸大) 日本動物学会中部支部特別例会と共同主催(植物関係講演): ヘミンの作用機作について一特にその酸化酵素的触媒作用を中心として(森健志,名大・理)第 22 回例会(昭和 27 年 7 月 12 日 於名大瑞徳分校) 講演: (1) 広島県大田川の河原植物(中島光夫,向陽高校)(2) アゾトバクターのヒドラヂン酸化機構(鈴木昇、鈴木旺,名大分校)(3) 二三蓼科植物の光週反応(沢村保昌,三重大・学芸)

#### 北陸支部

例会(昭和27年5月31日 於福井)(1) 講演: 1) 渴水期を有する湖沼の植物生態学的研究一特に渴水 直後の群落型について(香室昭田,福井大・学芸) 2) ウレアーゼの生理的機能(鈴木米三,富山大・文 理) 3) 2・4 D に対するウキクサの抵抗性獲得について(村田茂三,金沢大・理) (2) 福井博物館見学 例会(昭和27年7月) 立山エクスカーション

#### 近畿支部 .

例会(昭和 27 年 5 月 18 日, 於京大・理学部) (1) 講演: 1) 「サツマイモ」 の葉柄に於ける電位変動 (河野清, 京大) 2) 血精学的反応に於ける absorbed method への反応の場の形の影響(桃谷好英, 京 大) 3) Digitalis purpurea L & D. laubta Ehrh に於ける発芽適温度、最高温度及び最低温度につ いて(久保藤男, 武田農園) 4) 禾本科植物の葉のねじれについて(予報)(浜田秀男, 岩本良次郎, 兵 庫農大) 5) 藻類に於ける遊走細胞の放出孔の比較觀察, 特に「シォグサ」科について(広瀬弘幸,神 F大) 6) Aster 並びにその近線属植物の信聖分析(藤原麿紀雄,神戸大) (2): 評議員,役員改選

#### 九州支部

第20回例会(昭和27年7月5日、九大農学部) 日本遺伝学会福岡談話会と共催 (1) 植物関係講演 1) 水稻における四倍体と二倍体の交雜成績及び特異な F1 植物について(岩川英利,佐大) 2) チョ ロギの糖について(野口市夫,九大・理)(2)評議員,役員改選

# 昭和25会計年度決算報告案 (昭和26年4月1日から27年3月31日まで)

	叮鍍				
牧 入	891,775.68	支	出		口 錢
支 出	611,702.50	出	版	費	407,905.50
差引殘高	280,074.18	編	集	翌	7,020.00
		発	送	費	56,176.00
內訳		庶	務	費	13,235.00
收 入		交	通	費	540.00
前年度よりの繰越	143,806.65	通	信	費	7,845.00
会費,通常会費	474,757.00	図	書 整、	理費	12,490 00
終身会費	12,000.00	大	会	補 助	58,490.00
バックチンバー売上	44,634.00	支	部	補 助	17,231.00
別 刷 代	15,895.00	会	合	費	6,270.00
文 部 省 刊行 補助金	200,000.00	幹	事 年 未	手 当	23,000.00
貯 金 利 子	683.03	故直	<b>泰井名譽会</b>	員花環代	1,500 00
前	891,775.68		計		611,702.50
		Ę	欠年度く D	کا	280,074.18

#### ERRATA (Vol. 65, No. 767-768, 1952)

page	line	for	read
96	Explanation of Fig. 4, the last line	Quercus dentate	Quercus dentata
,,	Tab. 2, a heading, 4	equation(2)	equation (2)
23	" 1, a column 9, (the last)	"unfilled space"	<u>~</u>
97	Tab. 3, plant name, 4	Hedera helxi	Hedera helix
,,	The text, 23	the difference of	the difference of
112	Author's name	Онсі	ОСНІ

					浑	谷	差		札幌市 北海道大学理学部植物学教
				新入会員					室 , 札 幌
今	村	泰	子	奈良市北魚屋西町 奈良女子大学植	金	子		光	17 17
				物学教室 近 畿	字》	丰木	愛	子	n n
井	Ŀ	久	男	都內西多摩郡五日市町五日市 都立	向	JII	信	_	" "
				五日市高校 東 京	舟	橋	說	往	n n
金沙	尺大学	<b>学理</b> 学	2部相	植物学教室 金沢市仙石町 北 陸	平。	泉	雄	一郎	<i>n</i>
滗	見	益言	吉郎	大津市膳所木ノ下町149 近 畿	秋	Щ		優	11
#	田	賢	竜	石川県石川郡蝶屋村字手取	胂力	5女	子薬	科大学	学図書館 神戸市東灘区本山町中野
				北陸					近畿
岡	部	IE.	義	北区稻付島下町 1539 小川香料東京	進	野	久	五郎	富山市東中野16の2 北 陸
				工場 東京	斎	藤	寬	昭	福井県今立郡中河村中野16の2
香	室	昭	Щ	福井県今立郡神明町 福井大学学芸					17
				学部 北 陸	Ш	田	悌	ming,	福井県坂井郡丸岡局区內一本田
田	中	玉	治	大阪府池田市 大阪学芸大学池田分	ひぐ	66			. "
				校生物学教室 近 畿	寒	蝉	義		福井県武生局区内小松町 15 の 29
1111.5	制島オ	大学系	文行门						"
大	野	林:	二即	北海道学芸大学函館分校 札 幌	吉	田	佐	內	福井県足羽郡麻生津村今市 16 の 1
F	間		実	京都府乙訓郡向日町。钓集安木原生					"
				物学研究所 近 畿	清	水	喜么	<b>人雄</b>	福井県福井市町屋町 県営住宅6区
深	瀬		嶔	和歌山市眞砂町1の1 和歌山大学					60 "
				学芸学部生物学教室 "	Ш	田	謙		長野県下高井郡平岡村西笠原
久	TF	竹	夫	長野県北安曇郡大町 2592 東 京				Air	東京
桥		啓	介	品川区北品川6の387 財団法人長	竹	內		繁	福井県坂井郡長畝村篠岡16の8
	^	-7	4.6	尾研究所 //					北陸
大	倉	永	冶	岡山局区內 津島岡山大学理学部生		冶薬	科ラ	-	世田ヶ谷区野沢町1の1 東 京
-I- /	久保	鼠絲	3.Zt.	物学教室遺伝学研究室 中国四国 千葉県津川沿町 大久保東邦大学理	選	野	121	明	横須賀市浦郷町2の32 1/
<i>/</i> (2)	N/K	17年业	D-3-		•	大田	昌二	則	金沢二水高等学校 北 陸
क्रिल न	در مآب دارا	4 1744 E	2 roj -1		型	国	秀	夫	札幌市南二条西5丁目 札 幌
が協う	十八与	产門力	<b>马</b> 区官	情館学芸学部分館 福井県 今立郡 神 明町 北 陸	塙			順	岐阜市長良 岐阜大学学芸学部
П	野	粘		名古屋市千種区 名古屋大学理学部	浩	ماله	TT:	4:16	中部
1-1	21	ጥነተ		生物学教室 申 部		水	正	雄	石川県七尾高等学校 北 陸
南		150		金沢市彦三一番丁13 北 陸	闰上	4/\=	子义工	生子市	B生物学教室 富山市蓮町 22
齊	田	11.43	鋼	金沢市栄町36 "	Do:	No	on	Noi	北 陸 c/o Sin Min Chu Publishing
堀	galag	任治	子		1 61	140	1011	1461	Co., 41, Oueen's Road, 1st Fl.,
玉	井			金沢市仙石町 金沢大学理学部植物					
-	71	gest.		学教室 "	П-	大坦言	<b>並</b>	<b>科</b> 姆 [	Central, Hong Kong 田試験地 静岡県磐田郡富岡村 気賀
直		清	*	金沢市長土塀通り18 "	H7	************	14 4	山岩下	± 940
明	峯			札幌市 北海道大学理学部植物学教	能	k-k-2	ÿ KÆ+ı	Wilt.	and the sale and t
	-	-		室 札 幌	流				AND A SELECT AS DESCRIPTION OF
大	谷	吉	雄	11 11					松江市外中原 134 広島
		4-3	-41,	"	50		X IL	四子在	文室 福井県敦賀市松島

# Über die serologisch-systematische Untersuchung der Lebermoosen. I.

Über die systematische Untersuchung der Verwandtschaften von Anthocerotales.

#### von Minoru Kamimura\*

上村 登: 苔類系統の血清学的研究 其一,ツノゴケ類の類縁関係に就いて。

#### Einleitung.

Seit taxonometrische Studien von Mez und seinem Schüler(1) in Königsberg über die serologische Untersuchung der Pflanzen, insbesondere die der Präzipitation, wurde solche Untersuchungsmethode von einigen Phytologen, z. B. von Wettstein<sup>(2)</sup> in Wien aufgenommen. Trotzdem war die Methode im allgemeinen auf dem Gebiete der Klassifikation nicht aufgenommen worden, wegen der unsicheren Resultate(3) der homologischen Reaktion der verwandten Pflanzen, und infolgedessen gibt es nur wenige diesbezüglichen Beiträge. Es ist dagegen in der Phytopathologie, d. h. in der Differenzial. Diagnose der ähnlichen Krankheiten oder in der Frühdiagnose einiger Krankheiten insbesondere neuerdings in der Differenzierung der Viruskrankheiten zur Anwendung gekommen, und es gibt darüber viele Beiträge. (4) Wirkönnen durch diese Untersuchungsmethode die Virus-Pathogene leicht differenzieren, die symptomatologisch gar nicht sich unterscheiden lassen, oder ganz andere Erscheinungen zeigen aber wesentlich identische Viruskrankheiten sind. (5) Es befindet sich natürlich einige Mitteilungen über die systematische Verwandtschaft der Lebermoosen, aber die Lebermoosen sind bis jetzt im allgemeinen nicht so viel als Fossilen gefunden worden, und es ist daher morphologisch-systematisch schwer zu forschen und infolgedessen gibt es die Lebermoosen, die ihre systematische Stellung heute noch unsicher bleibt.

Die serologisch-systematische Untersuchung von Lebermoosen ist bis heute noch sehr wenig berichtet. Ich studierte neuerdings die systematische Verwandtschaft der Lebermoosen durch Präzipitation, und möchte hier den verwandtschaftlichen Zusammenhang von Anthoceroteen mitteilen.

Anthoceroteen werden heute von vielen Bryologen als eine Ordnung oder Subklasse von der Klasse Hepaticae angenommen, aber ihre Gametophyten sind Thallus und ihre anatomische Struktur ist sehr primitiv. Dagegen entwickeln sich ihre Sporophyten am höchsten in den Lebermoosen, und zwar die Körperstrukturen der beiden Pflanzenphasen mehr charakteristisch, als sie in sind anderen Lebermoosen

<sup>\*</sup> Biologisches Fach, Odu Gymnasium, Koti-ken, Japan.

gefunden worden sind. In jeden Zellen der Gametophyten befindet sich nur einziger Makrochloroplast, am Kapsel der Sporophyten gibt es Columella wie in Laubmoosen, in der Gewebe der Kapselwand sind Spaltöffnungen wie Spermatophyten, und in den Zellen sind Chloroplasten vorhanden.

Nachdem der obere Teil des Kapsels schon reif wird und die Sporen aus den Spalten zerstreut sind, entwickelt sich obzwar der Grund desselben Kapsels noch weiter fort. Es ist ganz charakteristisch, dass darin Archesporium noch bleibt und durch Gewebsspaltung die Sporenbildung fortsetzt.

Wie aus den obigen ersichtlich, sind die Sporophyten von Anthoceroteen einerseits vielmehr anatomisch näher mit Musci verwandt als mit Hepaticae; anderseits kann man gleichzeitig sagen, dass die Anthoceroteen zur Verwandtschaft gegen Pteridophyten steht zeigen. Wie oben gesagt, ist die Struktur der Gametophyten sehr primitiv in den Lebermoosen im Gegensatz zur Höchstentwicklung von Kapsel. Daher vertreten die Anthoceroteen mit Recht eine eigentümliche Ordnung. Einige Bryologe erteilen eine wichtige Bedeutung auf den histologischen Befund des Kapsels zu, und stellen deshalb eine Klasse oder Subklasse Anthocerotes, indem sie die Anthoceroteen auf den gleichen taxonomischen Rang wie die Klasse Musci und Hepaticae heraufstellen.

#### Methodik und Materialien.

Frischen Gametophyten von Anthoceros laevis L. mit Sporophyten wurden von Sand und Erde mit Wasser gewaschen, 10 g davon im Reibschale gut zerrieben, mit 100 ccm physiologischer Kochsalzlösung versetzt, und nach 3-stündigem Stehenlassen im Zimmer mehrmals filtriert, mit Karbollösung bis zu 0.5% versetzt, und diese Lösung wurde am Oberarm des Kaninchens intramuskulär injiziert, nämlich im ersten Mal mit 0.1 ccm und nachher jeden sieben Tagen 0.5 ccm, 1 ccm und 2 ccm. Direkt nach den ersten Einspritzen bemerkte ich bei Kaninchen etwas Unruhe, aber nachher niemals nennenswerte Veränderungen, besonders wie Anaphylaxie.

Nach 25 Tagen der ersten Injektion wurde das Serum des Kaninchens mit Karbollösung zu 0.5 % versetzt, und diese Lösung wurde als Präzipitationsserum benutzt. Anderseits brauchte ich als Kontrollen das Kaninchenserum einerseits, das nur durch physiologische Kochsalzlösung in analoger Weise wie oben behandelt worden war und das Serum ohne Behandlung andererseits.

Frische Laubmoosen und Lebermoosen wurden gut mit Wasser gewaschen, 5 g derselben zerrieben, 30 ccm physiologische Kochsalzlösung hinzugetan, 3 Stunden lang im Zimmer stehengelassen, und mehrmals filtriert. Das Filtrat wurde mit Wasser 10-fach verdünnt, dazu noch eine Karbollösung zu 0.5 % hinzugesetzt und diese Lösung als Präzipitinogen gebraucht. Ich wendete Ringprobe und Tropfmethode an, d. h. wenige Menge von dem immunisierten Kaninchenserum wurde im

Reagenzglas von 5 mm Durchmesser einpipettiert: auf die Flüssigkeit wurde das Präzipitinogen sehr vorsichtig überschichtet; und noch 3-stündingem Stehenlassen wurde der weisse Ring oder die weisse Scheibe an der Berührungsstelle genau beobachtet, und anders einen Tropfen Kaninchenserum auf dem Objekträger pipettiert, darauf mit einem Tropfen von Präzipitinogen versetzt und dann nach 3-stündigem Stehenlassen der entstandene flockige Niederschlag beobachtet.

Die hier gebrauchte Materialien wurden in der Stadt Koti und deren Umgebungen gesammelt.

#### Beobachtung.

Die mit 6 Arten von Laubmoosen und 12 Arten von Lebermoosen ausgeführten Präzipitationsversuche sind nachstehend tabellarisch an geordnet.

Pflanzenname	Präzipitationsserum + Präzipitinogen	Mit physiologischer Kochsalzlösung injiziertes Kaninchenserum	Nicht behandeltes Kaninchen- serum
Anthoceros laevis L.	11111:		_
Riccia fluitans L.	±	_	-
Conocephalum conicum (L.) Neck.	+++	_	
Marchantia tosana Steph.	#	_	_
Dumortiera hirsuta (Sw.) R., Bl., N.	1 +		-
Monoselenium tenerum Griff.	111	_	_
Pallavicinia longispina Steph.	±		-
Makinoa crispata (St.) Miyake	+	-	_
Plectocolea comata (Nees) S. Hatt.	#	+	±
Trichocolea tomentella (Ehrh.)	_		-
Bazzania Pompeana Mitten	#	_	-
Frullania moniliata subsp. obscura Verd.	±	_	· _
Sphagnum cuspidatum Ehrh.	_		
Fissidens japonicus D.M.	_	quarto	_
Mnium trichomanes Mitten	+	and a second	-
Hypnum plumaeformis Wils.	±	_	_
Pogonatum inflexum Lindb.	-	-	_
Andreaea Fauriei Besch.*	_	-	-

<sup>\*</sup>Prov. Iyo, Berg Isiduti (gesammelt von N. Okubo, Aug. 1950).

Ring- und Tropfversuche zeigten analogoge Reaktionen, selbstverständlich ist der Tropfversuch eine einfaste Methode, aber es war schwer, nur noch schwach entstandene Niederschläge zu unterscheiden. Der Niederschlag wurde makroskopisch beobachtet; und der Grad des Niederschlags, der aus dem Präzipitationsserum durch die entsprechenden Präzipitatinogene hervorgerufen worden ist, wurde durch das Zeichen + und zwar durch dessen Zahl ausgedrückt; das Zeichen – zeigt die Entstehung keinen Niederschlags.

Wie oben ersichtlich, waren die Präzipitationserscheinungen bei Conocephalum und Monoselenium am bedeutendsten, und bei Marchantia, Plectocolea und Bazzania verhältnismässig bedeutend. Ich bemerkte bei allen Lebermoosen ausser Trichocolea tomentella mehr oder weniger positive Reaktion, aber bei meisten Laubmoosen negative, und bei Mnium trichomanes und Hypnum plumaeformis positive Reaktion. Es ist bemerkenswert, dass das mit physiologischer Kochsalzlösung injizierte Serum und das nicht behandelte Serum gegen Plectocolea comata eine positive Reaktion zeigte. Solche Erscheinung, dass eine beliebige Art von Pflanzeneiweiss durch normales intaktes Kaninchenserum ausnahmsweise niedergeschlagen wird, ist bis jetzt wenig berichtet.

#### Zusammenfassung.

Wie oben die serologische Untersuchung der Anthoceroteen zeigt eine Verwandtschaft zu Hepaticae als zu Musci. Bei den meisten Präparaten war die Präzipitation positiv in fast allen Beispielen. In den Hepaticae zeigten Marchantiales, Jungermanniales Anacrogynae und Jungermanniales Acrogynae die nähere Verwandtschaft in dieser Reihenfolge. In den Sphagnales und Andreaeales fielen die Reaktion negative aus. Zwei Arten von Bryales gaben etwas positive Resultate. Man kann natürlich nicht aus diesen wenigen Versuchesresultaten einen verfrühten Schluss ziehen. Obschon die Struktur der Sporophyten von Anthoceroteen gut entwickelt ist, sind die Anthoceroteen nach meinen serologischen Versuchen vielmehr näher verwandt mit Hepaticae als mit Musci, und es sei wenigstens zweckmässiger, sie als den Vertreter einer Ordnung von Hepaticae einzuordnen als ihnen heute den gleichen Rang wie Musci und Hepaticae geben, wie es jetzt von meisten Autoren angenommen wird.

#### Literaturverzeichnis.

- (1) Mez, C.: in Abderhalden, Handb. d. biol. Arbeitsmethoden Abt. XI, Teil 1, 1929, u.s.w.
- (2) Wettstein, R. R.: Handbuch der systematischen Botanik. Wien, 3 Aufl. 1923-1924.
- (3) Gilg, E. u. Schürhoff, P.: Ber. Deutsch. Bot. Ges. XLV, 315, 1927, u. s. w.
- (4) (5) Matumoto, T.: Bot. and Zoolog. III, pp. 893-898, 1935, u. s. w.; Chester, K.S.: Phytopath., XXVI, pp. 778-785, 1936, u. s. w.

# Studies in the Cytology of Pteridophyta

XXXI. The relation between the plastid and the nucleus

### By Akira Yuasa\*

湯淺 明: 羊歯類の細胞学的研究 (三十一報) 色素体と核との関係。

Researches on the plastid-division have been carried out by Haberlandt (1882) in Selaginella, by Nägeli (1863), Sachs (1875) and Schmitz (1882) in algae, by Strasburger (1880), Němeč (1910) and Scherer (1914) in Anthoceros, by McAllister (1927) in Anthoceros and Notothylus, Reinhard (1933) in Salvinia, by Stewart (1948) in Isoetes, by Carter (1919, 1920) in Cosmarium, by Heitz (1922, 1925) in mosses and by Kusunoki and Kawasaki (1936) in Conandron and Utricularia, but the relation between the plastid-division and the nuclear division has not been clarified in these studies.

Ma (1928) studied the plastid-division in *Isoetes melanopoda* and observed that the plastid-division occurred at the same time as the nuclear division in some cases and that in the other cases the plastid division precedes the nuclear division. Lander (1935) stated in a study of *Anthoceros* that before nuclear division the plastid moves to the side of the nucleus, constricts and, as its halves separate, fibers appear in close proximity to the nucleus. Nuclear and cell-division follow in the usual manner, the daughter plastids remaining at the broad poles of the spindle,

The present writer (1946, 1947, 1947) already recognized in *Selaginella uncinata* that the plastid-division shows regularity in connection with the green spirals.

The present study has been undertaken to show that the plastid has the individuality and divides without being controlled directly by the nucleus.

#### Material and Methods

The primordial tissues of leaves, young and old leaves of *Selaginella uncinata* were used as the material. They were put in a drop of water on a slide, covered with a cover-glass and observed under the microscope. The hand-section of leaves were fixed with Benda's solution after the treatment with 0.1% aqueous solution of KOH, washed with water, stained with an aqueous solution of nigrosin, and observed.

The leaves also fixed with a chrom-acetic acid solution or Navashin's solution and were stained with iron-alum haematoxylin, according to the Paraffin-method.

They were also fixed and stained with an iron-aceto-carmine solution and observed.

<sup>\*</sup> Contribution from The Biological Institute, College of General Education, University of Tokyo.

#### Observations

In Selaginella uncinata, a cell of the primordial tissue of the leaf has a bar-like plastid and divides respectively to form the young leaf, having always one plastid in it (Fig. A, 2-5). When the primordial leaf becomes large, a plastid divides into two in those cells which constitute the primordial tissue and are destined to become the cells of the upper-side-epidermis or the mesophyll (Fig. A, 7-9, 6-13). So most of the cells of the upper-side-epidermis or the mesophyll of the leaf have two plastids. Many plastids are, however, found in the cells of the under-side-epidermis.

Sometimes in the cells each of which have two plastids, the plastids divides repeatedly and there are formed the cells of the mesophyl or the under-side-epidermis, which have many plastids (Fig. A, 13–19). Sometimes, also two plastids in a cell divide respectively and four plastids appear (Fig. A, 13, 14). After the plastid-division the cell which contains four plastids divides into two, each of which has two plastid respectively (Fig. A, 14, 15, 18).

In some cases, however, the cell which contains four plastids divides into two daughter cells, one of which contains one plastid and the other three plastids. In these cases the plasid divides twice rapidly in the cell which has received one plastid. So both of the cells comes to contain three plastid (Fig. A, 15–17).

When the cell which contains two plastids changes into that of the under-side-epidermis, two plastids divide repeatedly into many. Then the cell divides into two daughter cells, each of which has uneual number of plastids. But the plastids divide succesively in the daughter cells which received a small number of plastids. Therefore both the two daughter-cells soon have an equal number of plastids.

In the cell of the primordial tissue of the leaf a plastid divides longitudinally, as shown in Fig. A, 2-5, 7-9, 20-22 and then the nuclear division occurs. The mitosis takes place in the space between the two newly formed plastids, so the daughter cells contains one plastid respectively. Accordingly, the plastid-division precedes the nuclear division and seems rather to induce the nuclear division.

When a cell of the young leaf, which contains one plastid, becomes the mesophyll-cell which will contain two plastids as shown in Fig. A, 7–9, the plastid in primordial cell divides londitudinally and the nucleus remains as it was. Sometimes, however, a bar-like plastid in the cells of the young leaf becomes large and round, and divides transversely into two. Then the nuclear division occurs and arranges one plastid into one daughter-cell respectively. In these daughter cells respectively the plastid divides once more and each cell contains two plastids (Fig. A, 6, 10–13).

From these facts it seems that the plastid divides independently from the nuclear divison, without being controlled by the action of the nucleus. Sometimes it seems that the plastid-division rather induces the nuclear division.

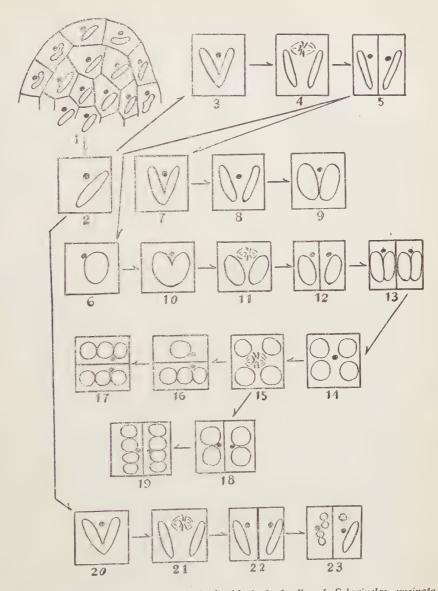


Fig. A. Division and distribution of plastids in leaf-cells of *Selaginelas uncinata*. Nucleus indicated by dot; plastid indicated by outline. 1: primordial tissue of leaf. 2-5, 6-13, 20-24: plastid-division precedes nuclear division. 7-9, 23: plastid divides independently from nucleus. 15-17, 15-19: nucleus divides independently from plastid-distribution.

As stated in the previous paper of the writer (1946, 1947), the plastid of Selaginella uncinata shows regularity in its division in connection with the green spiral. This fact and the result obtained in the present study suggest that the plastid has its individuality and is not controlled in its behaviour by the nucleus.

#### Disscusion

Ma (1928) observed in the basal cells of young leaves of *Isoetes melanopoda* only one plastid and stated regarding the plastid-division as follows: "In some cases the approach of cell division is coincident with the first division of the plastid. In other cases two plastids may be seen in cells, the nuclei of which show no evidence of division. After the plastid has completely divided, the halves withdrew from each other until they lie at opposite ends of the cell, with the nucleus between them at metaphase and later the daughter plastids are found at the opposite pole of the spidle—In the mature cells of the upper part of the young leaf, where nuclear division seems to have entirely ceased, the plastids continue to divide."

In this case, accordingly, the division of plastid occurs independently from the nuclear division. The plastid-division seems to induce the nuclear division.

According to Lander (1935), in *Anthoceros*, the same state of the plastid can be observed. He said that "before nuclear division the plastids move to the side of he nucleus, constricts, and as its halves separate, fibers appear in close proximity to the nucleus. The daughter plastids move to opposite sides of the nucleus: the fibers increase in number and length between the plastids, and finally form the division spindle. The nuclear and cell division follow in the usual manner, the daughter plastids remaining at the broad poles of the spindle."

In Selaginella the plastid divides independently from the nuclear division as seen in Fig. A, 3–5 and 7–9. As stated in the present writer's previous paper (1946, 1947), the plastid-division of Selaginella shows regularity in connection with the green spindle. From these facts it is concluded that the plastid devision occurs independently from the nuclear action, that the daughter plastids get an equal quantity of chlorophyll volume and an equal volume of the plastid and that in some cases the plastid division seems to stimulate the nuclear division.

The existance of plastids and the balance among plastids may be controlled by the nucleus, but the behaviour of plastid is controlled by itself or by the cytoplasm.

Ueda (1949, 1949) succeeded in isolating a chloroplast in a vaculoe by the plasmolysis-method. He could confirm that this isolated chloroplast can complete photosynthesis. This conclusion shows that the chloroplast can complete its function independetly from the nuclear action.

In Anthoceros, Scherrer (1914) observed that only one plastid exists in the sporogeneous cell, four in the spore-mother cell and one in the spore and the thalluscells. Sapěhin (1915) observed in Catharinea undulata and Physcomitrium piriforme that the tissue destined to become transformed into an archegonium containes in every one of its cells several or many plastids, but in the sporogenous tissue cell the chloroplastis decrease and the multiplication ceases and in the archesporiumcell

only one plastid can be observed. There is observed only one plastid in the sporemother-cell, two in the synapsis cell, four in the diakinetic cell and one in the spore. After a spore germunates plastids multiply in number.

These phenomena may be explained by the fact that the plastid has the individuality of being independent from the nuclear action.

In the plastid division of *Sclaginella uncinata* the fibrous structure could not be observed between the dividing plastids but it was observed in the case of *Anthoceros* by Lander (1935), in the case of *Polytrichum juniperinum* by Allen (1912) and in the case of *Polytrichum commune* by Weier (1930). The similar structure was already observed by von Mohl (1839), Nägeli (1844), Strasburger (1880) and Davis (1899).

#### Summary

In the embryonic cell of a young leaf a bar-like plastid divides into two longitudinary, preceding the nuclear division, and the resulted daughter cells contain only one plastid respectively.

In the almost completed leaf a cell of the mesophyll contains a round large plastid which divides into two, but the nucleus remains as it was, without dividing.

When a cell contains many plastids as in the case of an epidermis-cell of the under-suaface of a leaf, its nucleus divides independently from the plastids. So the plastids are distributed at random into the resulted two daughter cells and the number of the plastids in each of the daughter cells soon becomes equal.

These facts show that the plastid has its individuality and that it behaves independently from the nucleus.

The expense for this study was partly defrayed by a grant from the Science Research Fund, Ministry of Education.

#### Literature

- Allen, C. E. 1912. Cell-structure, growth and division in the antheridia of Polytrichum juniperinum Willd. Arch. f. Zellf, 8: 121 188.
- 2. Carter, N. 1919. Studies on the chloroplast of Desmids I. Ann. of Bot. 33: 215-454.
- 3. 1920. Ebenda III. The chloroplast of Cosmarium. ib. 34: 265-285.
- 4. 1920. Ebenda IV. ib. 34: 303-320.
- 5. Davis, B. M. 1899. The spore mother cell of Anthoceros. Bot. Gaz. 28: 89-107.
- 6. Haberlandt, G. 1882. Die Chlorophyllkörper des Selaginellen. Flora 71: 291-308.
- 7. Heitz, Z. 1922. Untersuchungen ueber die Teilung der Chloroplasten usw. Strasburg.
- 8. 1925. Das Verhalten von Kern und Chloroplasten bei der Regeneration. Zeit f. Zeilf. 2: 69-86.
- Kusunoki, S. and Kawasaki, Y. 1936. Beobachtungen ueber die Chloroplaste teilung bei einigen Blütenpflanzen. Cytologia 7: 530-534.

- 10. Lander, C. A. 1935. The relation to the plastid to nuclear division in Anthoceros laevis. Amer. Jour. Bot. 22: 42-51,
- 11. Ma, R. M. 1928. The chloroplasts of Isoetes malanopoda. ib. 15: 277-284.
- 12. McAllister, F. 1927. The pyrenoid of Antnoceros and Notothylus with special reference to their presence in spore mother cells. ib. 246–257.
- 13. Nägeli, C. 1844. Zellkerne, Zellentbildung und Zellwachstum bei den Pflanzen. Zwits. wiss. Bot. 1: 34-118.
- 14. Něměc, B. 1910. Das Problem der Befruchtungsvorgänge. Berlin.
- 15. Reinhard, H. 1933. Ueber die Teilung der Chloroplasten. Protoplasma 19: 541-564.
- 16. Sapěhin, A. H. 1915. Untersuchumgen ueber die Individualität der Plastide. Arch. f. Zellf. **13**: 319-398.
- 17. Scherer, A. 1914. Untersuchungen ueber Bau und Vermehrung der Chromatophoren und das Vorkommen von Chondriosomeh bei Antnoceros. Flora 107: 1-56.
- 18. Schmitz, E. 1884. Beiträge zur Kenntniss der Chromatophoren. Jahrb. wiss. Bot. 15: 1-177.
- 19. Senjaninova, M. 1928. Origin of plastids during sporogenesis in mosses. Zellf. mikr. Anat. **6**: 464-492.
- 20. Stewart, W. N. 1948. A study of the plastids in the cells of the mature sporophyte of Isoetes. Bot. Gas. 110: 281-300.
- 21. Strasburger, E. 1880. Zellbidung und Zelltheiung. Jena.
- 22. von Mohl, H. 1839. Ueber die Entwicklung der Sporen von Anthoceros laevis. Lennaea. Reprinted in Vermischte Schriften botanischen Inhalts, Tübingen.
- 23. Ueda, R. 1949. Photosynthesis of isolated chloroplasts and their autonomy (Preliminary report). Bot. Mag. (Tokyo) 62: 62-63.
- 1949. A critical review on photosynthesis and autonomy of isolated chloroplasts with 24. special reference to isolation methods. Adv. of Biol. Vol. 4: 242-259.
- 25. Yuasa, A. 1947. Studies in the Cytology of Pteridophpta XXV. Cytological study on the division of plastid. Bot. Mag. (Tokyo) 60: 23-30.
- 26. - 1947. Ebenda XXVII. The green-spirals and the regularity of the chloroplast-division. Seibutu (Biology) 2: 129-135.
- 27. - and Yamasaki, N. 1946. The behviour of the green spirals. Kagaku (Science) 15: 13-14.

# On the Paper Chromatography of the Leaf Pigments I\* By Masukichirou Asamı\*\*

淺見盆吉郎: 綠葉色素のペーパークロマトグラフィー I

Since the adsorptional separation of the leaf pigments was first published by Tswett<sup>(1)</sup> in 1956, a number of successive investigation<sup>(2)</sup> have been reported. In all of these, however, solely the so-called "column chromatographic" method was employed, and yet we have never been acquainted with any investigations based on the "paper chromatographic" method. Hence the author tried to establish a certain procedure on this subject.

#### Experimental

- 1) Preparation of sample: About 20 g of fresh, or 3 to 4 g of dried leaves of white clover (*Trifolium repens* L.) was extracted with 200 cc of methanol-acetone mixture (3:1) for 24 hrs., in the dark and cool, in order to prevent any deterioration of the leaf pigments. The filtered extract was evaporated under reduced pressure below 25°C, and the dried residual pigment mixture was then dissolved in methanol-acetone to prepare 0.62% of the matter. (8  $\mu$  1 of this solution contains 50  $\gamma$  of the sample.)
- 2) Apparatus for development: The employed apparatus for ascending paper chromatography is illustrated in Fig. 1. For preparing paper strips, a sheet of filter paper (Toyo Filter Paper Co's No. 50 for paper chromatography) was cut into rectangular size (1.2×35 cm), and the original spot was uniformly settled on each strip at the point 5 cm from the bottom.

#### Results

1) Determination of the developing agents: Various solvents were used in this trial (Table 1). It followed that the aromatic hydrocarbons and CCl<sub>4</sub> were the most suitable for the development of leaf pigments, and they gave almost identical results either anhydrous or saturated with water. When the development was carried

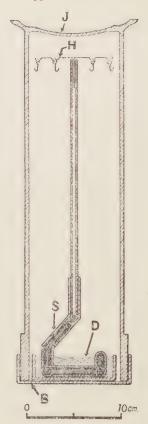
<sup>\*</sup> The outline of this communication was read at the Temporary Meeting of the Agricultural Chemical Society of Japan, Nov. 4th 1951, which was held at the Kyushu Univ., and the short article was published in Japanese in the Journal of the Shiga Pref. Jun. Coll., Ser. A, Vol. 1 No. 4 (1951), p. 139.

<sup>\*\*</sup> Laboratory of Domestic Science, Junior College of Shiga Pref., Hikone City.

out with these solvents, two green spots of chlorophyll a and b\*, and three yellow spots of carotinoids were clearly separated in every case. The unmoved greenish brown colored spots was probably due to the secondary degeneration product of leaf pigments, because its coloration became deeper after decrepitude of the sample.

- 2) Effect of temperature: The temperature effect on the development of leaf pigments with toluene and CCl<sub>4</sub> was shown in Fig. 2. With rise of temperature, spots of carotenoids drew nearer to each other, while that of chlorophylls suffered no significant influences. This might account for the probable denaturation of carotenoids caused by atmospheric oxidation. As a rule, constant results can not be obtainable, when the development was carried out above 30°C.
- 3) Correlations among quantity of specimen, time of development and Rf value: During the development, carotenoids behaved in somewhat different manner from chlorophylls (Fig. 3, 4); the spots of carotenoids ran by almost same

Fig. 1. Apparatus for development.



J: Jacket cylidder.

H: Strip hanger. (stainless steel)

D: Solvent distributor.

S: Hanger stand.

B: Base dish.

ratio of the progressing solvent front, so that their  $R_f$  values, like as the case of ordinary "partition chromatography," tended toward nearly constant after a certain time had passed and a slight influence of difference of the sample quantity was seen. In contrast, spots of chlorophylls moved rather rapidly in earlier stage of development, but through gradual diminuation, reached almost unmovable at last, irrespective of the extension of solvent front; wherefore, the change of their  $R_f$  values showed an asymptotic degeneration with the progressive development. In addition, the distance of movement of chlorophylls became greater according to the increase

<sup>\*</sup> Doubling of them were mostly seen when the development was carried out with aromatic hydrocarbons.

Table 1. Results of Development by means of various Solvents. (Quantify of Sample; 100  $\gamma$ , at 15-22°C.)

Solvent	Solvent Front		(N		lues and f each t				
Methanol (pure)	8.4cm		**************************************		0.40 (OY)	0.61 (G)	0.73 (Y) (	0.81 (YG)	A. 14400
Methanol (80%)	8.6	0.00 (Y)	0.11 (G)	_	0.28 (OY)	_	0.52 (Y)	0.79	th-md
Ethanol (pure)	9.7	_		~			0,63 (OY)	0.88 (G)	0.98 (GY)
Ethanol (80%)	10.5			-	-		- 410	0.86 (G)	0.98 (Y)
Methanol: Ethanol (1: 1)	9.4					0.61 (OY)	0.78 (G)	0.89 (Y)	0.99 (GY)
n-Butanol (anhydrous)	9.3		,		,				(G) 0.97
n-Butanol (satrd. with water)	9.4								(G) 0.96
i-Butanol (anhydrous)	9.6							0.88	(G) 0.98
i-Butanol (satrd. with water) Ethanol:	9.4		4000		-		-	(G)	(Y) 0.95
n-Butanol (1:1)  Cyclohexanol	5.9	parent							(G) 0.95
Acetone	8.3							0.79	(G) 0.98
Benzene	9.8	0.00		<u> </u>	0.22	0.34 (BG)	0.75 (Y)	(Y) 0.91 (Y)	(G) 0.99 (OY)
(anhydrous) Benzene	10.3	(GBr) 0.00 (GBr)			(YG) 0.22 (YG)	0.34 (BG)	0.78 (Y)	0.89 (Y)	0.99 (OY)
(satrd. with water) Toluene (anhydrous)	10.4	0.00 (GBr)	0.12 (YG)	0.16 (BG)	0.22 (YG)	0.39 (BG)	0.69 (Y)	0.85 (Y)	0.95 (OY)
Toluene (satrd. with water)	10.4	0.00 (GBr)	0.14 (YG)	0.19 (BG)	0.23 (YG)	0.36 (BG)		0.84 (Y)	0.94 (OY)
Xylene (anhydrous)	10.2	0.00 (GBr)	0.11 (YG)	0.18 (BG)	0.23 (YG)	0.38 (BG)		0.84 (Y)	0.97 (OY)
Xylene (satrd. with water)	9.8	0.00 (GBr)			0.23 (YG)	0.35 (BG)		0.87 (Y)	0.99 (OY) 0.98
C Cl <sub>4</sub> (anhydrous)	7.7	0.00 (GBr)			0.15 (YG)	0.20 (BG) 0.17	0.40 (Y) 0.35	0.76 (Y) 0.72	(OY) 0.99
C Cl4 (satrad. with water)	7.3	0.00 (GBr)			0.14 (YG)	(BG)	4	(Y) 0.95	(OY) 0.99
CHCl <sub>3</sub> (anhydrous)	9.0					unmed		(G) 0.96	(Y) 0.99
CHCl <sub>3</sub> (satrd. with water)	8.3							(G)	(Y) 0.99
Phenol** (80%)	6.6	,					0.68	3 —	(DG) 0.98
Lutidine	8.3				-		(Y)		(G) 0.98
Collidine	7.4	0.00	0.05			garden)	-		(G)
Benzine (bp. 45-60°C)	9.6	(G)	(Y) 0.03	0.20		-	0.24		0.99
Benzene: Benzine (1:1)			(YG)	(BG)			(Y)	(Y)	(OY)

<sup>\*</sup> Y: yellow, OY: orange-yellow, GY: greenish yellow, YG: yellowish green, BG: blueish green, DG: dark green, GBr: greenish brown.

<sup>\*\*</sup> Operated in coal-gas stream.

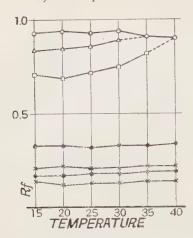
Fig. 2. Effect of temperature.

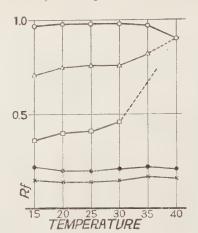
Quantity of sample: 100. γ.

Time for development: ca. 20 minutes.

a) Developed with toluene

b) Developed with CCl4





Signature of the spots  $\begin{cases} \bigcirc \text{ carotenoid (orange yellow)} \\ \triangle \text{ carotenoid (yellow)} \\ \bigcirc \text{ carotenoid (yellow)} \end{cases}$ 

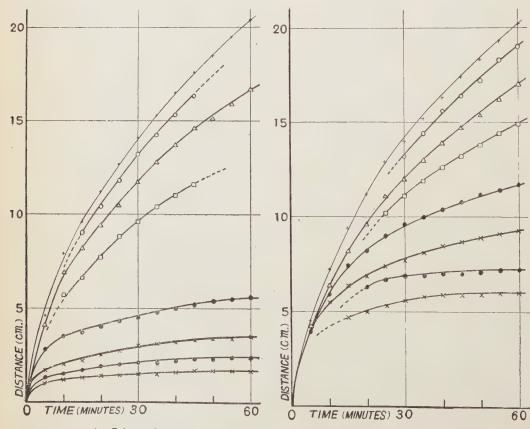
Chlorophyll a X Chlorophyll b

Fig. 3. Progressive change of the spots in the course of development.

a) Developed with toluene, Quantity of

sample: 100 y.

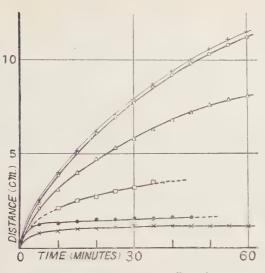
b) Developed with toluene; quantity of sample: 300 γ.



+: Solvent front.

c) Developed with CCl<sub>4</sub>, Quantity of sample: 100 γ.





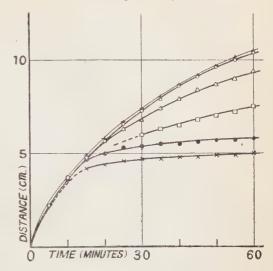
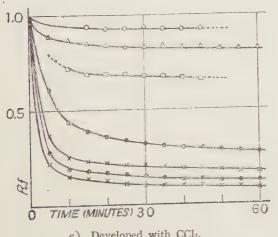
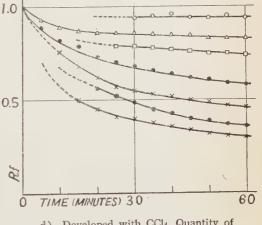


Fig. 4. Change of the  $R_f$  values. a) Developed with toluene, Quantity of sample: 100  $\gamma$ 

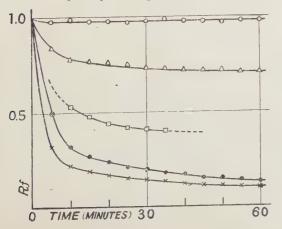
b) Developed withtoluene, Quantity of sample: 300 γ.





c) Developed with CCl<sub>4</sub>, Quantity of sample: 100 γ.

d) Developed with CCl<sub>4</sub>, Quantity of sample: 300 γ.



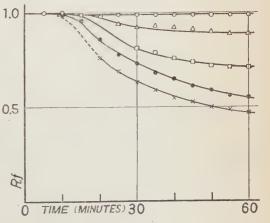
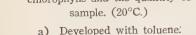
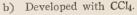
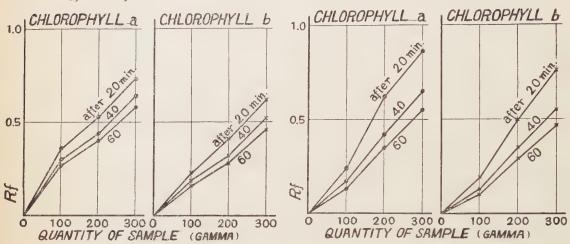


Fig. 5. Correlations between R<sub>f</sub> values of cnlorophylls and the quantity of sample. (20°C.)







of sample quantity. These correlations are shown in Fig. 5, which were drawn up as follows; based on the results of Fig. 4, the corresponding  $R_f$  values of colorophylls were plotted at every same moment in the course of development, when the sample quantity was 100, 200 and 300  $\gamma$  respectively. Relying upon these figures, the relative change of  $R_f$  values of Chlorophylls corresponding to the sample quantities was approximately rectilinear, in every case.

#### Considerations

Strain et al.<sup>(3)</sup> have already discussed in detail on the behaviors of the leaf pigments during the development by means of column chromatographic method. According to their investigations, the developed status of these pigments were remarkably influenced by many factors, especially on contamination of some colorless impurities (alcohols, amides, fatty acids etc.) in the chromatographic system. The sample which was employed at present investigation, was indeed very crude. It might contain much of the impurities effective on chromatographic results, so that the data revealed on this report are no more valuable but some special examples under some complicated conditions. Datailed investigations are therefore, in progress on the behaviors of purified pigments, and also on the influences of several conditioning factors. At present, it may be that these preliminary informations will be of some value for a convenient separation of the leaf pigments, and further, for establishment of a quantitative estimation procedure of chlorophylls, from the results, which are given in Fig. 5.

Cordial gratitude is expressed here, for Mr. T. Chiba, Biological Institute of Kyūshū Univ., of his encouragement and helpful suggestions, and also for Miss M. Saito, of her kind assistance on this investigation.

#### Literatures cited

- 1) Tswett, M., Ber. d. Deut. botan. Ges., 24, 384 (1906).
- Strain, H. H., "Chromatographic adsorption analysis." Interscience Publishers, Inc., New York, N. Y. (1942).
- Strain, H. H., Manning, W. M., and Hardin, G., Biol. Bull., 86, 169 (1944).
   Strain, H. H., Ind. Eng. Chem., Anal. Ed. 18, 605 (1946); ibid., 42, 1307 (1950).
   Strain, H. H., Anal. Chem., 21, 75 (1949): ibid., 22, 41 (1950).

#### 総 括

- 1) ベンゼン系炭化水素並びに四塩化炭素は 緑葉色素のペーパー・クロマトグラフーに最も適した展開剤 であり、シロツメクサ葉よりメタノール・アセトン混液を以て抽出した粗色素を試料とし、クロロフィル a, b 及び3種のカロチノイドを明瞭に分離し得る。
- 2) この方法による展開は 30°C 以下で実施しなければカロチノイドの班点に相当の**攪乱** を受ける。
- 3) クロロフィルの展開曲線はカロチノイドのそれと性格を異にし、展開時間の**経過に作って漸次勾配の減衰が著しくな**る。
  - 4) クロロフィルの Rf 値は原点の試料量の増加に作つて直線的に増大する。

# The Effects of 2.4-Dichlorophenoxyacetic Acid Upon the Growth of Roots

## By Hayashi Ono\*

小野 林: 根の発育に及ぼす 2.4-D. の影響

In the course of the experiments concerning the effects of 2.4-Dichlorophenoxyacetic acid (2.4-D.) upon the germination of seeds, the author frequently observed various abnormal or weak developments of the roots of germinated seeds. The main object of the present communication is to elucidate the effect of 2.4-D. upon the growth of root in several plants.

#### 1. Experimental Methods.

Solutions of 2.4-D. in varying concentrations ranging from 2 to 0.00001% were prepared and pH was adjusted to 7.0. *Lemna* sp., *Zea Mays* L., and *Oryza sativa* L. were used as test materials. In the case of *Lemna* plant, which is composed of three or four individuals chaining one another, the individuals were separated, the

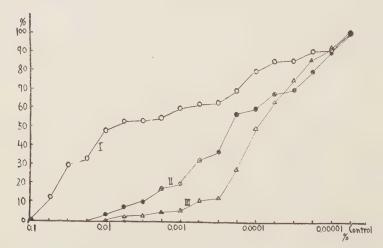


Fig. 1. The effects of 2.4-D. on the growth of *Lemna* sp. Abscissa indicates the concentration (%) of 2.4-D. and ordinate indicates the rate of growth compared with those of the control represented 100%.

- I. Number of individual bodies.
- II. Number of the roots formed.
- III. Length of roots.

<sup>\*</sup> Biological Institute, Faculty of Culture, University of Kyushu.

roots were cut off and the materials were cultured at room temperature in the solutions containing 2.4-D. in varying concentrations. After ten days the number of the individuals as well as the number and growth of roots were examined. In the case of Zea Mays and Oryza sativa, the seeds were introduced in Petri dishes with filter paper at the bottom and the solution of 2.4-D. was added till the seeds were half immersed. Seven days after, the dishes were placed either in the light or in the dark room (at room temperature) and the rate of germination, the length of coleoptiles and the number as well as the length of the roots formed were examined.

#### 2. Results.

a) Lemna sp. As will be seen from Fig. 1, complete death of Lemna plant was brought about when 2.4-D. was supplied in concentrations higher than 0.1%. The formation and the growth of roots were observed when the concentration of 2.4-D. was lower than 0.01%. However, even in the highly diluted solution, such as 0.00001%, the increase in the individual bodies, the formation and the growth of roots were somewhat smaller than those of the control. Thus it is evident that the

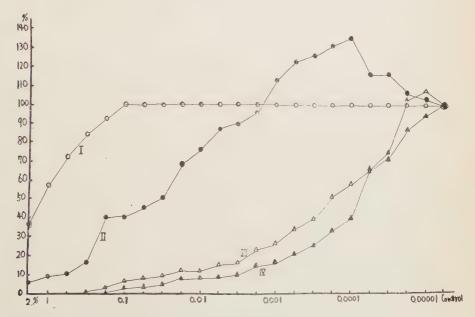


Fig. 2. The effects of 2.4-D. on the germination and early growth of Zea Mays L. Abscissa indicates the concentration of 2.4-D. and ordinate indicates rate of germination and early growth compared with those of the control represented 100%.

- I. Rate of germination.
- II. Length of coleoptiles.
- III. Number of the roots formed.
- IV. Length of roots.

formation and the growth of roots are always more strongly affected by 2.4-D. than the growth of individual bodies. In 0.01% solution, for instance, the rate of the increase in the individuals was 48%, whereas the rate of root formation and that of root growth were only 3 and 0.9% respectively.

b) Zea Mays. As can be seen from Fig. 2, the rate of germination was very low when the concentration of 2.4-D. was higher than 0.2%, but reaches the normal value (100%) when it falls less than 0.1%. As a whole, the formation and the growth of roots were more markedly inhibited by 2.4-D. than the growth of coleoptile. The growth of coleoptiles was promoted by 2.4-D. at concentrations less than 0.001%, and the maximum promotion was observed at 0.0001%. In dilute solutions, many short and small roots were formed and the growth rate of which was comparatively lower. The results obtained both in the light and in the dark were the same, but in the light room the roots and the coleoptiles formed were shorter and starker.

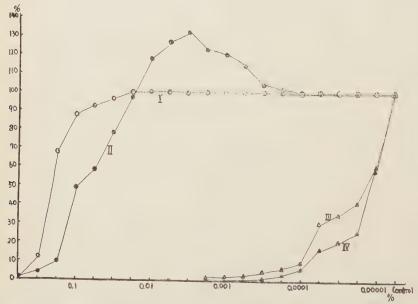


Fig. 3. The effects of 2.4-D. on the germination and early growth of Oryza sativa L. Abscissa indicates the concentration of 2.4-D. and ordinate indicates rate of germination and early growth as compared with those in the control represented 100%.

- I. Rates of germination.
- II. Length of coleoptiles.
- III. Number of the roots formed.
- IV. Length of roots.

c) Oryza sativa. As can be seen from Fig. 3, the rate of germination and of growth of coleoptile in Oryza sativa was similar to that of Zea Mays in principle, but the mode of the growth of roots differed markedly from that of the latter. The growth of coleoptiles was maximum in the presence of 0.005% 2.4-D., but the growth of roots was never observed at this concentration, indicating that the root is more sensitive to 2.4-D. than the coleoptile. The sensitivity of the growth of root was more marked in Oryza than in Zea. For example, in 0.0001% solution, the relative values of the number and the length of root in Zea were 58 and 48% respectively, whereas those in Oryza were 10 and 6% respectively.

As mentioned above, the growth of root of three plant species tested was more strongly inhibited by 2.4-D. than the other parts of the body.

#### References.

1. Bein, M.: Chem. Abst. 48: 7372. 1948. 2. Dhillon, A.S.: Bot. Gaz. 112: 199. 1951. 3. Haglorg, A.E.: Science 111: 91. 1950. 4. Hagen, C.E.: Science 110: 116. 1949. 5. 川田信一郎: 科学 21: 332. 1951. 6. 川上 繁: 農業及園芸 26: 467. 1951. 7. 笠原安夫: 農業及園芸 23: 503-506. 1948. 8. 笠原安夫: 農業及園芸 24: 515. 1949. 9. 笠原安夫: 農業及園芸 25: 415. 1950. 10. 笠原安夫: 農学研究 38: 27. 1949. 11. Low, C.H.: Science 105: 287. 1947. 12. Mitchelland, J.W.: Science 106: 266. 1947. 13. Murray, M.B.: Bot. Gaz. 110: 404-426. 1949. 14. Nance, J.F.: Science 109: 174. 1949. 15. 小野 林: 農業及園芸 25: 685. 1950. 16. Sell, H.M.: Plant Physiol. 24: 215. 1949. 17. Smith, G.F.: Plant Physiol. 23: 83. 1948. 18. 竹松哲夫: 農業及園芸 24: 593. 1949. 19. Tullis, E.C.: Science 111: 90. 1950. 20. Weintrauf, R.L.: Science 495. 1950. 21. Went, F.R.: Science 111: 579. 1950. 22. Wolf, D.E.: Bot. Gaz. 112: 188. 1951.

## 摘 要

トウモロコシ、稲、ウキクサ科植物の根の発育に及ぼす 2.4-D. の影響について 実験した。ウキクサ科植物は個体の増加に比較して根の形成及び発育は著しく 2.4-D. で阻害され、特に高濃度に於て著しい。トウモロコシ、稲については種子の発芽時の子葉鞘と根の発育の関係を見た。何れも根の発育は著しく阻害され、それに比較して子葉精の発育は 0.01%~0.0001% 前後に於て促進される。稻はトウモロコシに比較して根の発育は更に阻害され、0.001% に於て始めて根の発育が見られる。何れの場合に於ても、根は個体の発育や子葉精の発育に比較して 2.4-D. に対する感受性が强く、特に高濃度に於て阻害される。

# On the adaptation of yeast to copper.

III. Further studies on the ribonucleic acid from the copper resistant yeast cells.\*

By T. Minagawa, N. Yanagishima, Y. Arakatsu, S. Nagasaki, and J. Ashida.\*\*

皆川貞一,柳島直彦,荒勝 豊,長崎泉吉, 芦田譲治: 酵母菌の銅に対する適応的変異現象の研究 III. 銅抵抗菌のリボ核酸に関する研究続報

From a strain of Saccharomyces ellipsoideus a copper-resistant strain was derived through the cultivation on (or in) the copper-containing medium (1). When cells of the parent strain were treated with the extract from the resistant cells they showed a better growth in copper-containing media than when they were treated with the extract from the normal cells. It was found that the ribonucleic acid (RNA) contained in the extract obtained from the resistant cells was responsible for the effect; the effect being nullified on depolymerizating the RNA with the ribonuclease (2).

The present report deals with the determination whether the extract from the resistant cell contains other effective principles which are not attacked by the ribonuclease, and whether the extract from the normal cells contains any amount of the effective principle which is attacked by the ribonuclease. Heat stability of the effective substance, which throws some doubt on ascribing the effect to the RNA, is also tested.

#### Material and methods

The strain of S. ellipsoideus used is the same as in the previous reports (1, 2). The strain taken from the brown colonies growing well on the MH-agar medium\*\*\* containing 1 millimole (mM) of  $CuSO_4$  per 1. and kept in the medium of the same composition was designated as  $R_{Ib}$ . The  $R_{1b}$  strain used in the present experiments is the one kept subculturing for about a year. In order to reduce the extra copper

<sup>\*</sup> This work was aided by the Grants in Aid for Fundamental Research from the Ministry of Education.

<sup>\*\*</sup> Botanical Department, Faculty of Science, Kyoto University and Biological Department, Faculty of Science and Technology, Osaka Municipal University.

<sup>\*\*\*</sup> Cane sugar 100 g., peptone (Funai) 5g., KH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub> 5g., MgSO<sub>4</sub> • 7H<sub>2</sub>O 2g., wort of 8 Bé 360 ml., distilled water 1000 ml., agar 2%.

content of the cells when the cell extract was made,  $R_{1b}$  was subcultured beforehand once or twice in the MH-medium containing no copper, the culture being denoted by  $R_{1b(0)}$  or  $R_{1b(0)}$ , respectively.

The cell extract was made as follows: Cells cultured at 30°C. in the MH-liquid medium either with or without addition of copper were gathered by centrifugation, washed three times with distilled water, and dried at 40°C. under reduced pressure. The dry yeast thus obtained was suspended in distilled water and heated in a boiling water bath for 30 minutes. After cooling, the supernatant was separated by centrifugation.

The RNA was isolated by the method after Clarke and Schryver (3) as follows. After treatment with cold and hot ethanol, extraction was made with 10% solution of NaCl at 60°C. for 5 days. The precipitate obtained by the addition of ethanol was dissolved in water and reprecipitated by ethanol. After this procedure was repeated several times, the precipitate was dissolved in 0.5% solution of Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> at 80°C for 2 hours, and the precipitate was centrifuged out. By adding acetic acid and ethanol to this solution, precipitate was obtained, and then redissolved in distilled water. After the repetition of this procedure, the precipitate was washed with ethanol and ether, and dried under reduced pressure.

The effect of the cell extract and their fractions was tested as follows: One loopful of the parent strain, cultured for 48 hours on the MH-agar, was suspended in 1 ml. of the solution to be tested and incubated for 2 to 3 hours at 30°C. That no cell division had occurred was ascertained by the microscopic observation. The cell suspension was properly diluted and added to the melted MH-agar medium at 47°C. This well-mixed cell-containing medium was divided into several lots, in order to test on different copper concentrations. Each lot was poured into an Erlenmeyer flask which contained a calculated volume of sterilized 100 mM/1. CuSO<sub>4</sub> solution, and the mixture was plated in 3 Petri dishes, 20 ml. each. After about 40 hour incubation at 30°C. the number of visible colonies was counted for ten 1 cm. squares per dish. The per cent ratio of the colony number in the copper media to that in the copper-free one represented the degree of resistance and was named the survival ratio.

#### Results

1. The extracts were prepared from 5% suspensions of dry powdered cells of the parent strain and of  $R_{1b(0)}$ . Each of the extracts was divided into two portions, the one of which was mixed with the same volume of solution of the ribonulease\* dissolved in M/15 phosphate buffer of pH 7.3, and the other with the same buffer

<sup>\*</sup> The ribonuclease was prepared by Egami et al. for their studies (5).

solution containing no enzyme. These four kinds of solutions were kept for 2 hours at 60 to 65°C., followed by heating at 100°C. for 30 minutes to inactivate the enzyme (4). Then pH was adjusted to 5.6 by adding diluted phosphoric acid.

Table 1. Survival ratios in 1 mM CuSO<sub>4</sub>-MH-medium of a strain of S. ellipsoideus aften the treament by the extracts from cells of the same strain and of a resistant strain  $(R_{1b(0)})$  derived from it.

	Original extract	Extract treated by the ribonuclease
Parent strain R <sub>Ib(0)</sub>	71 101	73 66

The survival ratio in 1 mM Cu-MH medium was determined after the treatment of the cells by the above-mentioned solutions. The results are shown in Table 1. The  $R_{1b(0)}$  extract not digested by the ribonuclease made all of the sensitive cells to be viable in 1 mM Cu. But if it was acted upon by the enzyme, the survival ratio became of the same order as in the case of the extract from the sensitive cells. So the substance which is depolymerized by the enzyme, and no other, is responsible for the differential effect between the two extracts.

The survival ratio does not alter even if the extract from the sensitive cells is digested by the ribonuclease. Hence there is no appreciable amount of the effective substance, sensitive to the ribonuclease, in the extract from the parent strain cells. It can, therefore, be concluded with high probability that some form of RNA which makes sensitive cells more viable in the copper medium is extractable only from the copper resistant cells.

Table 2. Survival ratios of the sensitive cells in 1.2, 1.3, 1.4, and 1.5 mM Cu-MH-media after the treatment by the RNA sterilized at 50 and 100°C.

Temperature		50	°C		100°C					
Cu. Concn.	1.2	1.3	1.4	1.5	1.2	1.3	1.4	1.5		
219	96.5	104		_	100	103				
213	96.5		76.0		98.0	-	80.7			
215	94.0	_		0	100			. 0		

2. The RNA\* from  $R_{1b(00)}$  was dissolved 0.1% in the extract from commercial

<sup>\*</sup> This was exposed to 60°C. at extraction according to Clarke-Schryver and to 80°C. at purification after Sevag et al. (7).

baker's yeast\* which showed no effect on the viable ratio (6). To see the effect of high temperature on the activity of the RNA, a lot of the solution was sterilized at 100°C., 30 minutes twice, and another lot at 50°C., 30 minutes thrice. As shown in Table 2, the activity of the RNA from the resistant cells is not lowered by heating at 100°C. The extracts used in the experiments reported before (2) and in the first part of this paper were subjected to 100°C. for a considerable while during their preparation. Since RNA is not reported to be completely heat stable, some doubt is inevitable as to ascribing the activity of the extract to the RNA. But as is now shown, the active RNA moiety which could be inactivated by the ribonuclease retains its activity even after repeated sterilization at 100°C. So it is concluded that even if the RNA be denaturated by the temperature of 100°C. at all, its specific activity of raising copper resistance is not impaired to an appresiable degree by the adopted way of sterilization.

#### Summary

- 1) The activity of the extract from the copper-resistant cells to raise the viability of the sensitive cells in copper containg media depends solely on the presence in the extract of a substance (of substances) readily inactivated by the ribonuclease. The extract from sensitive cells does not practically contain the active substance.
  - 2) The activity of the RNA moiety is not lost on heating at 100°C, for 1 hour.

#### Literature Cited

- (1) Yanagishima, N., Minagawa, T., and Sasaki, T. Physiol. and Ecol. 3, 79, 1949.
- (2) Minagawa, T., Yanagishima, N., Arakatsu, Y., Nagasaki, S., and Ashida, J. Bot. Mag. Tokyo, 64, 65, 1951.
- (3) Clarke, G. and Schryver, S.B. Biochem. J. 11, 319, 1917.
- (4) Kunitz, M. J. Gen. Physiol. 24, 15, 1940.
- (5) Egami, F., Shimomura, M. and Yagi, Y. et al. Jap. J. Exp. Med. 20, 527, 1950.
- (6) Minagawa, T., Yanagishima, N., Arakatsu, Y., Nagasaki, S., and Ashida, J. (Unpublished)
- (7) Sevag, M. G., Luckman, D. B., and Smolens, J. J. Biol. Chem. 124, 425, 1938.

<sup>\*</sup> The addition of the extract faciliated the colony counting, as the visible colonies grew larger by it.

# ウシグソヒトヨ (Coprinus macrorhizus Rea f. microsporus Hongô)\* の性系統に就て\*\*

## 木 村 劼 二\*\*\*

Katsuji KIMURA: On the sexual strains of Coprinus macrorhizus Rea f. microsporus Hongô.

著者 (1951) はさきにウシグソヒトヨ (Coprinus macrorhizus Rea f. microsporus Hongô) は四極性であり、本菌では異る性系統が容易に認められたことを報告したが、次に多数 の野生の子実体を用いウシグソヒトヨの性系統に関する実験をやや詳細におこなつた 結果を報 告する。

#### 供試材料と実験方法

同一及び異つた場所に生じた野生子集体 15 箇を実験に供したが、各子集体の採集場所その他の説明は 次のようである (第1表)。

子実体 符 号	採集年月日	採 集 地 名	距離	関係
M <sub>1</sub>	1949. 9. 21	倉敷市 南 町	,	
$M_2$	" 10. 22	"	M <sub>1</sub> & y 30 cm	
$M_3$	1950. 9.30	"	M <sub>1</sub> & y 5 m	
B <sub>1</sub>	1950. 9. 20	倉敷市 白楽町		自楽町は南町より 南〜 500 m
B <sub>1</sub> ′	11 11 11	"	B <sub>1</sub> より 50 cm	113 - 000 111
$B_2$	11 11 11	".	B <sub>1</sub> より西~ 100 m	
B <sub>3</sub>	" 9. 24	"	B <sub>1</sub> より北へ 150 m	
Y <sub>1</sub>	1950. 10. 9	倉敷市 安 江	,	安江は南町より 西へ 1 km
Y1'	11 11 11	" .	Y <sub>1</sub> & 9 1 m	ħd - ∠ I VIII
$Y_2$	11 11 11	"	Y1 より南へ 100 m	
Та	1950. 3. 15	玉島町煙草試験地 (溫床內)	玉島町は倉敷市より西	i~ 11.5 km
T <sub>1</sub>	1950. 9. 21	岡山市 津 島	'	岡山市は倉敷市よ
$T_2$	<i>n</i> 9. 29	"	T <sub>1</sub> k y 20 cm	リ東〜 18 km
K <sub>1</sub>	1950. 10. 12	岡山市 上伊福		上伊福は津島より
$K_2$	11 11 11	"	K <sub>1</sub> より北へ 100 m	東へ 1 km

第 1 表 供試子実体採集記錄

<sup>\*</sup> ウシグソヒトヨ (新称) はネナガノヒトヨタケ (Coprinus macrorhizus Rea) の一新品種と見なされ 滋賀大学, 本郷火雄氏未発表のものである。尙, 本郷氏の鑑定の結果, さきに本誌 64 卷 753-754 号 81 頁 に著者がキララタケとして発表したものはこのウシグソヒトヨに相当するものであつた。

<sup>\*\*</sup> 本研究の費用の一部は文部省科学研究費 (課題番号 47144) による。

<sup>\*\*\*</sup> 岡山大学理学部生物学教室

上記の各子実体から 10 系統以上の単胞子培養をおこない、これを用いて子実体別にあらゆる組合せで 2 系統づづ混合培養した。 そして clamp connection 形成の有無を鏡検して各子実体の四極性を定めた (第 2 表)。

子実体		四極	性	
符 号	I (AB)	II (ab)	III (Ab)	IV (aB)
$M_1$	1*, 2, 6, 7, 9, 12, 15, 16	8*, 10, 11, 14, 17	3*, 4, 18	5*, 13
$M_2$	1, 2*, 4, 5, 11, 13	3*, 7, 9, 10, 18, 19, 20	6*, 12, 16	8*, 14, 15, 17
$M_3$	1*,6	2*, 5, 7, 8	3*, 9, 10	4*
В1	1*,6	3*, 9, 10	2*, 4	5*, 7, 8
B <sub>1</sub> '	1*, 3, 6, 10	5*,8	2*, 4, 7	9*
$B_2$	1*, 6, 8, 9	2*,3	4*,10	5*,7
B <sub>3</sub>	1*, 2, 3, 5, 7, 8, 9	6*	4*	10*
Y <sub>1</sub>	1*, 3, 4, 6	7*, 10	2*, 5, 8, 9	11*, 12
Y1'	2*, 5, 7, 10	4*,6	1*, 9	3*,8
$\overline{Y_2}$	8*, 10	1*,6	2*, 3, 5	4*, 7
Ta	2*, 4, 6, 8, 10, 11	7*	5*	1*, 3, 9
$T_1$	1*, 4, 5, 8	2*, 6, 12	3*,7,9,10	11*, 13, 14
	1*, 3, 4, 5, 10, 11, 16	2*, 6, 7, 8, 9, 12, 13, 18	14*, 17	15*
K <sub>1</sub>	1*, 3, 7	2*,9	4*, 5, 10	6*, 8
$K_2$	1*	3*, 4, 5, 7, 9	2*, 6, 8	10*

第2表 各子実体の性群並にその所属培養番号

次に第 2 表で\*印のある系統番号のものを各子実体の四極性代表菌糸とし、これを使つて異る子実体間であらゆる組合せで交配実験をおこないその接合狀態から性系統の異同を決めた。

#### 結果と考察

本実験結果の大要は第3表のようであり、第4表は結果の一部を詳細に示したものである。

この結果からわかるように全く同一の性因子をもつていたのは  $Y_1$  と  $Y_1'$  だけで他は全部発生地の遠 近,発生時日をとわず互いに性系統を異にしたのであるが、本菌では性系統が殆んど無制限といつてよい程 多いのではなかろうか。

また本菌では多くの性系統が大きな二つの群に分れるようである。 即ち同じ群に属する性系統間の交配では接合が見られたが、異る群に属するものの間では如何なる組合せをしても接合がおこらなかつた。そしてこの二群の間には何ら地域的又は距離的関係は認められなかつた。 子実体の形態に殆んど差がないこの二群が嚴密に同一品種に属するものであるかどうかについては今後調査したい。

第3表 異る子実体間の交配実験結果(その-	笛	3	表	果る	子宝休間	の交配実験	結果	(その一
-----------------------	---	---	---	----	------	-------	----	------

子実体 符 号	$M_1$	$M_2$	$M_3$	Bı	B <sub>1</sub> ′	$B_2$	$Y_2$	Та	Т1	$T_2$	В3	Y <sub>1</sub>	Y <sub>1</sub> ′	К1	$\mathbf{K}_2$
M <sub>1</sub>		0	0	0	0	0	0	0	0	0	×	×	×	×	×
$M_2$	0	11	0	$\bigcirc$	0	0	$\circ$	0	$\circ$	0	×	×	×	×	×
$M_3$	0	0	ff	0	0	0	0	0	0	0	×	×	×	×	×
$B_1$	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	×	×	×	×	×
B <sub>1</sub> '	0	0	0	0	77	0	0	0	0	0	×	×	×	×	×
$\mathbf{B}_2$	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	×	×	×	×	×
$Y_2$	0	0	0	0	0	0	11		0	0	×	×	×	×	×
Ta	•	0	0	0	0	0	•	11	0	0	×	×	×	×	×
$T_1$	0	0	0	$\circ$	$\circ$	$\circ$	0	$\bigcirc$	11	0	×	×	×	×	×
T <sub>2</sub>	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	×	×	×	×	×
B <sub>3</sub> ·	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	11	0	0	0	0
Y <sub>1</sub>	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	11	11	0	0
Y1'	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	11	17	0	0
K <sub>1</sub>	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	0	11	0
$K_2$	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	0	0	"

表中の  $\odot$  印は第5表のような一部共通の性因子を有した場合、n、 $\bigcirc$ 、 $\times$  印は それぞれ第4表の  $Y_1 \times Y_1'$ 、 $Y_1 \times B_3$ 、 $Y_1 \times M_1$  の結果のような場合を意味する。

第4表 異る子実体間の交配実験結果 (その二)

培養			, Y	1'				$B_3$				N	11	
38, 11	2K 10 L	2	4	1	3	1	6	4	10		1	8	3	5
	1	1 00,0	+	~	_	+	+	+	+		_	_	grants.	
37	7	+	_	_	-	+	+	+	+		-	_		
Y <sub>1</sub>	2	_	_	-	+	+	+	+	+		_	-	_	
	11 -			+		+	+	+	+	1	-	-	_	

<sup>+</sup> 印は clamp connection の形成を, - 印は不形成を示す。

次に異る性系統の間に一部共通の因子の存在することも子実体の  $Ta \times M_1$  及び  $Ta \times Y_2$  の実験結果からわかつた(第 5 表)。そして第 3 表に示すように  $M_1 \times Y_2$  では組合せ全部が接合するから子実体  $M_1$  の有する性因子を AaBb とすれば Ta は Aa'B'b',  $Y_2$  は A''a''B'b'' であるといえよう。Ta は  $M_1$ ,  $Y_2$  両者より約 11.5 km をへだてた場所で採集されたのであるが,このような一部共通因子を有する性系統は近距離間のものでは見られなかつた。 しかしより多くの子実体を実験に供した時は近距離間に於てもこのような場合が認められるかも知れないが,これらは今後の研究にゆずることにする。

第 5 表 異る子実体間の交配実験結果 (その三)

培 養 系 統		$M_1$				Y <sub>2</sub>			
79	SE SR NOL	1 (AB)	8 (ab)	3 (Ab)	5 (aB)	8 (A"B")	1 (a"b")	2 (A''b'')	4 (a''B')
Та	2 (AB')	_	+	-	+	_	+	+	_
	7 (a'b')	-1-	+	+	+	+	+	+	+
	5 (Ab')	_	+	-	+	+	+	+	+
	1 (a'B')	+	+	+	+	-	+	+	_

### 摘 要

ウシグソヒトヨ (Coprinus macrorhizus Rea f. microsporus Hongô) の野生子実体 15 個体についてそれぞれの性系統をしらべたが、全く同一の性因子をもつていたのは 2 個体 だけで他は全部互いに異るものであつた。これらの性系統は性因子に関し二つの群に分れ、両 群の間の交配では接合が全くおこらなかつた。また遠くへだたつた個体間に一部共通の性因子が存在する場合があることも見出された。

終りに本菌の学名に関して科学博物館、小林義雄博士並びに滋賀大学、本郷次雄氏に御世話になったことを附記して感謝の意を表する。

#### Summary

- 1. Determination of sexuality in *Coprinus macrorhizus* Rea f. *microsporus* Hongô was made using fifteen wild fruit-bodies collected from different places in Okayama Prefecture.
- 2. These strains were, with one exception, proved to be of different constitution in sexuality.
- 3. These sexual strains were classified into two distinct groups which were quite intersterile; in all possible combinations of monosporous mycelia from these different groups was formed no clamp connection.
- 4. In somewhat remoted places were found two exceptional strains which were partially identical with certain other in their genic constitution for their sexuality.

#### 引用文献

1) 木村劼二 (1951): キララタケの性に就て (予報), 植物学雑誌 64, 81-86

# 禾 穀 類 の 核 形 態 学 第 5 報 大麥の核型変化について<sup>1) 2)</sup>

#### 生 沼 巴

Tomoe OINUMA: Karyomorphology of Cereals.
V. Karyotype alteration in barley varieties.

大変 (Hordeum) の染色体に関する研究は、NAKAO (1911)、UBISCH (1921)、KIHARA (1924)をはじめ、多くの研究者により報告された。しかし核型についてはまとまつた研究はなく、わずかに Tho & Levan (1950)の報告があるにすぎない。しかし Tho & Levan の研究は、解離根端のなすりつけ法によつたものであり、その染色体の形態は 正常性を欠くうらみがある。ひるがえつて大変の遺伝学的研究を見るに 7 つの連鎖群の 究明 は 急速 になされ、その細胞学的裏付けは大変研究の急務となつた。ここにおいて著者は大変の核型を明らかにし、これにより大変の進化と系統を知り、さらに細胞学と遺伝学の 結合を、核型と連鎖群の関係を明らかにすることによつて達成せんものと期し、1944年以来この方面の研究に従事した。しかして幾多興味ある結果を得るに到り、ここにその一部を報告する次第である。

#### 材料及び方法

研究に用いた材料は、著者が東北大学在勤中に、同大学教授小野知夫博士より惠与されたもの、岡山大学附属大原農業研究所副所長教授高橋隆平博士より分譲されたもの、及び大日本麥酒(現朝日)株式会社山本幸雄博士から譲渡された大麥品種である。ここに材料を惠与下さつた 芳名を記し、謝意を表明したい。実験の方法については、 著者の禾穀類の研究に関する第 1 報を参照されたい。

# 觀 察

先に著者は野生大変の核型研究において、 $a_1a_1$ 、 $a_2a_2$ 、及び  $a_3a_3$  の核型を明らかにした。栽培大変についても同様な変化があるが、さらに  $a_4a_4$ 、 $a_5a_5$  の核型も出現する。これらは次の如くである。

#### a) a<sub>1</sub>a<sub>1</sub>型(第1型)

この核型では 7本の基本染色体は,次の如き形態を示す。  $a_1$  は約  $6\mu$  あり,submedian で長腕端部に第二次狭窄をもつ。 b は submedian で長腕の端部に第二次狭窄をもつほか,短腕の中部にもこれをもつ。そして短腕に小球形の附蓋体がある。 c は submedian で長腕端部に第二次狭窄をもつ。 d は median。 e は submedian 又は subterminal で,長腕は d のそれより長い。 f は submedian で,短腕端部に大形西洋梨型の附隨体がある。この附隨体と短腕は

<sup>1)</sup> 岡山大学理学部生物学教室植物形態学業績 No. 15.

<sup>2)</sup> 科学研究費による研究。課題番号 No. 47045.

Table 1. Barley varieties of the a1a1 Karyotype.

Strain	Variety	Row of spikelet	Locality	Given by
100	Böhmia (ボヘミア)	2	Europe	Ono
119	Plumage Gerste (仏国プリムス)	2	Sweden	11
173	Chile chevallier (チリシバリー)	2	Chile	11
176	Denmarkkenia (デンマークケ=ア)	2	Denmark	"
188	Australian chevallier (濠洲シバリー)	2	Australia	"
243	H.E.S. (Hindu-Kush Exp. Samm.) No. 1	2	Hindu-Kush	"
304	Tschermak	2	Europe	Dai Nippon Brewery
308	Australian chevallier	2	Australia	11
325	var. nigricans Kcke. (イラク黑麥)	2	Afghanistan	Takahashi
327	var. erectum (金独)	2	Europe	11
337	var. Nudideficiens	2 (deficiens)	Europe	11
338	Russian No. 79 (露国 79号)	2 (deficiens)	Russia	11
12	Marumi No. 1 (丸実 1号)	6	Japan	Ono
21	Hosogara No. 2 (細稈 2号)	6	Japan	11
31	Goseshikoku (五畝四石)	6	Japan	lt.
50	Kosaba No. 1 (小鯖1号)	6	Japan	11
125	American No. 4 (米国 4号)	6	U. S. A.	17
126	American No. 3 (米国 3号)	6	U.S.A.	"
132	American No. 10 (米国 10号)	6	U. S. A.	11
140	American standard (米国標準姿)	6	U. S. A.	"
198	22~1 (Strain of Dai Nippon Brew.)	6	Manchuria	17
249	Kôshurei Gol (公主嶺ゴール)	6	Manchuria	11
257	Karafuto Marumi No. 1 (樺太丸実1号)	6	Japan	Dai Nippon
303	Mochimugi (糯麥)	6	Japan -	Brewery Yamamoto
313	Chinko No. 83 (珍子 83号) (var. subnudipyramidatum)	6	Japan	Takahashi
315	Bôzumochi (坊主糯)	6	Japan	"
316	Bôzuômugi (坊主大麥)	. 6	Japan	. #
318	Sômugi(僧麥)	6	Korea	"
319	Rokkaku Tamamugi Kôshû (六角王麥広州)	6	Korea	"
326	France No. 1 (var. Coellesta) (仏国 1号)	6	Europe	"
330	Russian No. 54 (露国 54号) (ver. leiorrhynchum)	6	Russia	"

非染色部で隔てられている。g は最短で約  $4\mu$  あり、submedian である。この核型を示すの は觀察 31 系統に達し, うち 6 条種は 19 品種 (Fig. 1. a) 2 条種は 12 品種 (Fig. 1, b) であ る。その品種名は前頁表の如くである。(Table 1.)。

## b) a<sub>2</sub>a<sub>2</sub> 型 (第 II 型)

本核型は a 染色体が第二次狭窄を欠くほか,他は a<sub>1</sub>a<sub>1</sub> 型と同型である。6 条種 18 品種, (Fig. 1, c), 2 条種 10 品種 (Fig. 1, d) が觀察され, その出現率は a<sub>1</sub>a<sub>1</sub> 型に次いで多い。こ の型に属する品種は下記の如くである (Table 2)。

Table 2. Barley varieties of the a2a2 Karyotype.

Strain	Variety	Row of spikelet	Locality	Given by
32	Golden Melon Sai No. 1 (ゴールデンメロン埼1号)	2	Japan	Ono
44	Wase Golden Melon (早生ゴー ルデンメロン)	2	Japan	0
108	Russian No. 3 (露国 3号)	2	Russia	11
116	Russian No. 50 (露国 50 号)	2	Russia	111
144	Harbin Nijô (ハルビン二条)	2	Manchuria	<i>p</i>
149	Frederickson	2	Europe	"
153	Goldthorpe	· 2	Europe	11
202	Shin Ebisu No. 16 (新エピス16号)	2	Japan	" .
301	Himalaya Nijô (ヒマラヤ二条)	2 (hood)	China	"
302	Mochimugi (糯麥)	2	Japan	"
5	Mochimugi(糯麥)	6 .	Japan	11
6	Mochimugi (糯麥)	6	Japan	11
9	Sangatsuko No. 1 (三月子1号)	6	Japan	11
18	Wase Rokkaku (早生六角)	6	Japan	11
<b>2</b> 3	Sangatsu (三月)	6	Japan	77
28	Aizu No. 2 (会津2号)	6	Japan	11.
29	Sekitori No. 3 (関取 3 号)	6	Japan	. 11
34	Hozoroi (穗揃)	6	Japan	tr.
38	Rokkaku No. 1 (六角1号	6	Japan	11
237	H. E. S. No. 39	6	Hindu-Kush	"
247	J-50 (Strain of Dai Nippon Brew.)	6	Manchuria	"
260	Barbless	6	Europe	11
273	Hakubai (白梅)	6	Japan	"
289	Hosomugi (細麥)	6	Japan	11
293	Mukashi Tanikaze (昔谷風)	6	Japan	11
320	Taikôkwang-Shukakyô (大公館一守家橋)	6	China	Takahashi
322	Shanghai ML nude (上海 ML 裸)	6	China	"
332	Mammute (var. Meneliki)	6	Canada	11

## c) a<sub>3</sub>a<sub>3</sub>型(第III型)

a 染色体の第二次狭窄が、長腕の端部より約三分の一の部位にある点で他と異る。6 条種 8 品種 (Fig. 1, e), 2 条種 1 品種 (Fig. 1, f) が觀察され、出現率は減少してくる。その品種名は次の通りである。(Table 3)。

Strain	Variety	Row of spikelet	Locality	Given by
187	Hakata No. 2 (博多2号)	2	Japan	Ono
242	H. E. S. No. 4	6	Hindu-kush	"
248	E.P. No. 973 (Strain of Dai Nippon Brew.)	6	Tibet	"
258	Bôzu No. 1 (坊主1号)	6	Japan	11
314	Chikurin (竹林) (var. brachyatherum)	6	Japan	Takahashi
317	Teisen No. 5 (堤川 5号)	6	Korea	"
321	Hakusha-Taiya (自沙一大治)	6	China	11
323	Shôsô elevated hood (無莊長三叉)	6 (elevated hood)	China	"
328	Tammi (var. pyramidatum)	6	Finland	"
343	Teishû hood (鄭州三叉)	6 (hood)	China	"

Table 3. Cultivated barley varieties having the a3a3 Karyotype.

## d) a<sub>4</sub>a<sub>4</sub>型 (第 IV 型)

この核型は野生麥に見られなかつたもので、a 染色体の長腕は a<sub>3</sub> と同形なるも、その短腕端部に第二次狭窄をもつ点が特異である。この核型のものは現在までの観察では、2 条種の露国 7号 (Strain No. 329. var. nudum L.) だけである (Fig. 1, g)。

## e) a<sub>5</sub>a<sub>5</sub>型(第V型)

この核型も栽培大変ではじめて觀察された。その a 染色体は a<sub>4</sub> 染色体の短腕が, 180° だけ廻転したと同様な形をとる。これも 2 条種のみに出現し, H.E.S. No. 3649 (Strain No. 246, 306, 324) 及び露国 80 号 (Strain No. 331) の 2 品種だけである (Fig. 1, h)。

以上各核型を半模式的に示すと,第2図の如くなる(Fig. 2)。

## f) 異種核型間における a 染色体の形態比較

従来異種核型を比較する際は、相対的になされ、直接的比較を試みることはなかつた。大変における 5 種核型につき、五に異つた核型を有する品種間に交雑をおこない、その  $F_1$  個体について両種核型を直接比較した。この研究に用いた材料は次の如くである(本研究は報をあらためて発表する予定であつたが、都合により合併したものである)(Table 4)。これら  $F_1$  における a 染色体の絶対長の比較は、次図の如くなる(Fig. 3)。これからして  $a_2 < a_1 < a_3 < a_4 = a_5$  なる関係がわかる。

#### 論議

野生大麥の核型は  $a_1a_1$ ,  $a_2a_2$ , 及び  $a_3a_3$  の 3型が区別できたが、栽培大麥はこれもの他に、 $a_4a_4$  及び  $a_5a_5$  も識別できて、明らかに進化のあとを示している。この 5 型と条性変化の関係

William (ich chain TOTAL TOTAL (cir(1)hci(a) (i) (() (i)

Fig. 1. Somatic chromosomes of cultivated barley varieties.

a) 6-rowed a<sub>1</sub>a<sub>1</sub> (Strain No. 257), b) 2-rowed a<sub>1</sub>a<sub>1</sub> (Strain No. 308), c) 6-rowed a<sub>2</sub>a<sub>2</sub> (Strain No. 260), d) 2-rowed a<sub>2</sub>a<sub>2</sub> (Strain No. 202), e) 6-rowed a<sub>3</sub>a<sub>3</sub> (Strair No. 242), f) 2-rowed a<sub>3</sub>a<sub>3</sub> (Strain No. 187), g) 2-rowed a<sub>4</sub>a<sub>4</sub> (Strain No. 329), h) 2-rowed a<sub>5</sub>a<sub>5</sub> (Strain No. 246). ×1500. を見るに、第 I 型と第 II 型は共に多数出現し、かつ 6 条と 2 条の両者を含む。第 III 型は前 2 型に比して出現率は急速に減少するも、なお 6 条と 2 条の両種に見出される。第 IV 型になるとわずかに 1 品種で、2 条種である。第 V 型は 2 品種で觀察され、条性は 2 条に限定される。以上を先に報告した 野生大変と共にまとめると、次の如くなる (Table 5)。

Table 5. Numbers of varieties and rows of spikelets in each karyotype.

a <sub>1</sub> a <sub>1</sub>	37 32 14	2-rowed 6-rowed
a <sub>4</sub> a <sub>4</sub>	1 2	2-rowed

Total 86

この核型とその出現率は、著者の考える第 I型から第 V型までの決定が、自然的であることを物語つている。この結果と著者の野生大変に関する研究結果とから、大変の祖先型はおそらく  $a_1a_1$  の核型をもつ 6 条種であつたと思われる。この祖先型から H. agriocrithon E. ÅBERG  $(a_1a_1)$  が生じ、栽培 6 条の近い祖先となり、他方 H. spontaneum C.  $Koch(a_1a_1)$  が生じ、これが栽培 2 条種を生んだものと考えられる。而して 2 条種は 6 条種から派生したのち、その進化は急速におこなわれて、ついに 6 条種よりも多様な核型を示すに到ったものの如くである。すなわち大変の進化系統は次の如く考えられる (Table 6)。

異種核型の比較は KAGAWA (1929 a) により、小麥 (Triticum) でなされた。すなわち T. monococcum, T. polonicum, T. dicoccum, 及び T. vulgare は、最長最短染色体比 (L:S) が、それぞれ 100:

Table 4. Materials used in the comparative studies of different karyotypes.

Strain	Variety	Row of Spikelet	Karyotype	Strain	Variety	Row of Spikelet	Karyotype
21	Hosogara No. 2 (細稈 2 号)	6	a <sub>1</sub> a <sub>1</sub> (I)	302	Mochimugi (糯麥)	6 .	a <sub>2</sub> a <sub>2</sub> (II)
188	Australian chevallier (濠洲シパリー)	2	a <sub>l</sub> a <sub>l</sub> (I)	187	Hakata No. 2 (博多 2 号)	2	a <sub>3</sub> a <sub>3</sub> (III)
309	Hordeum agriocrithon (wild barley)	6	a <sub>1</sub> a <sub>1</sub> (I)	242	H. E. S. No. 4	6	a <sub>3</sub> a <sub>3</sub> (III)
315	Bôzumochi (坊主 糯)	6	a <sub>1</sub> a <sub>1</sub> (I)	321	Hakusha-Taiya (宣沙一大冶)	6	a <sub>3</sub> a <sub>3</sub> (III)
316	Bôzuômugi (坊主 大麥)	6	a <sub>1</sub> a <sub>1</sub> (I)	323	Shôsô elevated hood(焦莊長三 叉)	6	a <sub>3</sub> a <sub>3</sub> (III)
23	Sangatsu (三月)	6	a <sub>2</sub> a <sub>2</sub> (II)	329	Russian No. 7 (露 国 7 号) (var. nudum)	2	a <sub>4</sub> a <sub>4</sub> (IV)
44	Wase Golden Melon (早生ゴ ールデンメロン)	2	a <sub>2</sub> a <sub>2</sub> (II)	324	H. E. S. No. 3649	2	a <sub>5</sub> a <sub>5</sub> (V)
301	Himalaya Nijô (ヒマラヤ二条)	2	a <sub>2</sub> a <sub>2</sub> (II)	331	Russian No. 80 (露国 80 号)	2	a <sub>6</sub> a <sub>5</sub> (V)

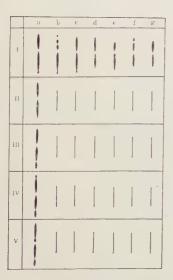


Fig. 2. Basikaryotype alteration in *Hordeum*. (In this figure, homologous chromosomes from b to g do not alter their forms.) × 1500.

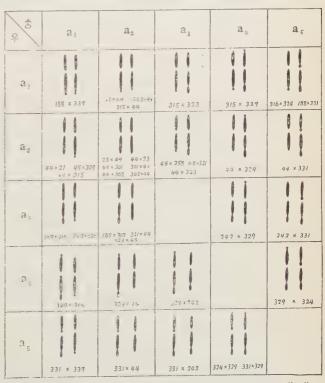
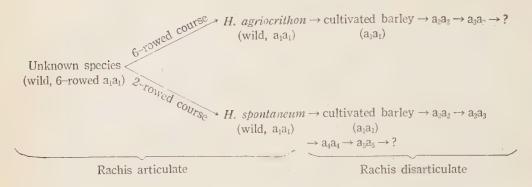


Fig. 3. Comparison of the length of the "a" chromosomes among different Karyotopes. ×1500.

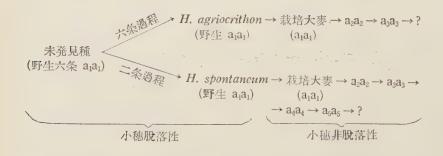
Table 6. Evolution of barley varieties.



68, 100:  $52\sim54$ ,  $100:50\sim51$ , 及び  $100:44\sim50$  となり、これにより Triticum の系統がわかるという。しかし基準とした最長染色体の長さは不変のものでなく(生沼、第 9 報参照)、変化するものである。大変の如き 1 ゲノム性のものでもそうであるが、Triticum の如きはゲノムの変化によりその最長染色体の長さは変化する。ここにおいて、異種核型の比較にあたり、 $F_1$ をつくつてその 核型から、直接的に核型を比較する 方法は新らしい試みというべきである。この比較で、交配前の長さの差は、 $F_1$  においては幾分減殺される傾向がある。これに関し、 $N_{AVASCHIN}$  (1934) は、異つた大きさの染色体をもつた Crepis の種間雑種を研究し、雑種の細胞においては染色体の大きさの差が 両親のそれに比して、著しくないのを 觀察しているが、著者の大変における場合とほほ同様の結果に到達したわけである。

## 要. 約

- 1) 栽培大変 74 品種について核型を觀察し、a<sub>1</sub>a<sub>1</sub>、a<sub>2</sub>a<sub>2</sub>、a<sub>3</sub>a<sub>3</sub>、a<sub>4</sub>a<sub>4</sub>、及び a<sub>5</sub>a<sub>5</sub> の 5 型を区別した。
  - 2) 本研究と前報告との結果を綜合して、大麥の進化を次の如く推論した。



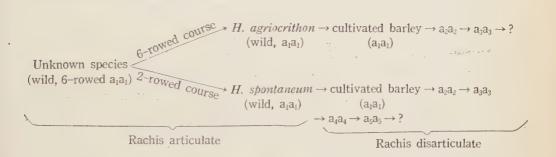
3) 異種核型の比較にあたり、交雑によつて得た  $F_1$  個体の 核型分析 をおこなうことにより、核型の直接比較をなした。これにより 5 型の a 染色体は、 $a_2 < a_1 < a_3 < a_4 = a_5$  なることがわかつた。この方法は核型研究に重要な示唆を与えるものと思う。

#### Summary

- 1) Studies of cultivated barley varieties were made karyomorphologically using seventy-four varieties obtained from all over the world. Five karyotypes were distinguished regarding the forms of the "a" chromosomes as  $a_1a_1$ ,  $a_2a_2$ ,  $a_3a_3$ ,  $a_4a_4$ , and  $a_5a_5$ . In these types, the remaining chromosomes show similar form in each homologous chromosome. Difference of genetic character can not be found among these karyotypes.
- 2) Number of varieties of each karyotype, including formerly reported wild barleys, decrease gradually from the a<sub>1</sub>a<sub>1</sub> to the a<sub>5</sub>a<sub>5</sub>, namely;

Karyotype	Number of variety	1
a <sub>1</sub> a <sub>1</sub>		Two-rowed varieties Six-rowed varieties
a <sub>4</sub> a <sub>4</sub>		Two-rowed varieties.

This tendency to decrease the number of variety seems to show the course of karyotype evolution in *Hordeum*, e. g.  $a_1a_1 \rightarrow a_2a_2 \rightarrow a_3a_3 \rightarrow a_4a_4 \rightarrow a_5a_5$ . Evolution course of karyotype in *Hordeum* is probable as follows;



3) Comparative studies of morphology of the "a" chromosomes among different karyotypes in barley varieties were exactly carried out in one-cells of  $F_1$  plants derived from the crossings between these differently typed varieties. From this study the relationship of absolute length of these "a" chromosomes become clear as follows;  $a_2 < a_1 < a_3 < a_4 = a_5$ .

#### Literature

1) AASE, H. C., and L. R. POWERS, 1926. Amer. Jour. Bot. 13; 367-372. 2) ÅBERG, E. 1938. Ann. Agr. Coll. Sweden. 6; 159-216. 3) ANDRÉS, J. M. 1941. Buenos Aires Univ. Rev. Facult. Agron. Vet. 9, 2; 100-108, Abstract. Exp. Sta. Record. 87 (1942); 359. 4) BERG, K. H. von, 1936. Züchter, 8; 151-158. 5) CHEN, S. L., and P. S. TANG, 1945. Amer. Jour. Bot. 32; 103-

-, 1945. Ibid. 32; 177-179. 7) COOPER, D. C., and R. A. BRINK, 1944. 106. 6) — and — Genetics, 29; 370-390. 8) EKDAHL, I. 1944. Arkiv för Botanik, 31, 5; 1-45. 9) EMME, H. 1925. Zeits, f. Ind. Abst. Vererb. 37; 229-236. 10) FAVORSKIJ, M. V. 1937. Compt. Rend. (Dok.) Acad. Sci. URSS. 16; 427 428. 11) Freisleben, R. 1942. Forsch. Sond. 16; 361-364. GHIMPU, v. 1930. Arch. d'Anat. Micr. 26; 135-249.
 GRIFFEE, F. 1927. Min. Univ. Studies Biol. Sci. 6; 319-331. 14) 長谷川信夫, 1934a. 造雜, 10, 1; 84-88. 15) HEITZ, E. 1931a. Planta, 12; 495-505. 16) —, 1931b. Ibid. 12; 774-844. 17) JOHANSEN D. A. 1934. Proc. Natl. Acad. Sci. 20; 98-100. 18) KARPECHENKO, G. D. 1938. Biol. Zhur. 7; 287-294. 19) —, 1940. Compt. Rend. (Dok.) Acad. Sci. URSS. 27; 47-50. 20) Kihara, H. 1924. Mem. Coll. Sci., Kyoto Imp. Univ. 1, 1; 1-200. 22) Lein, A. 1948. Züchter, 19 (1/3); 6-9. Biol. Abst. 1949, 23, 9; 2630. 23) LEWITSKY, G. A. 1931. History, Methods, Facts, Theory, Trudy Prikl. Bot., Genet., i. Selek. (Bull. Appl. Bot., Cenet. and Plant Breed.) 27; 173. (in Russian, English translation pp. (103-169). 24) Löve, A., and D Löve, 1944. Arkiv för Botanik. 31, 12; 1-22. 25) MÜNTZING, A. 1937. Hereditas, 23; 113-235. 26) —, TOMETORP, G., and K. Mundt-Petersen, 1937. Ibid, 22; 401-406. 27) Nakao, 1911. Jour. Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 4; 173-190. 28) NAVASCHIN, M., 1934. Cytologia, 5; 166-203. 29) 生沼 巴. 1952. **遺雜. 27, 1-2; 56-64.** 30) ——. 同上. 印刷中. 31) ——. 同上. 32) ---. 同上. 33) — . 染色体. 印刷中. 34) PETO, F. H. 1931. Canad. Jour. Res. C. 14; 445-447. 35) ---, 1937. Ibid. 15; 217-229. 36) RUTTLE, M. L., and NEBEL, 1937. Cytologia Fujii Jub. vol. 553-568. 37) STÄHLIN, A. 1929. Wiss. Arch. Landw. A. I; 330-398. 38) STEBBINS, G. L., Jr., 39) ----, 1949. Proc. Eighth Int. Congr. Genet., 1947. Contr. Gray. Herb. 165; 42-55. Hereditas, Suppl. vol. 461-485. 40) ----, J. I. VALENCIA, and R. M. VALENCIA, 1946a. Amer. Jour. Bot. 33; 338-351. 41) —, —, and —, 1946b. Ibid. 33; 579-586. 42) —, and M.S. WALTERS, 1949. Ibid 36; 291-301. 43) —, and R. SINGH, 1950. Ibid. 37; 388-393. 44) TANJI, S. 1925. Bot. Mag. Tokyo, 39, 549; 55-57. 45) 高橋隆平. 1947. 農学研究 (大原) 37, 4: 132-134. 46) ——. 1949. 同上. 38. 2; 77-80. 47) ——, 山本二郎, 板野獺寿夫. 1948. 同上. 38. 1; 5-10. 48) ——, ——. 1949. 同上. 38. 4; 152-156. 49) ——, ——. 1949. 同上. 50) TJIO, J. H., and A. LEVAN, 1950. Anales de la Experimental de Aula Dei. 38. 4: 157-160. 2, 1; 21-64. 51) TOMOTORP, G. 1939. Heredita, 25; 241-254. 52) UBISCH, G. v. 1921. Zeits. f. Induk. Abst. Vererb. 25; 198-210.

# クスノキ及びその近似種の種的, 成分的, 分布的, 進化的諸関係

## 藤田安二\*

Yasuji Fujita: Cinnamomum camphora Sieb. and its allied Species. Their interrelations considered from the view-points of Species characteristics, Chemical constituents, Geographical distributions and Evolution.

東亞に於けるクスノキ近似種は合湾を中心とする次の 6 種である。1)

Cinnamomum camphora Sieb.: Syn. Pl. Oec. Jap., 23, (1830); Koidzumi: Fl. Symb. Orient. Asiat., 22, (1930); Masamune: Trans. Nat. His. Soc. Formos., 22, 195, (1932); Nemoto: Flora Jap. Sup., 245, (1936).

Syn. Laurus Camphora Linn.: Sp. Pl., 369, (1753).

Cinnamomum Camphora Nees et Eberm.: Handbuch Med. Pharm. Bot., 2, 430, (1831); Sasaki: L. Pl. Formos., 192, (1928); Makino et Nemoto: Flora Jap., 364, (1931).

Cinnamomum Camphora Nees et Eberm. var. glaucescens Alex. Braun: Verh. Preuss. Gartenbau Verein, 21, 9, (1852); Meissner: DC. Prodr., 15, I, 24, (1864).

Hab. Japan, Formosa, China, Indo-china.

Nom. クスノキ, 樟 (本樟, 油樹).

2. Cinnamomum camphora Sieb. var. linaloolifera Fujita.

Syn. Cinnamomum Camphora Nees et Eberm. var. glaucescens (non Al. Braun)

Nakai: Tokyo Bot. Mog., 41, 519, (1927); Sasaki: L. Pl. Formos., 192, (1928);

Fujita: Trans. Nat. His. Soc. Formos., 21, 257, (1931).

Cinnamomum Camphora Sieb. var. glaucescens Kamikoti: Ann. Rep. Taihoku Bot. Gard., 3, 79, (1933); Masamune: Short Flora Formos., 71, (1936).

Hab. Formosa, China.

Nom. ホウショウ, 芳樟, 臭樟, (陰陽木).

3. Cinnamomum nominale Hay.: Ic. Pl. Formos., 3, 160, (1913); Fujita: Trans. Nat. His. Soc. Formos., 21, 257, (1931).

Syn. Cinnamomum Camphora Nees et Eberm. var. nominalis Hay.: J. Coll. Sci. Tokyo, 22, 349, (1906); Matsumura: Ind. Pl. Jap., II, 2, 135, (1912).

<sup>\*</sup> 大阪工業試験所精油研究室 Laboratory of Essential Oil, Osaka Industrial Research Institute.

Cinnamomum Camphora Nees et Eberm. var. nominale Hay. in Matsumura et Hayata: Enum. Pl. Formos., 349, (1906); Sasaki: L. Pl. Formos., 192, (1928).

Cinnamomum Camphora Sieb. var. nominale Kamikoti: Ann. Rep. Taihoku Bot. Gard., 3, 78, (1933); Masamune: Short Flora Formos., 71, (1936).

Cinnamomum Camphora Nees et Eberm. var. glaucescens (non Al. Braun) Nakai: Tokyo Bot. Mag., 41, 519, (1927).

Cinnamomum Camphoroides Hay.: Jc. Pl. Formos., 3, 158, (1913); Sasaki: L. Pl. Formos., 192, (1928); Yamamoto: J. Soc. Trop. Agri., 4, 53, (1932). Hab. Formosa.

Nom. クスノキダマシ, クスノキモドキ, ラウグス, 山鳥樟, 栳樟.

4. Cinnamomum nominale Hay. var. linalis Fujita: Trans. Nat. His. Soc. Formos., 21, 257, (1931).

Hab. Formosa.

Nom. ラウグスホウショウ.

Cinnamomum micranthum Hay.: Ic. Pl. Formos., 3, 160, (1913); 5, 158, f 54 a, 55, (1915); Sasaki: L. Pl. Formos., 193, (1928); Makino et Nemoto: Flora Jap., 366, (1931).

Syn. Machilus micrantha Hay.: Ic. Pl. Formos., 2, 130, (1912).

Hab. Formosa.

Nom. オオバグス, アツバグス, 有樟 (Pan-chun).

Cinnamomum Kanahirai Hay.: Ic. Pl. Formos., 3, 159, (1913); 5, 157, f 54, L. f. (1915); Sasaki: L. Pl. Formos., 192, (1928); Makino et Nemoto: Flora Jap., 365, (1931).

Syn. Cinnamomum micranthum (non Hay.) Kanehira et Sasaki: J. Soc. Trop. Agri., 5, 400, (1933); Kanehira: Formos. Trees, 303, (1936); Masamune: Short Flora Formos., 71, (1936); Nemoto: Flora Jap. Sup., 246, (1936).

Hab. Formosa.

Nom. ギュウショウ, ショウギュウ, 牛樟, 樟牛, ..

これら各種の精油成分とその生成要素に従つて表示すれば次の様になる $^2$ 。(表中の I, II… は生成要素を,またゴシック活字は主成分を示す。)

#### 第 1 表 クスノキ (C, camphora Sieb.)

I	α-Terpineol, Citronellol, Dipentene, d-Limonene, Cineole, Phellandrene
I	d-Camphor, α-, β-Pinene, Camphene, Borneol
I	Safrol, Methylengenol, Eugenol
IV	Cadinene, Bisabolene, Caryophyllene, Eudalene type, Sesquitecpene

発現度: ▮大; ▮, ▮ 稍大

## 第2表 ホウショウ (C. camphora Sieb. var. linaloolifera Fujita)

I	l-Linalool, d-α-Terpineol, Geraniol, Dipentene, Cineole	
I	d-Camphor, α-Pinene, Camphene	
I	Safrol, Eugenol	
IV	Cadalene type Sesquiterpene, Sesquiterpene alcohol	

### 発現度: Ⅰ大; Ⅱ, Ⅲ 稍大

### 第3表 ラウグス (C. nominale Hay.)

I	Dipentene, Cineole, Phellandrene
I	d Camphor, α-Pinene, Camphene
П	Safrol
N	Sesquiterpene alcohol

## 発現度: ▮大

## 第4表 ラウグスホウショウ (C. nominale Hay. var. linalia Fujita)

I	l-Linalool
I	$d_{ au}$ Camphor
I	
IV	Sequiterpene

### 発現度: [大

### 第5表 オオパグス (C. micranthum Hay.)

I	l-Linalool, α-Terpineol, Dipentene, Cineole
I	d-Camphor, l-Camphene, l-α-Pinene, d-Borneol
I	Safrol, Methyleugenol, Elemicine
IV	Micranene (d, l·Cadineue)
V	Decylaldehyde, Pentadecylaldehyde

## 発現度: I, V 大; I, I 極微

## 第6表 ギュウショウ (C. Kanahirai Hay.)

I	<i>l</i> -Linalool, Geraniol, Cltronellol, <i>d</i> - <b>Terpinenol</b> -(4), α-Terpineol, <i>d</i> Sabinene, α-Thnjene, Dipentene, α-, γ-Terpineue, <i>p</i> -Cymene, Cineole-(1, 4), Carvacrol
I	Camphene
I	Safrol, Eugenol
IV	d-Cadinene, Bisabolene, a new Sesquiterpene

発現度: Ⅰ, Ⅱ 大; Ⅱ 極微

ここに言う精油生成要素とは植物の各種中に存在して精油の生成に関与する相同遺伝子群であつて、このものの相違とその発現狀況の差異とによつて、その種にそれぞれの精油成分が形成されるもので、I は Linalool, Terpineol 系生成要素、II は Camphor 及び Bicyclic terpene 系生成要素、III は Phenolether 系生成要素、IV は Sesquiterpene 系生成要素、V は Cliphatic aldehyde 系生成要素である。

さてクスノキとホウショウとは形態的に若干の差異があるが、歴然と簡単に区別し得る程ではない。 最も確実に区別し得るのは生体の臭であつて、実際には常にこの臭によつて区別されている、即ちホウショウは生体内に Linalool を含む事が最も著しい特徴であり、普通のクスノキは全く Linalool を含有しない。 この故に著者はホウショウに C. camphora Sieb. var. linaloolifera Fujita なる変種名を与える。

中井氏は昭和 2 年ホウショウを早田氏のクスノキダマシ C. nominale Hay. と混同し、両者を合して C. Camphora Nees et Eberm. var. glaucescens A. Br. なる変種とした。 この名称はそれ以来ホウショウの学名として無批判的に用いられて来たが、Braun によつて 1852 年に与えられたこの変種名はジャワ及びベルリン植物園に移植されたクスノキの蒸溜試験によって、棒腦が固体として析出し難くなつた品種即ち油樹に対するものであつて、決してホウショウを示すものではない。

クスノキダマシ(ラウグス)はクスノキ、ホウショウとは形態的に相当異なり、先ず雄蕊の・形を異にし、花及び実はクスノキに比して書だ小さく、花期結実期が極めて早く、又極端な場合には発芽後 1 年以内に花をつける。 葉もクスノキ、ホウショウに比し細長く、薄肉で、葉色は緑が淡く、葉縁が苦しく波状をなす。 最も区別に適するのは新芽、新葉に毛が苦しい事で、この点により容易に識別出来る。 これ等は形態的に言つても明かに種の種違に帰すべきで、変種的な差によるものではない。 このものの精油成分はクスノキに極めて近く、またホウショウと同様に Linalool を含むものが存在する。 これを C. nominale Hay. var. linalia Fujita (ラウグスホウショウ)と呼ぶ。

オオバグス (C. micranthum Hay.) とギュウショウ (C. Kanahirai Hay.) とはクスノキとはやや異なる近似種である。 金平氏は昭和 8 年,この両者は従来混同されていて,原標本の比較によればその間に区別なしとして、学名を C. Micranthum Hay. に統一し、これにギュウショウなる和名を保有させた。

然しこれは大変な誤りで、東大の C. Kanahirai Hay. の標本中に、相馬氏が明治 45 年 2 月 25 日台北州文山郡湾潭で採集した C. micranthum Hay. が混入していた為に起つたものと考えられる。 この両者は勿論極めて近似であるが、オオバグスは葉がギュウショウよりも大きく厚く、葉をもんで臭をかいでもほんのわずかに青臭い香がするだけであるが、ギュウショウは前者に比し葉がやや小さく、薄く、つやがあり、葉をもんで臭をかけば明かにテルペン臭が強いから、この点でよく区別される。 又両者は分布を異にし、オオバグスの主産地は台北州、新竹州の山地であるが、ギュウショウは新竹州南部から台中、台南、高雄の山地 100~2500 m の高地に帶胀をなして分布し、更に反転して台東、花蓮港迄北上する。

精油成分としてはオオバグスの根油は主として Safrol よりなり、幹油は Safrol と Pentadecyl aldehyde, 薬油は Decyl aldehyde を主成分とする。 これに反しギュウショウの根油は等しく Safrol を主成分とするが、この外 Sabinene, Terpinenol-(4) を含み、幹油は

Safrol 小量の外上として Terpinenol-(4) よりなり、枝葉油は Sabinene, Linalool, Terpinenol-(4) 等よりなる。 即ちこの両者は明かに精油成分を異にする。 このうち最も特徴的な差異は オオバグスは Decyl aldehyde, Pentadecyl aldehyde を含む事であり、ギュウショウは Terpinenol-(4) を多量に含む事である。

これ等によつてこの両者は明かに異なる種なる事が分る。

以上の如くクスノキ、クスノキダマシは樟腦を多量に含有する事を特徴とし、ホウショウ、ラウグスホウショウは樟腦の外に特に Linalool を多量に含む事を特徴とし、オオバグスは脂肪属アルデヒドを、ギュウショウは Terpinenol-(4) を含む事を特徴とする。 これ等がその種の真の生理的標徴成分であつて、Safrol の如きものは共通成分である。 標数成分は種の特徴を示す明確なる生理的差異であるが、更に上述の精油生成要素及びその発現様式の差によって種の系統を知る事が出来る。

今クスノキとホウショウとの精油成分を比較すると、これ等の生体内に存在する精油生成要素は同一であるが、その発現歴態には相当の差がある。 そのうち最も著しいのは第 1 生成要素で、ホウショウ中には l-Linalool が多量に含まれるが、クスノキ中には既にこのものは存在せず、 $\alpha$ -Terpineol が一層多量に存在する。 この事実によつて l-Linalool が変化して  $\alpha$ -Terpineol になつた事が推定され、これはとりもなおさずホウショウ(芳樟)が進化してクスノキ(本樟)になつた事を示す。 この事は両者の地理的分布からも明かで、ホウショウの分布は主として台湾の西部及び台湾に面するシナの一部のみに限られるが、クスノキは台湾西部より北は日本、朝鮮の南端部、南はインドシナのトンキン、シナでは広西、広東、福建、江西、湖南、雲南、四川、湖北、安徽、江蘇、淅江と台湾を中心とする東経  $100\sim140^\circ$ 、北緯  $20\sim35^\circ$  間にわたる扇形の大分布をなす。 $3^\circ$ 

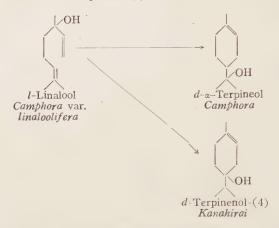
ラウグスは同様ラウグスホウショウから分化したものであるが、ラウグスホウショウはホウショウから分化したと考えるよりも、ラウグスホウショウからホウショウが分化したと考えるのが妥当で、これはラウグスホウショウ及びラウグスの産地が台湾の南端部及び東部に限られ、しかも海岸性であつて中央山脈地方には全く存在しない事によつても分る。 このものの主産地台湾東部海岸山脈地方は地質学的にも台湾の西部及び中央山脈地方とは全く異なり、これらの地方よりも遙かに古く、又植物区景的にも一種異なるものであつて、西部は古くはシナ大陸と連つていたものであるが、この地方はかつて太平洋中に路沒し去つたと考えられる陸地の断片であると言れる。 この事から言つてもラウグスホウショウがホウショウの母体である事は明かであろう。

次にオオバグスの精油について見ると、その第 1 生成要素の発現は極めて微弱となり、精油中の I-Linalool、 $\alpha$ -Terpineol 等はほとんど等に近く、多量の精油を取り扱わないかぎり検出されない。 又 d-Camphor 等の生成要素の発現も極めて微弱となり、その代りに葉部にDecyl aldehyde、材部に Pentadecyl aldehyde 等脂肪属アルデェド類の発現要素が新に発生する。 更に Safrol の発現要素の活動も一層盛んになる。 徒つてオオバグスもホウショウか 6分化したもので、その分化の方向はクスノキとは全く異なる事が分る。

これに反しギュウショウでは第 1 生成要素の発現はなおかなり顕著であり、このうちの主体はクスノキの  $\alpha$ -Terpineol に対しここでは Terpineol-(4) となる。 しかもこのものの精油もまた大量に取扱えば小量の l-Linalool を証明し得るから、この Terpineol-(4) は Ter-

pineol 同様やはり l-Linalool から生じたものである。 この関係を示すと第 1 図の如くなる。

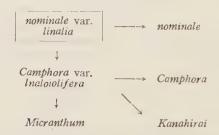
Fig. 1. Formational relationship of d-α-Terpineol and d-Terpinenol-(4) from l-Linalool



又ギュウショウ中の第2生成要素の発動も極めて微弱となり、このものには d-Camphor は証明されない。 これ等の事実からすれば、ギュウショウも同様ホウショウから分化し、その方向はオオバグスに比しクスノキの方向にやや近い別途をたどつている。 かくの如くギュウショウは成分的な分化の方向に於てはクスノキに比較的接近したものであるが、形態的にはその方向がオオバグスに近接したものである。

以上によつて上記6種のクスノキ近似種の進化系統は第2図の如きものなる事が分る。

Fig. 2. Evolutional relationship of *Cinnamonum camphora* Sieb. and its allied Species



なお合湾、シナ、日本、インドシナに於けるこれら近似種の存在種數順位を示すと次の如く になる。

台湾 6,シナ 2,日本 1,インドシナ 1

これ等によつて台湾がクスノキ及びその近似種の発生と分化との中心である事が自ら明かである。

#### 文 献

1) 藤田: "植物精油の基礎研究," 315 (1951). 2) 藤田: "植物精油の基礎研究," 325 (1951). 3) 藤田: 香料, No. 10, 11 (1950).

# 日本産カマシッポゴケ属,ニセオキナゴケ属, タチシッポゴケ属及びヘリトリシッポゴケ属考察

## 櫻井久一

Kyuichi SAKURAI: Observation of the Genus Kiaeria, Paraleucobryum, Orthodicranum and Dicranoloma in Japan.

## Kiaeria Hagen. カマシッポゴケ属

カマシッポゴケ (Kiaeria) 属 がシッポゴケ 属より分 離して独立の 属と認められたのは 1941 年 Hagen が D. K. N. Vid. Selsk. Skrift. に発表したのに始まる。Brotherus はこれ を Pflanzen-familien (1925) に採用している。子囊に腫瘤が必ずある。

邦産として次の3種があるが凡て高山灌木帶以上の岩上に生ずる。

#### I. 葉にマミラあり

## 分 布

1. Kiaeria falcata (Hedw.) Hagen. カマシッポゴケ 木曾御岳 (池上), 木曾駒ヶ岳 (池上, 高木), 信州八ヶ岳 (櫻井, 末岡, 水島) 白馬山 (高木), 越中立山 (池上), 釧路メアカン岳 (岩野) etc.

var. serratifolia Sak. 甲州八ヶ岳(水島)

- 2. Kiaeria Blyttii (Schimp.) Broth. アラジクカマシッポゴケ 木曾駒ケ岳 (池上, 高木) 信州八ケ岳 (櫻井, 水島) 信州杓子岳 (高木) var. secundifolia Sak. 信州八ケ岳 (櫻井)
- 3. Kiaeria Starkei (Web. et Mohr.) Hagen. アカジクカマシッポゴケ 印州赤石岳 (高木)

# Paraleucobryum (Ldb.) Loeske. ニセオキナゴケ属

Paraleucobryum 属がシッポゴケ属より分離して独立の属と認められたのは 1908 年 Loeske が Hedwigia に発表したのに始まる。邦産 2 種, 高山草本帶にのみ生ず。

- I. 葉緣に鋸歯なし時に上部に僅かに存す,肋は葉基の 2/3 以上を占む ......enerve
- II. 葉綠上部 2/3 に鋸歯あり、肋は葉基の 1/3......longifolium

## 分 布

- 1. Paraleucobryum enerve (Thed) Loeske. フトスジニセオキナゴケ 甲州赤石岳東岳 (高木) 木曾駒ケ岳 (高木) 上州谷川岳 (櫻井)
- 2. Paraleucobryum longifolium (Ehrh.) Loeske. ナカバニセオキ**ラ**ゴケ 木曾御岳 (池上) 信州白馬山 (櫻井)

#### Orthodicranum Loeske. タチシッポゴケ属

タチシッポゴケ (Orthodicranum) がシッポゴケより分離して独立属となつたのは 1910 年 Loeske に始まる。国内に於ては中部以北の深山樹蔭の樹皮に蘚座を作つている。

- II. 解芽を見ず。

  - B) 葉先折れることなし。細胞にマミラあり。
    - a) 葉は乾けば卷縮す。葉緣の鋸歯は中以下に達す。翼細胞は肋に達し一層なり ...montanum
    - b) 葉は乾くも倦縮せず,多少一方に曲る。鏡鋸歯は中以下に達し肋背のラメラの鋸歯鏡

....hamulosum

#### 分 布

- 1. Orthodicranum flagellare (Hedw.) Loeske. ヒメカモジゴケ 上州赤城山 (櫻井) 秩父 (前田) 甲州三ツ峠 (高橋源三) 尾瀬 (前田, 末岡) 木曾駒ケ岳 (高木) 伊豫 石槌山 (越智) 等
- 2. Orthodicranum hakkodense (Card.) Broth. タカネシッポゴケ 越後駒ヶ岳 (池上) 苗場山 (八木) 飯豊山 (樋口) 尾瀬 (前田) 日光金精峠 (高木) 伊豫三ツ森峠 (越智) 等
- 3. Orthodicranum montanum (Hedw.) Loeske. タチシッポゴケ 相州箱根 (高橋弘) 秩父 (前田) 日光白根山 (高木, 櫻井) 甲州八ケ岳 (末岡) 羽後小阿仁 (古家) 等
- 4. Orthodicranum hamulosum (Mitt.) Broth. カギシッポゴケ 野州赤薙山 (櫻井) 同白 根山(中村佐兵衞)甲州八ケ岳(櫻井, 高木)武州梓山五郎山(前田)北見富士(字野)等

#### Dicranoloma Ren. ヘリトリシッポゴケ属

~リトリシッポゴケ (Dicranoloma) が属名として一般に認められる様になつたのは 1901 年 Renauld が Revue bryologique に発表したのに始まる。その以前はシッポゴケ (Dicranum) の一亞属として記載されている。 新属としての特徴は葉の下部外縁に線狀透明の細胞が数列舷をなして存在する点にある。本属は元来熱帯に産するものが大多数を占めているが 温帶にも若干種が報告されている。 然るに熱帯種の大部分は舷があるのですぐ分るが 温帶種には舷のない一群のものがあつて邦産の大部分はこれに属するのでシッポゴケ属との 区別が仲々困難となる。

## 検 索 表

(I)	葉の下部外線に舷あり	latilimbatun
-----	------------	--------------

- (II) 葉の下部外線に舷なし
  - (A) 葉尖脆からず
    - a) 葉は覆瓦状
      - a) 植物体白色を帶び外観 Leucobryum を想はしむ。褐毛殆ど缺如し、樹皮に著生 す.....Otii
      - β) 植物体黄緑色,葉先時に折れる。外観 Dicranum を想はしむ。褐毛著明,地上 に生ず。
        - !) 満柄 1.5 cm 子覊は長き口柱状をなし 4 mm ......cylindrothecium
    - b) 葉は莖に対し殆ど直角, 壯大なる種で莖長 10 cm に達しよく分枝す .......brevisetum
  - (B) 葉先脆く容易に折れる。外形 Dicranum の如し。
    - a) 植竹体剛。葉は撒開、乾燥時屢反旋し針状。褐毛著し。
      - α) 子蘂の長さ 2-2.5 mm ......brachycarpum
      - β) 子葉は 3 mm ......japonicum
    - b) 植物体柔。 葉は覆瓦状, 褐毛あり。 葉の鋸歯著しからず。
      - α) 子寰は細き四性法 2-2.5 mm。蓋も殆ど同長、葉先極めて脆し。分枝することあり fragiliforme
      - β) 子囊を見ず。葉先折れ易し。殆ど分枝せず ......higoense

## 分 布

- 1. Dicranoloma latilimbatum Sak. ヘリトリシッポゴケ (台湾太平山(田本)) 武州秩父両神山(永野)
- 2. D. Otii Sak. n. sp. オキナシッポゴケ 伊予石棉山(試智)
- 3. D. cylindrothecium (Mitt.) Sak. ミヤマシッポゴケ 武州秩父太陽寺(永野) 甲州富士山(高木)尾潮(水島) var. robustum (Dix. et Sak.) Sak.

和洲丹沢山(櫻井)

- 4. D. subcylindrothecium Broth. ナガミノシッポゴケ 屋久島(士井,正宗)
- 5. D. brachycarpum Broth. チョクミシッポゴケ 野州塩原雷霆滝(櫻井) 信州黑姬山(池上)
- 6. D. japonicum Sak. n. sp. ヘリナシシッポゴケ 日向霧島山(上井)上州棒名山 相州丹沢山(櫻井,笹岡)武州秩父太陽寺(永野)
- 7. D. fragiliforme (Card.) Broth. カタシッポゴケ 伊勢神宮(孫福)豊後祖母山(櫻井)武州秩父太陽寺(永野)肥後深葉山(高木) 三河竜頭山(高木)
- 8. D. higoense Sak. n. sp. 肥後小国(兼田)
- 9. D. brevisetum Doz. et Molk. エダウチシッポゴケ 江州伊吹山(櫻井)甲州富士山(前田)伊勢藤原山(槌賀)

Kiaeria Blyttii (Schimp) Broth.

var. secundifolia Sak. var. nov.

Planta robustior, 7–8 cm alta, dense caespitosa, caespitibus superne viridibus, intus fuscescentibus. Folia distincte secunda; costa continua dorso superne lamelloso-serrulata. Cellulis densis, quadratis, mamillosis.

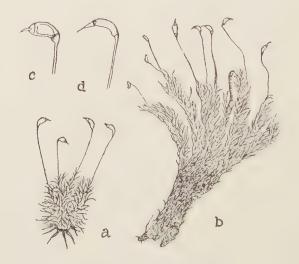
Honshu: Prov. Kai, mt. Yatsugatake, 2800 m. (Leg. K. Sakurai No. 19388 Typus. 22-July 1950).

Kiaeria falcata (Hedw) Hagen.

var. serratifolia Sak. var. nov.

Planta robustior. Laxe caespitosa; folia caulina distincte serrulata.

Honshu: Prov. Kai, mt. Yatsugatake, 2500 m. (Leg. U. Mizushima Typus in Herb. K. Sakurai No. 19570 July 1950).



- a) Kiaeria falcata (Hedw.) Hagen ×1
- b) Kiaeria Blyttii (Schimp.) Broth, ×1 c, d.) 子囊廓大

Dicranoloma Otii Sak. n. sp. Caespitosa, caespitibus laxis, luteo-albescens. Caulis curvato-adscendens, usque ad 5 cm altus, etomentosus, simplex vel paulum ramosus. Folia distincte homomallula, e basi ovato-lanceolata, sensim attenuata, subacuta, marginibus in medio folii recurvatis, saepe semitorta, ca 8 mm longa, supra medio serrulata. Costa continua, tenui, dorso superne bilamellato-serrulata. Cellulis in toto rectangularibus, superne brevioribus, alaribus quadratis, minutis, aureis, ad 1/2 folii occupantes. Caetera desunt.

Sikoku: Prov. Iyo, mt. Ishizuti, on summit, corticola (Leg. K. Oti Typus in Herb. K. Sakurai No. 19079 10 Aug. 1948)



a) Dicranoloma brevisetum D. M. b) D. fragiliforme (Card.) Broth. c) D. higoense Sak. d) D. Otii Sak. e) D. brachycarpum Broth. f) D. japonicum Sak. g) D. subcylindrothecium Broth.

Dicranoloma brevisetum (Doz. et Molk.) Par. (Syn. Dicranum brevisetum Doz. et Molk.). in Fleischer Musci d. Flora v. Buit Bd. 1.

Honshu: Prov. Ohmi, mt. Ibuki (Leg. K. Sakurai No. 1015 May 1923); Prov. Ise, mt. Fujiwara (Leg. Y. Tutiga in Herb. K. Sakurai No. 19387 Oct. 1938); Prov. Kai, mt. Fuji (Leg. T. Maeda in Herb. K. Sakurai No. 20271 Nov. 1950).

N.B. New to the japanese Bryoflora.

Distributio: Java, Borneo, Celebes.

Dicranoloma latilimbatum Sak. (Syn. D. euryloma Sak. in Bot. Mag. Tokyo Vol. LV, No. 653).

Formosa: Mt. Taihei (Typus in Herb. K. Sakurai No. 11229 Aug. 1935).

Honshu: Prov. Musashi, Chichibu, mt. Ryōgami (Leg. I. Nagano in Herb. K. Sakurai No. 20298 Aug. 1951).

Dicranoloma higoense Sak. n. sp. Planta gracilis, caespitosa, caespitibus laxis, sordide luteo-viridibus, opacis. Caulis erectus, simplex, infra 5 cm altus, supra medio dense foliosus, apice caudiformiter attenuatus. Folia fragilia, subsecunda, canaliculato-concava, lanceolato-subulata, usque ad 5 mm longa, marginibus recurvis, integris vel superne indistincte serrulatis. Nervo sat tenui, continuo, superne humiliter bilamellato, indistincte serrulato. Cellulis anguste rectangularibus, paulum inter se porosis,

alaribus quadrato-rectangularibus aureis, ad 1/2 folii occupantes. Caetera ignota.

Kiushu: Prov. Higo, Kokuni (Leg. H. Kaneda Typus in Herb. K. Sakurai No. 13768, 14876 Dec. 1940).

Dicranoloma japanicum Sak. n. sp. Lignicola, planta mediocris, caespitosa, caespitibus laxis, luteo-fuscescentibus, opacis, valde rigidiusculis. Caulis suberectus vel adsendens, simplex vel dichotome ramosus, infra 5 cm. altus, paulum tomentosus. Folia erecto-patentia, subfragilia, rigidula, e basi constricta lanceolato-subulata, canaliculato-concava, usque ad 7 mm longa, marginibus incurvis, superne paulum serrulatis. Nervo sat tenui, subcontinuo, superne bilamellato-serrulata. Lamina sublutea, cellulis breviter rectangularibus, inter se porosis, alaribus quadratis, ad 1/2 folii occupantes, subfuscis. Seta solitaria, 1.2 cm alta, rubra, recta. Theca breviter cylindrica, erecta, 3 mm longa.

Honshu: Prov. Sagami, mt. Hirugatake (Leg. K. Sakurai No. 11997 26 Aug. 1926 Syn. D. hirugatakense Broth. msc.) Prov. Kotsuke, mt. Haruna (K. Sakurai No. 13648 Oct. 1939).

Kiushu: Prov. Hiuga, mt. Kirishima, Iwodani (Leg. Y. Doi Typus in Herb. K. Sakurai No. 13661 27 Aug. 1940).

Dicranoloma cylindrothecium (Mitt,) Sak. comb. nov. (Syn. Dicranum cylindrothecium Mitt. Chorisodontium cylindrothecium (Mitt.) Sak. in Bot. Mag. Tokyo Vol. LIV, No. 637 var. robustum Dix. et Sak. (Do).

Honshu: Prov. Musashi, Chichibu, Taiyo-dera (Leg. I. Nagano in Herb. K. Sakurai No. 20301 Sept. 1951); Prov. Kai, mt. Fuji (Leg. N. Takaki in Herb. K. Sakurai No. 20273 July 1950).

# タバコの種子の光感性に就て (I) 「浸漬時間と光感性の変化」

## 石川茂雄\*

Sigeo ISIKAWA: On the light-sensitivity of tobacco seeds.

1. Change of the light-sensitivity with the time of imbibition.

種子の発芽に光の影響を受ける種類は限定されたもののように思われ勝ちであるが、 Kinzel<sup>(5)</sup>、Mitchell<sup>(8)</sup>、笠原<sup>(4)</sup>等の報告からも率ろ一般的現象のようである。然し光の影響に 就ての詳細な実験は比較的限られた種類—Ethyrum, Lactica, Ranunculus, Epilobium, Chloris, Poa, Phacelia, Nigella—に就てなされて来た。<sup>(1)</sup> そして光促進種子に就ては可成りな研究が、光抑制種子に就ては若干の知見がある。

著者が鼓に報告するものも、光促進種子の代表種であるタバコを材料として従来の研究に少しの知見を加えたものである。特に本報では日本産の6品種に就て播種後5日間の光感性の時間的変化と照射光量との関係を追究したものである。

## I. 実験方法並に材料

Tukey(II) の寒天法を採用し、3 寸シャーレーに 1.5% 寒天液 20 c.c. を流し込み固つた上に蒸溜水を 20 c.c. 程加えてから、水をこほして寒天の表面に一様に薄い水膜をつくつておく。このシャーレーに 200 粒の種子(あらかじめ数えて藥包紙に入れて川意しておく)を播き、手早く各シャーレーを厚手の黑ラシャ紙で包み孵卵器中に入れ照射時以外はこの包みを開けない。

浸水処理温度は照射前後共に 22°C., 照射は 20°C. の定温暗室で行つた。 照度は光源から の距離を調節し光電池で測定, 光源は東輝 200 W 電球と太陽燈の反射裝置を使用した。 照射実 験の組合せとして, 播種後 6, 12, 24, 36, 48, 60, 72, 96, 120 時間浸漬したものを夫々 20, 60, 120, 180, 240, 360, 480, 600 秒唯 1 回照射する 72 通りを作る(各組シャーレー 2 箇 400 粒 づつを使用)。

使用種子は專売公社地方局の厚意により下記各試験所より送られた1950年産の水府種(支 城県太田出張所), ダルマ及びオオダルマ種(宇都宮地方局), ハタノ及び黄色種(神奈川県秦野 支局), コクブ種(鹿兒島県国分出張所)を用いた。

タバコの光感性は照射後8日目の発芽率を以て表した。

## II. 実 験 結 果

1. 第1図は播種後浸漬時間の経過と共に光感性がどのように変化して行くかを,各品種毎に 10000 Lux で 20,60,180,600 秒照射した鑿の実験結果から知ろうとした図である。

ダルマ種の発芽率は、浸漬時間 12 時間以後急速に高まり 36 時間で 180×10<sup>4</sup> MKS 以下の光量では光量に関係なく一様に頂点に達する。 36 時間以後は低下し 48 時間で最低に達し、

<sup>\*</sup> 東京教育大学理学部植物学教室

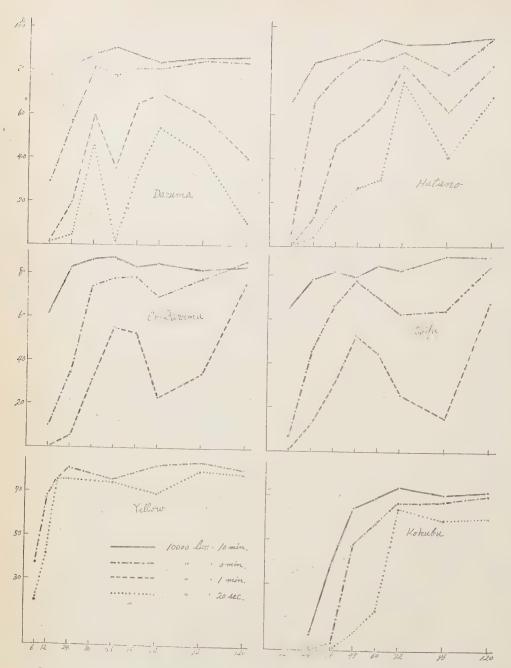


Fig. 1. Graphs showing the germination percentages of six varities promoted by single exposures to 10000 lux of light at a difinit time after setting up.

それ以後再び高まり 72 時間で 2 度目の頂点に達する。72 時間以後再び低下し出す。このよ うな波狀変化は 180×10<sup>4</sup> MKS 以上の大きい光量で照射した際は顕著に現れない。

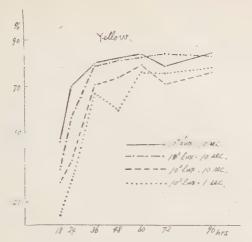


Fig. 2. Graphs showing the light-sensitiveness of "Yellow" tabacco seed exposed to smaller light quantities.

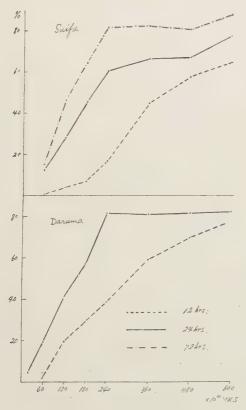


Fig. 3. Graphs showing a relation existed between the germination and the amounts of light quantities expressed as meter-candle-second (MKS) units.

ダルマ種で観察された上記の波状 変化はオオダルマ,スイフ,ハタノ種 でも夫々見られる。唯最初の頂点並び に低下点の時期は夫々の品種で異る。

以上 4 品種で見られた 光感性の 波狀変化は 浸漬時間 120 時間以内で は黄色及びコクブ種で認められなかつ た。コクブ種は光感性の高まるのに浸 漬時間を多く要し、36 時間から高まつ て、72 時間では 20×104 MKS で大 体この品種の最高発芽率と同じ%を得 られる。

黄色種の光感性は他の品種に比して頗る敏感である。光感性の高まるのも早く(浸漬時間が短くてよい),且つ極めて少量の光量で最高発芽率を得ることが出来る(第2図)。

- 2. Lakshmana<sup>(6)</sup> がエゾミゾハギで得た、播種後一定時期に照射した際その光量と発芽率とは比例するとの法則は、著者によつてタバコでも見られた。但しこの関係は最高発芽率を得るに必要な最少光量範囲内でのみ成り立つ(第 3 図)。
- 3. 各品種の最高発芽率をうるに必要な光量(MKS)は浸漬時間が短い時には多量を必要とするが、浸漬の時間の経過と共に光感性が高まるからその必要光量は少量で足りる。その関係を第4図で示した。黄色及びコクブ種は同じような理想曲線をとる、唯コクブ柱は24時間光感性の高まるのが遅いだけで、共に一定時間以後は極めて少量な光量で足りる。他の4品種は光感性の高まる時間的速さも前2者の中間に属し、最少必要光量の大きさも中等程度である。

## III. 考察

- 1. 光感性と光度又は光量との関 係を研究した報告は多いが、浸清時間 の経過と共に光感性が変化することに 注目した人は比較的少く、更にこれを 数値的に取扱った 報告に至つては少 い。Lehmann(7) がエゾミゾハギで報 告したものが最初であろう。 Tilly(10) は同一種を照射前後の処理温度を考慮 して 300 Lux で 2 時間 照射した (216×10<sup>4</sup> MKS) 際の光感性の時間的 変化を見て居る。Flint(2) のチサで行 つた実験は特に注目に値する。600 HK・1 min. (36×104 MKS) で照射 すると浸漬時間 50 分間で 発芽率 62 % のものが 100 分間では 90% に達 した。この結果は光感性の時間的変化 を見るに Lakshmana 等が行つて居 る長時間照射は一考を要することを示 す。著者のタバコの実験で照射時間を 10 分間以下にした所以である。
- 2. Tilly(10) のエゾミゾハギ,小河原(9) のゴボウ等従来の研究の光感性の時間的変化は、浸漬時間の経過とに共高まり或る一定時間で最も敏感に

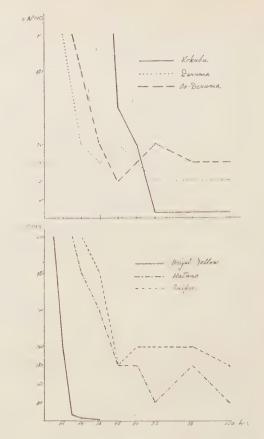


Fig. 4. The outlined curves showing the light quantities required for the maximan percentages of six varieties.

なりそれ以後は次第に低下して行く、簡単な山型の曲線をなすと報告されている。

今回著者が報告する光感性の波狀変化とゆう現象はこの方面での新しい知見である。 更に 大報で長時間浸漬処理した際も波狀変化を呈することを報告することによつてこの 現象を確証 したい。

3. 種子の熟度によつて光感性が違つてくることは Gassner<sup>(3)</sup> が Chloris で後熟が進むにつれて発芽に必要な光度は小さくてよいことを報告している。 著者もタバコで同性質の結果を得ている。 採種直後の光感性は鈍く,3ヶ月頃からやや敏感となり,6ヶ月以後は一定の感度に達し 15ヶ月迄その感度は変らなかつた。例えば黄色種を 10<sup>4</sup> Lux で 20 秒 1 回照射した際の発芽率は採種後 3ヶ月の新種子では浸漬 24 時間以後光感性が高まり 72 時間で最高点に達するに反し、採種後 15ヶ月の完熟したものは浸漬 6 時間で既に光感性が高まり 36 時間で最高点に達する。

著者の今回の実験はすべて採種後 10~15 ヶ月経た完熟種子に就いて行つたものである。 本研究実施に当つて御指導を賜つた三輪知雄教授に謹んで屠謝を捧ける。 又服部辭夫教授の御教示,長谷川正男氏の指示,和田英之助氏の盡力に対し謝意を述べる。 実験に協力した大房剛, 御野純子,走內敬子氏等の努力に謝意を表する。

#### Résumé

This work is a study on light-sensitivity of germination investigated by using the seeds of six species of Japanese-grown tobacco which are Yellow, Daruma, Oo-Daruma, Suifu, Hatano and Kokubu.

In this study, the following subjects were investigated.

- (1) How the degrees of light-sensitivity vary as the time of presoaking\* proceeds. \*—the time during which petri dishes containing seeds are laid in a dark incubator as described below.
- (2) How much light is required for obtaining the highest percentage of germination. (Light quantity will be expressed as meter-candle-second (MKS) Unit).

Seeds were disseminated over the surface of agar (1.5% aqueous solution) in petri dishes. Immediately after that, these petri dishes were wrapped in thick black papers, then they were put into a dark incubator. Each petri dish was taken out from the incubator after a definit time (a respective different time was given for each dish), stripped off its black covering paper and was exposed to a definit quantity of light. (A 200-watt Toki bulb was used as a source of light.) Then it was again wrapped in the same black paper and put back to the incubator. On the 8th day after exposing each petri dish was opened and germination percentage was counted.

Thus the follwing results were obtained.

- 1. Without regard to light quantity, light sensitivity showed a pronounced maximum when the times of presoaking reached certain hours, viz., 36 hrs. for Yellow and Daruma, 48 hrs. for Oo-Daruma and Suifu, and 72 hrs. for Kokubu, and Hatano at 22°C each.
- 2. In case seeds were exposed to a small quantity of light, after each presoaking hours are passed, the light sensitivity is decreasing for sometime. This decrease cannot be seen in seeds which were exposed to a large quantity of light.
- 3. As to the light quantity required for the maximum percentage of germination of Hatano, Suifu, Daruma and Oo-Daruma seeds, the shorter the time of presoaking is, the more light quantity is required, in case the time of presoaking is less than 24 hrs..

However, when the time of presoaking exceeds 36 hrs., the maximum percentages can be obtained by 2,400,000 M.K.S. and a greater quantity is not needed.

4. The seeds of "Yellow" are extraordinary sensitive to light. They proved that benefical effect of light was largely depending upon the length of presoaking hours rather than upon the light quantity.

The seeds of "Yellow" required only 100 M.K.S. for obtaining the maximum percentage of germination whenever the presoaking hours exceed 48 hrs. Besides, the author secured 79% germination after 48 hrs. of presoaking by exposing them to light for a very few moment, (1,500 Lux, one-ninetieth second, 16.5 M.K.S.) whereas only very few of the seeds germinated in the darkness without such exposure.

#### Literature

- 1) Crecker, W. in Duggar: Biological Effects of Radiation II: 791-837 (1936).
- 2) Flint, L. H.: Science 80: 38-40 (1934).
- 3) Gassner, G.: Jahrb. Hawberg Wiss. 29: 1-121 (1911).
- 4) 笠原安夫: 農園 15:1815-1823 (1940).
- 5) Kinzel, W.: Stuttgart: (1913-1926).
- 6) Lakshmana, R.: Jahrb. Wiss. Bot, 64: 249-280 (1925).
- 7) Lehmann, E.: Ber. Deut. Bot. Ges. 36: 157-163 (1918).
- 8) Mitchell, E.: Bot. Gaz. 81: 108-112 (1926).
- 9) 小河原公司: 農園 25 (11): 1035-1036 (1950).
- 10) Tilly, F.: Zeits. Bot. 28: 401-445 (1935).
- 11) Tukey, H. B. and M. S. Barrett: Plant Phys. 11: 629 (1936).

## 雜銀

## 新著紹介

Tischler, G. 1951: Allgemeine Pflanzenkaryologie 2. Hälfte: Kernteilung und Kernverschmelzung. (植物核学一般. 2部, 核分裂および核融合) 第1分冊: 384頁, 234 挿図. 第2分冊: 334頁, 230 挿図. 第4分冊: 320頁, 4 挿図, 文献, 索引. Naturwissenschaftlicher Verlag, Berlin.

Tischler の "植物核学一般"は 1921-22 年に最初の版が出され,さらに 1934 年に改訂版が出て、その中"静上核"の部分のみ出版されたまま、他の部分の刊行が待ちのぞまれていたが、このたび "核分裂およびに融合"の章が刊行された。

はじめに"1. 核分裂誘導についてのあらまし"を述べた。"Ruhekern"に対して、核分裂中の核を "kinetisch"とよぶ方法もあるが、ここには習慣にしたがつて"Teilungskern"とよんだ。核分裂や細胞 分裂の方向がきまると、器官形成の順序をきめることができるはずで、Edgar Anderson (1937) や Rahn (1936) は、動物のオルガナイザーと同じようなものが植物にもみとめられることを述べている。 Bonner (1936) はソラマメのさやの内部の柔組織に分裂組織をつくり、White (1939) はタバコ、トマト、サトウダ イコンなどの形成層の細胞の培養に成功したが、分離した細胞に分裂をおこなわせることは一般にまだ成功 していない。この章には、核分裂の新しい傾向についてふれているが、"2. 核分裂への内的因子のはたらき"および"3. 核分裂への外的因子のはたらき"の章で、核分裂への内外因子の影響および核分裂の誘導の問題に述べられた。核分裂、よちるん核のみが問題になるわけではなく、細胞質および細胞成分が問題となることは、いうまでもない。すでに Flemming (1882) は、分裂組織の細胞中では原形質の粘性は高められていることを示したが、Pfeiffer (1940) によれば、形成層の分裂細胞は、たとえば篩部の細胞にくらべ IEP がちがつている。

Oehlkers (1935) は "核分裂ホルモン (Mitohormone)" という言葉で核分裂を導誘するような物質 すべてをふくめた。この物質の研究がおこなわれる一方, Haberlandt (1923, 1914), Lamprecht (1918) は, 高等維約の一部分を分離しておいて、維密あるいは形成層要素を一しよにすると細胞分裂することを見た。 つづいて生長素の核分裂への影響が見られ、これらについての1940年までの論文が多数参照された。"Mitohormone"の中でおもしろいのは、N. Nielsen (1930)、N. Nielsen および Hartelius (1932)、Almoslechner (1934) および Thimann (1935) などがカビの培養からえて"B-Stoffe"とよんだもので、高等植 物の核分裂をうながし、また、刺戟することができる。これらの問題と関連して興味のあるのは、虫癭また は腫瘍のでき方と核分裂との関係である。" Nekrohormone "も問題となり, Bonner および English (1937, 1938, English, Bonner および Haagen-Smit 1939) は、"Nekrohormone" から "Traumatin"とよぶ物 質を分離し、C<sub>II</sub>H<sub>I7</sub>O<sub>4</sub>N とした。 これから窒素のとれたものは Traumatinsäure として合成された。菌根 浸出物がネギの種類の珠心細胞の 分裂をおこさせたという Cappelletti (1930, 1931) の報告もある。い ろいろのデータがあげられて、最後に A. Gurwitch (1923-) の細胞分裂放射線の問題が、とりあげられた。 議論にいるいろであるが、この放射線があるとしても、その强さは Gurwitch の主張するようにつよいもの でになく、また、第1に原形質の変化を導くようなものでなければならない。 けつきよく現在においては、 核分裂を導くようなとくべつな因子を見出すことはできないが、いろいろな内部状態のつがいによって、核 分裂がおこるようになる。

核分裂に影響を及ぼす外部的要因として、光、温度、放射線、薬品その他が述べられた。 中村、水野 (1939) がミカズキモで、分裂に夜がつどうよいことをみた実験、光が全然与えられなくではいけないので、6,600-7100 Å の赤い光線が最もつどうよいことを示した実験、接分裂の最小と生長り最大との一致するという小島 (1928) の実験、細胞分裂ホルモンの不活化についての浜田 (1931)、荒木 (1939) の実験、小室 (1924, 1925, 1936) の X 線についての業績、二倍性の Avena strigosa は、予め X 線をかけた六倍性の Avena の花粉によつてのみ受粉されるという西山の実験、仁科、篠遠、佐藤 (1940) の中性子の実験、その他も引用されている。

"4. 多核細胞お上び, 近接細胞における核分裂"の章では, 胚盤, 原形体, Cladophora, Volvox その他 多核細胞について核分裂が同時におこなわれるが, 場所によつてちがうことなどの問題が論ぜられた。たと えば、Peperomia の胚鑑では、8 核時代の核分裂は同時におこなわれる。変形菌の原形体で、Harper (1900) は、一つの点から始まつて一つあるいは数個の方向に向つて刺戟が伝つていくことをみているし、Schünemann (1930) は、Didymium では、すべての核は同時に分裂を始めるが、分裂の相は、ひじようにちがう ことを示している。Volvox 群落に対しては、E. Overton (1889) は核分裂が同時におこなわれていること をみ, アミミドロでは Timberlake (1901), 山内 (1913) は核分裂の週期性をみている。

核分裂がつづいたために小形細胞ができ、小さな細胞がつづいてできる。"小分け分裂(Furchungsod. Kammerungsteilungen)"については"5. 小分け分裂"の章に述べられた。たとえばイチョウの舁細 胞の核は, 平瀬 (1895) によると, 92-94µ の直径であるが, 受精後の核は島村 (1931) によると, 85-100 μ であり、6-7 回分裂すると、島村および Frl. Herzfeld (1928) によれば、20-25 μ である。 Levan (1938) によると、ネギにコルヒチンをはたらかせると、多極紡錘体ができて、そのために大小の染色体群が20く らいでき,やがてたがいに分離されて大小の核となる。小分け分裂の1種である。

"6. 核分裂能力の消失"では、核分裂がいつまでつづくか核分裂能力を失つてからどのくらい生きつ づけるか、一時能力を失つて、再び能力を与ることがあるかなどの問題が、とりあげられた。 セコイヤの材 の細胞が分裂することなしに、100年以上も生つづけらるという例もあり(MacDougal 1926、MacDougal および G. M. Smith 1927), H. Winkler (1933) は、ハスの200年もたった種子の細胞は分裂しないで、生 きつづけていると報告している。有性生殖する細胞と単為生殖する細胞とのちおいは、Moewus (1940) が シオクサに証明したようにただ一つの遺伝子によるという。接合体や胚乳の核の分裂能力のおこるのは、い ろいろの時期においてであり、雄性核が入つてくるということが必ずしも、唯一つの原因ではない。これら については実験的の証明もあり、柴田 (1902) はギンリョウソウで温度を 28℃ にすると、3-5% の胚条 で、未受精の抵乳核が分裂をはじめることをみている。 ぶどう糖、尿素、 $MgCl_2$ 、 $KNO_3$  などの 3/10-5/10モル溶液で処理すると、この百分率は 6-12% にあげられる。

つぎに133 頁にわたつて整要積物(Kormoyhyten)の軟分裂をのべている。"7. 整葉積物の核分裂" がこれである。コケ、シダ以上の航門について、史的疑説、一期、紡錘体形成と中期、後期と終期、核分製中 の仁の行動,などの節にわけて核分裂を説き、つづいて、"8. 集に植物における核分製 I"で、まず、鞭モ 類、ヒゲマリモ類、プロトコックス類、ヒビミドロ類、シャジクモ類、ミドリゲ類、管性藻類、褐藻類、紅藻 類、深菌類、真菌類などの核分裂を述べている。 コウボキンの核分裂についても、筆者らの有糸分裂につい て述べ、Tischler 自身も4連色体をもつた型的の有糸分裂をみたと記している。"9. 葉氏植物の被分裂 II" は、まえのつづきで、変形菌類、瓶菌質、接合薬類、ユーグレナ類、ペリディニウム類、ケイソウ類の核分裂 を述べた。"10. 核分裂過程の不規則性"では、內外の原因による核分裂異常を述べ、ここには、日本の細 胞部者の業績が多くとり入れられ、"11. 無糸分製"で染色体の分化しない性分製が述べられ、"12. 減数 分裂一般"では、減敗分裂について1940年までの支献があつめられた(第1分冊終り)。

第2冊のはじめは、"減販分製一般"につずいて"13. 草葉星物における減数分製"で、まず、"異型 核分裂のディアキネシスまで"を述べ、核の容積の変化、仁染色体の行動、ラセン糸の行動および染色体の 形成などがとりあつかわれ、キアズマ形成、染色体のはめ込みなどを記し、まえの版にくらべると、内容的 に新しい事実が多く入つたという感じがとくにつよい。"異型核分裂の中期,後期および終期"にもラセン 糸の行動や着糸点のようすが、新しく問題とされ、桑田、坂村、松浦などの研究もしばしば引用されている。

"中間期と同型核分裂"の節では、とくに問題となることはないが、"14. 葉长植物の減效分裂"では、 いるいるな葉状植物の特異な減数分製が記され、"薄類"では、Moewus (1936) が Chlamydomanas に 染色体をみて、キアズマ形成を記している。Cladophora, Ulva などについても染色体がしらべられ,"変形 菌と瓶南類"には、さすがに文献は少いが Synchytrium における草野の図もかかげられ、"藻菌類と真菌

では文献はかなりふえている。 "15. 減量分製の過程における不規則性では、温度、薬品、X線その他の影響が述べられ、コルヒチンの 影響やチトミキシスも記された。また、交雑による減效分製過程の異常や、一価や色体の成立と、その行動 マツョイグサやムラサキオモトにおける染色体環の形成,その他が説明された。"16. 核分裂の機能"は 現在の問題の焦点であり、また、むずかしい多くの問題をふくんでいるが、ふつらの核分裂と減数分裂との 差は、時間的のものであるという Darlington の考えをうけ入れている。"17. 核融合"の章では、受精。 問題をとりあつかい、接合、受精から、体細胞における核融合の現象までを説明している(第2分冊終り)

第3分冊は主として追加で、1943年までの交献35頁を追加抄録し、約6,900 におよぶ膨大な交際、

者名さくいん、生物名さくいん、事項さくいん、正誤表をつけた。

まえの出版以来, 1940年ごろまでの女献が実によくあつめられ, 整理されているのにおどろく。 文についての重要な部分をとり出すに際して、適切でなかつたと思われる場合もあるが、膨大な資料を、 られた章節の中に入れるためには止むをえなかつたであろう。図は、原論文を襟直して入れてあるものが なり多く,また,少し大きすぎるものがあるので,全般的にみて,きれいであるとはいいかねる。 ともか も、細胞学者、とくに核学者の座右の参考書として、索引として、ぜひ1本をそなえたいものである。

# 本会記事

					则	7	E	会	愛知県西春日井郡清州町 県立園芸
				新入会員					試験所內 中部
					Ŧ	原	光	雄	靜岡県賀茂郡下田町 東京教育大学
清	水	大	典	宮崎県日南市飫肥本町 3888 服部					臨海実験所內
				<b>持门开究所</b>	橋	本		武	広島県賀茂郡寺西町 上寺家業護內
桐	野	秋	型	富山県婦賀郡保間村福島上野					中国, 四国
				北陸	奥	貫		男	大阪市北区中之島 大阪大学理学部
岐阜薬科大学附属図書館 岐阜市九重町3丁目								生与学教室 近 畿	
				中密	加	藤	勇	夫	広島市東千田町 広島大学理学部植
荒	木	德	莀	宮崎市花殿町 宮崎大学学芸学部生					们学教室 中国,四国
				物学教室 九 州	松	浦	Œ	郎	小田原市板橋 33 東京
由	良		隆	京都市 京都大学農学認遺伝学教室	茶		信		大牟田市上官町2の31 九 州
				近 畿	ф	45	良		京都市左京区吉田近衞町 府営住宅
栗	原	春	信	長野市西長野 信州大学教育学部生					308 号 近 畿
710	245	р	11-1	物学研究室 東京	愛知	印学芸	芸大名	各古層	量分校生物談話会 名古屋市東区大
北	Ш	昌	曲	滋賀県甲賀郡水口町水口 2207 の 2	-	Presi	mar F		幸町1の1 中部
-14	711		兴	近 畿	石	田	政	弘	京都市左京区京都大学理学部植物
尼	Ш	大	餘	宮崎県日向市 県立富島高校	1.7		77.0	erfe.	学教室 近 畿
16	ויל		THE	九 州		111	弘 差	幸	<b>ル</b>
-4-	1-1-	達	明	文京区大塚町 56 東京教育大附属	47	宮山	李		東京 京
不	413	连	193	高校地学教室 東京	Bat	部	重	美	大阪市北区中之島 大阪大学理学部
石	III	市	夫	能本市黑髮町 能本大学理学部生物	[711]	qq	里	关	生物学教室 近 畿
11	711	里	^	学数室 九 州	兀	峼	-tr-	一郎	11 11
前	田	IE.	ż	// // // // // // // // // // // // //	矢	北		夫	岡山県勝田郡大崎村福力 199
田	中	41-4	清	弘前市富田町 弘前大学文理学部生		74	FL		中国,四国
FI	Т		113	初学教室 東 北	北	村	文	生	京都府久世郡城陽村字富野小字堀
原		幹	左维	広島市 広島女理大植的学教室	,-	13			口 45 近 畿
1234		, (	- 44-	中国,四国	遠	族	σE	=	<b>計</b> 商市大岩町 静岡大学教育学部生
末	松		格	旭川市北門町 北海道学芸大学旭川	~	7223			物学教室
>1+	,124		114	分校生物学教室 札 幌	岡	本		尙	名古屋市千種区不老町 名古屋大学
息	H	郁	太佳	富山県福野町 県立福野高校					理学部 生物学教室 中 部
(1s)	Prof	nta	4417	北陸	55	脇		昭	横浜国立大学学芸学部生物学教室
Ш	盀		格	" "					東京
		<b>产農学</b>		弘前市富田町富野 東 北	洗	勝		曲	京都市左京区 京都大学理学部植物
堀	22 4-1	民	男	福井県今立郡鯖江町五郎丸					学教室 近 機
)H				北陸	內	貴	信	夫	<i>n n</i>

大学植物病理学研究室 中国四国

					-1-	.r. t.		216.	大字植物兩理字研究至 中国四国 位 E E B B C 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
				住 所 変 更	中	村		清	練馬区関町3の120 東京
					楠	元		司	東京大学理学部植物学教室 "
黑	Ш		道	新宿区百人町 資源科学研究所	野	本	宜	た	11
烷	11	義	人	鹿兒、島県、噌唹郡大崎町下永吉	高山	樫	245 11 1	吾	横浜市保土ケ谷区権太坂 100 横浜
				九州					国立大学農学教室 "
H	Ń		光	堺市大仙町 浪速大学農学部	深	沢	広	酤	神戶市東灘区御影町 神戶大学文理
				近畿					学部生物学教室 近 畿
上	村		登	高知市城北町 6 高知小津高校生物	坂	村		徹	岡山市上伊福清心町 ノートルダム
				学教室 中国,四国					清心女子大学中国四国
久色	民田	企	藏	橫浜市港北区岸根町 590	伊	藤		至	千葉県大場町 千葉県立山武農業高
沢	井	輝	男	名古屋市東区大幸町1の1 愛知学			, Sec.		等学校 東京
				芸大学 中 部	原	П	義	人	群馬県太田市 太田県立太田女子高
井	1		覚	熊本市黑髮町 熊本大学理学部生物	*rhe	>777	<b>-</b> .		等学校生物学教室 "
				学教室 九 州	渡	辺	弘	Ξ	滋賀県甲賀郡甲南町深川
小	147	繁	男	品川区大崎長者丸284 教育研究所	田	崎	忠	良	都下北多摩郡小金井町 東京農工大
飯			衞	茅ヶ崎市新町6の5995					学纖維学部 東京
坂	n k	信	之	大阪市 大阪市立大学理工学部生物	古	谷	庫	造	目黑区中目黑3の1008 ″
				学教室 近 畿	芦	原	孝	治	石川県採洲郡飯田町 飯田高等学校
金沙	金沢大学集学部 金沢市大手町1番地 北 陸		原	田		_	新宿区下落合1の537長尾辰三郎方		
本	堂	辰	夫	富山県東礪波郡出町 県立出町高等	古	野	泰	÷.	京都市左京区吉田神楽岡8 荒木方
				学校 北 陸	関	塚	昭	明	福島市杉婁町 15 農林省橫浜植物
伊	倉	伊二	主美	山形市六日町 山形大学教育学部生					防疫所福島分室
				物学教室 東 北	Щ	П	好	孝	都下大島元村 元村小学校
本	多	啓	43	富山県下新山郡櫻井町三日市 3361	佐	木	太		北海道上川郡愛別村字愛山 愛別村
水	谷	善	彌	名古屋市中村区大正町2の50					立愛山中学校 札 幌
胨	山	虎	也	広島県福山市外大津野 広島大学水	前	原	勘之	に郎	熊本県人吉市寺町19 九 州
				産学部水産植物学教室	田	島	良	男	京都市左京区北白川京都大学農学
林		Œ	人	岡山県吉備郡足守町上足守 1814					部応用植物学教室 近 畿
森	La.		昭	浦和市本太 2480 東, 京	E	Ш	英	雄	杉並区井荻3丁目 東京女子大学生
井	_E		勉	高松市勅使町 917 の 3					物学教室 東京
北	沢	淺	治	群馬県伊勢崎市豊城町 1989 の 3	加	膝	亮	助	北海道札幌郡江別町西野幌 林業試
田	中			愛知県豊川市牛久保 名大豊川分核					験場札幌支場 野幌分室 造林研究室
ļ.i.i	Т-		13%	at the substitute	井	上	行	雄	世田ケ谷区世田ケ区3の2457
賀	味	章	輔		小儿	11 4	青 ([	日姓为	中田) 下関市長府町前八幡 小林英
									夫方 中国,四国
高	稙	竜		奈良県藤江局区內 沼隈郡 金江村平	小	室	英	夫	京都市上京区 寺町通鞍馬口下新御
松	fr*S		-la	田 近 畿					靈口町 285 近 畿
				長野市西長野町 信州大学教育学部	野	П		彰	大分市王子町 大分大学学芸学部生
山	本	昌	木	島根県松江市乃木福富町 島根農科					物学教室 九 州

73) 上野夏郎 74) 黑水宝的 75) 田中廟 76) 和藝重作 77) 田中信儘 78) 中村亳闽縣 79) 小清水卓; 80) 裕風泰; 81) 今陽六也 82) 村田茂; 83) 村上進 81) 人久保订理子 85) 永海风 : 86) 東片春雄 87) 米山ψ 88) 涅田道人 89) 四山正, 90) 北京赤人 91) 加川隆英 92) 草子春 32) 木材有香 33) 龍碧松太郎 34) 區田屋 - 35) 人妇真司 36) 和田文督 37) 高橋島城 38) 福田八十前 39) 伊藤孝 40) 野口ツ々 41) 広瀬弘章 42) 两田城 43) 齊藤原太郎 11) 竹内正率 45) 原富 46) 人國康男 47) 柴田万年 48) 非本長品 49) 4消巴 50) 生物義博 51) 島村県 52) 渡辺篤 53) 木村陽二郎 54) 清淺明 55) 伊育伊三年 56) 漢云卷声 57) 佐藤正己 58) 前川文人 59) 連沢正々 60) 明字後々 61) 四條詳三 62) 柳岛直巻 63) 尾田義帝 64) 小林義雄 65) 本村晴 5 (6) 松浦圭嘉 67) 白部修 68) 中村連 69) 同谷雄三郎 70) 吉良竜夫 71) 龍臨壤 72) 高須讓一 103) 是野歌 104) 熊田久寺 105) 和田水 106) 照末勳 107) 正母四郎 108) 豊田清修 109) 中村版 110) 佐竹義輔 111) 外山三郎 112) 沼田眞 113) 齊藤隻 114) 越智春美 115) 份本真一年 116) 中星義庫 117) 神事太郎 118) 賀米章輔 119) 本材別 : 120) 津山高 121) 滝沢仙久 122) 深 限広跡 123) 葬健志 124) 五倉安之 125) 阿田女道 126) 佐藤七郎 127) 大勝頼子 128) 長谷川正男 129) 花田主計 130) 水鳥正学 131) 田沢県夫 132) 由中二男 133) 田崎忠良 134) 宝月吹: 135) 梅嶋勇 136) 平野皇 137) 馬田錦 138) 米田勇・ 139) 淑木紀男 140) 次特保昌 141) 由良隆 93) 小川房人 94) 海崎監旗 95) 全畫宗 : 96) 山田保 97) 據章八 98) 久均清墨 96) 久保成一 100) 神春宣明 101) 典世一男 102) 小田健二 1) 楠正賞 2) 高端昇 3) 影山藤作 4) 江木義英 5) 大覧・邸 6) 保井コノ 7) 山口清:邸 8) 三官賢・9) 卓野倹切 10) 小介鎌 12) 織織理・郎 13) 片井南 14) ドキ米直目 15) ・輪加雄 16) 松浦・ 17) 山田寺男 18) 堀田芳雄 19) 芦田磯台 20) C理俊次 22) 韓関滋恵 23) 今井英親 24) 荷寄山黄生 25) 木田正文 26) 小鳥均 27) 庚辺清秀 28) ミ木モ、29) 牧田鷹之輔 39) 徐遠孝人

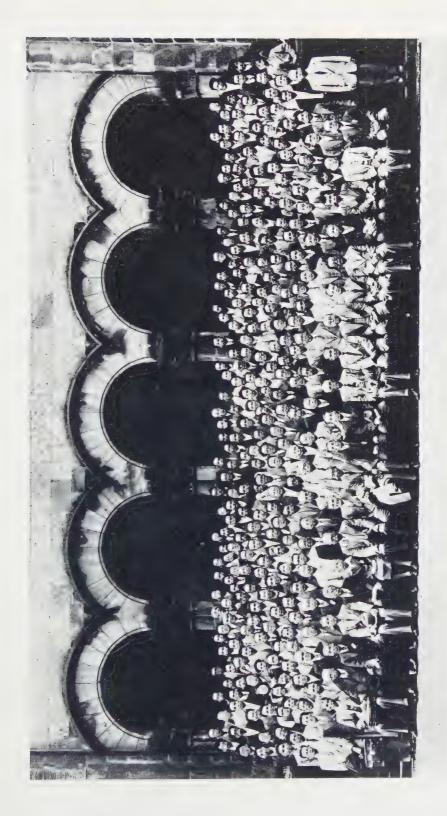


(42) 坪山宝 143) 膨井良平 144) 墙 順 145) 小草林 146) 西蒂介 147) 汉非辅男 148) 山本幸男 149) 八步正樹 150) 正原瞻敬 151) 大西健之 52) 中沢澗 153) 久世源太郎 151) 神谷平 155) 石塚和夬 156) 大泉德 157) 宗倫也 158) 永井進 159) 耆川英夫 160) 栗原平信 161) 高雪泰吉 162) 八卷墩縣 163) 小西道 冬 164) 各日五後 165) 石川茂城 166) 平原光縣 167) 山茂5 序 168) 信長騰守 169) 田中潔 17) 井上昭台邸 171) 字保美正--郎 172) 阿木尚 173) 年子勇 174) 鈴木時長 175) 田川基 : 176) 向坂道冶 177) 芳智窓 1/8) 楠元司 179) 栗本裔 180) 占属邦二 81) 聚烯萘胍 182) 庄司太宗 183) 石田雀 184) 松尼太邑 185) 田烯则子 186) 水母勘款 187) 伊藤莽 188) 全柱號一高 159) 印東弘安 190) 卒 野正 191) 古田幸弘、192) 素田矣 : 193) 辛皇保胤 194) 沙河光太郎 195) 島中康 196) 大内一逢 (57) 倉田僧 198) 行了洛東 199) 倉内一二 260) 石田政弘 201) 福主公子 202) 加寧奉城 203) 谷本土任縣 204) 清井文 : 205) 長巳昌 206) 三本本一部 207) 西川女 小 208) 中島泰邇 209) 滕佐縣 : 210) 古容雕樹 211) 野岸度加 212) 古色潔化 213) 平井一男 214) 飯泉淺 215) 極京後 216) 高木県州 217) 加藤君娣 218) 真保 219) 佐值飯厚 220) 野木汽夫 221) 木谷義明 222) 庫橋競往 223) 落凿代正廣 224) 井口正一馬 225) 鈴木昇 226, 菅沼峯之 227) 今井良吹 228) 非上行姚 2.29) 宣腦昭 230) ,川政「 231) 加楊黄男 232) 即用美加子 223) 小婚党 234) 久保淳 235) 高州正勝 36) 清水正城 237) 二宮 昭二 247) 丹羽小獺太 248) 秋山飞雄 249) 冲永哲 - 250) 須田省 : 251) 前田正之 252) 第7基加金 253) 鳥山爽州 (34) 東富南 255) 田中幸男 卷三郎 238) 用島食男 239) 下川頼人 240) 領永陳進 241) 市冒徵與 242) 大島県庁 243) 高片和草 244) 佐藤大丘等 245) 三木青子 346) 田島 256) 藤野正義 257) 松浦玉宗 258) 及川公平 259) 服部则差 260) 太田次郷 261) 太田永久 362) 外山遊磯 263) 沢豆本庄 - 264) 阿部重美

- 順 210) (45.53) (2.30) 37.4-45.7-7

152] 西南州 (161 南) 南州 (161 南) 水田縣 (161 南) 水田縣 (161 東南州 (161 南) 水田縣 (161 中) 水田縣 (161 南) 水田縣 (161 西) 水田縣

主 州田特 (88) 功法规学 (18 主 教出的 (08 广海史书全 (98) 物种类指巾 (85) 顯言中巾 (77) 科连专引 (8 11.1) 電景集成 11.2) 徒老兵 42.1 (42.1 ), 42.1 军统 11.2) 增去学館 11.8) 新五字雕 11.8) 字字等符 13.5) 集 4.1 (21.1 ) 13.5 (21.1 ) 13.5 



哪 THE STREET 49 京 **送** <\A K 三 17 胀 4 1 PA-植 K ш



# Hydrature Studies of Soybeans on the Soil Moisture Slope\*

By Yasona Fukuda\*\* and Shosuke Kaku

福田八十楠,加来章輔: 土壤濕度の傾斜環境に於ける大豆の水度

Since Schimper (17) proposed the problem of physiological dryness, the water economy of plant of different ecological types has been studied on the standing spot (10; 11; 15; 18; 19; 20; 21; 22; 25). The difference of soil moisture is general physiological dryness free from conditions by chemicals, that of the osmotic pressure of culture solution is dryness by chemicals and the plant hydratare may be considered to be physiological dryness. Comparing these three kinds of dryness observed simultaneously Fukuda intends to investigate the fundamental concept of Schimper's theory. The pot culture of soybean plants of the variety of Autumn-soybean, Tamanishiki, sowed on July 10, 1951 was chosen as the first example of the land plants by the authors.

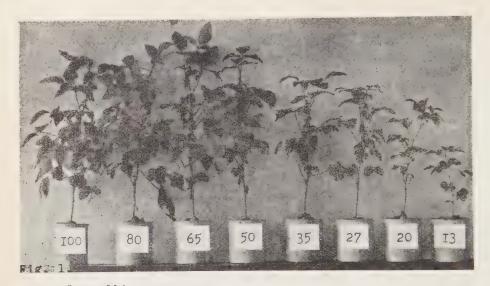
## **Experimental Results**

Experiment 1. Variation of the osmotic value during the growing season (Fig. 1)

- A) Excessive moist spot (100% water capacity of soil). Although the respiration of root is hindered and the plant is not very vigorous, the variation of osmotic value is similar to that in properly moist spot.
- B) Properly moist spot (80, 65 and 50%). The variation of osmotic values due to the difference of soil moisture is observed in the early period. In the later period the value ascends, keeping on not only during the podding time but also through the ripening season, although some descendt appears at the flowering season.
  - C) Dry spot (35%). The value on this spot is intermediate between B) and D).
- D) Extremely dry spot (27, 20 and 13%). The development of twigs and leaves apparently declines in remarkable degree. The time of flowering and podding lags one week than those properly watered, and accordingly the fluctuation of osmotic value has one week lag. Though the value on A) and B) increases during the podding time, that on C) and D) decreases during the lagged podding time. In the ripening season the value fixes at more or less decreased degree barely keeping its

<sup>\*</sup> Problem of physical, and physiological dryness. By Y. FUKUDA Report 1.

<sup>\*\*</sup> Botanical Institute, Faculty of of Science, University of Hiroshima. The authors express their gratitude for the promote fund from the Ministry of Education given for the study of this problem.



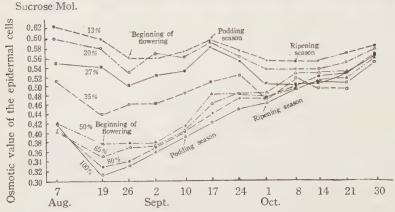


Fig. 1. From the late growing season to the ripening period.

higher degree over the other ones as before. Thus after the growing season the osmotic value on different soil moisture changes lessening the difference between them. Experiment 2. Variation of the water content of leaves on the soil moisture slope.

The water content becomes less as the growing season advances, and the less the soil moisture the less the water content (Tab. 1) as already observed in wheat (1).

The ratio of the water content (Tab. 1) and the osmotic value (Fig. 1) on Oct. 1 to those on Sept. 17 (Tab. 2) is shown.

As the growing season advances on the moist spots osmotic value increases and water content decreases. On the dry spot the opposite tendency is seen.

Experiment 3. On the problem of Schopmeyer's "Solute".

Solute amount (7; 24; 26) is (Osmotic value in Atm.×Water content)/24.05. The calculated amount is shown in Tab. 3.

Table 1. Water content of the leaf: g/dry weight in g.

Water capacity of the soil	Sept. 10	17	Oct. 1	8	14	. 21	29
100%	2.33	2.55	1.89	1.98	2.00	2.00	2.10
80	2.31	2.00	2.14	2.26	2.00	2.40	2.10
65	2.69	<b>2</b> .28	2.00	2.17	2.70	<b>2.</b> 20	_
50	2.49	2.20	1.76	1.55	2.46	1.96	1.89
35	2.38	1.55	1.75	1.57	2.10	1.93	1.56
27	2.31	1.16	1.74	1.65	2.01	1.96	2.10
20	2.13	1.62	1.83	1.76	1.92	1.64	1.84
13	1.94	1.50	1.90	1.57	1.84	1.74	1.73

Table 2. Osmotic value and water content before and after the podding.

Soil moisture	Osmotic value			Wa	ter conten	t
100%	Sapt. 17 (a) Oct. 1 (b)		Oct.1(b) Ratio(b/a)		Oct. 1	Ratio
100%	11.7 Atı	n. 13.8	118%	2.55	1.89	74%
80	12.4	13.3	107	2.00	2.14	107
65	13.0	13.7	105	2.28	2.00	87
50	13.7	13.3	97	2.20	1.76	80
35	15.0	13.3	89	1.55	1.75	110
27	17.1	14.3	84	1.16	1.74	150
20	17.4	15.0	86	1.62	1.83	113
13	17.4	16.0	92	1 50	1.90	120

Table 3. Solute amount in Mol/1 g of dry matter of a leaf.

Soil moisture	Sept. 3	17	Oct. 1	8	14	21	29
100%	1.04	1.24	1.09	1.15	1.19	1.18	1.40
80	1.06	1.03	1.17	1.35	1.21	1.50	1.44
65	1.19	1.22	1.14	1.36	1.71	1.37	-
50	1.15	1.16	0.97	0.88	1.46	1.22	1.26
35	1.35	0.97	0.97	0.95	1.22	1.12	1.11
27	1.46	0.83	1.04	1.12	1.20	1.23	1.43
20	1.41	1.18	1.14	1.04	1.22	1.07	1.28
13	1.34	1.08	1.26	1.12	1.22	1.21	1.23
2.0							

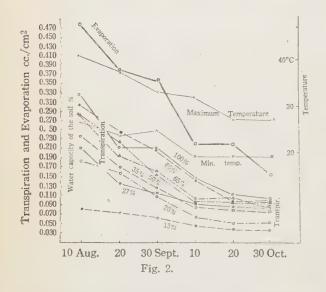
At the beginning of September solute amount is greater in the dry plot and smaller in the moist plot. Inverse relation appears when the season advances.

Experiment 4. Osmotic value and water content in leaf order on Oct. 18 (Tab. 4).

The higher the possition of the leaf is the greater the osmotic value is, as in other plants (4; 8; 9; 13; 16), but the maximum is a little lower than the top as in Raffa plant (26). The water content is less near the top, the relation of which is opposite to Raffa's. This opposite phenomenon may be caused by the different

Table. 4.

		Osmo	tic value i	n Mol	Water content			
Soil moisture		80%	50%	20%	80%	50%	20%	
	4th	†	†	0.54	+	†	1.82	
	5	†	†	0.55	+	†	1.76	
1	6	0.54	0.48	0.55	2.10	1.74	1.44	
į	7	0.53	0.51	0.56	2.04	2.13	1.40	
	8	0.57	0.50	0.58	1.94	1.36	1.38	
Leaf	9	0.57	0.56	0.61	1.62	1.50	1.62	
order	10	0.58	0.52	0.61	1.66	1.42	1.03	
	11	0.60	0.55	0.58	1.53	1.20	1.50	
,	12	0.56	0.56	0.59	1.62	1.46	1.35	
	13	0.56			1.60			
	14	0.56			1.42			
	15	0.60			1.44			



behavior of the two plants: the new shoot of Raffa grows continuously while the other plants such as soybean stop their growth at a certain degree.

## Experiment 5. Transpiration on soil moisture slope.

Mean transpiration of ten days from a unit (1 cm<sup>2</sup>) leaf surface in each soil moisture is indicated in Fig. 2. Through the whole season, the relative air humidity was 60–70% and evaporation decreased till it came

to 1/3 at the end. Similarly maximum and minimum temperature gradually decreased. The transpiration in each plot decreases as the season advances. Comparing the width of transpiration-difference among plots in October and in August, we notice that the variation of transpiration narrowed the width to 1/3, which is similar to the decrease of evaporation (Tab. 5).

In each soil moisture seasonal variation of relative transpiration is not distinct. On the moist plot, dry plot and extremely dry plot the relative transpiration is respectively 70-50%, 50-30% and 30-16%.

Experiment 6. The drying speed of a leaf:  $W_t = W_o^{-kt}$ ..... (Literature 5)

Table 5. Ralative transpiration during the whole season.

Soil moisture	Aug. 5-14	15-24	25-Sep. 3	4-13	14-23	24-Oct. 4
100%	69.9	54.0	60.0	70.0	50.2	65.5
80	63.0	62.8	60.0	68.0	43.8	61.6
65	58.0	50.2	46.0	48.5	49.1	57.8
50	58.3	58.0	44.5	46.0	48.1	63.0
35	50.5	44.2	37.0	41.0	35.0	51.0
27	44.4	38.0	33.5	43.0	39.5	59.0
20	39.1	40.0	32.0	31.0	24.2	33.0
13	16.8	24.8	18.2	22.0	14.8	31.2

Samples to be compared were placed on a wire-net at a time to be dried in room temperature and weighed to record drying process. The logarithmic value of the weight is taken on Y axis and mathematical number of elapsed time on X axis. Then the hydrature curve becomes a straight line on a semilogarithmic section paper. According to Fukuda's method (5) the exponent k) indicates drought coefficient. As for the unit of surface development,  $10 \, \mathrm{cm^2}$  per 1 gram fresh weight is taken (5; 25). The quotient of k) to the surface development is called the normal coefficient kn), which indicates the true passability of water through the unit surface of a leaf (5). Then the three hydrature features of a leaf may be measured (Tab. 6).

Table 6.

	Water capacity of soil	Surface development	k)	kn)
Moist plot	100-80%	6.48	0.0530	0.00896
Dry plot	27	6.20	0.0839	0.01344
Extremely dry plot	20-13	4.85	0.0810	0.01660

Table 7.

Soil mo	oisture	Height of the plant	Nos. of pods	Nos. of beans	Weight of total beans	Weight of a bean
	100%	73 cm	25	36	79.0 g	0.22 g
Normal	80	73	21	36	75.5	0.21
INOTHIAI	65	70	19	27	51.0	0.19
ļ	50	62	17	20	45.0	0.23
	35	52	12	11	22.0	0.20
Ex-	27	52	9	10	22.0	0.22
tremely	20	48	2	3	7.5	0,25
dry	13	30 .	1	2	4.6	0.23

The smallness of surface development of the plant grown on dry plot proves that it has acquired xeromorph. At the later growing season, however, as the

osmotic value and transpiration approaches each other, it is presumed that the difference of k) lessens, and on account of the lessening of the surface development, kn) becomes twice larger in the one grown on extremely dry spot.

Experiment 7. The result of growth and the yield on Nov. 5.

Deficiency of soil moisture results the dwarfishness of plants (Fig. 1 and Tab. 7).

#### Conclusion

- 1) Transpiration and osmotic value on the periodicity of growth. As the value of relative transpiration does not change through the season, the variation of transpiration follows that of evaporation (3; 12; 14; 27). Ascent of osmotic value on maturity is a known fact (6; 23; 28). After the growing season, however, this phenomenon is seen only on moist spot. On extremely dry spot the value descends when the climate becomes cool. The variation center is on 35% of soil water capacity.
- 2) The critical period of water economy. In soybean this period is meteorologically the time of maximum transpiration and physiologically in the flowering season when the variation of osmotic value is wide and the plant is weakest (2).
- 3) Schopmeyer's "Solute" theory and Fukuda's drought coefficient. Solute amount is more on dry spot than on moist spot in the early stage of growth. It proves that the solute amount is an indication of drought resistance. In the later period, however, solute amount becomes larger on moist spot rather than on dry spot. Simultaneously Fukuda's drought coefficient k) and also kn) are larger on the dry plot than on the moist plot. If the coefficient is larger then the plant is weaker. Both testimony cases of Schopmeyer's and Fukuda's agree each other in indicating that the one grown on dry spot became less resistant to drought in the later period.
- 4) Stocker's criticism against Schimper's hypothesis on physiological dryness. The largeness of kn) on dry spot affirms the Stocker's theory, that relative transpiration is larger in xerophyte than in mesophyte. The states of cut leaves are the models of the standing states of the ecologically different plants on similar external hydrature conditions. In soybean, from the present experiment, the conclusion is as follows: In the later period of growth cuticular transpiration of the plant on dry spot is larger than that of the plant on moist spot when both plants are laid on the same hydrature condition.
- 5) Relaxation of the temporarily acquired drought resistance on the extremely dry spot. Soybean is not a xerophyte on which Stocker's theory may adoptable, but it is a mesophyte. The decrease of solute amount and the increase of drought coefficient in cool season means the relaxation of drought resistance, which has been acquired in the hot season on extremely dry spot. The effect of hardening, however, is kept always somewhat.

#### Reference

- Bartel, A. T., Some physiological characteristics of four varieties of spring wheat presumably differing in drought resistance. Jour. Agr. Res. Vol. 74, 1947.
- 2. Binz, E., Untersuchungen über die Dürreresistenz bei Austrockung des Bodens. Jb. Bot. 88. 1939.
- Delf, E. M., Transpiration and behaviour of stomata in Halophytes. Amer. J. Bot. Vol. 25. 485. 1911.
- 4. Fernald, E.I., The inhibition of bud-development as correlated with the osmotic concentration of sap. Amr. Jour. Bot. Vol. 12. 287-305. 1925.
- Fukuda, Y., Ueber die Hydratur der Pflanzen und emperische Formel der Verdunstung und Transpiration. Pflanzenforsch. 19. Jena. 1935.
- 6. Greathouse, G. A., Effect of physical environment on the physico-chemical properties of plant and relation to these properties of leaf temperature. Pl. Physiol. 11. 1932.
- 7. Hatakeyama, I., Investigations on the water economy of plants. Physiol. and Ecol. 1. 1947.
- 8. Hurd-Karrer, A. M., A concentration gradient in corn stalk. Jour. Gen. Physiol. 9. 1926.
- 9. Iljin, W.S., Der Einfluss der Standortsfeuchtigkeit auf der Osmotischen Wert Planta 7. 1929.
- 10. Keller, B. A., Halophyten- und Xerophytenstudien. Jour. of Ecol. 13. 1925.
- 11. ——, Die Vegetation auf den Salzboden der russischen Wüsten. Zeit. Bot. 18. 1926.
- Koketsu, R., Variation of the transpiring power of leaves as related to wilting of plants.
   Jour. Dept. Agr. Kyushu Univ. Vol. 1, 1926.
- Korstian, C. F., Density of cell sap in relation to environmental condition in Wasatch Mountains of Utah. Jour. Agr. Res. 28. 1924.
- 14. Maximov, N. A., Badriew, L. G. und Simonow, W. A., Intensität der Transpiration bei Pflanzen verschiedener ökologischer Typen. Trav. du jard. bot. de Tiflis 19. 1917.
- 15. Montfort, C., Die Wasserbilanz in Nährlösung, Salz- und Hochmoorwasser. Zeit Bot. 14. 1922.
- 16. Pringsheim, E., Wasserbewegung und Transpiration in Welkenden Pflanzen. Jb. Bot. 43. 1906.
- 17. Schimper, A. F. W., Pflanzengeographie auf physiologischer Grundlage. Jena. 1898.
- 23. Sato, K., Ueber die Beziehungen zwischen der Zellsaftkonzentration und dem Wachstum einiger Kurturpflanzen. Jour. Dep. Agr. Kyushu Univ. 5, 1925.
- Schopmeyer, C. S., Transpiration and physico-chemical properties of leaves as related to drought resistance in lobloly pine and short leaf pine. Pl. physiol. 14. 1939.
- 25. Schratz, E., Unters. über die Beziehungen zwischen Transpir. und Blatstruktur. Planta. 12. 1932.
- 26. Takada, H., Studies on the water relation of Luffa sylindorica. Bot. Mag. Tokyo. 63. 1950.
- 27. Terada, S., Morinaga, J. and Kimura, J., Relation of the different soil moisture in several kinds of soil in North China and the growth of cotton, soybean and millet plants. Nihon Sakumotsu Gakkai Kiyo. Vol. 15. 1944.
- 28. Walter, H., Die Hydratur der Pflanze und ihre physiologische- ökologische Bedeutung. Jena. 1931.

# Experimental researches on photoperiodism (1)\* Photoperiodic responses of Salvinia

By Shidai NAKAYAMA\*\*

中山至大: 植物光週性の実験的研究(1) サンショウモの光週反応

#### I. Introduction

According to Kaufhold (1941), Polypodiaceae belongs to the neutral plant group (1). The writer wrote an article "Photoperiodic responses of Salvinia" in 1949 and stated that Salvinia natans (Hydropterides) is a very sensitive short-day plant and he also pointed out that this fact was very significant and interesting from viewpoint of photoperiodism (2). Since that time, the writer has observed in detail photoperiodism of this plant. The present article embodies the results obtained in summer of 1951.

#### II. Material and Methods

Experimental material was collected from a pond of the Department of Botany, Faculty of Science of Kyôto University. Till germination of spore, the plants had been cultured in a glass vessel of 20 cm diameter and 12 cm height filled with water; and after germination they were furnished with 2.5 L of 0.1% Knop's nutrient solution, continuously illuminated at night with 100 Watt Mazda Lamp set at a distance of 1 m above air leaf surface. Nutrient solution was renewed once a week. Initial pH of the nutrient solution was regulated at about 6.5.

Appearance of sporocarp was ascertained with help of dissecting microscope of 10 or 20 X magnification and taked as a clew of photoperiodic response.

#### III. Results

(a) The number of times of photoperiodic treatment necessary to cause induction Photoperiodic treatment was carried out from July 1 to 8 using a dark period of 17 hrs. and a light period of 7 hrs.; after the treatment the plants were returned

<sup>\*</sup> Contribution from the Department of Biology Faculty of Liberal Arts and Education, Miyazaki University, No. 30.

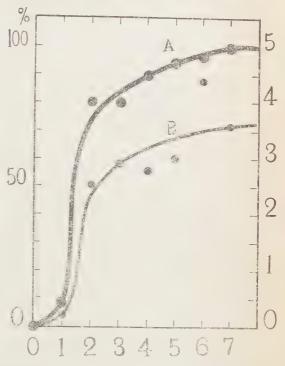
<sup>\*\*</sup> Department of Biology Faculty of Liberal Arts and Education, Miyazaki University, Miyazaki, Japan.

to a continuous light one. Table 1. and fig. 1 show the results of 12 days after the photoperiodic treatment. Fig. 1-A illustrates a percentage of sporocarp bearing

plants; under the continuous light, sporocarps were not initiated at all, in section of one-cycle treatment 8% of the plants reacted; and then in section of two cycle treatment the majority of the plants (80%) reacted; all plants reacted in section of seven cycles of the treatment. In table 1, and fig. 1-B are shown average number of sporocarps per plant, general trend being sigmoid as plotted in fig. 1-A.

## (b) On the effects of nitrogen upon the photoperiodic induction

Plants grown under the continuous illumination and supplied with Knop's complete nutrient solution, were separated into two groups on July 2; one of the two was supplied with the complete nutrient solution while the other was given a nutrient solution which lacked nitrogen as given below.



No. of times of photoperiodic treatment Fig. 1. The number of times of photoperiodic treatment necessary to cause induction: curve A, percentage of plant which induced sporocarp; curve B, average number of sporocarp per plant.

Knop's complete nutrient solution (+N)

Ca(NO <sub>3</sub> ) <sub>2</sub>	0.571 g
KNO <sub>3</sub>	0.143 g
MgSO <sub>4</sub>	0.143 g
KH <sub>2</sub> PO <sub>4</sub>	0.143 g
FeCl <sub>3</sub>	trace
H <sub>2</sub> O	1000 cc

Knop's nutrient solution lacking nitrogen (-N)

CaCl <sub>2</sub>	0.571 g
KCl	
MgSO <sub>4</sub>	
KH <sub>2</sub> PO <sub>4</sub>	
FeCl <sub>3</sub>	
H <sub>2</sub> O	1000 cc

On July 12 (10 days later), short-day treatment was started, applying dark period of 16 hrs. and light period of 8 hrs. immediately after a symptom lacking nitrogen appeared. After photoperiodic treatments were repeated 5 times, the plants were taken back to the continuous light condition. Table 2 tabulates the results observed on July 17 (5 days after treatment). There were remarkable differences between the +N and -N plants; nitrogen is decisively effective upon the formation and development of sporocarp.

Table 1. Effect of photoperiodic treatment. Observed on July 12 (12 days after treatment).

No. of times of photo- periodic treatment	0	1	2	3	4	5	6	7
% of plants with sporo- carp	0	8	80	80	90	94	96	100
Average number of sporocarp per plant	0.0 ±0.00	0.2 ±0.10	2.5 ±0.33	2.9 ±0.30	2.8 ±0.23	3.0 ±0.26	4.4 ±0.35	3.6 ±0.30
No. of plants used	50	50	50	50	50	50	50	50

Table 2. Effect of nitrogen on the formation and development of sporocarp. Observed on July 17 (5 days after treatment).

Section	% of plants with sporocarp	Average number of sporocarp per plant	No. of plants used
+N	90	2.6±0.30	50
-N	20	0.4±0.30	50

#### (c) On the critical dark period

Dark treatment was begun on July 6 and each section was subjected to different lengths of dark period; cycles of varying dark period 0, 7, 8, 9, 10, 11 and 12 hrs. were employed combining with a constant light period of 16 hrs. Each section was exposed to photoperiodic treatments for 9 times, and then it was taken back to the continuous illumination. Table 3 indicates the results obtained on July 31 (25 days after treatment). There was no microscopic evidence of sporocarp; i.e., critical duration of dark period not be determined.

(d) On the translocation of the stimulus causing the primordia of sporocarp. Plants bearing 7 pairs of air leaves were used, and the air leaves of terminal

Table 3. Experiment on the critical dark period. Observed on July 31 (25 days after treatment).

Length of dark period in hours	0	7	8	9	10	11	12
Length of light period in hours	24	16	16	16	16	16	16
% of plants with sporo- carp	0	0	0	0	0	0	0
No. of plants used	50	50	50	50	50	50	50

portion were defoliated as in the section of table 4 on July 13. Each section was given short-day treatment (from 8 A. M. to 4 P. M.) from July 14 to July 25, afterward it was taken back to the continuous light. During the experiment, newly developed air leaves in the terminal part were defoliated before expanding. Table 4 shows the results recorded on July 31 (18 days after the treatment). Sporocarp was not initiated at all in the section deprived of air leaves, whereas number of sporocarp

Table 4. On the translocation of the stimulus for the intiation of sporocarp.

Observed on July 31 (17 days after treatment).

No. of the air leaf		0	1	2	4	6	14
% of plants with	short day	0.0	40.0	70.4	74.3	92.4	100.0
sporocarp	.long day	0	0	0	0	0	0
No. of sporocarp per	short day	0.0 ±0.00	0.8 ±0.32	1.7 ±0.78	3.6 ±0.91	6.2 ±0.38	15.6 ±2.27
plant	long day	0	0	0	0	0	0
No of slants and	short day	17	15	27	35	13	16
No. of plants used	long day	14	11	1,7	11	7	12



Fig. 2. On the translocation of the stimulus for the initiation of sporocarp: sporocarps are formed on the growing point of the water leaves in the terminal part deprived of air leaves. S, sporocarp; W, water leaf; A, air leaf.

and a percentage of reacted plants were proportional to that of air leaves. Sporocarps were formed on the growing point of the water leaves in the terminal part deprived of air leaves (see fig. 2).

#### IV. Discussion

Salvinia natans can react sensitively to the short-day treatment, though very few plants reacted in the one cycle of photoperiodic treatment, most plants (80%) in the two cycles, and all plants in the seven cycles. Therefore the writer concludes that Salvinia natans is a very sensitive short-day plant as Xanthium (3) and Itomoea (4).

The effect of nitrogen upon the formation and development of sporocarp accords well with the previous studies (5, 6, 7, 8), namely, nitrogen is effective for the formation and development of the reproductive organ (sporocarp).

In this experiment, the critical length of dark period was not determined, hence, 0, 7, 8, 9, 10, 11 and 12 hrs. dark periods combined respectively with a constant

light period of 16 hrs., each section was given 9 times of photoperiodic treatment but in vain. From the above fact, the writer presumes that in the light period of 16 hrs. the critical dark period does not fall between 7 and 12 hrs. Neverthless, the critical dark period lies between about 10.30 and 10.49 hrs. in natural day length; i.e., according to the writer's experiment (2) in Sendai (36°16′N) sporocarp was observed with the naked eye on September 4, namely the dark period and the light period from August 19 to August 29 when sporocarp is formed respectively are about 10.40 hrs. and 13.20 hrs.

The above fact shows that the dark period of about 10.40 hrs. is effective for the formation and development of sporocarp. And as the fact that the length of light period affects the length of the critical dark period (9), it is considered that the light period of 16 hrs. in this experiment interfered with the effective length of the dark period, and that the critical dark period combined with the light one of 16 hrs. should be over 12 hrs. Another test to verify it again will be run in the near future.

The completely defoliated plant does not initiate sporocarp even under short-day treatment, so that it is considered that photoperiodic perception is performed by the air leaf. And from the fact that sporocarp is formed on the growing point at the base of the water leaves without air leaf, it is plausible that the stimulus causing the primordia of sporocarp move to the growing point at the base of the water leaves which are at some distance from the air leaves. Further investigation with a different method and without any defect is now under way.

#### V. Summary

- (1) Short-day plant, Salvinia natans was used as the material and the photoperiodism was studied.
- (2) In one cycle of short-day treatment 8% of plants formed sporocarp, but 80% in two cycles and 100% in seven cycles, and hence *Salvinia* plant is considered very sensitive short-day plant.
  - (3) Nitrogen is effective upon the formation and development of the sporocarp.
- (4) In this experiment, the critical dark period could not be decided; it is considered that the critical dark period exists over 12 hrs. in the combination with the light period of 16 hrs.
- (5) Photoperiodic perception is performed only on the air leaf; the stimulus for the initiation of sporocary move to the growing point of the water leaves of the plant deprived of air-leaf. This fact is also the case with Spermatophyta.

The writer must express here his gratitude to Prot. emer. Dr. Yoshizi Yoshii, Tôhoku University, for his valuable guidance and to Prof. Naoyuki Kume of the

Yoshida Branch of Kyôto University for his kindness in supplying material for study, and to the students who are specialized in plant ecology and plant physiology (Mr. Tokuzô Araki, Yoshirô Kizima, Tadatoshi Kikuchi, Kenzi Inamori) for their sincere assistance during the course of the experiment.

#### References

- (1) KAUFHOLD, A. W.: B. B. C., 60, 641 (1941)
- (2) NAKAYAMA Shidai: Coll. & Breed., 11, 197 (1949)
- (3) HAMNER, K.C. & BONNER, J.: Bot. Gaz. 100, 388 (1938)
- (4) NAKAYAMA Shidai: Ecol. Rev., 11, 188 (1948)
- (5) MAXIMOV, N. A.: Biol. Zbl., 49, 33 (1929)
- (6) NEIDLE, E. K.: Bot. Gaz., 100, 607 (1939)
- (7) DENFFER, D.: Planta, 89, 418 (1940)
- (8) NAKAYAMA Shidai & ARAKI Tokuzô: (in the press)
- (9) HAMNER, K.C.: Bot. Gaz., 101, 658 (1940)

#### 摘 要

- (1) 短日植物のサンショウモを使つて光週性を研究した。
- (2) 短日処理1回では全植物の 8%, 2回では 80%, 7回では全部の植物が反応する。 故にサンショウモは鋭敏な短日植物といえる。
- (3) N は子嚢果の形成・発育に有効である。
- (4) 限界暗期は決定できなかつた。しかし、明期 16 時間の場合、限界暗期は 12 時間以上の所にあるらしい。
- (5) 光週処理の感受は気葉だけが行い、水葉は直接関係しない。子囊果形成刺戟は気葉から水 葉 基部の生長点に転移する。刺戟伝達の点は、種子植物の場合と変らない。

## 根の原初木部の数からみた Metasequoia の類緣関係

#### 肥 田 美 知 子\*

Michiko HIDA: The affinity of *Metasequoia* to other conifers as shown by the number of protoxylem in roots.

#### A は し が き

Metasequoia については、各方面に於て研究が進められ、內外の形態についても近縁種との比較研究がなされているが、根についての形態学的研究は未だないのでその構造を觀察すると同時に、原初木部の数を他の裸子植物のものと比較し、Metasequoia の類緣関係を明らかにしようと試みた。

#### B材料と研究方法

材料の大部分は京都大学農学部の演習林で入手し一部は大阪女子大学の校庭で、又、コウヤマキ、スギ、ヒノキの芽生は 1950 年 11 月大阪府下三日市町附近で採集したものである。 猶 Araucaria は生きた材料が入手出来ず、ニューギニヤのアンギ産の材料(三木茂氏採集)につき観察した。 材料を採集するには芽生はそのまま場取るが、成育した樹では根際を掘り、比較的岩い根のついた部分を採り、保存のためアルコール漬とし、陰時観察に使用した。

一般に針葉樹の根系は長根(Langwurzel)と短根(Kurzwurzel)の2種の根より成り立ち、前者は二次的に肥大生長する能力をもち、原初木部の数もその発育状態により相当変化があるが、後者は長根から派生し、生存期間は僅かでその構造も二次変化をしないで原初組織のままに止まる。今ここに述べようとする觀察は比較的外因に左右されないで原初構造を示す短根について行つたものであるが、スギ科の各属については長根をもしらべた。 猶ヒノキ、コウヤマキ、スギでは初生根についても觀察した。

**視察に**あたつては根の手切横断切片を作成し、木部の所在を明らかにするため、フロログルシンと塩酸で処理し検鏡した。

#### C Metasequoia の根について (図版参照)

#### (1) 長根:

横断切片をみると、最外周は薄膜の不定形な細胞よりなる 1 層の細胞列、即ち Rhizodermis があり、この外壁は木化もコルク化もしていない。 次いで内部にやや小形の柔細胞が 2~4 層配列しているが、これは Exodermis で次層とは細胞の大きさで区別する事が出来る。 部分によつては Rhizodermis と Exodermis の境の細胞膜が木化し、Rhizodermis が剝炉落ちてい

<sup>\*</sup> 大阪女子大学生物学教室

る。 次に Exodermis より直径の大きい柔細胞が 5~6 層あり、その大部分には Phi 状(9 状)の肥厚部がある。 この肥厚は多くは放射方向の壁にだけ存在するが、時としては切線方向の壁にもあり、何れも木化している。 特に內皮に接する1列の細胞層では各細胞の放射方向の壁のみが著しく肥厚と木化をしている。即ち、この細胞層が Phi-Scheide で他の裸子植物に於ても屢々見受けられるものである。內皮をつくる細胞は Phi-Scheide の細胞より小形でその放射方向の壁には不顕著であるが肥厚部があり、カスバリー点を形成している。 その内部に木部及び篩部が交互に放射状に配列し、中央に髄を髪している。 原初木部及び原初篩部は大部分のものでは各々4ケであるが、時として、3ケ、又は特に太い根では6ケで、各木部は2~3個のらせん紋仮道管から成り立つている。 生長にともない原初の木部及び篩部より夫々後生木部及び後生篩部を生じ、更に生長すると第2期木部が中心柱の大部分を占め、随は殆んどなくなり、放射組織が日立つて来る。 放射組織の細胞には沢山の澱粉粒がある。第2期木部の仮道管には一般裸子植物のものと同様に沢山の有縁孔がみられる。

#### (2) 短根:

これは二次的な生長をせず、原初組織のままであるが、構造は若い 長根と殆んど変りがない。唯、直径が小さく、従つて Exodermis や皮層の細胞層が少くなつている。 原初木部は 2 ケ或は 3 ケで長根にみる様な 4 ケ以上のものはない。

之を要するに Metasequoia の根の特性は長根に於ては、3,4原型、特に太い根では6原型、短根では2原型及び3原型を示すことである。

#### D 原初木部の数について他の植物との比較

#### (1) 一般裸子植物との比較

原初木部)数に関して他の裸子植物との関係を知るために裸子植物の各科につき代表的なものを1~2 種選び調査した。結果は第1 表の通りである。 此処に特にマツ属について数種選んだのは、根の原初木部の数と子葉数とに何等かの関係がありはしないかとの疑問からであるが、表にみる如く、何れも殆んど2原型で子葉数とは無関係であることが明らかになつた。

次に表に従い原初木部の数を順次に見てゆくと、ソテツ科(Cycadaceae)、イチョウ科(Ginkgoaceae)、イチヰ科(Taxaceae)、マキ科(Podocarpaceae)、マツ科(Pinaceae)、ヒノキ科(Cupressaceae)に於ては、二、三の例外を除いて全部2原型である。即も例外としては、マツ科のモミ(Abies firma Sieb. et Zucc.)に見るもので、2原型のものと3原型のものが約件数宛出現する。又、バンクシアマツ(Pinus banksiana Lamb.)では著名のみたものはすべて3原型、或は4原型であるが、Chamberlain 氏は若い根に於ては2原型である事を報じている。又、ヒノキ科のベニヒ(Chamaecyparis formosensis Matsum.)では2原型のものの他に3原型、4原型のものも認めた。

#### (2) スギ科植物との比較

スギ科の各属については材料の人手出来る限り長根についても調査し、入手困難なものは 文献によつた。 結果は第2表の如く、各属によつて原初木部の数が異なる。 即ち、コウヤマキ (Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.) 及びタイワンスギ (Taiwania cryptomerioides Hayata) では長根、短根ともに 2 原型、コウョウザン (Cunninghamia lanceolata Hook.) では短根は大部分が2原型であるが、稀に3原型も觀察された。 而し、長根は2原型である。 Sequoiadendron gigantium Buch. の短根は2或は3原型であるが、2原型のものの方が多く、 長根は3或は4原型である。 Taxodium distichum Rich., Glyptostrobus pensilis Koch.,

第1表. 裸子植物の短根に於ける原初木部数及び子葉数.

科 名	調査植物	原初木部の数	子葉数	備考
Cycadaceae	Cycas revoluta Thunb.	2	2	
Ginkgoaceae	Ginkgo biloba Linn.	2	2 稀に 3	1
Taxaceae	Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.	2	2	
1 axaceae	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	2	2	
Podocarpaceae	Podocarpus Nagi Zoll. et Moritzi.	2	2	a book to the destroyer of
Araucariaceae	Araucaria Cunninghamii Ait.	2	4	
Cephalotaxaceae	Cephalotaxus nana Nakai	2	2	
	Abies firma Sieb. et Zucc.	2, 3	3, 4	1
	Cedrus Deodara Loud.	2	11	
	Keteleeria Davidiana Beissn.	2	2-4*	*属に於
	Larix leptolepis Murray.	2	5, 6	ける数
	Picea excelsa Link.	2	8, 9	
Pinaceae	Pinus Armandi Fr. var. amamiana Hatasima	2	10-12	
	P. banksiana Lamb.	2, 3, 4		
	P. Bungeana Zucc.	2	12, 13	
	P. densiflora Sieb. et Zucc.	2	6, 7	
	P. koraiensis Sieb. et Zucc.	2	10—15	
	P. Taeda Linn.	2		
	P. Thunbergii Parl.	2	6-10 主に 8	
	Pseudolarix Kaempferi Gord.	2	4, 5	
	Pseudotsuga japonica Shirasawa	2	68	
	Tsuga Sieboldii Carr.	2	3	1
1.80 1188	Cryptomeria japonica Don.	3	2—4 主に 3	
	Cunninghamia lanceolata Hook.	2稀に3	2	1
	Glyptostrobus pensilis Kock.	2, 3	6	
	Metasequoia glyptostroboides Hu et Cheng	1 1	2	
Taxodiaceae	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	2	2 稀に 3	
_ unounque un	Sequoiadendron gigantium Buch.	2, 3	4	
ı	Sequoia sempervirens Endl.	2, 3, 4 主に 3	2	
	Taiwania cryptomerioides Hayata	2	2	!
	Taxodium distichum Rich.	2, 3	6	

	Chamaecyparis formosensis Matsum.	2, 3, 4	2	
	C. obtusa Endl.	2	2	
	C. pisifera Sieb. et Zucc.	2	2	
	Cupressus funebris Endl.	2	2-5* 主に 2	*属に於ける数
Cumusan	Juniperus chinensis Linn.	2	2	
Cupressaceae	J. chinensis L. var. procumbens Endl.	2	2	
	J. rigida Sieb. et Zucc.	2	2	
	Libocedrus macrolepis Benth. et Hook.	2	2*, 3*	* 属に於
	Thuja occidentalis Linn.	2	2	ける数
	T. orientalis Linn.	2	2	1
	Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.	2	2	
	-			

Metasequoia は短根は2或は3原型、長根はGlyptostrobus は3或は4原型、Metasequoiaは3,4,6原型のものを見る事が出来た。Taxodium の長根については適当な材料が得られずNoelle 氏の觀察によつたが、3,5,6,8原型があるという。Sequoia sempervirens Endl. は短根では大部分が3原型で、時に2,4原型のものがあり、長根では著者は3,4原型しか見なかつたが、Noelle 氏は5原型のものを見ている。スギ(Cryptomeria japonica D. Don.)は長根、短根ともに3原型である。これらの標案からスギ科の各属を原初木部の数によつて3群に分けて見た。

第2表. スギ科植物の根に於ける原初木部数

	調査植物	原初木	備考	
区分	ing .自. 小良 1727	長 根	短 根	備考
	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	- 2	2	
第1群	Taiwania cryptomerioides Hayata	2	2	
	Cunninghamia lanceolata Hook.	2	2稀に3	
	Sequoiadendron gigantium Buch.	3, 4	2, 3	
1	Glyptostrobus pensilis Koch.	3, 4	2, 3	
第2群	Taxodium distichum Rich.	3*, 5*, 6*, 8*	2, 3	* Noelle 1910
	Metasequoia glyptostroboides Hu et Cheng	3, 4, 6	2, 3	
	Sequoia sempervirens Endl.	3, 4, 5*	2, 3, 4	* Noelle 1910
第3群	Cryptomeria japonica Don.	3	3	

第1群: 長根, 短根ともに2原型のもの。コウヤマキ, タイワンスギ, コウヨウザン。

第2群: 短根は2及び3原型, 長根は3,4原型, 時には多原型のもの。Glyptostrobus, Ta-

xodium, Metasequoia, Sequoia, Sequoiadendron.

第3群: 短根, 長根ともに3原型のもの。スギ。

第2群のうち Sequoiadendron は短根に於ては3原型のものより2原型のものが多いか

ら第1群に近く、Sequoia は短根が殆んど3原型で第3群に近いものと考えられる。 斯様に分ける時 Metasequoia は Sequoia、 Glyptostrobus、 Taxodium と同群に属し、コウヤマキ、タイワンスギ、コウヨウザンよりも前3者に近いと云うことが出来る。

#### E 考 察

杉科植物は原初木部の数から見ると上記の3群に分けられるが、他の特性も之と一致するかどうかについて、胚発生の初期にみられる前胚のばら細胞群の有無と、上野氏の花粉発芽の際に於ける花粉管の状況とに関して比較してみた。第1群のものは何れも、ばら細胞群を生じ、コウヤマキ、コウヨウザンの如く花粉管の分枝が著しく、第3群では、ばら細胞群は出来ず花粉管は分枝しない。第2群に関しては、ばら細胞群が Taxodium で見られているが、Sequoia にはなく、Glyptostrobus、Sequoia、Taxodium では花粉管は殆んど分枝しない。 それで原初木部の数から分けた各群の個々のものは、ばら細胞群の有無及び花粉管の分枝の点に於ても共通性がみられ、第2群は第1群と第3群の中間乃至はやや第3群に近い関係にあることを知る。

又,第1群にみる2原型は分類上,位置が異なつたものにも見られるので,一概に古いとは 云えないが,しだ類やイチョウ等もこれであり、3原型である第3群が第1群より新しく出現し た点から見ても古いものと推察出来る。

Metasequoia の属する2及び3原型を行する第2群の各々については既に Stebbins 氏が色々の特性から互に近縁である事を指摘しているが、原初木部の数からもこの説によく一致する。そこで胡及び鄭両氏が Metasequoia を新科 Metasequoiaceae としたことは意味がない様に思う。

#### F 摘 要

- (1) Metasequoia の根の構造は他の針葉樹のものと大差が認められない。
- (2) スギ科は原初木部の数から3群即ち、短、長根ともに2原型である第1群と、3原型である第3群、及び、短根は2及び3原型で、長根は2~8原型まで変化する第2群に分けられる。
- (3) 2 原型を有する第 1 群に属するものは花粉管が分枝し、前胚にばら細胞を有する等、 Metasequoia の属する第 2 群に比し著しい特性がある。
- (4) 短根が2及び3原型を有する第2群には Glyptostrobus, Metasequoia, Sequoiadendron, Sequoia, Taxodium が属し、これらの間にはその他の形態的差異も著しいものが見られないので Metasequoia を新科とする考えは意味がない。

終りに臨み始終御指導を頂き、また校園の労をお取り頂いた大阪市立大学三木茂博士並びに京都大学農学部今村駿一郎博士に厚く御礼申し上げると共に材料入手にあたり種々御便宜を御与え下さつた京都大学演習林の長谷川勝好氏に心から謝意を表する。

図 版 說 明

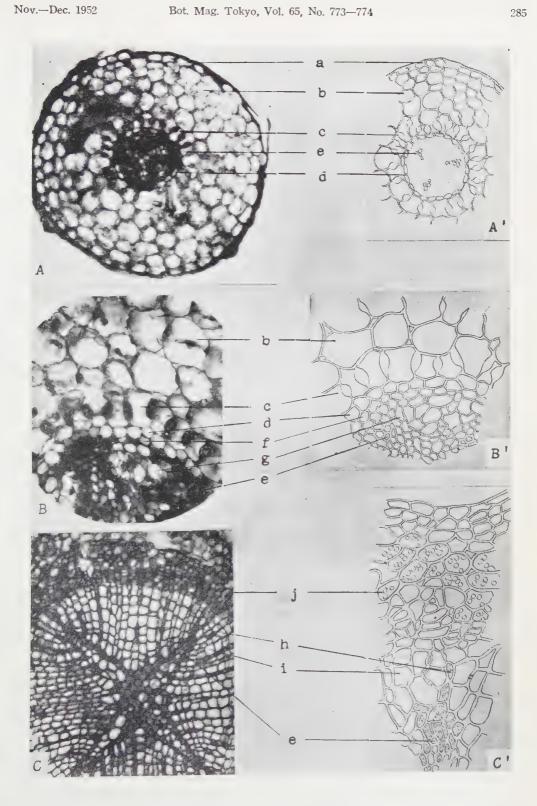
A, A': Metasequoia glyptostroboides Hu et Cheng の短根の横断面 (3原型のもの)。

B, B': 同上, 長根の横断面(4原型のもの)の一部廓大。

C, C': 同上, 長根の木化したものの横断面 (4原型のもの)。

a: Exodermis. b: 皮層 c: Phi-Scheide d: 內皮 e: 原初木部 f: 周辺形成層

g:原初篩部 h:放射組織 i:仮道管 j:澱粉粒。



#### Summary

In the present paper reports are made on the structure of roots in *Metasequoia* and its affinity to other conifers as represented by the structure of roots. The results can be summarized of follows.

- 1) The structure of roots in *Metasequoia* is not much different from that of the other conifers.
- 2) According to the number of protoxylem Taxodiaceae can be divided into the following three groups:
- 1st Group .... Diarch both in the long and the short root. Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc., Taiwania cryptomerioides Hayata, Cunninghamia lanceolata Hook.
- 2nd Group.....Tri-, tetra- or polyarch in the long root and di- or triarch in the short root. Sequoiadendron gigantium Buch., Glyptostrobus pensilis Koch., Taxodium distichum Rich., Metasequoia glyptostroboides Hu et Cheng, Sequoia sempervirens Endl.
- 3rd Group.....Triarch both in the long and the short root. Cryptomeria japonica Don.
- 3) Differing from the second group to which belongs *Metasequoia*, the representatives of the first group have many remarkable characters in common. Their pollen tube branches and the proembryo has rosette-cells.
- 4) Among the representatives of the second group no remarkable difference in morphological characters are seen. It seems not adequate to separate *Metasequoia* from the other members as a representative of a special family, Metasequoiaceae.

#### 文 献

- 1) Hayata, B. (1906): On Taiwania and its affinity to other genera. Journ. Linn. Soc. 37, 330.
- 2) 早田文藏(1933): 植物分類学 第一卷 裸子植物篇.
- 3) Hill, T.G. und Fraine, E. de (1908): On the seedlings structure of Gymnosperms. I. Ann. Bot. 22, 689-712.
- 4) ——— (1909 a): On the seedlings structure of Gymnosperms. II. Ann. Bot. 23, 189-227.
- 5) ——— (1909 b): On the seedlings structure of Gymnosperms, III. Ann. Bot. 23, 433-458
- 6) (1910): On the seedlings structure of Gymnosperms. IV. Ann. Bot. 24, 319-332.
- 7) Hu, H. H. and Cheng, W. C. (1948): On the new family Metasequoiaceae and on Metasequoia glyptostroboides a living species of the new genus Metasequoia found in Szechuan and Hupeh. Bull. Fan. Mem. Inst. Biol. N. S. 1, 153-161.
- 8) 猪野俊平 (1950): 植物の発生。
- 9) 近藤万太郎 (1934): 日本農林種子学 後篇.
- Linsbauer, K. (1937): Handbuch der Pflanzenanatomie Band X. Anatomie der Gymnospermen-Samen.
- 11) (1941): Handbuch der Pflanzenanatomie Band VIII. Der primäre Bau der Gymno-

spermenwurzel.

- 12) Miki, S. (1950): Taxodiaceae of Japan, with special reference to its remains. Polytech.

  Osaka City Univ. 1, 63-77.
- 13) 三木 茂 (1951): Metasequoia について,最近の生物学 第一卷 300-312.
- 14) Noelle, W. (1910): Studien zur vergleichenden Anatomie und Morphologie der Koniferenwurzel mit Rücksicht auf die Systematik. Bot. Ztg. 68.
- 15) Stebbins, G. L. (1948): The chromosomes and relationships of *Metasequoia* and *Sequoia*.

  Science, 108, 95-98.
- 16) Sugihara, Y. (1941): The Embryogeny of Cunninghamia lanceolata Hook. Tohoku Imp. Univ. 16, 187-191.
- 17) ——— (1941): Embryological observation on *Taiwania cryptomerioides* Hayata. Tohoku Imp. Univ. 4 Ser. 16 291-295.
- 18) 田原正人 (1948): 配偶体と胚の発生.
- 19) Ueno, J. (1948): Morphology of pollen of *Metasequoia, Sciadopitys* and *Taiwania*. Polytech. Osaka City Univ. 2.
- 20) 柳田由藏 (1927-1939): 森林樹木の種苗図説 林学会雑誌第9巻第6号一第21巻第9号.

## 小麥ライ麥間における Amphidiploid 型作物の育成に 関する遺伝学的及び細胞学的研究

III. A. T. turgidum (n=14) と S. cereale (n=7) との間に生ぜる 2n=42 染色体を有する  $F_2$  植物の花紛母細胞成熟分裂

#### 中 島 吾 一\*

Goichi NAKAJIMA: Genetical and cytological studies in the breeding of amphidiploid types between Triticum and Secale. III. A. The maturation division in PMC-s of  $F_2$  plants having 2n=42 chromosomes raised T.  $turgidum (n=14) \times S$ . cereale (n=7).

#### 緒 言

1942 年に得た  $TSF_2$  植物 42 個体の体細胞染色体数は  $40\sim45$  の変異を示した(Nakajima 1950)。而してこれら 42 個体の  $F_2$  植物の中 2n=44 の 1 個体 ( $TSF_2-25$ ) は Bush 性を示し、多数の分葉をしたのであるが遂に出穂を見るに至らなかつた。他の個体はすべて出穂し、花粉母細胞成熟分裂の鏡検材料として固定を行つたのであるが、適時に固定し得なかつた 個体もあり、成熟分裂の觀察をなし得た植物は 2n=41 のもの 6 個体、2n=42 のもの 24 個体及び 2n=43 のもの 1 個体,合計 31 個体である。これら 31 個体における花粉母細胞成熟分裂の觀察結果を体細胞染色体数により、41、42 及び 43 の 3 群に分け、本報においてはこれらの中 2n=42 の群について述べる。

#### 材料及び方法

花粉母細胞における成熟分裂の觀察には Carnoy 氏液で固定した葯を,固定後 70% アルコール中に貯蔵したものを用い、主として Belling 氏 acetocarmine なすりつけ法によつたのであるが、これと並行してパラフィン法によつて作製したプレパラートをも用いた。 この場合 切片は  $16\sim18\mu$  の厚さに切り、染色には Heidenhain 氏鉄明礬へマトキシリンを用いた。図は Abbe 氏のカメラによつて描写し、その原倍率は 2150 倍である。

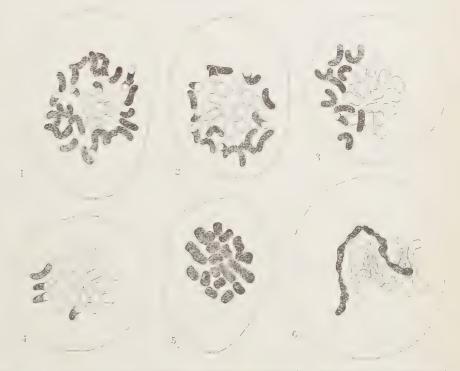
#### 觀 察 結 果

#### A. 2n=42 の群

この群に属する植物は TSF<sub>2</sub>-1,5,6,8,11,12,13,15,16,17,18,21,23,24,26,27,29,30,31,33,34,35,36 及び 38 の 24 個体で,何れも根端細胞において42の染色体を觀察した (Naka-jima 1950)。 花粉母細胞の成熟分裂においてもまた 2n 数として何れも42の染色体を觀察し

<sup>\*</sup> 群馬大学工学部生物学教室

た (Figs. 1~5)。この群に属する上記の24個体における花粉母細胞の成熟分裂は多少不規則性を示した。花粉母細胞第1成熟分裂における1母細胞中に見出される2価染色体数は7~21,1価染色体数は0~28である。而してこれらの頻度は第1表に示す通りである。2価染色体の形態は棒状及び環状であり、その1母細胞中に存する数は後者の方が多かつた。2価染色体の外に稀に4価染色体も観察した。然し3価染色体は見出されなかつた。而して4価染色体の形態はV字型ではN字型であり(Fig. 6)、その1母細胞中に見出される数は常に只1個であった。4価以上の多価染色体は見出されなかつた。2価染色体の核板上の正常なる位置はその中央であり、1価染色体はその囲りに位置するのが普通である(Figs. 1~5)。



Figs. 1~6. First maturation division in PMCs of TSF<sub>2</sub> (T.  $turgidum \times S$ .  $cereale F_2$ ) having 2n=42 chromosomes. All figures are drawn from smear preparations. Fig. 1. Polar view of heterotypic metaphase, 7II+28I ( $TSF_2-38$ ). Fig. 2. do. 13II+16I ( $TSF_2-30$ ). Fig. 3. do. 16II+10I ( $TSF_2-17$ ). Fig. 4. do. 19II+4I ( $TSF_2-17$ ). Fig. 5. do. 21II ( $TSF_2-12$ ). Fig. 6. Side view of first metaphase. Tetravalent shows in black.  $\times 1075$ 

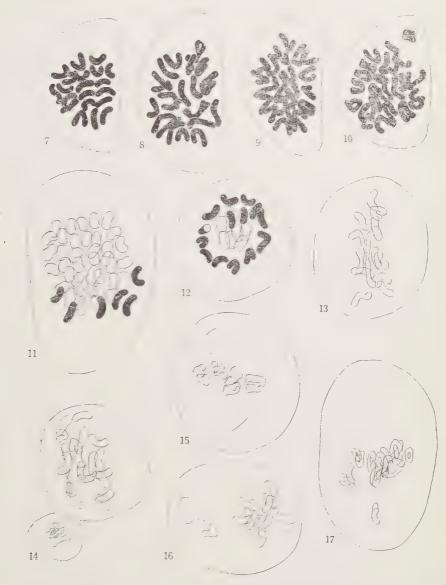
第1表によつて明かな如く 1 母細胞中に存する 2 価染色体数は,稔性個体 においては大部分  $17\sim21$  の間にあり(98.62%),稀に  $13\sim16$  の場合が視察された。而してその頂数は  $TSF_2$  -6, 11 及び 18 の 3 個体は 21 11 ,  $TSF_2$  -21 及び 29 の 2 個体においては 19 11 であり,他の残りの 6 個体においては何れも 20 11 である。 然るに不稔個体にあつては  $TSF_2$  -38 個体を除く他の 12 個体においては 2 価染色体数は大部分  $14\sim21$  の間に分布し(86.66%), $7\sim13$  の場合も少数ながら概察された。而してその頂数もまた変異に富み  $16\sim21$  の間にあつた。唯  $TSF_2$ 

第1表 2n=42 染色体数を有する TSF<sub>2</sub> 植物の花粉母細胞第1 成熟分裂中期における 2 価染色体数の頻度 Table 1. Frequency of bivalents at first metaphase in maturation division of PMC-s of TSF2 plants having 2n=42 chromosomes.

				PIV	VIC-s of	1 15	F2 <b>p</b> 1	ants	navi	ng Z	n = 42	z chr	omos	some	S.				
ts	valen- and nival- ents	2111	2011 + 21	19II   +   4I	1811 + 61	17II + 8I	1611 + 101	+	1411 + 141	+	1211 + 181	+	+	911 + 241	811 +   261	711 + 281	M %	n	Fertility per Spikelet
*TSF	72-5	22	55	29	4	2						1					2011 49.2	112	34.1
* "	6	155	148	63	28	6	2										21II· 38.6	402	13.0
* "	11	192	184	72	31	16	7	2	2	2							2111 37.8	508	39.4
* //	12	76	166	65	22	4	2	1									2011 49.4	336	45.4
* #	13	114	173	100	25	9											2011 41.1	421	50.0
* #	15	126	128	97	56	20	5					٠.					2011 29.6	432	23.5
* #	16	111	158	62	28	11	11	2									20II 41.3	383	21.8
* "	17	58	152	94	48	16	4	3		1			5				2011 40.5	375	16.1
* "	18	158	114	67	12	2											21II 44.8	353	5.6
* "	21	48	75	124	41	6											19II 42.2	294	30.9
* //	29	36	55	99	44	6				1		1					19II 41.3	240	50.6
11	1	56	138	58	19	8	2	2	1		1	1				·	2011 48.6	284	0.0
"	8	41	98	128	77	33	13	8					-		1		19II 32.2	398	0.0
"	<b>2</b> 3	32	26	39	87	128	104	48	18	4			1				17II 26.3	486	0.0
"	24	43	54	98	109	65	28	13	7	3							18II 26.0	420	0.0
"	26	74	58	127	72	33	12	7							i	1	1911 33.1	384	0.0
. #	27	86	97	138	78	28	16	17	10	5	6.	9	2				19II 28.1	492	0.0
"	30	17	78	108	83	54	22	9	5	6	2	1				1	1911 28.1	384	0.0
"	31		4	19	56	94	113	47	9	3	1	1					16II 32.6	347	0.0
"	33	26	40	73	87	58	28	4	1								1811 27.4	317	0.0
".	34	186	98	93	46	16	6	1	1								2111 41.6	447	0.0
"	35	222	124	41	44	8	1	2	1								21II 50.1	443	0.0
17	36	69	64	154	88	27	10	Marine Marine									1911 37.4	412	0.0
"	38				8	18	15	22	37	28	43	57	48	32	22	16	11II 16.5	346	0.0
Tota	al	1948	2287	1948	1193	668	401	188	92	51	52	67	50	32	22	17		9016	

<sup>\*</sup> Fertile individuals; others were sterile.

-38 の個体にあつては前記の諸個体におけると異なり、2 価染色体数は  $7\sim18$  の間に分散しその頂数も 11 $\rm II$  であつて他の個体と著しく異なつて居た。



Figs. 7~10. Second maturation division in PMC-s. Fig. 7. Polar view of homotypic metaphase, 20 chromosomes (TSF<sub>2</sub>-33). Fig. 8. do. 21 chromosomes (TSF<sub>2</sub>-15). Fig. 9. do. 22 chromosomes (TSF<sub>2</sub>-17). Fig. 10. do. 23 chromosomes (TSF<sub>2</sub>-12).

Fig. 11. Polar view of heterotypic metaphase, tetraploid nuclear plate having 39II+6I. ×1075 Figs. 12~17. Abnormal divisions. Fig. 12. 7II+14I (TSF<sub>2</sub>-33). Fig. 13. 2II+10I (TSF<sub>2</sub>-31). Fig. 14. 3II+13I (TSF<sub>2</sub>-29). Fig. 15. 9II (TSF<sub>2</sub>-39). Fig. 16. xII+14I (TSF<sub>2</sub>-29). Fig. 17. 14II (TSF<sub>2</sub>-15). ×1075

これもの2価染色体は何れも等大等形の2染色体より成り, 緊密な結合をして居た。 而して最高数を示す 21n 染色体は *T. turgidum の* AB及び *S. cereale* の R genome の gemini であつて, これも24個体中極少数の2~3個体(TSF<sub>2</sub>-31及び38等)を除いては総べて *T. turgidum*, *S. cereale* の真正 amphidiploid 植物であると云い得よう。

 $TSF_2$ -31 及び 38 の両個体は 2 個桌色体数 20 及び 18 以下であり、その頂数もまた 16 II 及び 11 II である等の点から見て、 $F_1$  世代の成熟分裂における不規則性のために T. turgidum の AB 及び S. cereale の R genomes を完全に包含せず、不整的に包含するためと考えられる。即ちこの 2 個体は染色体数においては 2n=42 で amphidiploid 数ではあるが、T. turgidum, S. cereale の真正 amphidiphoid 植物ではないものと考えられる。

稔性個体と不稔個体との間における成熟分裂の度を 2 価染色体数の変異によつてこれを比較すれば、稔性個体においては概して変異の幅が狭く、その質数もまた 19~21 の間にあり、正常なる分裂状態(純粹種)に近く、これに反し不稔個体においては 2 価染色体数の変異の幅が広く、その質数もまた 16~21 (稀に 11n) の間にあり著しく不規則性を示して居る。これが不稔を来す主な原因であると考えられる。

1価染色体は真正 amphidiploid と思われる個体においては、2価染色体が早期に分裂することによつて生ずるものと考えられる。

2価染色体は ana-telophase において規則正しく両極に分配されるのが普通であるが、稀には不規則な場合も見られた (Figs. 12~17)。1 価染色体は多くの場合 2 価染色体の早期分裂によって生じたものであるために、その両極への分配も数において大差なく行われる場合が多い。即ちその頻度は第2表に示す通りである。

第 2 表 花粉母細胞第 1 成熟分裂 ana-telophase における染色体の両極への分配 Table 2. Distribution of chromosomes to two opposite poles at 1st ana-telophase in maturation division of PMC-s of TSF<sub>2</sub> plants with 2n=42 chromosomes

	n of omo- omes 21:21	20 : 22	19:23	Total
TSF <sub>2</sub> -12	37	3	1	41
" 17	15	3		18
<b>"</b> 18	13	1		14
11 29	23	1		24
n 30	23			23
<i>n</i> 35	21	2		23
<i>n</i> 36	4			4
Total	136	10	1	147

第2表によつて明かなように第1成熟分裂における染色体の両極への分配は 21:21 が最も多く (92.51%),稀に 20:22 及び 19:23 の場合が觀察された (Figs. 7~10)。 胚嚢母細胞の成熟分裂においてもまたこれと同様の染色体の分配の起ることが可能であると 考えられるを

以て、これらの植物の次代には 2n=42 の染色体数を有する個体が大部分を占め amphidiploid として固定するものと思われる。

第1 成熟分裂の anaphase において幾つかの染色体は残留染色体として觀察され、その数は  $0\sim9$  であつた。 而して不穏個体においては稔性個体におけるよりも残留染色体数はかなり 多かつた。

 $TSF_2$ —38 植物の成熟分裂は著しく不規則であり、その第1成熟分裂中期における染色体は T. turgidum $\times S.$  cereale  $F_1$  不稔個体 (Nakajima 1952) におけるが如き觀を呈し、特に残留染色体と認めらるべきものはなかつた。

第2分製中期における染色体数を見るに、第1分裂の不規則性のために不同を来すのであるが、然し多くの場合大差なく、19~23 を算えた(Figs. 7~10)。第2分裂においてもまた第1分裂におけると同様に多少不規則に行われ anaphase において 0~5 の残留染色体を観察し、その頂数は3であつた。

四分子は4個の細胞から衰る場合が最も多いが、 $1\sim5$  の細胞から成る場合も觀察された。而して其の形態も正常なる場合が大多数を占めて居たけれども、少数の変型を呈する場合が見られた( $TSF_2-12$ , 16, 30, 33, 34, 35 及び 36 の個体)。而してその形態は国行。等の外に蝌蚪状の場合が稀には観察された( $TSF_2-34$  及び 36 の個体)。 又四分子には各細胞に laggards に由来する小核を有する場合が多く、その数は  $0\sim14$  の変異を示した。

第1 成熟分裂主義において T. turgidum (n=14) と S. cereale (n=7) の配偶子染色体数の和, 即ち 14+7=21 の倍数, (14+7)×2=42 の染色体数に相当する染色体数を示す核板を観察した (Fig. 11)。これは T. turgidum の AB 及び S. cereale の R genome の染色体の倍加によつて生じたものであろう。斯の如き関は Bremer (1923) の事態, Shimotomai 氏 (1933) の Chrysanthemum 及び Nakajima (1937, '51) の小麥ライ麥の雑種等においてすでに報ぜられて居る。また Figs. 12~17 に示すが如き分裂の不規則なる場合が誤察された。 Fig. 12 は 711+141=28 の染色体を示し,これは A, B, R genome の中何れか 2個の genome に相当する染色学数 (141) を欠くものと考えられるが、その欠除せる染色体を明かにすることは出来なかつた。 Fig. 16 は x+141 の染色体を示し, A, B, R genome の中 1 genome が一方に具除されたものであつて、この具除された genome は Percival (1930) 及び Nakajima (1952) の報する如く R genome であろう。 Fig. 17 は 14日 の染色体を有し、これは R genome を排除した AB genome の倍加によつて生じたものであろう。 Figs. 13~15 は母細胞の異状分裂によつて生じた不整数の染色体を有する細胞である。その染色体は分割の工合により種々なる数を示す。

#### Résumé

In the present report, the result of cytological studies on the maturation division of PMC-s of TSF<sub>2</sub> plants having 2n=42 chromosomes was described. These TSF<sub>2</sub> plants, 24 in (total) were obtained in 1942.

At the heterotypic metaphase in PMC-s of  $TSF_2$  plants with 2n=42 chromosomes,  $7\sim21$  bivalents and  $0\sim28$  univalents were observed (Figs.  $1\sim5$ ). The frequency of

bivalents in the PMC-s was shown in table 1.

In the case of fertile individuals the number of bivalents were found almost all to lie between 17 and 21, and of sterile individuals between 14 and 21.

Tetravalents were observed, though rarely, in addition to bivalents at the heterotypic metaphase but no trivalent was found.

Almost all the plants of the 24 individuals investigated may be considered as what might be called the eu-amphidiploid in which AB genomes of *Triticum turgidum* and R genome of *Secale cereale* are included completely.

In most cases the distribution of chromosomes to the opposite poles at the anaphase in heterotypic division was observed to be 21:21 (Table 2).

The nuclear plate showing 3911+61 chromosomes at the heterotypic metaphase of PMC-s was observed (Fig. 11). This case ought to be due to the duplication of chromosomes of AB genomes of *T. turgidum* and R genome of *S. cereale*. Further, the nuclear plate having 711+141 chromosomes was observed. This case may be thought of as due to the deficiency of chromosomes corresponding to any two genomes (14 chromosomes) in AABB genomes of *T. turgidum* and RR genomes of *S. cereale*.

11 plants of the 24 individuals investigated were appeared to be fertile and the remaining 13 individuals sterile.

#### Literature Cited

- Bremer, G. 1923. A cytological investigation of some species and species hybrids of genus Saccharum. Genetica 5.
- Nakajima, G. 1937. Cytological studies on the hybrid between *Triticum turgidum* (n=14) and Secale cereale (n=9). Jap. Journ. Genet. 13.
- and Secale, I. The external characters and chromosomes of the fertile F<sub>1</sub> T. turgidum (n=14) × S. cereale (n=7) and its F<sub>2</sub> progenies. Jap. Jour. Genet. 25.
- 1952. Cytological studies on the sterile F<sub>1</sub> plants raised between *Triticum turgidum* (n=14) and *Secale cereals* (n=7). La Kromosomo (in the press).
- Percival, J. 1930. Cytological studies of some hybrids of Aegilops sp. × wheats, and of some hybrids between diffrent species of Aegilops. Journ. Gen. 22.
- Shimotomai, N. 1933. Zur Karyogenetik der Gattung Chrysanthemum. Jour. of Sci. Horishima Univ. Ser. B. Vol. 2.

### 本 会 記 事

#### 日本植物学会第17回大会

昭和27年10月11日(土),12日(日),13日(月)の3日間,東京大学医学部及理学部講堂及国立科学傳物館講堂で開催され,講演数157を数え出席会員250名をこえ,その他 聽講者多数で 極めて盛会であった。大会次第は次の通りである。

第1日 10月11日(土)

9.00~17.00 一般壽演及特別講演(於東京大学三会場), 17.30~21.00 評議員会(於学士会館別館)

第2日 10月12日(日)

9.00~17.00 一般講演及特別講演(於東京大学三会場)

第3日 10月13日(月)

9.00~12.00 一般講演(於国立科学博物館), 13.00~14.30 総集会(於同上), 14.30~17.00 ツュンベリー 生誕 200 年記念祭譜演会(日本学衛会議, スエーデン・リンネ学会及本会共同主催)(於同上), 17.30~ 19.30 懇親会(於東大山上会議所)

次に本大会に於て行われた講演は次の通りである。

#### 10月11日(土)

#### 特别講演

紅色酵母菌と油酸について	奥貫一男
植物細胞の凍結過程北大	朝比奈英三
葉類性の問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	前川文夫
<b>苔質の性染色体及びその起源について</b>	辰野誠灰

#### 一般 講演

- (1) 紅花の花の紅変について(第1報)……・資源研 和田水・春日部高女 服部恒代・東京教大 塩原ヤイ

- (0) A CI CI A CONTROL OF THE CONTROL
- (6) Mycotorula Japonica のキシローズ酸化について……愛知学芸大 沢 井 輝 男
- (7) 植物性カタラーゼの研究 ……………………東京工大 永久正志・服部明彦 (8) 枯草菌群 - バクテリアの新チトクロムについて………名大 江上不二夫・板橋美智子・森 健志
- (6) 相导图析一次07970岁77770岁7777
- (9) 諸種ベクテリアの脱水素酵素に関する研究 ………………名大 上田博・森 健志
- (10) Proteus vulgaris の l-アミノ酸酸化系について……

   北大 字佐美正一郎・佐々木昭治・和気和民・牧野利一
- (11) γ-アミノ酪酸によるアミン酸化酵素の阻害について…………阪大 奥貫一男・稻垣 稔・田辺竜幸
- (12) 高等菌類における尿素とアルギナーゼ…………東京文理大 山本 茂・襟立昭子・三輪知雄
- (13) 海藻の蛋白分解酵素について …… 新潟大 田 沢 康 夫
- (14) 細菌の発言に及ぼす種々のビタミンの影響………東大 植村 隆・寺田照雄・鈴木懶彦
- (16) 薬物によるバクテリオフアージの増殖阻害……………東大 丸山洋一・柳田友道
- (17) シロマイタケ (抗生物質生産菌) 培養の諸条件について……名古屋市大 平井 男
- (18) 銅抵抗性酵母細胞の由来 ………………………京大 芦田譲台・皆川貞一・荒勝 豊・内貴信夫

(19)	酵母の銅結合力京大 内3	責信夫·荒勝 豊·皆川貞·	一• 芦田譲治
(20)	銅抵抗性酵母の色素京大 荒脈		
(21)	RNA による酵母の銅抵抗性変化の条件京大 皆)		
(22)	酵母菌の生長様式と変異性の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
(23)		大阪市大	高 田 英 夫
(24)			
(25)			
(26)			
(28)			
(29)			
(30)			
(31)			
(32)			
(33)			
(34)			
(35)			
(37)			
(38)			
<b>(</b> 39).			
(40)	雪腐病原菌の生理	······北大 照本 勳·勻	产佐美正一郎
(41)	ミノワセ大根の低溫処理間に於ける二三の酵素について	九大	井上昭二郎
(42)	局部的低温によるサツマイモの根の人為的結諸の実験		西內 光
(43)	表皮におけるフォスフォリラーゼの分布とその作用	広島大 加藤勇夫	•福田八十楠
(44)	9 物理的及化学的前標条件における禾本科植物の水度研究…広島	高大 高沖 武·福田八十	楠·瀨尾正人
(45)	) 桑葉の乾燥抵抗に関する研究	東京農工大	田崎忠良
(46)	大豆に於ける滲透圧変化の季節的及生長的週期	広島大	賀来章輔
(47)	) ユキノシタの葉の表皮細胞の原形質分離限界濃度の年週期的変	ぞ化熊本大	八戶正夫
(48)			
(49)	)	阪大 岸本卯一郎	• 西崎友一郎
(50)	) 変形体原形質糸の力学的性質		阿部重美
(51)	)原形質の流動力と起電力に及ぼす各種薬物の影響	阪大 神谷宣郎•中島宏	通·阿部重美
(52)	7 1747 1277 1277 1277		
(53)	) 胚の手術によるゴマの畸型	岐阜大	塙 順
(54)	<b>)</b> ラカンマキ花粉の人工培養	大阪市大	上野実朗
(55)	) ミゾジュズモの生殖細胞特に配偶子嚢の性別について	神戶大	広瀬弘幸
(56)	う) 管束植物の系統発生について	お茶の水大	保井コノ
(57)			
(58)			
(59)			
(60)			
(61)			
(62)	2) マメ科植物の核型分析 (第4報)	東京都大	酒井文三

(63) 小麥属の核型分析に関する研究
(64) コムギの零染色体植物とその巨態遺伝研 松 村 清二
(65) ヤマシャクャクの染色体研究 (第1報)
(66) タンポポ属の核型分析 (1)
(67) 位相差顕微鏡による核分製像の研究名大 島村 環・太田敬久
(68) ホウレンソウ及びフダンソウの種実の水滲出液と分裂毒作用名大 加 藤 幸 雄
(69) 羊歯類前葉体の構造に対するホイルゲン反応について山形大 伊倉伊三美
(70) テトラゾリウム塩によるコハク酸脱水素酵素の組織化学的検出について東大 佐藤 七郎
(71) 細胞内の含燐物質特に核酸の研究 I. 細胞の Feulgen 染色と紫外線吸收
京大 新家浪雄•蚕田 炭•石田政弘
(72) 細胞内の含燐物質特に核酸の研究 II. Dische 反応による DNA 定量法の再検討
·····································
(73) 細胞内の含燐物質特に核酸の研究 III. PVM 法による比色定量について
·····································
(137) Hemerocallis 属の細胞遺伝学的研究 (第1報)木原生研 松本賢三・西田貞行
(138) コルヒチンによる Aegilops の四倍性複二倍体 ····································
10月12日(日)
特 別 講 演
発芽期の代謝名大 太 田 行 人
ヤナギ類の系統と分類東北大 木 村 有 香
タンバノリ及びそれに類似の紅藻の一群について北大 山田 幸男
湖沼の生産量と物質循環東京都大 宝 月 欣 二
— 般 議 演
(74) 高等植物のオルニチン代謝 (第1報)
(75) 自息気泡計算法について
(76) 植物に於ける澱粉形成について九大 小野 林
manufacture We try to the try to
A. P. AA I EN AA J. HT
11 1 14 14 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15
a man Whatta I. Alla who with Mile the Mile Will
(81) N <sub>2</sub> -fixation と H <sub>2</sub> の代謝について
(82) 高等植物のグリコール酸酸化機構 お茶の水大 塚本 晃・東大 伊沢清吉
(83) 紅色細菌による水素供与体の酸化 埼玉大 森田茂広
(84) Euglena の物質代謝の比較生化学的研究 東大 藤 茂 宏
(85) ヒラタケの呼吸系について北大 宇佐美正一郎・宇津木愛子
(86) ミトリササゲ幼植物体の電位分布について名大 岡 本 尚
(87) ソラマメ種子の発芽過程に於けるパーオキシダーゼの消長並びにパーオキシダーゼに
及ぼす生長素, 2·4-D の影響について
(88) 大豆の生長成熟とマグネシウム代謝との関係広島大 橋 本 武
(89) イネ鮹葉の成長とアルコール醱酵との関係東北大 長尾昌之·大脇帽子
(90) イネの花序のコルヒチン処理による種子の発育について 弘前大 平田 政由
\ \

(91)	植物の生育に及ぼすアルミニウムイオンの作用機構について (1)農技研 相見靈三・小寺 高
(92)	反射顕微鏡による植物細胞の構造について
(93)	2·4·D に対するアオウキクサの抵抗性獲得について金沢大 村 田 茂 三
(94)	トウモロコシ柱頭の伸長に対する pH 緩衝液の影響について京大 小 西 通 夫
(95)	植物生体内に於けるインドール醋酸の形成東京文理大 中村幸四郎・東大 八卷敏雄
(96)	側芽の伸長と抑制 (第3報)
(97)	高等植物器官の酵素系の活性の消長について資源研 山口清三郎・松崎悦三・村瀨昭代
(98)	蛇紋岩地帶の区系及び群落学的研究 ·······高知大 山 中 二 男
(99)	本上産 Picea 属の天然分布 ····································
(100)	日本産グミ類について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(101)	日本産オニノヤガラ属について お茶の水大 津山 尚
(103)	遺体の出現状況からみた日本の地形 ・・・・・・・・・大阪市大 三 木 茂
(104)	日本産ハリガネゴケ科 (Bryaceae) 蘚類の研究 (第1報)鳥取大 越 智 春 美
(105)	日本列島に於ける蘚苔類の分布研究 広島大 堀 川 芳 雄
(106)	□製に穿孔せる藻類について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(107)	アサクサノリの生活史とその分類法について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(108)	トカラ列島・宝島の海藻
(109)	日本産輪藻類 (I) 九州地方のものについて金沢大 今 堀 宏 三
(110)	水前寺者の帰属について 鹿兒島大 岡 田 喜 一
(111)	日本に於ける赤雪及び綠雪について(第2報) 科博 小林義雄・東京文理大 福島 博
(112)	丸削"赤玉"に生ずる糸状菌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(113)	本邦産 Itersonilia 属について
(114)	マユハキタケはペニシリウム・ルテウムと同一種か科博 小林 義雄
(115)	Geoglossaceae の属の分類について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(116)	山西省の隠花植物相について
(117)	精油成分による唇形科イヌカウジュ属の新分類体系大阪工試 藤田安二
(119)	植物群落内における光条件について 東大 門司正三・佐伯敏郎
(120)	二三高等植物の光合成曲線とその生態学的意義東大 佐伯敏郎・野本宣夫・鹿兒島大 楠元 司
(121)	葉の光透過率と植物群落の光合成量との関係東大 笠 永 博 美
(122)	水分経済の面から見た蘚類の生態について(第2報)数種蘚類の水分発散及び
	吸濕について
(123)	常緑葉の葉脈内形成層細胞の季節的活動三重大 石 部 修
(124)	海岸砂洲の植群 (4) 浜堤-砂丘系の地形と植群東北大 石 塚 和 雄
(125)	能登半島塩田の植生について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(126)	群落の分散
(127)	同種個体間の競爭現象・・・・・・・・・大阪市大 吉良竜夫・小川房人・京大 穂積和夫
(128)	雜草更新に関する一知見,瀬戸内海の雑草の分布 (第2報) · · · · · · 広島宇品中 森 千春
(129)	雑草の生活形とその季節的変化
(130)	土壌硬度による路傍雑草の住分け 広島大 堀川芳雄・宮脇 昭
(131)	土壌特性判定に対する光電測定法とポーラログラフ法との優劣東大 高 橋 基 生
(132)	箱根山大湧谷硫気荒原の研究(第1報)・・・・・横浜大 松浦正郎・東大 高橋基生
(133)	原始ケ原濕原の植物相
	田八刀同 景 滕 夫

(134)	花粉分析より見た比較的最近の我国植的気候の変遷について高知大	中村	紬
(135)	スダシイ群団について 東大	给木時	夫
(136)	台灣の雨森林・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	細川隆	英
(139)	倍数性に於ける葉綠体の大きさと数について 広島大 下斗米	直昌·藤原	動
(140)	キイチゴ属植物倍数体の分布特に光要素との関係について愛媛大	神野太	郎
(141)	マルバアサガオに於ける易変遺伝子の行動法政大	笠原基外	印冶
(142)	Mougeotia sp. の葉綠体について神戸大	楠 正	曹
(143)	桁菌類の Diploidisation について (予報) 岡山大	木村劼	=

#### 11 月 13 日 (月)

#### 一 般 講 演

 (145) ツルチシインゲンの形態形成に及ぼす 2・4-D メチルエステルの効果……東大 古 谷 雅 樹 (146) 変形体原形質系の螺旋性 … 阪大 神谷宣郎・齋藤 裕 (147) 気性菌類の物理的及化学的乾燥に対する適応性 … 広島大 福田八十楠・林 克己・高見伸店・池庄司幸技 (148) わが国の泥炭濕原 … 東北大 吉 井 義 次 (149) 栄養発育と生殖発育の相互関係の図解 … 福岡女子大 纐纈 理一郎

#### O評議員会 10月11日(土)(17.30~21.00)於学士会館別館

出席者: 小倉会長及び宇佐美,木村,前川,服部,津山,三輪,原,佐竹,湯浅,島村,熊沢,柴田,正宗, 芦田, 新家,北村,堀川,猪野,瀨川,芳賀の20 評議員,ほかに本部より亘理幹事長,小野,柳田,佐藤, 笠永の各幹事。

会長の開会の辞の後, 算事長より昨年の大会以降現在迄の本会事業報告があり (内容は総集会の項参照) 次いで総集会にはかる次の諸事項に関して審議並びに決定を行つた。

- (1) 次期大会は北陸支部で開催されることに決定した。 倘その際, 在来慣習的に地方と東京と交互に大会を開催して来たが, このような原則は必ずしも固守する必要はないとの意見が多数であつた。
- (2) 明年の会長選挙の候補者として芦川譲治,小倉譲,篠遠喜人,服部が夫,松浦一(五十音順)の五氏 が選出された。
- (3) 最近会誌への論文投稿数が厳増し、会誌增真が必要である点及び明年度研究成果刊行補助費交付が期待薄である点より会費値上げ案が本部より提出され種々の案が検討された結果、明年 1 月より会費 年 1000 円 (終身会費は 6000 円) 会誌年 10 冊発行との案が決定された。

#### O総集会 10月13日(月)(13.00~14.00)於国立科学博物館講堂(出席者119名)

小倉会長の開会の挨拶があり、引続き亘理管事長より次の様な本会事業報告(昭和26年1I月~昭和27年 9月)があって異議なく承認された。

- 1) 会員移動,現在会員 946 名(名誉会員 1 名,特別会員 12 名,終身会員 31 名を含む) この間における 新入会者 97 名,その際本会名誉会員藤井健次郎博士の御逝去(本年 1 月 11 日)に対し会長以下会員一 同默疇を捧げた。
- 2) 会計報告 本誌既載の昭和26年会計年度決算報告(昭和26年4月1日から27年3月31日まで)。
- 3) 評議員及本部役員改選と北陸支部の設立。
  - (イ) 評議員は本年4月改選された。(会誌昭和27年5~6月号に報告,27年7~8月号に1部訂正の通り)。
  - (ロ) 本年度より北陸支部が新設され、評議員として正宗嚴敬、柴田万年の両氏が選出された。

(ハ) 昭和27年度本部役員は次の通り決定した。

会長 小倉謙, 幹事長 亘理俊次, 董事 柳田友道, 佐藤七郎, 小野記彦, 加崎英男, 西荒介, 笠永博美

4) 各種推薦

朝日科学獎励金候補研究として林(孝三)氏,毎日学得獎励金候種研究として松浦,日比野,辰野・堀 川の諸氏の研究が推薦された。

5) 雑誌交換, 寄贈の現況

外 国{交 換 67 內 地{交 換 45 計 174 (昨 年 146) 名 贈 51

- 6) その他フェンベリー生誕 200 年記念祭開催,博士館研究会の事業。" Japan Science Review " の刊 行についての報告があつた。
  - 引続き審議事項として(1) 次期大会開催地(2) 会長選挙について(3) 会費値上げの件について (評議員会の項参照) 評議員会の決定結果が提案され,(1),(2) については異議なく承認された。 (3) の会費値上げについては学生会員の会費減額等種々の意見が提出されたが、原案につき採決 の結果, 賛成60名, 反対20名, 保留39名(出席者総数119名)で賛成過半数を以つて本案成立 と認めた。

(しかる所, 会則第二十七条によれば会則変更については出席者総数の三分の二以上 の賛成を必 要とするので原案は不成立でありました。手違いの点深くお詫び致します。〕

#### **○ツュンベリー生誕 200 年祭記念講演会 10 月 13 日 (月) (14.00~17.00) 於国立科学博物館**

Thunberg and early hotanical relations between Sweden and East Asia

本学会と日本学術会議並びにスエーデン・リンネ学会共同主催、日本歴史学協会、日本動工学会、国立行 学博的館後援によるツェンベリー生誕 200 年祭記念副演会は総集会に 引続いて 行われ、小倉 本学会々 長の開会の辞,日本学術会議副会長茅城司氏の挨拶があり、次の4に演が行われ多数の聽衆に深い感銘 を与え、日本学術会議会員松浦一氏の閉会の辞を以つて定刻に終了した。

記念講演

スエーデン。ゴーゼン	バー	が植	4/9]]]	長	Dr.	Ber	til I	indq	uist
ツュンペリー氏と植物学	東	京農	業大	学	田	中	長	三	郎
ツュンベリー氏と動物学	fl	州	大	学	ìŗ	111,	Ť	争	
日本文化史上のツュンベリー氏	東	京	大	学	岩	生	=	成	
この記念譜演会を中心として10月4日~15日の間,国立科学園	厚 ) 館	陳多	研究)	こ於	て言	念	是示	会が自	崖き
れ,東京大学,国立科学博力館,長崎大学,早稲田大学,慶応大学	i, il	断点。	β £,	岩	生成-	-, /	个泉	源吉請	引飞,
その他のツュンベリー関係の文献,参考品が陳列せられ、特にこ	スエー	デ	ン・!	リン	<b>ネ学</b> (	会か	らは	ウプー	ナラ
大学所豊のツュンベリー採集日本権団の原原本の写真や、当時	11 10	の学	行が	ッ	ュン・	ベリ	-15	宛て流	た丁
紙等も陸列せられて異彩を放つた。出品数百余点。									

なおこの出品物はそのままツュンペリーの緣の地長崎に運ばれて11月1~5日長崎市博物館で展覽 せられ、11月3日カトリックセンターに於て次の記念講演会が行われた。

ツェンベリー氏の伝記....スエーデン代理公使 ペトリー ツュンベリー氏と植わ学......東京大学 原 覧 日本文化史上のツュンペリー氏......東京大学 岩 生 成 一

O懇親会 10月13日(月)(17.30~19.30)於東大山上会議所

本学会及びツュンペリー生誕 200 年祭共同にて行われ, 本会会員約 150 名のほか, Lagerfelt スエーデン 公使夫妻, Lindquist 博士夫妻等, ツュンベリー祭関係の来賓数名があり国際色ゆたかな会合であつた。

### 日本植物学会会員名簿 (アイウェ 1順)

東京大学理学部交京区本富士町

(昭和27年11月15日現在)

1. こは名本会員 〇は特別会員

お茶の水女子大学 支京区大塚町

- 2. 住所 東京都内の場合は東京都の文字を省略してある
- 3. 多数会員を有する学校機関の所在地は一括して胃頭に記し本文中では省略する

						•			-		4 1-1-		L. Dd T		
大	阪プ	大 学	理	学部	大阪市北区		東	京	大学	農	学部	文京区	向ケ岡	爾生町	
大	阪市 3	大大	学理!	工学部	大阪市北区	南扇町	東	京大	:学養	文養	学部	目黑区	駒場町	865	
企	沢ナ	文 学	理	学部	金沢市仙石	T BJ	東	京	敎	育:	大学	文京区	大塚窪	H)	
京	都プ	文 学	理	学部	京都市左京	区北白川	東	京都	立大	学到	里学部	目黑区	衾町		
京	都プ	マ学	農	学認	京都市左京	区北白川	広	島	大学	理	学部	広島市	東千田	町	
九	州ブ	で学	理	学部	福岡市箱崎	i de la companya de	名	古月	大	学理	学部	名古屋	市千種	区田代	町
九	州ナ	て字	農	学院	福岡市箱崎	î	東	北	大学	理	学部	仙台市	片平丁		
資	源系	1 学	研	究 所	新宿区百人	町4の4	48	海道	1大	学理	学部	札幌市	北八条	西5丁	目
相	見	靈		都內北		農業技術研究	Ķūj	部	近		德島県	・麻植郡	川島町		
5772	L 37.	ulda f	. 12%	FIF			[saj	部	重	美	大阪大	学理学	部生的	学教室	
変名		分			市東区大幸		尼	J1[	大	錄	宮崎県	日向市	県立富	島高等	学校
生青	1月部	<b>活</b>	会雄			試験場菌類	新	井	菱	老	新宿区研究所		4丁目	東京都	寄生
				研究等			荒	勝		EN.	京都大	学理学	部植物	学教室	
赤	井	重	恭	京都大室	学農学部植	物病理学研究	荒	木	英		京都市	左京区	岡崎法	勝寺町	
赤	木	孝	次	阿山沿	赤磐郡万富		茺	木	德	遊	宮崎市 生~5学		宮崎大	学学芸学	学部
赤	沢	時	之		板野郡大津		新	崎	盛	敏	東京大	学農学	部水産	植物学	<b></b>
秋	Щ	茂	雄	北海道	大学理学部	植物学教室	安	藤	愛	次		学農学	部林学	科造林	学教
秋	Ш		優	北海道	大学理学部	植物学教室					室				
明	峯	俊	夫		大学理学部		安	藤	隆	夫	<b>奶路市</b> 試驗場		林省中	国四国	農業
朝	倉		勇	広島県門学校		村鈴峯女子專	安	族	久	次	広島大				
浅	野		明	橫須賀	市浦鄉町2	の 32	安	旅	芳	明		南9条			
浅	野	貞	夫		安房郡鴨川	町長狹高等学	飯	泉		茂	東北大	学理学	部生物	学教室	
				校	11 - 4- 11 NA	12 to 100 m 201 m	飯	165	做	達	靜岡県	加茂郡	竹麻村	凑	
朝	比 奈	英	三	札幌市学研究		道大学低溫科	飯	E.		衞	茅ケ崎	市新町	6の60	002	
)朝	比 奈	泰	彦	新宿区	戸塚町3の		飯	田		江	岐阜県 田高等		萩原町	岐阜県3	立益
淺	見 益	吉	郎		膳所木ノ下		飯	塚	宗	夫			化学研:	究所応用	用遺
芦	田	讓	治		学理学部植						<b>伝学研</b>		an he wal	Trie - 4	ef. 1927
芦	原	孝	治	石川県 校	珠洲郡飯田	町飯田高等学	五	十月	乱和	夫	山形県高等学		郡 循 岡	町県立植	伯阿

	十嵐			山形県新庄市十日町 106	犬	丸		慤	広島県藤江局区 <b>內沼</b> 隈郡金江村 平田
井	木占		台	岡山県倉敷局区內東町 1169	猪	野	俊	平	岡川局区內津島岡山大学官舍
幾	瀬、		ナ	千葉県千葉郡二宮町東邦大学薬 学部	井	上昭	3 治	郎	福岡市箱崎九州大学農学部植物学教室
	日目	]	卽[[	水戶市外渡里村茨城大学文理学部生物学教室	井	上		覚	熊本市黑髮町熊本大学理学部生 物学教室
井			す	杉並区大宮町1624	井	Ŀ		勉	高松市勅使町 917 の 2
伊	倉 伊	11	美	山形市十日町山形大学教育学部 生物学教室	井	上	族	=	札幌市南11条西1の14
池	上音	義 ′	信	新潟市上所島市立新潟高等学校	井	上	久	男	都內西多摩郡五日市町都立五日
生	駒	義 :	博	鳥取市寺町鳥取大学学芸学部生			h.		市高等学校
				物学教室	井	上	7-	喜	神奈川県小田原市柳新田 28
石	JII _ 1	Tt ·	夫	熊本市黑髮町熊本大学理学部 <b>生</b> 物学教室	井	上	隆	吉	浦和市埼玉大学文理学部生物学 教室
石	Щ Э	光	春	豊島区千早町2の22	井	上	行	雄	世田ケ谷区世田ケ谷3の2457
石	ЛГ 7	支 2	雄	東京教育大植物学教室	猪	熊	泰	E	東京大学農学部植物学教室
石	ЛІ Э	元	助	杉並区馬橋2の210大西方	猪	苗(	E	-	盛岡市材木町291の2
'石	田		作	文京区茗荷谷町 56	茨附	城属	大書	学館	茨城県東茨城郡渡里村
石	田道	玫	弘人	京都大学理学部植物学教室	令	井	14	子	札幌市南22条西12丁目北海道
石	田;	恕	夫	京都市上京区大將軍坂田町京都 繊維專門学校	今	井	12	次	学芸大学 京都市四条通 <b></b>
石	塚 5	和	夫	盛岡市上田岩手大学学芸学部生	今	関	六	也	目黑区下目黑4の770林業試験
				物学教室	,	~	,	-	場
石	部		修	津市大谷町三重県立大学水産学 部	令	堀	宏	$\equiv$	金沢大学理学部植物学教室
伊	集院	館	直	港区芝三田1の31	今	村馬		郎	京都大学農学部応用植物学教室
	橋美			愛知県碧海郡高浜町吉浜	令	村		綴	千葉市星久喜町 1203 みかど育 種農場
板	谷		等	北海道檜山郡江差町江差中学校	今	村	泰	子	奈良市北魚屋西町奈良女子大学
井	出		智	都內南多摩郡川口村猶原 610 片 倉蚕糸試験所					植物学教室
伊	藤				巖	佐	耕		大阪大学理学部生心学教室
· Da	用於		至	千葉県大綱町県立山武農業高等 学校	岩	日五月	郎左德	哥門	兵庫県川辺郡川西町加茂
伊	藤	公	夫	千代田区代官町2学生会館西館	岩	田	吉	人	三重県津市上浜町三重農林専門 学校
伊	東	信	吾	世田ヶ谷区世田ヶ谷東京農業大学伊東研究室	岩図	手大	学》	村属 館	岩手県盛岡市上田
〇伊	藤	誠	哉	北海道大学農学部	岩	波	洋	造	東京教育大学植物学教室
伊	藤		武	品川区豊町3の350	岩	野	俊	Ü	新潟県刈羽郡橫沢村
伊	藤	寬	龟	宮城県栗原郡築館町宮城県立築 館高等学校	岩	淵	初	郎	岩手県水沢町福原小路16
伊	原	清	TE.	千葉県東葛飾郡柏町東葛飾高等	ED	東	弘	步.	東京教育大学植物学教室
1/	D45	-13		学校	植	田	利喜	造	東京教育大学植物学教室
伊	藤		洋	東京教育大学植物学教室	植	野		茂	荒川区日暮里町2の16
稻	垣	貫		室蘭海藻研究所	上	野	実	[ii]	大阪市立大学理工学部生物学教室
稻	田	朝	次	九州大学理学部生物学教室	上	野		裕	
稻	葉	彦	六	東京都三鷹市井口 235			-15		福島県白河市宇向新藏 86
稻	荷山	資	生	東京教育大学植与学教室	植	松	春	雄	山梨県北巨摩郡清春村字中島 165

						303
植村誠次	日黑区下日黑農林省林業試験場 土壤微生的研究室	大	谷	吉	雄	北海道大学理学部植物学教室
5 生 形 克 彦	京都市上京区大宮泉堂町58	大	坪!	享信	堂	佐賀県佐賀市吳服町
宇佐美和夫	福岡市須崎裏福岡女子大学	太	阳	健	Ż	兵庫県和泉局区內加西野多加 <b>野</b> 村馬渡谷 377
字佐美碩男	愛知寺中島郡稻沢町大字稻島 379	大	野	景	德	千葉県市川市市川 3111
字佐美 正一郎	北海道大学理学市植的学院室	大	野	宋 次	郎	函館市北海道学芸大学函館分校
內川勇	松山市御幸町 217	大	橋	広	好	埼玉県北足立郡朝霞町 1928
宇津木愛子	北海道大学理学部植物学教室	大	45	Œ	平	新潟市新潟大学教育学部生物学教室
学都宮書店	金沢市片町 56	大	村	敓	郎	靜岡市馬場町6
学都宫大学数号3	S書館農主 1分館 字都宮市峯町	大	Ш		Œ	北海道函館市戶倉町 52 湯川小
宇 野 確 雄	岡山県都窪郡菅生村浅原 826					学校
梅崎勇	京都府舞蹈市長浜京大農学部水	大	脇	賴	子	東北大学理学部生物学教室
梅鉢百子	産学教室 金沢市馬場崎町 26 瀬川方	M		国	夫	山口県小郡町県立山口農業高等 学校
浦口真主	造谷区伊達町 21 柴沼方	岡	崎生	47 4	全会	岡崎市伊賀町字愛宕山1番地
江川二部	久留米市野中町 1415 の 1	岡	沢	蘆	$\equiv$	北海道大学理学部植物学教室
江本義茲	世田ヶ谷区若林町 61	岡	Ш	喜		<b>鹿兒島市下荒田町鹿兒島大学水</b> 産学部
遠寡庄三	推制市大岩斯静间大学教育学33 生物学首等	岡	[1]	盖	敓	名古屋市千種区田代町四觀音道 西 15
遠藤沖吉	仙台市富沢金山	足	形	英	==	大阪市北区南扇町大阪市立大学
及川公平	三重片香度洲町三重大学寮內					理工学部生物学教室
生 沼 巴	岡山局区內津島岡山大学理学部 生物学教室	緒	75 7	变 利	夫	久留来市西町福岡学芸大学久留 来分校
大井次三郎	台東区上野公園国立科学博物館	国	11/3	作		東北大学理学部生的学教室
大井良次	大阪市西区大阪市立大学家政学	M	本	幹	=	北海道室蘭市小橋內町1
, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	<b>報</b> [	[X]	木	省	吾	京都大学農学部林学教室
沖 永 哲 一	岩手県岩 <u>下</u> 郡卷堀村好摩林業試 〒場好皇分場	വ	水		衍	名古屋大学理学部生物学教室
大內一彦	武藏野市吉祥寺成蹊大学生物科	阅	部	正	義	都內北区稻付町 1539 小川香料 東京工場
大 浦 五郎兵衞	大阪天王寺区茶臼山町 40			工農事	試室	岡山市北方
大 賀 一 郎	北多摩郡府中町 8931			图書		下関市長府町前八幡小林英男方
大木麒一	佐賀県藤津郡久間村志田原	小	111		清	福岡県筑紫郡那可町池田4の組
大久保 真理子	千葉県津田沼町東邦大学理学部 生物学教室	小小	JI[	房	保人	大阪市北区南扇町大阪市立大学
大倉永冶	岡山局区內津島岡山大学理学部	13:	,,,	V		理工学部植物学教室
人 启 水 伯	生物学教室	奥	貫		男	大阪大学理学部生物学教室
大阪大学図書館	大阪市福島区堂島浜通3丁目	奥	野	勝	久	大阪府北河內郡寢屋川町神田 538
大阪大学図書館理 学部分館	大阪市北区中ノ島4の8	奥	野	春	雄	京都市上京区大將軍坂田町京都工芸繊維大学繊維学部植物学研
大沢義信	北多摩郡清瀨村結核研究所					工会懷維入字臧莊子即他10子 <b>以</b> 究室
大島康行	東京都立大学理学部生物学教室	奥	Ш	春	季	台東区上野公園內国立科学博物
太田行人	名古屋大学理学部生物学教室	~	, .,			館
太田国光	小倉市日明小倉高等学校	小	倉	千	麿	杉並区天沼3の723小倉理研天
太田次郎	お茶の水女子大学理学部		^	ugga.	H	沼試験所 東北大学理学部生物学教室
大槻虎男	お茶の水女子大学理学部	1]>	倉	英	男	果北入子哇子印生物子权单

小 倉 安	Ż	東京大学理学部植物学教室	笠 原 安 夫 倉敷市大原農業研究所	
小 倉	譲	東京大学理学部植物学教室	風間智惠子	
尾 崎	清	東京大学農学 <sup>常</sup> 農芸化学科肥料 学教室	柏原製糸株式 兵庫県氷上郡柏原町 1022 会 社 研 宪 所	
尼崎滋	īE.	東京大学理学部植物学教室	鹿 島 哲 豊島区要町1の41	
尼崎富	衞	新潟市西大畑町5194	片 田 実 下関市吉見永田本町第二水	產講
小 沢	啓	埼玉県南埼玉郡栢間村大字上栢 間 3438	習所增殖科	\$-±1₹
小田健	=	東北大学理学部生物学教室	香月繁孝 福岡局区內天神町福岡県農	
尼田義	111	大阪大学理学部生物学教室	<b>真課</b>	.,,,,,
小滝一		千葉市末広町1の73	加 藤 勇 夫 広島大学理学部植物学教室	2
越智一		愛媛県西条局区内中野甲314の2	加 藤 一 男 京都大学理学部植物学教室	Š
越智春	美	鳥取市岩倉鳥取大学学芸学部生 心学教室	加藤君雄 秋田市保戸野原の町秋田大 芸学部	、学学
お茶の水	女子		加 藤 栄 東京大学教養学部 明陵1	3番
大学図	<b>善館</b>	文京区大塚町	加 藤 幸 雄 名古屋大学理学部植物学教	全
小 野 貞	雄	長野県安曇郡北城村四谷白馬高 等学校	加 藤 次 郎 京都大学理学部植物学教室	Š
小野	-1/2	大分県口田市西有田 45.	加藤等次 网崎市明大寺町愛知学芸大	、学生
小 野 知	夫	仙台市西多賀東北大学第一教養	加 藤 元 助 山形県東田川郡大和村字廻	自館
小野記	彦	部 東京都立大学理学部生物学教室	加 藤 亮 助 北海道空知郡山部村東京大 海道演習林研究室	、学北
小 野	林	久留来局区内久留来市諏訪野町 3の2185	門 田 正 也 突城市名古屋大字農学部材 窒	<b>大学教</b>
小野寺」	E =	福井県今立郡鯖江局区內神明町	金 井 塚 善 助 埼玉県南埼玉郡蓮田町 966	
3- 12 10	201	福井大学学芸学部生物学教室	金 尾 素 健 港区麻布広尾町2	
オリエンタ 母工業株式	会社	大阪府吹田市上新田町 4535	金 子 光 北海道大学理学部植物学教	定室
大阪工場研恩 田 経		世田ケ谷区野沢町1の1明治薬	金沢大学医学部 図 書 館 金沢市土取場永町 15	
		科大学	金沢大学薬学部。全温末まま歴	
貝原友艺		浦和市上木崎 421	図 書 室 金沢市小立町	
香川大学学部生物学		香川県高松市	金沢大学理学部 金沢市仙石町 室 室	
影山藤	作	世田ケ谷区下代田町 26	蟹 本 信 雄 福井県大野町大野高等学校	Š
河合	功	金沢市仙石町金沢大学理学部植47学教室	神 谷 平 愛知県安城市福釜新田 95	
鹿兒島大学	附属		神 谷 宣 郎 大阪大学理学部生物学教室	
图書館》	館	鹿兒島市下荒田町	上 村 登 高知県高岡郡高田町県立高 等学校	高岡高
鹿 兒 島 > 久理学部図		鹿兒島市山下町	香室 昭 園 福井県今立郡神明町福井大 芸学部	大学学
鹿兒島大学 館 農 学 部	図書	鹿兒島市上部田町	香 山 時 彥 和歌山市真砂町1和歌山大 芸学部生物学教室	大学学
贺 来 章	輔	下関市安岡町富任120	川 崎 庸 三 中野区千光前15	
加崎英	男	東京都立大学理学部生物学教室	1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	La rista NA
笠 永 博		東京大学理学部植物学教室	川 瀬 清 新宿区柏木東京薬科大学生 教室	上楽字
笠原基外		遊谷区原宿2の170の19	川 谷 豊 彦 埼玉県春日部町大字粕壁 3	30
笠原潤二	二郎	盛岡市上田岩手大学農学部	川名明千葉県安房郡天津町東大道	寅習林

川	過	清俊	策一	北海道岩見沢市北海道学芸大学 岩見沢分校 文京区湯島三組町83		都大学教学			京都市左京区
H[	辺	久	it:	川崎市南小田町2の105		都大章			京都府東舞鶴局区內字長浜
Ш	松	重	信	三重県桑名郡長島村源部外面3	11	1注	竜	夫	大阪市立大学理工学部
Л	村	直	子	大田区北千束 752	長」	用品	秋	型	富山県婦負郡八尾中学校
河	原	栄	治	秋田県大館町農林省大館農事改 良実験所	功	F	īĒ	夫	都下南多摩郡橫山村林業試験場 浅川支場
菊	地	政	雄	盛岡市岩手大学学芸学部	〇草	EJ.	俊	助	福島県相馬郡八幡村字坪田下台
菊	池	E	彦	東京教育大学植物学教室	楠		ıE	其	神戶市東灘区住吉町赤塚山1872 (宮舍)
岸		淑	郞	北海道夕張市鹿島1三菱礦業大 夕張礦業所庶 <b>務</b> 課	楠		元	μij	鹿兒島市伊敷町鹿兒島大学教 <b>育</b> 学部
岸	谷具	自治	郎	広島県佐伯郡五日市町海老塩浜 551	久	世》	原太	郎	京都大学理学部植物学教室
岸	本		潤	鳥取市吉方町 90 小橋方	国	谷本	维三	郎	群馬県館林町新宿146
北	Л	政	夫	鎌倉市雪の下 929 横浜国立大学	久	保	欣		茨城県西茨城郡岩瀬町富岡
				学区学家生的学议第	久	保		73	福岡県田川市福岡学芸大学田川 分校
北	JII	昌	典	滋賀県甲賀郡水口町西郷山	久	保	秀	本作	都下北区下十条 1894 科研化学
北	沢	浅	冶	群馬県伊勢崎市川岸町 108 阿部 一方		170	75	WIL	株式会社
北	見	秀	夫	新潟県佐渡郡両津高等学校	久	保工	日金	藏	橫浜市港北区根岸町 570
北	村	四	郎	京都大学理学部植物学教室	久	保上	日義	广	栃木県足利市旭町局区內
北	打	文	生	京都府久世郡城陽村字富野小字 堀口 45	旗	谷	- 6	郎	愛知県額田郡岩津町大字鴨田字 郷奇19の1
木	谷	義	明	京都大学農学部遺伝学研究室	熊	沢	正	JE	名占量市瑞穗区名古屋大学瑞穗 分校
木	下		收	岡山県倉敷市岡山大学大原農業	熊	本大生	2理号	治	熊本市黑髮町
木	原		均	所究所 京都大学農学部農林生物学教室	久	米	μí	之	京都市左京区吉田二本松町第三 高等学校
木	原力	上 物	学	京都府乙訓郡向日町む集女	倉	石		秎	東北大字理学部生物学教室
研	3	艺	所	<b>从他们</b> G 例	倉	內	v	=	豊橋市牟呂町字若宮109
岐図	阜薬		で学 館	岐阜局区內九重町3	盒	田		ifi	都內北区滝野川農林省農業技術 研究所家族寮內
木	村	有	香	東北大学理学部生物学数室	1.3	田		悟	東京大学農学部植物学放室
木	村	盐力	=	岡山市津島岡山大学理学部生物	倉	林	IF.	13	北海道大学理学部植物学教室
				· 多数缩	栗	田	ሰ		仙台市南染師町 87
木	村	透	切	文京区大塚町東京教育大学附属 高按地子敦建	Wi.	田	ıΈ	秀	松山市 <b>持田町愛媛大学文理学部</b> 生物学教室
	村	晴	夫	德島市田宮町	栗	原	存	信	長野市信州大学教育学部生物研
	村	康		京都市銀閣寺町 65					究(管
木	村	久	吉	石川県石川郡野々市町ら 201	栗	原		ni.F	都下三宅島三宅村
木	村為	生 四	郎	武藏野市吉祥寺 600	栗	原		lk.	東京大学理学部植物学教室
木	村陽	<u></u>	郎	東京大学教養学部生物学教室	栗	本		高	大阪市立大学理工学部生物科
	N大学 林 学			福岡市箱崎町	栗	<u>.</u>	英	赶售	埼玉県鴻巢町農林省農事試験場 鴻巢試験地
京都林	7大学 学 区	農学	部室	京都市左京区北白川追分町		木	宗	尙	塩釜市東塩釜東北 <b>海区水産研究</b> 所

黑	711		逍	都下北多座郡神代村北野桐朋学	小	宮口	丁孝		長野県小県郡中塩田村舞田
Sept.	2/11	b.e.	~,	图	小	村		精	九州大学理学部
FE.	沢	華	子	東京大学理学部植物学教室	小	室	英	夫	京都市上京区寺町通鞍馬口下る新御襲日町 285
黑桑	田島	長正	禮二	港区赤坂福吉町1 大阪府中河內郡柏原町吉町604	小	ıΙι	搖		秋田県能代市大町 54
≪ ○薬	田	正 義	一備	京都市左京区淨土寺石橋町11	小小	Ш	台 鉄	夫	浦和市領家 1341
				泉部印在泉区伊上守石惯可 11	か 近	藤	武	夫	浜松市広沢町 200
部	馬大门 図 看	*分	館	<b> </b>	近	族	此	生	世间ヶ谷区世間ヶ谷4丁目東京
小	池	久	義	都内北区西ケ原町農業技術研究所					農業大学遺伝育種字研究室
〇小	泉	源		山形県来沢市林泉寺町	権	藤	安	武	都下北多摩郡小平町鈴木惠泉女学園短期大学園芸科內
鄕	244	E	±	東大農学部林学科造林学教室	昆	野	昭	123	都内北区西ヶ原町農林省農事試
〇纐	緬 丑			福岡県粕尾郡篠栗町山王字平原					験場遺伝生理部
	有高			兵庫県武庫郡本山村	埼附	玉属区	大書	学館	浦和市常盤町9の199
	巨大				齊	H	7 E	錮	金沢市栄町 36
	書館如			姫路市新在家	齋	藤		和	東北大学教育教養部生物学教室
	巨女 学 [8				〇齋	藤	賢	道	名古屋市昭和区戸田町3の19
		r, r, r			齋	藤	寬	昭	福井県今立郡中河村中野16 の2
〇郡	場		寬	京都市上京区鞍馬口通烏丸東入	齋	藤	JFBL .	実	北海道空知郡富良野高等学校
古	賀	IE.	晴	大阪府泉北郡和泉町和泉住宅 123	濟	1000	大	邦	松江市外中原 134
五	木日	日悦	郎	茨城県結城郡水海道町町立水海	齋	藤藤	雄		
				道中学校	佐	,,,,,	解		鳥取市吉方鳥取農林專門学校
E	分		寬	盛岡市東北農事試験場盛岡試験 地		伯		郎	東京大学理学部植物学教室
小	島	繁	男	品川区大崎長者丸 284 教育研究	酒阪	井井	文本	兰	東京都立大学理学部生物学教室 北海道大学理学部植物学教室
14.	lT/3	21/4	93	所		河泊			岩手唱岩手都集石町小岩井農場
小	111		均	九州大学農学部植物学教室	坂	崎	信	之	
小	清力	〈卓	$\equiv$	奈良市奈良女子大学植物学教室	-22%	mti]	III	~	大阪市立大学理工学部生物学教室
小	長头	占与	壯	久留米市小森野町九州大学第二 分校	坂	村		徹	岡山市土伊福清心町ノートルダ ム清心女子大学
15	酉	通	夫	京都大学農学部農林生物学教室	扳	本	武	司	岡山市上伊福東町 602
小	林	純	子	資源科学研究所	坂	本	吉	雄	都下北多摩郡調布町布田小島分
小	林		弘	東京教育大学植物学教室					東京青年師範学校三船寮
办	林		勝	福島市福島大学学芸学部生物学	佐	賀	大	学	佐賀市
	1.1.	ž.		教室	向	坂	道	治	東京大学農学部水產植物学教室
か	林	貞	作	名古屋大学理学部生刊学教室	櫻	井	久		文京区小目向台町2の43
小	林ス	7 壽	男	練馬区東大泉町315東京学芸大 学大泉分校官舍		井		廉	世田ケ谷区上野毛町115の1
小	林	義	夫	北多摩郡府中町片町 5545 の 2		4 7			大田区大森調布鵜ノ木町 231
办	林	義	雄	· ·	佐	女才	太		北海道士別局区內士別町西土別中学校
				台東区上野公園国立科学博物館	佐	女才	、 好	÷	広島大学理学部植物学教室
小	林	義	弘	埼玉県北埼玉郡羽生町大字上羽 生 198			祥		岩手県釜石局区内栄町2丁目
/]\	松		信	文京区駒込富士前町65	佐		義	輔	台東区上野公園国立科学博物館
小	松屿	j	雄	葛飾区本田澁江町 535 都営住宅	佐	藤	邦	彦	秋田市東根小屋町秋田営林島內
〇小	75		ñ	15号					農林省林業試験場秋田支場
On	南		清	神奈川県藤沢市辻堂 5557	佐	藤	重	平	東京大学教養学部生物学教室

佐藤七郎	東京大学理学部植物学教室	島	村		環	名古宝大学理学部生物学教室
佐藤 清左衞門	東京大学農学部林学科造林学教室	島	元	枚	雄	鹿兒島市伊敷町鹿兒島大学教育
佐藤大七郎	東京大学農学部林学科造林学教	t de				学部
	至	清	水喜		雄	福井市町屋町県営住宅6の70
佐藤正一	東京大学理学部植的学教室	清	水	大	典	宮崎県日南市飫肥本町服部研究 所內
佐藤昭二	世田ケ谷区池尻町東京教育大学農学部病理教室	清	水	仲	t	神奈川県茅ヶ崎市小和田平和学園
佐藤壽子	青森県八戸市八幡町14	清	水	Œ	雄	七尾市藤橋町七尾高等学校
佐藤正已	山形県鶴岡市山形大学農学部	清	水	Œ	元	九州大学農学部植物学教室
里見信生	金沢大学理学部植物学教室	志	村	義	雄	靜岡市安東柳町 14
沢 井 輝 男	名古屋市東区東芳野町愛知学芸 大学	下	711	賴	人 人	長野県北安曇郡大町五目町
沢村豪偉	高知県赤岡局区內県立城山高等	•	/ 1	720		2593
	学校	下	郡川	I IF.	E	東京大学理学部植物学教室
沢 村 正 五	栃木県宇都宮市若草町宇都宮大 学生30学教室	下	半 爿	き直	昌	広島大学理学部植物学教室
沢 村 保 昌	津市三重大学学芸学部	F	間		実	京都府乙訓郡向日町物集女木原生物学研究所
沢良木庄一	高知県中村町県立中村高等学校	庄	司	太	郎	杉並区西荻窪2のに添好寮
蚕糸科学研究所	新宿区百人町4の4	UI:	うたに			
山 段 忠	京都市上京区小山南大野町京都	常	谷	幸	雄	目黑区柿ノ木坂 57
	学艺大学生。让学教室	代	崎	良	丸	石川県小松市大川町178
三宮正信	大分市王子町大分大字/字芸学部 生物学教室	代	谷	次	夫	東京大学理学部植物学教室
塩見隆行	山口市系来 2539		官司		誠	山梨県甲府市塩部町171の7
重水道夫	奈良市奈良女子大学植物学教室	新		雄	敏	鹿兒島市伊敷町鹿兒島大学工学
静岡大学図書館						部生物学研究室
教育 学部	浜松市名殘町 271	新	家	浪.	雄	京都大学理学部植物学教室
靜岡大学図書館	靜岡市大岩町2丁目	信文	州理	大学	学部	松本市県町
新岡大学図書館 農 学 部 分 室	静岡県磐田市見付 4300	信纖	州維	大学	学部	長野県上田市
篠崎秀次	千葉県山武郡東金町川場701	真	部	[1]	武	藤沢市亀井野日本大学農学部植
篠 遠 喜 人	東京大学理学部植物学教室	907	419		Ja Ib	物生理学教室
信夫隆命	大阪市東住吉区平野大阪学芸大	真	保		輔	新潟市二葉町1の5214
	<b>学平野分</b> 校	神	保	忠	男	東北大学理学部生物学教室
品加鉄摩	長崎是臺岐郡勝本町立勝本中学 綾	神	野	太	郎	松山市旧城北練兵場随愛媛大学学部教育学部
柴 岡 孝 雄	東北大学理学部生与学教室					富山市東中野 125
	世田ヶ谷区世田ヶ谷4丁目東京 農業大学遺伝学研究室	水	差 庁 河 産 研	究	所	長野県上田市小牧
柴 阳 万 年	富山市富山大学文理学部	吹	田	信	英	東京大学理学部植物学教室
島地威雄	世田ヶ谷区下馬2丁目東京学芸 大学世田ヶ谷分校内	末	松		格	旭川市北門町9丁目学芸大学生 物学教室
島地謙	東京大学農学部植物学教室	末	松	四	郎	和歌山市真砂町和歌山大学学芸
島田郁雄	富山県福野町県立福野高等学校	,	,			学部生物学教室
島田正雄	仙台中島丁2尚綸学院大学	菅	沼	孝	Ż	奈良市奈良女子大学植物学教室
島根大学図書課	松江市川津町西川津	菅	谷	貞	男	東北大学理学部生物学教室

									and a second and the second of
营	原	弈	450	函館市八幡町北海道学芸大学函 館分校生物学教室	高	木	典	雄	愛知県豊川市牛 <b>久保町名古屋大</b> 学豊川分校
	浦賀		ĮŲJ	大阪市阿倍野区大阪大学南校	古	城	Œ	勝	靜岡県加茂郡南中村衞生試験所 伊豆薬用植物試験場
杉	内	英武	郎雄	豊島区長崎4の17 岐阜県海津郡石津村字太田7	高	須	謙	_	京都市上京区塔之段松の木町
杉杉	野原	美	德	仙台市北番町東北大学教育教養	青	田	英	夫	338 大阪市立大学理工学部生物学教
-12	744		prav	部区	[EI]	111	~		室
杉	本	順		静岡市八幡本町	声	野		均	群馬県立館林高等学校
杉	1[[	号/、	41	京都大学理学部植物学教室	高	野	泰	吉	京都市左京区山端大君町1泉川 準方
金山	庭		旅品	京都大学農学部農林生物学教室	吉	橋	啓	=	北海道旭川市外神楽町 419 旭川
鈴	木	机	子.	北海道大学理学部值。疗学教室	lt:1	,11M	.[]		営林局造林課
企	木	Ę	雄	宇都宮市戶祭町戶立入 2770	高	橋	堅	造	中央区日本橋浜町2の36
争	水		泰	台東区北清島町 78 台東区立清 島小学校	in]	橋	重	男	浦和市常盤町埼玉大学文理学部 生物学教室
鉿	水	II.Ji	夫	東京大学農学部植物学教室	高	橋	犬	藏	愛媛県上浮火郡久万町福井町アパート
金山	木		昇	名古屋市瑞穗区瑞穗町名古屋大 学瑞穗分校生物学教室	(H)	橋	信	雄	山形県最上郡眞室川町大字新町 153 の 4
金台	木		博	東北大学理学部生物学教室	盲	橋	憲	子	文京区高田豊川町日本女子大学
金合	木	兵		広島大学理学部植物学教室	_1_	2.ort			家政学部
给	木		加	神奈川県川崎市長尾 263	南	橋	基	生	東京大学理学部植物学教室
金合	木	米		富山県蓮町 22 富山大学文理学 部生物学教室	高	樋	竜	E	奈長県添上郡櫟本町櫟本
須	田	省	三	大阪市阿倍野区北島中1丁目	高高	嶺村	重	昇男	名古屋市昭和区鶴羽町3の8 目黑区柿ノ木坂243
				49	田	Ш	131.		
須	臄		勇	目黑区三田 247 颧造科学研究所	田	刑	基	隆二	北海道大学理学部植物学教室京都大学理学部植物学教室
須	藤	Ŧ	夵	北海道大学理学部植物学教室	滝		ZE		
須	藤	俊	涉	日黑区中根町 141	他	Ш		勇	岡山県苫田郡東一宮村大字東一宮山方 428
角	窟	邦	彦	杉並区和泉町 758 の 3	田	草刀	「春	重	松江市乃木福富町島根農科大学
瀬	嵐	哲	夫	金沢市爾生町金沢大学教育学部生物教室		_			植物学教室
清	家	光	雄	愛媛県南宇和郡御莊町平城御莊	田	П	亮	平	長野県上田市信州大学繊維学部 裁桑学教室
				中学校	田	П	和	源	品川区二葉町5の458
瀬	尼	Œ	Ξ	島根県浜田県立浜田高等学校	武	井		尙	江戸川区西小松川町2の1020
瀬	Щ	宗	11	九州大学農学部水産学教室	竹	內		繁	福井県坂井郡長畝村柴岡 16 の8
瀬	木	紀	男	津市大谷町三重大学水産学部	竹	内	Œ	幸	東京大学理学部植物学教室
関	塚	昭	明	横浜市中区新山下1の2農林省 横浜動植物検疫所					千代田区富士見町3の1の10
則	チ	Ė	会	愛知県西春日井郡清洲町県立園 芸試験所內	株	日薬式会流	品 上	尼所	大阪市東淀川区十三西之町4丁目
相	馬	幣	介	新潟市新潟大学教育学部生物学	竹	中		要	赫岡県三島市谷田 1,111 国立遺 伝学研究所
	/ m +	eld-	1.0	教室	竹	村	英	n-in-th	東京教育大学植物学教室
征分	矢野	芳	孝	仙台市西多賀東北大学第一教養 部生物学教室	竹	本貞	i —	剆[[	岡山市津島岡山大学教育学部生 物学教室
卣	神		武	広島大学理学部植物学教室	*	湖	実	輝	
高	木		毅	九州大学農学部造林学教室	-	1/93	JC	webs	科大学生物学教室

田	山行	忠	ŢĮ.	東京都下小金井町東京農工大学 繊維字部		H		傠	お茶の水女子大学理学部
田	沢	東	夫	新湯市西大畑町新潟大学理学部	鶴	羽木	公太	<u>\$</u> [\$	金沢大学理学部生物学教室
	, -	~,-		摘行所领	敦生	賀高	等分类数	被宝	福井県敦賀市
田	島	良	男	京都大学農学部農林生物学教室		沙水	映	男	港区芝自金台町2の26国立自
辰	T.	誠	次	広島大学理学部植物学教室			~		然教育園
館	品奶		授	北海道大主農学部植物学改室	1,132	1-1	412	45	三重県業名市西太上309 諏訪方
田	中		读	愛知県豊川市半久保名古屋大学 豊川分校生物学教室	11/2	尾	茂	美	広島県福山市沖野上町広島大学 福山分校
田	E[1		清	弘前市富田町弘前大学文理学部生工学教室	=fj:	}[[	博	賟.	東京大学教養学部生物学教室
田	中	E	14	大阪育池田市大阪含芸大学池田	寺	下了	发 三	郎	石川県珠洲郡松波町秋吉
. 11	'		14	分校生物学教室	寺	.本	敏	雄	東京大学農学部植物学教室
田	計	隆	莊	広島大学理学部植物学教室	照	本		勳	札幌市北海道大学低溫科学研究 所
田	中国	喜 —	郎	東京大学理学部植物学教室	天	33	拦	<b>[</b> ]	金沢市上鷹匠町金沢大学教育学
田	中		剛	鹿兒島市下荒田町 470 鹿兒島大 学水產学部				ыј	部
田	中于	是 三	郎	世田ケ谷区世田ケ谷4丁目東京 農業大学	土	井	恭	次	目黑区下目黑4の770 農林省林 業試験場
田	中	信	lata		土	井	美	夫	広島市牛田町早稲田 599 の 2
			徳	東京大学理学部植物学教室	東	京教	育大	学	世田ケ谷区池尻町
田	中中	宣	子	千葉県市川市市川新田 129		学部京大学			
田	中	良	三	世田ヶ谷区代田1の635の11	部	生物	学到	室	<b>国黑区駒場町</b>
田	中	靖	子	立川市羽衣町2の14	東	京大学	之農学	部	静岡県加度郡南上村
谷一	ا]،	森	俊	横須賀市平作町2492三堀由藏方		禹樹艺			His a second second Fig.
玉	井	直	人	金沢大学理学部植物学教室		京大学			文京区向ケ岡彌生町
田	岩		博	東京大字理字部植物学教室	東	京大学	之農学	治	
田	村		寬	都內北区赤羽町3の1153	植池	物与	<b>全教</b>	室	文京区向ケ岡獺生町
〇田	原	IE	人	神奈川県二宮町 648	E CAM				
中	条		率	仙台市東3丁目62科学館內	果 千	京大学 葉 道	長 習	林	千葉県天津局区內
于	葉	宗	男	盛岡市上田岩手大学農学部造林 学教室	東	京	大	学	
千	葉	保	胤	九州大学理学部生。学教室		倉部 林 月			文京区向ケ岡懶生町
千	原	光	雄	新岡県賀茂郡 <b>下田町東京教育大</b> 学臨海実験所	東河	京都工	人大学	理	目黑区衾町
直		清	光	金沢市長土塀通り 18		京農	工大	学	北多鷹郡府中町
塚	本	Œ	美	静岡県駿東郡玉穂行中畑77	図	1	-	館	10分/季相切 中門
塚	本	11.0	晃	お茶の水女子大学理学部	東上	16人字	2 数	部室	千葉県津田沼町大久保 113
津		道	夫	金沢大学理学部生物学教室	富	樫		子	横浜市保土ケ谷区権田坂 100
±.	展	e Visida	授	都内北区西ヶ原町農林省農業技	1	岸		H	広島大学理学部植物学教室
-3.4	110		,	術研究所生理遺伝部	時	田		郇	北海道大学農学部水產学教室
土	屋		元	福島県耶麻郡豊川村字高吉	得	居		衞	愛媛県溫泉郡正岡村大字神田
土	屋		I	別府市別府女子大学生物学教室	德	川		親	豊島区目白町4丁目徳川生物学
椿		啓	介	品川区北品川 6 の 387 財団法人 長尾研究所					研究所
注	村事	き 背	质	都下北多摩郡神代村下仙川 234	德医	島	大	学部	德島市藏本町
乒乒	73		宏	神戶市東灘区御影町神戶大学文		島図-			
7		щ	100	理学部生物学教室	他	HI	省		世田ヶ谷区上馬町2の11の3

德	本	孝	彥	川口市今道山口営林署	中	西		啓	広島大学理学部植物学教室
戶	田	良	吉	日黑区下目黑農林省林業試驗場 造林部	中	野	敬		金沢大学理学部生物学教室
栃	内	吉	彦	北海道大学農学部	〇中	野	治	房	千葉県東葛飾郡湖北村中里
- AUJ	津	侃	公公	靜岡県盤田市見付証岡大学農学	中	野		実	札幌市豊平 5 条 13 丁目林業試 験場札幌支場豊平分室
3, 1	11-	)/14	14	朝 Harles My BETTA UD SCI J My Least C J WG J	中	原	清	4:	岡山市岡山大学理学部生物学教
殿	村	雄	治	北海道大学触媒研究所	,	V	114		室
當	Ш	竜	太	新潟県柏崎市四ツ谷1丁目	永	海	秋	==	鎌倉市雪の下 929
富	田		I'B	京都市左京区北白川仕伏町 48 谷川方	中	村马	差 四	1,1į2	東京教育大学植物学教室
富	永		保	宮崎市下北方町塚ケ原 5833	中	村		浩	練馬区関町3の120
友	岡		浩	世田ケ谷区北沢1の1155	中	村 =	三次	ES	足立区千住2の32
外	ili	Ξ	郎	長崎県大村市上小路	中	村		純	高知市小津町70高核官舍
外	Ш	卷	滅	港区麻布本村町164三井高孟方	中	村		威	京都市上京区京都学芸大学
	ー 山大学 電	<b>上薬</b> 学	,	富山市奥田 5	中	村	義	輝	室蘭市舟見町北海道大学理学部海藻研究所
豊	EH	清	修	藤沢市辻堂富士見ヶ丘 5696	中	村	隆	雄	東京大学理学部植物学教室
鳥	居	喜	_	愛知県新城町西新町	中	平	T.		京都市左京区吉田近衞町府営住 宅 308 号
鳥	111	英	雄	杉並区井 <b>荻</b> 3丁目東京女子大学 生物学教室	永	久	Œ	志	目黑区大岡山東京工業大学
鳥	111	国	士	埼玉県鴻巢町農事試験場	中	111	至	大	宮崎局区內宮崎大学学芸学 <b>部生</b> 物学教室
內內	貴藤	信詳	夫三	京都大学理学部植行学数室 文京区森川町 55	中	14	俊	RE	茨城県東茨城郡渡里村茨城大学 文理学部生物学教室
猶	原	恭	爾	川越市西小仙波赤座 36	中	III	弘	美	都內北区下十条 1894 科研化学
	井る			台東区上野公園国立科学博物館					株式会社
永	井		進	大阪市立大学理工学部生物学教	名図	古屋	市立ス	大学 館	名古屋市瑞穂区田辺通3の1
中	居	佐	助	京都市上京区紫野西野町19	名附		元 大 書	学	名古屋市中区南外堀町
長	居	E	人	札幌市北 27 条東 3 丁目北大官		速大学			
-	, ,			舍	育		子庭		大阪府堺市大仙町
長	尾	昌	Ż	東北大学理学部生物学教室	並	河		功	京都市左京区京都大学農学部園
中	沢	敬	止	甲府市久保町 28 佐藤光造方	*	£ .£.	. 7 _	Lapala	芸部第一研究室
中	沢		潤	弘前市富田町3弘前大学文理学 部生物学教室	図		it.	館	奈良市
中	沢	信	午	由形市小百川町山形大学文 <b>理学</b> 部	成	, 田	伝	藏	青森県北郡五所川原町平井町県立五所川原高等学校
中				尼崎市蒙口元町5丁目		湯大館農			新潟市河渡
長 学	崎 芸学i	大部生4	学	長崎県大村市	新書	淘大:	学附为学部分	属図	新潟市西大畑町
中	島		男	福岡県朝倉郡杷木町福岡県立朝 羽高等学校	新	関	宏	夫	北区西ケ原農業技術研究所
中	島	光	夫	愛知県中島郡起町大字富田上	西		荒	介	東京大学理学部植物学教室
als	pfix	276	ग्रह्म	町1	西	内		光	堺市大仙叮浪速大学農学部
中、	品	道	郎	杉並区大宮前6の427	开	j 崎	友 一	劇	大阪大学理学部生的学教室
永	島	久	義	千葉県市原郡五井町五井 2625	迅	i 沢		寬	群馬県新田郡笠懸村大字阿佐美
長	友	貞	雄	都下北多摩郡保谷村国立中区 193 の 2	FF	i H	- 見	7首 ~	岩宿 2524 金沢大学理学部生物学教室
					2	9 P-1	/E -	- Kh	业八八子生子即生训字权至

西田誠	千葉市小仲 <b>台</b> 町千葉大学文理学 部生物学教室	農林省西条農事 改良 実 験 所 重 井 試 験 地	広島県重井局区内
西日本種苗株式会社育種農場	福岡県筑紫郡水城村通古賀	更 井 試 験 地 野 沢 洽 治	東京大学農学部水産植物学教室
西原禮之助	岡山市南方 277	野口彰	大分市上野町大分大学学芸学部
西 村 嘉	青森県八戸市八幡町8		生物学教室
西 村 信 義	石川県金沢市飛梅町 15 上田作 太郎万	野口った	文京区雜司ヶ谷町 33 日本女子 大アパート
西山市三	京都大学農学部食糧科学研究所	野瀬恭平	北海道大学理学部植物学教室
二宮淳一方	大分市王子町1丁目	能勢 保	千葉市亥鼻町 302
日本医科大学 図 書 課	文京区駒込千駄木町 59	野田醬油株式会社試験場	千葉県野田町
日本専売公計 宇都宮たばこ	栃木昌下都賀郡桑村大字井	野津良知	東京大学理学部植物学教室
対影場	(5) 《三个邮真师条何人子开	野原茂六	浜松市上池川町 248
日本專売公社同	岡山県浅口郡五島町	延原肇	松江市乃木福富町島根農科大学
山たばこ試験場 日本専売公社		野 村 克 世	文京区竹早町東京学芸大学竹早 分校生物学教室
岡山試験場	神戶市垂水区岩岡村	野 村 達 郎	岐阜県羽島郡上中村沖942
兵庫 分場 日本専売公社水		野本宣夫	東京大学理学部植物学教室
戸たばと試験場日本専売公社	茨城県久慈郡山田村	萩 屋 薫	應見島市上荒田町鹿児島大学農 学部
鹿兒島たばこ	鹿兒島県鹿兒島郡谷山町	芳 賀 忞	九州大学理学部生物学教室
試 景 想		芳 賀 健 一 郎	仙台市諏訪町 38
日本專売公社 樟腦試験場	鹿児島市五里町	橋 本 武	広島県賀茂郡寺西町上寺家茶園
日本專売公社秦	神奈川県中郡東秦野村	橋本浩明	広島大学理学部植物学教室
野たばこ試演場日本事売公社	<b>神</b> 宗川宗中都来 <b>采</b> 町村	蓮 沼 庄 吾	和歌山県有田郡湯浅町耐久高等 学校
総務局総務課	千代田区内幸町1の2	長谷川勝好	京都市左京区北白川京都大学農
日本化学研究会	仙台市東 3 番丁 187 の 1	F 0	学部附属演習林
日本女子大学 図 書 館	文京区小石川高田豊川町	長谷川正男	目黑区下目黑農林省林業試験場
沼田真	千葉市弁天町 98	島山伊佐男 た た オ	京都大学理学部植物学教室
根来健一郎	大津市観音寺町 109 京都大学理	羽 田 建 三	長野星北安景郡大町大町南高等 学校
松木 姓 一 四	学部附属臨湖実験所	畑 野 健 一	東京大学農学部植物学教室
農林省開拓研究 所 資 料 室	目黑局区内中目黑3の984	初島住彦	鹿児島市上荒田町 1946 鹿児島 大学農学部
農林省農事試驗場種子島試験地	鹿児島県熊毛郡西之表町安納	八 戶 正 夫	熊本市黑髮町坪井 669
農林省中国		服部賢一	札幌市外豊平町林業試験場札幌
四国農事試験場	姫路市田寺	服部訴失	支場豊平研究所 東京大学理学部植物学教室
農林省東北	eg tra - k- a + tel 111	服部新佐	宮崎県日南市本町3の888
農事試験場	盛岡市下厨川	O服部広太郎	千代田区神田駿河台2の3の8
農林省神戶動植物檢疫所大阪出張所	大阪市港区北海岸通 14	花田主計	福岡市箱崎昭和町3205
農林省林業	to T if A g's no LO, 1, L.l.	塙 順	岐阜市長良岐阜大学農学部
試験場浅川支場	都下南多摩郡橫山村	馬場三哥	京都大学理学部植物学教室
農林省水産講習会図書室	下関市吉見町	英 健 夫	世田ケ谷区喜多見町 2062

浜	田		稔	京都大学農学部応用植物学教室	平	野		潤	目黑区大岡山東京工業大学生物 化学教室
原			寬	東京大学理学部植物学教室	"तर्द	baton		_	
原		+	太	大田区田園調布4丁目	平	野		IE.	東京大学理学部植物学教室
原		秀	雄	北海道大学理学部植物学教室	平	野		実	京都大学理学部植物学教室
原		幹	雄	広島市広島大学理学部植物学教	平	畑		規	和歌山県有田郡田殿村田口368
jr.jud.		N.C.		空	平	林	春	樹	世田ヶ谷区北沢町5の612関方
原	口	義	人	群馬県大田市県立女子高校生物学教室	平	松言	rz	切	山形市小白川町山形大学文理学部
原	沢り	世	夫	世田ケ谷区下馬町東京学芸大学 農学研究室	広	江美			京都大学理学部植物学教室
原	田市田	1 太	jig.	名古屋大学理学部生物学教室	弘	前	大	学	弘商市富田町
原	H			新宿区下落合1丁目537長尼方	広	瀬	恒	久	熊本県玉名郡豊水村旭理農学研究所
林		孝	L.	資源科学研究所	広	瀬	34	李	神戶市神戶大学文理学部生物学
林		俊	Ŕß	東京大学教養学部生物学教室	12-4	PDS	J-1-4		教室
林		E	人	岡山県吉備郡足守町上足守1814	深	沢	広	祐	京都大学農学部農林產物学教室
林		彌	栄	目黑区下目黑農林省林業試験場	深	瀨		銰	和歌山市真砂町和歌山大学学芸
华	围	賢	竜	石川県石川郡蝶屋村字手取	च्यानं -	# _L	NG PEL	Fol	学部生物学教室
飯	田	次	雄	宮城県栗原郡岩ケ崎町4番町	) [ ]	井大:	子阿	腐館	福井市牧島町 26 の 1
樋	浦		誠	北海道江別町西野幌酪農大学	福	島	栄	七	富山市富山大学学芸学部
引	田		茂	大阪市天王子区小宮町府立夕陽	稲	島		博	東京教育大学植物学教室
樋	Į]	隆	F	丘高等学校 岐阜市外那加町岐阜大学農学部	福	田		功	茨城県小戶市外茨城大学教育学 部生物学教室
				林学教室	福	田ノ	+ >	楠	広島大学理学部植物学教室
樋	П	利	雄	福岡県森合福岡県立信夫高等学校	稲	永	公	邓	東京大学理学部植物学教室
寒	いらし蝉	義		福井県武生局区內小松町 15 の 29	藤	井	久	雄	福岡市三宅西大橋町 1232 進藤 誠一方
〇久	內	清	楽	大田区調布鵜の木町 231	藤	井	E	治	島根県能義郡安来町安来農林高
久	野	哲	夫	長野県北安曇郡大町 3592	藤	岡	illi.	彥	等学校 茨城県東茨城郡鯉淵村高等農 <b>事</b>
肥	田身		子	大阪市住吉区粉浜東の町2の34	形态	Im)	mi,		满智所
月	商		西草	神奈川県中郡東秦野村専売局秦	藤	岡	光	長	東京大学農学部植物学教室
	, -			野たばこ試験場	藤	茂		宏	東京大学理学部植物学教室
日	出	武	敏	德島市田宮町城北高等学校	藤	田	哲	夫	広島県賀茂郡乃美尾村 3998
П	野	精		名古屋大学理学部生物学教室	藤	田		光	茨城県久慈郡山田村水戸をばこ
H	比 里	予信		金沢大学理学部植物学教室					試験場
檜	111	庫	===	文京区雜司ヶ谷町 48	藤	田	路		東京大学医学部薬学科生薬学教
ZE	井	A	男	名古屋市昭和区櫻山町2の44の2	藤	田	安	_	至
平	井	信		東京大学農学部木材材料学教室	DOSC	hri	24		工業試験場第二部
	泉太	佳 一	152	北海道大学理学部植物学教室	藤	野	Œ	義	長崎県諫早市福田町 2940
平	湖	俊	佑	京都大学理学部植物学教室	藤	Щ	和	惠	東京大学農学部水産植物学教室
平	田	Œ		宮崎市船塚町宮崎大学農学部	藤	山	虎	也	広島県福山市外大津野広島大学
平	田	政	由	弘前市富田町弘前大学文理学部 生物学教室					水產学部水產植物学教室
平	塚	直	秀	杉並区上高井戸4の852	旞	原	彰	夫	仙台市片平丁東北大学農学部
本	野	耕	平	新潟県中頸城郡来山村上輪	藤	原作	弦 紀	雄	神戶市御影局区內神戶大学文理学部生物学教室

藤 原 勳	佐賀県佐賀郡本庄村佐賀大学文	THE	田正	-1,	熊本県黑髪町熊本大学理学部生
EK DK 無力	理学部生物学教室	190	田正	之	熊本景黑爱问熊本人字理字部生物学教室
船橋說往	北海道大学理学部植物学教室	前	原勘:	欠郎	熊本県人吉市寺町19
古沢潔夫	東京大学理学部植物学教室	牧	川鷹	之 祐	福岡市六本松九州大学福岡第一
古 瀬 義	栃木県下都賀郡皆川村柏倉 15 山田勇太郎方	◎牧	富理	太 郎	分校生物学教室 練馬区東大泉町 557
古谷庫造	目黑区中目黑3の1008	孫		IE.	三重県字治山田市豊川町 53
古谷雅樹	東京大学理学部植物学教室	ΙĒ			金沢大学理学部植物学教室
へ き 日 置 正 臣	鹿児島県姶良郡加治木町高等学	增			京都市左京区吉田近衞町22
F1 [H, 11. ]F.	校	松			京都市左京区北白川追分町81
えんみ 逸見武雄	京都市上京区紫竹下梅の木町72	松			小田原市綠4丁目県立小田原高
宝月欣二	東京都立大学理学部生物学教室	124	1111 20	nd	等学校
/- //-		松	浦	-	北海道大学理学部植物学教室
北海道大学水產学部	函館市港町 253	松	浦正	볤	小田原市板橋 33
北海道学芸大学	北海道釧路市城山町139	松	尾大	. 邑	千葉県佐原市佐原第一高等学校
釧路分校		松	崎低	=	資源科学研究所
北海道学芸大学 函館分校図書館	北海道函館市八幡町153	松	田 -	- 郎	新潟市関屋県立新潟高等学校
北海道水産	II NEONA A SERVA	松	田〈	す	鳥取県東伯郡東郷松崎町 468
試験場增殖部	北海道余市町	松	野満	幕 己	大阪市生野区勝山通9丁目大阪
細 川 隆 英	九州大学理学部生物学教室				管区気象台
堀 七郎	釧路市城山町 169 北海道学芸大 学釧路分校	松	原盆	太	長野市西長野町信州大学教育学 部
堀 駿子	金沢市裏古町14	松	村清	=	靜岡県三島市谷田 1111 国立遺 伝学研究所(研究第一部)
堀 武義	岐阜市長良岐阜大学学芸学部	松	村思	:蔵	大阪市大淀区本庄川町田辺製薬
堀 民雄	福井県今立郡鯖江町五郎丸	/124	13 16	7154	株式会社
堀內和子	東京大学理学部植物学教室	松	村 義	改	新宿区四谷1の14新生教会内
堀 江 格 郎	兵庫県篠山局区內兵庫農科大学 生物学教室	松	本質	三	京都府乙訓郡向日町物集女木原生物学研究所
堀 川 芳 雄	広島大学理学部植物部教室	松林	山農科学教		松山市樟味町118
堀 田 禎 吉	京都市上京区等寺院南町 53	松	本よ	ね	京都市左京区北白川上終町98
堀 野 末 男	石川県江沼郡片山津局区內片山				鴨沂高等学校寄宿舍
	津町立作見中学校	眞	鍋追	層	北多摩郡保谷村桐明高等学校校宅
本鄉次雄	滋賀県栗太郡瀬田町南大菅1051	丸	H	嚴	松江市西川津町松江高等学校
本多啓七	富山県下新山郡櫻井町三日市 3361	眞	船和	夫	杉並区天沼2の364
* 田 正 次	東京大学理学部植物学教室	直	山三	置 雄	大阪府池田市建石町 1706 塩野
	大阪市天王寺区大阪学芸大学天				義皐月寮
本田義貞	王寺分校生物学教室	三図	重大学農	学部館	津市上浜町
本堂辰夫	富山県東砥波郡出町県立出町高等学校	三	木	茂	大阪市北区南扇町大阪市立大学 理工学部
本間健一郎	新潟県佐渡郡金沢村佐渡中央高 等学校	Ξ	木利	雄	大阪府豊中市櫻塚東通2の28
前川文夫	東京大学理学部植物学教室	右	田清	治	熊本県菊池郡合志村 1838
前田喜美子	北海道大学理学部植物学教室	三	木 藹	子	京都大学理学部植物学教室
前田禎三	埼玉県秩父町御花畠東大秩父浜				山口県徳山市大字下上 687
	演習林事務所	御	江久	. 大	村中光照111111111111111111111111111111111111

7.	K	島う	5	6	都內北多摩郡府中町東町 6430	森		千	春	広島市二葉中学校
1	K	島	E	美	東京大学理学部植物学教室	森		敏	之	山口市東山通古熊本町
7.	K	谷	善	鞩	名古屋市中村区大正町2の50	森		通	保	熊本県宇土郡不知火村高良
7	K	野	忠	款	澁谷区原宿3の271	森	島		昭	浦和市本太 2480
	11 4	田	畔直	吾	岩手県稗貫郡八重畑村字関口 京都大学理学部植物学教室	森	田	茂	広	埼玉県浦和市埼玉大学理学 <b>部</b> 生 物学教室
	当二	川井	員高	修	千代田区富士牟見町1の4	盛	永包	2 太	郎	都內北区滝野川西ヶ原町農 <b>林省</b> 農業技術研究所
	有を	島言	喬東	二	金沢市彦三1番町の13 構須賀市田浦町430大橋方	森	本	泰		広島県高郡田郷野村上入江 25 板岡立郎方
	=======================================	橋	r 2004	博	東京大学医学部薬学科生薬学教	守	屋	忠	之	埼玉県秩父市上町花ノ木
-		110		1.0-	至	門	司	E	Ξ	東京大学理学部植物学教室
à j	古	井蓊	-	郎	大阪市東住吉区山坂町4の7	八	木		男	新潟市上大川前通り7番丁1230
- 2	=	戶		昭	松山市末広町2の6	八	木	繁		松山市鉄砲町松山高等学校
F	有	村		清	奈良市法蓮北町 1341 の 1	保	井	7	,	お茶の水女子大学理学部
0	Ξ	宅	驥		新宿区下落合2の762	安	村		明	都內北区稻付西町3の29
	宝山区	奇大学		部館	宮崎市	谷		过 5	彦	滋賀県草津局区內滋賀農業短期大学
Fi.	宝	沢	文	吾	名古屋市瑞穗区高田町尾張学園	八	李	IE.	樹	九州大学農学部植物学教室
3	立	地	重	遠	東京大学理学部植物学教室	矢	頭	献		津市上浜町三重大学農学部
1	宝	地数	7	木	横須賀市稻岡町清泉女子大学	柳	島	直	彦	京都市左京区下鴨萩ヶ垣内町27
a;	玄	本	義	男	松山市持田町愛媛大学文理学部 生物学教室	柳	田	文	雄	高知市朝倉 1000 高知大学教育 学部生物学教室
1	当	脇		昭	鎌倉市雪の下 929 横浜国立大学 学芸学部生物学教室	柳	田	友	道	東京大学理学部植物学教室
~	-	ik 🖎	km	4:H:		矢	野	孝		高田局区內新潟大学高田分校
	三向	輪川	知信	雄一	東京教育大学植物学教室 北海道大学理学部植物学教室	矢	北	肯	夫	岡山県勝田郡大崎村福力199
		野野				Ш	井	秀	夫	宮城県栗原郡若柳町中町 36 佐
	句寸		道一	辛	名古屋市名古屋営林局計画課青森市沖館林業試験場青森支場	ITI	7	75	_	藤方
	计	井	三	郎進	浦和市埼玉大学文理学部生物学	Ш	內		文	資源科学研究所
- 4	")	Ŀ		進	教室	山	岡	正	尾	富山県中新川郡三鄉村中村
7	村	上		浩	北区東十条町5の10の2	山	岡	善	郎	京都大学農学部応用植物研究室
7	寸	田		源	京都大学理学部植物学教室	111	岸	光	尙	高田局区內新潟大学高田分校
才	寸	田	茂	=	金沢大学理学部生物学教室	八	卷	敏	雄	東京大学教養学部生物学教室
1	寸	田	新		豊橋市富本町豊橋時習館高等学 校	Ш	口		郎	資源科学研究所
E	明》	台大学	总農学	色部	神奈川県川崎市東生田 5158	ITI	口	彌	輔	水戶市外渡里村茨城大学文理学部生物学教室
7	望	月		明	京都大学農学部農林生物学教室		口大学			山口市糸米
*	汉	山	泰		資源科学研究所	文	理学	部分	介館	
7	百	瀬	靜	男	千代田区霞ヶ関文部省大学学術	Щ	口	好		大田区萩平町 418 梅津方
					局学術課	Ш	崎		格	富山県福野町県立福野高等学校
Ā	族		邦	彦	山形県鶴岡市山形大学農学部	Ш	崎	-	敬	東京大学理学部植物学教室
Ä	族		隆	也	岡崎市梅園町寺裏6	山	崎	真	隆	澁谷区代々木西原町871
7	华		健	志	名古屋大学理学部植物学教室	Ш	崎	典	子	世田ケ谷区世田ケ谷2の1169
						山	崎	義	人	都內北区西ケ原農業技術研究所
8	族		信		大牟田市上宮町2の31	川	崎	林	治	松本市鷹匠町 1552

Raabe Strasse, Teltow b. Berlin, Deutschland.

11		俊	彦	京都府中郡新山村学荒山	吉	村	\$	U	北海道大学理学部植物学教室
11	下	昌	德	香川県小豆郡內海町草壁本町県 立小豆島高等学校	米	田	勇	-	京都府舞鶴市長浜京都大学農学部水産学科
11	下	知	治	九州大学農学部植物学教室	米	Ш		穰	富山市蓮町富山大学文理学部
11	下	孝	介	京都大学吉田分校生物学教室	梁		定	国	京都大学農学部農林生物学教室
11	澄	玲	子	東京大学理学部植物学教室	林	業	試験	場	熊本市京町本町熊本営林局
Ц	田	謙	=	長野県下高井郡平岡村西笠原	熊	本		場	
11	田		保	千葉県印旛郡四街道町千葉大学 教育部	札	幌	試験支	場場	北海道石特国野幌局区內江別町字西野幌
11	田	幸	男	北海道大学理学部植物学教室	脇	田	晴	美	名古屋市瑞穂区船原町7の36
11	田	義	男	都内北区稻付西町3の54	和	久	田昌	則	金沢市穴水町2番丁 二水高等学校
11	田	悌	=	福井県坂井郡丸岡局区內本田	和	田	文	吾	東京大学理学部植物学教室
I	田	欣	<u>\$</u> [S	京都市上京区平野宮本町 31	和	田	^	水	資源科学研究所
11	中		男	高知市朝倉高知大学教育学部生物学教室	渡	辺		篇	世田ケ谷区世田ケ谷3の2092
Ц	村		享	京都大学農学部生物学教室	渡	辺	清	彦	千葉市小仲台町千葉大学文理学
Ш	根鱼	退 五	郎	鹿児島市山下町1鹿児島大学文 理学部	渡	辺	弘。	=	部生物学教室 滋賀県甲賀郡甲南町深川
Ш	本	重	信	岡山県邑久郡牛窓町 3845	渡	辺:	光太	郎	京都大学農学部農林生物学教室
Ш	本	四	郎	松山市未広町松山南高等学校	渡	辺	靜	馬	熊本県八代郡千丁村古閑出 634
Ш	本		進	滋賀県草津町大路井 420	渡	辺	成	美	千葉市市場町千葉大学教育学部
Ш	本	昌	木	盛岡市東安庭東北農業試験場盛	渡	辺		武	大阪府吹田市千里山桃園町73
				岡試験地病害研究室	渡	辺	宗	德	川崎市苅宿 市立玉川中学校
Ш	本	幸	男	名古屋大学理学部植物学教室	渡	部		郎	千葉県東葛飾郡我孫子町妻子原
Ш		哲	臣	高知市八軒町2	渡	会	100	380	1634
湯			明	東京大学教養学部生物学教室	设百	云理	彰俊	彦次	北海道大学理学部植物学教室東京大学理学部植物学教室
結	城	嘉	美	山形県北村山郡楯岡町県立楯岡 高等学校	-		x, F	-	R京八字壁字前植物字教室 c/o Barclays Bank, Salis-
由	良		隆	京都大学農学部農林生物学科遺伝学研究室	OI.	carre	л, т		bury, South Rhodesia, Africa.
横	尾	彌	平	山形県北村山郡東根町東根甲 250	Pe	i No	on N	ei	c/o Sin Min Chu Publishing Co., Queen's Road 1st. Fb., Central Hong Kong,
横	田	俊	-	東京大学農学部植物学教室					
	英国物与			鎌倉市雪の下 929		Ŧ	Ionoi	arv	Members (Foreign)
横	Щ	英	子	横浜市磯子区森町804					(1000)
吉	井		甫	九州大学農学部農学科植物病理 学教室	Ba	bcoc	k, E.	В.	Division of Genetics, College of Agriculture, University
吉	井	義	次	東北大学理学部生物学教室					of California, Berkeley 4, Calif., U.S.A.
吉	岡	邦	=	福島市浜田町福島大学学芸学部	Bo	wer,	F.O		2. the Crescent, Ripon, Yorkshire, England.
吉	岡	俊	=======================================	福岡市外香椎町福岡女子大学生物学教室	Gat	tes,	R.R.		Harvard University, Cambridge, Mass., U.S. A,
吉	田	佐	內	福井県足羽郡麻生津村今市 16 の 1	Gol	dsch	midt	, R.	Department of Zoology. University of California,
吉	田	型	治	和歌山県有田郡田殿村大字上中 島 513	Kol	Ikwii	z, R		Berkeley 4, Calif., U. S. A. Raabe Strasse, Teltow b.
-	7			and a factor of the second of the state of the second of t	TEO	TT AA T	20) 16		Dealin Doutschland

田 幸 弘 東京都立大学理学部生物学教室

Lundegårdh, H.	Växtfysiologiska Institution- en, Högskolan, Uppsala 7,	Corresponding	g Members (Foreign)
	Sweden.	Blaringhem, L.	77, Rue des Saint Pères,
Merrill, E. D.	Arnold Arboretum, Jamaica		Paris VIe, France.
	Plain, Mass., U.S.A.	Chaney, R. W.	Department of Paleontology, University of California,
Skottsberg, C.	Riksherbariet, Riksmuseet, Stockholm 50, Sweden.		Berkeley 4, California, U.S.A.
Tischler, G.	Botanisches Institut, Universität Kiel, Esmarch-	Motte, J.	Institut Botanique, Mont- pellier, Hérault, France.
	strasse 18, Kiel, Germany.	Walker, E. H.	Botanical Department, Smithsonian Institute, Washington, D. C., U. S. A.

## 正 誤表

## Errata

(Vol. 65, No. 771-772)

頁	行	誤	IE.
207	下カラ 1行	in sind	zwar sind die
212	下カラ 8行	londitudinally	longitudinally
213	図の説明	Selaginelas	Selaginela
214	上カラ 5行	withdrew	with-drew
.17	下カラ12行	existance	existence
215	上カラ14行	longitudinary	longitudinally
	// 19 行	under-suaface	under-surface
216	上カラ13行	chondriosomeh	chondriosomen
	17	Antnoceros	Anthoceros
222	上カラ 2行	colorophylls	chloropyhlls
223	上カラ12行	クロマトグラフー	クロマトグラフィー
225	上カラ 4行	thc	the

本会特別会員中井猛之進氏は12月6日逝去されました。 茲に会員諸氏に報じ謹んで哀悼の意を表します。

昭和27年12月

日本植物学会